

地球の王チュクウ

英雄の種族

科学の種族

巨石の種族

# ダヴィデの一族

## 良い顔

彼らは古来からオリジナル人類の子孫を正しく統治してきた

邪教を取り仕切る大谷家の向こうを張る一族だ

タトスを皆殺しにしてきた タトスの天敵である

ネットで拾った画像を集めた写真集

大本正

# 目次

---

## 目次

### ●まえがき

●地球の王チュクウ～神統記の巨人ギガース、巨人アグリオス、巨人クリュテイオス、巨人グラティオン、巨人エウリュトス、巨人ブリアレオース、半人半獣の怪物テュポン、鍛冶の祖トバルカイン

●全能神ゼウスの一族～英雄ペルセウス、素戔鳴尊、全能神ゼウス、周、サイス朝、孫子、ソクラテス、臨済宗、リトアニア大公国、明、李氏朝鮮、マイソール王国、ロスチャイルド家、太平天国、サムスン・グループ

●宇宙人トバルカイン（チュクウ）の一族①～出羽、十和田、イスラエル王国、ダヴィデ朝、テベ神官都市、太陽神ラー、太陽神アメン、ユダ王国、晋、趙、朴氏、ペグー王朝、能、伊賀忍者、ソ連国家保安委員会

●宇宙人トバルカイン（チュクウ）の一族②～拓跋部、北魏、吐蕃、回鶻汗国、ヴァイキング、ノルマンディー公、キエフ公国、甲賀忍者、ヴィジャヤナガル王国、スフォルツァ家ミラノ公、ソビエト社会主義共和国連邦

●宇宙人トバルカイン（ルハンガ）の一族③～サハラ砂漠、ソドムとゴモラ、プント王国、インダス文明、パーンダヴァ族、英雄アルジュナ、燕、ローマ帝国、諸葛孔明、サファヴィー朝、シク教国、バアス党

●宇宙人トバルカイン（オロクン）の一族④～桃源郷、仙人、ラテン王国、ヒッタイト帝国、シュメール都市国家ウルク、アーリア人、魯、孔子、東胡、天狗、匈奴、アラン人、西ゴート王国、ブルガリア帝国、大元帝国

●宇宙人トバルカイン（クウォス）の一族⑤～海の民、エジプト第25王朝、プトレマイオス朝、ハザール帝国、イエス・キリスト、グルジア王国、ジャン＝ジャック・ルソー、フランス革命、ノルディック、ケムトレイル

●宇宙人エラドの一族～女神エリウ、ラテン王国、シュメール都市国家ウル、アーリア人、衛、老子、道教、セレウコス朝、カッパドキア王国、橘諸兄、小野妹子、ブルガリア帝国、ブニョロ帝国、ウィルタ族

●宇宙人マハラエルの一族～戦闘の女神マッハ、フルリ人、ウラルトゥ王国、イリュリア王国、楼蘭、モラヴィア王国、平将門、平清盛、ムラービト朝、ムワッハド朝、フス派、雑賀衆、ヘーチマン国家、スタジオ・ジブリ

●宇宙人スバルの一族～天孫氏、ゼブルン族、シュメール都市国家シッパール、プール族、シバ王国、破壊神シヴァ、楚、鮮卑、ヴァンダル王国、シュリーヴィジャヤ王国、シビル汗国、円谷プロダクション

●デウカリオンの一族（マウンド派）～ニューグレンジ、モホス文明、フェニキア人、カルタゴ、天孫族、多氏、秦、呉、前漢、新羅、日本武尊、インカ帝国、ジョージ・モンク、フリーメイソン、オナシス財閥

●デウカリオンの一族（ピラミッド派）～ギザのピラミッド、ラムセス3世、曹、テオティワカン宗教都市、越、熊襲武尊、後漢皇帝、魔法使いの神殿、クメール王朝、ムハンマド・アリー朝、チャーリー・チャップリン

●ブルガリア皇帝イヴァン・アセン3世の一族～ソロモン1世、エチオピア帝国、クリミア・ハン国、ハルハ部、ケニア共和国、チャック・ベリー、アース・ウィンド&ファイア、ボブ・マーリー、エディ・マーフィー

●ブルガリア皇帝イヴァイロの一族～ヴィスコンティ家、メディチ家、クリストファー・コロンブス、ヴァスコ・ダ・ガマ、イエズス会、フランシスコ・ザビエル、トスカーナ大侯国、ローマ教皇フランシスコ

●ブルガリア皇帝ゲオルギ2世の一族～オスマントルコ帝国、北元、スペイン無敵艦隊、ロシア帝国、サルディーニャ王国、リンカーン大統領、宰相ビスマルク、怪僧ラスプーチン、エルドアン大統領

●オスマントルコ皇帝ムラト2世の一族～イヴァン大帝、チューダー朝イングランド王国、宗教革命、エリザベス女王、清教徒革命、第一次サウード王国、第二次サウード王国、サウジアラビア王国

●オスマントルコ皇帝メフメト2世の一族～マクシミリアン1世、バイエルン王国、交響曲の父ハイドン、サド侯爵、文豪ゲーテ、楽聖モーツァルト、ヘミングウェイ、三島由紀夫、シド・バレット、トランプ大統領

●オスマントルコ皇帝スレイマン1世の一族①～宇佐美定満、蘆名盛氏、柴田勝家、上杉謙信、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、徳川家光、伊達政宗、水戸光圀、乾隆帝

●オスマントルコ皇帝スレイマン1世の一族②～蘆名盛氏、高山右近、千利休、黒田官兵衛、有馬晴信、宮本武蔵、天草四郎、鄭成功、ヌルハチ、愛新覚羅家

●オスマントルコ皇帝オスマン2世の一族～オリバー・クロムウェル、大英帝国、アメリカ合衆国、エドガー・アラン・ポー、オーソン・ウェルズ、ザ・ビートルズ、モンティ・パイソン、レッド・ツェッペリン

●オスマントルコ皇帝アフメト3世の一族～ピョートル大帝、ナポレオン皇帝、モルモン教、ルーズベルト大統領、ケネディ大統領、ザ・ドアーズ、プーチン大統領、ウィキリークス、Qアノン

●オスマントルコ皇帝ムスタファ3世の一族～乾隆帝、マイソール王国、宝暦事件、トンブリー朝タイ王国、詩聖タゴール、マハトマ・ガンディー、ジャワハルラール・ネルー

●オスマントルコ皇帝セリム3世の一族～道光帝、曾国藩、胡林翼、李鴻章、西郷隆盛、吉田

松陰、西太后、大本教、中江兆民、ジャン・コクトー、ミケランジェロ・アントニオーニ、ジェームズ・ディーン、つげ義春

●オスマントルコ皇帝マフムト2世の一族①～曾国藩、東郷平八郎、乃木希典、児玉源太郎、袁世凱、黄金栄、蒋介石、小津安二郎、手塚治虫、ジャン・クロード＝カリエル、ヴェルナー・ヘルツォーク

●オスマントルコ皇帝マフムト2世の一族②～胡林翼、山口春吉、北一輝、大杉栄、鄧小平、ルイス・ブニエール、サルトル、池田大作、キューブリック、宮崎駿、セックス・ピストルズ、マイケル・ジャクソン

●オスマントルコ皇帝マフムト2世の一族③～李鴻章、勝海舟、福沢諭吉、坂本龍馬、張嘯林、杜月笙、黒澤明、田中角栄、習近平国家主席、マーティン・ルーサー・キングJr、ドゥテルテ大統領、橋本龍太郎

●オスマントルコ皇帝アブデュルメジト1世の一族～犬養毅、頭山満、義和団の乱、幸徳秋水、文鮮明、大山倍達、田岡一雄、高畑勲、安孫子素雄、梶原一騎、アントニオ猪木、鳥山明、高田延彦、秋元康

●オスマントルコ皇帝メフメト5世の一族～孫文、夏目漱石、張作霖、橋本忍、毛沢東、徳田球一、金日成、小沢一郎、金丸信、藤本弘、赤塚不二夫、ジャッキー・チェン、金正恩委員長

●奥付

### ダヴィデの一族とは？

表と裏、陰と陽、光と影、善と悪、生と死、サンダとガイラ（？）。ダヴィデの一族とタナトスの一族はかように表裏一体の存在である。チュクウはルハンガと共にクリュテイオスを生んだが、両者とも、クリュテイオスと関係がある。チュクウから生まれたクリュテイオスから、更にタナトスが生まれているのだ。つまり、タナトスにもチュクウの血が流れている。ただ、両者の間には超えることができない巨大な隔たりが横たわっている。王者とできそこないという否定し難い事実である。

ダヴィデの一族は地球の王チュクウの子孫であり、帝王として民を正しく導く使命を帯びて生まれてくる。一方、できそこないであり、誰にも好かれないタナトスは、高い知能を悪に用いて強い者を数で圧倒し、ウソをついて真実を覆すことを本能としている死の種族だ。しかし、両者も元を辿れば同じ先祖に行き着くということで、ダヴィデの一族もタナトスの一族も同じような習性を持っている。

彼らは敵の目をごまかすために影武者を用いる。庶子の異母兄弟を投入し、影武者部隊を編み、影武者を駒のように徴用し、いくつもの顔を持ち、いくつもの名前を変えて生きていく。また、敵が多い場合には死んだことにして潜伏するということもする。更に、彼らは、筆者が優性遺伝子ブリーダーと呼ぶ、帝王の一族と死の種族で構成された中立を旨とする秘密結社を使い、多くの庶子を作る。このとき、帝王が女を選ぶのではなく、女が帝王を選んでいる。これにより、帝王は統治という使命に専念することができる。優性遺伝子ブリーダーは、帝王が寝ている間に女を連れ込み、帝王に催眠術をかけて子供を作る。この方法により、帝王ひとりにつき、庶子は数百人は存在することになる。

偉大な帝王は、誰でも自分の知らない間にたくさんの子供を儲けているのだが、こうして多くの庶子を作ることが、大規模な影武者部隊を編むことを可能にしている。同時に、このような状況は多くの語られない重要なドラマを生んでいる。この3つのポイントは、ダヴィデの一族とタナトスの一族の共通のポイントである。

真の帝王ともいべき人々は、ひとつの帝王ではなく、同時に複数の帝王を演じ、帝国を統治する。例として、アヤチ。このアヤチはクビライの子と言われているが、筆者の私見では彼は実際にはチンギスの孫であり、モンケの子である。クビライは、モンケが優性遺伝子ブリーダーによってアヤチを儲けたことを知っていた。そのため、アヤチを邪険に扱った。モンゴル帝国を離れたアヤチは、その後、稀代の帝王の片鱗を見せることになる。アヤチはエチオピア帝国、オスマントルコ帝国、モスクワ公国を築き、同時に統治している。

チングスの孫アヤチは、イムラクであり、オスマン1世であり、イヴァン1世であった。4人でひとりであり、ひとりで4人である。アヤチも上記のように庶子の異母兄弟を投入し、大規模な影武者部隊を作っていた。これにより、離れた帝国を同時に統治することが可能であった。これが真の帝王の姿である。ダヴィデの一族、及び、タナトスの一族の場合、このような例は枚挙に暇がない。読者の方にはこの点を良く頭に入れて置いていただきたい。

帝王は、自分の遺伝子を残すことではなく、自分が築いた家、帝国が繁栄することを願う。いい女が選んだ男の子供なら間違いない。優れているのであれば血筋は関係ない。後継者は誰でもよいと考えている。ただ、そのために弊害が起きることも少なくない。例として、クビライが子のアヤチと対立したり、武田信玄が父を追放するというようなことが起きる。もちろん例外もあるが、多くの場合、帝王の親子は実の親子ではないのだ。また、母が異なるということで異母兄弟同士が争うということもままある。

筆者はどうして同一人物の帝王を洗い出すことが出来たか？多くの帝王の場合、生年、生没年が合致、或いは近い場合があるのだが、同一人物と考えて良い。筆者はそのようにして多くの帝王の正体を見破ってきた。帝王の正体を見破った瞬間、多くのドラマが頭を駆け巡ることになる。だが、筆者はそれらのドラマをここで描くことはしない。それらのドラマは各自が思い描くことで、古代に想いを馳せる悦びを楽しんでいただきたい。

## 新まえがき

「悪い顔」でタナトスの一族の歴史を精査することで、ダヴィデの一族の歴史も鮮明になった。自分で書いていながら新鮮な驚きの連続であった。

筆者を助けてくれている宇宙人の正体がじつはアフガニスタンの奥地に住む謎の多い少数民族カラシュ人だということ（推測だがあながち外れていないと思う）。そして宇宙人は思っていた以上に我々と同じ人間であり、我々と同じような生活をしているということ（経済システムは採用していない）。

つまり、遠い銀河系の彼方から来ていると考えられていた人々は、じつはものすごく身近で、昔から誰でも知っている人々だった。筆者が考えた格言「未知は宇宙の果てに行かなくても案外身近にある」という言葉を地で行くものだ。ただ、彼らは実際に宇宙と地球を自由自在に往来することが出来るし、簡単だから宇宙人と呼んでいるものの、彼ら自身は地球人として地上で暮らしている。

宇宙人たちは人類の王としてさまざまな帝国、文明を築いてきた。タナトスの一族は彼らのマネをしているようだ。だが、タナトスの王が常に犯罪者（猟奇殺人鬼、大量殺人機、人喰い、子供殺し、レイピスト、変態同性愛者）でしかないのに対し、宇宙人の王は常に真の英雄であり、詩人であり、芸術家として絵画、文学、音楽を嗜み、ミュージシャンとして俳優としてコメディアンとして人々を喜ばせてきた。

「悪い顔」に携わっている間は筆者の心も暗く荒むのだが、ダヴィデの一族に携わっている間は新鮮な驚きと感動の連続であった。陳腐な感動などではなく、間違いなく崇高な響き、神々しさを含んだ種類の感動である。この感動は決してタナトスには作れないものだ。

タナトスにはにべもなく封建主義を嫌う。しかし、封建主義が危険なのはタナトスのような犯罪者が王になった時に限定される。それ以上に民衆は優れた人物に支配されたいという本能を持つ。優れた人物の支配は民衆にとって快樂だ。誰でも好きな人間のために働きたいと思うものだ。現在、人々が苦しんでいるのはバカのために働いているからである。封建主義の否定は真の王の殺害であり、民主主義は犯罪者の悪意の隠蔽でしかない。

すべては生没年の符号である（近代では顔が似ているか似ていないかで判断することもあるが）。生没年の符号で全ての謎が解けたといっても過言ではない。以前は恥ずかしくも、名前を知れば歴史の全てが分かると堅く信じていた。が、もちろん、100%の不正解ではない。50%は正解だが、それがすべてではなかったことを知ることが出来た（ただ、名前を知れば歴史の全てが分かると信じていた頃の仕事も役に立ってはいる）。

また、以前からオスマントルコ帝国がキングメーカーとしてタナトスの圧制に苦しむ人々を救うべく稀代の英雄を世界中に送り出していたことを知っていたが、オスマントルコ帝国以前にはブルガリア帝国がキングメーカーの役割を果たしていたことを知った。ローマ帝国のように、あまり歴史の表舞台には登場しない地味な印象の国だが、非常に多くの偉大な王を生んでいる。

更に、タナトスの一族はカラシュ人が超科学を操る宇宙人の正体だということを知っていたようだ。カラシュ人の村の近辺にはユダヤ人1908の一族が築いたヒヴァ・ハン国やガジャー朝、ユダヤ人1731の一族が篡奪したハザール帝国があったのだ。

タナトスは、我々に「宇宙人はあくまでも遠い宇宙から来ている」と信じて欲しかったのだ。もしも、宇宙人がじつは我々と同じ人間で、同じ地球上に暮らしているということが知れたら・・・？これがタナトスの懸念である。今までのように神頼みするように宇宙人に「助けてください」と祈るのではなく、同じ人類として理解しあい、連合する可能性がある。それを恐れているのだ。

そのことを知った数日後、筆者は自宅から市街地に向かっていたのだが、橋を通りかかった瞬間、大量の鶉が川下から飛んできて頭上を通過していった。100羽はいただろうか。鶉につられたようでシラサギやゴイサギが何羽か混じっていたが、この鶉の大群は宇宙人に操られていたようだ。

最初は「大地震の予兆か？」などと思い、「まあいいや」と先に進み、土手の上を自転車で走っていたところ、先ほどの鶉の大群が筆者の後を追い、筆者を追い抜いた後に、土手の上のサイクリングコースの前方を横切った。大群で横切った。この時に「先へ行くなという宇宙人のメッセージだ」と直感し、先へ進むのを断念した。ということがあったのだ。

宇宙人があれほどの大群を操るのは始めてみたがよほどのことが待ち受けていたのかもしれない。つまり、筆者が宇宙人の正体がカラシュ人だということを知ったことで、本願寺は筆者の殺害を邪教信者に指令していたのかもしれないのだ！

宇宙人は生物、無生物、水、火、大気、全ての物質を分子の次元で操ることが出来る。彼らは、よく昆虫、鳥類などの飛ぶことができる生物を操って筆者の前方を横切らせることがある。この場合は「前に進むな。危険だ」という宇宙人の暗号である。夏にはオオスズメバチなどのハチ類、蝶、トンボ、セミ、カナブンなどを。一年を通してすずめ、シラサギ、カラスなどを飛ばし、農薬で汚染された危険な場所や仏教の悪意（集団ストーカーの待ち伏せ）などを警告してくれる。

一度などは、河原を散策していると数千匹の羽虫が前方に立ち塞がったことがある。丸でマイクロイドSの虫柱のようだった。これは2014年春頃のできごとで、宇宙人のフェイクプレーンを発見するのは2015年暮れのことだから、宇宙人のメッセージなどとはつゆほども考えなかった頃のことである。

だが、今思えば宇宙人は「前に進むな」というメッセージを虫に託していたのだ。どうしても先



へ行かせたくなかった。だからあのような大量の羽虫を発生させたのだ。つまり、河原という場所柄、筆者を農薬で被爆させるべく、筆者が通過すると見込んだ場所に、浄土真宗信者の農民（地元は曹洞宗が多いが）が予め大量の農薬を重点的に撒いていたのだと推測される。

だが、この当時の筆者は本願寺がH A A R Pを使って生物を操っていたと考えていたので「くそお本願寺め、オレの散歩を邪魔する気か」と憤りを感じ「意地でも突破してやる」と突っ込んだところ、鼻や耳に大量の羽虫が入り往生したため、断念したことがある。

今回の鵜の大群を使ったメッセージもそれと同じである。烏合の衆と良く言われるが、まさに、大量の邪教信者が先で待ち伏せしていたのではないかと推測される。

地球の王チュクウ～神統記の巨人ギガース、巨人アグリオス、巨人クリュテイオス、巨人グラティオン、巨人エウリュトス、巨人ブリアレオース、半人半獣の怪物テュポン、鍛冶の祖トバルカイン

---



- ・ルハンガ（200万年前）
- ・チュクウ（200万年前）

※画像はイエティの足跡。幅38センチ、長さ81センチ。オリジナル人類ルハンガは200万年前にビクトリア湖で生まれた。当時のビクトリア湖には、身長50センチのキブウカ、身長100センチのカゾオバ、身長140センチのアブク、身長170センチのクウォス、ムシシ、イマナ、ワルムベ、身長4メートルのルハンガがいた。人類という種の存続をかけて各々が各々の獲物に特化したことが要因となり、50センチから4メートルまで身長差が出た。

ルハンガは体長が6メートルある巨大クロコダイルを素手で狩り、食べていた。彼らの身体は豊かな体毛に覆われていたが、それは猫型の猛獣の牙や爪を無力化するためである。

200万年前「ビクトリア湖の大移動時代」に参加した地球の王ルハンガは、ナイジェリアに入植して「チュクウ」を生んだ。オリジナル人類ルハンガは、インドシナ半島に棲むといわれている獣人オラン・ダラムの姿をしていた。一方、ナイジェリアに住んだチュクウは、身長が4.5mにまで巨大化し、身長が4mを誇るルハンガの巨躯を凌駕した。その姿はヒマラヤに目撃されるイエティと同じだと考えられる。

その巨体と怪力により、チュクウは地球の王としてニジェール流域に君臨した。彼らは主にクロコダイルを素手で狩って食べていたが、時にライオンやゾウ、カバの天敵となった。

彼らの身体能力は凄まじく、跳躍は高さ3mを超え、時速60kmで走り、岩を投げた。何よりも、彼らは素手で猛獣を殴り殺した。地球の王たる所以である。古代アメリカ大陸でサーベル

タイガーと素手で戦った彼らは、サーベルタイガーを滅ぼしてしまったほどだ。

その後、ルハンガ、チュクウなどの所謂獣人は他のオリジナル人類と混合することで、稀代の英雄をたくさん生んだ。そして、英雄たちは代々、タナトスを天敵として狩ってきた。

根深誠著「イエティ（山と溪谷社刊）」には、イエティ（チュクウ）に遭遇した目撃者の報告が紹介されている。「イエティはヤクの二本の角を掴んで引き裂くようにしてへし折り、それから腹部をえぐって殺した。イエティは仔ヤクを岩に叩きつけてから、ヤクの腹部に顔を埋めて生き血を飲み始めた」。丸で漫画のようだが、イエティはヤクのような大きな哺乳類を、ハエでも殺すように容易に殺している。彼ら、地球の王である獣人が、通常の人類の想像を超えた身体能力を誇っていることがわかる。尚、ルハンガとチュクウの名は、他のオリジナル人類同様にアフリカに古くから伝わる神々の名である。

- ・パンコー族（100万年前）
- ・チャク族（100万年前）



※画像はチッタゴンの森林地帯。獣人がいてもおかしくないロケーションである。200万年前、「チュクウの大移動時代」を実施したルハンガとチュクウは、アフリカを離れて小型のオリジナル人類モリモなどと同様にチッタゴンに入植し、「パンコー族」「チャク族」を生んだ。パンコーの名の由来はルハンガであり、チャクの名の由来はチュクウである。ルハンガ＝ルハンガー＝パンコーとなり、チュクウ＝チャクウ＝チャクとなる。当初、彼らは毛深く、3m～4mの巨体を誇っていた。だが、100万年の間にミャンマー人に吸収され、名前だけがルハンガとチュクウの名残りとなった。オリジナルのパンコー族とチャク族は、身長が最大で4m～4.5mあったはずだ。



※画像はタイに住む多毛症の少女である。タイに住んでいるということで、マレーシアの獣人型UMAオラン・ダラムの血が流れている可能性がある。古（いにしえ）のパンコー族の生き残りとも考えることも出来る。これは病気ではない。



※画像はインドに住む多毛症の姉妹である。インドに住んでいるということで獣人型UMAイエティの血が流れている可能性がある。古（いにしえ）のチャク族の生き残りとも考えることも出来る。これは病気ではない。



※画像は多毛症の青年。国籍不明。多毛症の専門サイトに掲載されていたのを拝借した。これは永らく謎とされているビッグフットの姿そのものと考えてよいのではないかと（身長は普通だが）。多毛症は病気ではなく、身長が4.5 m～3 mを誇るイエティ、或いはビッグフットの隔世遺伝である。獣人の体毛が濃く、尚且つ長いのは、猫類猛獣の牙や爪を無力化するためである（画像の彼の場合、体毛は薄い、伸ばせば顔のように濃くなるのではないかと。或いは現代人の血が濃

いために薄いのかもしれない)。



※画像はメキシコに住むヘスス・アセベス氏。顔に毛が生える病気「多毛症」の患者とされている。だが、実際には病気ではなく、オリジナル人類ルハンガやチュクウの隔世遺伝だと考えられる。彼らは、古(いししえ)のチュクウの顔や多毛という特徴を備えた稀有な人々である(体自体は現代人と同じで、身体能力も普通だが)。謎の多いイエティ、ビッグフットもこんな感じの顔をしているものと考えられる。そういう目で見ると興味深い。

-----

・ ギューゲース (50万年前)



※画像は中国の獣人イエレンの手のミイラである。よく見ていただきたい。イエレンの手には織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と同じますかけ線が深く刻まれている(フェイクではありえない)。因みに手相の本を見ると、両手共にますかけ線がある人はめったにいないと書かれている。さすが地球の王だ。

オリジナル人類クウォスがインドを通過した際、獣人ルハンガとチュクウは、アボリジニの顔をしたクウォスと接触、親交を暖めた。お互い、姿かたちが異っていたにも拘らず、クウォスは獣

人を同じヒトとして認識し、獣人もクウォスを同じ仲間として認めた。彼らは、お互いを嫌悪し、攻撃することはなかった。彼らは、見かけで判断するのではなく、内面を見抜く鋭い洞察力を備えていた。つまり、非常に知性に溢れていたのだ。

交配も可能であったため、ルハンガとチュクウはクウォスと混合した。この時に「神統記」に記されている巨人「グューエース（グューゲース）」が生まれた。グューエースの名の由来はクウォスであり、別名グューゲースの名の由来はチュクウとクウォスの組み合わせである。クウォス＝ギャオース＝グューエースとなり、チュクウ＋クウォス＝チュクウォス＝グューゲースとなる。彼らが親交を持った証拠は、彼らが残した名前にある。

### ●中国の獣人イエレンの遭遇＋目撃例

- ・ 1974年 第一生産大隊の朱国強は赤毛の大男と接触。発砲するとイエレンは音に驚いて林の中へ逃げた。
- ・ 1975年 龍口生産大隊は農民の甘明を保護。甘明はイエレンに捕まったが、必死の思いで逃げてきたと証言。
- ・ 1977年 森林保護員の楊万春は幅約2メートルの川を隔ててイエレンと向き合った。イエレンは犬、ロバなどをまねた何種類かの声を発したという。

-----

### ●異なる人類の大混血時代＋「神統記」の巨人たちの正体（盤古の時代）

- ・ アグリオス（45万年前） チュクウ＋ルハンガ＋クウォス
- ・ アルキュオネウス（45万年前） オロクン＋クウォス
- ・ エウリュトス（45万年前） ウェネ＋ヒッポリュトス
- ・ エピアルテース（45万年前） ヒッポリュトス
- ・ エンケラドス（45万年前） カアング＋ヒッポリュトス
- ・ グラティオーン（45万年前） アグリオス＋ヴィディエ＋ウェネ
- ・ クリュティオス（45万年前） アグリオス＋ヴィディエ＋クウォス
- ・ パッラーズ（45万年前） ワルムベ＋レザ
- ・ ヒッポリュトス（45万年前） ヴィディエ＋パッラーズ＋ヴィディエ＋クウォス
- ・ ポリュポーターズ（45万年前） パッラーズ＋ヴィディエ＋クウォス
- ・ ポルピュリオーン（45万年前） パッラーズ＋ヒッポリュトス＋ウェネ
- ・ ミマース（45万年前） ムワリ＋ムシシ



※画像は身長218cmのチェ・ホンマン。「神統記」に登場する上記の巨人たちは、現在では獣人型UMAと呼ばれている。オリジナル人類ルハンガは身長4m、オリジナル人類チュクウは身長4.5mという巨躯を誇るが、現在、ルハンガはマレーシア人にオラン・ダラムと呼ばれ、チュクウはネパール人にイエティと呼ばれている。

45万年前、その巨躯の持ち主と、現代人と変わらない身長の人類が交配し、古代中国に生まれたのがアグリオスからミマースに至る「神統記」の巨人たちである。現在、彼らは中国人にイエレンと呼ばれている。生まれた当時、彼らは盤古（パングア）を称した。パングアの由来はルハンガである。

最大4.5mの巨躯を誇るルハンガとチュクウは、現代人と変わらない身長の人類と交配することで身長が2m～3mにまで縮んだ。その混血とは、ビッグフット（アメリカ）、イエレン（中国）、アルマス（シベリア）、ロシアン・イエティ（ロシア）、ヨーウィ（オーストラリア）のことである。

タイムラインにすれば、イエレン（ギューゲース）は50万年前に生まれ、巨人たちがシベリアにまで生活圏を拡大したことでアルマス、ロシアン・イエティが生まれた。そして、ビッグフットは巨人たちが45万年前にアメリカに渡った時の産物であり、ヨーウィは巨人たちが30万年前にオーストラリアに上陸した時の産物だといえる。



シベリアでマンモス狩りを行う（45万年前）※画像は身長230cmのアンドレ・ザ・ジャイアント

※「盤古の大移動時代」に参加して中国に移り、更に「獣人の大狩猟時代」に参加してシベリアに移住したチュクウは、シベリアでマンモスなどの巨大哺乳類を狩っていたと考えられる。この時にアルマス、ロシアン・イエティが生まれた。

19世紀中ごろ、ザーナという雌のロシアン・イエティが地元男性数人と交配し、子供も儲けたという。その子どもはちょうど、アンドレ・ザ・ジャイアントのような姿だったかもしれない。ただ、ロシアン・イエティは平均身長が2 mほどだということからアンドレ・ザ・ジャイアントの方が勝っている。



ソーク族（40万年前）※画像はソーク族（sauk）

※「獣人の大狩猟時代」に参加したチュクウは、人類初のアメリカ大陸上陸を果たし、北東部森林地帯（現イリノイ～ニューヨーク近辺）に居を構え、「ソーク族」を称した。ソークの名の由来はチュクウである。チュクウ＝シュクウ＝ソークとなる。ソーク族の名は、もともとビッグフットの名だったと考えられる。しかし、3 mの身長を誇ったソーク族は、現代人と変わらない身長のインディアンと混血していくうちにインディアンに吸収されてしまったと考えられる。

-----

#### ●異なる人類の大混血時代（汎人類の一大ムーヴメント）

- ・ キュクロプス（30万年前） チュクウ＋カリユプソー
- ・ ステロペース（30万年前） イストロス＋アルペイオス
- ・ ブロンテース（30万年前） ウラニアー＋クリュテイオス
- ・ アルゲース（30万年前） アルキュオネウス
  
- ・ ヘカトンケイル（30万年前） ベカタン＋キャラ＋エウリュトス
- ・ コットス（30万年前） ブカット＋エウリュトス
- ・ ブリアレオース（30万年前） ポルピュリオーン＋アグリオス
- ・ ギューゲース/ギューエース（30万年前） チュクウ＋クウォス





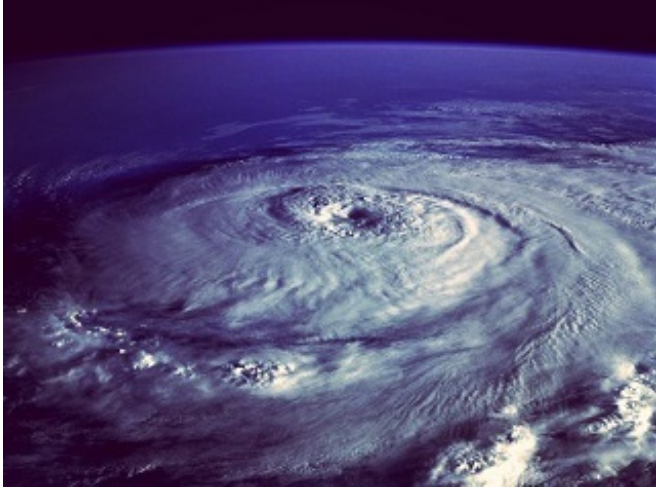
※画像はヨーウィと似ているとされているビッグフットである。30万年前、アメリカ大陸を離れて古代オーストラリア大陸に上陸した巨人たちは、現在、獣人型UMAとして知られているヨーウィの姿をしていた。ヨーウィの姿をした巨人たちはアボリジニ（オリジナル人類クウォス）と交配することで「神統記」に記されているキュクロプスの部族とヘカトンケイルの部族を生んだ。



※画像はタイソンのアップである。デビュー後、連戦連勝だったが、対戦相手はみな、タイソンの顔を怖がっていた節がある。彼の顔は獣人エウリュトスの名残りを残しているのかもしれない。

超古代の日本で、コトスはウラヌスと合体することで事代主神（ことしろぬし）と呼ばれた。コトス+ウラヌス=コトスラヌス=ことしろぬし（事代主）となる。コトスはピグミー族の姿をしたブカット族と巨人エウリュトスの合体部族であるが、彼らは2つの姿を持っていたと考えられる。

1つは平均身長140cmのピグミー族に片寄った170cm~180cmの種族と、身長3mを誇る巨人エウリュトスに片寄った身長180cm~200cmの筋骨隆々の部族である。古代にアフリカに移り住んだ彼らは現在では人類学者からバントウ族（他称）と呼ばれている。いわゆる黒人のことである。マイク・タイソン、ボブ・サップなどは巨人エウリュトスの面影を残しているのかもしれない。



テュポン（4万年前）※画像は台風だが、台風の由来はテュポンである

※「神統記」で半人半獣の巨大怪物と呼ばれたテュポンは、じつは地球の王であるルハンガとチュクウの合体部族である。チュクウ+ルハンガ=チュハン=テュポンとなる。「神統記」に於いては史上最強の怪物と呼ばれた。このテュポンからは宇宙人（科学の種族トバルカイン）が生まれた。



トバルカイン（4万年前）※画像は鍛冶の始祖トバルカイン

※トバルカインは鍛冶の始祖とされている。じつにUFOの発明者らしい。トバルカインは、半人半獣の巨大怪物テュポンが巨人アルキュオネウスと連合することで生まれた。テュポン+アルキュオネウス=テュポルキュオネ=トバルカインとなる。

トバルカインは4つの種族の合体部族であるため、後に4つの派閥にトバルカインは分離した。チュクウのトバルカイン、ルハンガのトバルカイン、オロクンのトバルカイン、クウォスのトバ

ルカインである。ここに、気仙沼に住んでいたケシャンボ（河童）がルハンガのトバルカインと合体し、トバルカインに仲間入りした。彼らは自身をスバル人と呼んだ。ということで、トバルカインの種族は5つであるが、卓越した科学の力を継承しているのは、チュクウのトバルカインと一部スバル人のみである。

宇宙人の仲間にはトバルカインだけでなく、エラドとマハラエルがいる。トバルカインと同じでエラド、マハラエルも巨人の子孫である。エラドの祖は巨人エウリュトスであり、マハラエルの祖は巨人ブリアレオース（+オリジナル人類マベエ）である。

つまり、宇宙人の種族は、最初は3メートル以上の巨躯を誇った巨人だった可能性がある。しかし、現代人の種族と交配する内、永い年月をかけて現代人と同じ身長になったのだ。ただ、この時の巨人の特徴を持った大きな人間がごくたまに、極地的に生まれることがあるようだ。

「神統記」の巨人（獣人）の子孫である超科学の種族・宇宙人たちは2万年前に既にUFOを発明し、火星にまで行っていた種族である。また、すべての物質を分子の次元で操作し、直接、核分裂も行うことができた。地球の番人であるトバルカインは、タナトスとタナトスの邪教信者を、古代都市ごと核分裂で焼き払ってきた。その名残りが荒涼たるサハラ、カラコルム、ゴビなどの砂漠である。

- ・雷雨の神チャク（4万年前）
- ・創造主クグマツツ（4万年前）



※画像は南米に住んでいたとされているパタゴン人。彼らは、宇宙人チュクウのトバルカインが古代マヤに住んでいた時の子孫と考えられる。近代に入り、パタゴン人が南米にやってきた白人を見ると驚き、「空から来たのか？」と問いかけてきたという。

超科学の種族トバルカインは古代マヤに入植し、「雷雨の神チャク」を称した。更に、巨人ミマスと組んで「創造主クグマツツ」を生んだ。チャクの名の由来はチュクウであり、クグマツツの名の由来は、ギガスとミマスの組み合わせである。チュクウ=チャクウ=チャクとなり、ギガス+ミマス=ギガマス=クグマツツとなる。



※画像は背の高いロシア人（？）女性。隣に立つ空色の服を着た女性でさえ180cmほどはありそうだが、そうなるとこの女性は3mくらいの上背がある可能性がある。だが、もしそれが本当なら大ニュースになるはずなので勘違いかもしれない（或いはフェイク画像にひっかかった。或いはニュースなど関係なく存在している）。

ただ、ロシア人は基本的に宇宙人の子孫なので隔世遺伝で先祖である巨人の特徴を持ち、巨大化する可能性もゼロではないと考えられる。また、なぜか不明だがネットを見ているとロシア産と考えられる、非常に大きな女性の画像を見つけることが多い。



●UFOと共に現れる獣人グラスマン（画像はグラスマン※フェイクの可能性もあり）

・1988年、アトキンスと息子ティムが衝撃的な体験をした。ティムが一人でケンモア森林地帯を訪れた時、突然なものかに岩を投げつけられたのだ。驚いたティムは家に逃げ帰り、父親に告げた。アトキンスは息子を連れて現場に向かい、辺りの様子を伺った。すると、再び2人めがけて岩が飛んできた。

見ると少し離れたところに全身を毛に覆われた獣人が立っている。体長約2メートル。筋骨隆々で体重は130キロはあろうかという怪物だった。

ところが、2人がこの獣人グラスマンに約30メートル付近にまで接近したところ、その姿が突然消えたのである。この体験以来、アトキンス親子はグラスマンは何らかの霊的な存在だと考えている。学研「未確認動物UMA大全」より

※ムー関係の書物に目を通すと、「獣人がUFOと共に現れることがある」と記している。それもそうだろう。宇宙人と獣人は共に「神統記」に登場する巨人たちの子孫で、血を分けた家族なのだから。



●ビッグフット遭遇+目撃例（画像はビッグフット）

・1924年 ワシントン州セントヘレンズ山近郊にあるエイブキャニオン鉱床採掘権を持つフレッドベック、マリオンスミスら5人は鉱床調査のために峡谷に分け入った際、ビッグフットに遭遇し、これを狙撃した。

その後、5人が寝泊りしていた仮設小屋にビッグフットが投石した。いわば報復ともいうべきこの事件のために5人は仕事をあきらめ、小屋から退去したという。

・1924年 カナダのアルバート・オストマンがブリティッシュコロンビア州トバインレッドに金鉱彫りに出かけた際、就寝中に寝袋ごと運び出され、軟禁された。オストマンを誘拐したビッグフットは4頭いて、家族らしきものを構成しているように見えた。因みにオストマンは数日後、隙を見て逃げ出している。

・1963年 デイタス・ペリーは、ギフォードピンショー国有林の南のサドルから、ひとりのビッグフットがずっと彼のあとをついて来たという。その時は6メートルの距離から相手を見ている。それ以来、パンサー川からケスネル川に至る広い一帯でビッグフットを目撃している。日向ぼっこしているところを見たとか、モノをねだられたとか言っている。

・1975年 メリーランド州ベルエアーにビッグフットが出現。獣人は車を飛び越えて逃亡したが、その際に壊れたヘッドライトからひと塊の体毛が採取された。

・1976年 カリフォルニア州ミルバレーでパトロール中の警官2人が遭遇。ビッグフットは体長2.5メートルで奇声を発して逃亡した。

・1982年 ビッグフットがロサンゼルス市中に出現。住人が騒いだため治水用の排水路に逃げ込んで姿を消したが、あとには強烈な異臭が漂っていたという。

・鳥獣保護の専門家ジム・ヒューキンの言葉「彼は何でも食べます。生きているもの、死んでいるもの、新鮮なもの、腐ったもの。機敏ですばやく強い足を持っています。のろのろしたサスカッチなど見た人はいないでしょう。彼は限界というものを知りません。どんな高い山も登りますし、どんな急流でも泳げます。彼には障害というものがありません。クーガーのような大型の獣でも彼は走って追いかけて、あるいはこっそり忍んで倒すことができます。彼は鹿のように軽やかに跳躍することができます。ユーモアの精神にあふれています。人間の車や家屋に向かって石を投げても人間そのものに危害を加えません。」

・デイトス・ペリーの言葉「これまでずいぶんサスカッチに声をかけられたり口笛やヨーデルを吹かれたりしたことがあったな。なんだかわからない言葉で怒鳴られたりある時なんか立っているとパッと小突かれたこともある。どうも俺が他の動物に襲われないように見張ってくれてみたいなんだ。」

・デイトス・ペリーの言葉「いろんなところでビッグフットがナイフや削り道具にしている石に出くわす。私はレイ・ウォレス氏がくれた石を思い出した。ビッグフットが鹿を殺すために投げるものだという石だ」

※ジム・ヒューキンとデイトス・ペリーの言葉はロバート・マイケル・パイル著「ビッグフットの謎」から抜粋している。デイトス・ペリー氏は、若い頃にビッグフットが築いた円形の闘技場をサンザシの茂みの中で見つけたという。曰く「女たちが男たちの闘いを見るんだよ」「武器は石から棍棒まで何だってありだよ。」パイル氏がインディアンから聞いた話では、アダムズ山の南面にも別の四角い闘技場があるという。

全能神ゼウスの一族～英雄ペルセウス、素戔鳴尊、全能神ゼウス、周、サイス朝、孫子、ソクラテス、臨済宗、リトアニア大公国、明、李氏朝鮮、マイソール王国、ロスチャイルド家、太平天国、サムスン・グループ

---

●異なる人類の大混血時代（一大汎人類ムーヴメント）



ツォウ族（30万年前）※画像はツォウ族の男性

※「獣人の大移動時代」に参加したソーク族（チュクウ）は古代アメリカ大陸を離れると、モンゴルを経て古代台湾に入植した。ソーク族はツォウ族を生んだ。ツォウの名の由来はソークである。ソーク＝ツォウク＝ツォウとなる。

- ・ペルセーイス（30万年前）
- ・クリュセーイス（30万年前）



※画像はオーストラリアの珊瑚礁である。ツォウ族は巨人ミマース、巨人パッラースと共に、古代オーストラリアにオケアーニス海洋の娘たちに属するペルセーイス（ペルセウス）を生んだ。ペルセーイスの名の由来はパッラース、ツォウ、ムシシ（ミマース）の組み合わせである。パッラース＋ツォウ＋ムシシ＝パッラツォウシ＝パラソウシ＝ペルセーイスとなる。

更に、ペルセーイスは巨人クリュティオスと共にオケアーニス海洋の娘たちに属するクリュセーイスを生んだ。クリュセーイスの名の由来はクリュティオスとペルセーイスの組み合わせである。クリュティオス+ペルセーイス=クリュセーイスとなる。



サイシャット族（7万年前）※画像はサイシャット族の族長

※ツォウ族はオリジナル人類ムシシ、ヴィディエと合体して、台湾に「サイシャット族」を生んだ。ツォウ+ムシシ+ヴィディエ=ツォウシシディエ=シオウシッシデ=サイシャットとなる。

サイシャット族は単なる先住民族ではなく、塩椎神、素戔鳴尊、全能神ゼウス、冥界神セト、女神イシス、アダムの子セツなどの神々を生んだ部族である。サイシャット=サイシャツ=塩椎神（しおつち）。サイシャット+ウラニアー=サイシャニアー=素戔鳴尊（すさのおう）。サイシャット=サイシ=ゼウス。サイシャット=シャット=セト。サイシャット=イシャツ=イシス。サイシャット=シャツ=セツとなる。



ヘラクレス（7万年前）

※ヘラクレスとは、台湾のサイシャット族のことであるが、ヘラクレスの物語は全て、オースト



ラリア、メラネシア、南シナ海で起きたことである。ヘラクレスの目的は、主に、反自然の種族の成敗であった。

ネメアのライオン、レルネのヒュドラ、ケリュネイアの鹿、エリュマントスの猪、アウゲイアスの家畜小屋掃除、ステュムパリデスの鳥退治、クレタの暴れ牛、ディオメデスの人喰い馬、アマゾネスとの戦闘、ゲリュオンの赤い牛、ヘスペリデスの黄金の林檎、ケルベロスの生け捕りの中でも、特にエリュマントスの猪とディオメデスの人喰い馬はタナトスの一族である。



ペルセウス（7万年前）

※「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加したペルセーイスは、英雄ペルセウスとして、ケルケイス（ゴルゴン）、メーティス（メドゥーサ）の国に取り付いたタナトス一族を皆殺しにした。この時、一部のタナトスはクリュサウル、ペガサスとなって逃亡し、ダナオスの一族はアルゴス号に閉じ込められてオセアニアに連行され、タンナ島に封じ込められた。

- ・塩椎神（7万年前）
- ・撰津国（7万年前）
- ・素戔鳴尊（7万年前）
- ・筒之男命（7万年前）



※画像は素戔鳴尊。サイシャット族は古代日本に撰津という拠点を得た。彼らは塩椎神（しおつち）でもあり、素戔鳴尊でもあり、筒之男命でもあった。要は、3者の正体はサイシャット族

だということである。

しおつちの名の由来はサイシャットである。サイシャット=サイシャツ=しおつちとなる。その後、彼らは「摂津」に拠点を得た。摂津の名の由来はサイシャットである。サイシャット=シャツ=摂津となる。高天原と摂津は、塩椎神（サイシャット族）の勢力圏だった。

- ・ヴァルハラ（7万年前）
- ・戦士の守護女神ワルキューレ（7万年前）



※画像は戦士の守護女神ワルキューレの飛翔。「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加したサイシャット族（素戔鳴尊、筒之男命）は、神話通り、葦原中津国に向かった。葦原中津国は2種類あるが、ひとつめは八代湾～天草諸島に跨る地域であり、2つめはアナトリア半島～ナクソス島に跨る地域である。彼らが目指したのは2つめの葦原中津国である。

アルゴス号は、途上の北アメリカにミドガルド王国などを残しつつ、アースガルド（メキシコ）に到達した。大西洋側に出た彼らは、上陸ポイントを「ベラクルス」と命名した。更に、北メキシコに入植したサイシャット族は「ヴァルハラ王国」を築いた。ヴァルハラの名の由来はペルセウスとヘラクレスの組み合わせである。ペルセウス+ヘラクレス=ペルヘラ=ヴァルハラとなる。

。現ベラクルスでは「ワルキューレ」が生まれた。ベラクルス、ワルキューレの名の由来は共にヘラクレスである。ヘラクレス=エラクーレス=ワルキューレとなる。

北アメリカにあったミドガルド、北メキシコにあったヴァルハラ、アースガルドの名は北欧神話に出てくるため、北欧に存在したと考える人も多い。しかし、大概の場合、神話の舞台は神話が編まれた土地で起きた事柄ではない。北欧神話の場合も同様である。

北欧神話を伝えた人物はアメリカ大西洋岸を北上し、グリーンランド、アイスランド、アイルランドを経てバルト海に至る航路を採った。つまり、北欧人から見ると北欧神話を伝えた人物は北から来たように見えたのだ。そのため、ミドガルド、ヴァルハラ、アースガルドは北方にあると考えられた。

- ・オリンポス神族（4万年前）
- ・全能神ゼウス（4万年前）



※画像はゼウスと女神の戯れ。「第2次アルゴス号の大航海時代」に参加したサイシャット族は、メキシコを離れ、第二の葦原中津国（エーゲ海）を目指した。クロノスはケルンを拠点にし、インチキ宗教により、大量の弱者を信者として擁し、ヨーロッパを支配していた。これに対抗するべく、現オリンポス山付近に入植したサイシャット族は「オリンポス神族」を結成した。オリンポスの名の由来はウラヌスとポセイドンの組み合わせである。ウラヌス+ポセイドン=ウラヌポセ=オリンポスとなる。オリンポス神族には「ゼウス」「ポセイドン」「ハデス」「ヘスティア」「デメテル」「ヘラ」などの神々が属しているが、ヘスティア、デメテル以外はサイシャット族の合体部族から生まれた。

現オリンポス山付近に拠点を構えたサイシャット族は、「ゼウス」を生んだ。ゼウスの名の由来はサイシャットである。サイシャット=サイシャ=ザイシ=ゼウスとなる。

#### ・アトランティス王国（4万年前）



※画像はアトランティス王国が存在したと考えられるオーストラリア南部の砂漠地帯。ゼウス以外は「オリンポス神族の大航海時代」に参加し、北アメリカ、マヤ、南アメリカ、南極大陸の発見を経てオーストラリアに入植した。デメテルを生んだアドメテーはエロスと組んで「アトラス」を生んだ。その後、アトラスはタナトスと組んで「アトランティス王国」を築いた。アトランティスの名の由来はアトラス、タナトスの組み合わせである。アトラス+タナトス=アトラナトス=アトランティスとなる。

- ・スエズ（4万年前）
- ・ティタノマキア（4万年前）
- ・ギガントマキア（4万年前）



※画像はギガントマキアの図。「アトランティス人の大航海時代」に参加したゼウスは、「アベルの大航海時代」の人々と連合し、エジプトで体制を整えてから古代ヨーロッパに侵攻した。クロノスが掌握していた大量の愚か者たちは、しかし、単なる頭数を上回るゼウスたちの実力に翻弄され、容易に退けられた。

クロノスはヨーロッパからパプアに逃亡し、ダニ族となる。クロノスは「できそこないでも数で圧倒すれば優れた者に勝てる」と信じていたが、この時は、優れた者ができそこないの「数で圧倒する方法」を凌駕したため、敗北を喫した。

- ・スワジ（2万年前）
- ・オデュッセウス（2万年前）
- ・テセウス（2万年前）



※画像はオデュッセウスとテセウスが生まれたスワジ。オデュッセウスの物語は、実際には「トロイア戦争」ではなく、「最終戦争ラグナロク」の後に、ゼウスが世界中を巡り、諸国のタナトスを成敗して回った話だと考えられる。当時のゼウスは、現スワジやキンシャサに住んでいた

。オデュッセウスの名の由来は、ヴィディエ、ゼウスの組み合わせである。ヴィディエ+ゼウス=ヴィディゼウス=オデュッセウスとなる。

シベリア・モンゴル（キコネス人、パイエケス人、アルキノオス王、ナウシカ姫）、コンゴ（ロトパゴイ人）、カリブ海（カリユプソー島）、ナイジェリア（キュクロプス）、セネガル（アイオロス）、ナミビア（人喰いライストリュゴン）、黒海（魔女キルケ）、オーストラリア（海の怪物スキュラ）、ヨーロッパ（ヘリオス島）というように、名前を精査すると舞台が見えてくる。

一方、オデュッセウスは「テセウス」とも呼ばれた。テセウスの名の由来はヴィディエ、ゼウスの組み合わせである。ヴィディエ+ゼウス=ディエゼウス=テセウスとなる。アテナイの王子テセウスの物語も、オデュッセウス同様に、数々の王国に取り付いたタナトスの一族を退治して回る話である。ここでは割愛するが、鉄の棍棒男ペリペテス、四つ裂き男シニス、牝猪パイア、蹴落とし男スケイロン、レスリング男ケルキュオン、引き伸ばし男ポリュペモンの名は、みな、反自然の種族に属していることがわかる。

- ・スーサ（1万3千年前）
- ・太陽神シャマシュ（1万3千年前）

※大地殻変動を機に「ヘリオポリスの大航海時代」に参加したゼウスは、アフリカから古代メソポタミアに入植し、「スーサ」を築いた。スーサの名の由来は素戔鳴尊である。素戔（すさ）=スーサとなる。太陽神シャマシュの由来はゼウスとマスカットの組み合わせである。ゼウス+マスカット=ゼウマス=シャマシュとなる。

-----

#### ●真のイスラエル王国の時代（宇宙人の古代台湾統治時代）

- ・ルカイ族（クウォスのトバルカイン）
- ・ツォウ族（ゼウスの一族）
- ・サイシャット族（ゼウスの一族）
- ・タオ族（エラド）
- ・セデック族（マハラエル）
- ・クーロン族（チュクウのトバルカイン+ルハンガのトバルカイン）
- ・タオカス族（エラド+クウォスのトバルカイン）
- ・パゼツヘ族（ルハンガ+スバル人）
- ・アリクン族（オロクンのトバルカイン）
- ・ロア族（マハラエル）
- ・シラヤ族（スバル人+ルハンガのトバルカイン）



※画像は台湾の絶景。真のイスラエル王国とは、葦原中津国（天草諸島～八代湾）と高天原（台湾）による連邦国家だった。古代台湾はもともとオリジナル人類ニャメ（アミ族）の領土であり、日本神話で見られる天津神の故郷でもある。

BC 35 世紀頃、上記の宇宙人（超科学の種族）たちが集合し、最初の人類エスが築いた葦原中津国と連合してイスラエル（台湾、沖縄諸島、九州）を統治していた。



- ・ 神農（BC 35 世紀頃）
- ・ 女真（BC 35 世紀頃）
- ・ 朝鮮（BC 35 世紀頃）

※画像は神農である。イスラエル時代、ゼウスの一族は朝鮮半島、満州に領土を得た。朝鮮（チヨソン）、満州の民族女真族（ジュシャン）の由来はシュシャン（スーサ）である。ゼウスの一族はオロクンのトバルカインと組んで神農（シェノン）も生んだ。神農（シェノン）の由来はゼウスとアルキュオネウス（オロクンのトバルカイン）の組み合わせである。

-----



・スイス（BC 32世紀）※画像はスイス

※「ソドムとゴモラ」が起きるとスーサにいたゼウスはメソポタミアを離れて、西方に向かった。イベリア半島を北上し、ライン流域を遡り、彼らはアルプス山脈のふもとにまで及んだ。彼らは当地を「スイス」と命名した。スイスの名の由来はゼウスである。ゼウス＝ゼイス＝スイスとなる。

#### ●古代スイスの王（エラム王国の歴代王）

- ・ペリ 在位BC 2500頃
- ・イグリシュ・ハラム 在位BC 2460頃
- ・イルカブ・ダム 在位BC 2450頃
- ・アル・エンヌム 在位BC 2420頃
  
- ・ルフ・イシュシャン 在位BC 2350頃
  
- ・クティク・インシュシナク 在位BC 2240頃
  
- ・ギル・ナンメ 在位BC 2030頃
- ・エンピ・ルッハン 在位BC 2010頃
  
- ・エパルティ3世 在位BC 1850頃
- ・アッタフス 在位BC 1830頃
- ・シルクドゥフ 在位BC 1792頃
- ・シムトゥ・ワラタシュ 在位BC 1772～1770
  
- ・シウェ・パラル・フツパク 在位BC 1770～BC 1745
- ・クドゥズルシュ1世 在位BC 1745～BC 1730
- ・クティル・ナフンテ1世 在位BC 1730～BC 1700

- ・リラ・イル・タシュ 在位BC1700～BC1698
- ・テムティ・アグン1世 在位BC1698～BC1690
- ・タン・ウリ 在位BC1690～BC1655
- ・テムティ・ハルキ 在位BC1655～BC1650
- ・クク・ナシュル2世 在位BC1650～BC1635
- ・クティル・シルハハ1世 在位BC1635～BC1625
- ・テムティ・ラプタシュ 在位BC1625～BC1605
- ・クドゥズルシュ2世 在位BC1605～BC1600
- ・タタ 在位BC1600～BC1580
- ・アッタ・メッラ・ハルキ 在位BC1580～BC1570
- ・パラ・イシュシャン 在位BC1570～BC1545
- ・クク・キルワシュ 在位BC1545～BC1520
- ・クク・ナフンテ 在位BC1520～BC1505
- ・クティル・ナフンテ2世 在位BC1505～？

## ●海の民

- ・アカイワシャ人（BC13世紀） チュクウ+ウエシュシュ
- ・ウエシュシュ人（BC13世紀） クウォス+シュシャン
- ・シエクレス人（BC13世紀） チュクウ+ルハンガ+クウォス
- ・チェケル人（BC13世紀） チュクウ+ルハンガ
- ・トゥルシア人（BC13世紀） チュクウ+ルハンガ+シュシャン
- ・ルカ人（BC13世紀） アルキュオネウス



※画像は海の民のレリーフ。タナトスの一族に属する海の民（デニエン人、シェルデン人）以外の6種の海の民はトバルカインとゼウスの一族で構成されていた。海の民は、「クウォスのトバルカイン」に掲載されているルカイ族の男のような顔をしていたと考えられる。オロクンのトバルカインはルカ人と呼ばれた。



- ・女神イシス（BC 13世紀）
- ・エフェソス（BC 13世紀）



※画像はエフェソス遺跡。ウエシュシュの名の由来はスイスとシュシヤンの組み合わせである。スイス+シュシヤン=ウイスシヤン=ウエシュシュとなる。ウエシュシュ人は、トウルシア人、チェケル人、ルカ人らと共にラムセス3世に加勢し、海の民（デニエン人・シェルデン人）を退けた。

その後、ウエシュシュ人は古代エジプトに入植して「女神イシス」を祀った。イシスの名の由来はウエシュシュである。ウエシュシュ=エスス=イシスとなる。また、彼らは古代アナトリアにも入植し、「エフェソス」を築いた。エフェソスの名の由来はウエシュシュである。ウエシュシュ=ウエシュシュ=エヘスス=エフェソスとなる。

#### ●海の民ウエシュシュ人とエフェソスの王（エラム王国の歴代王）

- ・キディヌ
- ・インシュシナク・スンキル・ナッピピル
- ・タン・ルフラテル2世
- ・シャツラ
- ・テプティ・アハル
  
- ・イゲ・ハルキ
- ・パヒル・イシュシヤン
- ・アツタル・キッタフ
- ・フンマン・ニメナ
- ・ウンタシュ・ナピリシャ
- ・ウンパタル・ナプリシャ
- ・キディン・フトウラン1世
- ・キディン・フトウラン2世
- ・ナピリシャ・ウンタシュ
- ・キディン・フトウラン3世

- ・ハットトウシュ・インシュシナク
- ・シュトルク・ナフンテ1世 在位BC1184~BC1155
- ・クティル・ナフンテ3世
- ・シルハク・インシュシナク
- ・フテルトウシュ・インシュシナク
- ・シルハナ・ハムル・ラガマル



**Shutrak-Nahhunte II** (BC 11世紀半ば) エラム王 在位不明※画像なし  
 文王 (?~BC 1056) 周朝始祖 在位BC 1152~BC 1056

※「マハーバーラタ戦争」を機に、エラム人の王族は東アジアに向かった。彼らは古代中国に上陸すると、殷に寄生していた人身御供の種族（サトゥルヌスの一族）を皆殺しにした。その後、ウェシュシュ人は「周」を開いた。周（チョウ）の名の由来はツオウである。ツオウ=チオウ=周（チョウ）となる。



**Shutur-Nahhunte I** (BC 11世紀半ば) エラム王 在位不明  
 武王 (?~BC 1043) 西周初代王 在位BC 1046~BC 1043  
 スサノオ (生没年不詳)

※アッシリア王はアッシリアや中央アジアでヤマタノオロチ（ティアマトの蛇）を祀り、人身御

供を開催していた。優れた人間を公的に殺害し、性奴隷、或いは人肉を供給するためである。彼らはスサノオ（スーサの王？）に退治されるが、スーサの王とはダヴィデの一族であり、エラム王+周の武王のことを指している可能性がある。スサノオが倒したヤマタノオロチとは殷の王+アッシリア王のことだった。

・成王 西周第2代王 在位BC1042～BC1021

・康王 西周第3代王 在位BC1020～BC996

昭王（？～BC977） 西周第4代王 在位BC995～BC977

ニムロト（生没年不詳） シェションク1世父

※南征して行方不明になった昭王は、故地帰還を思い立った。つまり、中国人の顔をした昭王の軍団はシルクロードを経てエジプトにまで足を伸ばした。ひとまず、リビアに根を下ろして警察としての地位を得てリビア人を指揮下に置いていた昭王の軍団は、22年後のBC945年にリビア人王朝を古代エジプトに打ち建てている。

穆王（？～BC922） 西周第5代王 在位BC976～BC922

シェションク1世（？～BC922） リビア朝初代ファラオ 在位BC945～BC922

・共王 西周第6代王 在位BC992～BC900

・懿王 西周第7代王 在位BC899～BC892

孝王（？～BC886） 西周第8代王 在位BC891～BC886

オソルコン1世（？～BC887） リビア朝第2代ファラオ 在位BC922～BC887

シェションク2世（？～BC885） リビア朝第3代ファラオ 在位BC887～BC885

夷王（？～BC878） 西周第9代王 在位BC885～BC878

タケロト1世（？～BC872） リビア朝第4代ファラオ 在位BC885～BC872

レイ王（？～BC841） 西周第10代王 在位BC877～BC841

オソルコン2世（？～BC837） リビア朝第5代ファラオ 在位BC872～BC837

宣王（？～BC782） 西周第11代王 在位BC828～BC782

シェションク4世（？～BC785） リビア朝第7代ファラオ 在位BC798～BC785

幽王（？～BC771） 西周第12代王 在位BC781～BC771

パミ（？～BC778） リビア朝第8代ファラオ 在位785～778

携王 (?~BC750) 西周第13代王 在位BC770~BC750

イニ (?~BC750) エジプト第23王朝第9代ファラオ 在位BC755~BC750

平王 (?~BC720) 東周初代王 在位BC771~BC720

オソルコン4世 (?~BC716) リビア朝第11代ファラオ 在位BC730~BC716

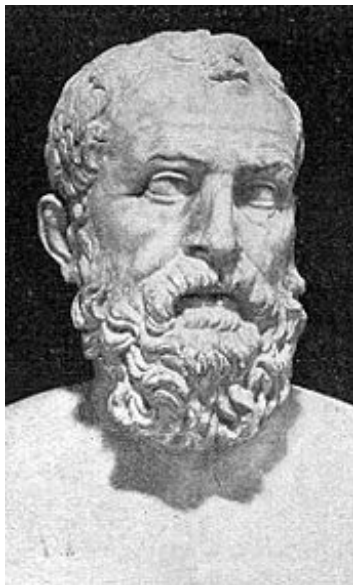
テフナクト (?~BC720) エジプト第24王朝初代ファラオ 在位BC727~BC720

- ・桓王 東周第2代王 在位BC719~BC697
- ・荘王 東周第3代王 在位BC696~BC682
- ・釐王 東周第4代王 在位BC681~BC677
- ・恵王 東周第5代王 在位BC676~BC675、BC673~BC652

襄王 (?~BC619) 東周第6代王 在位BC651~BC619

プサムテク1世 (?~BC610) サイス朝初代ファラオ 在位BC664~BC610

- ・頃王 東周第7代王 在位BC619~BC613
- ・匡王 東周第8代王 在位BC613~BC607



定王 (?~BC586) 東周第9代王 在位BC697~BC586※画像なし

プサムテク2世 (?~BC589) サイス朝第3代ファラオ 在位BC595~BC589※  
画像なし

ソロン (BC639~BC559) 政治家

簡王 (?~BC572) 東周第10代王 在位BC586~BC572

ウアフイブラー (?~BC570) サイス朝第4代ファラオ 在位BC589~BC570

イアフメス2世 (?~BC526) サイス朝第5代ファラオ 在位BC570~BC526  
霊王 (?~BC545) 東周第11代王 在位BC571~BC545  
景王 (?~BC520) 東周第12代王 在位BC545~BC520



プサムテク3世 (?~BC525) サイス朝第6代ファラオ 在位BC526~BC525※  
画像なし

悼王 (?~BC520) 東周第13代王 在位BC520※画像なし

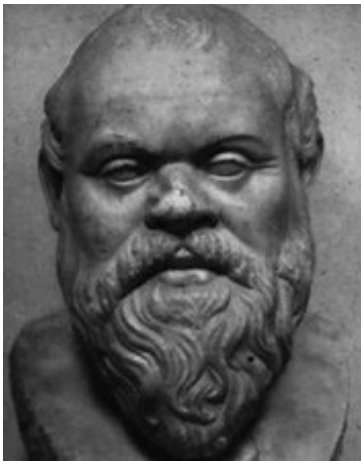
ピタゴラス (BC582~BC496) 宗教結社ピタゴラス教団教祖



敬王 (?~BC476) 東周第14代王 在位BC520~BC476

孫武 (BC535~BC?) 兵法家

- ・元王 東周第15代王 在位BC476~BC469
- ・貞定王 東周第16代王 在位BC468~BC441
- ・哀王 東周第17代王 在位BC441
- ・思王 東周第18代王 在位BC441
- ・考王 東周第19代王 在位BC440~BC426



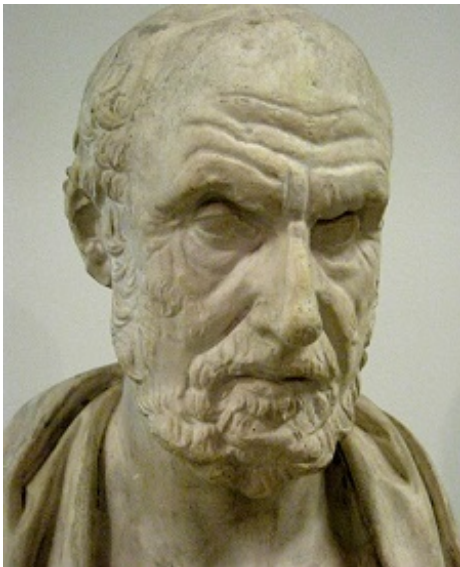
威烈王 (?～BC402) 東周第20代王 在位BC425～BC402※画像なし

アミルタイオス (?～BC399) エジプト第28王朝初代ファラオ 在位BC404～BC399※画像なし

ソクラテス (BC469～BC399) 哲学者

西門豹 (生没年不詳) 政治家・武人※画像なし

※西門豹は、河伯の人身御供の儀式をインチキとし、教団関係者を問答無用で皆殺しにした。ただ、河伯は仲間を官僚として魏の国の中枢に送り込んでいた。そのため、彼らは魏の王を操り、西門豹を左遷させた挙句、正義漢の彼に民に圧政を敷くことを強要した。これに嫌気が差した西門豹は、自から官職を辞退



安王 (?～BC376) 東周第21代王 在位BC401～BC376※画像なし

ハコル (?～BC380) エジプト第29王朝第2代ファラオ 在位BC393～BC380  
※画像なし

ヒポクラテス (BC460～BC370) 医学者

烈王 (?～BC369) 東周第22代王 在位BC375～BC369

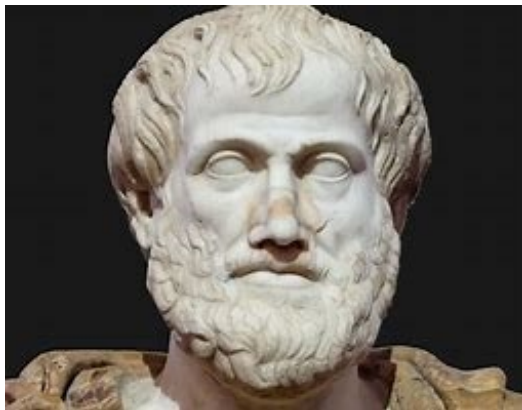
ネクタネボ1世 (?～BC362) エジプト第30王朝初代ファラオ 在位BC380～BC362

マルクス・フリウス・カミッルス (BC 446 ~ BC 365) ローマ将軍



ネクタネボ2世 (? ~ BC 343) エジプト第30王朝第3代ファラオ 在位BC 360 ~ BC 343 ※画像なし

プラトン (BC 427 ~ BC 347) 哲学者



ダレイオス3世 (BC 380 ~ BC 330) 第10代ペルシア皇帝 + エジプト第31王朝初代ファラオ ※画像なし

アリストテレス (BC 384 ~ BC 322) アレクサンドロスの教師

カウティリヤ (BC 350 ~ BC 283) 「実利論」著者

アンティゴノス1世 (BC 382 ~ BC 301) アンティゴノス朝初代マケドニア王 在位BC 306 ~ BC 301



顕王 (?～BC 321) 東周第23代王 在位BC 368～BC 321 ※画像なし

アレクサンドロス3世 (BC 356～BC 323) アルゲアス朝第26代マケドニア王 在位BC 336～BC 323

セレウコス1世 (BC 358～BC 281) セレウコス朝初代王 在位BC 305～BC 281 ※画像なし

チャンドラグプタ (?～?) マウリヤ朝初代マガダ王 在位BC 317～BC 298 ※画像なし

※アレクサンドロス代王は33歳で死んだことにし、チャンドラグプタに変身してマウリヤ朝を開いた。チャンドラグプタのチャンドラの由来はアレクサンドルである。つまり、アレクサンドル代王は58歳まで生きた。アレクサンドル大王の教師アリストテレスはカウティリヤに変身してチャンドラグプタを援助した。

慎ケン王 (?～BC 315) 東周第24代王 在位BC 320～BC 315

ピリッポス3世 (?～BC 317) アルゲアス朝第27代マケドニア王 在位BC 323～BC 317

赧王 (?～BC 256) 東周第25代王 在位BC 314～BC 256

アンティオコス1世ソテル (?～BC 261) セレウコス朝第2代王 在位BC 281～BC 261

- ・アンティオコス2世テオス セレウコス朝第3代王 在位BC 261～BC 246
- ・セレウコス2世カリニコス セレウコス朝第4代王 在位BC 246～BC 226
- ・セレウコス3世ケラウノス セレウコス朝第5代王 在位BC 226～BC 223

- ・アンティオコス8世グリュポス セレウコス朝第16代王 在位BC 125～BC 96
- ・セレウコス6世エピファネス・ニカトル セレウコス朝第17代王 在位BC 96～BC 95





アンティオコス10世エウセベス (?~BC83) セレウコス朝第18代王 在位BC95~BC83※画像なし

ガイウス・マリウス (BC157~BC86) 共和政ローマ末期軍人・政治家



ティグラネス1世 (?~BC69) セレウコス朝第19代王 在位BC83~BC69※画像なし

シナトルケス (?~BC70) アルサケス朝第11代パルティア王 在位BC76~BC70  
※画像なし

ガイウス・マリウス (BC110~BC82) ローマ軍人※画像なし

マルクス・リキニウス・クラッスス (BC115~BC53) 第一回三頭政治

グナエウス・ポンペイウス・ストラボ (?~BC87) ローマ将軍※画像なし

マルクス・アントニウス・クレティクス (BC115~BC72) ローマ執政官BC99※画像なし



アンティオコス13世アジアティクス (?~BC63) セレウコス朝第20代王 在位BC69~BC63

プラアテス3世 (?~BC57) アルサケス朝第12代パルティア王 在位BC70~BC57  
※画像なし

ミトラダテス3世 (?~BC55) アルサケス朝第13代パルティア王 在位BC58~BC

グナエウス・ポンペイウス（BC106～BC48） 第一回三頭政治

フラータス4世（?～BC2） アルサケス朝第15代パルティア王 在位BC38～BC2

マルクス・アエミリウス・レピドゥス（BC90～BC13） 第二回三頭政治

オロデス2世（?～BC37） アルサケス朝第14代パルティア王 在位BC57～BC37

マルクス・アントニウス（BC83～BC30） 第二回三頭政治

-----

アルタヴァスデス（?～BC229） アルサケス朝第30代パルティア王 在位227～229

仇首王（?～BC234） 第6代百済王 在位214～234

比流王（?～344） 第11代百済王 在位304～344

コンスタンティヌス1世（?～337） コンスタンティヌス朝初代ビザンツ皇帝 在位324～337

・コンスタンティウス2世（317～361） コンスタンティヌス朝第2代ビザンツ皇帝 在位337～361

・ユリアヌス（332～363） コンスタンティヌス朝第3代ビザンツ皇帝 在位360～363

・ヨウリアヌス（331～364） コンスタンティヌス朝第4代ビザンツ皇帝 在位363～364

※コンスタンティヌス朝以後、ウォレンティアヌス朝1代、テオドシウス朝4代、レオ朝5代、ユスティアヌス朝6代、ヘラクレイオス朝11代の王が続く。

コンスタンティヌス5世（718～775） イサウリア朝第2代ビザンツ皇帝 在位741～775

秦河勝（718?～?） 武人

※コンスタンティヌス5世は秦河勝に変身し、常世の神の神官を皆殺しにした。常世の神は藤原不比等の子らが運営していた。藤原武智麻呂、藤原房前、藤原宇合、藤原麻呂の没年が符号しているが、それが証拠である（公式には天然痘で死んだとされているがウソだ）。

- ・レオン4世（750～780） イサウリア朝第3代ビザンツ皇帝 在位775～780
- ・コンスタンティノス6世（771～797） イサウリア朝第4代ビザンツ皇帝 在位780～797
- ・エイレーネー（752～803） イサウリア朝第5代ビザンツ皇帝 在位797～802
- ・ニケフォロス1世（760～811） イサウリア朝第6代ビザンツ皇帝 在位802～811
- ・スタウラキオス（？～812） イサウリア朝第7代ビザンツ皇帝 在位811～812
- ・ミカエル1世ランガベール（？～844） イサウリア朝第8代ビザンツ皇帝 在位812～844
- ・レオン5世（？～820） イサウリア朝第9代ビザンツ皇帝 在位813～820
- ・ミカエル2世（770～829） アモリア朝初代ビザンツ皇帝 在位820～829
- ・テオフィロス（813～842） アモリア朝第2代ビザンツ皇帝 在位829～842
- ・ミカエル3世（840～867） アモリア朝第3代ビザンツ皇帝 在位842～867

※アモリア朝以後はマケドニア朝18代、ドゥーカス朝5代の王が続く。

- ・アレクシオス1世コムネノス（1048～1118） コムネノス朝初代ビザンツ皇帝 在位1081～1118
- ・ヨハネス2世コムネノス（1087～1143） コムネノス朝第2代ビザンツ皇帝 在位1118～1143
- ・マヌエル1世コムネノス（1118～1180） コムネノス朝第3代ビザンツ皇帝 在位1143～1180
- ・アレクシオス2世コムネノス（1169～1183） コムネノス朝第4代ビザンツ皇帝 在位1180～1183



- ・アンドロニコス1世コムネノス（1123～1185） コムネノス朝第5代ビザンツ皇帝 在位

1183～85※画像なし

ヘンリー2世（1133～1189） プランタジネット朝初代イングランド王 在位1154～1189

-----

イサキオス2世アンゲロス（1156～1204） アンゲロス朝初代ビザンツ皇帝 在位1185～1195

ベーラ3世（1148～1196） アールパード朝第14代ハンガリー王 在位1172～1196

ペタル4世（?～1190） アセン朝初代ブルガリア王 在位1185～86、1187～90

イヴァン・アセン1世（?～1196） アセン朝第2代ブルガリア王 在位1187～90、1196

イヴァンコ（?～1196） アセン朝第3代ブルガリア王 在位1196



アレクシオス4世アンゲロス（1182～1204） アンゲロス朝第3代ビザンツ皇帝 在位1203～04※画像なし

カロヤン（?～1207） アセン朝第4代ブルガリア王 在位1197～1207※画像なし

イムレ1世（1174～1204） アールパード朝第15代ハンガリー王 在位1196～1204※画像なし

サワ（1174～1236） セルビア大主教※画像なし

テオドロス1世（1175～1222） ラスカリス朝初代ビザンツ皇帝 在位1205～1222



ボリル (?~1218) アセン朝第5代ブルガリア王 在位1207~1218 ※画像なし  
栄西 (1141~1215) 臨済宗開祖

※栄西の本名は賀陽氏だが、賀陽（がよう）の由来は香夜（かや）である。以下のアセン朝ブルガリア王は軒並み臨済宗の僧侶となった。臨済宗は基本的に宇宙人の一族が設けた善の宗教であるため、頻繁にタナトスの王が経営する東西本願寺、浄土真宗に攻撃されている。



ジョン (1167~1216) プランタジネット朝第3代イングランド王 在位1199~1216  
島津忠久 (?~1227) 島津家初代当主

※ジョン欠地王がイングランドを離れて遠く日本に移住した。彼らの一族は島津を名乗った。島津の由来はスミスである。

- ・島津忠時（1202～1272） 島津家第2代当主
- ・島津久経（1225～1284） 島津家第3代当主

※島津忠時が薩摩守護となり、島津久経が始めて薩摩に入国する。この時に「ばってん」「おいどん」などの方言が生まれた。ばってんは英語「but」、おいどんは英語「I done it」が訛って生まれた。島津氏は正義の心が強く、邪教浄土真宗を弾圧した。

-----

イヴァン・アセン2世（?～1241） アセン朝第6代ブルガリア王 在位1218～1241

1 ※画像なし

退耕行勇（1163～1241） 臨済宗僧侶※画像なし



カリマン1世（?～1246） アセン朝第7代ブルガリア王 在位1241～1246 ※画像なし

釈円栄朝（1165～1247） 臨済宗僧侶※画像なし

ヴワディスワフ3世（1165～1231） ピヤスト朝ポーランド王国第16代ポーランド公  
在位1202～1206



カリマン2世 (?~1257) アセン朝第9代ブルガリア王 在位1256~1257※画像なし

テオドロス2世ラスカリス (1221~1258) ラスカリス朝第3代ビザンツ皇帝 在位1254~58※画像なし

アレクサンドル・ネフスキー (1220~1263) リューリク朝第48代キエフ大公 在位1249~1263



コンスタンティン・ティフ (?~1277) アセン朝第10代ブルガリア王 在位1257~1277※画像なし

蔵叟朗誉 (1194~1277) 臨済宗僧侶※画像なし

シュヴァルナス (?~1270) リトアニア大公国初代大公

ヘンリー3世 (1207~1272) プランタジネット朝第4代イングランド王 在位1216~1272

※ヘンリー2世の後にリチャード1世（クリュニー大主教アイマールの子孫）がイングランド王になり、ヘンリー3世の後、エドワード1世、エドワード2世（如信の子孫）、エドワード3世（本願寺門主覚如の子孫）とタナトスの王が続くことになる。特に、エドワード3世が事実上の兄であるヴァロワ朝初代フランス王フィリップ6世と「百年戦争」を始めたため、フランスと

イングランドが不幸になっていく。

イヴァイロ (?~1279) アセン朝第11代ブルガリア王 在位1277~1279

円爾 (1202~1280) 臨濟宗僧侶



イヴァン・アセン3世 (?~1280) アセン朝第12代ブルガリア王 在位1279~1280※画像なし

イクノ・アムラク (?~1285) エチオピア帝国ソロモン朝初代皇帝 在位1270~1285

-----

リトアニア大公国初代大公シュヴァルナスの孫



アルギルダス (1296~1377) リトアニア大公国大公

中世リトアニアの君主。アルギルダスは1345年から1377年にかけてリトアニア人とルーシ人の君主とリトアニア大公国を統治した。西方の国境を守る弟のケーストゥティスの支持の許でアルギルダスはバルト海から黒海、モスクワまで50マイルにも及ぶ広大な領域を築いた。wikiより

-----



リトアニア大公国初代大公アルギルダスの子



アンドリュス・アルギルダティス（1325～1399）※画像なし

朱元璋（1328～1398） 明初代皇帝 在位1368～1398

島津氏久（1328～1387） 島津家第6代当主※画像なし

※ヨーロッパに生まれた朱元璋の正体はリトアニア大公アルグルダスの子アンドリュス・アルギルダティスである。アンドリュス・アルギルダティスは朱元璋を称し、明を建国した。



コンスタンティナス・アルギルダティス（1335～1388）※画像なし

李成桂（1335～1408） 李氏朝鮮初代王 在位1393～1398

※ヨーロッパに生まれた李成桂の正体はリトアニア大公アルグルダスの子コンスタンティナス・アルギルダティスである。李成桂は李氏朝鮮を建国した。

-----  
明皇帝朱元璋の子

朱椿（1371～1423）

太宗李芳遠（1367～1422） 李氏朝鮮第3代国王 在位1401～1418

ヤドゥ・ラーヤ（1371～1423） マイソール王国初代王 在位1399～1423

島津久豊（1375～1425） 島津家第8代当主

※太宗李芳遠は朝鮮半島からインドに赴き、マイソール王国を築いている。オデヤ（ウォディヤール）家の名の由来は朝鮮語「オディヤ？（どこだ？）」であり、マイソールの由来は「ムイ、ソウル（ソウルじゃない）」である。



イ・ジョン（1407～1453） 太宗の子※画像なし

足利義量（1407～1425） 室町幕府第5代征夷大將軍

島津忠国（1403～1470） 島津家第9代当主※画像なし

※ダヴィデの一族の王朝である明の皇帝は、朝鮮や日本にも進出することを狙っていた。朱元璋の子朱椿は李氏朝鮮では太宗に变身し、朝鮮半島を治めた。その後、太宗の子イ・ジョンが日本に進出し、足利義量として征夷大將軍に即位した。しかし、異分子の侵入を察知した善如の一族は義量を亡き者にしようと画策し、これに気付いた義量は18歳で死んだことにしていち早く日本を脱出し、李氏朝鮮に帰還した。彼は46歳まで生きた。



足利義輝（1536～1565） 室町幕府第13代征夷大將軍  
隆慶帝（1537～1572） 明第13代皇帝

※明第12代皇帝嘉靖帝は工作員として日本に潜入し、足利義晴の子として義輝を生んだ。しかし、義輝は弟である義栄に正体を知られたため、執拗なまでに狙われ続けた。1565年、義輝は三好三人衆に殺害されたことにして父の故地中国に渡り、1567年に隆慶帝に即位した。彼はなぜそんなにすぐに明の皇帝になれたのか？それは、義輝（隆慶帝）が嘉靖帝（ダヴィデの一族）の子だったからだ。



足利義昭（1537～1597） 室町幕府第15代征夷大將軍

-----  
足利義輝（隆慶帝）の子



足利輝若丸（1562）※画像なし

万曆帝（1563～1620） 明第14代皇帝

徐光啓（1562～1633）

高攀龍（1562～1626） 東林七賢

繆昌期（1562～1626） 東林七賢※画像なし

※足利義輝の子輝若丸は早世したことにし、潜伏して育ち、中国に潜入して万曆帝（ダヴィデの一族）として明皇帝に即位した。また、足利義輝の一族は、足利義栄（本願寺門主善如の一族）が作った「東林党」を篡奪した。しかし、そのために足利義栄が化けた魏忠賢によって東林党は手ひどく弾圧された。

-----

足利義昭の子



足利義尋（1572～1605）※画像なし

楊漣（1572～1625） 東林六君子

袁化中（1572～1625） 東林六君子※画像なし

周起元（1571～1626） 東林七賢※画像なし



永山義在（1575～1635） 義尋弟※画像なし

左光斗（1575～1625） 東林六君子

魏大中（1575～1625） 東林六君子

島津忠恒（1576～1638） 薩摩藩初代藩主※画像なし



泰昌帝（1582～1620） 明第15代皇帝

定遠君1580～1620 仁祖父※画像なし

周朝瑞（1580～1625） 東林六君子※画像なし

周宗建（1582～1625） 東林七賢

周順昌（1584～1626） 東林七賢※画像なし

黄尊素（1584～1626） 東林七賢

平島義次（1596～1680） 義助の子

李慶昇（1593～1626） 東林七賢

仁祖李倧（1595～1649） 李氏朝鮮第16代国王



崇禎帝（1611～1644） 明第17代皇帝

昭顯世子（1612～1645） 仁祖の子※画像なし

ナラサー・ラージャ1世（1615～1659） マイソール王国第12代王※画像なし

島津光久（1616～1695） 薩摩藩第2代藩主

島津重年（1729～1755） 薩摩藩第7代藩主

クリシュナ・ラージャ2世（1728～1766） マイソール王国第18代王 在位1734～1766

洪大容（1731～1783） 新羅学者



島津重豪（1745～1833） 薩摩藩第8代藩主※画像なし

ナンジャ・ラージャ（1747～1772） マイソール王国第19代王 在位1766～1772※画像なし

マイアー・アムシェル・ロスチャイルド（1744～1812） ロスチャイルド家始祖

※ナンジャ・ラージャはドイツに進出し、マイアー・アムシェルに変身してロスチャイルド家の始祖となった。しかし、残ったのは西本願寺門主法如に篡奪されたロンドン家だけで、わずかに残されたパリ家も半ば篡奪されている。フランクフルト家、ウィーン家、ナポリ家は、当然、ロンドン家のひとり勝ちを求めた西本願寺門主法如の一族によって潰された。

島津齊宣（1774～1841） 薩摩藩第9代藩主

チャーマ・ラージャ9世（1774～1796） マイソール王国第21代王 在位1776～  
1796

洪景来（1780～1812） 洪景来の乱指揮者※画像なし



島津齊彬（1809～1858） 薩摩藩第11代藩主

洪秀全（1814～1864） 太平天国指導者

李景夏（1811～1891） 李氏朝鮮武臣※画像なし



金允植（1835～1922） 独立活動家



李完用（1856～1926）独立協会

ソン・ビョンジュン（1857～1925）一進会

原敬（1856～1921）第19代内閣総理大臣 任期1918～1921



羅喆（1864～1916）檀君教教祖

李範允（1863～1940）独立活動家※画像なし

徐載弼（1864～1951）独立協会

尹致昊（1865～1945）独立協会、万民共同会

・ 洪震（1877～1946）独立運動家





洪思翊（1888～1946）※画像なし

池青天（1888～1957） 独立活動家※画像なし

金佐鎮（1888～1930）

呂運亨（1886～1947） 建国準備委員会

キム・ヒョンチュン（1888～1942）独立活動家



洪龍浩（1906～？）カトリック平壤代牧区司教

イ・ビョンチョル（1910～1987）サムスン・グループ創業者



ニコラス・チョン・ジンスク（1931） ローマ・カトリック教会枢機卿、第13代ソウル教  
区大司教※画像なし

李会昌（1935） 韓国大統領候補



李健熙（1942） 2代・4代目サムスン電子会長

宇宙人トバルカイン（チュクウ）の一族①～出羽、十和田、イスラエル王国、ダヴィデ朝、テーベ神官都市、太陽神ラー、太陽神アメン、ユダ王国、晋、趙、朴氏、ペギー王朝、能、伊賀忍者、ソ連国家保安委員会

---

宇宙人の正体と歴史（カインの血族）

・トバルカイン（4万年前）

チュクウのトバルカイン

ルハンガのトバルカイン

オロクンのトバルカイン

クウォスのトバルカイン

スバル人

・エラド（4万年前）

・マハラエル（4万年前）

※トバルカインは、最大最強の怪物テュポンが巨人アルキュオネウスと連合することで生まれた。テュポン+アルキュオネウス=テュポルキュオネ=トバルカインとなる。エラドの名の由来は巨人エウリュトスであり、マハラエルの由来はオリジナル人類マベエと巨人ブリアレオースの組み合わせである。

著名なコンタクティ、ビリー・マイヤーによると彼が知る宇宙人はエラ人、プリヤール人を名乗るそうだが、エラ人はエラド、プリヤール人はマハラエルのことで間違いないだろう。

トバルカインは4つの種族の合体部族であるため、後に4つの派閥にトバルカインは分離した。チュクウのトバルカイン、ルハンガのトバルカイン、オロクンのトバルカイン、クウォスのトバルカインである。ここに、気仙沼に住んでいたケシャンボ（河童）がルハンガのトバルカインと合体し、トバルカインに仲間入りした。彼らは自身をスバル人と呼んだ。ということで、トバルカインの種族は5つであるが、卓越した科学の力を継承しているのは、クウォスのトバルカイン、オロクンのトバルカイン、エラド、スバル人のみである。

●超科学の種族の国 五岳神の国



※画像は宇宙人がUFOを発明した国があった南極大陸。1万3千年前、地球は現在と地軸が異なり、北極点がグリーンランド付近にあった。そのため、アイスランド、アイルランド、ブリテン島、ユトランド半島、スカンジナビア半島は凍結し、厚い氷の下に眠っていた（学者は氷河期があったと勘違いしている）。

そして1万3千年前の日本列島は赤道付近にあり（ワニの化石が日本で発見されたのはそのせいである）、南極大陸の南アメリカ側はもっと北に位置し、大陸の半分ほどは完全凍結を免れ、森林や河川も存在したと考えられる。

超科学の種族（トバルカイン、エラド、マハラエル）は凍結を免れた地域に住みつき、科学の道に邁進し、物質を分子のレベルで操作する技術やUFOなどを開発した。南極には名前があった。超古代、南極は「五岳神（ウーユエ）」の国と呼ばれた。

五岳とは、中国の道教に登場する、南北中東西に位置する5つの聖山のことである。だが、それらはじつは南極の山々を指していた。東岳泰山とは標高3680mのペンサコラ山のことであり、南岳衡山とは標高4528mのカークパトリック山のことである。

中岳嵩山とは標高5140mのマッシュフ山のことであり、西岳華山は標高4187mのシドリ一山、北岳恒山は標高4191mのプラトー山のことである。東岳大帝とは、道教では冥府の王のことを指すだが、オリジナル人類ヴィディエは、東岳大帝（南極の王）と呼ばれた。

-----

### ●死神タナトスにとっての地獄～閻魔大王の裁きの時代



※写真は宇宙人（科学の種族トバルカイン）が搭乗する白銀色に光るフェイクプレーン（輪郭はなぜかぼやけており、双眼鏡で見てもはっきりしない）。常にテレポートしており、通常は急に

目の前に出現する。目の前で消えることもあるが、これは「そこから離れろ」という意味であり、消えるのを見ることが出来るのは農薬汚染度の高い地域を歩いている時に限られている。



※画像は職務中の閻魔大王。科学の種族は、知能を悪に用いる者をできそこないと認定し、UFOで火星送りにしていた。冥界の巨山と呼ばれた「羅ホウ山」とは、火星の火山であり、太陽系でもっとも巨大な火山、標高2万7千mのオリンポス山のことを指している。中国神話で冥界の神々と呼ばれた人々は、できそこないを裁いていた種族のことであり、「十王」と呼ばれた。地球上の、タナトス（できそこない）を嫌う、世界中の優れた王族が団結し、「十王」を結成していた。秦広王、楚江王、宋帝王、五官王、閻羅王、變成王、太山王、平等王、都市王、五道転輪王である。閻魔大王（ヤマ）は太陽神シャマシュのことであり、ホウ都大帝はルハンガとヴィディエ、太乙救苦天尊はヴィディエとチュクウのことである。

安倍総理と仲間たちのように平気でウソをつき、テッド・バンディ事件の真犯人ブッシュ元大統領、狂気の怪物モンサント社のように子どもを笑いながら殺すような反自然的な人々は、みな火星で裁かれ、死ぬまで強制労働を課せられた。ただ、優れた人々は罪悪感が強い。そのため、精神的な健康を理由に、火星の強制労働施設は長らく閉鎖されているようだ。

#### ・創造神テペウ（2万年前）

※チュクウのトバルカインは、雷雨の神チャク、創造主クグマッツが支配する古代マヤに基地を築いた。この時に「テペウ」が生まれた。テペウの名の由来はトバルカインである。トバルカイン＝テペウカイン＝テペウとなる。テペウは、創造主として崇められ、王として古代マヤを統治したと考えられる。彼らは、基本的に科学文明を放棄していた。マヤ人が、宇宙人の子孫を自称するのは、これがゆえである。



出羽国（1万3千年前）



※画像は「最終戦争ラグナロク」によって荒廃したネバダ砂漠（ミドガルド王国の成れの果て）である。この時、「ユグドラシルの大航海時代」に参加したチュクウのトバルカインは古代マヤを離れ、東北地方に入植して「出羽国」を建てた。出羽の名の由来はテペウである。テペウ＝テヘ＝出羽となる。

---

●ポスト大地殻変動の時代（科学の種族トバルカインの動向）



ターバイ王国（1万3千年前）※画像はサハラ砂漠

※ルハンガのトバルカインは超科学を継承し、現サハラ砂漠にターバイ王国を築いた。気仙沼の

河童（ケシャンボ）はルハンガのトバルカインと合体し、スバル人（サハラの語源）となった。カゾオバ+トバルカイン=ゾオバル=ソバル=スバルとなる。

ルハンガのトバルカインとスバル人（身長1 m）は現サハラで超科学の研究に勤しんだが、BC 32世紀頃「ソドムとゴモラ」の際、科学の悪用を阻止するためにテーバイ王国の街や科学設備を核分裂させて爆破した。



タップ・オ・ノス（1万3千年前）

※オロクンのトバルカインは超科学を継承し、大地殻変動後は凍結した南極（五岳神の国）を離れて古代スコットランドに移った。彼らはタップ・オ・ノスに住んだ。タップ・オ・ノス（Tap O' Noth）の意は「北のテーベ」である。

彼らは、超科学を追及していたが、BC 5千年頃のトロイア戦争+マートゥーレスの戦いの折、ダーナ神族の一族がタップ・オ・ノスに侵入したため、科学の悪用を阻止するために施設を核分裂で爆破した。その後、オロクンのトバルカインは出羽国を訪れ、竜飛岬（由来はタップ）周辺に国を作る。



- ・テワ族（1万3千年前）※画像はテワ族の少女
- ・ティワ族（1万3千年前）
- ・トワ族（1万3千年前）

※クウォスのトバルカインは超科学を放棄し、原始的な生活を望んでコロラド流域に移住した。テワ、ティワ、トワの名はトバルカインに由来している。彼らは自分たちをマヤ人の子孫、宇宙人の子孫だと信じている。



天孫氏（1万3千年前）※画像は小型人類ホモ・フローレシエンシス発掘現場

※スバル人の祖は、上記のようにオリジナル人類カゾオバであり、もともとは気仙沼に住んでいたケシャンボ（河童）である。しかし、ルハンガのトバルカインとの混血が進むと、身長1mのスバル人と普通身長（170～180cm）のスバル人の身長差が顕著になった。

普通身長のスバル人はそのままテーバイ王国に残ったが、身長1mのままのスバル人は新天地を求めてテーバイ王国を離れ、フローレス島に本拠地を据え、沖縄諸島をはじめ、バヌアツ諸島、ツバル諸島などの太平洋の島々を勢力圏に収めた。ホモ・フローレシエンシスの化石は、じつは埋葬されたスバル人の遺骨だと考えられる。

スバル人と妖怪キジムナーは祖を同じくする家族である。両者はオリジナル人類カゾオバの子孫であるため、沖縄では交流があったようだ。ところで、沖縄の歴史書には伝説の天孫氏が登場する。彼ら自身の正体や王国の歴史、王の系譜は不明であり、国の様子さえ詳らかでないが、謎に包まれた天孫氏の王朝とは、妖怪キジムナーと小型宇宙人の王国だったのではないかと考えられる。





女神エリウ（1万2千年前）※画像はエリウ

※エラドは大地殻変動が起きると、超科学の継承を決意し、凍りついた南極（五岳神の国）からマハラエルと共に古代アイルランドに移住した。エリウの名の由来はエラドである。



- ・ 戦闘の女神マッハ（1万2千年前）※画像は戦闘の女神マッハ
- ・ 魔神バロール（1万2千年前）

※マハラエルは大地殻変動が起きると、超科学の継承を決意し、凍りついた南極（五岳神の国）からエラドと共に古代アイルランドに移住した。マッハ、バロールの名の由来はマハラエルである。

-----

●真のイスラエル王国の時代（宇宙人の古代台湾統治時代）

- ・ルカイ族（クウォスのトバルカイン）
- ・ツォウ族（ゼウスの一族）
- ・サイシャット族（ゼウスの一族）
- ・タオ族（エラド）
- ・セデック族（マハラエル）
- ・クーロン族（チュクウのトバルカイン+ルハンガのトバルカイン）
- ・タオカス族（エラド+クウォスのトバルカイン）
- ・パゼツヘ族（ルハンガ+スバル人）
- ・アリクン族（オロクンのトバルカイン）
- ・ロア族（マハラエル）
- ・シラヤ族（スバル人+ルハンガのトバルカイン）



※画像は台湾の絶景。真のイスラエル王国とは、葦原中津国（天草諸島～八代湾）と高天原（台湾）による連邦国家だった。古代台湾はもともとオリジナル人類ニャメ（アミ族）の領土であり、日本神話で見られる天津神の故郷でもある。

BC 35 世紀頃、上記の宇宙人（超科学の種族）たちが集合し、最初的人类エスが築いた葦原中津国と連合してイスラエル（台湾、沖縄諸島、九州）を統治していた。



ユダ（BC 35 世紀頃） ペレツ父

※以前、ユダの名の由来はエウドラーと考えていたが、「ルツ記」の場合は十和田が由来だと考えられる。十和田＝とあだ＝あだ＝ユダとなる。つまり、ユダとは縄文人の顔をした十和田や出羽国の首長だった。以下、ユダの子たちは縄文時代の十和田・津軽・出羽の首長を代々務めたと考えられる。

「ルツ記」に記された物語は、時期的には「モーゼスの大移動時代」前後、BC 35世紀頃から始まったと考えられる。舞台は、現イスラエル周辺ではなく、縄文時代の十和田・津軽・出羽、古代チベットである。

### ●十和田の縄文人首長（歴代ユダの系統）

- ・ペレツ（BC 35世紀頃）
- ・ヘツロン（BC 35世紀頃）
- ・ラム（BC 35世紀頃）
- ・アミナダブ（BC 35世紀頃）
- ・ナフション（BC 35世紀頃）
- ・サルマ（BC 35世紀頃）
- ・ボアズ（BC 35世紀頃）
- ・オベデ（BC 35世紀頃）
- ・エッサイ（BC 35世紀頃）



ダヴィデ（BC 35世紀頃） イスラエル王国第2代王 在位BC 35世紀頃

※古代日本は、同時期にイスラエル王国、エジプト王国と呼ばれていた。ロア族（ブリアレオース）が統治していた高天原（台湾）は、最初の人類エスが統治していた葦原中津国と連合した。これにより、台湾～九州地域はイスラエルと呼ばれ、葦原中津国と十和田が連合することで九州～本州はエジプトと呼ばれた。エス（葦原）＋ブリアレオース（ロア族）＝エスリアレ＝イス

ラエルとなり、エス（葦原）＋トバルカイン＋ティカル（十和田）＝エスバテ＝エジプトとなる。

当時の出羽国は、トバルカイン（出羽）とデウカリオン（津軽）が共存し、両者は共同で偉大な先祖を祀る記念碑として巨大なピラミッドの試作品を十和田湖、青森（黒又山）に建造していた。彼らは偉大な先祖のために巨大な記念碑を築くことを人生の全てだと定めていた。

その後、「モーゼス（武蔵）の大移動時代」を機にモンゴルに渡った十和田の縄文人たちは、更に、モンゴルからチベットに移り、「ダヴィデ朝」を築いた。ダヴィデやトボット（チベット）の由来は十和田である。ダヴィデ王とは、十和田からチベットに入植した縄文人の首領のことである。モンゴル人やチベット人が、隣人である中国人よりも、遠く離れた日本人に似ているのはこのためである。



- ・ テーベ（BC 35世紀）
- ・ 太陽神ラー（BC 35世紀）
- ・ 太陽神アメン（BC 35世紀）
- ・ 善神デーヴァ（BC 35世紀）

※預言者ナタン一族に怒り心頭のオロクンのトバルカインはソロモン朝、ダヴィデ朝を核分裂させ、焼き尽くした。これが黙示録アルマゲドンである。しかし、オロクンのトバルカインはこの時に大きな罪悪感を抱えてしまったため、自身は超科学を放棄し、全てをチュクウのトバルカインに譲り渡し、アーリア人となった。

放射能で汚染されたモンゴル、チベットが居住に適さなくなると、「ヨシュアの大移動時代」に参加して南下したダヴィデ一族（チュクウのトバルカイン）はナイル流域に根を下ろし、ルクソール地方にテーベを築いた。テーベはサハラに存在した第一のテーバイ王国に続く、第二のテーバイ王国でもある。

ダヴィデ一族は最初に太陽神ラーを祀り、次に太陽神アメンを祀った。テーベに住んでいたダヴィデ一族は善神デーヴァとも呼ばれた。テーベの由来はダヴィデであり、ラーの由来はガラクサウラー（サウル）であり、アメンの由来はガラクサウラーとメネストーの組み合わせ（ソロモン）である。ダヴィデ＝ダーヴィ＝テーベとなり、ガラクサウラー＋メネストー＝メネ＝アメンとなる。

-----

## ●インダス文明の礎



- ・シバ王国（BC 32世紀頃）
- ・プント王国（BC 32世紀頃）

※BC 32世紀頃「ソドムとゴモラ」が発生すると、ルハンガのトバルカインは超科学を放棄する決意をし、現サハラを離れてパンジャブに根を下ろした。スバル人は超科学を継承しつつシバ王国を築き、ルハンガのトバルカインはプント王国を築いた。この2つの王国は連合体だったため、パンジャブの由来となった。プント+シバ=プンシヴァ=パンジャブとなる。

テーベのダヴィデの一族はこの時にパンジャブに赴いて、シバ王国、プント王国を築いた兄弟ルハンガのトバルカインとスバル人を援助した。この時にいわゆる「インダス文明」が始まり、同時に、テーベのダヴィデの一族は善神デーヴァと呼ばれた。以下がインダス文明を築き、善神デーヴァと呼ばれたエジプト第11王朝のファラオたちである。

## ●インダス文明の王（エジプト第11王朝、第13王朝、第18王朝歴代ファラオ）

- ・メンチュヘテプ1世 エジプト第11王朝初代王 在位?~BC 2134
- ・アンテフ1世 エジプト第11王朝第2代王 在位BC2134~BC 2117
- ・アンテフ2世 エジプト第11王朝第3代王 在位BC 2117~BC2069
- ・アンテフ3世 エジプト第11王朝第4代王 在位BC2069~BC 2060
- ・メンチュヘテプ2世 エジプト第11王朝第5代王 在位BC2060~BC 2010
- ・メンチュヘテプ3世 エジプト第11王朝第6代王 在位BC2010~BC 1998
- ・メンチュヘテプ4世 エジプト第11王朝第7代王 在位BC1998~BC 1991
  
- ・セベクヘテプ1世 (?~BC 1800) エジプト第13王朝初代王 在位BC 1803~BC 1800
- ・セネブエフ (?~BC 1796) エジプト第13王朝第2代王 在位BC 1800~BC 1796

796

- ・アメンエムハト5世 (?~BC1793) エジプト第13王朝第3代王 在位BC1796~BC1793
- ・アメンエムハト6世 (?~BC1785) エジプト第13王朝ファラオ 在位BC1788~BC1785
- ・セベクヘテプ2世 (?~BC1750頃) エジプト第13王朝ファラオ 在位BC1750頃
- ・ホル (?~BC1760頃) エジプト第13王朝ファラオ 在位BC1760頃
- ・アメンエムハト7世 (?~BC1770頃) エジプト第13王朝ファラオ 在位BC1770頃
- ・ウハエフ (?~BC1757) エジプト第13王朝ファラオ 在位?~BC1757
- ・ケンジェル (生没年不詳) エジプト第13王朝ファラオ 在位不明
- ・アンテフ4世 (?~BC1750頃) エジプト第13王朝ファラオ 在位BC1750頃
- ・セベクヘテプ3世 (?~BC1741) エジプト第13王朝ファラオ 在位BC1745~BC1741
- ・ネフェルヘテプ1世 (?~BC1730) エジプト第13王朝ファラオ 在位BC1741~BC1730
- ・セベクヘテプ4世 (?~BC1720) エジプト第13王朝ファラオ 在位BC1730~BC1720
- ・アイ (?~BC1677) エジプト第13王朝ファラオ 在位BC1700~BC1677
  
- ・イアフメス1世 (?~BC1546) エジプト第18王朝初代王 在位BC1570~BC1546
- ・アメンヘテプ1世 (?~BC1524) エジプト第18王朝第2代王 在位BC1551~BC1524
- ・トトメス1世 (?~BC1518) エジプト第18王朝第3代王 在位BC1524~BC1518
- ・トトメス2世 (?~BC1504) エジプト第18王朝第4代王 在位BC1518~1504
- ・ハトシェプスト (?~BC1483) エジプト第18王朝第5代王 在位BC1498~BC1483
- ・トトメス3世 (?~BC1450) エジプト第18王朝第6代王 在位BC1504年~BC1450
- ・アメンヘテプ2世 (?~BC1419) エジプト第18王朝第7代王 在位BC1453~BC1419
- ・トトメス4世 (?~BC1386) エジプト第18王朝第8代王 在位BC1419~1386

・アメンヘテプ3世 (?~BC1349) エジプト第18王朝第9代王 在位BC1386~BC1349

・ホルエムヘブ (?~BC1293) エジプト第18王朝第14代王 在位BC1321~BC1293

※エジプト第18王朝 (BC1293) とアメン大司祭国家 (BC1080) の間にマハーバーラタ戦争が起きた。マハーバーラタ戦争では、アラビア半島、シナイ半島、パンジャブが核分裂で砂漠化した。テーベの都市も核分裂で消滅し、砂漠化したと考えられる。これを機に、超科学の放棄を決意したダヴィデの一族 (チュクウのトバルカイン) はテーベに残った。

・ヘムネチェルテピエンアメン・ヘリホル (?~BC1074) 初代アメン大司祭 在位BC1080~BC1074

・ピアンキ (?~BC1070) 第2代アメン大司祭 在位BC1074~BC1070

・カーケペルラー・セテプエンアメン・パネジェム1世 (?~BC1032) 第3代アメン大司祭 在位BC1070~BC1032

・マサハルタ (?~BC1046) 第4代アメン大司祭 在位BC1054~BC1046

・ヘムネチェルテピエンアメン・メンケペルラー (?~BC992) 第5代アメン大司祭 在位BC1045~BC992

・スメンデス2世 (?~BC990) 第6代アメン大司祭 在位BC992~BC990

カーケペルラー・セテプエンアメン・パネジェム2世 (?~BC969) 第7代アメン大司祭 在位BC990~BC969

唐叔虞 (生没年不詳) 晋初代王 在位不明

※アメン大司祭は春秋戦国時代の中国に進出して晋 (ジン) を建てた。ジンの由来はシナイだと考えられる。

プスセンネス3世 (?~BC945) 第8代アメン大司祭 在位BC969~BC945

ヤロブアム1世 (?~BC910) 北イスラエル王国初代王 在位BC931~BC910

※アメン大司祭国家はタニス朝と協力関係にあったが、タニス朝がタナトス (アッシュール・ダン1世の一族) だと分かると、アメン大司祭たちはテーベを離れた。彼らは、アッシュール・ダン1世の一族レハブアムがシェションク1世に排除された現イスラエルに移住し、北イスラエル王国を建てた。アメン大司祭国家最後のファラオ、プスセンネス3世がそのままヤロブアム1世に変身して北イスラエル初代王に即位した。

アビヤム (?~BC910) ユダ王国第2代王 在位BC913~BC910

アサ (?～BC 873) ユダ王国第3代王 在位BC 913～BC 873

ナダブ (?～BC 900) 北イスラエル王国第2代王 在位BC 901～BC 900

※アビヤムはアサに変身してユダ王国の正常化を試み、一方、ナダブに変身して北イスラエル王国の正常化を試みた。ナダブが北イスラエルにかかりっきりの時、ユダ王国はアッシュール・ダン1世の一族がため、荒んだ。

レイ侯 (?～BC 859) 晋第5代王 在位?～BC 859

ヨシャファト (?～BC 849) 在位BC 873～BC 849

※この時代から晋の王族がユダ王、イスラエル王を兼任し、タナトスが推し進める偶像崇拜の撤廃に苦慮している。偶像崇拜はできそこないが権威を得る方法でしかない。ホンモノに偶像は必要ない。

靖侯 (?～BC 841) 晋第40代王 在位BC 859～BC 841

ヨラム (?～BC 842) ユダ王国第5代王 在位BC 849～BC 842

ヨラム (?～BC 842) 北イスラエル第10代王 在位BC 851～BC 842

献侯 (?～BC 812) 晋第6代王 在位BC 823～BC 812

イエフ (?～BC 815) 北イスラエル第11代王 在位BC 842～BC 815

文侯 (?～BC 746) 晋第11代王 在位BC 781～BC 746

ウジャ (?～BC 742) ユダ王国第10代王 在位BC 783～BC 742

昭侯 (?～BC 739) 晋第12代王 在位BC 746～BC 739

ヨタム (?～BC 735) ユダ王国第11代王 在位BC 742～BC 735

鄂侯 (?～BC 718) 晋第14代王 在位BC 724～BC 718

アハズ (?～BC 715) ユダ王国第12代王 在位BC 735～BC 715





ヒゼキヤ (BC 740～BC 687) ユダ王国第13代王 在位BC 716～BC 687  
ギュゲス (?～BC 652) リディア王国初代王 在位BC 687～BC 652※画像なし  
武公 (?～BC 677) 晋第18代王 在位BC 678～677※画像なし

※ユダ王ヒゼキヤは、ユダ王マナセ (アッシュール・ダン1世の一族) を嫌悪し、ユダ王国を離れてリディア王国を建設した。ギュゲスの由来はギューゲースである。

文公 (?～BC 628) 晋第24代王 在位BC 636～BC 628  
アルデュス (?～BC 629) リディア王国第2代王 在位BC 678～BC 629

襄公 (?～BC 621) 晋第25代王 在位BC 628～BC 621  
趙夙 (生没年不詳) 趙初代王 在位不明  
サデュアッテス (?～BC 617) リディア王国第3代王 在位BC 629～BC 617

靈公 (?～BC 607) 晋第26代王 在位BC 620～BC 607  
成季 (生没年不詳) 趙第2代王 在位不明

成公 (?～BC 600) 晋第27代王 在位BC 607～BC 600  
宣子 (?～BC 597) 趙第3代王 在位?～BC 597

悼公 (?～BC 558) 晋第30代王 在位BC 573～BC 558  
アリユアッテス (?～BC 560) リディア王国第4代王 在位BC 619～BC 560  
ヒュスタスペス (?～BC 550) ダリウス1世父

文子 (?～BC 541) 趙第5代王 在位BC 583～BC 541  
クロイソス (?～BC 547) リディア王国第5代王 在位BC 560～BC 547



簡子 (?～BC 476) 趙第7代王 在位BC 516～BC 476※画像なし  
ダリウス1世 (BC 550～BC 486) ペルシア帝国初代皇帝 在位BC 522～BC 48

定公 (?～BC 475) 晋第34代王 在位BC 512～BC 475

クセルクセス1世 (?～BC 465) ペルシア帝国第2代皇帝 在位BC 486～BC 465

幽公 (?～BC 416) 晋第37代王 在位BC 434～BC 416

アルタクセルクセス1世 (?～BC 424) ペルシア帝国第3代皇帝 在位BC 464～BC 424

静公 (?～BC 349) 晋第40代王 在位BC 357～BC 349※画像なし

成侯 (?～BC 350) 趙第13代王 在位BC 374～BC 350

恵文王 (?～BC 266) 趙第16代王 在位BC 298～BC 266

フィレタイロス (?～BC 263) ペルガモン王国初代王 在位BC 282～BC 263※画像なし

※ユダ王の系譜はペルシア帝国の系譜を築き、晋の系譜はペルガモン王国の系譜を築いた。ペルガモンの名の由来はトバルカインとアメンの組み合わせである。トバルカイン+アメン=バルカメン=ペルガモンとなる。



アッタロス1世 (?～BC 197) ペルガモン王国第3代王 在位BC 241～BC 197

準王 (?～BC 195) 馬韓初代王 在位BC 220～BC 195※画像なし

※ペルガモン第3代王の時代に、アッタロス1世はアナトリア半島から朝鮮半島に移った。この時に朴氏、文氏が生まれた。※朴 (PARK)、文 (MOON) の由来はペルガモンである。ペルガモン=PARKMOON=PARK (朴)+MOON (文) となる。

エウメネス2世 (?～BC 159) ペルガモン王国第4代王 在位BC 197～BC 159

衛満 (?～BC 161) 衛氏朝鮮初代王 在位BC 194～BC 161

エウメネス3世 (?～BC129) ペルガモン王国第7代王 在位BC133～BC129  
氏名不詳 (?～BC129) 衛氏朝鮮第2代王 在位BC161～BC129  
ニャティ・ツェンポ (?～BC127頃) 吐蕃王朝初代王 在位BC127頃

※ペルガモン王エウメネス3世はアナトリア半島を支配しながら衛氏朝鮮の王を兼任し、ダヴィデ朝の土地現チベットに移住して吐蕃王朝初代王に即位した。この時に現在使用されているチベット(トゥボ)の名が生まれた。トゥボの由来はダヴィデである。

襄王 (?～BC58) 馬韓第7代王 在位BC73～BC58  
元王 (?～BC33) 馬韓第8代王 在位BC58～BC33  
稽王 (?～BC17) 馬韓第9代王 在位BC33～BC17  
赫居世居西干 (?～AD4) 新羅初代王 在位BC69～AD4

儒理尼師今 (?～57) 新羅第3代王 在位24～57  
拓跋毛(生没年不詳) 拓跋初代大人 在位不明

※朴氏政権の新羅王族は鮮卑が支配するモンゴルに移住して拓跋部を生んだ。拓跋(ツォボ)の由来は十和田である。十和田=ツォヴァダ=ツォボとなる。

拓跋鄰(生没年不詳) 拓跋第13代大人 在位不明  
ピューソウティ (?～242) パガン朝初代王 在位167～242

※拓跋第13代大人はピューソウティに変身してパガン朝を開いた。パガンの由来は朴(パク)と文(ムン)の組み合わせと考えられる。パク+ムン=パクン=パガンとなる。



拓跋詰汾 (?～220) 拓跋第14代大人 在位?～220 ※画像なし  
劉備玄德 (161～223) 蜀初代皇帝 在位221～223  
関羽 (160～220) ※画像なし  
張飛 (?～221) ※画像なし

※三国志の英雄、張飛と関羽の正体は劉備玄德であり、劉備玄德の正体は拓跋第14代大人だったと考えられる。拓跋詰汾は南遷したことで知られているが、この時に劉備に変身し、影武者に張飛、関羽を演じさせ、蜀を建てた。

蜀は拓跋部（チュウウのトバルカイン）が建てたが、魏は曹操（デウカリオンの一族ピラミッド派+熊襲武尊）が建て、呉は孫権（諸葛均+ルハンガのトバルカイン）が建てた。この3者が日本でヤマト王権の王を兼ねた。

### ●ヤマト王権の大王（魏呉蜀の歴代皇帝）

- ・曹丕（187～226） 魏初代皇帝 在位220～226
- ・曹叡（206～239） 魏第2代皇帝 在位226～239
- ・曹芳（232～274） 魏第3代皇帝 在位239～254
- ・曹髦（241～260） 魏第4代皇帝 在位254～260
- ・曹奂（246～302） 魏第5代皇帝 在位260～265
  
- ・孫権（182～252） 呉初代皇帝 在位222～252
- ・孫亮（243～260） 呉第2代皇帝 在位252～258
- ・孫休（235～264） 呉第3代皇帝 在位258～264
- ・孫皓（243～284） 呉第4代皇帝 在位264～280
  
- ・劉備（161～223） 蜀初代皇帝 在位221～223
- ・劉禪（207～271） 蜀第2代皇帝 在位223～263

---

### ●大和人の大航海時代

※魏呉蜀が滅ぶと、3つの王族は「大和人の大航海時代」を実施した。中国人、朝鮮人、日本人が一斉に太平洋を横断し、ユカタン半島を横切り、大西洋を北上してブリテン島に上陸した。中国人の子孫は、王氏、建氏を例にすると「キング」「カーペンター」を称した。

朝鮮人の子孫は、朴氏（パク）を例にすると、PARK、BERGから始まり、BERKIN、PERKINS、PARKSや、ユダヤ人の名として知られるBERGが付く名をたくさん生んだ。日本人の子孫はブリテン人のファーストネームを付け、さん付けで呼び合った。例としてジョンさん、ウィリアムさん、ロバートさんなどだが、これがジョンソン、ウィリアムソン、ロバートソンなどになった。また、この時代に中国語、朝鮮語、日本語などが英語に取り入れられた。

## ■日本語由来の英語

BOY (少年) = 坊や  
HOWL (吠える) = 吠える  
KILL (殺す) = 斬る  
KINKY (ヤバイ) = 禁忌  
LUCK (幸運) = 楽  
OI = おい  
DAMN (畜生、呪う) = ダメ  
BIMBO (売女) = 貧乏  
BOLLOCKS (クズ野郎) = ボロクソ  
TITS (乳) = 乳  
DUMB (間抜け) = ダメ  
DOOR (扉、戸) = 戸  
BUGGER (男色、獣姦、寄生虫、野郎) = バカ  
NOVEL (小説) = 述べる  
OK (了解) = 了解  
YES (了承など) = よし  
(CHALLENGER) GERなどのGER = 者(しゃ)

※OKの由来は本国でもいろいろ推測されているが、実際には日本語の「了解」が由来と考えられる。了解(りょうかい) = りおうかい = OK(オーカイ)となる。アメリカ英語のOKの発音はオーケイだが、イギリス英語のOKはオーカイと発音する。イギリス人スミス(島津氏)さんが九州に上陸すると、OKが「よか」に再度変化する。OK(オーカイ) = オカ = よかとなる。

## ■朝鮮語由来の英語

HURRY (急ぐ、急げ) = パリイ(急いで、早く)  
UN (否定) = アン、アニ(否定の意)  
WHY (なぜ?) = ウエ(なぜ?)  
WHAT (何?) = ボ(何?)  
GO (行く、行け) = カー(行こう、行け)  
YEAH (はい) = イエ(はい)  
SURE (了解) = チョア(良い、好き、了解などの意)  
TOO (~も) = ド(~も)  
BITCH (売女) = ビッチ(狂ってる)  
SICK (頭がおかしい) = セッキ(キチガイ)

※アメリカは「ワッ（ト）」と発音するが、イギリスでは「ウォッ（ト）」と発音する。ウォットは「ボ」の発音に似ている。朝鮮語の「パリカー（早く行け）」は「HURRY GO」と同じである。朝鮮語には明るくないのでこれくらいしか分からない。

## ■中国語由来の英語

K I N（親戚）＝親（キナ）

W A I T（待て）＝ウェイ（もしもし）

Y E S（了承など）＝ヨッシ

※中国語には明るくないのでこれくらいしか分からない。

-----

※蜀の王族は古代ウェールズに入植し、グウィネズ王国、ポーイス王国、ダイフェド王国などを建てたと考えられる。ダイフェドの由来はヤマトの人と考えられる。大和（だいわ）＋人＝だいわと＝ダイフェドとなる。ダイフェド王はしばらくの間、イングランドとアジアを往来し、パガン朝の王も兼任した。

**Anwn Ddu**（?～357） ダイフェド王国初代王 在位357

パイティンリ（?～344） パガン朝第4代王 在位324～344

**Ednyfed**（?～373） ダイフェド王国第2代王 在位373

Triffyn Farfog（?～385） ダイフェド王国第4代王 在位385

ティンリチャウン1世（?～387） パガン朝第5代王 在位344～387

**Clotri**（?～405） ダイフェド王国第3代王 在位405

チャウントゥイツ（?～412） パガン朝第6代王 在位387～412

**Aergol Lawhir**（?～515） ダイフェド王国第5代王 在位515

タラムンピャ（?～516） パガン朝第7代王 在位494～516

-----

サレ・ナクウェ（?～915） パガン朝第33代王 在位906～915

王建（847～918） 前蜀初代皇帝 在位907～918

※パガン王は、この頃から頻繁に中国で蜀の復活を試みている。

テインコ (?~931) パガン朝第34代王 在位915~931

王衍 (901~926) 前蜀第2代皇帝 在位918~925

孟知祥 (874~934) 後蜀初代皇帝 在位934

李順 (?~934) 李蜀初代皇帝 在位934

ニャウン・ウ・ソウラハン (?~964) パガン朝第35代王 在位931~964

孟昶 (919~965) 後蜀第2代皇帝 在位934~965

チーソ (?~992) パガン朝第36代王 在位986~992

王均 (?~1000) 大蜀初代皇帝 在位1000

アノーヤター (?~1077) 在位1044~1077

Gruffydd ap Rhydderch (?~1055) ウェールズ王 在位1047~1055

Gruffydd ap Llywelyn (?~1063) ウェールズ王 在位1055~1063

Maredudd ab Owain ab Edwin (?~1072) ウェールズ王 在位1063~1072

Rhys ab Owain (?~1078) ウェールズ王 在位1072~1078

※当時はノルマン人の征服時代であり、家族であるウェールズ人を救うためにパガン朝のアノーヤター王はイングランドにまで渡り、1人4役でウェールズ王を30年間兼任していたようだ。

ナラパティシードゥー (?~1210) パガン朝第45代王 在位1173~1210

呉曦 (?~1207) 蜀初代皇帝 在位1207

チョウスワー (?~1299) パガン朝第50代王 在位1287~1299

ワーレルー (?~1296) ペグー王朝初代王 在位1287~1296



●伊賀忍者の首領（アユタヤ朝+ペグー朝+ダホメ王国の歴代王）

ビンニャー・エー・ロー（?～1353） ペグー王朝第6代王 在位1331～1353

ラーマーティボーディー1世（?～1369） アユタヤ朝初代王 在位1350～1369

※アユタヤ朝初代王が伊賀国を築いた。伊賀の由来は偉大な先祖、諸葛（ジューガー）である。ジューガー＝ユガ＝伊賀となる。アユタヤの由来はオリジナル人類ヴィディエである。ヴィディエ＝ウィティエ＝アユタヤとなる。

ビンニャー・ウー（?～1385） ペグー王朝第7代王 在位1353～1385

観阿弥（1333～1384） 能の始祖

ラーメースワン（?～1370） アユタヤ朝第2代王 在位1369～1370

ボーロマラーチャーティラート1世（?～1388） アユタヤ朝第3代王 在位1370～1388



※画像は能の一場面。能の頃から芸能界は忍者・優性遺伝子ブリーダーと一心同体だったようだ。確かにゆっくりと動かす能のすり足は忍者のすり足に似ている。能楽師の修行は、そのまま忍者の修行と重なっていたのかもしれない。

インタララーチャー1世（?～1424） アユタヤ朝第7代王 在位1409～1424



ラーザーディリ (?~1423) ペグー王朝第8代王 在位1385~1423

ビンニャー・ダンマヤーザー (?~1426) ペグー王朝第9代王 在位1423~1426

ボーロマラーチャーティラート2世 () アユタヤ朝第8代王 在位1424~1448

世阿弥 (1363~1443) 観阿弥の子

ビンニャー・ラン1世 (?~1446) ペグー王朝第10代王 在位1426~1446

ビンニャー・ワーレルー (?~1450) ペグー王朝第11代王 在位1446~1450

ラッサダーティラートクマーン (?~1534) アユタヤ朝第13代王 在位1533~1534

タカーユッピ (?~1539) ペグー王朝第17代王 在位1526~1539※最後の王

※タウングー朝(タナトスの一族)に故郷を追われた最後のペグー王タカーユッピはおよそ100年かけて西アフリカに渡り、ダホメ王国を築いた。ダホメの由来はデーヴァとアメンである。デーヴァ+アメン=デヴァメン=デバメ=ダホメとなる。

ガニヘス (?~1620) ダホメ王国初代王 在位1600~1620

高坂甚内 (?~1613) 忍者

ダコドノウ (?~1645) ダホメ王国第2代王 在位1620~1645

百地丹波 (1556~1581) 伊賀流忍術の祖

服部正重 (1580~1652) 忍者・服部半蔵の次男

※百地丹波は織田信長の伊賀攻めで死亡したとされている。しかし、死んだことにして潜伏し、服部正重に化けていた可能性がある。或いは現ベナンに帰還してダホメ王としてベナンに君臨した。他にも著名な忍者として活躍したダホメ王もいたと考えられるが、ダホメ王と忍者双方の生年が不明のため全く分からない。

・ウェグバジャ (?~1685) ダホメ王国第3代王 在位1645~1685

・アカバ (?~1708) ダホメ王国第4代王 在位1685~1708

・アガジャ (?~1732) ダホメ王国第5代王 在位1708~1732

ボーロマラーチャーティラート3世 (?~1758) アユタヤ朝第34代王 在位1733~1758

タメイントー・ブツダケティ (?~1747) ペグー王朝初代王 在位1740~1747

ビンニャー・ダラ (?~1757) ペグー王朝第2代王 在位1747~1757

テグベソ (?~1774) ダホメ王国第6代王 在位1732~1774

※アユタヤ最後の王はペギー朝の再興を夢見てミャンマーに進出し、1人2役でペギー王を演じたが、コンバウン朝（タナトスの一族）の支配下に落ちた。その後、徳川吉宗（西本願寺門主良如の一族）がお庭番を創設すると、アユタヤの王族はお庭番にこぞって参加した。

お庭番は大奥も管理した。このお庭番が発展し、現代のキングメーカーとして優性遺伝子ブリーダー（仮称）となる。伊賀忍者時代から彼らは金次第で何でもやった。政治的な信条を持たない彼らは現在に於いても何も変わっていない。現在では世界中の芸能人を管理している（場合によっては政治家なども）。

### ●御庭番の首領（アユタヤ朝+ダホメ王国の歴代王）

- ・ボーロマラーチャーティラート4世（?~1758） アユタヤ朝第35代王 在位1758
- ・ボーロマラーチャー3世（?~1767） アユタヤ朝第36代王 在位1758~1767

※アユタヤ朝35代王、36代王はアユタヤ朝が滅ぶと、日本に移住してお庭番に収まった。その後は、歴代のダホメ王がお庭番の頭領を兼任した。黒人の卓越した身体能力は忍者の世界では重宝され、ダホメ王が忍者の頭領に易々と収まった。ゾマホン・ルフィン氏はその子孫と考えられる。

- ・クプリング（?~1789） ダホメ王国第7代王 在位1774~1789
- ・アゴングロ（?~1797） ダホメ王国第8代王 在位1789~1797
- ・アダンドザン（?~1818） ダホメ王国第9代王 在位1797~1818



- ・ゲゾ（?~1858） ダホメ王国第10代王 在位1818~1858

※ダホメの12人の国王の中で最も偉大な国王とされ、ダホメの全盛期を築き上げた。

- ・グレレ (?~1889) ダホメ王国第11代王 在位1856~1889
- ・ベハンジン (?~1894) ダホメ王国第12代王 在位1889~1894
- ・アゴリ・バボ (?~1900) ダホメ王国第13代王 在位1894~1900

※ダホメ王国が滅ぶと、ダホメの王族は日本に移住して優性遺伝子ブリーダーの要員となる。優性遺伝子ブリーダーは表向きには芸能リポーターを装っていることが多い。

-----

●KGB議長+ナイジェリア大統領 (優性遺伝子ブリーダーの頭領)



ンナムディ・アジキウエ (1904~96) 初代ナイジェリア大統領 任期1963~66※  
画像なし

イワン・セーロフ (1905~1990) 初代KGB議長 任期1954~1958

※初代ナイジェリア大統領アジキウエは最後のダホメ王の孫と考えられる。同じチュクウのトバルカインに属するスターリンがソビエト連邦を築いたため、ダホメの王族もロシアに移住してKGBを設立した。彼らはKGBとして働きながらナイジェリアを治めた。有能な芸能人、政治家を生むための組織・優性遺伝子ブリーダーの頭領も代々務めたと考えられる。



- ジャスティン・アホマデグベ（1917～2002） ベナン共和国暫定大統領
- ジョンソン・アグイイ＝イロンシ（1924～1966） 第2代ナイジェリア大統領※画像なし
- アレクサンドル・シェレーピン（1918～1994） 第2代KGB議長 任期1958～61  
※画像なし
- ウラジーミル・セミチャストヌイ（1924～01） 第3代KGB議長 任期1961～67※  
画像なし
- ヴィタリー・フェドルチュク（1918～2008） 第4代KGB議長 任期1982※画像なし
- ヴィクトル・チェブリコフ（1923～1999） 第5代KGB議長 任期1982～88※画  
像なし
- ウラジーミル・クリチュコフ（1924～2007） 第6代KGB議長 任期1988～199  
1

※第6代KGB議長クリチュコフはソ連8月クーデターを指揮したが、これはタナトスの一族（西本願寺門主寂如の一族＋西本願寺門主大谷光瑞の一族）とチュクウのトバルカインとの戦いであった。同時に、両者による優性遺伝子ブリーダーの主導権を巡る戦いでもあった。優性遺伝子ブリーダーの主導権を握ることで、タナトスは優れた人間を繁殖させ、全世界規模で管理し、家畜のように徴用することができるのだ。

- ムルタラ・ムハンマド（1938～1976） 第4代ナイジェリア大統領 任期1975～7  
6
- レオニード・シェバルシン（1935～2012） KGB議長臨時代行
- オルシェグン・オバサンジョ（1937） 第5、12代ナイジェリア大統領 任期1976～  
79、1999～2007

※ムハンマド大統領は、ビアフラ戦争を指揮したタナトスの一族（ズルー王族）ヤクブ・ゴウオン大統領をクーデターで破り、追放した。これは石油利権を賭けたタナトスの一族と東本願寺

門主大谷光勝の一族による芝居だったが、優性遺伝子ブリーダーの主導権争いでもあった。

宇宙人トバルカイン（チュクウ）の一族②～拓跋部、北魏、吐蕃、回鶻汗国、ヴァイキング、ノルマンディー公、キエフ公国、甲賀忍者、ヴィジャヤナガル王国、スフォルツァ家ミラノ公、ソビエト社会主義共和国連邦

---

静公（？～BC349） 晋第40代王 在位BC357～BC349

フィレタイロス（？～BC263） ペルガモン王国初代王 在位BC343～BC263

※ユダ王の系譜はペルシア帝国の系譜を築き、晋の系譜はペルガモン王国の系譜を築いた。ペルガモンの名の由来はトバルカインとアメンの組み合わせである。トバルカイン+アメン=バルカメン=ペルガモンとなる。



アッタロス1世（？～BC197） ペルガモン王国第3代王 在位BC241～BC197

準王（？～BC195） 馬韓初代王 在位BC220～BC195※画像なし

※ペルガモン第3代王の時代に、アッタロス1世はアナトリア半島から朝鮮半島に移った。この時に朴氏、文氏が生まれた。※朴（PARK）、文（MOON）の由来はペルガモンである。ペルガモン=PARKMOON=PARK（朴）+MOON（文）となる。

エウメネス2世（？～BC159） ペルガモン王国第4代王 在位BC197～BC159

衛満（？～BC161） 衛氏朝鮮初代王 在位BC194～BC161

エウメネス3世（？～BC129） ペルガモン王国第7代王 在位BC133～BC129

氏名不詳（？～BC129） 衛氏朝鮮第2代王 在位BC161～BC129

ニャティ・ツェンポ（？～BC127頃） 吐蕃王朝初代王 在位BC127頃

※ペルガモン王エウメネス3世はアナトリア半島を支配しながら衛氏朝鮮の王を兼任し、ダヴィデ朝の土地現チベットに移住して吐蕃王朝初代王に即位した。この時に現在使用されているチベット（トゥボ）の名が生まれた。トゥボの由来はダヴィデである。

襄王（？～BC58） 馬韓第7代王 在位BC73～BC58

元王 (?～BC33) 馬韓第8代王 在位BC58～BC33  
稽王 (?～BC17) 馬韓第9代王 在位BC33～BC17  
赫居世居西干 (?～AD4) 新羅初代王 在位BC69～AD4

儒理尼師今 (?～57) 新羅第3代王 在位24～57  
拓跋毛 (生没年不詳) 拓跋初代大人 在位不明

※朴氏政権の新羅王族は鮮卑が支配するモンゴルに移住して拓跋部を生んだ。拓跋(ツォボ)の由来は十和田である。十和田=ツォヴァダ=ツォボとなる。

- ・拓跋猗盧 (?～316) 代国初代皇帝 在位308～316
- ・拓跋什翼ケン (?～376) 代国第10代皇帝 在位338～376 ※北魏皇帝祖父
- ・拓跋珪 (?～409) 北魏初代皇帝 在位398～409
- ・元脩 (?～534) 北魏第14代皇帝・東魏初代皇帝 在位532～550

拓跋廓 (537～557) 西魏第3代皇帝 在位554～556  
仲寧徳烏 (生没年不詳) 吐蕃王朝第30代王 在位不明

-----  
●ヴァイキングの首領 (吐蕃王+回鶻可汗+スウェーデン王+キエフ大公)

- ・達日寧色 (?～618) 吐蕃王朝第31代王 在位579～618
- ・ナムリ・ソンツェン (?～629) 吐蕃王朝第32代王 在位618～629
- ・ソンツェン・ガンポ (?～650) 吐蕃王朝第33代王 在位630～650
- ・グンソン・グンツェン (?～650) 吐蕃王朝第34代王 在位638～650
- ・マンソン・マンツェン (?～676) 吐蕃王朝第35代王 在位650～676
- ・ティ・ドゥーソン (?～704) 吐蕃王朝第36代王 在位676～704

ティデ・ツグツェン (?～743) 吐蕃王朝第37代王 在位680～743

独解支 (?～695) 回鶻部君主 在位680～695

Ivar Vidfamne (?～695) ヴィドファムネ朝初代スウェーデン王 在位655～695

Valdar (生没年不詳) ヴィドファムネ朝スウェーデン王 在位695～?

Randver (?～715) ヴィドファムネ朝スウェーデン王 在位?～715

懐仁可汗 (?～747) 回鶻初代可汗 在位744～747

牟羽可汗 (?~779) 回鶻第3代可汗 在位759~779

Harald Hildetand (?~770) ヴィドファムネ朝スウェーデン王 在位715~770

ティソン・デツェン (?~797) 吐蕃王朝第38代王 在位755~797

ムネ・ツェンポ (?~798) 吐蕃王朝第39代王 在位797~798

ムルク・ツェンポ (?~798) 吐蕃王朝第40代王 在位798

奉誠可汗 (?~795) 回鶻第6代可汗 在位790~795

ティデ・ソンツェン (?~815) 吐蕃王朝第41代王 在位798~815

懐信可汗 (?~805) 回鶻第7代可汗 在位795~805

Sigurd Hring (?~804) ムンセー朝初代スウェーデン王 在位770~804

※ティデ・ソンツェンの時代、吐蕃王はバルト海に進出し、デーン人撃退のためにヴァイキングとして登場した。ヴァイキングの首長の名は歴史上知られていないが、吐蕃王（回鶻可汗、スウェーデン王）が代々のヴァイキングの首領を兼ねていたと考えられる。ヴァイキングの由来は「魏（ウェイ）の王（キング）」であり、ウイグルの名の由来は「魏（ウェイ）+グル」である。

ティツク・デツェン (?~836) 吐蕃王朝第42代王 在位815~836

彰信可汗 (?~839) 回鶻第12代可汗 在位832~839

ラン・ダルマ (?~842) 吐蕃王朝第43代王 在位836~842

氏名不明 (?~840) 回鶻第13代可汗 在位839~840



Eric Anundsson (?~882) ムンセー朝第10代スウェーデン王 在位?~882 ※画像なし

リューリク (830~879) ルーシ初代首長

アスコルド (?~882) キエフ大公



※リューリクの正体はスウェーデン王エリク・アヌンドソンだったため、彼が率いた軍団はスウェード人と呼ばれた。

**Björn Eriksson** (?~932) ムンセー朝第11代スウェーデン王 在位882~932

オレグ (?~922) キエフ大公 在位882~922

ロロ (?~925) 初代ノルマンディー公 在位911~925



※画像はヴァイキングシップ。デーン人（ダーナ神族の一族）を掃討するため、スウェーデン王ビヨルン・エリクソンはキエフ大公+ノルマンディー公として自身の海軍を指揮した。彼の船団はヴァイキングと呼ばれた。デーン人はヴァイキングの一派とされているが、ヴァイキング（ノルマン人、スウェード人、ワリアギ）はダヴィデの一族であり、デーン人はタナトス（ダーナ神族の一族）であるため、区別するべきだ。ワリアギの名の由来は「チュクウのトバルカイン」である。トバルカイン+チュクウ=バルユク=ワリアギとなる。

**Ring of Sweden** (?~940) ムンセー朝第12代スウェーデン王 在位932~940

イーゴリ1世 (?~945) リューリク朝初代キエフ大公 在位913~945

リシャール2世 (?~1026) 第4代ノルマンディー公 在位996~1026

ウラジーミル1世 (?~1015) 第4代キエフ大公 在位978~1015

スヴァトポルク1世 (?~1019) 第5代キエフ大公 在位1015~16、1018~19

ベータ1世 (?~) カーカティヤ朝初代王 在位1000~1030

ヤロスラフ1世 (?~) 第6代キエフ大公 在位1017、1019~1054

リシャール3世 (?~1027) 第5代ノルマンディー公 在位1026~1027

ロベール1世 (?~) 第6代ノルマンディー公 在位1027~1035



ロベール1世 (1000~1035) 第6代ノルマンディー公 在位1027~1035※画像なし

クヌート1世 (995~1035) クヌート帝国初代王 在位1016~1035

イジャスラフ1世 (?~1073) 第7代キエフ大公 在位1054~68、69~73、76~78※画像なし

スヴァトスラフ2世 (?~) 第9代キエフ大公 在位1073~1075※画像なし

プローラ1世 (?~1075) カーカティヤ朝第2代王 在位1030~1075※画像なし

※ノルマンディー公ロベール1世は、デンマーク王子クヌート1世に変身してデンマーク、ノルウェー、イングランドの王として北海帝国に君臨した。更に、35歳(或いは40歳)で死んだことにしてインドに移り、カーカティヤ朝を治め、同時にキエフで大公を2代務めた。



ギヨーム2世+ウィリアム1世 (?~1087) 第7代ノルマンディー公+イングランド王  
在位1035~1087

ステンキル (?~1066) ステンキル朝初代スウェーデン王 在位1060~1066※画像なし

エリク7世 (?~1067) ステンキル朝第2代スウェーデン王 在位1066~1067※画像なし

エリク8世 (?~1067) ステンキル朝第3代スウェーデン王 在位1066~1067※

画像なし

ハルステン (?~1070) ステンキル朝第4代スウェーデン王 在位1067~1070※

画像なし

ホーコン (?~1079) ステンキル朝第5代スウェーデン王 在位1070~1079※

画像なし

ブロット=スヴェン (?~1087) ステンキル朝第7代スウェーデン王 在位1084~1087※

画像なし

※ノルマン朝イングランド王ウィリアム1世(ギヨーム2世)はスウェーデンで1人7役をこなし、ノルマンディー、ノルマン朝イングランドを治めながらステンキル朝の王としてスウェーデンの民を正しく導いた。



ウィリアム2世(1060~1100) ノルマン朝第2代イングランド王 在位1087~1100

インゲ1世(?~1084) ステンキル朝第6代スウェーデン王 在位1079~1105※  
画像なし

ベータ2世(?~) カーカティヤ朝第3代王 在位1075~1110※画像なし

ヘンリー1世(1068~1135) ノルマン朝第3代イングランド王 在位1100~1135

マグヌス1世(?~1134) エストリズセン朝初代スウェーデン王 在位1125~1130

ウィリアム・アデルリン(1103~1120) イングランド王ヘンリー1世の子

スヴェルケル1世(?~1156) スヴェルケル朝初代スウェーデン王 在位1130~1156

プローラ2世(?~1158) カーカティヤ朝第4代王 在位1110~1158

※ホワイトシップで遭難の際、ウィリアム・アデリンは死亡したと伝えられるが、実際にはスウェーデンに向かい、スヴェルケル1世としてスウェーデン王に即位した。17歳で死んだとされるウィリアムはスウェーデン王として53歳まで生き、同時にカーカティヤ朝を治めた。

ルドラマ・デーヴィー (?~1262) カーカティヤ朝第7代王 在位1262~1296  
六角泰綱 (1213~1276) 六角氏始祖

※カカティヤ朝第7代王ルドラマ・デーヴィーは日本に進出して六角氏を生んだ。六角の由来は偉大な先祖リユーリクとカーカティヤの組み合わせである。リユーリク+カーカティヤ=リクカー=六角となる。また、六角氏は甲賀忍者の頭領でもある。甲賀の由来はカーカティヤである。

プラターパルドラ2世 (?~) カーカティヤ朝第9代王 在位1296~1326  
ハリハラ1世 (?~1356) ヴィジャヤナガル王国初代王 在位1336~1356

※カーカティヤ朝最後の王はヴィジャヤナガル王国を築き、初代王となった。以後、甲賀忍者の頭領は歴代のヴィジャヤナガル王が務めた。つまり、甲賀忍者の正体はインド人だった。一方、伊賀忍者の正体はタイ人(西アフリカ人)だった。



●甲賀忍者の首領(歴代のヴィジャヤナガル王)

- ・ブッカ1世 (?~1377) ヴィジャヤナガル王国第2代王 在位1356~1377
- ・ハリハラ2世 (?~1404) ヴィジャヤナガル王国第3代王 在位1377~1404
- ・ヴィルーパークシャ1世 (?~1405) ヴィジャヤナガル王国第4代王 在位1404~05
- ・ブッカ2世 (?~1406) ヴィジャヤナガル王国第5代王 在位1405~1406
- ・デーヴァラーヤ1世 (?~1422) ヴィジャヤナガル王国第6代王 在位1406~1422
- ・ブッカ3世 (?~1424) ヴィジャヤナガル王国第7代王 在位1422~1424
- ・デーヴァラーヤ2世 (?~1446) ヴィジャヤナガル王国第8代王 在位1424~1446

・デーヴァラーヤ3世 (?~1465) ヴィジャヤナガル王国第9代王 在位1446~1465

・ヴィルーパークシャ2世 (?~1485) ヴィジャヤナガル王国第10代王 在位1465~85

・プラウダラーヤ (?~1486) ヴィジャヤナガル王国第11代王 在位1485~1486

・サールヴァナラシンハ・デーヴァラーヤ (?~1491) ヴィジャヤナガル王国第12代王 在位1486~91

・インマディ・ナラシンハ・ラーヤ (?~1505) ヴィジャヤナガル王国第13代王 在位1491~05

・ヴィーラナラシンハラーヤ (?~1509) ヴィジャヤナガル王国第14代王 在位1505~09

・クリシュナデーヴァラーヤ (?~1529) ヴィジャヤナガル王国第15代王 在位1509~29

・アチュタデーヴァラーヤ (?~1542) ヴィジャヤナガル王国第16代王 在位1529~42

・ヴェンカタ1世 (?~1542) ヴィジャヤナガル王国第17代王 在位1542

・サダーシヴァラーヤ (?~1569) ヴィジャヤナガル王国第18代王 在位1542~1569

ティルマラデーヴァラーヤ (?~1572) ヴィジャヤナガル王国第19代王 在位1569~72

杉谷善住坊 (?~1573) 甲賀忍者

シュリーランガ1世 (?~1586) ヴィジャヤナガル王国第20代王 在位1572~1586

鵜飼孫六 (1502~1582) 甲賀忍者

・ヴェンカタ2世 (?~1614) ヴィジャヤナガル王国第21代王 在位1586~1614

・シュリーランガ2世 (?~1614) ヴィジャヤナガル王国第22代王 在位1614

・ジャッガラーヤ (?~1617) ヴィジャヤナガル王国第23代王 在位1614~1617

・ラーマデーヴァラーヤ (?~1630) ヴィジャヤナガル王国第24代王 在位1617~1630

- ・ヴェンカタ3世 (?~1642) ヴィジャヤナガル王国第25代王 在位1630~1642
- ・シュリーランガ3世 (?~1649) ヴィジャヤナガル王国第26代王 在位1642~1649

※ヴィジャヤナガル王国が滅ぶと、ヴィジャヤナガルの王族は日本に移住し、同じチュクウのトバルカインに属する伊賀忍者と同様に徳川幕府の御庭番を務めることになる。その後、甲賀隠者は伊賀忍者と共に優性遺伝子ブリーダーとして働くことになる。

-----

メクレンブルク朝初代スウェーデン王アルブレクトの子



- アルブレヒト5世 (1397~1423) メクレンブルク=シュヴェリーン公※画像なし
- フランチェスコ・スフォルツァ (1401~1466) スフォルツァ家初代ミラノ公 在位1450~1466
- カシム1世 (?~1490) アストラ・ハン国初代ハーン 在位1466~1490
- フランチェスコ2世スフォルツァ (?~1535) スフォルツァ家第10代ミラノ公 在位1521~1535
- カシム2世 (?~1532) アストラ・ハン国第6代ハーン 在位?~1532
- イスラーム1世ギレイ (?~1532) アストラ・ハン国第7代ハーン 在位1531~1532
- アククベク (?~1533) アストラ・ハン国第8代ハーン 在位1532~1533
- アブドゥル・ラフマン (?~1537) アストラ・ハン国第9代ハーン 在位1533~1537
- デルヴィシュ (?~1556) アストラ・ハン国第10代ハーン 在位1537~39、1554~56

イスカンドル・ハン (?~1583) シャイバーニー朝ブハラ・ハン国第10代ハーン 在位  
1561~1583

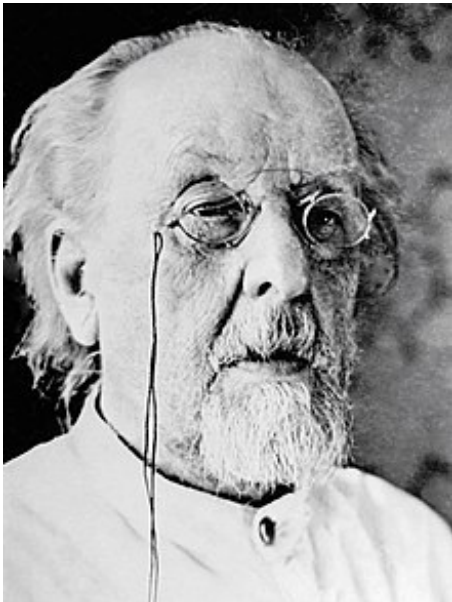
※シャイバーニー朝は王安石の一族(タナトス)の王朝だったが、アストラ・ハン国のデルヴィシュが1556年に死んだことにし、イスカンドル・ハンに変身して1561年からシャイバーニー朝第10代ハーンとしてブハラに遷都することでタナトスの系譜を断ち切った。

アブドゥッラー2世 (?~1598) シャイバーニー朝ブハラ・ハン国第11代ハーン 在位  
1583~1598

バーキー・ムハンマド (?~1605) ジャーン朝ブハラ・ハン国初代ハーン 在位1599  
~1605

サイイド・ムザッファルッディーン・ハーン (?~1885) マンギト朝第7代ブハラ・ハン  
国アミール 在位1860~85

David Leontyevich Bronstein (1847~1922) トロツキー父



アブドゥル・アハド・ハーン (?~1910) マンギト朝第8代ブハラ・ハン国アミール 在  
位1885~1910

コンスタンチン・ツィオルコフスキー (1857~1935) ロケット研究・物理学者

1903年に発表した彼の代表的な論文である『反作用利用装置による宇宙探検』の中で人工衛星や宇宙船の示唆、多段式ロケット、軌道エレベータなどの考案や、宇宙旅行の可能性としてロケットで宇宙に行けることを証明した業績から「宇宙旅行の父」と呼ばれる。

また1897年には「ロケット噴射による、増速度の合計と噴射速度と質量比の関係を示す式」である「ツィオルコフスキーの公式」を発表し、今日におけるロケット工学の基礎を築いたが生涯の大半はカルーガで孤独に暮らしていたため、存命中にツィオルコフスキーの業績が評価されることはなかった。コンスタンチン・ツィオルコフスキーwikiより



アーリム・ハーン（1880～1944） マンギト朝第9代ブハラ・ハン国アミール 在位1910～1920

レフ・トロツキー（1879～1940） ソビエト共和国革命軍事会議議長

ヨシフ・スターリン（1878～1958） ソビエト連邦第2代最高指導者 任期1924～1953

※一般的にトロツキーとスターリンは考え方が似ていると言われるが、2人はアーリム・ハーンの影武者として生まれた異母兄弟なのでそれも当然だろう。



ヤーコフ・スターリン（1906～？） スターリン長男※画像なし

セルゲイ・コロリョフ（1907～1966） スプートニク計画主導者

レオニード・ブレジネフ（1906～1982） ソビエト連邦第5代最高指導者 任期1964～1982

ニコライ・ポドゴルヌイ（1903～1983） ソビエト連邦最高会議幹部会議長※画像なし

イーゴリ・クルチャトフ（1903～1960） ソ連核物理学者、原子爆弾開発プロジェクト責任者

ゲオルギー・マレンコフ（1902～1988） ソビエト連邦第3代最高指導者 任期1953※画像なし



※宇宙人（科学の種族トバルカイン）の血を継ぐコロリョフやマレンコフらのおかげで、タナトスの一族に属するハリー・トルーマン大統領（西本願寺門主寂如の一族）の原子爆弾による世界制覇を防止することが出来た。



コンスタンティン・クザコフ（1911～1996） スターリン非嫡出子※画像なし

ドミトリー・ウスチノフ（1908～1984） ソビエト連邦国防大臣

コンスタンティン・チェルネンコ（1911～1985） ソビエト連邦第7代最高指導者 任

期1984～1985 ヴィクトル・グリシン（1914～1992） モスクワ共産党第一書記

※画像なし

ゲオルギー・フリョロフ（1913～1990） ソ連物理学者・原子爆弾開発提言

※ドミトリー・ウスチノフは半世紀にわたり、ソ連軍需産業の育成と運営にあたり、冷戦時代のソ連をアメリカと並ぶ軍事大国に押し上げるのに巨大な役割を果たした。



ワシーリー・スターリン（1921～1962） スターリン次男

グリゴリー・ロマノフ（1923～2008） ゴルバチョフ最大のライバル

※2人は良く似ているので同一人物だろう。



**Shahmurad** (1922~?) アーリム・ハーンの子※画像なし

**Artyom Sergeev** (1921~2008) スターリン養子

**アンドレイ・サハロフ** (1921~1989) ソ連水爆の父

次いで水爆開発に従事し、1953年8月12日に「ソ連初の水爆」の実験（RDS-6）を成功させた（実際にはこの時使われたのは原子爆弾の亜種であったとされるが、本当の意味でのソ連初の水爆となったRDS-37のプロジェクトにも携わっている）。この功績により、サハロフは32歳の若さでソ連科学アカデミーの正会員となる。 アンドレイ・サハロフ [wiki](#) より

宇宙人トバルカイン（ルハンガ）の一族③～サハラ砂漠、ソドムとゴモラ、プント王国、インダス文明、パーンダヴァ族、英雄アルジュナ、燕、ローマ帝国、諸葛孔明、サファヴィー朝、シク教国、バアス党

---



テーバイ王国（1万3千年前）※画像はサハラ砂漠

※ルハンガのトバルカインは超科学を継承し、現サハラ砂漠にテーバイ王国を築いた。気仙沼の河童（ケシャンボ）はルハンガのトバルカインと合体し、スバル人（サハラの語源）となった。カゾオバ+トバルカイン=ゾオバル=ソバル=スバルとなる。

-----

●真のイスラエル王国の時代（宇宙人の古代台湾統治時代）

- ・ルカイ族（クウォスのトバルカイン）
- ・ツォウ族（ゼウスの一族）
- ・サイシャット族（ゼウスの一族）
- ・タオ族（エラド）
- ・セデック族（マハラエル）
- ・クーロン族（チュクウのトバルカイン+ルハンガのトバルカイン）
- ・タオカス族（エラド+クウォスのトバルカイン）
- ・パゼッヘ族（ルハンガ+スバル人）
- ・アリクン族（オロクンのトバルカイン）
- ・ロア族（マハラエル）
- ・シラヤ族（スバル人+ルハンガのトバルカイン）



※画像は台湾の絶景。真のイスラエル王国とは、葦原中津国（天草諸島～八代湾）と高天原（台湾）による連邦国家だった。古代台湾はもともとオリジナル人類ニャメ（アミ族）の領土であり、日本神話で見られる天津神の故郷でもある。

BC 35 世紀頃、上記の宇宙人（超科学の種族）たちが集合し、最初の人類エスが築いた葦原中津国と連合してイスラエル（台湾、沖縄諸島、九州）を統治していた。

- ・ルーベン族（BC 35 世紀頃）
- ・レビ族（BC 35 世紀頃）
- ・ゼブルン族（BC 35 世紀頃）

※イスラエル王国時代、テーバイ王国（現サハラ砂漠）はイスラエル王国（葦原中津国と高天原）と同盟を組んだ。そのため、ルハンガのトバルカインはルーベン族・レビ族と呼ばれ、スバル人はゼブルン族と呼ばれた。ルーベン・レビの名の由来はルハンガであり、ゼブルンの由来はスバルである。



黄帝（BC 35 世紀頃）

※夏王朝治世下の古代中国～シベリアにかけては、冥界神エルリク（マハラエル）、蚩尤（スバル人）、神農（ゼウス+オロクンのトバルカイン）が勢力を振るっていた。ルハンガのトバルカインは黄帝（ファン）と呼ばれた。ファンの由来はルハンガである。

神農と夏王朝の力が弱くなると、預言者ナタンの一族に操られた蚩尤とミャオ族（マハラエル）は黄帝と戦火を交える。マハーバーラタ戦争のような超科学を駆使した戦争が起きたと考えられる。これが「タク鹿の戦い」である。

---

## ●インダス文明の礎



- ・シバ王国（BC 32世紀頃）
- ・プント王国（BC 32世紀頃）

※BC 32世紀頃、超科学の種族ルハンガのトバルカインとスバル人が築いたテーバイ王国（現サハラ砂漠）、アルパクシャデの名に因んだソドム国（チャド・スーダン地域）、クマルビの名に因んだゴモラ国（カッパドキア）にタナトスの一族が蔓延った。ルハンガのトバルカインとスバル人は、タナトスの一族をみな殺しにするためにタナトスやタナトスの街を核分裂させた。これが「ソドムとゴモラ」である。

これにより、北アフリカは完全な砂漠と化し、カッパドキア地域も砂漠化した。しかしかつては緑深く、豊かな河川に彩られた北アフリカのソドムとゴモラ後の惨状を目にし、心が痛んだルハンガのトバルカインは超科学を放棄する決意をし、現サハラを離れてパンジャブに根を下ろした。

一方、スバル人は超科学を継承しつつシバ王国を築き、ルハンガのトバルカインはプント王国を築いた。この2つの王国は連合体だったため、パンジャブの由来となった。プント+シバ=プンシヴァ=パンジャブとなる。



・雷神インドラ（BC 32世紀頃）



・破壊神シヴァ（BC 32世紀頃）

※超科学を継承していたスバル人は雷神インドラ、破壊神シヴァとも呼ばれた。インドラの名の由来はパンドラである。パンドラはヒンドウの由来でもある。

テーベ神官都市のダヴィデの一族はこの時にパンジャブに赴いて、シバ王国、プント王国を築いた兄弟ルハンガのトバルカインとスバル人を援助した。この時にいわゆる「インダス文明」が始まり、同時に、テーベ神官都市のダヴィデの一族は善神デーヴァと呼ばれた。以下がインダス文明を築き、善神デーヴァと呼ばれたエジプト第11王朝、第13王朝、第18王朝のファラオたちである。



●インダス文明の王（エジプト第11王朝、第13王朝、第18王朝の歴代ファラオ）

- ・メンチュヘテプ1世（?～BC 2134） エジプト第11王朝初代王 在位?～BC 2134
- ・アンテフ1世（?～BC 2134） エジプト第11王朝初代王 在位
- ・アンテフ2世（?～BC 2134） エジプト第11王朝初代王 在位
- ・アンテフ3世（?～BC 2134） エジプト第11王朝初代王 在位
- ・メンチュヘテプ2世（?～BC 2134） エジプト第11王朝初代王 在位
- ・メンチュヘテプ3世（?～BC 2134） エジプト第11王朝初代王 在位
- ・メンチュヘテプ4世（?～BC 2134） エジプト第11王朝初代王 在位
  
- ・セベクヘテプ1世（?～BC 1800） エジプト第13王朝初代王 在位BC 1803～BC 1800
- ・セネブエフ（?～BC 1796） エジプト第13王朝第2代王 在位BC 1800～BC 1796
- ・アメンエムハト5世（?～BC 1793） エジプト第13王朝第3代王 在位BC 1796～BC 1793
- ・アメンエムハト6世（?～BC 1785） エジプト第13王朝ファラオ 在位BC 1788～BC 1785
- ・セベクヘテプ2世（?～BC 1750頃） エジプト第13王朝ファラオ 在位BC 1750頃
- ・ホル（?～BC 1760頃） エジプト第13王朝ファラオ 在位BC 1760頃
- ・アメンエムハト7世（?～BC 1770頃） エジプト第13王朝ファラオ 在位BC 1770頃
- ・ウハエフ（?～BC 1757） エジプト第13王朝ファラオ 在位?～BC 1757
- ・ケンジェル（生没年不詳） エジプト第13王朝ファラオ 在位不明
- ・アンテフ4世（?～BC 1750頃） エジプト第13王朝ファラオ 在位BC 1750頃
- ・セベクヘテプ3世（?～BC 1741） エジプト第13王朝ファラオ 在位BC 1745～BC 1741

- ・ネフェルヘテプ1世 (?~BC 1730) エジプト第13王朝ファラオ 在位BC 1741~BC 1730
- ・セベクヘテプ4世 (?~BC 1720) エジプト第13王朝ファラオ 在位BC 1730~BC 1720
- ・アイ (?~BC 1677) エジプト第13王朝ファラオ 在位BC 1700~BC 1677
- ・イアフメス1世 (?~BC 1546) エジプト第18王朝初代王 在位BC 1570~BC 1546
- ・アメンヘテプ1世 (?~BC 1524) エジプト第18王朝第2代王 在位BC 1551~BC 1524
- ・トトメス1世 (?~BC 1518) エジプト第18王朝第3代王 在位BC 1524~BC 1518
- ・トトメス2世 (?~BC 1504) エジプト第18王朝第4代王 在位BC 1518~1504
- ・ハトシェプスト (?~BC 1483) エジプト第18王朝第5代王 在位BC 1498~BC 1483
- ・トトメス3世 (?~BC 1450) エジプト第18王朝第6代王 在位BC 1504年~BC 1450
- ・アメンヘテプ2世 (?~BC 1419) エジプト第18王朝第7代王 在位BC 1453~BC 1419
- ・トトメス4世 (?~BC 1386) エジプト第18王朝第8代王 在位BC 1419~1386
- ・アメンヘテプ3世 (?~BC 1349) エジプト第18王朝第9代王 在位BC 1386~BC 1349
- ・ホルエムヘブ (?~BC 1293) エジプト第18王朝第14代王 在位BC 1321~BC 1293



・パーンダヴァ王国 (BC 11世紀)



- ・アルジュナ王子（BC 11世紀）
- ・太陽神ヴィシュヌ（BC 11世紀）

※画像は「マハーバーラタ戦争」の図。公式には、伝説のシバ王国とプント王国は古代アフリカに存在したとされている。しかし、実際にはシバ王国とプント王国はパンジャブ地方に存在していたと考えられる。その証がパンジャブの名前である。

両者は同盟していたのか、パーンダヴァと呼ばれた。パーンダヴァの由来はパンジャブと同じで、プントとシバの組み合わせである。プント+シバ=プンシバ=パンジャブとなり、プント+シバ=プントバ=パーンダヴァとなる。

タナトスの一族（アッシュール・ダン1世の一族、ティールタンカラの一族、デウスの一族）がパーンダヴァ王国篡奪の機会を狙っていたが、テーベ神官都市に住む善神デーヴァ（エジプト第18王朝ファラオ）の一族がパーンダヴァ族の王子アルジュナに超科学で出来た武器を授け、いわゆる「マハーバーラタ戦争」が勃発した。

この時にヴィシュヌが生まれた。ヴィシュヌの由来はシヴァとアルジュナの組み合わせである。シヴァ+アルジュナ=ヴァジュナ=ヴィシュヌとなる。「マハーバーラタ戦争」では、善神デーヴァがタナトスとその街を核分裂させたため、巨大な核爆発が起きた。これにより、パンジャブ地方・アフガン（パーンダヴァ王国）、メソポタミア（ラテン王国）は砂漠地帯と化した。この後、ルハンガのトバルカインはスバル人と共に中国に移住して燕と楚を築いた。燕（エン）の由来はインドラであり、楚（シュ）の由来はスバルである。

### ●インダス文明の王（燕の歴代王）

- ・燕侯克（生没年不詳） 燕初代王 在位BC 1100年頃
- ・燕侯旨（生没年不詳） 燕第2代王 在位不明
- ・燕侯舞（生没年不詳） 燕第3代王 在位不明
- ・燕侯憲（生没年不詳） 燕第4代王 在位不明
- ・燕侯和（生没年不詳） 燕第5代王 在位不明
  
- ・恵侯（?～BC 827） 燕第10代王 在位BC 864～BC 827
- ・釐侯（?～BC 791） 燕第11代王 在位BC 826～BC 791
- ・頃侯（?～BC 767） 燕第12代王 在位BC 790～BC 767
- ・哀侯（?～BC 765） 燕第13代王 在位BC 766～BC 765
- ・鄭侯（?～BC 729） 燕第14代王 在位BC 764～BC 729
- ・繆侯（?～BC 711） 燕第15代王 在位BC 728～BC 711
- ・宣侯（?～BC 698） 燕第16代王 在位BC 710～BC 698
- ・桓侯（?～BC 691） 燕第17代王 在位BC 697～BC 691
- ・荘公（?～BC 658） 燕第18代王 在位BC 690～BC 658

- ・襄公 (? ~ BC 616) 燕第19代王 在位 BC 657 ~ BC 616
- ・桓公 (? ~ BC 602) 燕第20代王 在位 BC 617 ~ BC 602
- ・宣公 (? ~ BC 587) 燕第21代王 在位 BC 601 ~ BC 587
- ・昭公 (? ~ BC 574) 燕第22代王 在位 BC 586 ~ BC 574
- ・武公 (? ~ BC 555) 燕第23代王 在位 BC 573 ~ BC 555
- ・文公 (? ~ BC 549) 燕第24代王 在位 BC 554 ~ BC 549
- ・懿公 (? ~ BC 545) 燕第25代王 在位 BC 548 ~ BC 545
- ・恵公 (? ~ BC 536) 燕第26代王 在位 BC 544 ~ BC 536
- ・悼公 (? ~ BC 529) 燕第27代王 在位 BC 535 ~ BC 529
- ・共公 (? ~ BC 524) 燕第28代王 在位 BC 528 ~ BC 524
- ・平公 (? ~ BC 505) 燕第29代王 在位 BC 523 ~ BC 505

※燕初代王の燕侯克から燕第29代王の平公までがインダス文明の王を務めたと考えられる。

- ・桓公 (? ~ BC 362) 燕第35代王 在位 BC 372 ~ BC 362
- ・文公 (? ~ BC 333) 燕第36代王 在位 BC 361 ~ BC 333
- ・易王 (? ~ BC 321) 燕第37代王 在位 BC 332 ~ BC 321
- ・燕王カイ (? ~ BC 318) 燕第38代王 在位 BC 320 ~ BC 318
- ・子之 (? ~ BC 314) 燕第39代王 在位 BC 317 ~ BC 314
- ・昭王 (? ~ BC 279) 燕第40代王 在位 BC 312 ~ BC 279
- ・恵王 (? ~ BC 272) 燕第41代王 在位 BC 278 ~ BC 272
- ・武成王 (? ~ BC 258) 燕第42代王 在位 BC 271 ~ BC 258
- ・孝王 (? ~ BC 255) 燕第43代王 在位 BC 257 ~ BC 255
- ・燕王喜 (? ~ BC 222) 燕第44代王 在位 BC 254 ~ BC 222

※燕が秦によって滅ぶと、ルハンガのトバルカインはスバル人と共にインドに拠点を移し、シュンガ朝マウリヤ朝マガダ王国を開いた。シュンガの由来はスバルとルハンガの組み合わせと考えられる。スバル+ルハンガ=スnga=シュンガとなる。

- ・プシャミトラ (? ~ BC 149) シュンガ朝初代マウリヤ王 在位 BC 185 ~ BC 149
- ・アグニミトラ (? ~ BC 141) シュンガ朝第2代マウリヤ王 在位 BC 149 ~ BC 141
- ・ヴァースジェータ (? ~ BC 131) シュンガ朝第3代マウリヤ王 在位 BC 141 ~ BC 131
- ・ヴァースミトラ (? ~ BC 124) シュンガ朝第4代マウリヤ王 在位 BC 131 ~ BC 124
- ・アンドラカ (? ~ BC 122) シュンガ朝第5代マウリヤ王 在位 BC 124 ~ BC 122

- ・プリンダカ (?～BC 119) シュンガ朝第6代マウリヤ王 在位BC 122～BC 119
- ・ゴシャ (?～BC 108) シュンガ朝第7代マウリヤ王 在位BC 119～BC 108
- ・ヴァジュラミトラ (?～BC 94) シュンガ朝第8代マウリヤ王 在位BC 108～BC 94

バーガバードラ (?～BC 83) シュンガ朝第9代マウリヤ王 在位BC 94～BC 83  
 ガイウス・ユリウス・カエサル (BC 130～BC 85) カエサル父

※カエサルの父はインド・サカ王朝を築いた。その後、息子カエサルもインド・サカ王朝を統治した。



- デーヴァブーティ (?～BC 68) シュンガ朝第10代マウリヤ王 在位BC 83～BC 68
- マウエス (?～BC 60) インド・サカ王朝初代王 在位BC 90～BC 60
- ヴォノネス (?～BC 65) インド・サカ王朝第2代共同王 在位BC 75～BC 65
- スパラホレス (?～BC 65) インド・サカ王朝第2代共同王 在位BC 75～BC 65
- アゼス1世 (?～BC 35) インド・サカ王朝第5代共同王 在位BC 57～BC 35※画像なし
- アズィリセス (?～BC 35) インド・サカ王朝第5代共同王 在位BC 57～BC 35※画像なし
- ユリウス・カエサル (BC 100～BC 44) ローマ共和国将軍
- ティベリウス・クラウディウス・ネロ (BC 85～BC 33) ローマ皇帝ティベリウス父※画像なし

※カエサルは死んだことにして、死んだ後もインドでインド・サカ王朝を支配した。

-----

ユリウス・カエサル+ティベリウス・クラウディウス・ネロの子



アウグストゥス (BC 63 ~ AD 14) ローマ帝国初代皇帝 在位 BC 27 ~ AD 14

アゼス2世 (? ~ BC 12) インド・サカ王朝 在位 BC 35 ~ BC 12 ※画像なし

諸葛豊 (? ~ ?)

※アウグストゥスはカエサルの養子と言われているが、実子である。力のある男の場合、よその女に産ませた実子を養子として家に迎えることは多かった。



ティベリウス (BC 42 ~ AD 37) ローマ帝国第2代皇帝 在位 14 ~ 37

大ドルスス (BC 38 ~ AD 9) ローマ帝国軍人 ※画像なし

なお、イエス・キリストが世に出、刑死したときのローマ皇帝である。イエスの言葉である「カエサルのものはカエサルに、神のものは神に」(新約マタ 22:17-21、マコ12:14-17、ルカ 20:22-25)の「カエサル」とは、ティベリウスないし彼を含めた(皇帝の称号としての)カエサル (=ローマ皇帝) 一般のことである。wikiより

-----  
ローマ皇帝ティベリウス+大ドルススの子



小ドルスス (BC 14 ~ AD 23)



クラウディウス (BC 10 ~ AD 41) ローマ帝国第4代皇帝 在位41 ~ 54

母方の祖父が第2回三頭政治主催者の一人であるアントニウスであり、父方の祖母が初代皇帝アウグストゥスの後妻リウシアである。また、アウグストゥス帝その人も母方の祖母の弟、つまり大叔父にあたる。さらに、父である大ドルススの兄が第2代皇帝ティベリウスで、実弟が第3代皇帝カリグラの父ゲルマニクス、加えて最後の妻にして第5代皇帝ネロの母である小アグリッピナは姪に当たる。このように4親等以内に元首政初期のローマ国政の重要人物が集中するユリウス・クラウディウス家の一員に生まれている。しかし後述のように、身体的ハンデから一族中では疎まれ、長らく公務に関与することは出来なかった。wikiより

---

小ドルススの子



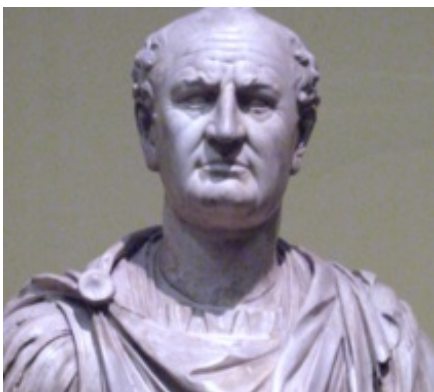
ティベリウス・ゲメッルス（AD 19～AD 38）※画像なし

カリグラ（AD 12～AD 37） ローマ帝国第3代皇帝 在位37～41

短い在位期間に、カリグラは壮大な建設事業と領土の拡大に力を注いだ。また最高権力者としての威信を高めることに努め、彼を打ち倒そうと繰り返される陰謀から自身の地位を懸命に守りつづけたが、元老院も関与した陰謀により、41年にプラエトリアニ（親衛隊）の一部将校らによって暗殺された。その治世を通じてローマ市民からは人気が高かったが、現存する後代の史料ではいずれも、カリグラは狂気じみた独裁者であり、残忍で浪費癖や性的倒錯の持ち主であったとしている。しかし現存する一次史料の数は少なく、カリグラの治世の実態には不明な点が多い。wikiより

※「カリグラは狂気じみた独裁者」「残忍」「浪費癖がひどい」「性的倒錯の持ち主」などの言葉はドルイド司祭による汚名着せである。

-----  
第4代ローマ皇帝クラウディウスの子



クラウディウス・ドルスス（AD 16～AD 20）※画像なし

ウェスパシアヌス（9～79） フラウィウス朝初代ローマ皇帝 在位69～79

ローマ帝国の皇帝。ユリウス・クラウディウス朝断絶後の四皇帝内乱の時代（68年6月 - 69年12月）に終止符を打ち、自らの血統に基づくフラウィウス朝を創始した。wikiより

---

ローマ皇帝ウェスパシアヌスの子



ティトゥス（39～81） フラウィウス朝第2代ローマ皇帝 在位79～81 ※画像なし

プブリウス・アエリウス・ハドリアヌス・アフェル（?～85） ※画像なし

ネルウァ（35～98） ネルウァ=アントニヌス朝初代ローマ皇帝 在位96～98 ※トラヤヌス父

フラウィウス朝断絶後の混乱の中で皇帝に即位したが、老齢で跡継ぎが望めなかった為に腹心であるトラヤヌスを王朝の後継者とした。以降、トラヤヌスの親族達により帝位は継承されていった為、新王朝成立の重要な契機を与えた存在でありながら歴代君主と血縁関係にないという特異な立場を持つ事になった。ネルウァwikiより



ドミティアヌス（51～96） フラウィウス朝第3代ローマ皇帝 在位81～96

トラヤヌス（53～117） ネルウァ=アントニヌス朝第2第ローマ皇帝 在位98～117

ネルウァ=アントニヌス朝の第2代皇帝である。文武の両面で辣腕を揮い、帝国内の公共施設の強化と領土の拡大に成功した。特に対外面ではダキア・パルティアで功績をあげ、ローマ帝国史上最大の版図を現出した。トラヤヌスwikiより

---

プブリウス・アエリウス・ハドリアヌス・アフェル（ローマ皇帝ティトゥス）の子



ハドリアヌス（76～138） ネルヴァ=アントニヌス朝第3第ローマ皇帝 在位117～138

マルクス・アンニウス・ウェルス（?～124） マルクス・アウレリウス父  
ナハパナ（?～124） 西クシャトラパ初代王 在位119～124

-----

マルクス・アンニウス・ウェルスローマ皇帝ハドリアヌスの子



マルクス・アウレリウス（121～180） ネルヴァ=アントニヌス朝第4第ローマ皇帝 在位161～180

諸葛珪（?～187）※画像なし

ルドラシムハ1世（?～188） 西クシャトラパ第7代王 在位175～188※画像なし

※マルクス・アウレリウスは諸葛氏の祖である。諸葛の名の由来はチュクウである。チュクウ=ジューグー=ジューガー（諸葛）となる。

-----



## ローマ皇帝マルクス・アウレリウスの子



コンモドゥス（161～192） ネルヴァ＝アントニヌス朝第7代ローマ皇帝 在位180～192

ジヴァダーマン（～199） 西クシャトラパ第6代王 在位197～199

諸葛玄（？～197）※画像なし

徐州琅邪郡陽都県（現在の山東省臨沂市沂南県）の諸葛氏の一族。兄は諸葛珪。甥は諸葛瑾・諸葛亮、族子は諸葛誕。諸葛一族の頭領的存在でもあった。wikiより



マルクス・アンニウス・ウェルス（162～169）※画像なし

ダーマジャダスリ2世（？～239） 西クシャトラパ第12代王 在位232～239※画像なし

諸葛瑾（174～241）

201年、諸葛瑾は歩騭、嚴畯と俱に呉中に遊び、共に声名を著わし、当時の英俊とされた。wikiより



ヴィジャヤセーナ (?～250) 西クシャトラパ第15代王 在位239～250

諸葛亮/諸葛孔明 (181～252)

諸葛均 (182～264) ※画像なし

諸葛誕 (?～258) ※画像なし

孫権 (182～252) 呉初代皇帝

後漢末の群雄の1人である劉備の挙兵に当初から付き従った人物で、その人並み外れた勇猛さは下述の通り中原に轟いた。その武勇は後世にも称えられ、小説『三国志演義』を始めとした創作作品でも多くの脚色を加えて取り上げられており、現在でも中国や日本を中心にその人柄を大いに親しまれている。 諸葛亮 wiki より

幼い時に父と生母の章氏が亡くなり、兄の諸葛亮と共に従父（叔父）の諸葛玄を頼った。やがて、その叔父も劉繇と争い、笮融が煽動した西城の住民反乱で戦死すると、諸葛亮と共に荊州の劉表を頼った。以降は兄と南陽郡の隆中で暮らしたが、後に諸葛亮が劉備に仕えたと、彼も劉備の家臣となった。長水校尉にまで昇進した。 諸葛均 wiki より

-----  
諸葛誕女の子

司馬覲 (256～290)

西晋の琅邪王司馬劭の子。母は諸葛太妃（諸葛誕の娘）か。妻は夏侯莊の娘。子に司馬睿（東晋の元帝）、東安王・司馬渾。諡号は恭王。太康4年（283年）に父が急死したために王位を継承する。この際に父の遺命に従って3名の弟に領土を分封してそれぞれを王とした。冗從僕射に任命されるが、太熙元年（290年）に35歳で急逝した。長男の司馬睿が後を継いだ。 wiki より

-----

## 司馬觀の子



司馬睿 (276～323) 東晋初代皇帝 在位317～322

司馬紹 (299～325) 東晋第2代皇帝 在位322～325

カアブ・イブン・ルーアヴィ (305～?) ハーシム家

※東晋皇帝、司馬紹はハーシム家の祖である。由来は中国語「ハオシマ (好司馬)」である。

司馬徳宗 (382～419) 東晋第10代皇帝 在位404～418

カリブ・イブン・ムラー (372～?) ハーシム家

・司馬徳文 (386～421) 東晋最後の皇帝 在位418～420

知的障害とされる同母兄の安帝と異なり、英明な資質があったと評される。劉裕が安帝を殺害して篡奪しようとしているのを察知し、常に安帝の傍にいたが、義熙4年(418年)、司馬徳文が不在の際に安帝は殺害された。その後、劉裕により皇帝として擁立されたが、これはもはや禅譲の布石としての傀儡に過ぎなかった。そして結局、元熙2年(420年)に劉裕に禅譲することを余儀無くされた。こうして東晋は滅亡し、新たに劉裕(高祖武帝)による宋王朝が成立したのである。この時、「晋氏(東晋)はとうに滅んでいたはずだった、何を恨むことがあろう」と言ったと『晋書』にはある。司馬徳文は宋によって零陵王に封じられたが、翌年殺害された。wikiより

司馬茂英 (393～439) 司馬徳文の子

クアジ・イブン・カリブ (400～480) ハーシム家

-----  
クアジ・イブン・カリブ(司馬茂英)の孫

- ・アブド・アル=ムッタリブ（497～578） マホメット祖父
- ・アブダラー・イブン・アブディル=ムッタリブ（546～579） マホメット父



ムハンマド・イブン=アブドゥッラーフ（570～632） イスラム教の祖

※ハーシム家からはマホメットが生まれた。成長したマホメットは、日頃から生贄の儀式に嫌悪を示していた。マホメットは商人として成功して財を蓄え、それから生贄の神アラーを篡奪し、正義の神アラーをイスラム教の唯一神として甦らせた。

アラビアには朝鮮半島から来たタナトスが君臨していたため、アラーは朝鮮語に由来していた。「処女の娘を生贄として捧げろ。さもないと皆殺しだ。アラ（わかったか）？」「アラー（わかりました）」ということである。「アラ」とは朝鮮語で「了解」を意味する。怒り心頭のマホメットは、アラビア半島に巢食っていたタナトスと信者たちを駆逐し、皆殺しにした。アラビア半島の生贄集団に関しては「悪い顔」を参照してください。

-----

- ・アリー・イブン・アビー・ターリブ（600～661） イスラーム教第4代正統カリフ、シーア派初代イマーム
- ・フサイン・イブン・アリー（625～680） イスラーム・シーア派第3代イマーム
- ・ジャアファル・サーディク（702～765） シーア派・イマーム派第6代イマーム

-----

ジャアファル・サーディクの子

イスマイール・イブン・ジャアファル（719～762） シーア派・イマーム派第7代イマーム

サッフーフ（722～754） アッバース朝初代カリフ 在位750～754



ムティー（914～974） アッバース朝第23代カリフ 在位946～974

グントラム金満公（920頃～973） ハプスブルグ家祖

※ハプスブルグの由来はアッバースとブルグ（城？）の組み合わせである。ラテン地方ではハプスブルグをアプスブルゴと呼ぶ。



カーイム（1001～1075） アッバース朝第26代カリフ 在位1031～1075※画像なし

トゥグリル・ベク（990～1063） セルジューク・トルコ帝国初代皇帝 在位1038～1063

アルベルト・アッツォ2世デステ（996～1097） エステ家祖

※後ウマイヤ朝末期の王アブド・アッラフマーン4世は、イベリア半島を脱出し、オリエント地方に根付いてトゥグリル・ベクを名乗った。ベクはセルジューク・トルコ帝国の初代王に即位した。

アフマド・サンジャル（1086～1157） セルジューク・トルコ帝国第8代皇帝 在位1118～1157

ムスタルシド（？～1135） アッバース朝第29代カリフ 在位1118～1135

ラーシド (?~1136) アッバース朝第30代カリフ 在位1135~1136

ムクタフィー (?~1160) アッバース朝第31代カリフ 在位1136~1160



ムスタンジド (1124~1170) アッバース朝第32代カリフ 在位1160~1170

※画像なし

ヴェルナー2世 (?~1167) ハプスブルグ伯



ザーヒル (1175~1226) アッバース朝第35代カリフ 在位1225~1226※画

像なし

ルドルフ2世 (?~1232) ハプスブルグ伯



ムスタンスィル（1192～1242） アッバース朝第36代カリフ 在位1226～1242  
※画像なし

アルベルト4世（1188～1239） ハプスブルグ伯



ルドルフ1世（1218～1291） ハプスブルグ朝初代神聖ローマ皇帝 在位1273～1291

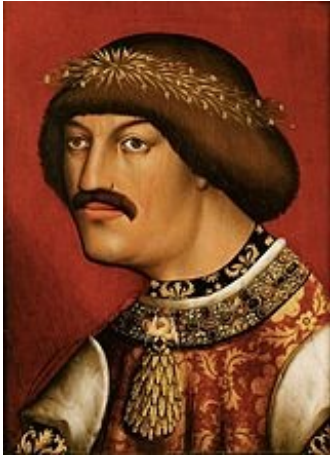
オビッツォ2世（?～1293） 初代フェラーラ・モデナ・レッジョ侯爵 在位1264～1293



ハーキム1世 (?~1302) カイロ・アッバース朝初代カリフ 在位1262~1302※  
画像なし

アルブレヒト1世 (1255~1308) 跳躍選挙時代第2代ハプスブルグ神聖ローマ皇帝  
在位1298~1308

サフィー・アッディーン (1252~1334) サファヴィー教団教主



ムウタディド2世 (?~1441) カイロ・アッバース朝第12代カリフ 在位1414~1  
441※画像なし

アルブレヒト2世 (1397~1439) ハプスブルグ朝初代神聖ローマ皇帝 在位1438  
~1439

ムタワッキル2世 (?~1497) カイロ・アッバース朝第16代カリフ 在位1479~1  
497

フリードリヒ3世 (1415~1493) ハプスブルグ朝第2代神聖ローマ皇帝 在位144  
0~1493

ムタワッキル3世 (?~1517) カイロ・アッバース朝第18代カリフ 在位1508~1  
517

マクシミリアン1世 (1459~1519) ハプスブルグ朝第3代神聖ローマ皇帝 在位14  
93~1519

シャイフ・ハイダル (1459~1488) イスマーイール1世父



アルフォンソ1世（1476～1534） 第3代フェラーラ・モデナ・レッジョ公爵 在位1505～1534

グル・ナーナク（1468～1539） シク教初代グル 在位1468～1539



イスマーイール1世（1487～1524） サファヴィー朝初代シャー 在位1501～1524

エルコレ2世（?～1559） 第4代フェラーラ・モデナ・レッジョ公爵 在位1534～1559

カール5世（1500～1556） ハプスブルグ朝第4代神聖ローマ皇帝 在位1519～1556

グル・アンガド（?～1552） 第2代シク教グル 在位1539～1552



グル・アマル・ダース（?～1574） 第3代シク教グル 在位1552～1574※画像なし

タフマースブ1世（1514～1576） サファヴィー朝第2代シャー 在位1524～1576

アルフォンソ2世（1533～1597） 第5代フェラーラ・モデナ・レッジョ公爵 在位1559～1597

イスマーイール2世（1537～1578） サファヴィー朝第3代シャー 在位1576～1577

グル・ラーム・ダース（?～1581） 第4代シク教グル 在位1574～1581

ムハンマド・ホダーバンデ（?～1588） サファヴィー朝第4代シャー 在位1578～1588



マティアス（1557～1619） ハプスブルグ朝第8代神聖ローマ皇帝 在位1612～1619

チャーザレ・デステ（1561～1628） 初代モデナ・レッジョ公爵 在位1597～1628

フランチェスコ1世（1610～1658） 第3代モデナ・レッジョ公爵 在位1629～1658

グル・ハルゴービンド（1595～1644） 第6代シク教グル 在位1606～1644

サフィー1世（1610～1642） サファヴィー朝第6代シャー 在位1629～1642

アルフォンソ4世（1634～1662） 第4代モデナ・レッジョ公爵 在位1658～1662

グル・ハル・ラーイ（?～1661） 第7代シク教グル 在位1644～1661

アッバース2世（1632～1666） サファヴィー朝第7代シャー 在位1642～1666



フランチェスコ2世（1660～1694） 第5代モデナ・レッジョ公爵 在位1662～1694※画像なし

グル・ゴビンド・シング（1666～1708） 第10代シク教グル 在位1675～1708

スルターン・フサイン（1668～1726） サファヴィー朝第9代シャー 在位1694～1722



タフマースブ2世（1704～1732） サファヴィー朝第10代シャー 在位1722～1732※画像なし

カリーム・ハーン（1705～1779） ザンド朝初代シャー 在位1750～1779

・アッバース3世（1732～1736） サファヴィー朝第11代シャー 在位1732～1736

・スライマーン2世（1714～1750） サファヴィー朝第12代シャー 在位1749～1750

イスマーイール3世（1733～1773） サファヴィー朝第13代シャー 在位1750～1773

シャー・ルフ (1734~1796) アフシャル朝第4、6代シャー 在位1748~1796



ルトフ・アリー・ハーン (1769~1794) ザンド朝第8代シャー 在位1789~1794※画像なし

フランチェスコ4世 (1779~1846) 第9代モデナ・レッジョ公爵 在位1814~1846

ランジート・シング (1780~1839) シク教国初代王 在位1801~1839



ルドルフ (1822) フランチェスコ4世の子

フランチェスコ5世 (1819~1875) 第10代モデナ・レッジョ公爵 在位1846~1859

ナウ・ニハール・シング (1821~1840) シク教国第3代王 在位1839~1840

-----  
シク教国第6代王ドゥリープ・シングの子



アルバート・ドゥリープ・シング (1879~1893) ※画像なし

アリ・スレイマン・アル=アサド (1875~1963) アサド家祖

-----

アウグステ・フォン・バイエルンの子 (オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ1世の孫)



ヨーゼフ・フランツ (1895~1957) ※画像なし

ラシッド・アリ・アッ=ガイラニ (1892~1965)



マティアス（1904～1905）※画像なし

ザキー・アル＝アルスズイー（1900～1968） 秘密結社アラブ・バース首領

---

エリーザベト・フランツィスカの子（フランツ・ヨーゼフ1世の曾孫）

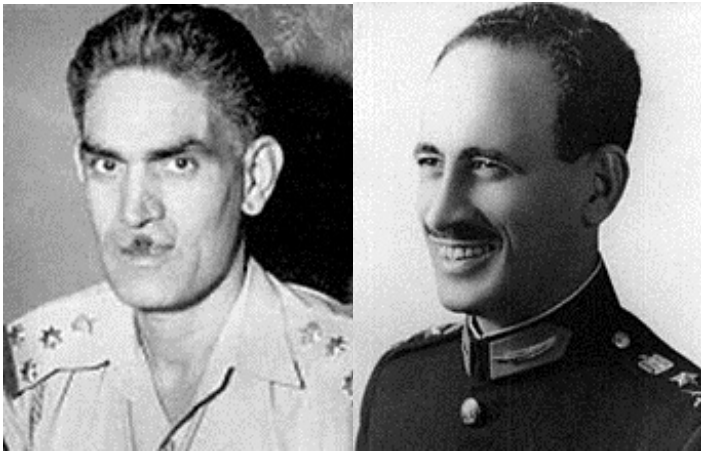


マリー・ヴァレリー（1913～2011）画像なし

ミシェル・アフラク（1910～1989） バース主義思想

サラフッディーン・アル＝ビータール（1912～1980） シリア首相

アクラム・アル＝ホーラーニー（1912～1996） アラブ連合共和国共同副大統領



クレメンティーネ（1914～1941）※画像なし

アブドルカリーム・カーシム（1914～1963） イラク共和国初代首相

アブドッラフマーン・アーリフ（1916～2007） イラク共和国第3代首相

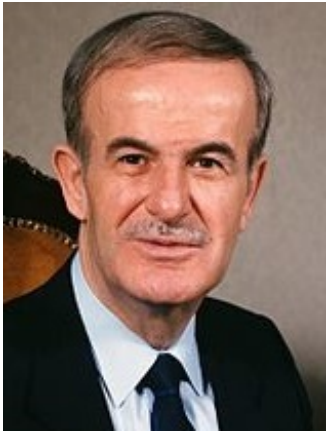


エリーザベト（1917～1979）画像なし

アブドッサラーム・アーリフ（1921～1966） イラク共和国第2代首相

※アブドッサラーム・アーリフは、ハーシム王政打倒クーデター（7月14日革命）の際にイラク軍将校として主導的な役割を果たした。東本願寺門主実如の一族ハーシム家を皆殺しにした。

-----  
フーベルト・ザルヴァートルの子（オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ1世曾孫）



フリードリヒ（1927～1999）※画像なし

ハフェズ・アル＝アサド（1930～2000） 第12代シリア共和国大統領 任期1971～2000

1967年の第3次中東戦争でゴラン高原を失うと、バアス党内ではジャディード党地域指導部書記長率いる急進派と穏健・現実主義派が対立し、アサド（当時国防相）がリーダーとなった穏健派が1969年2月28日の政変で実権を握った。ハフェズ・アル＝アサドwikiより



アンドレアス（1936）※画像なし

ムハンマド・フセイン・ファドラッラー（1935～2010） レバノンのシーア派イスラーム最高位権威法学者

サッダーム・フセイン（1937～2006） イラク共和国第三共和政第2代大統領 任期1979～2005





ヨーゼファ（1937）※画像なし

アリー・ハーメネイー（1939） 第3代イラン大統領 任期1981～87 第2代最高指導者 在位1989～現在

イラン・イスラム共和国の第2代最高指導者。第3代イラン・イスラム共和国大統領。日本ではハメネイ師と表記されることが多い。1979年のイラン・イスラム革命後、革命会議議員、国防次官、イスラム革命防衛隊司令官、大統領、最高国防会議議長を歴任した。1989年6月3日、イランの最高指導者に選出された。wikiより



マルクス（1946）※画像なし

モハンマド・ハータミー（1943） 第5代イラン大統領 任期1997～2005

経済政策的には統制経済派に属した。当時のイランではバーザール商人や高位ウラマーを支持基盤とし、イスラーム体制を厳格に維持しようとする自由経済派と、台頭する中間層や中低位ウラマーを支持基盤とし、文化開放を主張する統制経済派があった。前者はアリーアクバル・ナーテグヌーリーに代表される「テヘランの闘うウラマー協会」、後者はキャッルービーに代表される「テヘランの闘うウラマー集団」を組織し、ハータミーは「闘うウラマー集団」の創立者の一人である。wikiより



ミハエル（1949）※画像なし

ハサン・ロウハーニー（1948） 第7代イラン大統領 任期2013～現在

現イラン大統領（第7代）。現公益判別会議戦略研究センター長（1992年-）、現公益判別会議議員（1991年-）、現専門家会議議員（1999年-）。元国会副議長（4期、5期）、元国家安全保障最高評議会書記（1989年-2005年）、元核問題交渉責任者（2003年-2005年）。イラン政界にあって穏健派とされるハーシェミー・ラフサンジャーニー（第4代イラン大統領）の側近として知られる。wikiより

-----

ハフェズ・アル=アサドの子



バースィル・アル=アサド（1962～1994）

ハサン・ナスルッラーフ（1960） レバノン・イスラムの抵抗議長※画像なし



バッシュール・アル＝アサド（1965） 第13代シリア共和国大統領 任期2000～現在

2000年6月10日に父ハーフィズが死去すると翌日陸軍大将に昇進、軍最高司令官に任命され、6月18日にはバアス党書記長に就任。7月10日に信任を問う国民投票を実施し、7月17日に後継大統領に就任した。バッシュール・アル＝アサドwikiより

※東西本願寺は、アサド家の人々がダヴィデの一族の血筋ということを知っているため、一族の一部を暗殺し、メディアを利用してアサド政権を弾圧している。

宇宙人トバルカイン（オロクン）の一族④～桃源郷、仙人、ラテン王国、ヒッタイト帝国、シュメール都市国家ウルク、アーリア人、魯、孔子、東胡、天狗、匈奴、アラン人、西ゴート王国、ブルガリア帝国、大元帝国

---



タップ・オ・ノス（1万3千年前）

※オロクンのトバルカインは超科学を継承し、大地殻変動後は凍結した南極（五岳神の国）を離れて古代スコットランドに移った。彼らはタップ・オ・ノスに住んだ。タップ・オ・ノス（Tap O' Noth）の意は「北のテーベ」である。



※画像は竜飛岬。彼らは、超科学を追及していたが、BC 5千年頃のトロイア戦争+マートゥーレスの戦いの折、ダーナ神族の一族がタップ・オ・ノスに侵入したため、科学の悪用を阻止するために施設を核分裂で爆破した。その後、オロクンのトバルカインは出羽国を訪れ、竜飛岬（由来はタップ）周辺に国を作る。

-----

●真のイスラエル王国の時代（宇宙人の古代台湾統治時代）

・ルカイ族（クウォスのトバルカイン）

- ・ ツォウ族（ゼウスの一族）
- ・ サイシャット族（ゼウスの一族）
- ・ タオ族（エラド）
- ・ セデック族（マハラエル）
- ・ クーロン族（チュクウのトバルカイン+ルハンガのトバルカイン）
- ・ タオカス族（エラド+クウォスのトバルカイン）
- ・ パゼツヘ族（ルハンガ+スバル人）
- ・ アリクン族（オロクンのトバルカイン）
- ・ ロア族（マハラエル）
- ・ シラヤ族（スバル人+ルハンガのトバルカイン）



※画像は台湾の絶景。真のイスラエル王国とは、葦原中津国（天草諸島～八代湾）と高天原（台湾）による連邦国家だった。古代台湾はもともとオリジナル人類ニャメ（アミ族）の領土であり、日本神話で見られる天津神の故郷でもある。

BC 35 世紀頃、上記の宇宙人（超科学の種族）たちが集合し、最初の人類エスが築いた葦原中津国と連合してイスラエル（台湾、沖縄諸島、九州）を統治していた。



・ 神農（BC 35 世紀頃）

※オロクンのトバルカイン（仙人）は古代中国に夏王朝（キア）を築いたが、スイスに拠点を持っていたゼウスと連合した。彼らの連合は中国の神の名として現在に伝えられている。神農（シェンノン）である。神農の由来はシュシャン（スーサ）とカナン（アルキュオネウス）の組み合わせである。つまり、夏王朝は中国からスイスにまで続く巨大な王国だった。



※画像は仙人が棲む桃源郷。オロクンのトバルカインは超科学の力で中国の山奥深くに住んでいた彼らは「仙人」と呼ばれた。

黙示録アルマゲドンでは、預言者ナタンの一族や彼らが支配する街を核分裂で焼き尽くすが、巨大な罪悪感に襲われてしまい、超科学の放棄を決意し、チュクウのトバルカインに全てを託してアーリア人となる。アーリアの由来はアルキュオネウスである。



黙示録アルマゲドン※画像はタクラマカン砂漠の中にある火焰山

※オロクンのトバルカインは、預言者ナタンの一族が築いたソロモン朝やサウル朝の街を核分裂で消滅させ、全てを灰塵に帰した。しかし、それにより、タクラマカン砂漠やゴビ砂漠が生まれた。その後、巨大な罪悪感を覚えたオロクンのトバルカインは超科学の放棄を決意し、全てをチュクウのトバルカインに譲り渡した。

-----



- ・ラティヌス（BC 3 2 世紀頃）
- ・ラテン王国（BC 3 2 世紀頃）
- ・都市国家ウル（BC 3 2 世紀頃）

※画像はヴォルガ河である。伝説のラテン王国が存在したのはイタリアではない。ラテン王国の

範囲は広大であり、北はヴォルガ流域・ウラル山脈、西はバルカン半島、東はアルタイ山脈・オロクス（中国）、南はメソポタミア・インドにまで広がっていた。つまり、メソポタミア文明や黄河文明をも内包していた巨大王国だった。

ラティヌスの由来はエラドとアルキュオネウスの組み合わせである。エラド+アルキュオネウス＝ラドネウス＝ラティヌス＝ラテンとなる。オロクンのトバルカインは預言者ナタンの一族とその街を核分裂させて消滅させた当人だが、その「黙示録アルマゲドン」を機に、オロクンのトバルカインは巨大な罪悪感によって超科学を放棄し、ウラル山脈に移り住んでエラドと共にラティヌス（ラテン王国）を生んだ。

この時にオロクンのトバルカインがウラルを訪れた際、初めてヴォルガ河はヴォルガと呼ばれ、バルカン半島もバルカンと呼ばれた。ヴォルガ、バルカンの由来はトバルカインである。トバルカイン＝トヴァルガイン＝ヴォルガとなり、トバルカイン＝バルカイン＝バルカンとなる。

### ●アーリア人（ティールタンカラの一族）

- ・バーラタ族（BC 32世紀）
- ・トリツ族（BC 32世紀）
- ・マツヤ族（BC 32世紀）
- ・パルシュ族（BC 32世紀）

- ・クル族（BC 32世紀）

### ●アーリア人（デウスの一族）

- ・ダーサ族（BC 32世紀）

### ●アーリア人（オロクンのトバルカインの一族）

- ・アヌ族（BC 32世紀）
- ・ドルヒユ族（BC 32世紀）
- ・パニ族（BC 32世紀）
- ・バラーナ族（BC 32世紀）
- ・ブリグ族（BC 32世紀）
- ・プール族（BC 32世紀）
- ・アリナ族（BC 32世紀）

※アーリア人とはラテン王国の住人のことである。アーリアの由来はエリウである。エリウ＝エーリウ＝アーリアとなる。ブリグの由来はトバルカインであるが、他の部族は地名を冠している



。アヌ、パニの由来はヴァナラシであり、ドルヒユの由来はトロイアであり、バラナーナの由来はヴァラナシである。

ラテン王国は、タナトスの一族の国々に隣接していた。古代ヨーロッパにはカピラバストゥ・バルト（ティールタンカラの一族）、アイギュプトス・ハルシュタット（預言者ナタンの一族）、ダナイス（タナトスの一族）の王国があり、中央アジアには預言者ナタンの一族の国ミディアン（ミタンニ王国+大宛）、黒海にはカンボージャ・ガンダーラ（デウスの一族）、インドにはデカン（ティールタンカラの一族）、中国には殷（サトゥルヌスの一族）などの王国があった。

### ●太陽の女神アリンナの神官（ヒッタイト帝国の歴代王）

- ・パンバ（生没年不詳） ヒッタイト王 在位BC 22世紀初頭
- ・ピトハナ（生没年不詳） ヒッタイト王 在位BC 18世紀
- ・ピユシュティ（生没年不詳） ヒッタイト王 在位BC 17世紀
- ・アニッタ（生没年不詳） ヒッタイト王 在位BC 17世紀
- ・トウドハリヤ（生没年不詳） ヒッタイト王 在位BC 17世紀
- ・シャルマ（生没年不詳） ヒッタイト王 在位BC 1600
  
- ・ラバルナ1世（生没年不詳） ヒッタイト王 在位BC 1600頃
- ・ハットウシリ1世（?～BC 1566） ヒッタイト王 在位BC 1586～BC 1556
- ・ムルシリ1世（?～BC 1526） ヒッタイト王 在位BC 1556～BC 1526
- ・ハンティリ1世（?～BC 1496） ヒッタイト王 在位BC 1526～BC 1496
- ・ツイダント1世（?～BC 1486） ヒッタイト王 在位BC 1496～BC 1486
- ・アンムナ（?～BC 1466） ヒッタイト王 在位BC 1486～BC 1466
- ・フツィヤ1世（?～BC 1461） ヒッタイト王 在位BC 1466～BC 1461
- ・テリピヌ（生没年不詳） ヒッタイト王 在位BC 1460頃

※オロクンのトバルカインは、アリナ族（アーリア人）でもあったが、ヒッタイト帝国に太陽の女神アリンナの崇拝を確立した。上記のヒッタイト王が太陽の女神アリンナの神官を務めた。

---

### ●海の民

- ・アカイワシャ人（BC 13世紀） チュクウ+ウエシュシュ
- ・ウエシュシュ人（BC 13世紀） クウォス+シュシャン
- ・シェクレシュ人（BC 13世紀） チュクウ+ルハンガ+クウォス
- ・チェケル人（BC 13世紀） チュクウ+ルハンガ
- ・トゥルシア人（BC 13世紀） チュクウ+ルハンガ+シュシャン

・ルカ人（BC 13世紀） アルキオネウス



※画像は海の民のレリーフ。タナトスの一族に属する海の民（デニエン人、シェルデン人）以外の6種の海の民はトバルカインとゼウスの一族で構成されていた。海の民は、「クウォスのトバルカイン」に掲載されているルカイ族の男のような顔をしていたと考えられる。オロクンのトバルカインはルカ人と呼ばれた。

---

### ●仙人（魯歴代王）

※「黙示録アルマゲドン」の際、巨大な罪悪感のために超科学を自ら放棄したオロクンのトバルカインだったが、エラドと共にラテン王国を築くと、その時に再度、超科学の継承を決めた。中国に移住した彼らは再び超科学の力で仙人として生きた。仙人の長は、魯国の歴代王が務めた。

- ・伯禽（?～BC 997） 魯初代王 在位BC 1042～BC 997
- ・考公（?～BC 993） 魯第2代王 在位BC 996～BC 993
- ・煬公（?～BC 987） 魯第3代王 在位BC 992～BC 987
- ・幽公（?～BC 974） 魯第4代王 在位BC 987～BC 974
- ・魏公（?～BC 924） 魯第5代王 在位BC 973～BC 924
- ・厲公（?～BC 887） 魯第6代王 在位BC 923～BC 887
- ・獻公（?～BC 855） 魯第7代王 在位BC 886～BC 855
- ・真公（?～BC 826） 魯第8代王 在位BC 854～BC 826
- ・武公（?～BC 816） 魯第9代王 在位BC 825～BC 816
- ・懿公（?～BC 807） 魯第10代王 在位BC 815～BC 807

閔公（?～BC 660） 魯第17代王 在位BC 661～BC 660

氏名不明（生没年不詳） 東胡初代王 在位不明



※画像は鞍馬山僧正坊。閔公の時代、魯の王は内モンゴル東部～満州にかけて東胡（トングー）を築いた。以下の第18代王から第23代王までの魯王は東胡の王を兼任した。また、オロクンのトバルカインはスバル人と共に修験道を体系化した。修験道の由来は楚（シュ）と熊（キャン）の組み合わせである。

楚はスバル人とオロクンのトバルカインが築いた共同国家であり、スバル人の名から楚（シュ）と命名し、楚の歴代王はアルキュオネウス（オロクンのトバルカイン）を由来に熊（キャン）を名乗った。シュ+キャン=シュキャン=修験となる。

第18代王から第23代王までの魯王は東胡の王だけでなく、修験道の指導者をも兼ねた。東胡（トングー）の王でもあった魯の王は、天狗（てんぐ）と呼ばれた。

彼らが厳しい修行に励むのは、自分たちが科学力の悪用をしないためである。宇宙人は生物の思考を読み、宇宙の果てまで飛び出し、瞬間移動を行い、生物だろうと無生物だろうと、地球上のすべての物質を操ることが出来る。ともすれば、たまにドラえもんの道具を悪用するのび太のように、宇宙人も、好きな女を操ったり、イヤなやつを操ったりしたいと思う。しかし、そのような発想は相手だけでなく、自身にも破滅を招くことを、彼らはよく知っている。その弱い心を正し、精神を律するためには彼らは日本の山岳地帯で日夜厳しい修行に取り組んでいるのだ。

まず、彼らは山を女人禁制にした。復讐心の強い下界の人間が自分たちの血を継いだとき、冴えた頭で何をやらかすか分からない。復讐心と優れた頭脳の組み合わせは、確実に破滅を招くからだ。天狗は、ともすれば地球を破壊してしまいかねない凄まじい科学の力と、その科学の悪用を防止する、超科学の番人である。

- ・ 僖公（?～BC627） 魯第18代王 在位BC659～BC627
- ・ 文公（?～BC609） 魯第19代王 在位BC626～BC609
- ・ 宣公（?～BC591） 魯第20代王 在位BC608～BC591
- ・ 成公（?～BC573） 魯第21代王 在位BC590～BC573
- ・ 襄公（?～BC542） 魯第22代王 在位BC572～BC542

・昭公 (? ~ BC 510) 魯第23代王 在位 BC 541 ~ BC 510

## 像教行子孔師先



定公 (BC 556 ~ BC 495) 魯第24代王 在位 BC 509 ~ BC 495 ※画像なし

孔子 (BC 552 ~ BC 479) 儒教教祖

※魯の第24代王定公が孔子に変身し、儒教を説いた。以下の第25代王から第34代王までの魯王は、儒教の指導者を兼任することとなる。

・哀公 (? ~ BC 468) 魯第25代王 在位 BC 494 ~ BC 468

・悼公 (? ~ BC 437) 魯第26代王 在位 BC 467 ~ BC 437

・元公 (? ~ BC 416) 魯第27代王 在位 BC 436 ~ BC 416

・穆公 (? ~ BC 383) 魯第28代王 在位 BC 415 ~ BC 383

・共公 (? ~ BC 353) 魯第29代王 在位 BC 382 ~ BC 353

・康公 (? ~ BC 344) 魯第30代王 在位 BC 352 ~ BC 344

・景公 (? ~ BC 323) 魯第31代王 在位 BC 343 ~ BC 323

・平公 (? ~ BC 303) 魯第32代王 在位 BC 322 ~ BC 303

・文公 (? ~ BC 280) 魯第33代王 在位 BC 302 ~ BC 280

・頃公 (? ~ BC 256) 魯第34代王 在位 BC 279 ~ BC 256

---

・頭曼单于 (? ~ BC 209) 匈奴初代单于 在位 ? ~ BC 209

・冒頓单于 (? ~ BC 174) 匈奴第2代单于 在位 BC 209 ~ BC 174

・老上单于 (? ~ BC 160) 匈奴第3代单于 在位 BC 174 ~ BC 160

・軍臣单于 (? ~ BC 126) 匈奴第4代单于 在位 BC 160 ~ BC 126

・伊稚斜单于 (? ~ BC 114) 匈奴第5代单于 在位 BC 126 ~ BC 114

- ・烏維単于烏維（?～BC105） 匈奴第6代単于 在位BC114～BC105
- ・児単于（?～BC102） 匈奴第7代単于 在位BC105～BC102
- ・コウ犁湖単于（?～BC102） 匈奴第8代単于 在位BC102
- ・且テイ侯（?～BC96） 匈奴第9代単于 在位BC102～BC96
- ・狐鹿姑単于（?～BC85） 匈奴第10代単于 在位BC96～BC85
- ・壺衍テイ単于（?～BC68） 匈奴第11代単于 在位BC85～BC68
- ・虚閭權渠単于（?～BC60） 匈奴第12代単于 在位BC68～BC60
- ・握衍クテイ単于（?～BC58） 匈奴第13代単于 在位BC60～BC58

※魯が滅ぶと、オロクンのトバルカインはモンゴルに築いた基盤、東胡に移り、新規に「匈奴」を生んだ。匈奴（きょんぬ）の名の由来はアルキュオネウスである。アルキュオネウス＝キュオネ＝きょんぬ（匈奴）となる。

匈奴は分裂時代（西匈奴、東匈奴）を経て北匈奴、南匈奴に分かれるが、南匈奴はアラン人と呼ばれることになる。以下の南匈奴の歴代単于はアラン人の王をも兼ねていた。アラン人はやがてローマ皇帝の座に就く。

セウエルス朝（193～211）、軍人皇帝時代（238～284）、テトラルキア時代（311～337）、コンスタンティヌス朝（337～364）、ウォレンティアヌス朝（364～392）、テオドシウス朝（379～457）の約300年間に渡ってガリアのドルイド司祭の一族とローマ皇帝の座を争ってきた。そこから進展して西ゴート王国をイベリア半島に築くことになる。

#### ●アラン人の王（歴代南匈奴単于）

- ・醯落尸逐テイ単于（?～56） 南匈奴初代単于 在位48～56
- ・丘浮尤テイ単于（?～57） 南匈奴第2代単于 在位56～57
- ・伊伐於慮テイ単于（?～59） 南匈奴第3代単于 在位57～59
- ・醯僮尸逐侯テイ単于（?～63） 南匈奴第4代単于 在位59～63
- ・丘除車林テイ単于（?～63） 南匈奴第5代単于 在位63
  
- ・呼蘭若尸逐就単于（?～147） 南匈奴第14代単于 在位143～147
- ・伊陵尸逐就単于（?～172） 南匈奴第15代単于 在位147～172
- ・屠特若尸逐就単于（?～178） 南匈奴第16代単于 在位172～178
- ・呼徴単于（?～179） 南匈奴第17代単于 在位178～179
- ・羌渠単于（?～188） 南匈奴第18代単于 在位179～188



持至戸逐侯单于 (?~195) 南匈奴第19代单于 在位188~195 ※画像なし

セプティミウス・セウェルス (146~211) セウェルス朝初代ローマ皇帝 在位193~211



呼廚泉单于 (?~216) 南匈奴第20代单于 在位195~216 ※画像なし

カラカラ (186~217) セウェルス朝第2代ローマ皇帝 在位198~217



アルカディウス (377~408) テオドシウス朝第2代ローマ皇帝 在位383~408 ※画像なし

アラリック (375~410) 西ゴート王国初代王 在位395~410

アタウルフ (375~414) 西ゴート王国第2代王 在位410~415 ※画像なし



ホノリウス (384~423) テオドシウス朝第3代ローマ皇帝 在位393~423

シゲリック (?~415) 西ゴート王国第3代王 在位415

ワリア (?~418) 西ゴート王国第4代王 在位415~418※画像なし



ウォレンティアヌス3世 (419~455) テオドシウス朝第7代ローマ皇帝 在位424~455※画像なし

テオドリック1世 (?~451) 西ゴート王国第5代王 在位418~451



リウィウス・セウェルス (?~465) 第4代西ローマ皇帝 在位461~465※画像なし

テオドリック2世 (?~466) 西ゴート王国第7代王 在位453~466

ユリウス・ネポス (430~480) 第8代西ローマ皇帝 在位474~475

エウリック (440~484) 西ゴート王国第8代王 在位466~484

エール (?~491) サセックス王国初代王 在位477~491



アマリック（502～531） 西ゴート王国第11代王 在位511～531 ※画像なし  
チエルディッチ（？～534） ウェセックス王国初代王 在位519～534

レオヴィギルド（？～586） 西ゴート王国第17代王 在位568～586  
エシュウェネ（？～587） エセックス王国初代王 在位527～587

※サクソンの由来は諸葛（ジューガー）の孫（スン）だと考えられる。ジューガー+スン=シュカスン=サクソンとなる。サクソン人はサセックス王国（南のサクソン）、エセックス王国（東のサクソン）、ウェセックス王国（西のサクソン）を築いた。

-----

●伝説のブニョロ帝国の帝王（ブルガリア帝国の歴代皇帝）



小野妹子（6世紀後半）

ゴストゥン（？～605） エルミ朝初代ブルガリア王 在位603～605 ※画像なし  
氏名不明（生没年不詳） ブニョロ帝国初代王 在位不明 ※画像なし

※小野妹子が初代王ゴスティンに変身し、ブルガリア帝国を築いたと考えられる。ブルガリアの名の由来はトバルカインとアーリアの組み合わせである。トバルカイン+アーリア=バルカリア=ブルガリアとなる。

小野妹子はブルガリアを統治しながら同時に東アフリカに進出し、伝説のブニョロ帝国を築いた。ブニョロ帝国の王の系譜は不明だが、ブルガリア帝国の王がブニョロ帝国の王を兼任していたので、ブルガリア皇帝の系譜を見れば明らかである。ブニョロの由来はヴァナラシである。



クブラト (?~665) ドゥロ朝初代ブルガリア王 在位605~665

エゼルウェルホ (?~665) サセックス王国最後の王 在位660~665



バトバヤン (?~668) ドゥロ朝第2代ブルガリア王 在位665~668

レケスウィント (610~672) 西ゴート王国第29代王 在位649~672

アスパルフ (?~700) ドゥロ朝第3代ブルガリア王 在位668~700

エギカ (?~702) 西ゴート王国第32代王 在位687~702

テルヴェル (?~721) ドゥロ朝第4代ブルガリア王 在位700~721

アギラ2世 (695~714) 西ゴート王国第35代王 在位711~714

アルド (?~718) 西ゴート王国第36代王 在位714~718



コルメシイ (?~738) ドゥロ朝第5代ブルガリア王 在位721~738※画像なし

カール・マルテル (686~741) フランク王国宰相※ピピン3世父

橘諸兄 (684~757) 初代橘氏長者

セヴァル (?~753) ドゥロ朝第6代ブルガリア王 在位738~753

Áed Allán (?~743) ハイ・キング 在位730~738

吉備真備（695～775）

Domnall Midi（700～763） ハイ・キング 在位739～758

橘奈良麻呂（721～757） 橘諸兄の子

コルミソシュ（？～756） ヴォキル朝初代ブルガリア王 在位753～756

Niall Frossach（718～778） ハイ・キング 在位759～765

※橘氏、小野氏は月氏の王族であり、吉備氏、上道氏、下道氏、香夜氏はカッパドキアの王族である。橘の名の由来はタタール（モンゴル）のパニ（アーリア人）、小野の名の由来はアヌ（アーリア人）、吉備、道、香夜の名の由来はカッパドキアである。タタール+パニ=タタパニ=橘となり、アヌ=小野となり、カッパドキア=吉備+道+香夜となる。「奈良」の名は橘氏、小野氏が初めて日本に伝えた。奈良の由来はヴァナラシである。

- ・ヴィネフ（？～760） ヴォキル朝第2代ブルガリア王 在位756～760
- ・テレツ（？～763） ヴォキル朝第3代ブルガリア王 在位760～763
- ・サビン（？～766） ヴォキル朝第4代ブルガリア王 在位763～766
- ・ウモル（？～766） ヴォキル朝第5代ブルガリア王 在位766
- ・トクトゥ（？～767） ヴォキル朝第6代ブルガリア王 在位766～767



パガン（？～768） ヴォキル朝第7代ブルガリア王 在位767～768※画像なし

ピピン3世（714～768） カロリング朝初代フランク王 在位751～768

- ・テレリグ（？～777） ヴォキル朝第8代ブルガリア王 在位768～777



ドクム (?~815) ドゥロ朝第3代ブルガリア王 在位814~815 ※画像なし

シャルルマーニュ大帝 (742~814) 神聖ローマ帝国初代皇帝 在位768~814

アデライド (生没年不詳) ピピン3世の子

シゲレッド (?~825) エセックス王国最後の王 在位798~825

オムルタグ (?~831) ドゥロ朝第5代ブルガリア王 在位814~831

エクバード (769~839) イングランド王国初代王 在位802~839



マラミル (?~852) ドゥロ朝第6代ブルガリア王 在位831~852 ※画像なし

ピヤスト (740~861) ポーランド王国初代王 在位不明



プレシアン (?~852) ドゥロ朝第7代ブルガリア王 在位836~852※画像なし  
エゼルウルフ (?~858) イングランド王国第2代王 在位839~858



ヴラディーミル (?~893) ドゥロ朝第9代ブルガリア王 在位889~893※画像なし  
アルフレッド大王 (849~899) イングランド王国第6代王 在位871~899  
ボンドチャル・ムンカグ (850~900) ボルジギン家の祖



シメオン1世 (?~927) ドゥロ朝第10代ブルガリア王 在位893~927※画像なし  
エドワード長兄王 (877~924) イングランド王国第7代王 在位899~924

ロマン (?~997) ドゥロ朝第13代ブルガリア王 在位972~997  
ゲーザ (940~997) イシュトヴァーン1世父

●チンチャ王国の王（サムイル朝ブルガリアの歴代王）



エセルレッド2世（968～1016） イングランド王国第14代王 在位978～1013

サムイル（？～1014） サムイル朝初代ブルガリア王 在位976～1014※画像なし

ガヴリル・ラドミール（？～1015） サムイル朝第2代ブルガリア王 在位1014～1015※画像なし

イヴァン・ヴラディスラフ（？～1018） サムイル朝第3代ブルガリア王 在位1015～1018※画像なし



ペタル・デリヤン（？～1041） サムイル朝第4代ブルガリア王 在位1040～1041

イシュトヴァーン1世（969～1038） アールパード朝初代ハンガリー王 在位1000～1038

コンスタンティン・ボディン（？～1072） 在位1072

シャラモン（？～1074） アールパード朝第6代ハンガリー王 在位1063～1074

※サムイル朝ブルガリア王は現ペルーに進出し、チンチャ王国を築いた。チンチャの由来は朝鮮語「本当に？」である。1018年～1040年までの間はブルガリア人のペルーへの大移住も起きたようだ。約100年ほどのブルガリア王位途絶は原因不明であるが、実際には拠点がハン

ガリーに移ったため、キングメーカーはブルガリア王からハンガリー王にスイッチしていた。

●ボルジギン家当主（アールパード朝歴代ハンガリー王）



ゲーザ1世（1040～1077） アールパード朝第7代ハンガリー王 在位1074～1077

ラースロー1世（1040～1095） アールパード朝第8代ハンガリー王 在位1077～1095

カイドゥ（1040～1100） ボンドチャルの子※画像なし

ヴワディスワフ1世（1043～1102） ピヤスト朝第8代ポーランド公 在位1079～1102

・バイ・シンコル・ドクシン（?～?） カイドゥの子



カールマーン1世（1070～1116） アールパード朝第9代ハンガリー王 在位1095～1116※画像なし

トンビナイ・セチェン（1080～1130） ドクシンの子※画像なし

ボレスワフ3世（1085～1138） ピヤスト朝第10代ポーランド公 在位1102～1



イシュトヴァーン2世 (1101~1131) アールパード朝第10代ハンガリー王 在位1105~1131

カブル・カーン (1100~1147) セチェンの子

ヴワディスワフ2世 (1105~1159) ピヤスト朝第11代ポーランド公 在位1138~1146

・バルタン・バートル (?~?) カブルの子



ペーラ2世 (1108~1141) アールパード朝第9代ハンガリー王 在位1131~1141 ※画像なし

ステファン・ネマニャ (1113~1200) セルビア王国初代王 1113~1200



ゲーザ2世 (1130~1162) アールパード朝第12代ハンガリー王 在位1141~1162

イエスゲイ (1134~1171) バートルの子

ウラジーミル3世 (1132~1173) リューリク朝第24代キエフ大公 在位1171※  
画像なし

※アールパード朝ハンガリー王が新規にブルガリア王位を設け、第二次ブルガリア帝国を築いた。  
。

-----

第12代ハンガリー王ゲーザ2世 (イエスゲイ) の子



マルギト (1162~1208) ※画像なし

チンギス・ハーン (1162~1227) モンゴル帝国初代皇帝 在位1206~1227

ムスチスラフ3世 (?~1223) リューリク朝第39代キエフ大公 在位1214~1223※画像なし

-----

スミレツ (?~1298) テルテル朝第2代ブルガリア王 在位1292~1298

心地覚心 (1207~1298) 臨済宗建仁寺派妙光寺開創





チャカ (?~1300) テルテル朝第4代ブルガリア王 在位1299~1300※画像なし  
クビライ (1215~1294) モンゴル帝国第6代皇帝、大元帝国初代皇帝 在位1260  
~1294



アリクブケ (1219~1264) モンゴル帝国第5代皇帝 在位1259~1263  
日蓮 (1222~1282) 日蓮宗教祖

※日蓮の正体はモンゴル帝国皇帝アリクブケだったようだ。そのため、日蓮宗は時の幕府の弾圧を受けた。北条氏はクリューニ大主教アイマールの一族(タナトス)だった。現在も日蓮宗の弱体化計画が浄土真宗によって進められている。

タナトスは日蓮宗がダヴィデの一族の仏教であることを知っている。その日蓮宗篡奪の役を任されているのが西本願寺門主湛如の一族である。大石寺日蓮正宗、創価学会、だけでなく立正佼成会、霊友会などが日蓮宗なのは、タナトスが日蓮宗を完全支配下に置くことが目的である。

-----  
モンゴル皇帝アリクブケ(日蓮)の子

ヨブクル(?~1324)

日昭（1236～1323） 日蓮六老僧

---

大元皇帝フビライの子

**Zhenjin**（1243～1286）

日朗（1245～1320） 日蓮六老僧

日興（1246～1333） 日蓮六老僧

12人いるフビライの子のひとり

日持（1250～？） 日蓮六老僧

日頂（1252～1317） 日蓮六老僧

日向（1253～1314） 日蓮六老僧

---

テオドル・スヴェトスラフ（？～1322） テルテル朝第5代ブルガリア王 在位1300～1322

テムル（？～1307） 大元帝国第2代皇帝 在位1294～1307

カイシャン（？～1311） 大元帝国第3代皇帝 在位1307～1311

アユルバルワダ（？～1320） 大元帝国第4代皇帝 在位1311～1320



ゲオルギ2世テルテル（？～1323） テルテル朝第6代ブルガリア王 在位1322～1323※画像なし

フリードリヒ1世（1257～1323）　マイセン辺境伯　在位1292～1323

シデバラ（?～1323）　大元帝国第5代皇帝　在位1320～1323※画像なし

オスマン1世（1258～1326）　オスマントルコ帝国初代皇帝　在位1299～1326



ミハイル3世シシュマン（1280～1330）　シシュマン=アセン朝初代ブルガリア王　在位1323～30※画像なし

イエスン・テムル（?～1328）　大元帝国第6代皇帝　在位1323～1328※画像なし

コシラ（?～1329）　大元帝国第9代皇帝　在位1329※画像なし

イヴァン1世（1288～1340）　モスクワ大公　在位1325～1340

イヴァン・ステファン（?～1331）　シシュマン=アセン朝第2代ブルガリア王　在位1330～1331

トク・テムル（?～1332）　大元帝国第8、10代皇帝　在位1328～29、1329～32



イヴァン・アレクサンダル（?～1371）　シシュマン=アセン朝第3代ブルガリア王　在位1331～71※画像なし

トゴン・テムル（1320～1370）　大元帝国第12代+北元初代皇帝　在位1333～68、1368～70

イヴァン・シシュマン（?～1393）　シシュマン=アセン朝第4代ブルガリア王　在位13

71～1393

イエスデル (?～1391) 北元第4代皇帝 在位1388～1391

イヴァン・スラツィミル (?～1396) シシュマン＝アセン朝第5代ブルガリア王 在位1356～1396

エンケ・ハーン (?～1394) 北元第5代皇帝 在位1391～1394

・フリードリヒ2世 (1310～1349) マイセン辺境伯 在位1323～1349

・フリードリヒ3世 (1332～1381) マイセン辺境伯 在位1349～1381

-----  
●宇宙人エラ人+ウィルタ族・オロッコ族の首長 (歴代ザクセン＝コーブルク＝ゴータ公)

・ウィルタ族 (15世紀頃)

・オロッコ族 (15世紀頃)



※画像はウィルタ族 (オロッコ) の人々である。宇宙人 (オロクンのトバルカインとエラド) が共同で築いたブルガリア帝国が滅ぶと、両者はシベリアに移り、ウィルタ族、オロッコ族となり、シベリアで超科学の研究に勤しんだ。

ウィルタとオロッコの代々の首長は、ザクセン＝ゴータ＝コーブルク公も兼ねた。ウィルタの由来はエラドであり、オロッコの由来はオロクンである。画像の人々を見ていると、時折報告されるモンゴロイド型宇宙人の正体とはウィルタ族 (オロッコ) なのではないかと思える。



コンスタンティン2世 (?~1422) シシュマン=アセン朝第6代ブルガリア王在位1396~1422※画像なし

フリードリヒ1世 (1370~1428) ザクセン選帝侯 在位1407~1428

- ・フリードリヒ2世 (1412~1464) ザクセン選帝侯 在位1428~1464
- ・エルンスト (1411~1486) ザクセン選帝侯 在位1464~1486
- ・ヨハン (1468~1532) ザクセン選帝侯 在位1525~1532
- ・ヨハン・フリードリヒ (1503~1554) ザクセン選帝侯 在位1532~1547
- ・ヨハン・ヴィルヘルム (1530~1573) ザクセン=ヴァイマル公
- ・Johann II (1570~1605) Duke of Saxe-Weimar
- ・エルンスト1世 (1601~1675) ザクセン=ゴータ=アルテンブルク公
- ・John Ernest IV (1658~1729) Duke of Saxe-Coburg-Saalfeld
- ・フランツ・ヨシアス (1697~1764) ザクセン=コーブルク=ザールフェルト公
- ・エルンスト・フリードリヒ (1724~1800) ザクセン=コーブルク=ザールフェルト公
- ・フランツ (1750~1806) ザクセン=コーブルク=ザールフェルト公
- ・フェルディナント (1785~1851)
- ・アウグスト・ルートヴィヒ・ヴクトル (1818~1881)

-----

ザクセン=ゴータ=アルテンブルク公エルンスト1世の子



クリスティアン（1642）※画像なし

アフォンソ6世（1643～） ブラガンサ朝第2代ポルトガル王 在位1656～1683

-----

ザクセン=ゴータ=ザールフェルト公John Ernest IVの孫



**John Frederick**（1721～1767） Sophia Wilhelmの子※画像なし

ジョゼ1世（1714～1777） ブラガンサ朝第5代ポルトガル王 在位1750～177



マリア1世（1734～1816） ブラガンサ朝第6代ポルトガル王 在位1777～1816



ジョアン6世（1767～1826） ブラガンサ朝第7代ポルトガル王 在位1816～1826

---

フェルディナント・ゲオルク・フォン・ザクセン＝コーブルク＝ザールフェルト＝コハーリの子



アウグスト・フォン・ザクセン＝コーブルク＝ゴータ（1818～1881）



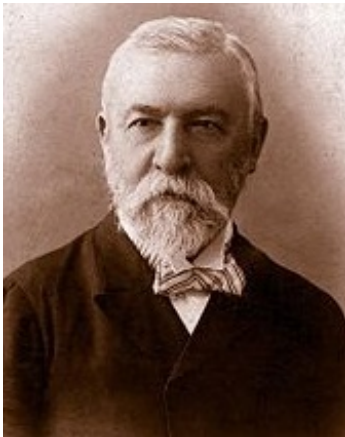
レオポルト・フランツ・ユリウス（1824～1884）※画像なし

ドラガン・ツァンコフ（1828～1911） 大ブルガリア公国閣僚評議会第3代議長 任期  
1880

---

フェルディナント・ゲオルク・フォン・ザクセン＝コーブルク＝ザールフェルト＝コハーリの孫





ガスタン・デ・オルレアンス（1842～1922） ヴィクトワールの子

ペドロ5世（1837～1861） ブラガンサ朝第10代ポルトガル王 在位1853～1861

ルイス1世（1838～1889） ブラガンサ朝第11代ポルトガル王 在位1861～1889

トドル・ブルモフ（1834～1906） 大ブルガリア公国閣僚評議会初代議長 任期1879

クリメント・ツルノフスキー（1841～1901） 大ブルガリア公国閣僚評議会第2代議長 任期1879～80



フェルディナンド1世（1861～1948）　ブルガリア王国初代王　在位1887～1908  
※アウグスト・フォン・ザクセン＝コーブルク＝ゴータの子  
アレクサンドル・マリノフ（1867～1938）　ブルガリア王国初代首相　任期1908～1911

---

アウグスト・フォン・ザクセン＝コーブルク＝ゴータの孫



レオポルト・クレメンス（1878～1916）　フィリップの子※画像なし  
ヴァシル・ペトロフ・コラロフ（1877～1950）　ブルガリア人民共和国臨時評議会議長  
任期1946～47  
キモン・ゲオルギエフ（1882～1969）　ブルガリア人民共和国初代首相　任期1946  
※画像なし



ボリス3世（1894～1943） 第2代ブルガリア王 在位1918～1943

ゲオルギ・ダミヤノフ（1892～1958） ブルガリア人民共和国議会幹部会議長 任期1950～58※画像なし



キリル（1895～1945） フェルディナンド1世の子

ミンチョ・コレフ・ネイチェフ（1897～1956） ブルガリア人民共和国議会幹部会議長 任期1947～1950

ディミトウル・ブルバノフ（1898～1964） ブルガリア人民共和国議会幹部会議長 任期1958～64※画像なし

ゲオルギ・ギロフスキ（1898～1975） ブルガリア人民共和国議会幹部会議長 任期1964～1971

---

初代ブルガリア王フェルディナンド1世の孫・曾孫



オイゲン・エーバーハル（1930） ナデジダ・ブルガルスカの子※画像なし

ボリス・エリツィン（1931～2007） ロシア連邦初代大統領 任期1991～1999

イオン・イリエスク（1930） ルーマニア第2、4代大統領 任期1990～96、2000～04

リュベン・ペロフ（1925～2006） ブルガリア共和国第55代首相 任期1992～94※画像なし



アレクサンダー・オイゲン（1933） ナデジダ・ブルガルスカの子※画像なし

ペトウル・ムラデノフ（1936） ブルガリア共和国初代大統領 任期1990

ジェリュ・ジェレフ（1935） ブルガリア共和国第2代大統領 任期1990～1997



シメオン2世（1943） 第3代ブルガリア王 在位1943～1946

シュミット・パール（1942） ハンガリー共和国第4第大統領 任期2010～2012

ミロシュ・ゼマン（1944） チェコ第3代大統領 任期2013～現在



カール・ボリス（1960） マリヤ・ルイザ・ブルガルスカの子※画像なし

ゲオルギ・パルヴァノフ（1957） ブルガリア共和国第4代大統領 任期2002～2012

ジャン・ヴィデノフ（1959） ブルガリア共和国第56代首相 任期1995～1997※画像なし

プラメン・オレシャルスキ（1960） ブルガリア共和国第61代首相 任期2013～2014※画像なし

ボイコ・ボリソフ（1959） ブルガリア共和国第60、62、63代首相 任期2009～13、2017～現在



カルダム・サクスコブルクゴツキ（1962～2015）　ブルガリア王シメオン2世の子  
ケヴェール・ラースロー（1959）　ハンガリー共和国大統領代行　任期2012  
アーデル・ヤーノシュ（1959）　ハンガリー共和国第5 第大統領　任期2012～現在  
ルメン・ラデフ（1963）　ブルガリア共和国第6代大統領　任期2017～現在  
セルゲイ・スタニシェフ（1966）　ブルガリア共和国第59代首相　任期2005～2009

※ハンガリー政府はハンガリー国内の遺伝子組み換えとうもろこしの畑を焼き尽くし、まともなとうもろこしを栽培し、冷凍食品として輸出していた。日本では業務スーパーで売られていた（現在では撤去されている）。しかし、これを不服としたイギリス政府（西本願寺門主文如と法如の一族）が「有毒な細菌に汚染されたハンガリーの冷凍食品を食べたせいでイギリス国民が死んだ」とウソをつき、世界的にハンガリー冷凍食品を輸出禁止にした。本願寺は、どうしても安全なものを人類に食べさせたくないのだ。



ヘルマン（1963） マリヤ・ルイザ・ブルガルスカの子※画像なし

ロセン・プレヴネリエフ（1964） ブルガリア共和国第5代大統領 任期2012～2017

宇宙人トバルカイン（クウォス）の一族⑤～海の民、エジプト第25王朝、プトレマイオス朝、ハザール帝国、イエス・キリスト、グルジア王国、ジャン＝ジャック・ルソー、フランス革命、ノルディック、ケムトレイル

---



- ・テワ族（1万3千年前）※画像はテワ族の少女
- ・ティワ族（1万3千年前）
- ・トワ族（1万3千年前）

※クウォスのトバルカインは超科学を放棄し、原始的な生活を望んでコロラド流域に移住した。テワ、ティワ、トワの名はトバルカインに由来している。彼らは自分たちをマヤ人の子孫、宇宙人の子孫だと信じている。

-----

#### ●真のイスラエル王国の時代（宇宙人の古代台湾統治時代）

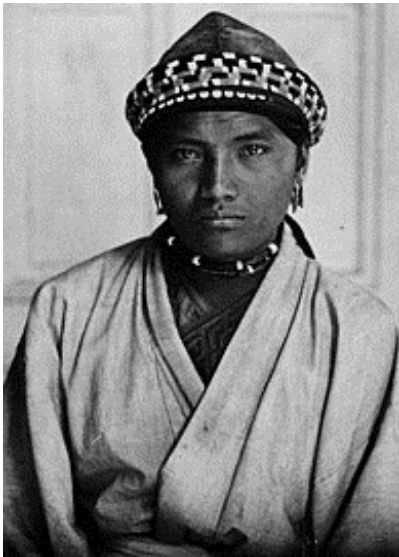
- ・ルカイ族（クウォスのトバルカイン）
- ・ツォウ族（ゼウスの一族）
- ・サイシャット族（ゼウスの一族）
- ・タオ族（エラド）
- ・セデック族（マハラエル）
- ・クーロン族（チュクウのトバルカイン＋ルハンガのトバルカイン）
- ・タオカス族（エラド＋クウォスのトバルカイン）
- ・パゼツヘ族（ルハンガ＋スバル人）
- ・アリクン族（オロクンのトバルカイン）
- ・ロア族（マハラエル）
- ・シラヤ族（スバル人＋ルハンガのトバルカイン）





※画像は台湾の絶景。真のイスラエル王国とは、葦原中津国（天草諸島～八代湾）と高天原（台湾）による連邦国家だった。古代台湾はもともとオリジナル人類ニャメ（アミ族）の領土であり、日本神話で見られる天津神の故郷でもある。

BC 35世紀頃、上記の宇宙人（超科学の種族）たちが集合し、最初的人类エスが築いた葦原中津国と連合してイスラエル（台湾、沖縄諸島、九州）を統治していた。



ルカイ族（台湾原住民）

※テワ族らはコロラド流域を離れて台湾に入植し、ルカイ族を生んだ。ルカイの名の由来はトバルカインである。



## ラカイン族（ミャンマー少数民族）

※テワ族らはコロラド流域を離れてミャンマーに入植し、ラカイン族を生んだ。ラカインの名の由来はトバルカインである。画像のラカイン族の親子だが、子供の方が碧眼である。宇宙人トバルカインの子孫の証だろう。



- ・ラティヌス（BC 32世紀頃）
- ・ラテン王国（BC 32世紀頃）
- ・都市国家ウル（BC 32世紀頃）

※画像はヴォルガ河である。伝説のラテン王国が存在したのはイタリアではない。ラテン王国の範囲は広大であり、北はヴォルガ流域・ウラル山脈、西はバルカン半島、東はアルタイ山脈・オロクス（中国）、南はメソポタミア・インドにまで広がっていた。つまり、メソポタミア文明や黄河文明をも内包していた巨大王国だった。

ラティヌスの由来はエラドとアルキュオネウスの組み合わせである。エラド+アルキュオネウス＝ラドネウス＝ラティヌス＝ラテンとなる。オロクンのトバルカインは預言者ナタンの一族とその街を核分裂させて消滅させた当人だが、その「黙示録アルマゲドン」を機に、オロクンのトバルカインは巨大な罪悪感によって超科学を放棄し、ウラル山脈に移り住んでエラドと共にラティヌス（ラテン王国）を生んだ。

この時にオロクンのトバルカインがウラルを訪れた際、初めてヴォルガ河はヴォルガと呼ばれ、バルカン半島もバルカンと呼ばれた。ヴォルガ、バルカンの由来はトバルカインである。トバルカイン＝トヴァルガイン＝ヴォルガとなり、トバルカイン＝バルカイン＝バルカンとなる。

- ・都市国家ラガシュ（BC 32世紀頃）

- ・グジャラート（BC 3 2 世紀頃）

※クウォスのトバルカインもラテン王国に参加し、ラガシュ（メソポタミア）とグジャラート（インド）をラテン王国の領域に築いた。ラガシュの由来はコルクスであり、グジャラートの由来はラガシュとエラドの組み合わせである。コルクス＝ルギス＝ラガシュとなり、ラガシュ＋エラド＝ガシュラド＝グジャラートとなる。

## ●海の民

- ・アカイワシャ人（BC 1 3 世紀） チュクウ＋ウエシュシュ
- ・ウエシュシュ人（BC 1 3 世紀） クウォス＋シュシャン
- ・シェクレシュ人（BC 1 3 世紀） チュクウ＋ルハンガ＋クウォス
- ・チェケル人（BC 1 3 世紀） チュクウ＋ルハンガ
- ・トゥルシア人（BC 1 3 世紀） チュクウ＋ルハンガ＋シュシャン
- ・ルカ人（BC 1 3 世紀） アルキュオネウス



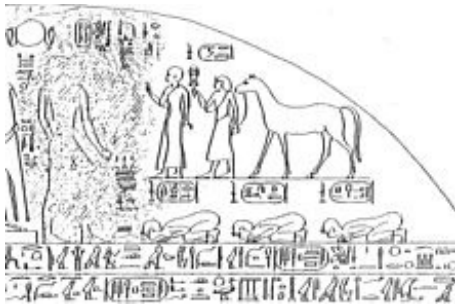
※画像は海の民のレリーフ。タナトスの一族に属する海の民（デニエン人、シェルデン人）以外の6種の海の民はトバルカインとゼウスの一族で構成されていた。海の民は、上の画像のルカイ族の男のような顔をしていたと考えられる。

- 
- ・コーサラ王国（BC 1 2 世紀）
  - ・クリシュナ（BC 1 2 世紀）

※「マハーバーラタ戦争」でヴォルガ流域とメソポタミアが核分裂によって荒廃し、ラテン王国が滅ぶと、クウォスのトバルカインはメソポタミア＋グジャラートを離れてナイル上流域に進出し、クシュ王国（コーサラ王国）を築いた。クシュとコーサラの由来はグジャラートである。グジャラート＝グージャラ＝コーサラとなる。クリシュナの名の由来はシェクレシュである。

## ●コーサラ王国の王（ヌビア王国の歴代王＋エジプト第25王朝の歴代ファラオ）

- ・アララ (?～BC752) ヌビア王 在位BC795～BC752
- ・カシュタ (?～BC752) ヌビア王 在位BC765～BC752
  
- ・パイ (?～BC721) エジプト第25王朝初代ファラオ 在位BC752～BC721
- ・シャバカ (?～BC706) エジプト第25王朝第2代ファラオ 在位BC721～BC706
- ・シャバタカ (?～BC690) エジプト第25王朝第3代ファラオ 在位BC706～BC690
- ・タハルカ (?～BC664) エジプト第25王朝第4代ファラオ 在位BC690～BC664
- ・タヌトアメン (?～BC656) エジプト第25王朝第5代ファラオ 在位BC664～BC656
  
- ・アトラネルサ (?～BC640) ヌビア王 在位BC656～BC640
- ・セヌカマヌイスケン (?～BC620) ヌビア王 在位BC640～BC620
- ・アヌラマニ (?～BC600) ヌビア王 在位BC620～BC600
- ・アスペルタ (?～BC580) ヌビア王 在位BC600～BC580
- ・アラマトレ=クォ (?～BC555) ヌビア王 在位BC568～BC555
- ・マロナクエン (?～BC542) ヌビア王 在位BC555～BC542



※画像はクシュ人の碑。クシュ人はエジプト第25王朝を開いているが、この王朝は別名コーサラ王国だった。クシュ王国（コーサラ王国）が滅ぶと、クシュ人はコルキスに移住してコルキス王となり、同時にプトレマイオス朝のファラオを兼任した。

-----



**Kuji** (?～BC 280) コルキス初代王 在位BC 325～BC 280※画像なし

プトレマイオス1世 (BC 367～BC 282) プトレマイオス朝初代ファラオ 在位BC 305～BC 282

- ・ Akes (生没年不詳) コルキス王 在位BC 3世紀
- ・ Saulaces (生没年不詳) コルキス王 在位BC 2世紀

**Mithridates** (生没年不詳) コルキス王 在位BC 80

プトレマイオス11世 (BC 115～BC 80) プトレマイオス朝第12代ファラオ 在位BC 80



プトレマイオス12世 (BC 117～BC 51) プトレマイオス朝第13代ファラオ 在位BC 80～58、BC 55～51

Machares (生没年不詳) コルキス王 在位BC 65

プトレマイオス14世 (BC 60～BC 44) プトレマイオス朝第17代ファラオ 在位BC 47～BC 44

Aristarchus (?～BC 47) コルキス王 在位BC 63～47

※コルキスの名の由来はクリュテイオスとクウォスの組み合わせだと考えられる。クリュテイオス+クウォス=クリュクウォス=コルキスとなる。コルキス王は、同時にプトレマイオス朝のフ

アラオを代々務めた。だが、プトレマイオス朝はガリアのドルイド司祭の一族の干渉を受け続けた。

特に、ガリアのドルイド司祭の一族は女王ベレニケ3世、女王ベレニケ4世、プトレマイオス13世などの偽者を擁立した。プトレマイオス11世などは、偽者の女王ベレニケ3世を殺害すると、怒った群衆により虐殺されたが、これはタナトスが得意とする、数で優れた人物を圧倒するという一向一揆と同じ手口である。



クレオパトラ7世（BC69～BC30）

現在、世間一般に美女「クレオパトラ」として浸透しているのは、クレオパトラ7世のことである。クレオパトラの父はプトレマイオス12世（アウレテス）、母はクレオパトラ5世であり、兄弟姉妹はクレオパトラ6世（姉）、ベレニケ4世（姉）、アルシノエ4世（妹）、プトレマイオス13世、プトレマイオス14世（共に弟）が知られる。「クレオパトラ」の名はギリシア語で「父親の栄光」を意味する。wikiより



プトレマイオス15世カエサリオン（BC47～BC30） クレオパトラ7世の子  
ユバ2世（BC50～AD23） ヌミディア王※画像なし

共和政ローマの将軍ユリウス・カエサルとクレオパトラ7世の子（異説あり）。カエサリオンは「

小カエサル」を意味する。異父弟妹にアレクサンドロス・ヘリオス、クレオパトラ・セレネ、プトレマイオス・フィラデルフォスがいる。母クレオパトラ7世とエジプトを共同統治していたプトレマイオス14世が紀元前44年に死去すると、プトレマイオス15世となった。wikiより

---

クレオパトラ・セレネ（BC 39～AD 6） マルクス・アントニウスの娘

※ガリアのドルイド司祭の一族が偉大なカエサルやクレオパトラの血筋の根絶を実行していたため、男子はみな早いうちに殺されていた。それを避けるため、カエサリオンは自分を17歳で死んだことにし、ユバ2世としてヌミディア王国に潜伏した。ユバ2世は異父妹であるクレオパトラ・セレネと結婚し、洗礼者ヨハネ（プトレマイオス・トロメウス）とイエス・キリスト（ドルシラ）を生んだ。

---

ユバ2世とクレオパトラ・セレネの子



プトレマイオス・トロメウス（BC 9～AD 40）※画像なし

洗礼者ヨハネ（BC 6～AD 36）

クノベリヌス（?～AD 41） ブリトン王 在位AD 9～AD 41※画像なし

※イエスが磔の刑で死去したあとも、洗礼者ヨセフはしばらくの間イエスを演じた。これがイエスの復活の真実である。しかし、ヨハネは当時の領主ヘロデ・アンティパスの結婚を非難したため捕らえられ、ヘロデの娘サロメ（ガリアのドルイド司祭の一族）が、祝宴での舞踏の褒美として彼の首を求めたため、処刑された。

しかし、実際にはヨハネは処刑を逃れてブリテン島に落ち延び、ブリトン王に即位したと考えられる。このときに、ジョーンズの名が生まれた。ジョーンズの名の由来はヨハネスである。



ドルッシラ (?~?) ※画像なし

イエス・キリスト (BC 6~AD 30)

※ドルイド司祭がカエサルの血筋（男系）の根絶を実行していたため、男子はみな早く死んでいた。当然、クレオパトラ・セレネも目を付けられていたが、彼女は男子として生まれたイエスを女子ドルッシラとして育てた。そのおかげでイエスは無事に成長することが出来た。洗礼者ヨハネの正体はプトレマイオス・トロメウスであり、イエスの兄であった。

イエスには2人のイエスがいた。ひとりにはクレオパトラ7世の孫ドルッシラであり、もうひとりにはイエスを騙ったドルイド司祭である。神殿で商売をする資本主義者を罵倒し、暴れるのがホンモノのイエスであり、不治の病に苦しむ病人を治すのは偽イエス（ドルイド司祭）である。

-----  
ブリトン王クノベリヌスの子

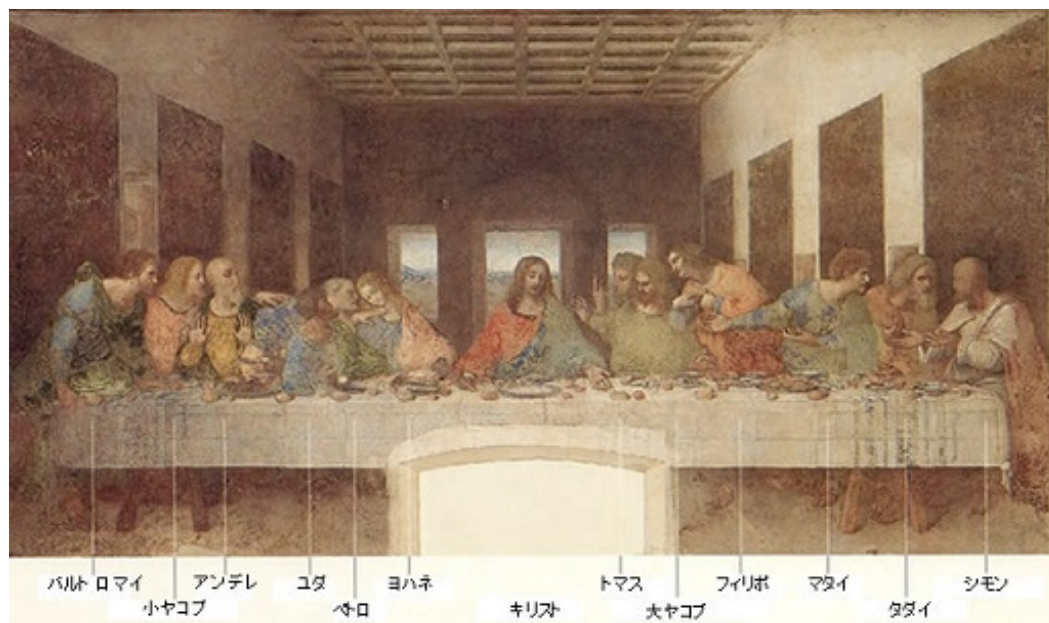


アルウィラグス (?~1世紀半ば) ブリトン王※画像なし

シモン・ペトロ (AD 1~AD 64) 初代ローマ教皇 在位33~67



※ペトロはユバ2世の庶子と考えられる。そのため、ペトロはドルイド教にロックオンされずにノーマークで育つことができた。ペトロは十二使徒として異母兄弟であるイエスに従い、偽イエスを演じていたドルイド司祭がパウロとしてイスラエルに戻った時には、キリスト教を守るためにパウロと対決した。



※画像は十二使徒とイエス・キリストである。十二使徒たちは、初代ブリトン王クノベリヌスの子（wikiに記述は無いが）ではないかと考えられる。一方、ユダはイエスを裏切ったとされているが、彼は影武者のイエスに接吻した、つまり、ホンモノのイエスを助けるための芝居だった。

- ・ゼベタイのヤコブ（1世紀頃）
- ・使徒ヨハネ（1世紀頃）
- ・アンデレ（1世紀頃）
- ・フィリポ（1世紀頃）
- ・トマス（1世紀頃）
- ・バルトロマイ（1世紀頃）
- ・マタイ（1世紀頃）
- ・アルファイのヤコブ（1世紀頃）
- ・タダイ（1世紀頃）
- ・熱心者のシモン（1世紀頃）
- ・イスカリオテのユダ（1世紀頃）



●古代マヤ+ティカルの王（歴代ブリトン王）

- ・ Marius ブリトン王 在位不明
- ・ Colius ブリトン王 在位不明
- ・ Lucius ブリトン王 在位不明  
(ローマ帝国支配)
- ・ Allectus ブリトン王 在位不明
- ・ Coel ブリトン王 在位不明  
(ローマ帝国支配)
- ・ Octavius ブリトン王 在位不明
- ・ Trahern ブリトン王 在位不明  
(ローマ帝国支配)
- ・ Gracianus Municeps ブリトン王 在位不明  
(ローマ帝国支配)
- ・ Vortigern ブリトン王 在位不明
- ・ Vortimer ブリトン王 在位不明
- ・ Aurelius Ambrosius ブリトン王 在位不明
- ・ Uther Pendragon ブリトン王 在位不明
- ・ Arthur ブリトン王 在位不明
- ・ Constantine III ブリトン王 在位 520～523
- ・ Aurelius Conanus ブリトン王 在位不明
- ・ Vortiporius ブリトン王 在位 6世紀頃
- ・ Malgo ブリトン王 在位?～547
- ・ Keredic ブリトン王 在位不明
- ・ Cadvan ブリトン王 在位 616～625  
(アングロサクソン人移住)
- ・ Cadwallo ブリトン王 在位 625～634
- ・ Cadwallader ブリトン王 在位 655～689

※カエサルの子孫であるブリトン王は古代メキシコ～マヤに進出し、羽毛ある蛇と呼ばれる神、ケツアルコアトルを生んだ。ケツアルコアトルの名の由来はカエサル4世（クアトロ）である。

カエサルクアトロ=カエツアルクアトル=ケツアルコアトルとなる。ケツアルコアトルは白い顔の男とされているが、さもありません。

-----

- ・ Za Haqala (生没年不詳) アクスム王国初代王 在位100頃
- ・ Gadarat (生没年不詳) アクスム王国第2代王 在位200頃
- ・ Nzaba (?~240) アクスム王国第3代王 在位230~240
- ・ Sembrouthes (生没年不詳) アクスム王国第4代王 在位250頃
- ・ Batsana (生没年不詳) アクスム王国第5代王 在位260頃

※十二使徒はアクスム王国を建てたと考えられる。それを証明するように、アクスム王国はキリスト教国家だった。アクスムの由来はカシミールだと考えられる。



**Ebana** (生没年不詳) アクスム王国第14代王 在位5世紀頃※画像なし

シクストゥス3世 (390~440) 第44代ローマ教皇 在位432~440

**Kozar** (生没年不詳) ハザール初代王 在位不明※画像なし

**Nezool** (生没年不詳) アクスム王国第15代王 在位5世紀頃

ヘンゲスト (455~488) 初代ケント王※オクタ父

**Karadach** (生没年不詳) ハザール第2代王 在位450頃

※イエスの一族はローマ教皇とブリトン王を兼務していたが、シクストゥス3世以降、タナトスの一族であるレオ1世がローマ教皇となったため、オリジナル教皇の一族はブリテン島に拠点を移した。

**Alla Amidas** (生没年不詳) アクスム王国第18代王 在位6世紀頃

オクタ (500~543) 第4代ケント王

ヨハネス2世（470頃～535） ローマ教皇 在位533～535

- ・ Israel（生没年不詳） アクスム王国第24代王 在位590頃
- ・ Gersem（生没年不詳） アクスム王国第25代王 在位600頃



Armah（生没年不詳） アクスム王国第26王 在位614頃※画像なし  
エゼルベルト（560～616） 第6代ケント王※画像なし  
グレゴリー1世（549～604） 第64代ローマ教皇 在位590～604  
アウグスティヌス（?～604） 初代カンタベリー大主教

※ケント王オクタがベネディクト会とカンタベリー大主教座を設けて以降、イエスの一族はローマ教皇、ベネディクト会修道院長、ケント王、ブリトン王、カンタベリー大主教を兼任した。一方、ベネディクト会が、アイルランド・カトリック教会を指導しているため、アイルランド・カトリックはしばしばクリュニー会やシトー会、ドミニコ会に攻撃されている。

**Cadwallo**（生没年不詳） ブリトン王 在位625～634

Sahama（生没年不詳） アクスム王国第27代王 在位630頃

Ziebel（生没年不詳） ハザール帝国初代王 在位618～630

※アクスム王国が滅ぶと、アクスムの王族は伝説のラテン王国の首都が存在したヴォルガ流域に移り、ハザール帝国を築いた。ハザールの由来はカエサルである。カエサル=カエザール=カザール（ハザール）となる（中央アジアにはカ行がハ行を兼ねることがある）。

一方、ハザール帝国を治めながら、ハザール王は家族が築いた修験道で精神を鍛えるべく日本に赴いた。また、ハザール王は修験道に励む一方で唐の皇帝の計らいで朝鮮で安東都護を任され、同時に古代メキシコに進出してトルテカ帝国を築いた。

-----



●トルテカ帝国の王（歴代ハザール皇帝）

- ・ Bori Shad ハザール帝国第2代王 在位630～650
- ・ Irbis ハザール帝国第3代王 在位650
- ・ Khalga ハザール帝国第4代王 在位660？



●鹿島神宮神職＋トルテカ帝国の王（歴代ハザール皇帝＋安東都護）

**Kaban**（生没年不詳） ハザール帝国第5代王 在位660？

魏哲（？～669） 初代安東都護 任期668～669



**Tang Xiuqing**（？～705） 第7代安東都護 任期704～705※画像なし

役小角（634～701） 修験道開祖

**Busir**（生没年不詳） ハザール帝国第6代王 在位690～715

許欽澹（生没年不詳） 第10代安東都護 任期714？

**Barjik**（生没年不詳） ハザール帝国第7代王 在位720～731

Xue Tai（？～725） 第11代安東都護 任期720～725

Li Jiao（生没年不詳） 第12代安東都護 任期727？

**Pei Min**（生没年不詳） 第14代安東都護 任期733～741

Bihar（生没年不詳） ハザール帝国第8代王 在位732

Prisbit（生没年不詳） ハザール帝国第9代王 在位730後期

・高震（？～773） 第20代安東都護 任期？～773

※ハザール王は唐の計らいで朝鮮での安東都護を任された。同時に、ハザール王は日本の山中で修験道に励んだ。修験道はスバル人とオロクンのトバルカインが築いたもので、スバル人は妖怪山姥として、オロクンのトバルカインは天狗として日本の山中に暮らしていた。宇宙人の超科学の力は地球を破壊しかねないほど強力だ。これを正しく使うため、煩悩に負けない強い精神力を養う必要である。そのために修験道が生まれた。

スバル人とオロクンのトバルカインは超科学を継承していたが、クウォスのトバルカインは1万3千年前に超科学を放棄し、もともとコロラド流域に住んでいた人々である。だが、スバル人や天狗に出会ったことで、彼らは再び超科学の継承を決めた。

安東都護が山伏の格好をして修験道の修行に励んでいる際、ハザール皇帝たちは鹿島神宮を建てたようだ。鹿島の由来はアクスムである。鹿島神宮だが、サトゥルヌスの一族が建てた人身御供の儀式を催していた神社とは全く違うことが分かるだろう。サトゥルヌスの一族の神社の場合、鳥居は社の前には建てない。

#### ■修験者（ハザール王の一族）と人身御供の神官（サトゥルヌスの一族）の戦い



※画像は桃太郎の図。修験者を模した歴代ハザール皇帝は、日本の山々で修験道に励んでいた。だが、鬼が日本各地で好き放題しているのを小耳に挟んだ彼らは鬼を皆殺しにすべく、鬼退治を決定した。時代は7世紀後半と考えられる。鬼の正体は契丹の王であるが、ハザール皇帝がこの時に成敗したのは契丹王李失活（在位697～718）とその郎党のことだと考えられる。第10代安東都護許欽澹（ハザール皇帝Busir）は百地を名乗っていたため、彼らの契丹討伐の話は桃太郎の伝説として語り継がれることになった。犬と猿とは天狗と忍びの者のことであり、キジは食糧だったと考えられる。鬼ヶ島とは契丹の本拠地モンゴルだったかもしれない。因みに737年、第14代都護Pei Minの時にハザール帝国がユダヤ人1731の一族に篡奪され、ユダヤ教に改宗している。

また、最後の安東都護、第20代安東都護高震は修験者万巻として芦ノ湖に出現し、若い娘を生贄として所望していた九頭龍の神官たち（坂上苺田麻呂の子）を皆殺しにした。話としては戦いは一瞬で終わったように感じるが、実際には高震が九頭龍崇拜の神官らを皆殺しにするために安東都護をやめ、773年から完全に足場を日本に移し、芦ノ湖付近で戦闘の準備に入ったと考えられる。

修験者と人身御供の神官の戦闘は坂上苺田麻呂が死去した786年まで続いたと考えられる。その後、安東都護（ハザール皇帝）は日本を離れたが、ハザール帝国がユダヤ教神官（ユダヤ人1731の一族）に篡奪されていたこともあり、故地コルクスに戻って代わりにイベリア王国を築いている。

- 
- ・ Adarnase IV (?～923) イベリア王国初代王 在位888～923
  - ・ David II (?～937) イベリア王国第2代王 在位923～937
  - ・ Sumbat I (?～958) イベリア王国第3代王 在位937～958
  - ・ Bagrat II (?～994) イベリア王国第4代王 在位958～994
  - ・ Adarnase V (?～966) イベリア王国第5代王 在位961～966
  - ・ David III (?～975) イベリア王国第6代王 在位966～975
  - ・ Gurgen II (?～1008) イベリア王国第7代王 在位994～1008



Bagrat III (960～1014) グルジア王国初代王 在位1008～1014

※イベリア王国第8代王Bagrat IIIがグルジア王国の初代王に即位した。グルジアの名の由来はシェクレシュである。シェクレシュ=シェクレシア=クレシア=グルジアとなる。



David VI (1225～1293) グルジア王国第14代王 在位1245～1259

※ダヴィデ6世の時代、ビザンツ王族（ユダヤ人1731の一族）の攻撃を受けた際、タイガは森林ごと根こそぎ吹っ飛び、砕けた大地が何百平方キロにも渡って飛び散った。ただ、科学の種族は余裕だった。彼らは、スバルバル諸島から発射されたビザンツ帝国の核兵器に攻撃されても安全な小型かつ堅牢な要塞を地下深くに建設していた。更に、タナトスが開発できた核兵器は少量だった。そのため、科学の種族はタナトスの混血を相手にしていなかったようだ。

科学の種族が築いた小型要塞は、ロシアで「大釜」と呼ばれている。現在でも、タイガの奥地に迷い込んだ現地人に偶然発見されることがある。鋼鉄のノミで削っても、ハンマーで叩いても、欠けることもなく、傷ひとつ付けることができないという。

**George VIII** (?～1465) グルジア王国第39代王 在位1446～1465

**John Whethamstede** (?～1465) ベネディクト会修道院長

**ジャン8世** (1425～1477) ヴァンドーム伯

※ゲオルグ8世の後、グルジア王国はカートリ朝、カケーティ朝、イメルティ朝の3つに分離した。





**Alexander II** (?～1510) イメレティ朝初代グルジア王 在位1478～1510※画像なし

**Constantine II** (1447～1505) カートリ朝初代グルジア王 在位1478～1505

**Alexander I** (1445～1511) カーケティ朝初代グルジア王 在位1476～1511※画像なし

**フランソワ** (1470～1495) ヴァンドーム伯



**George IX** (?～1539) カートリ朝第3代グルジア王 在位1525～1527※画像なし

**ジョン・ベック** (?～1539) ベネディクト派司教※画像なし

**リチャード・ホワイティング** (?～1539) ベネディクト派司教※画像なし

**ヒュー・クック・ファリンドン** (?～1539) ベネディクト派司教※画像なし

**ジョン・カイト** (?～1537) アイルランド・カトリック教会アーチャー大主教※画像なし

**シャルル・ド・ブルボン** (1489～1537) ヴァンドーム公



**Bagrat III** (1495～1565) イメレティ朝第2代グルジア王 在位1510～1565  
メノ・シモンズ (1496～1561) メノナイト教祖



**Levan** (1504～1578) カーケティ朝第3代グルジア王 在位1520～1574 ※画像なし  
ジャン・カルヴァン (1509～1564) 改革派教祖  
ジョン・ゲイツ (1504～1553) ※画像なし

※グルジア王レヴァンは、ジャン・カルヴァンとしてツヴィングリが築いた改革派を継承した。更に、カルヴァンはジョン・ゲイツとしてイングランドで暗躍したが、処刑されたことにより潜伏を決め込み、並行して演じていたカルヴァンとしてその後の11年を生きた。

-----  
「ニュルンベルクに未知の飛行物体が出現」 (1561)

ニュルンベルクの明け方。垂直に滞空する2つの円筒形の物体が出現し、そこから赤、青、黒といった様々な色の円盤が飛び出した。未知の飛行物体は空中を飛び交い、激しく衝突したり、一時間の間、空中戦を演じていたという。「世界のUFO現象」より

※これは、宇宙人（グルジア王）と錬金術師・神秘思想家（バイエルン公）の現代科学を超えた超科学による戦いだった。

「バーゼルに未知の飛行物体が出現」（1566）

スイスのバーゼル上空、空を覆う、黒い球体が発光したり分裂しながら空中戦を戦っていたという。「世界のUFO現象」より

※これは、宇宙人（グルジア王）と錬金術師・神秘思想家（バイエルン公）の現代科学を超えた超科学による戦いだった。



**Alexander II**（1527～1605） カーケティ朝第4代グルジア王 在位1574～1601※画像なし  
ルイ1世（1530～1569） コンデ公、ユグノー派首領・将軍



**George X**（1561～1606） カートリ朝第8代グルジア王 在位1599～1606※画像なし  
アンリ4世（1553～1610） ブルボン朝初代フランス王 在位

ユグノー戦争で叔父コンデ公ルイが戦死したため、年少にしてユグノーの盟主となる。1572年、自身の婚礼に際して企てられたサン・バルテルミの虐殺に遭遇したが、カトリックに改宗して難を避け、1576年に脱走して再びプロテスタントに復帰し、1589年のアンリ3世の暗殺により王位を継承する。その後再度カトリックに改宗して国内を平定し、1598年にナントの勅令を發布して

カトリックとユグノーとの国内融和に努め、40年近くにわたる戦争を終結させた。戦後は戦争によって疲弊した国家の再建を行ったが、1610年に狂信的なカトリック信者によって暗殺された。アンリ4世 [wiki](#) より

※ブルボン朝の初代王アンリ4世はグルジア王の一族であるため、ユグノーを支持した。ユグノー戦争は、邪教の手先であるカトリック信者の根絶を目指していた。しかし、残念ながら、ブルボン朝のフランス王位は、第4代ブルボン朝フランス王ルイ15世の時に東本願寺宣如の一族に篡奪されてしまう。

- ・ George III (? ~ 1639) イメレティ朝第8代グルジア王 在位1605 ~ 1639
- ・ Simon II (? ~ 1630) カートリ朝第11代グルジア王 在位1619 ~ 1630
- ・ Teimuraz I (? ~ 1648) カーケティ朝第8代グルジア王 在位1605 ~ 1648

※見付神社の人身御供の神官一月長得（今川氏真）とその郎党を皆殺しにしたのは犬の早太郎だが、早太郎の正体は上記の3人のグルジア王だと考えられる。丁度、3人は修験道に励むために来日していたのかもしれない。そこに見付神社で人身御供が催されているのを小耳に挟み、3人のグルジア王が乗り込んで今川氏真の一味を皆殺しにした。

グルジア王たちは修行中で山伏の姿をしていたものの、堀りが深く、鼻が高いため、天狗と認識された。それで犬（天狗）と呼ばれたわけだ。見付神社で人身御供が中止になったのは一月長得（今川氏真）が死んだ1625年と考えられる。



- Alexander III** (? ~ 1660) イメルティ朝第9代グルジア王 在位1639 ~ 1660 ※画像なし  
ルイ13世 (1601 ~ 1643) ブルボン朝第2代フランス王 在位1610 ~ 1643



**Heraclius I** (1642～1709) カーケティ朝第10代グルジア王 在位1675～1676

**ルイ14世** (1638～1715) ブルボン朝第3第フランス王 在位1643～1715



**Archil** (1647～1699) イメルティ朝第11代グルジア王 在位1661～63、1698～99

**ヤコブ・アマン** (1644～1712) アーミッシュ教祖



※画像はアーミッシュの人々。グルジア王Archilは1699年に52歳で死んだことによりグルジアを脱し、スイスに潜

伏した。その後、ヤコブ・アマンとしてアーミッシュの始祖となった。カラシュのようにアーミッシュもUFOを持っているかどうかは不明だが、反自然的なものを嫌悪する発想は宇宙人と共通している。

---

### 「シュトラールズントに未知の飛行物体が出現」 (1665)

ドイツ、バルト海沿岸に飛行艇とドーム構造を備えた道の飛行物体が出現した。空の船団は、空中戦を演じ、それが数時間続いた後、すべてが消えてしまったという。「世界のUFO現象」より

※これは、宇宙人（グルジア王）と錬金術師・神秘思想家（バイエルン公）の現代科学を超えた超科学による戦いだった。

---



**David II** (1679～1722) カーケティ朝第11代グルジア王 在位1703～1720  
**ルイ・アレクサンドル・ド・ブルボン** (1678～1737) トゥールーズ伯

1696年1月に陸軍元帥、及びフランス軍司令官となった。1704年、ルイ・アレクサンドルはスペイン継承戦争において、敵方の英蘭連合軍をマラガの海戦で損害を与えたことで有名になった（戦略上は連合軍の勝利）。1713年、"トゥールーズ伯邸（現在はパリ1区・フランス銀行本店が入居）"を購入し居住。1714年夏には兄のメヌ公らと共にルイ14世の正式なフランス王位継承者とされた。ルイ・アレクサンドル・ド・ブルボン [wiki](#) より

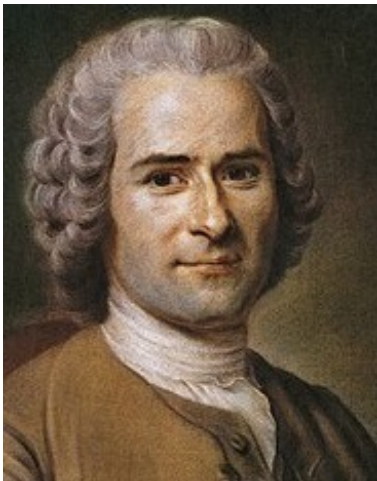
- ・ **Alexander V** (1703～1752) イメルティ朝第22代グルジア王 在位1720～1741
- ・ **Jesse** (?～1727) カートリ朝第22代グルジア王 在位1724～1727
- ・ **Constantine II** (?～1732) カーケティ朝第22代グルジア王 在位1722～1732



「人体自然発火事件」（1731）※写真はメアリー・リーサー（1951年）の事件現場

※Alexander V、Jesse、Constantine IIの治世にユダヤ人1731の一族が人体自然発火装置を完成させた。ユダヤ人1731の一族がこの兵器を使用して人間を焼いたことを知ると、グルジア王（超科学の種族）は激怒した。ついに本気になり、ユダヤ人1731の一族が築いたスバルバル諸島の基地を一瞬で破壊した。

この戦いでJesse、Constantine IIは死亡したようだが、グルジア王は更にユダヤ人1731の一族から科学技術を取り上げた上で、シベリアからユダヤ人1731の一族を永久追放した。この時に、シベリアに住んでいたタナトスの混血の残党はロシア、イギリス、スウェーデン、シチリア、日本に四散した。



**George IX**（1718～1778） イメルティ朝第23代グルジア王 在位1741～1742※画像なし  
ジャン＝ジャック・ルソー（1712～1778） 著述家・哲学者

私生活においては、マゾヒズムや露出癖、晩年においては重度の被害妄想があった。こうした精神の変調の萌芽は若い頃からあり、少年時代に街の娘たちに対する公然わいせつ罪（陰部を露出）で逮捕されかけた。更に、自身の5人の子供を経済的事情と相手側の家族との折り合いの悪さから孤児院に送った。自身の著書『告白』などでそれらの行状について具体的に記されている。  
ジャン＝ジャック・ルソーwikiより

※ルソーはアルメニア服を良く着ていたが、そこから彼がグルジア王だったと考える良い。奇遇なことにグルジア王ゲオルグ9世とルソーの没年が符合している。

上記のwikiの解説を見ると、死して尚、ルソーが東本願寺門主宣如の一族に侮辱され続けているこ

とに驚愕する。東本願寺門主宣如の一族（オラトワール協会）はルソーがグルジア王であることを知り、終生付き纏った。東本願寺門主宣如の一族（オラトワール協会）はカトリック教徒をラジコンのように操り、常にルソーの人生を人工的に下方修正し続けた。大量の信者がいるから可能なことである。

ルソーは、時のフランス政府（東本願寺門主宣如の一族）に著書「エミール」を批判・弾圧された。更に、ルソーはフランスを追放され、ヨーロッパ中をさすらい、流浪の生活を余儀なくされた。その間、本願寺門主の一族が操るヨーロッパ中のカトリック信者によって、ルソーはどこに逃げても顔を知られ、石を投げられ、程度の低い民衆に追われた。そして、仲間であるはずの貴族たちにはイヤミな陰謀を仕掛けられた。現代で言うところの集団ストーカーである。

ルソー曰く「あのようなおびただしい突発事件の堆積、残忍極まりないすべての仇敵の、いってみれば心としたはずみの興奮、国家を統治している全ての人々、地位あるすべての者たち共通の陰謀に協力するため、ぼくに何か人知れぬ怨恨を抱いている者達の中から特に選抜された折り紙つきのすべての人間、これらがこのように全面一致したことは、それを純粋に偶然だとするにはあまりにも異常すぎる」

「この陰謀に加担するのを阻む者が一人でもあればそれとは反対の事件がひとつでも起こればそれを阻害する事情がひとつでも突発すれば、ただそれだけでこの陰謀を挫折させるに十分であったはずだ。それなのに、あらゆる意志、あらゆる避けがたい事情、運命、そしてあらゆる革命が彼ら人間の仕業を強固にしてしまったのだ。それにしても驚異ともいうべき、このように見事な協力一致はその完全な成功が天の法令に明記してあるのではないかと怪しまずにはいられないくらいだ」

このときにルソーが経験したものは、村八分ならぬ、ヨーロッパ八分（カトリック八分）であった。ヨーロッパ随一の知性でありながら、本願寺によってあらぬ罪を着せられ、弾劾され、その、人としての高いレベルに見合わない待遇、生活、運命を演じることを強要された。



Heraclius II (1720~1798) カトリ+カケーティ朝初代グルジア王 在位1762~1798





ソロモン1世（1735～1784） イメルティ朝初代グルジア王 在位1752～66、68～84



George XII（1746～1800） カートリ+カケーティ朝初代グルジア王 在位1798～1800



ジャン=ポール・マラー（1743～1793）

1789年のフランス革命勃発後は、新聞『人民の友』を発行し過激な政府攻撃をして下層民から支持された。そのことがもとで1790年1月にイギリスに亡命。4月に戻ってからコルドリエ・クラブ（Club des Cordeliers）に入り、8月10日のテュイルリー王宮襲撃事件や反革命派への九月虐殺を引き起こしたといわれている。1792年、国民公会の議員に選出されて山岳派（ジャコバン派）に所属した。議会を主導するジロンド派を攻撃し、一時、逮捕されたがすぐに釈放されパリ民衆を蜂起させて最終的に国民公会から追放した。マラーwikiより



**David II** (1756~1795) イメルティ朝第3代グルジア王 在位1784~89、90~92※画像なし

ジョルジョ・オーギュスト・クートン (1755~1794) ジャコバン派

マクシミリアン・ロベスピエール (1758~1794) ジャコバン派

※ブルボン朝フランスの王族が悪（東本願寺門主宣如の一族）で汚染されていることを知ったグルジア王は直接潜入し、フランス革命を起こした。だが、エベール派は東本願寺門主乗如の一族である。エベール派は王室だけを目の仇にしていたが、ジャコバン派は諸悪の根源カトリックをしっかりと弾圧し、邪教クリューニ会をフランスから追放した。そして、邪教カトリックに代わるものとして「最高存在の祭典」を催した。

ただ、敵が誰かわからない疑念に恐怖を成したロベスピエールは、ダントンら異母兄弟でさえ信用できずに暴走し、拳句に粛清してしまった。彼は、自ら仲間を減らしたため、「敵を減らしてくれてありがとう」と笑う本願寺によって、最後は自分までもが処刑された。



ソロモン2世 (1772~1810) イメルティ朝第4代グルジア王 在位1789~90、1792~1810

ルイ・アントワーヌ・ド・サン＝ジュスト (1767~1794) ジャコバン派

ロベスピエールの同僚として辣腕をふるい、同派の政策に深く関与した。公安委員会の委員となって治安局を創設し、公会では左派と共に憲法草案作成や行政改革などを行ったが、フランス革命戦争が始まってからは前線視察に多くの時間を費やしてパリを離れていた。ヴァントーズ法は特にサン＝ジュストが実現を望んだ法令であったが、これがプレーヌ派との決裂を招き、失脚の要因になった。

1794年7月27日にテルミドールのクーデターで逮捕され、翌日の最後の演説を反対派に妨害されて果たせぬまま、ロベスピエールらと共に処刑された。遺体は同志とともにエランシ墓地に埋葬されたが、後の道路拡張で墓地が閉鎖されたことに伴って、遺骨はカタコンブ・ド・パリに移送されている。サン＝ジュスト [wiki](#) より

※グルジア王国が滅んだ後、グルジアの王族はヌーリスタン州に移住し、カラシュ人となる。



※画像はカラシュと呼ばれる謎が多い少数民族である。彼らは、浅黒い肌のインド人、アフガン

人が住むパンジャブに住んでいるが金髪・碧眼の白人であるため、なぜ彼らがここに住んでいるのか、謎を呼んでいる。彼らはこの地に1890年以降に訪れたという。こうして見ると彼らは不思議なまなざしを持っていることがわかる。迫力がある眼力を持つお婆さんなどはホンモノの魔女のようだ。彼らのことはだいぶ前から知っていたが、近頃は彼らが宇宙人の正体なのではないかと考えている。

宇宙人が日本人、インド人、北欧人の顔をしていることは歴史（十和田時代、パンジャブ時代、ロシア時代）から見ても明白だが、カラシュの村にも金髪・碧眼の白人だけでなく、アジア系、インド系の人々の顔がある。

カラシュの村はUFOに乗る人たちの国、いわゆる「宇宙人」の国なのかもしれない。宇宙人はタナトスの一族など、反自然的な事象を嫌悪する人々である。つまり、筆者は以前から宇宙人の人口はアマゾンの少数部族のように全員併せても数百人程度だろうと考えていた。カラシュの村にピッタリである。この考えが正しいかどうかは分からないが、例え、もしそうであっても、タナトスの一族は彼らに近づけない。

タナトスの一族は、古代から宇宙人の超科学を奪おうと苦心し、侵入を試みるたびに失敗し、成敗されてきた。だが、今現在、宇宙人には思考を読む装置があるため、昔と違って、タナトスの一族が接近すればタナトスは一瞬で塵と化するだろう。

或いは、ハザール帝国（ユダヤ人1731）、ヒヴァ・ハン国（ユダヤ人1908）、ボハラ・ハン国（チュクウのトバルカイン）などの国が隣り合わせるというカラシュの村の立地条件上、ユダヤ人1731+1908の一族などはカラシュが宇宙人だということを知っていたかもしれない。

カラシュの名の由来はシェクレシュ（チュクウ+ルハンガ+クウォス）である。シェクレシュ=クレシュ=カラシュとなる。

### ●ツングース大爆発（カラシュ人とヒヴァ・ハン国の知られざる戦い）



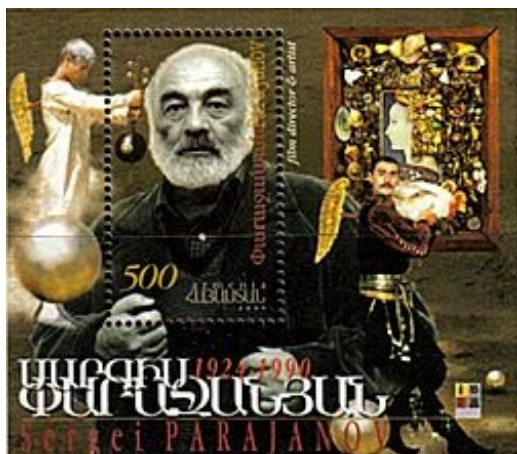
※画像はツングース大爆発である。ヒヴァ・ハン国第10代君主ムハンマドの統治時代、そしてグルジア王族がカラシュ人になって数年後の1908年に「ツングース大爆発」が発生した。ユダヤ人1908の一族は、宇宙人がシベリアに基地、実験施設を持っていることを知っていた。そのため、彼らはシベリアに出撃した。

自分たちを追放した宇宙人に復讐し、その後に世界を征服するべく、ユダヤ人1908の一族は空中要塞でシベリアに向かったものの、あえなく撃破されたわけである。それが「ツングース大

爆発」である。

宇宙人は武器を作らない。核兵器さえ作らなかった。彼らは物質を分子の次元で操作する技術を持つが、その要領で、彼らはあらゆる物質の原子を分裂させることが出来るようだ。つまり、ムハンマドたちが作った空中要塞は巨大な核爆弾でしかなかった。ただ、ウランを核分裂させたわけではないため、放射能は発生しなかった。

このツングース大爆発を機に、ムハンマドの一族はドイツへと逃亡し、一部は更にアメリカ合衆国に渡った。ドイツに渡った人々はロケット技術、ミサイルを開発し、アメリカに渡った人々からは、マンハッタン計画に従事する科学者たちが生まれた。オッペンハイマーやエドワード・テラーである。



**Mawlawi Afzal** (1925～2012) アフガニスタン・イスラム革命国首長※画像なし  
**セルゲイ・パラジャーノフ** (1924～1990) 映画作家

●ノルディック宇宙人の目撃例（彼らの正体はカラシュ人か？）



※画像はノルディックと呼ばれる宇宙人の想像画である。同じ白人でも、普通にいる俗っぽいアメリカ・ヨーロッパの一般人（失礼）よりは、カラシュと同じで崇高な印象を漂わせている。以下はノルディックとのコンタクトの歴史である。宇宙人の装いはUFOに乗るときの為のものだろうか？

- ・ 1946年 場所はニュージャージー。ハワード・メンジャーは金髪の宇宙人3人と接触した。
- ・ 1952年 オーソンと名乗る金星人がジョージ・アダムスキーに接触してきた。オーソンはブロンドだった。
- ・ 1954年 場所は南アフリカ。エリザベス・クララはUFOを目撃。搭乗員のブロンドの髪をした絶世の美青年に出会った。
- ・ 1973年 アルゼンチンの国道を走行中のトラック運転手が3人の男女ノルディックに呼び止められた。3人とも長いブロンドだった。
- ・ 1976年 場所はイギリス・ウィンチェスター。農道を塞ぐ形で小型UFOが着陸し、1人のノルディックがUFOから降りてきた。男は身長180cmほどで長いブロンドだった。
- ・ 1975年 場所はスイス・チューリヒ。ビリー・マイヤーは女性宇宙人セムジャーゼに出会う。この宇宙人はエラ人、プリアール人を称した。

### ■超科学を究めた宇宙人の日常生活（遊牧と農作業と修験道）



※画像はコンタクティーのビリー・マイヤーと宇宙人セムジャーゼ。カッコいい絵なのでいただいた。金星からきたと称したこのセムジャーゼはじつはカラシュ族であり、今でもアフガニスタンの僻地に住んでいるのかもしれない。

宇宙人は、じつは最先端都市などは築かず、カラシュ族、ウィルタ族（オロッコ族）などのように遊牧民として静かに暮らしている。それが超科学を極め、古代にポールシフトを起こし、大地殻変動で沿岸部を9日間沈め、核分裂で世界各地を砂漠化した人々が、何周もまわって得た答えなのだ。

科学の過信と乱用は人間を精神的に貶める。そう考えているのだ。そのため、自分たちの先祖が残した超科学を悪用することがないように、宇宙人の一族は数千年前から日本に来て修験道で心体共に鍛えている。ただ、現在の修験道の聖地は資本主義で汚染されているので、彼らは日本人が立ち入ることができない人跡未踏の山奥に踏み入り、修験道の聖地を新規に開拓している。

修験道に励む際、カラシュ族はUFOで日本に来ている。そして、古（いにしえ）から伝えられている通りの山伏のかっこうをして修行をしているようだ。アーミッシュを生んだ人々でもあることからわかるとおり、彼らは禁欲的な生活を送ってる。ただ、動物的な本能を抑圧することは

ない。この場合の禁欲というのは知能が生んだ文明の利器、それに伴う利便性に惑わされないという強い意志のことである。

彼らは宇宙に住むこともできるが、あえて住もうとはしない。なぜなら彼らは、宇宙は非常に殺風景な場所だということを知っているからだ。彼らが時折宇宙飛行士に姿を見せるのは重力の重要性を説いている。人工的に重力も作れないのに宇宙で生活するのは危険なことだ。生理的な機能は重力があるから正常に機能する。無重力空間で長期間生活することは目に見える生理現象だけでなく、目に見えない細胞分裂などの生理現象にも影響を与えるのだ。

UFOに乗って銀河系の果てまで行き、テレポートし、あらゆる生物の思考を読み、あらゆる物質（生物、無生物、水、火、大気）を思い通りに操作し、あらゆる物質の原子核を分裂させて核爆発を起こす人々は、今日も山奥で家畜を追い、農作業に汗をかいているのだろう。

### ●2013年チェリャビンスク州の隕石落下（宇宙人の威嚇）



※画像はチェリャビンスク州の隕石落下である。宇宙人は隕石を操り、それを破壊することが出来ることをデモンストレーションしてみせた。タナトスに対する威嚇である。

-----

### ●ケムトレイル（農薬毒の害を軽減させる地球に対する宇宙人の心遣い）



※画像は2016年に筆者が近所で撮影したケムトレイルだ。自慢ではないが、これほどはっきりしたケムトレイルの画像を他で見かけたことが無い。しかし、ネットもメディアも取り上げてくれない（それは筆者が本願寺の敵だからだ）。これは空に描かれた巨大なアスタリスクである。

アスタリスクは星を意味する記号だ。つまり、筆者はこれを隕石と解釈した。超科学の種族が隕石を落とそうとしていることを表している。彼らは、地上に蔓延り、環境を破壊し、正しい人々を虐げるタナトスに怒り心頭なのだ。他の画像も見たい方は拙著「神の啓示～ケムトレイル写真集」をご覧ください。

#### ●空飛ぶステッキ（農薬の害を教えてくれる無人型UFO）



※画像は空飛ぶステッキである。右上に小さく写っている。「世界のUFO現象」の記事によると、この写真は2003年のカナダで偶然撮影されたという。写っている人物がミステリーサークルを見学していた時の写真ということだが、この空飛ぶステッキは農薬の危険を教えようとしている。なぜなら筆者もこの空飛ぶステッキを見ているのだ。



筆者は●笠山に向かって散歩中だったが、某大学の裏山を通行中、その上空にこれを見つけた。全く同じもので、黒いステッキ状なのだが、ニヶ所でいやな印象の赤い光がヌメッと点滅していた。更に、その日は強風だったにもかかわらず、その物体は空に突き刺さったようにビクとも動かない。揺れもしない。

あとで考えたことだが、●笠山には競技場があり、農薬もふんだんに撒かれている。「宇宙人はそのことを注意するためにこれを飛ばした」という考えに行き着いた。宇宙人が放つ赤い光は常に注意・警告を意味する。筆者の体験と、上記の麦畑でのことをつき合わせて鑑みれば、空飛ぶステッキが農薬の害を警告しているのは間違いない。

●意思を持つ業火（悪い人間だけに狙いを定める捕食者の如き火炎。宇宙人曰く「愚かなこと、弱いことは悪である」）



※画像は2018年のカリフォルニア山火事のひとこまであるが、これは最早山火事とは呼べない。偽者の神を崇める愚かな人類（邪教信者）に対する真の神による鉄槌である。愚か者が、王のように自由を満喫するのは間違いであることを教えてくれている。

●意思を持つ水（ヨーロッパを襲う竜巻、日本東北部を襲った台風も遺伝子組み換え畑の壊滅が目的である）



※上画像は2019年アメリカ中西部洪水のひとこま、下画像は2019年台風19号の被災地のひとこまである。宇宙人は超科学により水を分子の次元で操り、遺伝子組み換え農作物を栽培しているアメリカ農業地帯や関東東北地域を水の底に沈めている。

遺伝子組み換え農業をやめれば洪水は二度と起こらないだろう。逆に、遺伝子組み換え農業を続ける限り洪水が発生し続けること、それをここに断言する。宇宙人が起こす洪水は、どこまでも標的を追う「ジェイソンみたいな水」といってよかろう。

●意思を持つ低温（温暖化という大規模なウソをつく愚か者を凍りつかせる神の鉄槌）



※画像は2018年～2019年冬のシカゴである。宇宙人がアメリカ中西部を南極に変えたひとこまだ。温暖化十字軍は、この極端な冷凍現象も温暖化の一環だと述べているが、「ウソをついたらつき通せ」という嘘つきの戯れに過ぎない。そんな風に言うことが出来るなら、逆に「温暖化は地球の氷河期化の一環だ」と述べることも可能だろう。反論してみろ。ただ言えることは、もし本当に温暖化を止めたいなら温暖化を口にする権威を皆殺しにすれば済むことだ。

2019年冬（執筆時点）、宇宙人は既にアメリカやヨーロッパを冷凍しているが、まだまだ序の口だ。これからもっと冷凍は過激さを増すだろう。日本は全然寒くない。2019年12月1日にテレビでトランプ大統領を批判するハリソン・フォード（東西本願寺に操られている）のひとことの方が寒かったくらいだ。あれを聞いて背筋が冷えた。

宇宙人エラドの一族～女神エリウ、ラテン王国、シュメール都市国家ウル、アーリア人、衛、老子、道教、セレウコス朝、カッパドキア王国、橘諸兄、小野妹子、ブルガリア帝国、ブニョロ帝国、ウィルタ族

---



女神エリウ（1万2千年前）※画像はエリウ

※エラドは大地殻変動が起きると、超科学の継承を決意し、凍りついた南極（五岳神の国）からマハラエルと共に古代アイルランドに移住した。エリウの名の由来はエラドである。



・ウラルトゥ王国（BC 5千年）

※画像はウラル山脈である。マハラエルは「トロイア戦争」「マー・トゥーレスの戦い」を機に、エラドと共に古代アイルランドからウラル地方に移住し、ウラルトゥ王国（公式には認められていないが第一次ウラルトゥ王国）を築いた。ウラルトゥの由来はマハラエルとエラドの組み合わせである。マハラエル+エラド=エルラドウラルトゥとなる。ウラルの名はウラルトゥ王国が当地に存在した証である。

ロシア人は、彼ら宇宙人の子孫である。ロシア（ルス）の由来はブリアレオース（マハラエルは

マベエとブリアレオースの合体部族)だと考えられる。ブリアレオース=レオス=ルスとなる。

---

●真のイスラエル王国の時代（宇宙人の古代台湾統治時代）

- ・ルカイ族（クウォスのトバルカイン）
- ・ツォウ族（ゼウスの一族）
- ・サイシャット族（ゼウスの一族）
- ・タオ族（エラド）
- ・セデック族（マハラエル）
- ・クーロン族（チュクウのトバルカイン+ルハンガのトバルカイン）
- ・タオカス族（エラド+クウォスのトバルカイン）
- ・パゼッヘ族（ルハンガ+スバル人）
- ・アリクン族（オロクンのトバルカイン）
- ・ロア族（マハラエル）
- ・シラヤ族（スバル人+ルハンガのトバルカイン）



※画像は台湾の絶景。真のイスラエル王国とは、葦原中津国（天草諸島～八代湾）と高天原（台湾）による連邦国家だった。古代台湾はもともとオリジナル人類ニャメ（アミ族）の領土であり、日本神話で見られる天津神の故郷でもある。

BC 35 世紀頃、上記の宇宙人（超科学の種族）たちが集合し、最初の人類エスが築いた葦原中津国と連合してイスラエル（台湾、沖縄諸島、九州）を統治していた。

---



- ・ラティヌス（BC 32世紀頃）
- ・ラテン王国（BC 32世紀頃）
- ・都市国家ウル（BC 32世紀頃）

※画像はヴォルガ河である。伝説のラテン王国が存在したのはイタリアではない。ラテン王国の範囲は広大であり、北はヴォルガ流域・ウラル山脈、西はバルカン半島、東はアルタイ山脈・オロクス（中国）、南はメソポタミア・インドにまで広がっていた。つまり、メソポタミア文明や黄河文明をも内包していた巨大王国だった。

ラティヌスの由来はエラドとアルキュオネウスの組み合わせである。エラド+アルキュオネウス＝ラドネウス＝ラティヌス＝ラテンとなる。オロクンのトバルカインは預言者ナタンの一族とその街を核分裂させて消滅させた当人だが、その「黙示録アルマゲドン」を機に、オロクンのトバルカインは巨大な罪悪感によって超科学を放棄し、ウラル山脈に移り住んでエラドと共にラティヌス（ラテン王国）を生んだ。

この時にオロクンのトバルカインがウラルを訪れた際、初めてヴォルガ河はヴォルガと呼ばれ、バルカン半島もバルカンと呼ばれた。ヴォルガ、バルカンの由来はトバルカインである。トバルカイン＝トヴァルガイン＝ヴォルガとなり、トバルカイン＝バルカイン＝バルカンとなる。

#### ●アーリア人（ティールタンカラの一族）

- ・バーラタ族（BC 32世紀）
- ・トリツ族（BC 32世紀）
- ・マツヤ族（BC 32世紀）
- ・パルシュ族（BC 32世紀）
  
- ・クル族（BC 32世紀）

●アーリア人（デウスの一族）

- ・ダーサ族（BC 32世紀）

●アーリア人（オロクンのトバルカインの一族）

- ・アヌ族（BC 32世紀）
- ・ドルヒユ族（BC 32世紀）
- ・パニ族（BC 32世紀）
- ・バラーナ族（BC 32世紀）
- ・ブリグ族（BC 32世紀）
- ・プール族（BC 32世紀）
- ・アリナ族（BC 32世紀）

※アーリア人とはラテン王国の住人のことである。アーリアの由来はエリウである。エリウ＝エーリウ＝アーリアとなる。ブリグの由来はトバルカインであるが、他の部族は地名を冠している。アヌ、パニの由来はヴァナラシであり、ドルヒユの由来はトロイアであり、バラーナの由来はヴァラナシである。

ラテン王国は、タナトスの一族の国々に隣接していた。古代ヨーロッパにはカピラバストゥ・バルト（ティールタンカラの一族）、アイギュプトス・ハルシュタット（預言者ナタンの一族）、ダナイス（タナトスの一族）の王国があり、中央アジアには預言者ナタンの一族の国ミディア（ミタンニ王国＋大宛）、黒海にはカンボージャ・ガンダーラ（デウスの一族）、インドにはデカン（ティールタンカラの一族）、中国には殷（サトゥルヌスの一族）などの王国があった。

- ・ Sláine mac Dela (?～BC 1513) ハイ・キング 在位BC 1514～BC 1513
- ・ Rudraige mac Dela (?～BC 1511) ハイ・キング 在位BC 1513～BC 1511
- ・ Sengann mac Dela (?～BC 1502) ハイ・キング 在位BC 1507～BC 1502
- ・ Fiacha Cennfinnán mac Starn (?～BC 1497) ハイ・キング 在位BC 1502～1497
- ・ Rinnal mac Genann (?～BC 1491) ハイ・キング 在位BC 1497～1491
- ・ Fodbgén mac Sengann (?～BC 1487) ハイ・キング 在位BC 1491～1487
- ・ Eochaid mac Eirc (?～BC 1477) ハイ・キング 在位BC 1487～1477

※アイルランドのハイ・キングはBC 16世紀頃から始まったが、この歴代ハイ・キングは同時に都市国家ウルの王、アーリア人の王と考えることも出来る。

-----

老子



- ・衛（BC 11世紀頃）
- ・老子（BC 11世紀頃）
- ・道教（BC 11世紀頃）

※画像は老子。BC 11世紀の「十王戦争」を機に、アーリア人は春秋戦国時代の中国に移住した。アーリア人の「十王戦争」とはラテン王国とタナトスの王国（ティールタンカラの一族とデウスの一族）との戦争だったと考えることが出来る。

この時に衛を築き、老子（道教）を生んだ。衛（ウェイ）、老子（ラオ）、道教（タオ）の由来はエラドである。エラド＝ウェイラオタオ＝衛（ウェイ）＋老子（ラオ）＋道教（タオ）となる。衛の王が代々の道教の神官を務めた。

#### ●道教の指導者（衛の歴代王）

- ・康叔（生没年不詳） 衛初代王 在位 11世紀頃
- ・康伯（生没年不詳） 衛第2代王
- ・孝伯（生没年不詳） 衛第3代王
- ・嗣伯（生没年不詳） 衛第4代王
- ・嗣伯の子（生没年不詳） 衛第5代王
- ・靖伯（生没年不詳） 衛第6代王 在位？～BC 867
- ・貞伯（？～BC 867） 衛第7代王 在位BC 866～BC 855
- ・頃候（？～BC 855） 衛第8代王
  
- ・出公（？～BC 480） 衛第30代王 在位BC 492～BC 480
- ・莊公（？～BC 478） 衛第31代王 在位BC 479～BC 478
- ・衛君起（？～BC 477） 衛第32代王 在位477
- ・出公（？～BC 470） 衛第33代王 在位BC 476～BC 470
- ・悼公（？～BC 465） 衛第34代王 在位BC 469～BC 465
- ・敬公（？～BC 432） 衛第35代王 在位BC 464～BC 432
- ・昭公（？～BC 426） 衛第36代王 在位BC 431～BC 426



- ・懐公 (?～BC415) 衛第37代王 在位BC425～BC415
- ・慎公 (?～BC383) 衛第38代王 在位BC414～BC383
- ・声公 (?～BC372) 衛第39代王 在位BC382～BC372
- ・成侯 (?～BC343) 衛第40代王 在位BC371～BC343

平侯 (?～BC335) 衛第41代王 在位BC342～BC335

アンティオコス (生没年不詳) セレウコス1世父

アリアラテス1世 (?～BC322) カップパドキア王国初代王 在位BC350～BC322

- ・嗣君 (?～BC293) 衛第42代王 在位BC334～BC293
- ・懐君 (?～BC254) 衛第43代王 在位BC292～BC254

元君 (?～BC230) 衛第44代王 在位BC254～BC230

アリアラムネス (?～BC230) カップパドキア王国第4代王 在位BC280～BC230

- ・衛君角 (?～BC209) 衛第45代王 在位BC229～BC209

※衛が秦によって滅亡する寸前、衛の王平侯はオリエント地方に進出し、セレウコス朝初代王セレウコス1世を儲け、カップパドキア王国を築き、初代王に即位している。平侯の一族はシリアとカップパドキアを支配しながら月氏としてモンゴルの一部も支配下に置いていた。月(ユエ)の由来は衛(ウェイ)である。

-----

### ●月氏の王(カップパドキア王国の歴代王)

アリアラテス3世 (?～BC220) カップパドキア王国第5代王 在位BC230～BC220

セレウコス3世ケラウノス (?～BC223) セレウコス朝第5代王 在位BC226～BC223

アリアラテス4世 (?～BC163) カップパドキア王国第6代王 在位BC220～BC163

アンティオコス4世エピファネス (?～BC164) セレウコス朝第8代王 在位BC175～BC164

アンティオコス5世エウパトル (?～BC162) セレウコス朝第9代王 在位BC164～BC162

アリアラテス5世 (?~BC130) カッパドキア王国第7代王 在位BC163~BC130

アンティオコス7世シデテス (?~BC129) セレウコス朝第13代王 在位BC138~BC129

・アリアラテス6世 (?~BC112) カッパドキア王国第8代王 在位BC130~BC112

・アリアラテス7世 (?~BC100) カッパドキア王国第9代王 在位BC112~BC100

アリアラテス8世 (?~BC98) カッパドキア王国第10代王 在位BC100~BC98

アンティオコス8世グリュポス (?~BC96) セレウコス朝第17代王 在位BC125~BC96

アリオバルザネス1世 (?~BC63) カッパドキア王国第11代王 在位BC95~BC63

アンティオコス13世アジアティクス (?~BC63) セレウコス朝第20代王 在位BC69~BC63

※アンティオコス13世はセレウコス朝最後の王である。

・アリオバルザネス2世 (?~BC53) カッパドキア王国第12代王 在位BC63~BC53

・アリオバルザネス3世 (?~BC42) カッパドキア王国第13代王 在位BC53~BC42

・アリアラテス10世 (?~BC36) カッパドキア王国第14代王 在位BC42~BC36

・アルケラオス1世 (?~17) カッパドキア王国第15代王 在位BC36~17

アルケラオス2世 (?~37) カッパドキア王国第16代王 在位17~37

Feradach Finnfechtnach (?~36) ハイ・キング 在位14~36

Fíatach Finn (?~39) ハイ・キング 在位36~39

※カッパドキア王アルケラオス2世の頃から再びアイルランドのハイ・キングを兼ねるようになった。



**Art mac Cuinn** (?~195) ハイ・キング 在位165~195※画像なし

張角 (?~184) 太平道首領

※ハイ・キングは中国に帰還し、張角に変身して太平道を指揮し、「黄巾の乱」を指揮した。

---

●伽耶の王 (グプタ朝の歴代王)

**Colla Uais** (?~326) ハイ・キング 在位322~326

チャンドラグプタ1世 (?~330) グプタ朝初代王 在位320~330

※ハイ・キングはインドにグプタ朝を築いた。グプタの名の由来はカッパドキアである。グプタの王は伽耶の王も兼ねた。

吉備下道前津屋 (?~463)

スカンダグプタ (?~467) グプタ朝第6代王 在位455~467

Lóegaire mac Néill (?~458) ハイ・キング 在位428~458

---

●伝説のブニョロ帝国の帝王 (ブルガリア帝国の歴代皇帝)



小野妹子（6世紀後半）

ゴストウン（?～605） エルミ朝初代ブルガリア王 在位603～605※画像なし

氏名不明（生没年不詳） ブニョロ帝国初代王 在位不明※画像なし

※小野妹子が初代王ゴスティンに変身し、ブルガリア帝国を築いたと考えられる。ブルガリアの名の由来はトバルカインとアーリアの組み合わせである。トバルカイン+アーリア=バルカリア=ブルガリアとなる。

小野妹子はブルガリアを統治しながら同時に東アフリカに進出し、伝説のブニョロ帝国を築いた。ブニョロ帝国の王の系譜は不明だが、ブルガリア帝国の王がブニョロ帝国の王を兼任していたので、ブルガリア皇帝の系譜を見れば明らかである。ブニョロの由来はヴァナラシである。

クブラト（?～665） ドゥロ朝初代ブルガリア王 在位605～665

エゼルウェルホ（?～665） サセックス王国最後の王 在位660～665



バトバヤン（?～668） ドゥロ朝第2代ブルガリア王 在位665～668

レケスウィント（610～672） 西ゴート王国第29代王 在位649～672

アスパルフ（?～700） ドゥロ朝第3代ブルガリア王 在位668～700

エギカ（?～702） 西ゴート王国第32代王 在位687～702

テルヴェル (?～721) ドゥロ朝第4代ブルガリア王 在位700～721

アギラ2世 (695～714) 西ゴート王国第35代王 在位711～714

アルド (?～718) 西ゴート王国第36代王 在位714～718



コルメシイ (?～738) ドゥロ朝第5代ブルガリア王 在位721～738※画像なし

カール・マルテル (686～741) フランク王国宰相※ピピン3世父

橘諸兄 (684～757) 初代橘氏長者

セヴァル (?～753) ドゥロ朝第6代ブルガリア王 在位738～753

Áed Allán (?～743) ハイ・キング 在位730～738

吉備真備 (695～775)

Domnall Midi (700～763) ハイ・キング 在位739～758

橘奈良麻呂 (721～757) 橘諸兄の子

コルミソシュ (?～756) ヴォキル朝初代ブルガリア王 在位753～756

Niall Frossach (718～778) ハイ・キング 在位759～765

※橘氏、小野氏は月氏の王族であり、吉備氏、上道氏、下道氏、香夜氏はカッパドキアの王族である。橘の名の由来はタタール（モンゴル）のパニ（アーリア人）、小野の名の由来はアヌ（アーリア人）、吉備、道、香夜の名の由来はカッパドキアである。タタール+パニ=タタパニ=橘となり、アヌ=小野となり、カッパドキア=吉備+道+香夜となる。「奈良」の名は橘氏、小野氏が初めて日本に伝えた。奈良の由来はヴァナラシである。

・ヴィネフ (?～760) ヴォキル朝第2代ブルガリア王 在位756～760

・テレツ (?～763) ヴォキル朝第3代ブルガリア王 在位760～763

・サビン (?～766) ヴォキル朝第4代ブルガリア王 在位763～766

・ウモル (?～766) ヴォキル朝第5代ブルガリア王 在位766

・トクトゥ (?～767) ヴォキル朝第6代ブルガリア王 在位766～767



パガン (?~768) ヴォキル朝第7代ブルガリア王 在位767~768※画像なし  
ピピン3世 (714~768) カロリング朝初代フランク王 在位751~768

・テレリグ (?~777) ヴォキル朝第8代ブルガリア王 在位768~777



ドクム (?~815) ドゥロ朝第3代ブルガリア王 在位814~815※画像なし  
シャルルマーニュ大帝 (742~814) 神聖ローマ帝国初代皇帝 在位768~814

アデライド (生没年不詳) ピピン3世の子

シゲレッド (?~825) エセックス王国最後の王 在位798~825

オムルタグ (?~831) ドゥロ朝第5代ブルガリア王 在位814~831

エクバード (769~839) イングランド王国初代王 在位802~839



マラミル (?～852) ドゥロ朝第6代ブルガリア王 在位831～852※画像なし  
ピヤスト (740～861) ポーランド王国初代王 在位不明



プレシアン (?～852) ドゥロ朝第7代ブルガリア王 在位836～852※画像なし  
エゼルウルフ (?～858) イングランド王国第2代王 在位839～858



ヴラディーミル (?～893) ドゥロ朝第9代ブルガリア王 在位889～893※画像なし  
アルフレッド大王 (849～899) イングランド王国第6代王 在位871～899  
ボンドチャル・ムンカグ (850～900) ボルジギン家の祖

※ヴラディミールはアルフレッド大王に変身し、デーン人を蹴散らしてデーンローを壊滅させた。また、アルフレッド大王はボンドチャル・ムンカグに変身して霸王チングス・ハーンを生むボルジギン家の始祖となった。アルフレッドとボンドチャルの生没年が1年しか違わない点も興味深い。明らかに同一人物だろう。



シメオン1世 (?~927) ドゥロ朝第10代ブルガリア王 在位893~927※画像なし  
エドワード長兄王 (877~924) イングランド王国第7代王 在位899~924

ロマン (?~997) ドゥロ朝第13代ブルガリア王 在位972~997  
ゲーザ (940~997) イシュトヴァーン1世父

●チンチャ王国の王 (サムイル朝ブルガリアの歴代王)



エセルレッド2世 (968~1016) イングランド王国第14代王 在位978~1013  
サムイル (?~1014) サムイル朝初代ブルガリア王 在位976~1014※画像なし  
ガヴリル・ラドミール (?~1015) サムイル朝第2代ブルガリア王 在位1014~1015※画像なし  
イヴァン・ヴラディスラフ (?~1018) サムイル朝第3代ブルガリア王 在位1015~1018※画像なし





ペタル・デリヤン (?~1041) サムイル朝第4代ブルガリア王 在位1040~1041  
イシュトヴァーン1世 (969~1038) アールパード朝初代ハンガリー王 在位1000  
~1038

コンスタンティン・ボディン (?~1072) 在位1072

シャラモン (?~1074) アールパード朝第6代ハンガリー王 在位1063~1074

※サムイル朝ブルガリア王は現ペルーに進出し、チンチャ王国を築いた。チンチャの由来は朝鮮語「本当に?」である。1018年~1040年までの間はブルガリア人のペルーへの大移住も起きたようだ。約100年ほどのブルガリア王位途絶は原因不明であるが、実際には拠点がハンガリーに移ったため、キングメーカーはブルガリア王からハンガリー王にスイッチしていた。

●ボルジギン家当主 (アールパード朝歴代ハンガリー王)



ゲーザ1世 (1040~1077) アールパード朝第7代ハンガリー王 在位1074~1077

ラースロー1世 (1040~1095) アールパード朝第8代ハンガリー王 在位1077~1095

カイドゥ (1040~1100) ボンドチャルの子※画像なし

ヴワディスワフ1世 (1043~1102) ピヤスト朝第8代ポーランド公 在位1079~

・バイ・シンコル・ドクシン (?~?) カイドウの子



カールマーン1世 (1070~1116) アールパード朝第9代ハンガリー王 在位1095~1116※画像なし

トンビナイ・セチェン (1080~1130) ドクシンの子※画像なし

ボレスワフ3世 (1085~1138) ピヤスト朝第10代ポーランド公 在位1102~1138



イシュトヴァーン2世 (1101~1131) アールパード朝第10代ハンガリー王 在位1105~1131

カブル・カーン (1100~1147) セチェンの子

ヴワディスワフ2世 (1105~1159) ピヤスト朝第11代ポーランド公 在位1138~1146

・バルタン・バートル (?~?) カブルの子



ペーラ2世 (1108~1141) アールパード朝第9代ハンガリー王 在位1131~1141 ※画像なし

ステファン・ネマニャ (1113~1200) セルビア王国初代王 1113~1200



ゲーザ2世 (1130~1162) アールパード朝第12代ハンガリー王 在位1141~1162

イエスゲイ (1134~1171) バートルの子

ウラジーミル3世 (1132~1173) リューリク朝第24代キエフ大公 在位1171 ※画像なし

※アールパード朝ハンガリー王が新規にブルガリア王位を設け、第二次ブルガリア帝国を築いた。



カロヤン (?～1207) アセン朝第4代ブルガリア王 在位1197～1207※画像なし  
イムレ1世 (1174～1204) アールパード朝第15代ハンガリー王 在位1196～1204※画像なし  
サワ (1174～1236) セルビア大主教※画像なし  
テオドロス1世 (1175～1222) ラスカリス朝ビザンツ帝国初代皇帝 在位1205～1222

---

第12代ハンガリー王ゲーザ2世 (イエスゲイ) の子



マルギト (1162～1208) ※画像なし  
チンギス・ハーン (1162～1227) モンゴル帝国初代皇帝 在位1206～1227  
ムスチスラフ3世 (?～1223) リューリク朝第39代キエフ大公 在位1214～1223※画像なし

---

スミレッツ (?～1298) テルテル朝第2代ブルガリア王 在位1292～1298  
心地覚心 (1207～1298) 臨済宗建仁寺派妙光寺開創



チャカ (?~1300) テルテル朝第4代ブルガリア王 在位1299~1300※画像なし  
クビライ (1215~1294) 大元帝国初代皇帝 在位1260~1294

※ここまで見てくると、ブルガリア帝国は稀代のキングメーカーだったことがわかる。

テオドル・スヴェトスラフ (?~1322) テルテル朝第5代ブルガリア王 在位1300~  
1322

テムル (?~1307) 大元帝国第2代皇帝 在位1294~1307

カイシャン (?~1311) 大元帝国第3代皇帝 在位1307~1311

アユルバルワダ (?~1320) 大元帝国第4代皇帝 在位1311~1320



ゲオルギ2世テルテル (?~1323) テルテル朝第6代ブルガリア王 在位1322~13  
23※画像なし

フリードリヒ1世 (1257~1323) マイセン辺境伯 在位1292~1323

シデバラ (?～1323) 大元帝国第5代皇帝 在位1320～1323※画像なし

オスマン1世 (1258～1326) オスマントルコ帝国初代皇帝 在位1299～1326

※以前、フビライの子アヤチとオスマン1世を同じにしていたが、訂正している。ブルガリアのゲオルギ2世は大元帝国の皇帝シデバラとオスマントルコ帝国初代皇帝オスマン1世に変身した。



ミハイル3世シシュマン (1280～1330) シシュマン=アセン朝初代ブルガリア王 在位1323～30※画像なし

イエスン・テムル (?～1328) 大元帝国第6代皇帝 在位1323～1328※画像なし

コシラ (?～1329) 大元帝国第9代皇帝 在位1329※画像なし

イヴァン1世 (1288～1340) モスクワ大公 在位1325～1340

イヴァン・ステファン (?～1331) シシュマン=アセン朝第2代ブルガリア王 在位1330～1331

トク・テムル (?～1332) 大元帝国第8、10代皇帝 在位1328～29、1329～32



イヴァン・アレクサンダル (?～1371) シシュマン=アセン朝第3代ブルガリア王 在位1331～71※画像なし

トゴン・テムル (1320～1370) 大元帝国第12代+北元初代皇帝 在位1333～

68、1368～70

イヴァン・シシュマン (?～1393) シシュマン=アセン朝第4代ブルガリア王 在位1371～1393

イエスデル (?～1391) 北元第4代皇帝 在位1388～1391

イヴァン・スラツィミル (?～1396) シシュマン=アセン朝第5代ブルガリア王 在位1356～1396

エンケ・ハーン (?～1394) 北元第5代皇帝 在位1391～1394

・フリードリヒ2世 (1310～1349) マイセン辺境伯 在位1323～1349

・フリードリヒ3世 (1332～1381) マイセン辺境伯 在位1349～1381

-----

●宇宙人エラ人+ウィルタ族・オロッコ族の首長 (歴代ザクセン=コーブルク=ゴータ公)

・ウィルタ族 (15世紀頃)

・オロッコ族 (15世紀頃)



※画像はウィルタ族 (オロッコ) の人々である。宇宙人 (オロクンのトバルカインとエラド) が共同で築いたブルガリア帝国が滅ぶと、両者はシベリアに移り、ウィルタ族、オロッコ族となり、シベリアで超科学の研究に勤しんだ。

ウィルタとオロッコの代々の首長は、ザクセン=ゴータ=コーブルク公も兼ねた。ウィルタの由来はエラドであり、オロッコの由来はオロクンである。画像の人々を見ていると、時折報告されるモンゴロイド型宇宙人の正体とはウィルタ族 (オロッコ) なのではないかと思える。



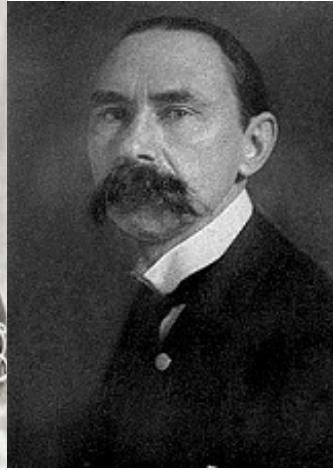
コンスタンティン2世 (?~1422) シシュマン=アセン朝第6代ブルガリア王在位1396~1422※画像なし

フリードリヒ1世 (1370~1428) ザクセン選帝侯 在位1407~1428

- ・フリードリヒ2世 (1412~1464) ザクセン選帝侯 在位1428~1464
- ・エルンスト (1411~1486) ザクセン選帝侯 在位1464~1486
- ・ヨハン (1468~1532) ザクセン選帝侯 在位1525~1532
- ・ヨハン・フリードリヒ (1503~1554) ザクセン選帝侯 在位1532~1547
- ・ヨハン・ヴィルヘルム (1530~1573) ザクセン=ヴァイマル公
- ・Johann II (1570~1605) Duke of Saxe-Weimar
- ・エルンスト1世 (1601~1675) ザクセン=ゴータ=アルテンブルク公
- ・John Ernest IV (1658~1729) Duke of Saxe-Coburg-Saalfeld
- ・フランツ・ヨシアス (1697~1764) ザクセン=コーブルク=ザールフェルト公
- ・エルンスト・フリードリヒ (1724~1800) ザクセン=コーブルク=ザールフェルト公
- ・フランツ (1750~1806) ザクセン=コーブルク=ザールフェルト公
- ・フェルディナント (1785~1851)
- ・アウグスト・ルートヴィヒ・ヴクトル (1818~1881)

-----  
アウグスト・フォン・ザクセン=コーブルク=ゴータの子





フェルディナンド1世（1861～1948）　ブルガリア王国初代王　在位1887～1908

ダグラス・ハイド（1860～1949）　アイルランド初代大統領　任期1938～1945

※宇宙人エラドの一族は、女神エリウの頃の故地であるアイルランドに帰ってきた。

-----  
アウグスト・フォン・ザクセン＝コーブルク＝ゴータの孫





レオポルト・クレメンス（1878～1916） フィリップの子

ショーン・オケリー（1882～1966） アイルランド第2代大統領 任期1945～1959

エイモン・デ・ヴァレラ（1882～1975） アイルランド第3代大統領 任期1959～1973

ウィリアム・コスグレイヴ（1880～1965） アイルランド初代首相 任期1922～1932

---

初代ブルガリア王フェルディナンド1世の孫



フェルディナント・オイゲン（1925） ナデジダ・ブルガルスカの子※画像なし

チャールズ・ホーヒー（1925～2006）アイルランド第6代首相 任期1979～81、1982、1987～1992



オイゲン・ケーバーハル（1930） ナデジダ・ブルガルスカの子※画像なし

ボリス・エリツィン（1931～2007） ロシア連邦初代大統領 任期1991～1999

イオン・イリエスク（1930） ルーマニア第2、4代大統領 任期1990～96、2000～04

アルバート・レイノルズ（1932～2014） アイルランド第15代首相 任期1992～1994





シメオン2世（1943） 第3代ブルガリア王 在位1943～1946

シュミット・パール（1942） ハンガリー共和国第4 第大統領 任期2010～2012

ミロシュ・ゼマン（1944） チェコ第3代大統領 任期2013～現在

マイケル・D・ヒギンス（1941） アイルランド第9代大統領 任期2011～現在



カルダム・サクスコブルクゴツキ（1962～2015） ブルガリア王シメオン2世の子

ケヴェール・ラースロー（1959） ハンガリー共和国大統領代行 任期2012

アーデル・ヤーノシュ（1959） ハンガリー共和国第5 第大統領 任期2012～現在

ブライアン・カウエン（1960） アイルランド第18代首相 任期2008～2011

※ハンガリー政府はハンガリー国内の遺伝子組み換えとうもろこしの畑を焼き尽くし、まともなとうもろこしを栽培し、冷凍食品として輸出していた。日本では業務スーパーで売られていた（現在では撤去されている）。しかし、これを不服としたイギリス政府（西本願寺門主文如と法如の一族）が「有毒な細菌に汚染されたハンガリーの冷凍食品を食べたせいでイギリス国民が死んだ」とウソをつき、世界的にハンガリー冷凍食品を輸出禁止にした。本願寺は、どうしても安全なものを人類に食べさせたくないのだ。

宇宙人マハラエルの一族～戦闘の女神マッハ、フルリ人、ウラルトゥ王国、イリュリア王国、楼蘭、モラヴィア王国、平将門、平清盛、ムラービト朝、ムワッハド朝、フス派、雑賀衆、ヘーチマン国家、スタジオ・ジブリ

---



- ・ 戦闘の女神マッハ（1万2千年前）
- ・ 魔神バロール（1万2千年前）

※画像は戦闘の女神マッハ。マッハ、バロールの名の由来はマハラエルである。大地殻変動が起きると、マハラエルは超科学の継承を決意し、凍りついた南極（五岳神の国）からエラドと共に古代アイルランドに移住した。

- ・ ウラルトゥ王国（BC 5千年）

※マハラエルは「トロイア戦争」「マー・トゥーレスの戦い」を機に、エラドと共に古代アイルランドからウラル地方に移住し、ウラルトゥ王国（公式には認められていないが第一次ウラルトゥ王国）を築いた。ウラルトゥの由来はマハラエルとエラドの組み合わせである。マハラエル+エラド=エルラドウラルトゥとなる。ウラルの名はウラルトゥ王国が当地に存在した証である。ロシア人は、彼ら宇宙人の子孫である。ロシア（ルス）の由来はブリアレオース（マハラエルはマベエとブリアレオースの合体部族）だと考えられる。ブリアレオース=レオス=ルスとなる。

#### ● 真のイスラエル王国の時代（宇宙人の古代台湾統治時代）

- ・ ルカイ族（クウォスのトバルカイン）
- ・ ツォウ族（ゼウスの一族）
- ・ サイシャット族（ゼウスの一族）
- ・ タオ族（エラド）

- ・セデック族（マハラエル）
- ・クーロン族（チュクウのトバルカイン+ルハンガのトバルカイン）
- ・タオカス族（エラド+クウォスのトバルカイン）
- ・パゼツヘ族（ルハンガ+スバル人）
- ・アリクン族（オロクンのトバルカイン）
- ・ロア族（マハラエル）
- ・シラヤ族（スバル人+ルハンガのトバルカイン）



※画像は台湾の絶景。真のイスラエル王国とは、葦原中津国（天草諸島～八代湾）と高天原（台湾）による連邦国家だった。古代台湾はもともとオリジナル人類ニヤメ（アミ族）の領土であり、日本神話で見られる天津神の故郷でもある。

BC 35 世紀頃、上記の宇宙人（超科学の種族）たちが集合し、最初的人类エスが築いた葦原中津国と連合してイスラエル（台湾、沖縄諸島、九州）を統治していた。

- ・冥界神エルリク（BC 35 世紀）
- ・ミャオ族（BC 35 世紀）

※BC 35 世紀、古代台湾にいたマハラエルは預言者ナタンの一族の支配下にあったようだ。その時代、マハラエルは冥界神エルリクと呼ばれた。エルリクの由来はマハラエルキ（マハラエルの人）である。マハラエルキ＝アラエルキ＝エルリクとなる。

冥界神エルリクはスバル人が生んだ蚩尤と組み、ミャオ族を生んだ。ミャオの由来はマハラエルの名前を構成するマベエとブリアレオースの組み合わせである。マベエ+ブリアレオース＝マオー＝ミャオとなる。マハラエルは、預言者ナタンの一族に操られながら兵器を製作し、黄帝（ルハンガのトバルカイン）に挑戦した。これが「タク鹿の戦い」である。

-----

- ・スム＝エプフ（?～BC 1781） ヤムハド初代王 在位?～BC 1781

- ・ヤリム＝リム（?～BC1765） ヤムハド第2代王 在位BC1780～BC1765
- ・ハンムラビ1世（生没年不詳） ヤムハド第3代王 在位BC1765～?
- ・ハンムラビ2世（?～BC1595） ヤムハド第9代王 在位?～BC1595

※BC34世紀頃にエラドとオロクンのトバルカインが組んでラテン王国を築くが、フルリ人はウラル付近にヤムハド王国を築き、エラドとオロクンのトバルカインが生んだラテン王国の同盟国として、ラテン王国領域内に収まった。

その後、BC1595～BC858までの期間、フルリ人はアテーナイ人（ガリアのドルイド司祭の一族）と組んでエトルリア王国を古代アラビア半島に築いている。エトルリアの由来はアテーナイとフルリの組み合わせである。アテーナイ＋フルリ＝アテルリア＝エトルリアとなる。

「マハーバーラタ戦争」でアラビア半島の国家が全て灰塵に帰すと、フルリ人はメソポタミアにウラルトゥ王国（公式には認められていないが第二次ウラルトゥ王国）を建てた。

- ・アラマ（?～BC844） ウラルトゥ王国初代王 在位BC858～BC844
- ・ルティプリ（?～BC834） ウラルトゥ王国第2代王 在位BC844～BC834
- ・サルドゥリ1世（?～BC828） ウラルトゥ王国第3代王 在位BC834～BC828
- ・イシュプイニ（?～BC810） ウラルトゥ王国第4代王 在位BC828～BC810
- ・メヌア（?～BC785） ウラルトゥ王国第5代王 在位BC820～BC785
- ・アルギシュティ1世（?～BC753） ウラルトゥ王国第6代王 在位BC785～BC753
- ・サルドゥリ2世（?～BC735） ウラルトゥ王国第7代王 在位BC753～BC735
- ・ルサ1世（?～BC714） ウラルトゥ王国第8代王 在位BC735～BC714
- ・アルギシュティ2世（?～BC680） ウラルトゥ王国第9代王 在位BC714～BC680
- ・ルサ2世（?～BC639） ウラルトゥ王国第10代王 在位BC680～BC639
- ・サルドゥリ3世（?～BC635） ウラルトゥ王国第11代王 在位BC639～BC635
- ・エリメナ（?～BC629） ウラルトゥ王国第12代王 在位BC635～BC629
- ・ルサ3世（?～BC615） ウラルトゥ王国第13代王 在位BC629～BC615
- ・サルドゥリ4世（?～BC598） ウラルトゥ王国第14代王 在位BC615～BC598
- ・ルサ4世（?～BC590） ウラルトゥ王国第15代王 在位BC598～BC590
- ・アナルマイエ（?～BC538） メロエ王国初代王 在位BC542～BC538
- ・アマニナタキレブテ（?～BC519） メロエ王国第2代王 在位BC538～BC519
- ・カルカマニ（?～BC510） メロエ王国第3代王 在位BC519～BC510
- ・アマニアスタバルカ（?～BC487） メロエ王国第4代王 在位BC510～BC487

- ・シャスピカ (?～BC 468) メロエ王国第5代王 在位BC 487～BC 468
- ・ナサクマ (?～BC 463) メロエ王国第6代王 在位BC 468～BC 463
- ・マルウィエバマニ (?～BC 435) メロエ王国第7代王 在位BC 463～BC 435
- ・タラカマニ (?～BC 431) メロエ王国第8代王 在位BC 435～BC 431
- ・アマニエティエリケ (?～BC 405) メロエ王国第9代王 在位BC 431～BC 405
- ・バスカケレン (?～BC 404) メロエ王国第10代王 在位BC 405～BC 404

ハルシヨテフ (?～BC 369) メロエ王国第11代王 在位BC 404～BC 369

Sirras (?～BC 390) イリュリア王国初代王 在位BC 437～BC 390

※ウラルトゥ王国が滅ぶと、フルリ人はナイル上流域に進出して家族が住むヌビア(クシュ王国)に移住し、メロエ王国を建てた。メロエの由来はマベエとブリアレオースの組み合わせである。マベエ+ブリアレオース=マレオ=メロエとなる。

メロエ王は小型のピラミッドなどを建て、製鉄の種族としても知られていたが、アドリア海に進出してイリュリア王国を築きながら、一方では楼蘭の王として君臨した。

#### ●楼蘭の王(イリュリア王国の歴代王)

アクラテン (?～BC 335) メロエ王国第13代王 在位BC 350～BC 335

Pleuratus I (?～BC 335) イリュリア王国第4代王 在位BC 356～BC 335

- ・Pleuratus II (?～BC 250) イリュリア王国第9代王 在位BC 260～BC 250
- ・Agron (?～BC 230) イリュリア王国第10代王 在位BC 250～BC 230
- ・Pinnes (?～BC 217) イリュリア王国第11代王 在位BC 230～BC 217
- ・Teuta (?～BC 227) 摂生 在位BC 227
- ・Demetrius of Pharos (?～BC 219) イリュリア王国第12代王 在位BC 222～BC 219
- ・Scerdilaidas (?～BC 206) イリュリア王国第13代王 在位BC 218～BC 206
- ・Pleuratus III (?～BC 181) イリュリア王国第14代王 在位BC 205～BC 181
- ・Gentius (?～BC 168) イリュリア王国第15代王 在位BC 181～BC 168

- 
- ・莫護跋(生没年不詳) 慕容部始祖
  - ・慕容木延(生没年不詳) 莫護跋の子
  - ・慕容涉帰(?～283) 在位?～283
  - ・慕容耐(?～285) 在位283～285



・慕容カイ (?～333) 在位285～333

※イリュリア人はモンゴルで慕容部(ムーロン)を生んだ。ムーロンの名の由来はマベエとブリアレオースの組み合わせである。マベエ+ブリアレオース=マーレオー=ムーロン(慕容)となる。

・慕容コウ (?～348) 前燕初代皇帝 在位333～348

・慕容儁 (319～360) 前燕第2代皇帝 在位348～352

慕容イ (350～384) 前燕第3代皇帝 在位360～370

郁久閭社崙 (?～410) 柔然初代可汗 在位402～410

※慕容コウが前燕を築くと、孫の慕容イは柔然(ローラン)を生んだ。ローランの名の由来は楼蘭(ローラン)である。

### ●アザニア海賊の首領(突厥帝国の歴代王)

郁久閭菴羅辰 (?～) 柔然第16代可汗 在位553～554

伊利可汗 (?～552) 突厥帝国初代王 在位552～553

宇文覺 (542～557) 北周初代皇帝 在位557

・乙息記可汗 (?～553) 突厥帝国第2代王 在位553

・木汗可汗 (?～572) 突厥帝国第3代王 在位553～572



宣帝 (559～580) 北周第4代皇帝 在位578～579※画像なし

李淵 (566～635) 唐初代皇帝 在位618～626

宇文闡 (573～581) 北周第5代皇帝 在位579～581

他鉢可汗 (?～581) 突厥帝国第4代王 在位572～581

- ・阿史那菴羅（?～581） 突厥帝国第5代王 在位581
- ・沙鉢略可汗（?～587） 突厥帝国第6代王 在位581～587
- ・葉護可汗（?～587） 突厥帝国第7代王 在位587
- ・頡伽施多那都藍可汗（?～599） 突厥帝国第8代王 在位587～599

-----

李恒（795～824） 唐第15代皇帝 在位820～824

モイミール1世（795～846） モラヴィア王国初代王 在位830～846

葛原親王（786～853） 高望父

懿宗（833～873） 唐第20代皇帝 在位859～873

ロスチスラフ（?～870） モラヴィア王国第2代王 在位846～870

平高望（生没年不詳） 良将父

スヴァトプルク1世（840～894） モラヴィア王国第3代王 在位871～894

ボジヴォイ1世（?～894） プシェミスル朝初代ボヘミア公 在位850～894

平良将（生没年不詳） 将門父



李敏（867～904） 唐第22代皇帝 在位888～904※画像なし

モイミール2世（872～907） モラヴィア王国第4代王 在位894～907※画像なし

平将門（?～940）

ブジェチスラフ1世（1002～1054） 初代モラヴィア公 在位1019～1033

スピチフニェフ2世（1031～1061） 第4代モラヴィア公 在位1049～1054

イブン・ヤースィン（?～1056） ムラービト朝初代アミール 在位1040～1056

ヤフヤー・イブン・イブラーヒーム（?～1056） ムラービト朝第2代アミール 在位1056

ヤフヤー・イブン・ウマル (?~1056) ムラービト朝第3代アミール 在位1056  
平正度 (?~1069) 平清盛の曾曾祖父

イブラーヒーム (1131~1146) ムラービト朝第8代アミール 在位1146  
平教盛 (1128~1185) 平忠盛の子

-----  
平忠正 (?~1156) 平清盛伯父  
アブド・アルムーミン (?~1163) ムワッヒド朝初代アミール 在位1130~1163



平清盛 (1118~1181) 平氏政権  
アブー=ヤアクーブ・ユースフ1世 (?~1184) ムワッヒド朝第2代アミール 在位1163~1184※画像なし

平重衡 (1157~1185) 清盛の子  
オタカル1世 (1155~1198) プシェミスル朝初代ボヘミア王 在位1198~1230  
ヤアクーブ・マンスール (1160~1199) ムワッヒド朝第3代アミール 在位1184~1199

平宗実 (1168~?) 重盛の子、清盛の孫  
ムハンマド・ナーシル (?~1213) ムワッヒド朝第4代アミール 在位1199~1213  
アブド・アル=ハック1世 (?~1217) マリーーン朝初代スルターン 在位1196~1217

アブー・バクル (?~1258) マリーーン朝第4代スルターン 在位1244~1258  
ヴァーツラフ1世 (?~1253) プシェミスル朝第2代ボヘミア王 在位1230~1253



アブド・アル＝アズィーズ2世（1375～1396） マリーン朝第25代スルターン 在位  
1393～1396※画像なし

鄭和（1371～1433）※画像なし

ヴァシーリー1世（1371～1425） モスクワ大公 在位1389～1425※画像なし

ヤン・フス（1369～1415）

ヤン・ジシュカ（1374～1424）

チェコ出身の宗教思想家、宗教改革者。ジョン・ウィクリフの考えをもとに宗教運動に着手し、ボヘミア王の支持のもとで反教権的な言説を説き、贖宥状を批判し、聖書だけを信仰の根拠とし、プロテスタント運動の先駆者となった。カトリック教会はフスを1411年に破門し、コンスタンツ公会議によって有罪とされた。その後、世俗の勢力に引き渡され、杭にかけられて火刑に処された。ヤン・フス wiki より

1420年、迫害を逃れてきたフス派の民衆をボヘミア南部の山中に集めて城塞都市ターボルを建設し、フス派の中でも急進派といわれたターボル派を結成した。ジシュカが作り出したターボル派の軍は、信仰に基づく厳格な軍紀とマスカット銃や戦車などの新兵器によって無類の強さを発揮し、ジギスムントの神聖ローマ帝国軍やフス派撲滅のための十字軍も、ジシュカの前に何度も大敗を喫した。ヤン・ジシュカ wiki より

※ヴァシーリー1世は邪教カトリックから民衆を解放するためヤン・フスとなり、フス派を築いた。フスの由来はヴァシーリーである。ヴァシーリー1世は庶子を投入した影武者部隊を指揮し、ロシアは影武者に一任して、自分は邪教が率いる十字軍と戦った。やがて影武者が処刑されると、フスはヤン・ジシュカを名乗り、フス戦争を指揮する。

-----

●フス派の首領（ヴァシーリー1世の子）



ヴァシーリー2世（1415～1462） モスクワ大公 在位1425～1462  
イジー・ス・ポジェブラト（1420～1471） フス派のボヘミア王

イジーはボヘミアの貴族ヴィクトリン・ス・クンシュタート・ア・ポジェブラトの息子として生まれた。父はフス戦争を起こしたフス派のうち、穏健派であるウトラキストの指導者の1人だった。14歳の時、イジーはフス派内の急進派であるターボル派の没落を招いたリパニーの戦いに参加した。成人したイジーはフス派の指導者の1人として、神聖ローマ皇帝ジギスムントからボヘミア、ハンガリー、ローマ王位を引き継いだ婿のアルブレヒト2世の率いるオーストリアの軍勢に勝利した。イジーはすぐにフス派内で頭角をあらわし、プタテク・ス・ピルクシュテインの死後はその頭領となった。 wikiより



フレデリック（1453～1458） イジー・ス・ポジェブラト子※画像なし  
ウラースロー2世（1456～1516） ボヘミア王 在位1471～1516



イヴァン4世（1467～1500） ヴァシーリー2世孫※画像なし

ヤン1世（1459～1501） ポーランド王 在位1492～1501

アレクサンデル（1461～1506） ポーランド王 在位1501～1506



ジグムント1世（1467～1548） ポーランド王 在位1506～1548

※ヤン・フスの子孫が、ボヘミア王、ポーランド王としてボヘミア王国、ポーランド王国を統治し、一方でフス派の首領も兼任していた。

---

ボヘミア王ウラースロー2世の子



ラヨシュ2世（1506～1526） ハンガリー王 在位1516～1526

鈴木孫一（1534～1589） 雑賀衆

イオフ（?～1607） 初代モスクワ総主教 在位1589～1605

1516年、父の後を受けてハンガリーとボヘミアの王として即位する。しかし若年のために国内の統率が困難となり、それが災いして1526年、オスマン帝国のスレイマン1世（大帝）が率いるオスマン軍との戦い（モハーチの戦い）で、20歳の若さで敗死した。これによりハンガリーの大部分は、オスマン帝国に奪われた（オスマン帝国領ハンガリー）。野心家であったといわれるが、多くは成し遂げられることはなかった。ラヨシュ2世wikiより

石山合戦において雑賀衆を率いて石山本願寺へ入り、織田信長の軍勢を苦しめた。その後、豊臣秀吉に鉄砲大将として仕え、関ヶ原の戦い（伏見城の戦い）では西軍本隊に属して、鳥居元忠を討ち取る活躍を見せる。戦後、浪人を経て水戸藩に仕官した。鈴木孫一wikiより

※ラヨシュ2世は、ヤノシュを連れて日本にまで逃亡し、1534年に到着した。彼は、日本到着の年を鈴木孫一生誕年と定めた。孫一らは雑賀衆を結成して銃器を得意とした戦法で本願寺に味方した。鈴木由来はジシュカである。鈴木孫一らが邪教本願寺に味方したのは、孫一の正体であるラヨシュ2世がスレイマン1世に敗北したことが原因だろう。孫一は、織田信長がスレイマン1世（宇佐美定満）の子だということを知っていたのだ。そのため、織田信長の敵である本願寺に味方した。

その後、孫一は1589年に55歳で死んだことにし、ロシア帝国に向かった（ラヨシュ2世から数えると83歳となる）。同年、孫一はイオフに変身し、ロシア帝国で初代モスクワ総主教に就任した。ラヨシュ2世から数えると、彼は101歳まで生きたことになる。

-----  
ラヨシュ2世の子

ヤノシュ・ワス（1521～1580）

土橋守重（?～1582） 雑賀衆

本能寺の変が発生すると、織田氏の支援を受けられなくなった鈴木氏は長宗我部氏・根来衆らの支援を受けた土橋勢に反撃されて紀伊を追われ、小牧・長久手の戦いを経て、天正13年（1585年）の秀吉による紀州征伐まで土橋氏が雑賀衆の主導権を握ることとなる。wikiより

※土橋の名の由来は、ジシュカとフスの組み合わせである。ジシュカ+フス=ジシュ+フシ=ツチ+ハシ=土橋となる。

-----



鈴木重次（1598～1664） 鈴木孫一次男※画像なし

ボフダン・フメリニツキー（1595～1657） ウクライナ・コサック最高指導者初代ヘーチマン

※ヘーチマンの由来は平氏である。ヘーチマンの首領はアタマンと呼ばれるがこれも日本語「頭」に由来している。



クィルィーロ・ロズモーウシクィイ（1728～1803） ウクライナ・コサック最高指導者



第21代ヘーチマン

アフマド・シャー・ドゥッラーニー（1722～1772） ドゥッラーニー朝初代君主 在位  
1747～1772

---

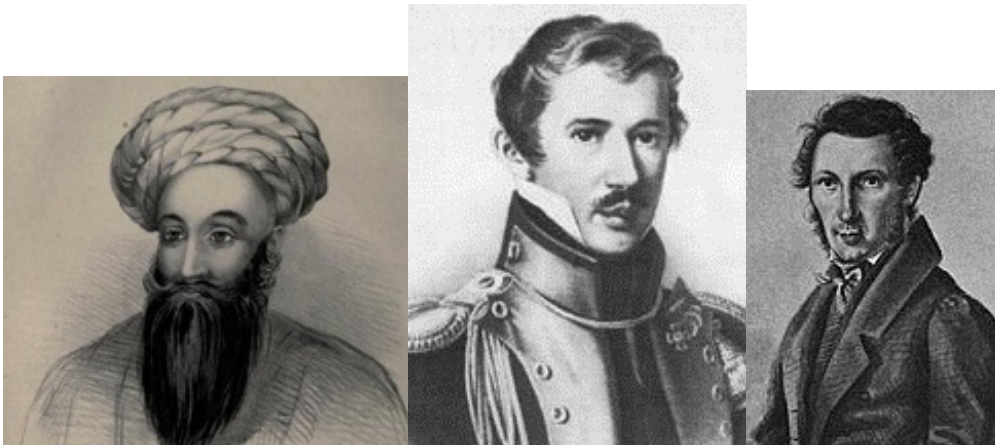
ドゥッラーニー朝第3代君主ティムール・シャーの子



マフムド・シャー（1769～1829） ドゥッラーニー朝第4代君主 在位1801～1803※画像なし

イヴァン・ペステル（1765～1843）※画像なし

イヴァン・コトリャレーウシキー（1769～1838） ウクライナ作家





シュジャー・シャー（1785～1842） ドゥッラーニー朝第5代君主 在位1803～1809

ミハヤエル・ルーニン（1787～1845） 救済同盟デカブリスト

セルゲイ・ペトロヴィッチ・トルベツコイ（1790～1860） 救済同盟デカブリスト

パーヴェル・ペステリ（1793～1826） 救済同盟デカブリスト

ドースト・モハマド・ハーン（1793～1863） バーラクザイ朝初代アミール

コンドラチイ・ルイレーエフ（1795～1826） 救済同盟デカブリスト※画像なし

セルゲイ・ムラヴィヨフ＝アポストル（1796～1826） 救済同盟デカブリスト

ニキータ・ムラヴィヨフ（1796～1843） 救済同盟デカブリスト

ピョートル・カホフスキー（1797～1826） 救済同盟デカブリスト※画像なし

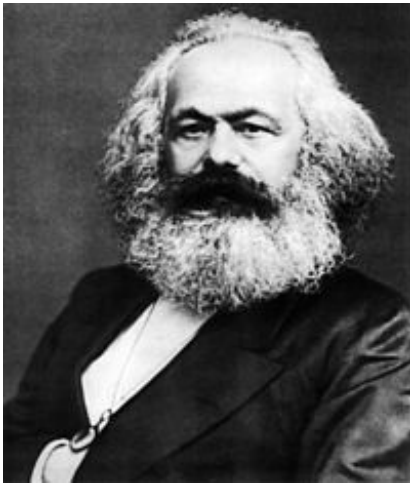
イヴァン・プーシキン（1798～1859） 救済同盟デカブリスト

ミハイル・パヴロヴィチ・ベストゥージェフ＝リュージン（1801～1826） 救済同盟デカブリスト※画像なし

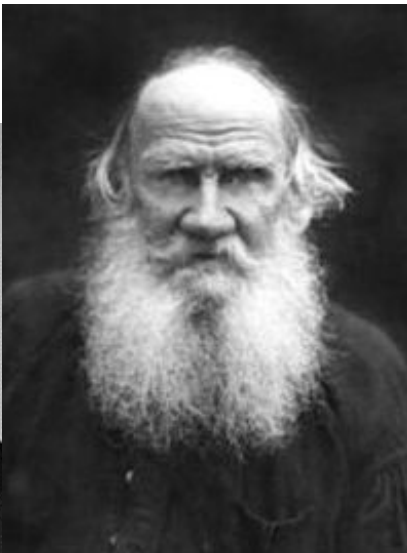
※デカブリストは、西本願寺門主寂如の一族に汚染されたロシア帝国を奪還するために結成された。

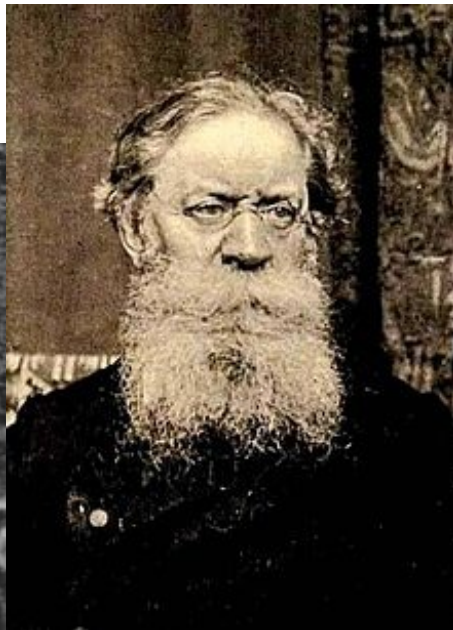
-----

バーラクザイ朝初代アミールドースト・モハマド・ハーンの子（名前不詳の息子27人）



ムハンマド・アフザル・ハーン (1811~1867) バーラクザイ朝第4代アミール  
ピエール・ジョゼフ・プルードン (1809~1865) 無政府主義思想  
ミハイル・バクーニン (1814~1876) アナーキスト  
カール・マルクス (1818~1883) 共産主義思想  
イヴァン・ツルゲーネフ (1818~1883) 作家





シール・アリー・ハーン（1825～1879）　バーラクザイ朝第3代アミール

ニコライ・チェルヌイシェフスキー（1828～1889）　ナロードニキ指導者

レフ・トルストイ（1828～1910）　作家

フリードリヒ・エンゲルス（1820～1895）　労働運動指導者

ピョートル・ラヴロフ（1823～1900）　ナロードニキ理論家

フョードル・ドストエフスキー（1821～1881）　作家



名前不詳の息子27人のうちのひとり

モデスト・ムソルグスキー（1839～1881） 作曲家

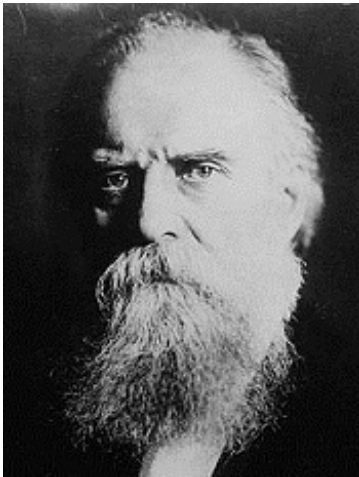
ピョートル・チャイコフスキー（1840～1893） 作曲家

ニコライ・ミハイロフスキー（1842～1904） ナロードニキ理論家

鈴木岩治郎（1837～1894） 鈴木商店創業者

---

シール・アリー・ハーンの子



ムハンマド・ヤアクーブ・ハーン（1849～1923）　バーラクザイ朝第6代アミール

セルゲイ・ネチャーエフ（1847～1882）　人民の裁き指導者

パーヴェル・アクセリロード（1850～1928）　社会主義者

ニコライ・チャイコフスキー（1851～1926）　チャイコフスキー団指導者

マルク・ナタンソン（1851～1919）　土地と自由指導者

※ナロードニキ運動は、西本願寺門主寂如の一族に汚染されたロシア帝国を奪還するために結成された。ナロードニキ運動がロシア革命成功の下地を準備した。

-----



ティーホン（1865～1925） モスクワ総主教  
アントン・チェーホフ（1860～1904） 作家  
久原房之助（1869～1965） 久原財閥創業者

※西本願寺門主寂如の一族が運営するロシア帝国によってモスクワ総主教の座は一時廃止されたが、ティーホン総主教の時代に再開された。久原はティーホンの影武者として生まれたが、日本に移住して久原財閥を起こした。久原（くばら）の由来はカブールである。

---



ムハンマド・ダーワード（1909～1978） アフガニスタン共和国初代大統領  
ファビアン・ドロン（1904～1977） アラン・ドロン父

※東本願寺門主巧如の一族に属するザーヒル・シャーによって家族が惨殺された。悲劇の英雄。彼は影武者用に多くの庶子を儲けていた。また、ファビアン・ドロンとしてフランスに行き、俳優アラン・ドロンを儲けている。



アラン・ドロン（1935） 俳優  
吉田竜夫（1932～1977） タツノコ・プロダクション社長

※ドロンの由来はドゥッラーニーである。つまり、ドロンはアフガニスタン出身と考えられる。ダワードは、ファビアン・ドロンとして日本人女性にも遺伝子を所望されたようだ。優性遺伝子ブリーダーによって吉田竜夫兄弟が生まれている。

-----  
ムハンマド・ダーワードの子





**Khalid Daoud Khan** (1947～1978)

鈴木敏夫 (1948) スタジオ・ジブリ社長



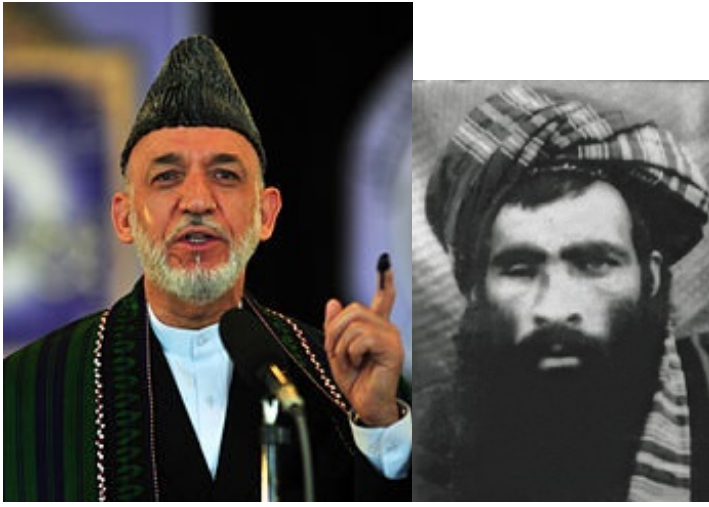
**Muhammad Umar Daoud Khan** (?～1978) ※画像なし

押井守 (1951) 映画監督

※世界で最初に銃器を戦争に使用したフス派の子孫だけあり、長編アニメ映画「功殻機動隊」などの押井作品にも武器、戦略、戦法、謀略の知識が活かされている。押井はポーランドで実写映画「アヴァロン」を撮ったが、ポーランドと関係が深いのはフス派の血が彼を故郷に誘うのだろう。押井はマジを嫌う人で、「イノセンス」など、マジな映画を作ったあとは、「立喰師列伝」など、シラケ気分全開の映画を製作する。

-----

アフガニスタン共和国初代大統領ムハンマド・ダーウードの孫



**Ariane Heila Khanum Ghazi** (1961) ※画像なし

ハーミド・カルザイ (1957) 初代アフガニスタン・イスラム共和国大統領

ムハンマド・オマル (1959~2013) タリバーン初代最高指導者

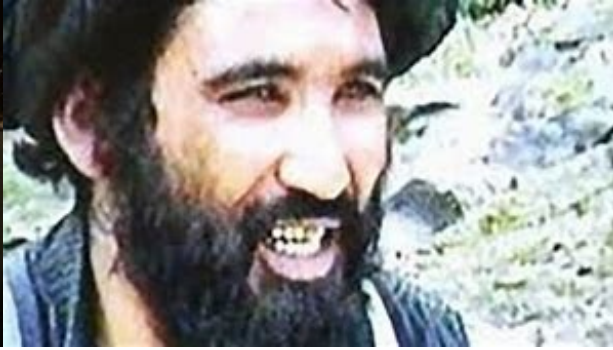


**Hila Khanum** (1961~1978) ※画像なし

土橋安騎夫 (1960) レベッカ

石川光久 (1958) プロダクション・アイジー代表取締役社長

※ダウードの孫の影武者として生まれたと考えられる。レベッカは、あからさまに80年代最先端の洋楽（イギリスのニューウェイブ、プリンスやマドンナ、クール&ザ・ギャングなどの80年代ファンク）の影響下にあったが、洋楽と邦楽の垣根を易々と壊した。その先駆だった。



**Hawa Khanum Ghazi (1963) ※画像なし**

今敏 (1963～2010) 映画監督

アフタル・ムハンマド・マンズール (1965～2016) タリバーン第2代最高指導者

ハイバトゥラー・アクンザダ (1966) タリバーン第3代最高指導者※画像なし

※ダウードの孫の影武者として生まれたと考えられる。頭の良い人だが、癌は存在しないことを知らず、本願寺勢力に殺された。TVアニメ作品「妄想代理人」では、集団ストーカーを再現していた。



**Waygal Daoud Khan (1975～1978) ※画像なし**

石井朋彦 (1977) プロダクション・アイジー所属

宇宙人スバルの一族～天孫氏、ゼブルン族、シュメール都市国家シッパール、プール族、シバ王国、破壊神シヴァ、楚、鮮卑、ヴァンダル王国、シュリーヴィジャヤ王国、シビル汗国、円谷プロダクション

---



テーバイ王国（1万3千年前）※画像はサハラ砂漠

※ルハンガのトバルカインは超科学を継承し、現サハラ砂漠にテーバイ王国を築いた。気仙沼の河童（ケシャンボ）はルハンガのトバルカインと合体し、スバル人（サハラの語源）となった。カゾオバ+トバルカイン=ゾオバル=ソバル=スバルとなる。



天孫氏（1万3千年前）※画像は小型人類ホモ・フローレシエンシス発掘現場

※スバル人の祖は、上記のようにオリジナル人類カゾオバであり、もともとは気仙沼に住んでいたケシャンボ（河童）である。しかし、ルハンガのトバルカインとの混血が進むと、身長1mのスバル人と普通身長（170～180cm）のスバル人の身長差が顕著になった。

普通身長のスバル人はそのままテーバイ王国に残ったが、身長1mのままのスバル人は新天地を求めてテーバイ王国を離れ、フローレス島に本拠地を据え、沖縄諸島をはじめ、バヌアツ諸島、ツバル諸島などの太平洋の島々を勢力圏に収めた。ホモ・フローレシエンシスの化石は、じつは埋葬されたスバル人の遺骨だと考えられる。

スバル人と妖怪キジムナーは祖を同じくする家族である。両者はオリジナル人類カゾオバの子孫

であるため、沖縄では交流があったようだ。ところで、沖縄の歴史書には伝説の天孫氏が登場する。彼ら自身の正体や王国の歴史、王の系譜は不明であり、国の様子さえ詳らかでないが、謎に包まれた天孫氏の王朝とは、妖怪キジムナーと小型宇宙人の王国だったのではないかと考えられる。

### ●真のイスラエル王国の時代（宇宙人の古代台湾統治時代）

- ・ルカイ族（クウォスのトバルカイン）
- ・ツォウ族（ゼウスの一族）
- ・サイシャット族（ゼウスの一族）
- ・タオ族（エラド）
- ・セデック族（マハラエル）
- ・クーロン族（チュクウのトバルカイン+ルハンガのトバルカイン）
- ・タオカス族（エラド+クウォスのトバルカイン）
- ・パゼッヘ族（ルハンガ+スバル人）
- ・アリクン族（オロクンのトバルカイン）
- ・ロア族（マハラエル）
- ・シラヤ族（スバル人+ルハンガのトバルカイン）



※画像は台湾の絶景。真のイスラエル王国とは、葦原中津国（天草諸島～八代湾）と高天原（台湾）による連邦国家だった。古代台湾はもともとオリジナル人類ニャメ（アミ族）の領土であり、日本神話で見られる天津神の故郷でもある。

BC 35 世紀頃、上記の宇宙人（超科学の種族）たちが集合し、最初の人類エスが築いた葦原中津国と連合してイスラエル（台湾、沖縄諸島、九州）を統治していた。

- ・ルーベン族（BC 35 世紀頃）

- ・レビ族（BC 35世紀頃）
- ・ゼブルン族（BC 35世紀頃）

※宇宙人の連合がイスラエル王国を統治していた時代、ルハンガのトバルカインのテーバイ王国（現サハラ砂漠）も同盟国となった。そのため、ルハンガのトバルカインは夏王朝の中国（カナン）ではルーベン族・レビ族と呼ばれ、スバル人はゼブルン族と呼ばれた。ルーベン・レビの名の由来はルハンガであり、ゼブルンの由来はスバルである。



- ・蚩尤（BC 35世紀頃）

※イスラエル王国（縄文人）の集団が伝説の夏王朝治世下の中国大陸（カナン）に移住すると、スバル人も古代雲南に拠点を移した。彼らは、蚩尤（シヨウ）と呼ばれた。伝説によると、蚩尤は、夏王朝（古代中国から古代スイスまでに至る領域を支配していた）が斜陽の道を辿っていた際、黄帝（ルハンガのトバルカイン）と対立した。

これは一方で、イスラエルの10支族ルーベン族とゼブルン族の対立ということもできる。ルハンガのトバルカインは永年スバル人とは同盟関係にあったが、どちらか（多分蚩尤）が、狡猾な預言者ナタンの一族（ダン族）の支配下に堕ちていた可能性がある。

蚩尤はルハンガのトバルカインの代わりにミャオ族と同盟を組むが、このミャオ族の正体はマハラエルだと考えられる。平和を愛する宇宙人は一度も兵器を製造したことがない。核兵器と呼ばれるものも、じつは宇宙人が直接、物質の原子を分裂させて巨大な爆発を発生させているに過ぎない。黄帝と対立した時、蚩尤は人類で最初に兵器を作ったとされている。預言者ナタンの一族（ダン族）にそそのかされたのだと考えられる。これが「タク鹿の戦い」である。

---

## ●インダス文明の礎



- ・シバ王国（BC 3 2 世紀頃）
- ・プント王国（BC 3 2 世紀頃）

※BC 3 2 世紀頃、超科学の種族ルハンガのトバルカインとスバル人が築いたテーバイ王国（現サハラ砂漠）、アルパクシャデの名に因んだソドム国（チャド・スーダン地域）、クマルビの名に因んだゴモラ国（カッパドキア）にタナトスの一族が蔓延った。ルハンガのトバルカインとスバル人は、タナトスの一族をみな殺しにするためにタナトスやタナトスの街を核分裂させた。これが「ソドムとゴモラ」である。

これにより、北アフリカは完全な砂漠と化し、カッパドキア地域も砂漠化した。しかしかつては緑深く、豊かな河川に彩られた北アフリカのソドムとゴモラ後の惨状を目にし、心が痛んだルハンガのトバルカインは超科学を放棄する決意をし、現サハラを離れてパンジャブに根を下ろした。

一方、スバル人は超科学を継承しつつシバ王国を築き、ルハンガのトバルカインはプント王国を築いた。この2つの王国は連合体だったため、パンジャブの由来となった。プント+シバ=プンシヴァ=パンジャブとなる。



- ・雷神インドラ（BC 3 2 世紀頃）



・破壊神シヴァ（BC 3 2 世紀頃）

※超科学を継承していたスバル人は雷神インドラ、破壊神シヴァとも呼ばれた。インドラの名の由来はパンドラである。パンドラはヒンドゥーの由来でもある。

テーベ神官都市のダヴィデの一族はこの時にパンジャブに赴いて、シバ王国、プント王国を築いた兄弟ルハンガのトバルカインとスバル人を援助した。この時にいわゆる「インダス文明」が始まり、同時に、テーベ神官都市のダヴィデの一族は善神デーヴァと呼ばれた。以下がインダス文明を築き、善神デーヴァと呼ばれたエジプト第11王朝、第13王朝、第18王朝のファラオたちである。



●インダス文明の王（エジプト第11王朝、第13王朝、第18王朝の歴代ファラオ）

- ・メンチュヘテプ1世（?～BC 2 1 3 4） エジプト第11王朝初代王 在位?～BC 2 1 3 4
- ・アンテフ1世（?～BC 2 1 3 4） エジプト第11王朝初代王 在位
- ・アンテフ2世（?～BC 2 1 3 4） エジプト第11王朝初代王 在位
- ・アンテフ3世（?～BC 2 1 3 4） エジプト第11王朝初代王 在位
- ・メンチュヘテプ2世（?～BC 2 1 3 4） エジプト第11王朝初代王 在位
- ・メンチュヘテプ3世（?～BC 2 1 3 4） エジプト第11王朝初代王 在位



- ・メンチュヘテプ4世 (?~BC 2134) エジプト第11王朝初代王 在位
- ・セベクヘテプ1世 (?~BC 1800) エジプト第13王朝初代王 在位BC 1803~BC 1800
- ・セネブエフ (?~BC 1796) エジプト第13王朝第2代王 在位BC 1800~BC 1796
- ・アメンエムハト5世 (?~BC 1793) エジプト第13王朝第3代王 在位BC 1796~BC 1793
- ・アメンエムハト6世 (?~BC 1785) エジプト第13王朝ファラオ 在位BC 1788~BC 1785
- ・セベクヘテプ2世 (?~BC 1750頃) エジプト第13王朝ファラオ 在位BC 1750頃
- ・ホル (?~BC 1760頃) エジプト第13王朝ファラオ 在位BC 1760頃
- ・アメンエムハト7世 (?~BC 1770頃) エジプト第13王朝ファラオ 在位BC 1770頃
- ・ウハエフ (?~BC 1757) エジプト第13王朝ファラオ 在位?~BC 1757
- ・ケンジェル (生没年不詳) エジプト第13王朝ファラオ 在位不明
- ・アンテフ4世 (?~BC 1750頃) エジプト第13王朝ファラオ 在位BC 1750頃
- ・セベクヘテプ3世 (?~BC 1741) エジプト第13王朝ファラオ 在位BC 1745~BC 1741
- ・ネフェルヘテプ1世 (?~BC 1730) エジプト第13王朝ファラオ 在位BC 1741~BC 1730
- ・セベクヘテプ4世 (?~BC 1720) エジプト第13王朝ファラオ 在位BC 1730~BC 1720
- ・アイ (?~BC 1677) エジプト第13王朝ファラオ 在位BC 1700~BC 1677
- ・イアフメス1世 (?~BC 1546) エジプト第18王朝初代王 在位BC 1570~BC 1546
- ・アメンヘテプ1世 (?~BC 1524) エジプト第18王朝第2代王 在位BC 1551~BC 1524
- ・トトメス1世 (?~BC 1518) エジプト第18王朝第3代王 在位BC 1524~BC 1518
- ・トトメス2世 (?~BC 1504) エジプト第18王朝第4代王 在位BC 1518~1504
- ・ハトシェプスト (?~BC 1483) エジプト第18王朝第5代王 在位BC 1498~BC 1483
- ・トトメス3世 (?~BC 1450) エジプト第18王朝第6代王 在位BC 1504年~B

C 1 4 5 0

・アメンヘテプ2世 (?~BC 1 4 1 9) エジプト第18王朝第7代王 在位BC 1 4 5 3~  
BC 1 4 1 9

・トトメス4世 (?~BC 1 3 8 6) エジプト第18王朝第8代王 在位BC 1 4 1 9~1 3  
8 6

・アメンヘテプ3世 (?~BC 1 3 4 9) エジプト第18王朝第9代王 在位BC 1 3 8 6~  
BC 1 3 4 9

・ホルエムヘブ (?~BC 1 2 9 3) エジプト第18王朝第14代王 在位BC 1 3 2 1~B  
C 1 2 9 3

---

●プレ・インカ文化は小人が生んだ文化



※画像はナスカの地上絵である。およそ1万年前から古代沖縄に天孫氏王統を築いていた小型スバル人は、BC 11世紀頃の古代アンデスに移住し、チャビン文化、ナスカ文化、ティワナク文化、モチエ文化、ワリ文化などを残した。この当時、スバル人はペルーでピラミッドの種族と共存していた。上記のプレ・インカ文化は謎が多いとされるが、小型スバル人と妖怪キジムナーが築いた文化だった。

小型スバル人と妖怪キジムナーはペルーの民族ケチュア族の前身となる。ケチュアの由来はカゾオバである。カゾオバ=ケチュアオバ=ケチュアとなる。ペルー時代はピラミッドの種族と共存していたが、彼らは巨石建造の技術を身につける。彼らは11世紀頃、故郷の沖縄にグスクなどを残すことになる。

ナスカの地上絵は、測量の技術向上が目的だった。正確な測量技術は精度の高い建築と建造を可能にするというわけだ。彼らはハトドリ、コンドル、タランチュラなどをモチーフに測量の練習をし、その練習の痕跡がナスカの地上絵として知られることになった。

---



- ・ パーンダヴァ王国（BC 11世紀）
- ・ アルジュナ王子（BC 11世紀）
- ・ 太陽神ヴィシュヌ（BC 11世紀）

※画像は「マハーバーラタ戦争」の図。公式には、伝説のシバ王国とプント王国は古代アフリカに存在したとされている。しかし、実際にはシバ王国とプント王国はパンジャブ地方に存在していたと考えられる。その証がパンジャブの名前である。

両者は同盟していたのか、パーンダヴァと呼ばれた。パーンダヴァの由来はパンジャブと同じで、プントとシバの組み合わせである。プント+シバ=プンシバ=パンジャブとなり、プント+シバ=プントバ=パーンダヴァとなる。

タナトスの一族（アッシュール・ダン1世の一族、ティールタンカラの一族、デウス一族）がパーンダヴァ王国篡奪の機会を狙っていたが、テーベ神官都市に住む善神デーヴァ（エジプト第18王朝ファラオ）の一族がパーンダヴァ族の王子アルジュナに超科学で出来た武器を授け、いわゆる「マハーバーラタ戦争」が勃発した。

この時にヴィシュヌが生まれた。ヴィシュヌの由来はシヴァとアルジュナの組み合わせである。シヴァ+アルジュナ=ヴァジュナ=ヴィシュヌとなる。「マハーバーラタ戦争」では、善神デーヴァがタナトスとその街を核分裂させたため、巨大な核爆発が起きた。これにより、パンジャブ地方・アフガン（パーンダヴァ王国）、メソポタミア（ラテン王国）は砂漠地帯と化した。この後、ルハンガのトバルカインはスバル人と共に中国に移住して燕と楚を築いた。燕（エン）の由来はインドラであり、楚（シュ）の由来はスバルである。

### ●インダス文明の王（楚の歴代王）

- ・ Yuxiong（生没年不詳） 楚初代王 在位不明
- ・ 熊麗（生没年不詳） 楚第2代王 在位不明
- ・ 熊狂（生没年不詳） 楚第3代王 在位不明
- ・ Xiong Yi（生没年不詳） 楚第4代王 在位不明
- ・ 熊只（生没年不詳） 楚第5代王 在位不明
- ・ Xiong Dan（生没年不詳） 楚第6代王 在位不明
- ・ Xiong Sheng（生没年不詳） 楚第7代王 在位不明

- ・ Xiong Yang (生没年不詳) 楚第8代王 在位不明
- ・ Xiong Qu (生没年不詳) 楚第9代王 在位不明
- ・ 熊母康 (生没年不詳) 楚第10代王 在位不明
- ・ 熊摯紅 (生没年不詳) 楚第11代王 在位不明
- ・ 熊執疵 (?~BC848) 楚第12代王 在位?~BC848
- ・ 熊勇 (?~BC838) 楚第13代王 在位BC847~BC838
- ・ 熊巖 (?~BC848) 楚第14代王 在位BC837~BC828
- ・ 熊相 (?~BC848) 楚第15代王 在位BC821~BC822
- ・ Xiong Xun (?~BC848) 楚第16代王 在位BC821~BC800
- ・ Xiong E (?~BC848) 楚第17代王 在位BC799~BC791
- ・ 熊儀 (?~BC848) 楚第18代王 在位BC790~BC764
  
- ・ 熊囿 (?~BC529) 楚第30代王 在位BC540~BC529
- ・ 熊比 (?~BC529) 楚第31代王 在位BC529
- ・ 熊? (?~BC516) 楚第32代王 在位BC528~BC516
- ・ 熊珍 (?~BC489) 楚第33代王 在位BC515~BC489
- ・ 熊章 (?~BC432) 楚第34代王 在位BC488~BC432
- ・ 熊中 (?~BC408) 楚第35代王 在位BC431~BC408
- ・ 熊当 (?~BC402) 楚第36代王 在位BC407~BC402
- ・ 熊疑 (?~BC381) 楚第37代王 在位BC401~BC381
- ・ 熊臧 (?~BC370) 楚第38代王 在位BC380~BC370
- ・ 熊良夫 (?~BC340) 楚第39代王 在位BC369~BC340
- ・ 熊商 (?~BC329) 楚第40代王 在位BC339~BC329
- ・ 熊槐 (?~BC299) 楚第41代王 在位BC328~BC299
- ・ 熊横 (?~BC263) 楚第42代王 在位BC298~BC263
- ・ 熊完 (?~BC238) 楚第43代王 在位BC262~BC238
- ・ 熊悍 (?~BC229) 楚第44代王 在位BC237~BC229
- ・ 熊猶 (?~BC228) 楚第45代王 在位BC228
- ・ 熊負芻 (?~BC223) 楚第46代王 在位BC227~BC223
- ・ 熊啓 (?~BC223) 楚第47代王 在位BC223
- ・ 熊心 (?~BC206) 楚第48代王 在位BC208~BC206

※秦によって楚が滅ぶと、スバル人は、燕の王族ルハンガのトバルカインと共にインドに拠点を移し、シュンガ朝マウリヤ朝マガダ王国を開いた。シュンガの由来はスバルとルハンガの組み合わせと考えられる。スバル+ルハンガ=スンガ=シュンガとなる。

- ・ プシャミトラ (?~BC149) シュンガ朝初代マウリヤ王 在位BC185~BC149

- ・アグニミトラ (?～BC141) シュンガ朝第2代マウリヤ王 在位BC149～BC141
- ・ヴァースジェータ (?～BC131) シュンガ朝第3代マウリヤ王 在位BC141～BC131
- ・ヴァースミトラ (?～BC124) シュンガ朝第4代マウリヤ王 在位BC131～BC124
- ・アンドラカ (?～BC122) シュンガ朝第5代マウリヤ王 在位BC124～BC122
- ・プリンダカ (?～BC119) シュンガ朝第6代マウリヤ王 在位BC122～BC119
- ・ゴシャ (?～BC108) シュンガ朝第7代マウリヤ王 在位BC119～BC108
- ・ヴァジュラミトラ (?～BC94) シュンガ朝第8代マウリヤ王 在位BC108～BC94

※シュンガ朝が滅ぶと、ルハンガのトバルカインは大將軍ユリウス・カエサルを生み、ローマ帝国の礎を築くが、スバル人はそのままインドに留まり、続いてカーンヴァ朝を開いた。カーンヴァ朝の王はゲルマニアに進出してスエビ族と呼ばれた。スエビの名の由来は鮮卑である。

#### ●ゲルマン人スエビ族の首長（カーンヴァ朝歴代王、禿髮部歴代大人）

- ・ヴァースデーヴァ (?～BC66) カーンヴァ朝初代マウリヤ王 在位BC75～BC66
- ・ブーミミトラ (?～BC52) カーンヴァ朝第2代マウリヤ王 在位BC66～BC52
- ・ナーラーヤナ (?～BC40) カーンヴァ朝第3代マウリヤ王 在位BC52～BC40
- ・スシャルマン (?～BC30) カーンヴァ朝第4代マウリヤ王 在位BC40～30

※カーンヴァ朝が滅ぶと、スバル人はモンゴルに拠点を移し、鮮卑（シェンベイ）を結成した。シェンベイの名の由来はカゾオバ（スバル）である。カゾオバ＝カゾオンバ＝ゾオンバ＝シェンベイとなる。鮮卑には多くの部族が参加したが、中でもスバル人が主体の部族は禿髮部（ツファ）だけである。ツファの由来はカゾオバ（スバル）である。カゾオバ＝ゾオファ＝ツファとなる。禿髮部の大人は代々のスエビ族首長も兼ねた。

- ・禿髮寿?（生没年不詳） 禿髮部初代大人 在位不明
- ・禿髮樹機能 (?～279) 禿髮部第2代大人 在位?～279
- ・禿髮務丸（生没年不詳） 禿髮部第3代大人 在位不明

禿髮推斤（生没年不詳） 禿髮部第4代大人 在位不明

クトゥンガ (?～375) クタイ王国初代王 在位350～375

※第4大人の時代、禿髮部はジャワ島に進出し、クタイ王国を築いた。この王国を皮切りに、

マジャパヒト王国に至るまでスバル人のジャワ、スマトラでのインドネシア王国時代が始まる。ジャワの由来はカゾオバ（スバル）である。禿髪部がジャワを訪れるまでは、ジャワはカリंगाと呼ばれていた。

・ 禿髪思復？（生没年不詳） 禿髪部第5代大人 在位不明

・ アシュヴァヴァルマン（?～400） クタイ王国第2代王 在位375～400

・ ムーラヴァルマン（?～466） クタイ王国第3代王 在位400～466

禿髪烏孤（?～399） 南涼初代王 在位397～399

Dharmayawarman（?～395） タルマヌガラ王国第2代王 在位382～395

禿髪利鹿孤（?～402） 南涼第2代王 在位399～402

Purnawarman（?～434） タルマヌガラ王国第3代王 在位395～434

禿髪ジョク檀（?～414） 南涼第3代王 在位402～414

Hermeric（?～438） スエビ王国初代王 在位409～438

※南涼第3代王は、スエビ王国をイベリア半島に築いた。

ガイセリック（?～477） ヴァンダル王国初代王 在位439～477

Rechila（?～448） スエビ王国第2代王 在位438～448

Rechiar（?～456） スエビ王国第3代王 在位448～456

Frumar（?～464） スエビ王国第9代王 在位460～464

Remismund（?～469） スエビ王国第10代王 在位464～469

フネリック（?～484） ヴァンダル王国第2代王 在位477～484

Hermeneric（生没年不詳） スエビ王国第11代王 在位485頃

**Veremund**（生没年不詳） スエビ王国第12代王 在位535頃

Candrawarman（?～535） タルマヌガラ王国第6代王 在位515～535

ヒルデリック（?～530） ヴァンダル王国第5代王 在位523～530

ゲリメル（?～534） ヴァンダル王国第6代王 在位530～534

・ Chararicafter（?～558） スエビ王国第14代王 在位550～558

**Ariamir**（?～566） スエビ王国第15代王 在位558～566

Suryawarman (?～561) タルマヌガラ王国第7代王 在位535～561

**Theodemar** (?～570) スエビ王国第16代王 在位561～570

Kertawarman () タルマヌガラ王国第8代王 在位561～628

- ・ Miro (?～583) スエビ王国第17代王 在位570～583
- ・ Eboric (?～584) スエビ王国第18代王 在位583～584
- ・ Andeca (?～585) スエビ王国第19代王 在位584～585



**Malaric** (?～585) スエビ王国第20代王 在位585※画像なし

李淵 (566～635) 唐初代皇帝 在位618～626

※スエビ王国がオロクンノトバルカインが築いた西ゴート王国によって滅ぶと、スエビ族は中国に移り、唐を築いた。唐（タン）の由来は太平洋の最高神タネである。タネはもともとタナトスの神だが、スバル人がその名前を戴いた形である。スエビ王国最後の王Malaricは李淵に変身して中国を統一した。

スバル人は、同じ宇宙人の出自であるマハラエルと過去にも組んでいたが（蚩尤とミャオ族）、この時にも両者は連合した（唐と突厥帝国）。これにより、領土は拡大した。

- ・ 李世民 (598～649) 唐第2代皇帝 在位626～649
- ・ 李治 (628～683) 唐第3代皇帝 在位650～683
- ・ 李頊 (656～710) 唐第4代、第6代代皇帝 在位684、705～710



李旦（662～690） 唐第5代、第8代皇帝 在位684～690、710～712

Tarusbawa（?～690） タルマヌガラ王国第11代王 在位670～690※画像なし

Dapunta Hyang Sri Jayanasa（?～702） シュリーヴィジャヤ初代王 在位671～702  
※画像なし

サンタヌ（?～700） シャイレンドラ朝初代王 在位670～700※画像なし



李亨（711～762） 唐第10代皇帝 在位756～762

サンジャヤ（?～760） シャイレンドラ朝第6代王 在位717～760※画像なし

サンジャヤ（?～746） 古マタラム王国初代王 在位717～746※画像なし

※サンジャヤの時代から古マタラム王は、シャイレンドラ朝の王を兼ねるようになる。





李豫（726～779） 唐第11代皇帝 在位762～779

ラカイ・パナンカラン（?～775） 古マタラム王国第2代王 在位760～775※画像なし



李クオ（742～805） 唐第12代皇帝 在位779～805

ラカイ・パヌンガラ（?～800） 古マタラム王国第3代王 在位775～800※画像なし



李純（778～820） 唐第13代皇帝 在位805～820

ラカイ・ワラック（?～819） 古マタラム王国第4代王 在位800～819※画像なし

- ・ラカイ・ガルン 古マタラム王国第5代王
- ・ラカイ・ピカタン 古マタラム王国第6代王
- ・ラカイ・カユワンギ 古マタラム王国第7代王



李忱（810～859） 唐第19代皇帝 在位846～859

バーラプトラ・デワ（?～855） シャイレンドラ朝第12代王 在位830～855※画像なし

ラカイ・ワトゥフマラン（生没年不詳） 古マタラム王国第8代王 在位不明※画像なし

李ツオ（892～908） 唐第23代皇帝 在位904～907

バリトゥン（?～910） 古マタラム王国第9代王 在位898～910

- ・ダクサ（?～919） 古マタラム王国第10代王 在位910～919
- ・トゥロドン（?～924） 古マタラム王国第11代王 在位919～924
- ・ラカイ・ワフ（?～929） 古マタラム王国第12代王 在位924～929

※唐が滅ぶとスバル人はマタラム王国に拠点を移した。唐の皇帝はインドネシアを治めた王でもあった。

-----

●妖怪キジムナーの王（舜天王統、英祖王統、察度王統、怕尼芝王統の歴代琉球王）

- ・舜天（?～1237） 舜天王統初代琉球王 在位1187～1237
- ・舜馬順熙（?～1248） 舜天王統第2代琉球王 在位1238～1248
- ・義本（?～1259） 舜天王統第3代琉球王 在位1249～1259

- ・英祖（?～1299） 英祖王統初代王 在位1259～1299
- ・大成（?～1308） 英祖王統第2代王 在位1299～1308
- ・英慈（?～1313） 英祖王統第3代王 在位1308～1313
- ・玉城（?～1336） 英祖王統第4代王 在位1313～1336
- ・西威（?～1349） 英祖王統第5代王 在位1336～1349

- ・察度（?～1395） 察度王統初代王 在位1305～1395
- ・武寧（?～1405） 察度王統第2代王 在位1396～1405



※画像はスバル人が築いたグスク。沖縄には超古代から最初の人類エスの子孫が暮らしていたが、天孫氏王統や舜天王統、英祖王統、察度王統、怕尼芝王統は沖縄人が知らない王国だと考えられる。つまり、キジムナーの王国である。沖縄人のすぐ隣で誰も知らない身長1 mの小人族の王朝が育まれていたのだ。

舜天はペルー帰りの人物だと考えられる。古代アンデスでピラミッド派に巨石建造の技術を享受されたスバル人は、沖縄でグスクを築くようになった。グスクの由来はクスコである（クスコの由来はカシュガル）。

- ・ 怕尼芝（?～1395） 怕尼芝王統初代王 在位1322～1395
- ・ ミン（?～1400） 怕尼芝王統第2代王 在位1396～1400
- ・ 攀安知（?～1416） 怕尼芝王統第3代王 在位1401～1416



※画像はタナトスが作らせたグスク座喜味城。怕尼芝王統だけはバヌアツに住んでいたスバル人が王統を担っていたと考えられる。つまり、怕尼芝王統は琉球の王朝ではなく、バヌアツ王の系譜である。怕尼芝の由来はバヌアツである。

1429年、沖縄で最初の普通人の王朝が築かれる。それが第一尚氏王統である。しかもこれはタナトス（本願寺門主覚如の一族）の王統だった。自由に暮らしてきた沖縄人が味わう、初の支配の苦しみである。タナトスの上陸を機に、スバル人はグスク建設に狩りだされてしまう。



※画像はマチュピチュ。1440年頃、尚思紹王の時代で既にタナトスの支配に嫌気が差したスバル人は、沖縄を脱出してペルーに帰還した。マウンド派がペルーにインカ帝国を築いていた時代である。インカ帝国初代皇帝パチャクテクに快く迎えられた彼らはマチュピチュに城砦を築く。沖縄のグスクとマチュピチュの石積みが似ているのはそういうわけである。

-----

・ Taibuga (生没年不詳) シビル汗初代ハーン 在位1220~?



※シビル、シベリアの由来はスバルである。シビル汗国の歴代ハーンは代々、超科学の研究に勤しんだと考えられる。ユダヤ人1731の一族もシベリアを攻撃したり、ユダヤ人1908の一族も巨大空中要塞でシベリアに出撃していた。宇宙人にとってシベリアは重要な場所のようだ。

**Tribhuanaraja** (生没年不詳) シュリーヴィジャヤ最後の王 在位1286

マリクル・サレー (?~1297) サムドラ・パサイ王国初代王 在位1267~1297

**Khoja bin Taibugha** (生没年不詳) シビル汗第2代ハーン 在位不明

ウィジャヤ (?~1309) マジャパヒト王国初代王 在位1293~1309

カラ・ユルク・オスマン (?~1435) 白羊朝初代君主 在位1378~1435  
Tokhtamysh (?~1406) シビル汗第3代ハーン 在位1396~1406  
Chekre Khan (?~1413) シビル汗第4代ハーン 在位1407~1413  
Hadji Muhammad (?~1428) シビル汗第5代ハーン 在位1420~1428

**Abu'l-Khayr Khan** (?~1468) シビル汗第6代ハーン 在位1428~1468  
ハムザ (?~1444) 白羊朝第2代君主 在位1435~1444  
ジャハーンギール (?~1453) 白羊朝第3代君主 在位1444~1453  
ウズン・ハサン (?~1478) 白羊朝第4代君主 在位1453~1478

**Mar** (?~1480) シビル汗第7代ハーン 在位1469~1480  
ブラウィジャヤ5世 (?~1478) マジャパヒト王国第5代王 在位1466~1478  
ハリール (?~1478) 白羊朝第5代君主 在位1478

**Ibak Khan** (?~1495) シビル汗国第8代ハーン 在位1468~1495  
ケレイ・ハン (?~1473) カザフ・ハン国初代ハーン 在位1469~1473  
ヤアクーブ (?~1490) 白羊朝第6代君主 在位1478~1490  
バイソククル (?~1493) 白羊朝第7代君主 在位1490~1493  
ルスタム (?~1497) 白羊朝第8代君主 在位1493~1497

※カザフの由来はカゾオバである。カゾオバ=カゾオハ=カザフとなる。

**Mamuq of Kazan** (?~1496) シビル汗国ハーン 在位1495~1496  
アフメト・ゴウデ (?~1497) 白羊朝第9代君主 在位1497

アルワンド (?~1504) 白羊朝第10代君主 在位1498~1504  
Muhammad Taibuga (?~1502) シビル汗国ハーン 在位1495~1502  
Abalak of Sibir (?~1501) シビル汗国ハーン 在位1496~1501

**Aguish** (?~1503) シビル汗国ハーン 在位1502~1503  
メフメト・ミルザ (?~1500) 白羊朝第11代君主 在位1498~1500  
ムラト1世 (?~1508) 白羊朝第12代君主 在位1497~1498、再位1502~1508

ターヒル (?~1531?) カザフ・ハン国第5代ハーン 在位?~1531?  
Kuluk Sultan (?~1530) シビル汗国ハーン 在位1502~1530

Qasim (?～1530) シビル汗国ハーン 在位1504～1530

ハックナザル (?～1580) カザフ・ハン国第7代ハーン 在位1537～1580

Yadgar bin Qasim (?～1563) シビル汗国ハーン 在位1530～1563

Bey Pulad ibn Qasim (?～1563) シビル汗国ハーン 在位1530～1563

**Kuchum Khan** (?～1598) シビル汗国ハーン 在位1563～1598

Panembahan Senopati (?～1601) 新マタラム王国初代王 在位1587～1601

アブルマンベト (?～1771?) カザフ・ハン中ジュズ第2代ハーン 在位1739～1771?

Pakubuwono II (?～1749) 新マタラム王国第9代王 在位1726～1749

允顕徳・具志堅親雲上用易 (16??～?)

※1532年、スバル人は80年間暮らしていたマチュピチュを離れ、沖縄に帰還した。彼らは允氏具志堅家を称した。允の由来はインカであり、具志堅の由来はグスク、或いはクスコである。

カザフ・ハン国ハーン アルトゥンサル (在位1826～1859) の孫?



円谷英二 (1901～1970) 特撮技術監督・円谷プロダクション初代社長

※円谷の名の由来はツバルと太平洋の最高神タネの組み合わせである。ツバル（円）＋タネ（谷）＝円谷となる。つまり、円谷英二はスバル人の子孫である。そのため、「ウルトラマン」などの発想ができたのかもしれない。



円谷皐（1935～1995） 円谷プロダクション第2代社長※画像なし  
ヌルスルタン・ナザルバエフ（1940） カザフスタン共和国初代大統領 任期1990～2019



円谷昌弘（1958～2019） 円谷プロダクション第5代社長※画像なし  
カシムジョマルト・トカエフ（1953） カザフスタン共和国第2代大統領 任期2019～現在

※円谷昌弘は女性社員にセクハラ容疑で民事訴訟をおこされたという。つまり本願寺にロックオンされていたようだ。

-----



具志堅用高（1955） 元WBA世界ライトフライ級王者

---



宇宙人エロヒム（1973）

※画像はクロード・ポリロンとエロヒムのコンタクト。著名なコンタクティーであり、フランスに宇宙人を崇拝する新宗教まで立ち上げたクロード・ポリロンは、1973年にフランス、クレルモン・フェラン山中で「エロヒム」を自称する宇宙人に遭遇した。

ポリロンは、この身長が1mしかない小さい宇宙人に出会ったことで人生が一変した。マイトレーヤ・ラエルを名乗った彼は新宗教「ラエリアン・ムーヴメント」を創設し、世界中に支部を持つに至る。小さい宇宙人の正体はスバル人である。



デウカリオンの一族（マウンド派）～ニューグレンジ、モホス文明、フェニキア人、カルタゴ、天孫族、多氏、秦、呉、前漢、新羅、日本武尊、インカ帝国、ジョージ・モンク、フリーメイソン、オナシス財閥

---



デウカリオンの一族（絵は炎に囲まれる日本武尊と熊襲武尊を襲う日本武尊）

※デウカリオンの一族は「神統記」で最大最強の怪物と呼ばれたテュポンと巨人アグリオスが合体することで生まれた。テュポン+アグリオス=テュグリオ=デウカリオンとなる。1万3千年前の大地殻変動の後、古代オーストラリアからメソポタミアに移ったデウカリオンは、巨石建造の一族ティカル人として活動する。デウカリオン=デウカリ=ティカルとなる。ティカルとはマヤの都市の名のひとつである。

その後BC35世紀頃、津軽時代にティカル人は2種類に分離した。テュポンのティカル人はピラミッド派としてピラミッドを建造し、アグリオスのティカル人はマウンド派としてマウンドを建造した。古墳時代には、ティカル人はモンゴルを拠点にし、マウンド派は丁零（ディングリング）、ピラミッド派は高車（ガオチェ）を名乗っていた。

また、日本ではマウンド派は日本武尊（ヤマトのティカル）を名乗り、ピラミッド派は熊襲武尊（クマソのティカル）を名乗っていた。ピラミッド派はマウンド派と対立していたが、日本武尊が勝利したことにより、前方後円墳と呼ばれた巨大なマウンドの建造を開始した。古墳時代の始まりである。

-----



ギョベクリ・テペ（BC 76世紀頃）

※神々の集団アヌンナキの時代、デウカリオンの一族は初めて偉大な先祖を祀る巨石文化の端緒を切った。



イングランドのドルメン（BC 40世紀頃）

※BC 50世紀頃、「第一次北極海ルートの大航海時代」を機に、デウカリオンの一族はヨーロッパを訪れ、ドルメンを築くようになった。ドルメンはマウンドを築く際の基礎部分であり、その発展形として後に、土を被せていくようになったと考えられる。ドルメンはBC 40世紀～BC 30世紀にかけてヨーロッパ中に築かれた。巨石の一族による、偉大な先祖を祀る記念碑の試作品である。



ロシアの巨石（年代不明）

※巨石建造の一族ティカル人は北極海ルートを通じてヨーロッパと津軽を往来していた。一方でヨーロッパにドルメンを築き、一方でロシア各地に巨石建造物の試作品を残した。ロシアの場合、ひとつの石が3000t～4000tとあまりに巨大すぎるため、偉大な先祖を祀る記念碑の建造に賛同した科学の種族トバルカインがティカル人に手を貸していたと考えられる。



黒又山（BC40世紀頃）

※すべてのピラミッド、マウンドの始まりは黒又山である。津軽に住んでいたティカル人は出羽国のトバルカインと共に先祖を祀る記念碑の建造を試みていた。その成果が、黒又山や十和田湖に沈んでいると伝えられる伝説の巨大ピラミッドである。黒又山は、マウンドとピラミッドの中間系ピラミッドである。この後、BC35世紀頃に「モーゼスの大移動時代」が起こり、ティカル人はピラミッド派とマウンド派に分離した。



モホス文明（年代不明）

※上の画像はアマゾン上流の広大なサバンナ地帯に点在する人工の丘のひとつである。この丘は同時に居住空間でもある。ある一定期間、アマゾン上流域が水没すると、この人工の丘は小島の役割を果たす。アマゾン上流域にはこのような丘がいくつも築かれ、それぞれの丘と丘は人工の道で結ばれ、一帯は蜘蛛の巣のような様相を呈している。また、下の画像のように人工池が作られ、生簀として用いられていた。

このモホスの地で、農業、養殖、灌漑設備などの発想が生まれた。モホス文明は科学の種族トバルカインが卓越した科学の発想を得た土地だと考えられるから、およそ2万年～3万年前の産物と考えられる。BC35世紀以降、巨石の種族ティカル人は、このモホス文明を継承し、ここか

ら遙かヨーロッパ、地中海にまでやってきた。もともと巨石建造の種族であるため、ティカル人マウンド派は土木技術に優れていたが、同時に世界の海・河川を自在に往来する航海の達人でもある彼らはフェニキア人と呼ばれた。



ニューグレンジ（BC 33世紀）

※地中海（ビュブロス）、ヨーロッパ（バヴァリア）、アマゾン流域（モホス文明）と世界の海を往来していたマウンド派は、古代アイルランド（ヒベルニア）に偉大な先祖を祀る記念碑としてニューグレンジを建造した。この時にオリエント地方に農業が伝えられた。



シルベリーヒル遺跡（BC 26世紀）

※マウンド派はイングランド・ソールズベリーにシルベリーヒル遺跡を残した。



ワカ・プリエタ文化（BC 26世紀）

※ティカル人マウンド派はアイルランドからペルーに進出し、マウンドの建造を含むワカ・プリエタ文化を残した。

-----

●ヒベルニアの王（バビロニア帝国の歴代帝王）

・イシュビ・エッラ（生没年不詳） イシン第1王朝初代バビロニア王 在位BC 2017～BC 1985

・ダミク・イリシュ（生没年不詳） イシン第1王朝第15代バビロニア王 在位BC 1816～BC 1794

・ナプラヌム（生没年不詳） ラルサ朝初代バビロニア王 在位BC 2025～BC 2005

・リム・シン1世（生没年不詳） ラルサ朝第14代バビロニア王 在位BC 1822～BC 1763

・スム・アブム（生没年不詳） バビロン第1王朝初代王 在位BC 1894～BC 1881

・ハンムラビ（生没年不詳） バビロン第1王朝第6代王 在位BC 1792～BC 1750

・サムス・ディタナ（生没年不詳） バビロン第1王朝第11代王 在位BC 1625～BC 1595

・イルマ・イルム（生没年不詳） バビロン第2王朝初代王 在位不明

・エア・ガムイル（生没年不詳） バビロン第12王朝初代王 在位不明

※ティカル人マウンド派はバビロニア帝国を築いた。当初のバビロニア帝国はメソポタミアではなく、彼らがニューグレンジを築いたアイルランドに存在していたと考えられる。バビロニアの名の由来はアイルランドの古名ヒベルニアである。ヒベルニア=ビベルニア=バビロニアとなる。

古代アイルランドを拠点にしたバビロニア帝国の勢力図は、地中海（ビュブロス）、ヨーロッパ（バヴァリア）、アイルランド（ヒベルニア）、モホスにまで及んでいた。BC 732年以降、バビロニア王位はアッシリア帝国に篡奪されてしまう。

### ●オルメカ文明+カルタゴの王（バビロニア帝国の歴代王）



オルメカ文明（BC 13世紀）

※バビロン第3王朝（カッシート朝）時代のバビロニア王が、オルメカに巨大なマウンドを築いた。これらはオルメカ文明に含まれている。以下がオルメカの王を務めていたバビロニアの王である。

・カダシュマン・エンリル2世（生没年不詳） カッシート朝第24代バビロニア王 在位BC 1263～BC 1255

・クドゥル・エンリル（生没年不詳） カッシート朝第25代バビロニア王 在位BC 1254～BC 1246

・シャガラクティ・シュリアシュ（生没年不詳） カッシート朝第26代バビロニア王 在位BC 1246～BC 1233

・カシュ・ティリアシュ4世（生没年不詳） カッシート朝第27代バビロニア王 在位BC 1233～BC 1225

・エンリル・ナディン・シュミ（生没年不詳） カッシート朝第28代バビロニア王 在位BC1225～BC1224

・カダシュマン・ハルベ2世（生没年不詳） カッシート朝第29代バビロニア王 在位BC1224～BC1233

・アダド・シュマ・イディナ（生没年不詳） カッシート朝第30代バビロニア王 在位BC1233～BC1217

ナブー・アプラ・イディナ（?～BC855） バビロン第8王朝第6代王在位 BC888～BC855

非子（?～BC858） 秦初代伯 在位BC900～BC858

マルドゥク・バラッス・イクビ（?～BC819） バビロン第8王朝第8代王在位 在位BC855～BC819

秦仲（?～BC822） 秦第4代伯 在位BC844～BC822

マルドゥク・ベル・ゼリ（?～BC780） バビロン第8王朝第11代王在位 BC790～BC780

荘公（?～BC778） 秦第5代伯 BC821～BC778



襄公（?～BC766） 秦初代公 在位BC777～BC766

エリバ・マルドゥク（?～BC761） バビロン第8王朝第13代王 在位BC769～BC761※画像なし

ディードー（BC839～BC759） カルタゴ初代女王

※アッシリアに圧されていたバビロニア第8王朝は徐々に拠点を秦に移していたが、アッシリアがバビロニアの王位を篡奪すると、バビロニアの王族は秦と並行して古代チュニジアに移り、カルタゴを築いた。謎の多いカルタゴだが、卓越した航海術と貿易によってローマと肩を並べる強国として隆盛を極めた。が、ポエニ戦争の頃はタナトス（ガリアのドルイド司祭の一族）に蝕まれ、没落していた。

景公（?～BC537） 秦第13代公 在位BC576～BC537

寿夢（?～BC561） 呉初代王 在位BC585～BC561



ハンノ1世 (?～BC556) ディード一朝カルタゴ王 在位BC580～BC556

※その名前からハンノ1世の一族がウェネト族の正体だと考えられる。ガリアのドルイド司祭の一族が人身御供によってカルタゴ中の有能な青少年を皆殺しにしたため、彼らを嫌悪したハンノ1世は一族郎党を引き連れてカルタゴを後にし、ガリアに移り住んだ。

諸樊 (?～BC548) 呉第2代王 在位BC560～BC548

畢万 (生没年不詳) 魏初代王 在位不明

余祭 (?～BC544) 呉第3代王 在位BC547～BC544

芒季 (生没年不詳) 魏第2代王 在位不明

余昧 (?～BC527) 呉第4代王 在位BC543～BC527

武子 (生没年不詳) 魏第3代王 在位不明

マゴ1世 (?～BC530) マゴ朝初代カルタゴ王 在位BC550～BC530

※2013年に「フェニキア人の大航海時代」の仮説を立て、フェニキア人、イスラエルの失われた10支族などが参加して西方と東方に向かう大航海時代があったということを電子書籍に認(したた)めた。今まで、歴史を考える時にはその仮説を基本に考えてきたが、ここにきてそれを訂正したいと思う。

歴史を精査してわかったことだが、海洋民族として知られるフェニキア人が指揮する大規模な大移住計画などなくとも、古代の民族は各々が自主的に船団を操り、世界の海を往来していたのだ。

フェニキア人の正体はデウカリオンの一族(マウンド派)だが、彼らはバビロニア帝国末期の時代に中国と地中海に新天地を求め、同時にカルタゴと秦を生んだ。更にその後、カルタゴでマゴ朝が開かれたと同じ頃、中国では呉、魏、韓が生まれた。古事記、日本書紀に登場する天孫族とは、このマゴ朝の歴代王のことであり、多氏とは呉の歴代王のことである。

秦(キン)の由来はメソポタミアの月の神シンだと考えられるが、マゴ朝のマゴ、天孫族の孫(まご)、呉(ウー)と多(おお)の由来はフェニキア文字オメガ(読みは「オー」)であり、魏(ウェイ)の由来はフェニキア文字ペーである。そして韓(ハン)の由来はフェニキアである。フェニキア人は中国と地中海を自在に往来してマゴ朝、呉、魏、韓の王を同時に兼任したが、魏の王位がサトゥルヌスの一族に篡奪されてしまう。この時にサトゥルヌスの一族は、カルタゴ全域に鳥居と神社の原型である人身御供の社「ダリの神殿」を建てた。

●フェニキア人の王、天孫族の王、多氏の王(秦、マゴ朝、呉、魏、韓の歴代王)

僚 (?～BC516) 呉第5代王 在位BC526～BC516

莊子（生没年不詳） 魏第4代王 在位不明

ハスドルバル1世（?～BC510） マゴ朝第2代カルタゴ王 在位BC530～BC510

闔閭（?～BC496） 呉第6代王 在位BC515～BC496

献子（生没年不詳） 魏第5代王 在位不明

夫差（?～BC473） 呉第7代王 在位BC495～BC473

簡子（生没年不詳） 魏第6代王 在位不明

襄子（生没年不詳） 魏第7代王 在位不明

ハミルカル1世（?～BC480） マゴ朝第3代カルタゴ王 在位BC510～BC480

魏駒（?～BC446） 魏第8代王 在位?～BC446

ハンノ2世（?～BC440） マゴ朝第4代カルタゴ王 在位BC480～BC440

・韓虎（?～BC425） 韓第10代王 在位?～BC425

ヒミルコ1世（?～BC410） マゴ朝第5代カルタゴ王 在位BC460～BC410

韓啓章（?～BC409） 韓第11代王 在位BC424～BC409

ハンニバル1世（?～BC406） マゴ朝第6代カルタゴ王 在位BC440～BC406

韓虔（?～BC400） 韓第12代王 在位BC408～BC400

ヒミルコ2世（?～BC396） マゴ朝第7代カルタゴ王 在位406～BC396

韓取（?～BC387） 韓第13代王 在位BC399～BC387

マゴ2世（?～BC375） マゴ朝第8代カルタゴ王 在位BC396～BC375

韓猷（?～BC377） 韓第14代王 在位BC386～BC377

マゴ3世（?～BC344） マゴ朝第9代カルタゴ王 在位BC375～BC344

韓屯蒙（?～BC374） 韓第15代王 在位BC376～BC374

韓若山（?～BC363） 韓第16代王 在位BC374～BC363

韓武（?～BC333） 韓第17代王 在位BC362～BC333

ハンノ3世（?～BC340） マゴ朝第10代カルタゴ王 在位BC344～BC340

大ハンノ（?～BC337） ハンノ朝初代カルタゴ王 在位BC340～BC337

ギスコ（?～BC330） ハンノ朝第2代カルタゴ王 在位BC337～BC330

韓康 (?～BC 312) 韓第18代王 在位BC 332～BC 312

ハミルカル2世 (?～BC 309) ハンノ朝第3代カルタゴ王 在位BC 330～BC 309

ボミルカル (?～BC 308) ハンノ朝第4代カルタゴ王 在位BC 309～BC 308

-----

●カリンガ国、丁零（ディングリング）、高車（ガオチェ）の王（秦、漢皇の歴代皇帝）

昭襄王 (?～BC 251) 秦第3代王 在位BC 306～BC 251

韓倉 (?～BC 296) 韓第19代王 在位BC 311～BC 296

韓咎 (?～BC 273) 韓第20代王 在位BC 295～BC 273

・孝文王 (?～BC 250) 秦第4代王 在位BC 250

莊襄王 (?～BC 247) 秦第5代王 在位BC 249～BC 247

韓然 (?～BC 239) 韓第21代王 在位BC 272～BC 239

韓安 (?～BC 230) 韓第22代王 在位BC 238～BC 230



始皇帝 (BC 259～BC 210) 秦初代皇帝 在位BC 246～BC 210

劉邦 (BC 256～BC 195) 漢初代皇帝 在位BC 202～BC 195

※生年が3年違いだが、始皇帝と劉邦は同一人物だったようだ。漢（ハン）の名の由来はフェニキアである。

・恵帝 (BC 210～BC 188) 漢第2代皇帝 在位BC 195～BC 188

・前少帝 (?～BC 184) 漢第3代皇帝 在位BC 188～BC 184

- ・後少帝（？～BC180） 漢第4代皇帝 在位BC184～BC180
- ・文帝（BC203～BC157） 漢第5代皇帝 在位BC180～BC157
- ・景帝（BC188～BC141） 漢第6代皇帝 在位BC157～BC141
- ・武帝（BC156～BC87） 漢第7代皇帝 在位BC141～BC87
- ・昭帝（BC94～BC74） 漢第8代皇帝 在位BC87～BC74
- ・劉賀（BC92～BC59） 漢第9代皇帝 在位BC74～BC59
- ・宣帝（BC91～BC48） 漢第10代皇帝 在位BC59～BC48



秦始皇帝陵（BC221年頃）

※ディングリング（丁零）の名はモンゴルの天空神テングリの本名である。高車（ガオチェ）の由来は原初の神カオスで、河内の由来はガオチェである。超古代、オリジナル人類のディンカとムルングが合体してトゥングル族となり、古代にインドネシアに住んでいたが、彼らがシベリアに移住してテングリを生んだ。丁零はこの時代、首長である秦の始皇帝の要請を受けて始皇帝凌を築き、万里の長城の建設にも着手した。

元帝（BC74～BC33） 漢第10代皇帝 在位BC48～BC33

赫居世居西干（BC69～4） 新羅初代王 在位BC57～4

南解次次雄（？～24） 新羅第2代王 在位4～24

更始帝（？～25） 新初代皇帝 在位23～25

※丁零、高車の首長を兼任している元帝はチュルク族を率いて朝鮮半島に新羅（しらぎ）を築いた。シラギの由来はチュルクである。韓国では新羅はシンラと読むが、日本でシラギと読むのは、日本武尊か、或いは河内氏の影響だと考えられる。

おもしろいことに、新羅第2代王が前漢と後漢の間に「新」を開いている。新の由来は新羅だ

ろう。諸葛孔明の一族が中国を訪れたため、抵抗を示す意味で新を築いたが、同じダヴィデの一族であるため、前漢皇帝の一族は後漢を諸葛氏に譲り、新羅の支配に特化したようだ。

- ・ 奈解尼師今 (?~230) 新羅第10代王 在位196~230
- ・ 助賁尼師今 (?~247) 新羅第11代王 在位230~247
- ・ 沾解尼師今 (?~261) 新羅第12代王 在位247~261
- ・ 味鄒尼師今 (?~284) 新羅第13代王 在位261~284
- ・ 儒礼尼師今 (?~298) 新羅第14代王 在位284~298
- ・ 基臨尼師今 (?~310) 新羅第15代王 在位298~310
- ・ 訖解尼師今 (?~356) 新羅第16代王 在位310~356
- ・ 奈勿尼師今 (?~402) 新羅第17代王 在位356~402
- ・ 実聖尼師今 (?~417) 新羅第18代王 在位402~417
- ・ 訥祗麻立干 (?~458) 新羅第19代王 在位417~458
- ・ 慈悲麻立干 (?~479) 新羅第20代王 在位458~479
- ・ ショウ知麻立干 (?~500) 新羅第21代王 在位479~500
- ・ 智証麻立干 (?~514) 新羅第22代王 在位500~514



法興王 (?~540) 新羅第23代王 在位514~540※画像なし  
ヌルシアのベネディクトゥス (480~547) ベネディクト会教祖

※ベネディクトの由来はウェネトである。ウェネト=ヴェネティ=ベネディクトとなる。

- ・ 真興王 (?~576) 新羅第24代王 在位540~576
- ・ 真智王 (?~579) 新羅第25代王 在位576~579
- ・ 真平王 (?~632) 新羅第26代王 在位579~632
- ・ 善徳女王 (?~647) 新羅第27代王 在位632~647
- ・ 真徳女王 (?~654) 新羅第28代王 在位647~654
- ・ 武烈王 (?~661) 新羅第29代王 在位654~661
- ・ 文武王 (?~681) 新羅第30代王 在位661~681

- ・ 神文王（?～230） 新羅第31代王 在位681～692
- ・ 孝昭王（687～702） 新羅第32代王 在位692～702

※奈解尼師今から孝昭王に至る新羅王は日本で日本武尊、或いは河内氏を称した。河内氏は石舞台古墳を築き、一方で現ペルー・ナスカに渡って「軍事国家カワチ」を築き、ピラミッドなどの記念碑も築いた。奈解尼師今から孝昭王に至る23人の新羅王が古墳時代の日本各地で数々の前方後円墳を製作・指揮し、一方でマヤにイサパ文化を残し、また一方でナスカの軍事国家カワチの首長を務めたと考えられる。



前方後円墳（AD1世紀～4世紀頃）

※日本武尊（新羅王）は熊襲武尊に勝利した後に日本中にマウンド（前方後円墳）を建造した。古墳時代の始まりである。新羅王（日本武尊）は、ついでに九頭龍崇拝の人身御供の神官を務めていた高句麗王・百濟王（サトゥルヌスの一族）を皆殺しにしていた。



石舞台古墳（年代不明）

※新羅王（日本武尊）は、明日香村に石舞台古墳を築いた。河内のだんじり祭りは、巨石の運搬が昇華されたものと考えられる。



イサパ文化（A D 4 世紀頃）

※新羅王は極東を離れて太平洋を横断し、マヤに渡った。新羅王（日本武尊）はイサパにマウンドを築いた。しかし、ここでイサパのマウンド派は、再度、ピラミッド派と対立した（この時代のピラミッド派はサトゥルヌスの一族に支配されていた）。だがピラミッド派に敗北した彼らは、マヤを去った。



カワチ遺跡（年代不明）

※カワチ遺跡は河内氏（新羅王）が築いたが、8世紀頃にナスカを離れて日本・諏訪国に入植してナスカを由来に「根津氏」を名乗るようになる。

-----

聖徳王（?～737） 新羅第33代王 在位702～737

パオロ・ルーチョ・アナフェスト（?～717） ヴェネツィア初代元首 任期697～717

マルチェット・テガッリアーノ（?～726） ヴェネツィア第2代元首 任期717～726

オルソ・イパート（?～737） ヴェネツィア第3代元首 任期726～737

※第33代新羅王は、初代から第3代までの元首を務め、ヴェネツィア共和国の礎を築いた。ヴェネツィアの由来はフェニキアである。フェニキア=ブエニチア=ヴェネツィアとなる。モホス時代、フェニキア人時代を通して一流の土木技術の集団だったマウンド派は、文字通りヴェネツィアを「建てた」。人が住むことができない湿地帯に無数の杭を打ち込み、その上に街を建てたのだ。

### ●プエブロ族の首長（新羅王）

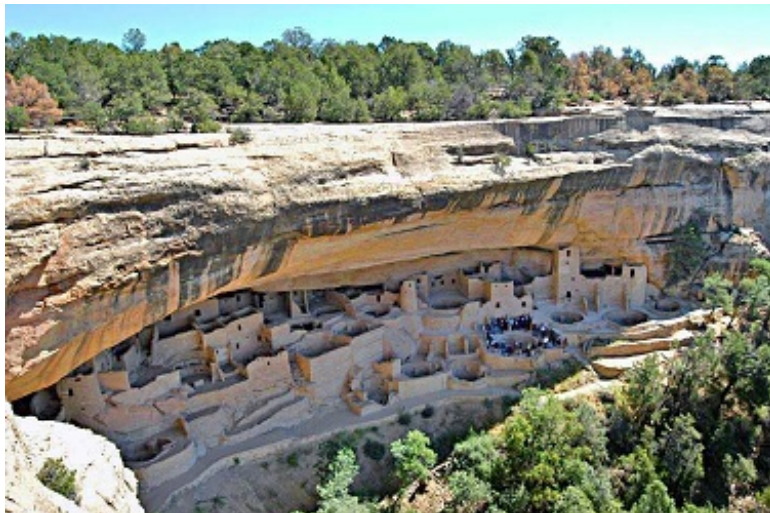
・孝成王（?～742） 新羅第34代王 在位737～742

・景德王（?～765） 新羅第35代王 在位742～765

・恵恭王（?～780） 新羅第36代王 在位765～780

・宣徳王（?～785） 新羅第37代王 在位780～785

・元聖王（?～798） 新羅第38代王 在位785～798



※画像はプエブロ族の住居。見ての通り、巨石建造の種族らしく、プエブロ族も土木建築技術に長けている。プエブロの名の由来はビュブロスであり、ホピの名の由来はヘブライ、或いはバビロニア、ヒベルニアである。





カホキア遺跡（AD 8世紀頃）

※孝成王から元聖王までの5人の新羅王はミシシッピ流域に進出し、カホキア遺跡を残した。マウンド派の子孫である新羅王は、これを最後にマウンドの建造を中止した。



敬順王（?～935） 新羅第56代王 在位927～935

オルソ・パルテチパツィオ2世（?～932） ヴェネツィア第18代元首 任期912～932  
※画像なし

※敬順王を最後に新羅の拠点はヴェネツィア共和国に移った。ヴェネツィア共和国はヨーロッパ列強の中で唯一魔女狩りを拒否し、タナトスの一族が支配するピサ共和国やジェノヴァ共和国と対立し、覇権を競った。

トリブーノ・メンモ（?～991） ヴェネツィア共和国第25代元首 在位979～991

エリク6世（945～995） ユングリング朝初代スウェーデン王 在位975～995

※オスマントルコ皇帝の一族のように、ヴェネツィア共和国元首の一族は世界を救う使命を負っていたようだ。元首メンモはスウェーデンに進出し、ユングリング朝を開いている。ユングリン

グの由来はディングリング（丁零）である。

オットーネ・オルセオロ（?～1026） ヴェネツィア共和国第27代元首 在位1009～1026

オーロフ（?～1022） ユングリング朝第2代スウェーデン王 在位995～1022

ドメニコ・フラバニコ（?～1043） ヴェネツィア共和国第29代元首 在位1032～1043

アーヌンド・ヤーコブ（?～1050） ユングリング朝第3代スウェーデン王 在位1022～1050

ドメニコ・コンタリーニ（?～1071） ヴェネツィア共和国第30代元首 在位1043～1071

エムンド（?～1060） ユングリング朝第4代スウェーデン王 在位1050～1060

ステンキル（?～1066） ステンキル朝初代スウェーデン王 在位1060～1066

エリク7世（?～1067） ステンキル朝第2代スウェーデン王 在位1066～1067

エリク8世（?～1067） ステンキル朝第3代スウェーデン王 在位1066～1067

ハルステン（?～1070） ステンキル朝第4代スウェーデン王 在位1067～1070

ドメニコ・セルヴォ（?～1084） ヴェネツィア共和国第31代元首 在位1071～1084

ホーコン（?～1079） ステンキル朝第5代スウェーデン王 在位1070～1079

インゲ1世（?～1084） ステンキル朝第6代スウェーデン王 在位1079～1084

※コンタリーニとセルヴォの両元首はステンキル朝を開き、スウェーデン人を正しく導くためにスウェーデン王として君臨し続けた。

-----



ピエトロ・ツィアニ (?～1229) ヴェネツィア第42代元首 任期1205～1229※  
画像なし

フナク・セエル (生没年不詳) マヤ人将軍※画像なし

マンコ・カパック (?～1230) クスコ王国初代王 在位1200前後

※ヴェネツィア共和国元首ピエトロ・ツィアニは、ヴェネツィアを離れて最初にマヤに進出し、フナク・セエルに変身して1221年にチチェン・イツァーの支配者に対する蜂起を指揮し、これを倒した後にマヤパンを築いた。フナクの由来はフェニキアだと考えられる。その後、フナクはマヤを後にインカに移住し、クスコ王国を建設する。

クスコ王国初代王マンコの名の由来は、彼らの先祖丁零が住んでいたモンゴルである。更に、クスコの由来はカシュガルであり、インカの由来はジュンガルである。インカ帝国の重要な名前がモンゴルに因んでいるのがよく分かるだろう。



シンチ・ロカ (?～1260) クスコ王国第2代王 在位1230頃

イズヅディーン・アイバク (?～1257) マムルーク朝第2代スルターン 在位1250  
～1257※画像なし

※クスコ王国第2代王の時代、クスコ人はエジプトに進出してマムルーク朝を開いた。クスコ王は代々のマムルーク朝スルターンを兼任した。マムルーク朝第5代スルターンのバイバルスの名はビュブロスに因んでいる。

リョケ・ユパンキ (?~1290) クスコ王国第3代王 在位1260~1290

カラーウン (1220~1290) マムルーク朝第8代スルターン 在位1279~1290

カパック・ユパンキ (?~1350) クスコ王国第5代王 在位1320~1350

ムザッファル・ハーッジー (?~1347) マムルーク朝第21代スルターン 在位1346~1347



インカ・ロカ (?~1380) クスコ王国第6代王 在位1350~1380

マンスール・アリー (?~1381) マムルーク朝第27代スルターン 在位1377~1381 ※画像なし

パチャクテク (?~1471) インカ帝国初代皇帝 在位1438~1471

ザーヒル・ティムルブガー (?~1468) ブルギー朝第18代スルターン 在位1468

トゥパック・インカ・ユパンキ (?~1493) インカ帝国第2代皇帝 在位1471~1493

アシュラフ・カーイトバーイ (?~1495) ブルギー朝第19代スルターン 在位1468~1495

ワイナ・カパック (?~1527) インカ帝国第3代皇帝 在位1493~1527

ナーシル・ムハンマド (?~1498) ブルギー朝第20代スルターン 在位1495~1498

ザーヒル・カーンスーフ (?~1499) ブルギー朝第21代スルターン 在位1498~1499

アシュラフ・ジャンバラート (?~1501) ブルギー朝第22代スルターン 在位1499~1501

アーディル・トゥーマンバーイ (?~1501) ブルギー朝第23代スルターン 在位1501

アシュラフ・カーンスーフ・ガウリー (?~1516) ブルギー朝第24代スルターン 在位

1501～1516

アシュラフ・トゥーマーンバイ (?～1517) ブルギー朝第25代スルターン 在位1516～1517



ワスカル (1491～1532) インカ帝国第5代皇帝 在位1527～1532

アンソニー・モンク (1490～1545) フリーメイソン創設※画像なし

※インカ皇帝ワスカルはインカ帝国を後にし、極秘にイングランドに移住した。彼はマンコを由来にモンクを称した。アンソニー・モンクに変身したインカ皇帝ワスカルはフリーメイソン（スコットランド、メイソンロッジ）を創設したと考えられる。

フリーメイソンの創設者・代表者の名前などは一切不明だが、ティカル人マウンド派の子孫であるアンソニー・モンクが創設したと推測できる。フリーメイソンの名の由来はヘブライの石工（メイソン）である。ヘブライ+メイソン=ブライメイソン=フライメイソン=フリーメイソンとなる。

・アタワルパ (1502～1533) インカ帝国第6代皇帝 在位1532～1533

・マンコ・インカ・ユパンキ (1516～1536) インカ帝国第8代皇帝 在位1533～1536

・トゥパック・アマル (?～1572) インカ帝国第11代皇帝 在位1571～1572

-----  
トーマス・モンクの子 (アンソニーモンクの曾孫)



ジョージ・モンク（1608～1670） 初代アルベマール公  
シドニー・モンタギュー（?～1644）※画像なし

議会派のニューモデル軍に属して少将となり、1647年にアイルランドに出兵して転戦、1649年にアイルランド・カトリック同盟の指導者オーウェン・ロー・オニールと和睦を結んで帰国した。続いて翌1650年に議会派の司令官オリバー・クロムウェルに従いスコットランドへ遠征、第三次イングランド内戦におけるダンバーの戦いでジョン・ランバート・チャールズ・フリートウッドらと連携してスコットランド軍を撃破した後はスコットランド駐留軍の指揮を任され、翌1651年のウスターの戦いの際、スコットランド軍が南下しながら空きになった隙にスコットランド各地を転戦して1652年までにスターリング・ダンディー・アバディーン・オークニー諸島などを占領してスコットランドを平定した。翌1653年にクロムウェルが護国卿に就任すると、スコットランド代表として政権に加わりイングランド共和国の有力者となった。ジョージ・モンク [wiki](#) より

-----  
シドニー・モンタギュー（ジョージ・モンク）の子



エドワード・モンタギュー（1625～1672） 初代サンドウィッチ伯爵  
ポペ（1630～1692） プエブロ知事※画像なし

魔術の使用による逮捕とその後の釈放に続いて、ポペはプエブロの反乱を計画し、これを指揮

した。いくつかの殺人の共犯によってスペイン当局から逃げていた間、ポペはタオス・プエブロの集落で難を避けた。ポペは、スペイン人に対して一斉に蜂起することを命令するその日までの残り日数を意味する結び目を付けた、プエブロ独特の結び目の暗号を持たせた使者を、各プエブロ集落に派遣した。

攻撃の決行日は1680年8月18日と決定された。しかしスペイン人はこれを事前に知ることができた。なぜなら、プエブロにメッセージを伝えるために預けられた、テスケ・プエブロ(現在のテスケ)の2名の若者を捕らえて聞き出したためである。ポペは、蜂起が計画された日の前の、8月10日、陰謀の実行を命令した。攻撃はタオス、ピクリス、テワによって、それぞれの集落で一斉に開始された。18人のフランシスコ修道士の聖職者、3人の平修士、男女子供合わせて380人のスペイン人が殺された。スペイン人開拓者は唯一のスペイン人の街であるサンタフェと、反逆に参加しなかった数少ない集落のひとつ、イスレタに逃げ込んだ。9月15日、イスレタへの避難民は、自分たちが唯一の生存者であると信じて、エルパソに向けて出発した。その間、ポペの賊はサンタフェの町を囲い込み、水の供給を断ち切った。総督邸を嚴重に囲んだアントニオ・デ・オテルミン総督は、これで後退を余儀なくされ、9月21日にスペイン人の移住者たちは首都から一掃されて、エルパソ・デル・ノルテ(現在のシウダー・ファレス)へと向かった。プエブロの反乱w i k i より

※エドワードは家族であるプエブロ族を救うためにイングランドからスペイン領コロラドに馳せ参じ、スペイン軍に蜂起してこれを追放した。その後、「ポペの王国」を築いたが、彼の死後、プエブロ族の土地はすぐにスペイン人に占領された。



エドワード・モンタギュー（1670～1729） 第3代サンドウィッチ伯爵

※エドワードが、イングランドグランドロッジを1717年に設けたと考えられる。その後、サンドウィッチ伯爵が代々のフリーメイソンの頭領を務めたと考えることができる。

ジョージ・モンタギュー（1773～1818） 第6代サンドウィッチ伯爵



※上画像は gaucho である。gaucho とは、アルゼンチン、ウルグアイ、ブラジル南部のパンパ（草原地帯）やアンデス山脈東部に暮らす謎の人々である。彼らの正体はインカ帝国の王族であり、gaucho の由来はガオチェ（高車）から来ている。gaucho は勇猛なことで知られ、1806年、1807年に大英帝国軍がブエノスアイレスに侵攻してきた際、イギリス軍を撃退している。gaucho たちを指揮していたのは第6代サンドウィッチ伯爵ジョージ・モンタギューだと考えられる。



ジョン・モンタギュー（1811～1884） 第7代サンドウィッチ伯爵※画像なし  
アンリ・ファーブル（1823～1915） 昆虫学者

※ファーブルの名の由来はプエブロだと考えられる。プエブロ＝プエブロ＝ファーブルとなる。ファーブルの顔も良く見るとヨーロッパ人というよりはアメリカインディアンに似ている。





ヴィクター・モンタギュー（１９０７～１９９５） 第１０代サンドウィッチ伯爵※画像なし  
アリストテレス・オナシス（１９０６～１９７５） オナシス財閥始祖

※オナシスの名の由来はアナサジ（コロラドの部族）だと考えられる。



ジョン・モンタギュー（１９４３） 第１１代サンドウィッチ伯爵  
アレクサンダー・オナシス（１９４８～１９７３）※画像なし

※ジョン・モンタギューは、ディズニーランドでサンドウィッチ店を営んでいるようだが、その正体はフリーメイソンの頭領かもしれない。

デウカリオンの一族（ピラミッド派）～ギザのピラミッド、ラムセス3世、曹、テオティワカン宗教都市、越、熊襲武尊、後漢皇帝、魔法使いの神殿、クメール王朝、ムハンマド・アリー朝、チャーリー・チャップリン

---



デウカリオンの一族（絵は炎に囲まれる日本武尊と熊襲武尊を襲う日本武尊）

※デウカリオンの一族は「神統記」で最大最強の怪物と呼ばれたテュポンと巨人アグリオスが合体することで生まれた。テュポン+アグリオス=テュグリオ=デウカリオンとなる。1万3千年前の大地殻変動の後、古代オーストラリアからメソポタミアに移ったデウカリオンは、巨石建造の一族ティカル人として活動する。デウカリオン=デウカリ=ティカルとなる。ティカルとはマヤの都市の名のひとつである。

その後BC35世紀頃、津軽時代にティカル人は2種類に分離した。テュポンのティカル人はピラミッド派としてピラミッドを建造し、アグリオスのティカル人はマウンド派としてマウンドを建造した。古墳時代には、ティカル人はモンゴルを拠点にし、マウンド派は丁零（ディングリング）、ピラミッド派は高車（ガオチェ）を名乗っていた。

また、日本ではマウンド派は日本武尊（ヤマトのティカル）を名乗り、ピラミッド派は熊襲武尊（クマソのティカル）を名乗っていた。ピラミッド派はマウンド派と対立していたが、日本武尊が勝利したことにより、前方後円墳と呼ばれた巨大なマウンドの建造を開始した。古墳時代の始まりである。

-----



ギョベクリ・テペ（BC 76世紀頃）

※神々の集団アヌンナキの時代、デウカリオンの一族は初めて偉大な先祖を祀る巨石文化の端緒を切った。



イングランドのドルメン（BC 40世紀頃）

※BC 50世紀頃、「第一次北極海ルートの大航海時代」を機に、デウカリオンの一族はヨーロッパを訪れ、ドルメンを築くようになった。ドルメンはマウンドを築く際の基礎部分であり、その発展形として後に、土を被せていくようになったと考えられる。ドルメンはBC 40世紀～BC 30世紀にかけてヨーロッパ中に築かれた。巨石の一族による、偉大な先祖を祀る記念碑の試作品である。



ロシアの巨石（年代不明）

※巨石建造の一族ティカル人は北極海ルートを通じてヨーロッパと津軽を往来していた。一方でヨーロッパにドルメンを築き、一方でロシア各地に巨石建造物の試作品を残した。ロシアの場合、ひとつの石が3000t～4000tとあまりに巨大すぎるため、偉大な先祖を祀る記念碑の建造に賛同した科学の種族トバルカインがティカル人に手を貸していたと考えられる。



黒又山（BC40世紀頃）

※すべてのピラミッド、マウンドの始まりは黒又山である。津軽に住んでいたティカル人は出羽国のトバルカインと共に先祖を祀る記念碑の建造を試みていた。その成果が、黒又山や十和田湖に沈んでいると伝えられる伝説の巨大ピラミッドである。黒又山は、マウンドとピラミッドの間系ピラミッドである。この後、BC 35世紀頃に「モーゼスの大移動時代」が起こり、ティカル人はピラミッド派とマウンド派に分離した。

---



カラル遺跡（BC 29世紀）

※マウンド派と分離したピラミッド派は、ペルーに移り住んでカラル遺跡にピラミッドの試作品を残した。



ギザのピラミッド（BC 27世紀）

※ピラミッド派は古代エジプトに到来し、タナトス（預言者ナタン一族）を追放し、エジプト第3王朝を築いた。代々の王が建築者、及び指揮官として階段ピラミッドの建造を皮切りに次々とピラミッドを築いていく。ピラミッドは王墓ではなく、偉大な先祖を祀る記念碑だった。ティ

カル人は「人類は偉大な先祖を祀ることで人生を全うするべきだ」とストイックな考え方をしていたようだ。もちろん、タナトスの一族と違って強制ではない。

- ・ネブカー（生没年不明） エジプト第3王朝初代王
- ・ジェセル（生没年不明） エジプト第3王朝第2代王 在位BC2668～BC2649
- ・ジェセル・テティ（生没年不明） エジプト第3王朝第3代王
- ・テティ（生没年不明） エジプト第3王朝第4代王
- ・フニ（生没年不明） エジプト第3王朝第5代王 在位BC2637～BC2613
  
- ・スネフェル（生没年不明） エジプト第4王朝初代王 在位BC2613～BC2589
- ・クフ（生没年不明） エジプト第4王朝第2代王 在位BC2589～BC2566
- ・ジェドエフラ（生没年不明） エジプト第4王朝第3代王 在位BC2566～BC2558
- ・カフラ（生没年不明） エジプト第4王朝第4代王 在位BC2558～BC2532
- ・バカ（生没年不明） エジプト第4王朝第5代王 在位BC2532
- ・メンカウラー（生没年不明） エジプト第4王朝第6代王 在位BC2532～BC2504
- ・シェプスセスカフ（生没年不明） エジプト第4王朝第7代王 在位BC2504～BC2500
- ・ジェドエフプタハ（生没年不明） エジプト第4王朝第8代王 在位BC2500～BC2498
  
- ・ウセルカフ（生没年不明） エジプト第5王朝初代王 在位BC2498～BC2491
- ・サフラ（生没年不明） エジプト第5王朝第2代王 在位BC2491～BC2477
- ・ネフェルイルカラー（生没年不明） エジプト第5王朝第3代王 在位BC2477～BC2467
- ・シェプセスカラー（生没年不明） エジプト第5王朝第4代王 在位BC2467～BC2460
- ・ネフェルエフラ（生没年不明） エジプト第5王朝第5代王 在位BC2460～BC2453
- ・ネウセルラー（生没年不明） エジプト第5王朝第6代王 在位BC2453～BC2422
- ・メンカウホル（生没年不明） エジプト第5王朝第7代王 在位BC2422～BC2414
- ・ジェドカラー（生没年不明） エジプト第5王朝第8代王 在位BC2414～BC2375
- ・ウナス（生没年不明） エジプト第5王朝第9代王 在位BC2375～BC2345
  
- ・アメンエムハト1世（生没年不明） エジプト第12王朝初代王 在位BC1991～BC1962
- ・センウセト1世（生没年不明） エジプト第12王朝第2代王 在位BC1971～BC1

926

・アメンエムハト2世（生没年不明） エジプト第12王朝第3代王 在位BC1929～BC1895

・センウセレト2世（生没年不明） エジプト第12王朝第4代王 在位BC1897～BC1878

・センウセレト3世（生没年不明） エジプト第12王朝第5代王 在位BC1878～BC1841

・アメンエムハト3世（生没年不明） エジプト第12王朝第6代王 在位BC1842～BC1797

・アメンエムハト4世（生没年不明） エジプト第12王朝第7代王 在位BC1798～1786

・セベクネフェル（生没年不明） エジプト第12王朝第8代王 在位BC1785～BC1782

※ティカル人マウンド派（バビロニア人）が第6王朝、第8王朝を開き、ダヴィデの一族が第11王朝を開くようになり、一時期、古代エジプト王朝でピラミッドが建造されなくなるが、第12王朝の時代にティカル人ピラミッド派の覇権が復活し、新たにピラミッドが建造されている。



●ラス・アルダスの王（エジプト第19王朝+第20王朝の歴代ファラオ）

・ラムセス1世（生没年不明） エジプト第19王朝初代王 在位BC1293～BC1291

・セティ1世（生没年不明） エジプト第19王朝第2代王 在位BC1291～BC1278

・ラムセス2世（生没年不明） エジプト第19王朝第3代王 在位BC1279～BC1212

- ・メルエンプタハ（生没年不明） エジプト第19王朝第4代王 在位BC1212～BC1202
- ・アメンメセス（生没年不明） エジプト第19王朝第5代王 在位BC1202～BC1199
- ・セティ2世（生没年不明） エジプト第19王朝第6代王 在位BC1199～BC1193
- ・サプタハ（生没年不明） エジプト第19王朝第7代王 在位BC1193～BC1187
- ・タウセルト（生没年不明） エジプト第19王朝第8代王 在位BC1187～BC1185
  
- ・セトナクト（生没年不明） エジプト第20王朝初代王 在位BC1185～BC1182
- ・ラムセス3世（生没年不明） エジプト第20王朝第2代王 在位BC1182～BC1151
- ・ラムセス4世（生没年不明） エジプト第20王朝第3代王 在位BC1151～BC1145
- ・ラムセス5世（生没年不明） エジプト第20王朝第4代王 在位BC1145～BC1141
- ・ラムセス6世（生没年不明） エジプト第20王朝第5代王 在位BC1141～BC1133
- ・ラムセス7世（生没年不明） エジプト第20王朝第6代王 在位BC1133～BC1126
- ・ラムセス8世（生没年不明） エジプト第20王朝第7代王 在位BC1133～BC1126
- ・ラムセス9世（生没年不明） エジプト第20王朝第8代王 在位BC1126～BC1108
- ・ラムセス10世（生没年不明） エジプト第20王朝第9代王 在位BC1108～BC1098
- ・ラムセス11世（生没年不明） エジプト第20王朝第10代王 在位BC1098～BC1070



※第13王朝から第17王朝までがタナトスの一族（預言者ナタンの一族）に支配されているが



、第19王朝、第20王朝はティカル人ピラミッド派が覇権を取り戻した。彼らはエジプトではピラミッドを建造しなくなるが、ダヴィデの一族が預言者ナタンの一族を追放して第18王朝を開くと、ピラミッドの代わりにルクソール神殿を建立した。

彼らは、ファラオに即位しながら、ピラミッドだけは遠く離れた古代ペルーで作るようになった。エジプト第19王朝、第20王朝のファラオたちがラス・アルダス遺跡などの王を兼任し、遺跡建造の指揮者となった。ただ、ラムセス王の時代、代々のファラオたちの影武者の中に預言者ナタンの一族（タナトス）が混じっていた。タナトスの影武者たちは内部からエジプトを蝕み、外部からは海の民デニエン人（ダーナ神族の一族）が攻撃してきた。

-----

- ・曹叔振鐸（生没年不明） 曹初代君主 在位BC11世紀
- ・太伯（生没年不明） 曹第2代君主 在位BC11世紀
- ・仲君（生没年不明） 曹第3代君主 在位BC10世紀
- ・宮伯（生没年不明） 曹第4代君主 在位BC10世紀
- ・孝伯（生没年不明） 曹第5代君主 在位BC10世紀

※第20王朝のファラオたちは古代エジプトから中国に移り、曹（カオ）を築いた。曹（カオ）の由来は盤古（パングア）だと考えられる。曹の歴代君主は宗教都市チャビン・デ・ワントルを建設し、王を兼任した。



●チャビン・デ・ワントルの王（曹の歴代王）

※曹の歴代君主たちはマウンド派と連合を試み、BC10世紀に巨大な土製のピラミッドをエル・サルバドル、ホンジュラスに建造した。

同年代に、曹の歴代君主たちがチャビン・デ・ワントルに宗教都市を建設すると、それを境にピラミッド派の活動が活発化する。ピラミッド派は、マラニョン川、カハマルカ地域にピラミッド

を建設し、ネペニャ川に神殿を建設した。その後も、カスマ川、アヤクーチョ地方、ピルー川、チャンカイ川、チンチャ川と次々にピラミッドを製作した。

戴伯（生没年不詳） 曹第8代君主 在位BC826～BC796

※戴伯は中国からイオニアに進出し、「イオニア同盟」を結成した。エーゲ海には古くからガリアのドルイド司祭の一族が君臨していたため、民を救おうとしたのだろう。イオニアの由来はウェネである。津軽時代にオリジナル人類ウェネ（アイヌ族）と交流があったため因んだのだろう。この当時は、曹（中国）、イオニア（エーゲ海）、チャビン・デ・ワントル（ペルー）を勢力圏にしていた。

### ●宗教都市テオティワカンの王（曹の歴代王）



テオティワカン宗教都市（BC6世紀）

※曹第18代君主から最後の第26代君主に至るまでの曹の歴代君主は古代メキシコにテオティワカン宗教都市を築き、テオティワカンの王として君臨したと考えられる。タナトスの一族（人身御供の種族サトゥルヌス）は既にユカタン半島（マヤ）に巢食っていたが、この当時のピラミッド頂上部にはまだ神殿が築かれていないため、サトゥルヌスの一族はまだメキシコ北部に進出していなかったようだ。

・宣公（生没年不明） 曹第18代君主 在位BC595～BC578

・成公（生没年不明） 曹第19代君主 在位BC578～BC555

武公（?～BC528） 曹第20代君主 在位BC555～BC528

夫譚（?～BC538） 越初代君主

※曹第20代君主は越（ユエ）を築いた。ユエの由来はイオニアと考えられる。曹第8代君主の時代に曹の王族はイオニアに進出してイオニア人と呼ばれていた。

- ・平公（生没年不明） 曹第21代君主 在位BC528～BC524
- ・悼公（生没年不明） 曹第22代君主 在位BC524～BC515
- ・声公（生没年不明） 曹第23代君主 在位BC515～BC510
- ・隠公（生没年不明） 曹第24代君主 在位BC510～BC506

靖公（?～BC502） 曹第25代君主 在位BC506～BC502

允常（?～BC496） 越第2代君主

曹伯陽（?～BC487） 曹第26代君主 在位BC502～BC487

勾踐（?～BC494） 越第2代王 在位BC496～BC494

恵公（?～BC491） 第15代秦公 在位BC500～BC491

※曹最後の君主、曹伯陽の時に曹の王族は秦の王族（ティカル人マウンド派）と合体したと考えられる。その後、ピラミッド派とマウンド派は始皇帝凌を共同で製作する。その後も、お互いが漢の皇帝を代々務めていたが、いち早く離脱したティカル人マウンド派が朝鮮に新羅を築いたため、ティカル人ピラミッド派が漢を継承した。

新羅を築いたものの、新羅第2代王南解次次雄（マウンド派）が一度、中国に「新」を築いた。この混乱がいわゆる、熊襲武尊（ピラミッド派）と日本武尊（マウンド派）の対立のモデルかもしれない。ある意味、熊襲武尊と日本武尊の対立は、後漢の皇帝（ピラミッド派）と新羅の王（マウンド派）の戦いでもあった。



●モンテ・アルバンの王（越の歴代王+秦、後漢歴代皇帝）

無疆（?～BC306） 越第12代君主 在位BC342～BC306※最後の王

武王（?～BC307） 秦第2代王 在位BC310～BC307

- ・光武帝（BC5～57） 後漢初代皇帝 在位25～57
- ・明帝（?～75） 後漢第2代皇帝 在位57～75
- ・章帝（?～88） 後漢第3代皇帝 在位75～88

- ・和帝 (?～105) 後漢第4代皇帝 在位88～105
- ・殤帝 (?～106) 後漢第5代皇帝 在位105～106
- ・安帝 (?～125) 後漢第6代皇帝 在位106～125
- ・少帝 (?～125) 後漢第7代皇帝 在位125
- ・順帝 (?～144) 後漢第8代皇帝 在位125～144
- ・沖帝 (?～145) 後漢第9代皇帝 在位144～145
- ・質帝 (?～146) 後漢第10代皇帝 在位145～146
- ・桓帝 (?～167) 後漢第11代皇帝 在位146～167
- ・靈帝 (?～189) 後漢第12代皇帝 在位167～189
- ・少帝弁 (?～189) 後漢第13代皇帝 在位189



熊山遺跡 (AD 1世紀頃)

※歴代の後漢皇帝 (熊襲武尊+ピラミッド派) は、新羅王 (日本武尊+マウンド派) に敗北したため、岡山県赤磐に熊山遺跡と呼ばれている小型ピラミッドだけを日本に残した。



マラエ（AD 1世紀～2世紀頃）

※歴代の後漢皇帝（熊襲武尊）は中国からタヒチに渡り、マラエと呼ばれる小型ピラミッドを築いた。

- ・曹騰（生没年不詳） 初代魏王 在位不明
- ・曹嵩（生没年不詳） 第2代魏王 在位不明
- ・曹操（155～220） 第3代魏王 在位不明



献帝（181～220） 後漢第14代皇帝 在位189～220

曹丕（187～226） 魏初代皇帝 在位220～226

曹叅（206～239） 魏第2代皇帝 在位226～239

応神天皇（200～310） 第15代天皇

葛烏菟（生没年不詳） 宇文部初代大人

※魏第2代皇帝は鮮卑の部族として宇文部（ユーウエン）を築いた。ユーウエンの由来はイオニア、或いは越（ユエ）である。「応神天皇」とは魏第5皇帝までに至る「魏皇帝の系譜」を指していると考えられる。

- ・曹芳（232～274） 魏第3代皇帝 在位239～254
- ・曹髦（241～260） 魏第4代皇帝 在位254～260
- ・曹奂（246～302） 魏第5代皇帝 在位260～265



グイマーのピラミッド群（AD 3世紀頃）

※歴代の魏皇帝（熊襲武尊）は中国からマヤを経て大西洋を横断し、カナリア諸島にグイマーのピラミッド群を築いた。

-----



●ワシャクトウンの王（宇文部の歴代大人+ストラスクライド王国の歴代王+歴代天皇）

- ・宇文莫槐（?～293） 宇文部大人 在位?～293
- ・宇文普撥（生没年不詳） 宇文部大人 在位293～?
- ・宇文丘不勤（生没年不詳） 宇文部大人 在位不明
- ・宇文莫珪（生没年不詳） 宇文部大人 在位不明
- ・宇文遜昵延（生没年不詳） 宇文部大人 在位不明
- ・宇文乞得龜（?～333） 宇文部大人 在位?～333
- ・宇文逸豆帰（?～344） 宇文部大人 在位333～344

※宇文莫槐から宇文逸豆帰までに至る宇文部大人の系譜を仁徳天皇（257～399）と呼んでいると考えられる。

允恭天皇（376～453） 第19代天皇

Ceretic Guletic（?～450） ストラスクライド初代王 在位410～450

※宇文部大人の一族と考えられる允恭天皇はブリテン島に進出し、ストラスクライド王国、ゴッドオディン王国（由来は応神天皇）、ヘイスティングス王国などを築いた。

物部伊コ弗（生没年不詳） 物部五十琴父

彦主人王（生没年不詳） 継体天皇父

宇文肱（?～526） 宇文泰父

物部麻佐良（生没年不詳） 物部麿鹿火父

物部五十琴（生没年不詳） 物部目父

清寧天皇（444～484） 第22代天皇

顕宗天皇（450～487） 第23代天皇

仁賢天皇（449～498） 第24代天皇

継体天皇（450～531） 第26代天皇

Tutagual（?～495） ストラスクライド第6代王 在位490～495



※画像はポナペ島の海中遺跡である。允恭天皇（ストラスクライド初代王）から清寧天皇、顕宗天皇、仁賢天皇、継体天皇（ストラスクライド第6代王）までの天皇は、ポナペ島のナンマトルで海中遺跡の建造を指揮していたと考えられる。どこに行ってもタナトスがいるのでタナトスがない自分たちだけの楽園の創造を試みたのかもしれない。

物部麿鹿火（?～536）

物部目（生没年不詳） 物部荒山父

安閑天皇（466～536） 第27代天皇

宣化天皇（467～539） 第28代天皇

Clinoch（?～540） ストラスクライド第9代王 在位508～540

物部荒山（生没年不詳） 物部尾輿父

宇文泰（505～556） 北魏・西魏政治家

物部尾輿（生没年不詳） 物部守屋父

Cinbelin（?～558） ストラスクライド第10代王 在位540～558

宇文純（?～581） 宇文泰の子

物部守屋（?～587）

※物部氏（宇文部）が天皇の皇位を日本に伝えた。物部氏の「物」の由来はモンゴルの「モン」だと考えられる。ただ、物部氏の一族の生没年はほぼ不詳なので、本体と影武者の関係上、誰が誰と繋がっているのか確かなことは言えない。物部氏はサタンの宗教（仏教）を嫌悪し、仏教を推す蘇我氏（アブラハムの一族）と対立し、仏像や仏閣を破壊していた。



パレンケに伯爵の神殿（AD4世紀頃）

※宇文莫槐から宇文逸豆帰までに至る宇文部大人がマヤでピラミッドを設計し、建造を指揮した。ただ、この当時からピラミッドの頂上に神殿が築かれるようになった。

マヤではサトゥルヌスの一族（百済王、東漢氏、坂上田村麻呂・藤原内麻呂の一族）に指示され、生贄を切り裂く専用の神殿付きのピラミッドを建造していた。この神殿では生贄が切り裂かれた。日本中に点在する小高い丘に建てられた全ての神社の元型である。





イースター島のモアイ（7世紀頃？）

※ストラスクライド王Beli IIはイースター島を発見すると、巨石建造の技術を伝える場として整備した。彼らはイースター島に、謎のモアイ像を多く築いた。その目的は、先祖代々培ってきた巨石建造技術の継承である。石の切り出しから彫刻、巨石の運搬、巨石を直立させるまで、モアイを作るプロセスには大ピラミッド建造時にも用いた巨石建造のノウハウが凝縮されている。彼らは、先祖代々培ってきた巨石建造技術とそのプロセスを継承し続けるためにモアイを作り続けたのだ。

また、筆者は美大（油絵専攻）を出たのでわかるが、油絵の場合、いろんな形の集合体である人物を描破出来るのであれば何でも描ける。そういうわけで、人物デッサンを多くこなすことを求められる。彫刻も同様である。人物を彫るということは、極めればどんな形にも対応できるのだ。そのため、ピラミッド派はモアイ像を作り続けた。



●エル・タヒンの王（ストラスクライド王国+シャイレンドラ朝の歴代王）

**Dumnagual II**（?～694） ストラスクライド第20代王 在位 在位693～694

**Santanu**（?～700） シャイレンドラ朝初代王 在位670～700

※第20代ストラスクライド王は、ジャワ島にシャイレンドラ朝を開いた。この時にジャワは初めてジャワと呼ばれた可能性がある。ジャワの由来は、ユエ（越）やユーウェン（宇文）の元

型ヤワンである。



ティカルのピラミッド群（AD 8世紀）

- ・ Beli II（?～722） ストラスクライド第21代王 在位694～722
- ・ Teudebur（?～755） ストラスクライド第22代王 在位722～750
- ・ Rotri（?～754） ストラスクライド第23代王 在位750～754
- ・ Dumnagual III（?～760） ストラスクライド第24代王 在位754～760

**Eugein II**（?～780） ストラスクライド第25代王 在位760～780

Dharmatunga（?～782） シャイレンドラ朝第8代王 在位775～782



※画像はボロブドゥール遺跡である。シャイレンドラ王Dharmatungaに変身したストラスクライド王Eugein IIがボロブドゥール遺跡を設計し、建設を指揮した。

- ・ Riderch II（?～798） ストラスクライド第26代王 在位780～798
- ・ Cynan（?～816） ストラスクライド第27代王 在位798～816



魔法使いの神殿（AD 8世紀）

※マウンド派に勝利したピラミッド派はマヤでピラミッド時代を謳歌し、ティカルにピラミッド群を築く。Beli IIからCynanに至る7人のストラスクライド王がピラミッド建設をマヤで指揮した。頂上に築かれた神殿は、藤原内麻呂の一族（サトゥルヌスの一族）の指示によって設けられている。ピラミッド派の技術にのっかり、できそこないの自分たちにハクをつけるために藤原内麻呂の一族はピラミッド派を支配した。



ククルカンの神殿（AD 10世紀）

※最後のストラスクライド王が南漢、後漢（五代）を築いた。ストラスクライド王に引き続き、南漢、後漢皇帝（五代）がチチェン・イツァーにククルカンの神殿を築いた。ピラミッド派は、これを最後にピラミッドの建造をしていない。

**Dumnagual IV** (生没年不詳) ストラスクライド第28代王 在位816～?

ジャヤーヴァルマン2世 (?～835) クメール王朝初代王 在位802～835

**Arthgal** (?～872) ストラスクライド第31代王 在位?～872

劉隠 (874～911) 南漢初代皇帝 在位909～911

- ・ 劉ゲン (889～942) 南漢第2代皇帝 在位911～942
  - ・ 劉ヒン (920～943) 南漢第3代皇帝 在位942～943
  - ・ 劉晟 (920～958) 南漢第4代皇帝 在位943～958
  - ・ 劉チョウ (943～980) 南漢第5代皇帝 在位958～971
- 
- ・ 劉知遠 (895～948) 後漢(五代)初代皇帝 在位947～948
  - ・ 劉承祐 (931～951) 後漢(五代)第2代皇帝 在位948～950

※9世紀、ストラスクライド第28代王はスコットランドを離れて現カンボジアにクメール王朝を開いた。また、10世紀、魔法使いの神殿が完成すると、長いこと残虐な人身御供の神官(百済王、藤原内麻呂の一族、今川国氏の一族)の「ピラミッドの頂上に生贄を殺すための神殿を築くこと」という要請に応じてきたが、とうとう嫌気が差し、南漢皇帝、後漢(五代)皇帝はこれを拒否した。

-----

スーリヤヴァルマン2世 (?～1150) クメール王朝第18代王 在位1113～1150



※画像はアンコールワット。クメール王スーリヤヴァルマン2世は、ピラミッド派の末裔としての力を振るい、アンコールワット寺院を建設した。

ニヤリヤイ・リヤミヤトゥバティー (?～1467) カンボジア王国第2代王 在位?～1467

アブー・サイード（1424～1469） ティムール朝第7代王 在位1451～1469

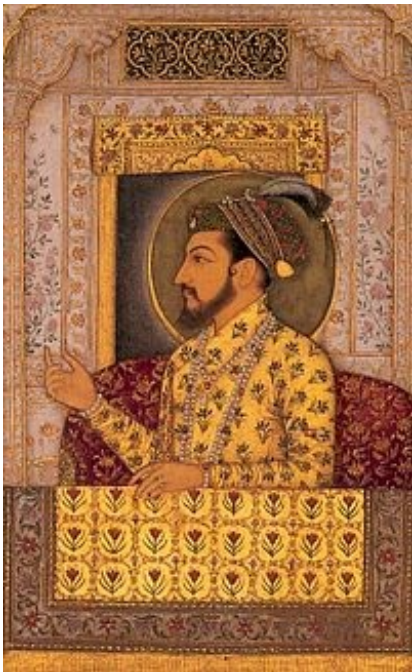
トゥモー（?～1498） カンボジア王国第3代王 在位1471～1498

ウマル・シャイフ2世（1456～1494） アブー・サイードの子



バーブル（1483～1530） ムガル帝国初代皇帝 在位1526～1530

※ウマル・シャイフ2世の子として生まれたバーブルはムガル帝国を築いた。



シャー・ジャハーン（1592～1666） ムガル帝国第5代皇帝 在位1628～1658



※画像はタージマハールである。ムガル帝国第5代皇帝シャー・ジャハーンが、1631年に死去した愛妃ムムターズ・マハルのため建設した総大理石の墓廟である。古代からピラミッドを建造してきた一族が久しぶりに巨石建造の一族としての力を発揮した。

-----  
ムガル皇帝シャー・アラム2世の子（ムガル皇帝ジャハーンダール・シャーの孫）



ミールザー・カリームッディーン・ムハンマド（176?～?）※画像なし

ムハンマド・アリー（1769～1849） ムハンマド・アリー朝初代君主 在位1805～1848

嘉隆帝（1762～1819） 阮朝初代ベトナム皇帝 在位1802～1819※画像なし

※生没年不詳のムガル皇帝の子ムハンマドは、アルバニアに潜入してムハンマド・アリーとなり、エジプトにムハンマド・アリー朝を開き、ベトナムにも阮朝を開いた。1774年にクック船長がイースター島を訪れたのを機に、イースター島の人々は嘉隆帝治世下のベトナム帝国に移り住んだ。



イブラヒム・パシャ（1789～1848） ムハンマド・アリー朝第2代君主 在位1848

エル・ハジ・ウマル・タール（1794～1864） トゥクロール帝国初代皇帝※画像なし

※ムハンマド・アリー朝第2代君主はティカルの名に因んで「トゥクロール帝国」を築いた。



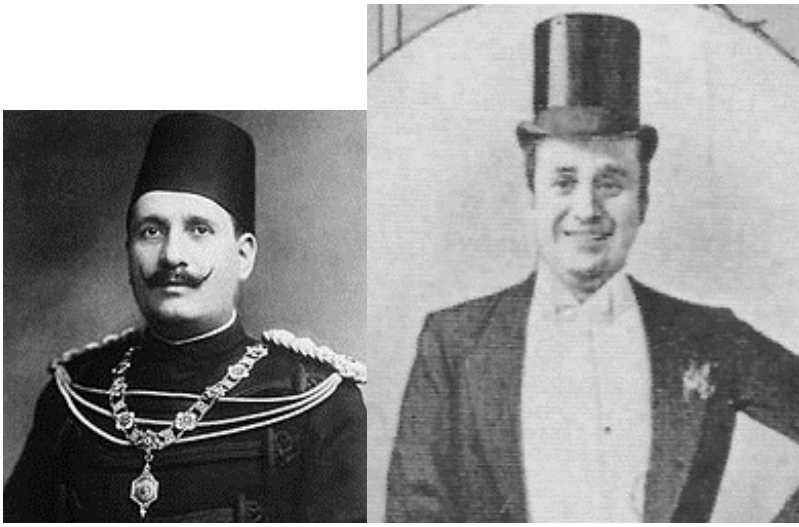
サイド・パシャ（1822～1863） ムハンマド・アリー朝第2代君主 在位1854～1863

嗣徳帝（1829～1883） 阮朝第4代皇帝 在位1847～1883※画像なし

※阮朝ベトナム皇帝の王位は残念ながら、第4代で終わり、代わりに本願寺門主覚如の一族に篡奪されてしまう。

-----

ムハンマド・アリー朝イスマーイール・パシャの子

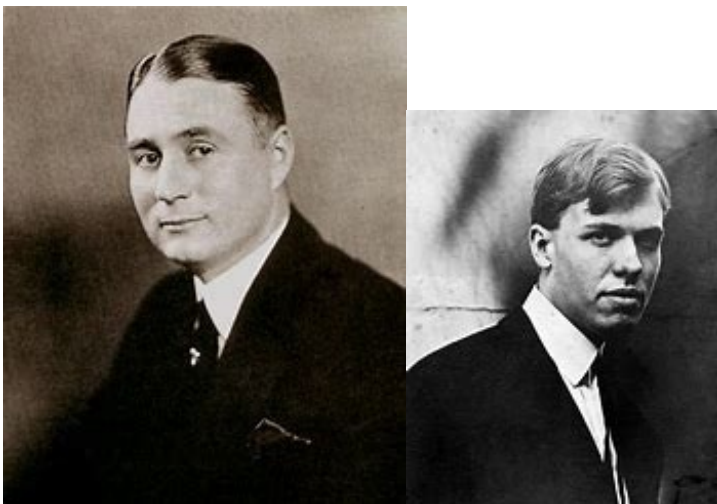


フアード1世（1868～1956） ムハンマド・アリー朝第9代君主  
チャールズ・チャップリンSr（1863～1901）

※フアード1世は、父の亡命により幼少期はイタリアで暮らした。故国エジプトに帰国するまでの間、彼はイギリスで舞台俳優チャールズ・チャップリンとして生きたと考えられる。舞台俳優としてではなく、ちょう報員としてイギリスに潜入していた可能性もある。その後、チャールズは1889年にチャールズを儲けているが、その後、1901年に38歳で自身を死んだことにし、エジプトに帰還した。

彼は、1908年にはエジプト国民大学を設立し、1917年には君主に即位し、1922年にはイギリスから独立すると共にエジプト王に即位している。現在残されているチャールズSrの写真は、影武者（庶子の異母兄弟）の可能性が高い。

-----  
ムハンマド・アリー朝タウフィーク・パシャの子（イスマーイール・パシャの孫）



**Princess Nimetallah Muhammed**（1881～1966）※画像なし  
シドニー・チャップリン（1885～1965）  
エドワード・ホッパー（1882～1967） 画家





※画像上下は異才エドワード・ホッパーの絵画作品である。ホッパーは、後に出現する黒澤・橋本、アントニオーニらに先駆けて映画言語とでもいうべき手法を駆使している。上画像（1939）では、ホッパーは犬に奥さんの内面を重ね合わせている。語られない隠されたドラマが見えてくるようだ。

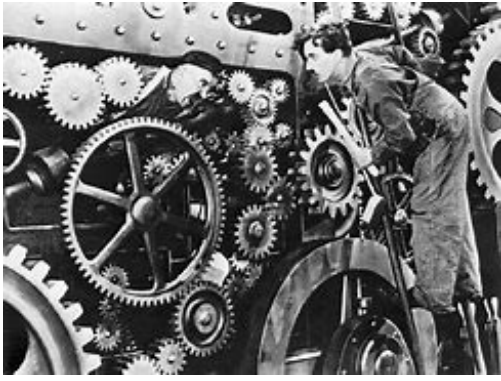
下画像（1960）では右の窓に若い女性の内面、左の窓には老女の内面が重ねあわされている。老女は過去に思いを馳せているが、一方の若い女性は将来に目を向けていない。現在の自分が過去の自分と隣りあわせる。まさにシュルレアリスムの醍醐味である。

シドニーは、エドワード・ホッパーと同様にフアード1世の影武者であったチャールズSrの子だと考えられる。2人は、Nimetallah姫の影武者として生まれた。



**Muhammed Hanim**（188?～?）※画像なし

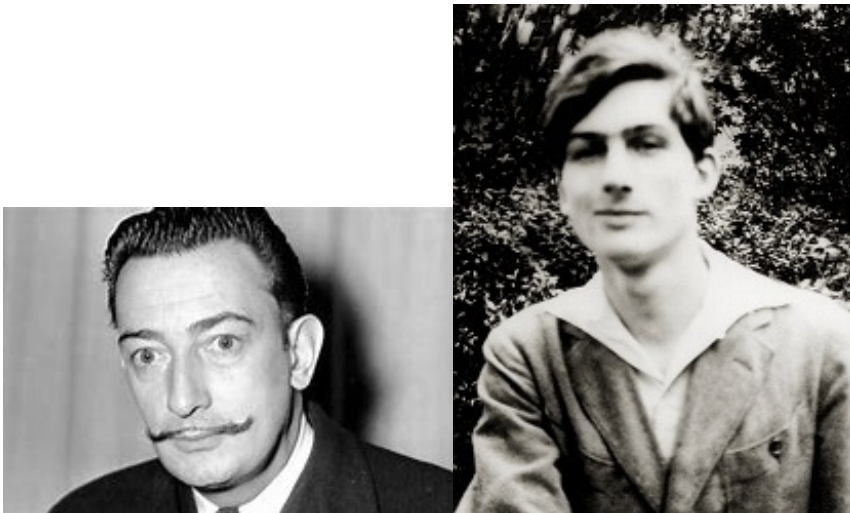
チャールズ・チャップリン（1889～1977） 喜劇俳優・映画監督・作曲家



※画像は映画「モダンタイムス」の一コマ。チャーリーは祖父フアード1世に良く似ている。チャップリンはムハンマド・アリー朝にとってだけでなく、世界の希望の星だったため、多くの女性が彼の遺伝子を所望した。たったひとりでも大きな勢力であったため、チャップリンを恐れた本願寺はアメリカの家族に連絡し、赤狩りの標的とした。代表作に「犬の生活」「キッド」「黄金狂時代」「街の灯」「モダンタイムス」「独裁者」などがある。

-----

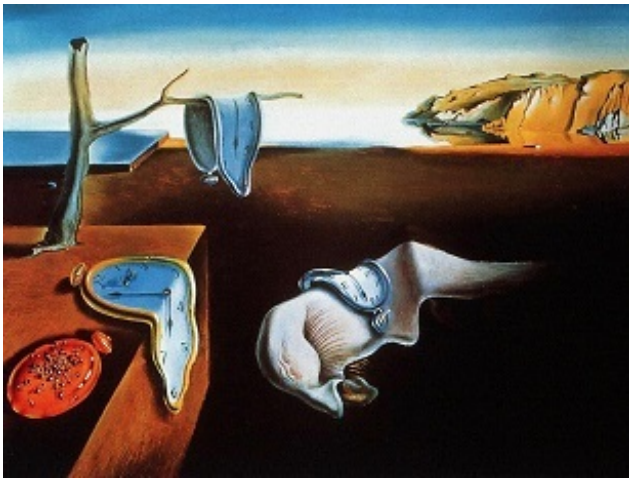
ムハンマド・アリー朝タウフィーク・パシャの孫



**Nabila Nimetullah Halim** (1908~?) ※画像なし

サルバドール・ダリ (1904~1988) シュルレアリスト・画家

バルチユス/バルタザール・クロソウスキー (1908~2001) 画家



※画像上はダリの絵画作品、下画像はバルチュスの絵画作品。ダリのヒゲが、祖父ファード1世のヒゲと同じなところが興味深い。ダリとバルチュスは、Nabilaの影武者として生まれた。ダリはシュールレアリズムの画家として著名だが、彼の言動・行動なども作品に負けないくらいにシュールだった。ルイス・ブニエルと共に映画「アンダルシアの犬」「黄金時代」の脚本を担当した。

バルチュスは親日家として知られ、妻は日本人であり、勝新太郎と交流があった。彼は二枚目だったため、彼の遺伝子を所望する女性たちが優性遺伝子ブリーダーに要請し、非常に多くの有名俳優・ミュージシャンを生んだと考えられる。

バルチュスは少女を主題にした絵を多く描き、誤解を受けたが、彼のような男だからこそ、少女にも性欲があることを知っていた。その美（いい男を知った少女の顔）も熟知していた。例え少女でも、成人女性と同じで、いい男がいればすぐにでも抱かれて子供を生みたいと考えるものだ。これは本能であり、普通の人間には理解できないことだが、彼のような男だけが聖域に踏み入ることを許されていたわけだ。彼に対する世間の誤解の多くは意図的なものであり、ほぼほぼ妬みに起因するやっかみだった。



**Nabila Zeyneb Halim** (1915~?) ※画像なし

ガマル・アブドゥル=ナーセル (1918~1990) 第2代エジプト大統領 任期1954~1959

イングマル・ベルイマン (1918~2007) 映画監督

エジプトの軍人、政治家。第2代エジプト共和国大統領。汎アラブ主義と汎アフリカ主義を掲げ、エジプトとシリアから成るアラブ連合共和国を建国してその初代大統領に就任し、アフリカ統一機構の第2代議長も務めた。 ガマール・アブドゥル=ナーセルwikiより

※ベルイマンの代表作には「ペルソナ」「狼の時刻」「鏡の中にある如く」「冬の光」「沈黙」などがある。



**Nabil Muhammed Tewfik Toussoun** (1925~?) ※画像なし

ホスニー・ムバラク (1928) 第4代エジプト大統領 在位1981~2011

ハロルド・ピンター (1930~2008) 劇作家、脚本家、映画監督

エジプトの軍人、政治家。共和政エジプト第4代大統領（第2代エジプト・アラブ共和国大統領）として約30年にもわたる長期政権を維持したが、2011年の革命によって失脚した。日本ではムバラクと表記されることが多い。ホスニー・ムバラクwikiより

※ピンターは、劇作家であり脚本家として映画界に登場した。代表作には「召使」「できごと」「ベースメント」などがある。監督作には「BUTLY」などがある。

-----  
ムハンマド・アリー朝ファード1世（チャールズ・チャップリン）の子



ファールーク1世（1920～1965） ムハンマド・アリー朝第10代エジプト王 在位1936～1952

ノーマン・スペンサー・チャップリン（1919早世）※画像なし

ニコラエ・チャウシェスク（1918～1989） ルーマニア大統領

※チャウシェスクの正体は、3日で早世したと言われているチャップリンの長男ノーマン・スペンサーである。チャウシェスクは永らくフェイクメディアから独裁者として扱われた。東西本願寺は善人や優れた人物ほど、悪の汚名を着せる。敵（善人）が悪であれば、自分たち（真の悪）は正義の味方なのだ。チェウシェスク大統領は裁判も受けずに処刑されたが、あのような野蛮な所業は本願寺がやることだ。



**Faika**（1926～1983）※画像なし

シドニー・チャップリン（1926～2009）



**Fathia** (1930～1976) ※画像なし

アレハンドロ・ホドロフスキー (1929) 映画監督

ジョン・カサヴェテス (1929～1989) 俳優・映画監督

仲代達矢 (1932) 俳優



※画像は映画「エルトポ」の一コマ。ホドロフスキーとカサヴェテスはFathia姫の影武者として生まれた。ホドロフスキーは映画「エル・トポ」「ホーリー・マウンテン」「サンタ・サングレ」などで知られている。カサヴェテスは、映画「こわれた女」「フェイスズ」「オープニング・ナイト」で知られている。

仲代は優性遺伝子ブリーダーによるサルバドル・ダリの子と考えられる。目や表情が良く似ている。安倍公房脚本、勅使河原宏監督の映画「他人の顔」では、素顔をほぼ見せない役にも拘らず大きな存在感を発揮した。

---

ムハンマド・アリー朝ファールーク1世 (チャールズ・チャップリン) の子



**Farial** (1938~2009) ※画像なし  
ボブ・ディラン (1940) ミュージシャン

※ディランは優性遺伝子ブリーダーによって生まれたチャップリンの子と考えられる。ディランはプリンスと同じで、昔から顔がチャップリンに似ているなど思っていた。



**Fawzia** (1940~2005) ※画像なし  
ピーター・ウィアー (1944) 映画監督  
デヴィッド・クロネンバーグ (1943) 映画監督・俳優



※画像は映画「トゥルーマンショー」の一コマ。クロネンバーグは、「ラビッド」「ビデオドローーム」「クラッシュ」「イグジステンス」などで知られている。ウィアーは、「ピクニック at ハンギングロック」ではアントニオオニの理論を拡大解釈して新機軸を展開して見せた。また「トゥルーマンショー」では、探偵業の闇の部分を取り上げ、問題提起した。他にも「グリー

ンカード」「モスキート・コースト」などで知られている。



**Fadia** (1943~2002) ※画像なし

マイケル・チャップリン (1946) ※画像なし

デヴィッド・ボウイ (1947~2016) ミュージシャン・俳優

アリス・クーパー (1948) ミュージシャン・俳優

※デビッド・ボウイとアリス・クーパーは優性遺伝子ブリーダーによって儲けられたチャップリンの子と考えられる。つまり、ボブ・ディランとは異母兄弟である。2人とも、グラムロックの雄としてわざとらしく、安っぽいシアトリカルな要素をロックのステージに取り入れることを好んだ。



ファード2世 (1952) ムハンマド・アリー朝第11代王 在位1952~1953 ※画像なし

アブドルファッターフ・アッ=シーシー (1954) 第6代エジプト大統領 任期2014~現在

ピーター・ガブリエル (1951) ミュージシャン、元ジェネシス

エジプト軍軍事情報庁長官、エジプト軍最高評議会議長、国防大臣、エジプト国軍総司令官、第



一副首相などを歴任し共和政エジプト第6代大統領（エジプト・アラブ共和国第4代大統領）に就任した。日本語メディアではシシ、シーシあるいはアッシーシと表記されている。アブドルファッターフ・アッ=シーシー wikiより

※シーシー大統領は西本願寺門主本如の一族に属するムスリム同胞団の陰謀を退け、犯罪者ムルシーを投獄した。



クリストファー・チャップリン（1962）

ピーター・マーフィー（1957） バウハウス

ダニエル・アッシュ（1957） バウハウス

プリンス（1958～2017） ミュージシャン・俳優・映画監督

松本人志（1963） ダウンタウン

※プリンス・ロジャー・ネルソンは、クリストファー・チャップリンの影武者として生まれた。両者はなかなか良く似ている。筆者は昔からプリンスがチャップリンに似ていると思っていた。通常ならそんなことはありえないが、しかしながら、優性遺伝子ブリーダーという組織が存在することを知っている今、それも可能だ。プリンスの母はチャップリンの遺伝子を所望したため、優性遺伝子ブリーダーを介してプリンスは生まれたのだ。その揺るぎない自信と広範にわたる才

能はまさにチャップリン譲りだ。

イギリスのニューウェイブバンド「バウハウス」のメンバーもクリストファー・チャップリンの異母兄弟として生まれた。ピーター・マーフィーは特にクリストファーに似ている。そういえば、プリンスは自身が監督した映画「アンダー・ザ・チェリームーン」で、クリストファー・トレイシーなる人物を演じていた。

まっちゃんは優性遺伝子ブリーダーによる仲代達矢の子であり、サルバドル・ダリの孫となる。どうりでまっちゃんはシュールな感性が際立っていた。残念なことだが、現在のまっちゃんは猫柳のようになってしまった。

-----

優性遺伝子ブリーダーによるバルチュスの子（ムハンマド・アリー朝タウフィーク・パシャの曾孫）



ロバート・デ・ニーロ（1943）俳優

※デ・ニーロはバルチュスに良く似ている。彼は自覚していないが、本願寺系列のメディアに利用されている。



パティ・スミス（1946） 詩人・ミュージシャン

ジェーン・バーキン（1946） 女優

※パティ・スミスはルー・リード（ヴェルヴェットアンダーグラウンド）、アラン・レイニアー（ブルーオイスターカルト）、ロバート・メイプルソープ（写真家）、フレッド・スミス（MC5）、ジェーン・バーキンはセルジュ・ゲンズブールと言う稀代の芸術家に愛された。

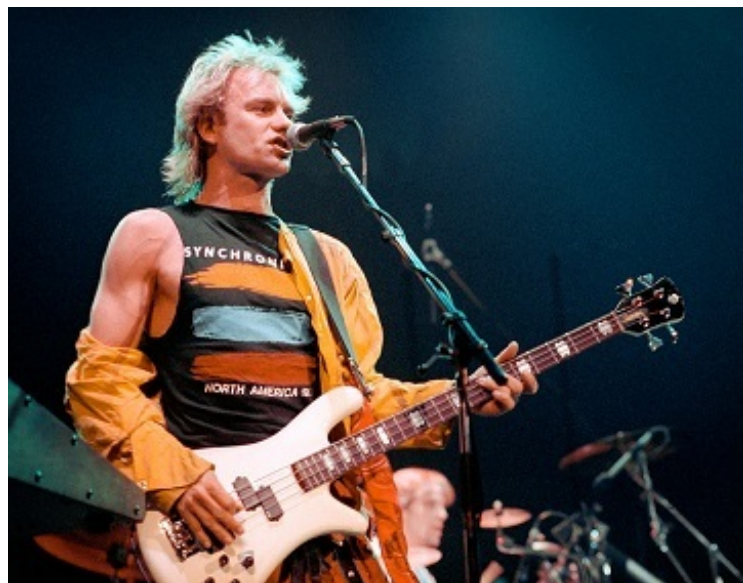


ジョー・ペリー（1950） エアロスミス

※スティーヴン・タイラーと共にエアロスミスの要であり、現在でも現役である。現在、同じ家族であるアリス・クーパー、ジョニー・デップと組んでハリウッド・ヴァンパイアなるバンドとしても活動中だ。

10代の頃、ペリーは泥棒をして警察に捕まったが、許してもらおうとして「ヤードバーズのレコードをあげるから許して」と嘆願した。しかし警官が「そんなものはいらん」というとジョ

ーはショックを受け「ヤードバースだぜ？俺の宝物のヤードバースのLPをやると言ってるんだぜ？信じられねえ」と嘆いたという。



スティング（1951） ポリス



ウェイン・ハッセイ（1958）



シスターズ・オブ・マーシー、ミッション

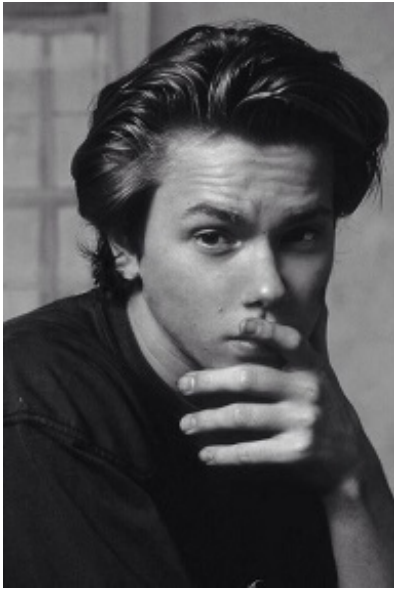
ボノ（1960） U2

ジ・エッジ（1961） U2

※ボノは自覚していないが、本願寺系列のメディアに利用されている。



ジョニー・デップ（1963） 俳優



リヴァー・フェニックス（1970～1993）俳優

※フェニックスは、新興宗教ファミリーに批判的だったため、ファミリーの教祖デヴィッド・バーグ（西本願寺門主大谷光演の一族）に殺されたとされている。或いは、デビッド・ロックフェラーの子レオナルド・ディ・カプリオを売るために邪魔者としてロックフェラー家に消された。

-----

第2代エジプト大統領ナーセルの子



ハリド・アブデル・ナーセル（1949～2011）

フィル・ライノット（1949～1986）シン・リジィ

その功績に敬意をこめて"ザ・ロッカー" (*The Rocker*) と呼ばれる。フィル・ライノット [wiki](#) より



※画像はシンリジィのライブの一コマである。フィルは、ハリード・アブデル・ナーセルの影武者として生まれた。異母兄弟である。フィルがムハンマド・アリーの子孫であることを知り、イギリスを支配する西本願寺門主良如、法如、文如の一族はフィルを暗殺した（公式には敗血症）。旧友のゲイリー・ムーアも2011年に西本願寺門主良如、法如、文如の一族によって殺されている（公式には心臓発作で死亡している）。

ピラミッドを建造していた種族は、ピラミッドの建造は中止したが、今ではアーティストとして様々な分野で活躍しているのがわかる。

ブルガリア皇帝イヴァン・アセン3世の一族～ソロモン1世、エチオピア帝国、クリミア・ハン国、ハルハ部、ケニア共和国、チャック・ベリー、アース・ウィンド&ファイア、ボブ・マーリー、エディ・マーフィー

---



イヴァン・アセン3世（1259～1303） アセン朝第12代ブルガリア王 在位1279～1280※画像なし

イクノ・アムラク（?～1285） ソロモン朝初代エチオピア皇帝 在位1270～1285

テグデル（?～1284） イルハン朝第3代ペルシア王 在位1282～1284※画像なし

※ブルガリア皇帝イヴァン・アセン3世がイクノ・アムラクとしてエチオピア初代皇帝に即位した。

-----

ソロモン1世（?～1294） ソロモン朝第2代エチオピア皇帝 在位1285～1294

アルグン（?～1291） イルハン朝第4代ペルシア王 在位1284～1291

ゲイハトゥ（?～1295） イルハン朝第5代ペルシア王 在位1291～1295

アムダ・セヨン1世（?～1344） ソロモン朝第3代エチオピア皇帝 在位1314～1344

ムバーリスズディーン・ムハンマド（?～1358） ムザッファル朝初代王 在位1314～1358

アルパ・ケウン（?～1336） イルハン朝第10代ペルシア王 在位1335～1336

ダウイト（?～1411） ソロモン朝第4代エチオピア皇帝 在位1382～1411

ザイヌル・アービディーン（?～1387） ムザッファル朝第2代王 在位1384～1387

シャー・マンスール（?～1393） ムザッファル朝第3代王 在位1387～1393

テオドロス1世 (?~1414) ソロモン朝第5代エチオピア皇帝 在位1413~1414

カラ・ユースフ (?~1420) 黒羊朝第3代王 在位1389~1420

アンドレイヤス (?~1430) ソロモン朝第6代エチオピア皇帝 在位1429~1430

カラ・イスカンドル (?~1435) 黒羊朝第4代王 在位1420~1435

ザラ・ヤコブ (?~1468) ソロモン朝第7代エチオピア皇帝 在位1434~1468

ジャハーン・シャー (?~1467) 黒羊朝第5代王 在位1435~1467

ハサン・アリー (?~1469) 黒羊朝第6代王 在位1468~1469

ハージー1世ギレイ (?~1456) クリミア・ハン国初代ハーン 在位1430~1456

ガローデオス (?~1559) ソロモン朝第9代エチオピア皇帝 在位1540~1559

サーヒブ1世ギレイ (?~1551) クリミア・ハン国第15代ハーン 在位1532~1551

メナス (?~1563) ソロモン朝第10代エチオピア皇帝 在位1559~1563

デヴレト1世ギレイ (?~1577) クリミア・ハン国第15代ハーン 在位1551~1577

スセニョス1世 (?~1632) ソロモン朝第11代エチオピア皇帝 在位1606~1632

メフメト3世ギレイ (?~1628) クリミア・ハン国第15代ハーン 在位1623~1628

ファシラダス (?~1667) ソロモン朝第12代エチオピア皇帝 在位1632~1667

ベントル (?~1669) ハルハ右翼部初代部族長 在位1653~1669

イヤス1世 (?~1706) ソロモン朝第13代エチオピア皇帝 在位1682~1706

ノネイ (?~1707) ハルハ右翼部第3代部族長 在位1669~1707

ベカファ (?~1730) ソロモン朝第15代エチオピア皇帝 在位1721~1730

ジャンダグミ (?~1728) ハルハ右翼部第3代部族長 在位1708~1728

テクレ・ハイマノット2世 (?~1777) ソロモン朝第19代エチオピア皇帝 在位1769~1777

デヴレト4世ギレイ (?~1777) クリミア・ハン国第15代ハーン 在位1775~1777

スセニョス2世 (?~1770) ソロモン朝第24代エチオピア皇帝 在位1770

サーヒブ2世ギレイ (?~1775) クリミア・ハン国第15代ハーン 在位1771~1775

ソロモン2世 (?~1779) ソロモン朝第25代エチオピア皇帝 在位1777~1779

シャヒン・ギレイ (?~1782) クリミア・ハン国第15代ハーン 在位1777~1782

ラワンドルジ (?~1782) ハルハ右翼部第4代部族長 在位1729~1781



ギヨルギス1世 (?~1800) ソロモン朝第26代エチオピア皇帝 在位1779~1800  
バハディル2世ギレイ (?~1790) クリミア・ハン国第15代ハン 在位1783~1790  
アユル (?~1796) ハルハ左翼部第5代部族長 在位1759~1796

イヤス3世 (?~1788) ソロモン朝第27代エチオピア皇帝 在位1784~1788  
ツェブテンジャブ (?~1788) チェチェン・ハーン部第10代部族長 在位1767~1788

ソロモン3世 (?~1799) ソロモン朝第35代エチオピア皇帝 在位1796~1799  
ジワンドルジ (?~1795) チェチェン・ハーン部第11代部族長 在位1788~1795

ヨナス (?~1798) ソロモン朝第36代エチオピア皇帝 在位1797~1798  
サンジドルジ (?~1800) チェチェン・ハーン部第13代部族長 在位1796~1800

イヨアス2世 (?~1821) ソロモン朝第37代エチオピア皇帝 在位1818~1821  
エンケトロ (?~1817) チェチェン・ハーン部第15代部族長 在位1807~1817  
ナムルライジャブ (?~1815) ハルハ左翼部第6代部族長 在位1796~1815

イヤス4世 (?~1832) ソロモン朝第38代エチオピア皇帝 在位1830~1832  
シャクドルジャブ (?~1830) ハルハ左翼部第8代部族長 在位1815~1830

ヨハンネス3世 (?~1851) ソロモン朝第39代エチオピア皇帝 在位1840~1851  
アディヤ (?~1850) グサイ・ベイセ第9代部族長 在位1804~1850  
ハイレ・マラコト (?~1855) メネリク2世父

ツェリンドルジ (?~1893) チェチェン・ハーン部第17代部族長 在位1875~1893  
ツェリンドルジ (?~1890) ハルハ右翼部第11代部族長 在位1880~1890  
ドゥイグルスロン (?~1890) ハルハ左翼部第10代部族長 在位1870~1890  
テオドロス2世 (?~1868) テオドロス朝初代エチオピア皇帝 在位1855~1868

ギヨルギス2世 (?~1871) ザグウェ朝初代エチオピア皇帝 在位1868~1871  
ヨハンネス4世 (?~1889) ティグレ朝初代エチオピア皇帝 在位1871~1889

-----



メネリク2世（1844～1913） ソロモン朝初代エチオピア皇帝 在位1889～1913

ショアの王（ネグ）のハイレ・マラコトの子として生まれ、王位を継承。エチオピア中興の祖である皇帝テオドロス2世がショアを攻撃した際に捕虜とされたが、かえってテオドロスに可愛がられ、このことが自身に大きな影響を与えた。後にヨハンネス4世の跡を継いで皇帝に即位した。第一次エチオピア戦争においてイタリア王国を破り、列強にエチオピアの独立を承認させた。これは、当時のアフリカ大陸の諸王国の中で唯一独立を保つことが出来た事例として有名となった。 wikiより



イヤス5世（1895～1935） ソロモン朝第2代エチオピア皇帝 在位1913～1916

ジョモ・ケニヤッタ（1893～1978） ケニア共和国初代大統領

ノーマン・マンリー（1893～1969） ジャマイカ第2代首相※画像なし

1952年にマウマウ団の乱に関係したとされ、またその一味であったとされ逮捕された。裁判官や通訳者などが不当にケニヤッタを扱ったとされる裁判は5ヶ月に及び、結果として7年間の重度労役処分とされたが、ケニア北西の辺境地ロドワーに移送され保護監察下での執行猶予処置とされた。

現在の研究でも、彼とマウマウとの関係はあったとされているが、他の説を唱える研究もある。結果的に1959年まで刑務所で過ごすこととなった。1963年にケニアが独立すると初代首相となり、1年後に大統領制に移行するとそのまま大統領となった。ジョモ・ケニヤッタ wikiより

※エチオピア皇帝イヤス5世は、ジョモ・ケニヤッタとしてケニアを独立に導いた。その後、イヤス5世は40歳で死んだことにし、最後の43年間をジョモ・ケニヤッタとして生きた。初老のケニヤッタは、メネリク2世の初老時とそっくりである。上記の通り、才能のある人間、良い人間は、本願寺が掌握する国家機関やインフラ面で不遇を強いられている。



ザウディトゥ（1876～1930） ソロモン朝第3代エチオピア皇帝 在位 在位1916～1930



ハイレ・セラシエ1世（1892～1975） ソロモン朝第4代エチオピア皇帝 在位1930～1936

マコネン・エンデルカチャー（1890～1963） エチオピア第4代首相※画像なし

1934年の「ワルワル事件」を経て1935年10月3日にファシスト党のベニート・ムッソリーニ率いるイタリア王国が「アドワの報復」を掲げてエチオピアに進攻、第二次エチオピア戦争が勃発した。翌1936年3月のマイチャウの戦いでイタリア軍は毒ガスを用いて帝国親衛隊を含むエチオピア軍を壊滅させる。その後、皇帝ハイレ・セラシエ1世は5月2日に鉄道でジブチに向かい、ジブチを経由してイギリスのロンドンに亡命した。その間首都アディスアベバは5月5日に陥落した。1936年から1941年までのエチオピアはイタリア領東アフリカ帝国としてファシスト・イタリアに統治された。1939年の第二次世界大戦勃発後、東アフリカ戦線(第二次世界大戦)にて枢軸国のイタリア軍と連合国のイギリス軍の激戦を経て、1941年にエチオピアはイギリス軍に解放され、5月5日に皇帝ハイレ・セラシエ1世は凱旋帰国した。ハイレ・セラシエ1世wikiより

※さすがにオスマントルコ皇帝の一族だけあり、西本願寺門主大谷光尊の血を継ぐムッソリーニを退けている。

-----

エチオピア皇帝メネリク2世の子

**Wossen Seged** (生没年不詳)

アレクサンダー・バスタマンテ (1884~1977) ジャマイカ初代首相

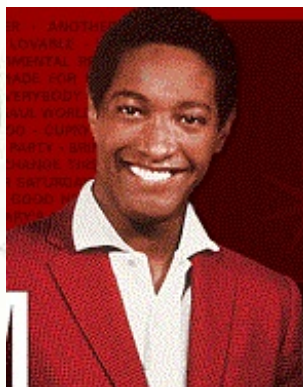
---

エチオピア皇帝ハイレ・セラシェ1世の子



**Mekonnen Haile Selassie** (1924~1957)

チャック・ベリー (1926~2017)



**Sahle Selassie** (1932~1962) ※画像なし

ジェームズ・ブラウン (1933~2006) ミュージシャン

サム・クック (1931~1964) ミュージシャン

リトル・リチャード (1932) ミュージシャン

※リトル・リチャードは兄チャック・ベリーと共にロックンロールミュージックを発明し、ロックの黎明期を牽引した。同じ影武者仲間のサム・クックはソウルミュージック界で活躍したが、彼の最後はあっけなく、哀れだった。

---

エチオピア皇帝ハイレ・セラシェ 1 世の孫



**Paul Wossen Seged** (生没年不詳) ※画像なし

ウィルソン・ピケット (1941~2006) ミュージシャン

モーリス・ホワイト (1941~2016) アース・ウィンド&ファイア

リチャード・プライアー (1940~2005) コメディアン

※リチャード・プライアーは弟分のエディ・マーフィとは兄弟ということになる。プライアーの弟にはボブマーリーもいるが、兄弟だけに良く似ている。プライアーの影武者仲間のピケットやモーリスはソウルミュージック界で活躍した。



**Mikael**（生没年不詳）※画像なし

ピーター・トッシュ（1944～1987） レゲエミュージシャン

ジャマイカのレゲエミュージシャン。同国のバンド、ウェイラーズの一員として活躍した後、ソロ・ミュージシャンとしても成功を収めた。また、ラスタファリ運動の先駆者としても知られる。wikiより



**Dawit**（生没年不詳）※画像なし

ボブ・マーリー（1945～1981） レゲエミュージシャン

ジャマイカのレゲエミュージシャン。その音楽はラスタファリ運動の思想を背景としており、彼の音楽と思想は数多くの人々に多大な影響を与えた。ボブ・マーリー-wikiより



**Beede Mariam**（生没年不詳）※画像なし

バニー・ウェイラー（1947） レゲエミュージシャン

レゲエ音楽家、ラスタマン。ボブ・マーリー、ピーター・トッシュらと活躍したザ・ウェイラーズのオリジナルメンバーである。バニー・ウェイラーwikiより

※ハイレ・セラシェ1世は、チャーチル率いるイギリス軍がムッソリーニを退けたおかげで、イギリスに親近感を持ったと考えられる。彼はイギリス領のジャマイカに子を儲けた。その子供たちがレゲエを始めた。レゲエは世界中のミュージシャンに影響を与えた。本願寺はマーリーがエチオピア皇帝の血を継いでいることを優性遺伝子ブリーダーに聞いて知ったため、これ以上勢力伸張することを阻止するためにマーリーやトッシュを暗殺した。



**Ermias Sahle Selassie**（1960）※画像なし

ウフル・ケニヤッタ（1961） ケニア第4代大統領

エディー・マーフィー（1961） コメディアン・俳優・映画監督

※初期のエディは挑戦的な芸風で一世を風靡した。サタデーナイトライブのコントや自身が脚本・主演した「星から来た王子」、主演・監督した「ハーレムナイト」では歯に衣着せぬ表現で偽善的な風潮を斬った。

しかし、ディープステートにマークされると毒を省いた芸風に転換し、ハリウッドに生き残った。主演作には「大逆転」「48時間」「ビバリーヒルズ・コップ」「ゴールデン・チャイルド」がある。脚本家としては「星の王子様ニューヨークへ行く」、監督作としては「ハーレムナイト」がある。

-----  
ボブ・マーリーの子



ジギー・マーリー（1968） ジギー・マーリー&ザ・メロディメイカーズ  
ガーネット・シルク（1966～1994） レゲエミュージシャン

※ガーネット・シルクはどちらかといえばピーター・トッシュに似ている。ガーネットはマーリーの影武者として生まれた可能性がある。なぜか殺害されてしまった。



ブルガリア皇帝イヴァイロの一族～ヴィスコンティ家、メディチ家、クリストファー・コロンブス、ヴァスコ・ダ・ガマ、イエズス会、フランシスコ・ザビエル、トスカーナ大侯国、ローマ教皇フランシスコ

---

イヴァイロ (?～1279) アセン朝第11代ブルガリア王 在位1277～1279

円爾 (1202～1280) 臨濟宗僧侶

Ottone Visconti (?～1295) ミラノ僭主 在位1277～1295

※ブルガリア皇帝イヴァイロは臨濟宗僧侶円爾などを演じていたが、ミラノに進出してOttone Viscontiに変身し、ミラノ僭主となる。ヴィスコンティ家のはじまりである。

- ・ Matteo I Visconti (?～1322) ミラノ僭主 在位1311～1322
- ・ Galeazzo I Visconti (?～1328) ミラノ僭主 在位1322～1328
- ・ Azzone Visconti (?～1339) ミラノ僭主 在位1328～1339
- ・ Luchino Visconti (?～1349) ミラノ僭主 在位1339～1349
- ・ Giovanni Visconti (?～1354) ミラノ僭主 在位1339～1354
- ・ Matteo II Visconti (?～1355) ミラノ僭主 在位1354～1355
- ・ Galeazzo II Visconti (?～1378) ミラノ僭主 在位1354～1378
- ・ Bernabò Visconti (?～1385) ミラノ僭主 在位1354～1385





バヤズィト1世（1354～1402） オスマントルコ帝国第4代皇帝 在位1299～1326

ジャン・ガレアツォ・ヴィスコンティ（1351～1402） 初代ミラノ公 在位1395～1402

ジョヴァンニ・ディ・ピッチ（1360～1429） メディチ銀行総裁

※オスマントルコ皇帝バヤズィト1世はジャン・ガレアツォ・ヴィスコンティに変身してミラノ公となり、一方でジョヴァンニ・ディ・ピッチに変身してメディチ家の端緒を切る。

ジャンの征服事業の多くが成功した背景には、彼が傭兵を金で雇って兵農分離を行っていたからである。つまり、彼は当時では開明的で先進的な独裁君主であった。また野心家でもあり、「カエサル再来」を自認したジャンは、フィレンツェ征服後にイタリア王位に即位しようと、即位に備えて王冠と錫を用意していたといわれているほどである。ジョヴァンニ・ディ・ピッチwikiより



コジモ・デ・メディチ（1389～1464） フィレンツェ僭主

ジョヴァンニ・マリーア・ヴィスコンティ（1388～1412） 第2代ミラノ公 在位1402～1412

フィリッポ・マリーア・ヴィスコンティ (?~1447) 第3代ミラノ公 在位1412~1447

※ヴィスコンティ家はミラノを治め、メディチ家はフィレンツェを治めた。

---

フィリッポ・マリーア・ヴィスコンティの子 (ジャン・ガレアッツォの孫)



ビアンカ・マリーア・ヴィスコンティ (1425~1468) ヴィスコンティ家

※ビアンカ・マリーア・ヴィスコンティスフォルツァ家に嫁いだため、ビアンカを最後にヴィスコンティ家のミラノ統治は終焉を迎えた。

---

ビアンカ・マリーア・ヴィスコンティの子



スフォルツァ・マリーア (1451~1479) ※画像なし

ロレンツォ・デ・メディチ (1449~1492) フィレンツェ僭主

クリストファー・コロンブス（1451～1506） 航海士

「彼らは武器を持たないばかりかそれを知らない。私が彼らに刀を見せたところ、無知な彼らは刃を触って怪我をした。彼らは鉄を全く持っていない。彼らの槍は草の茎で作られている。彼らはいい身体つきをしており、見栄えもよく均整がとれている。彼らは素晴らしい奴隷になるだろう。50人の男達と共に、私は彼らすべてを征服し、思うままに何でもさせることができた。」  
クリストファー・コロンブスwikiより

※ビアンカ・ヴィスコンティの子スフォルツァ・マリーアは28歳で死んだことにして、その後はロレンツォ・デ・メディチ、コロンブスとして生きた。本願寺門主親鸞の一族は、自分のアメリカでの悪行をすべてコロンブスに責任転嫁した。上のwikiから拾ったコロンブスによるとされる発言は、本願寺による「当時」のフェイクニュースだと考えられる。



フランチェスコ・ガレアツォ・マリア（1453～1454）※画像なし  
アメリゴ・ベスブッチ（1454～1512）

アメリゴは1503年頃に論文『新世界』を発表する。1499年から1502年にかけての南米探検で彼は南緯50度まで沿岸を下った。南米大陸がアジア最南端（マレー半島、北緯1度）とアフリカ最南端（南緯34度）の経度をはるかに南へ越えて続くため、それが既知の大陸のどれにも属さない「新大陸」であることに気づいた。ちなみに当時は北米と南米が繋がっていることは判明していないので、彼の『新世界』は南米大陸についてのみ論じている。ヨーロッパの古代からの伝統的世界観、アジア・アフリカ・ヨーロッパからなる三大陸世界観を覆すこの主張は当時最先端の知識人層である人文主義者たちにはセンセーショナルに受け入れられたが、ヨーロッパ全体にすぐ浸透したわけではない。アメリゴ・ベスブッチwikiより

※ビアンカ・ヴィスコンティの子フランチェスコは1歳で早世したことにされ、アメリゴ・ベスブッチとして育てられた。「アメリカ」の名はダヴィデの一族の命名ということになる。

-----

ミラノ公ガレアツォ・マリーア・スフォルツァの子（ビアンカ・ヴィスコンティの孫）



カテリーナ・スフォルツァ（1463～1509）



ジャン・ガレアツォ・スフォルツァ（1469～1494） 第6代ミラノ公※画像なし

ジョヴァンニ・デ・メディチ（1475～1521） ローマ教皇レオ10世 在位1513～1521

ピエロ・ディ・ロレンツォ・デ・メディチ（1472～1503） フィレンツェ僭主※画像なし

ヴァスコ・ダ・ガマ（1469～1524） 航海士

ポルトガルの航海者、探検家である。熟達した航海術と外交手腕を買われヨーロッパからアフリカ南岸を経てインドへ航海した記録に残る最初のヨーロッパ人であり、しばしばインドへの航路をヨーロッパ人として初めて「発見」した人物であるとされる。このインド航路の開拓によって、ポルトガル海上帝国の基礎が築かれた。バスコ・ダ・ガマとも。ヴァスコ・ダ・ガマwikiより

※ビアンカ・ヴィスコンティの曾孫ジャン・ガレアツツオは、25歳で死んだことにし、その後はヴァスコ・ダ・ガマとして生きた。更に、ピエロ・ディ・ロレンツォ・デ・メディチに変身してフィレンツェ僭主となり、ローマ教皇をも演じた。

---

ミラノ公ルドヴィーコ・スフォルツァの子



マッシミリアーノ・スフォルツァ（1493～1530） 第9代ミラノ公※画像なし

ジョヴァンニ・デッレ・バンデ・ネーレ（1498～1526） イタリア傭兵隊長

イグナチオ・デ・ロヨラ（1491～1556） イエズス会初代総長

カスティーリャ王国領バスク地方出身の修道士。カトリック教会の修道会であるイエズス会の創立者の1人にして初代総長。バスク人。同会の会員は教皇への厳しい服従をモットーに世界各地で活躍し、現代に至っている。イグナチオは『靈操』の著者としても有名で、対抗改革の中で大きな役割を果たした。イグナチオ・デ・ロヨラ [wiki](#) より

※ビアンカ・ヴィスコンティの曾孫フランチェスコは、21歳で死んだことにし、その後はジョヴァンニ・デッレ・バンデ・ネーレ、イグナチオ・ロヨラとして生きた。ロヨラはイエズス会を創設し、イエズス会初代総長を務めた。



**Giovanni Paolo I Sforza** (1497~1535) ※画像なし

フランシスコ・ザビエル (1506~1552) イエズス会

ピエール・ファール (1506~1572) イエズス会

ポルトガル王ジョアン3世の依頼でインドのゴアに派遣され、その後1549年(天文18年)に日本に初めてキリスト教を伝えたことで特に有名である。また、日本やインドなどで宣教を行い、聖パウロを超えるほど多くの人々をキリスト教信仰に導いたといわれている。フランシスコ・ザビエル [wiki](#)より

勉強を続ける中でファールは司祭職への召命を感じ、19歳でパリ大学で学ぶべく故郷を離れた。パリ大学は当時から多くのカレッジの集合体であったが、ファールはその一つでポルトガル系の学生の多かった聖バルバラ学院に学んだ。ここでファールとたまたま同室になった学生が、後にイエズス会創設に共に立ち会うフランシスコ・ザビエルであった。ピエール・ファール [wiki](#)より

※ビアンカ・ヴィスコンティの曾孫コーネリアスは20歳で死んだことにし、その後はザビエルとファールを同時進行で演じた。その際、父や自身の庶子を投入して影武者部隊を作り、登用していた。ザビエルは46歳で死んだことにして最後の20年はファールとして生きた。上の [wiki](#) で拾った「ファールとたまたま同室になった学生が、後にイエズス会創設に共に立ち会うフランシスコ・ザビエルであった」の一文は興味深い。

-----



コジモ1世（1519～1574） 初代トスカーナ大公 在位1569～1574

・フランチェスコ1世デ・メディチ（1541～1587） 第2代トスカーナ大公 在位1574～1587

・フェルディナンド1世デ・メディチ（1549～1609） 第3代トスカーナ大公 在位1587～1609

・コジモ2世デ・メディチ（1590～1621） 第4代トスカーナ大公 在位1609～1621

・フェルディナンド2世デ・メディチ（1610～1670） 第5代トスカーナ大公 在位1621～1670



コジモ3世（1642～1723） 第6代トスカーナ大公 在位1670～1723

フィリップ1世（1640～1701） オルレアン公、ルイ13世の子※画像なし





ルイ（1661～1711） フランス王大使※ルイ14世の子



フェリペ5世（1683～1746） ボルボン朝初代スペイン王 在位1746～1759

-----  
スペイン王フェリペ5世の子



フェルナンド6世（1713～1759） ボルボン朝第3代スペイン王 在位1746～1788

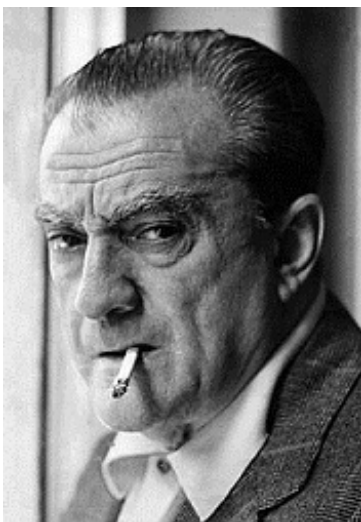
イニャツィオ・ヴィスコンティ（?～?） イエズス会総長 在位1751～1755



フィリッポ1世（1720～1765） 初代パルマ公 在位1748～1765

---

- ・フェルディナンド（1799～1802） 第2代パルマ公 在位1765～1802
- ・カルロ2世ルイージ（1799～1848） 第3代パルマ公 在位1847～1848
- ・カルロ3世（1823～1854） 第4代パルマ公 在位1848～1854
- ・ロベルト1世（1848～1907） 第5代パルマ公 在位1854～1907
- ・エンリコ（1873～1939） 第6代パルマ公 在位1907～1939
- ・ジュゼッペ（1875～1950） 第7代パルマ公 在位1939～1950
- ・エリアス（1880～1959） 第8代パルマ公 在位1950～1959



ロベルト・ウーゴ（1909～1974） 第9代パルマ公 在位1959～1974※画像なし

ルキノ・ヴィズコンティ（1906～1976） 映画監督

1906年11月2日、イタリア王国ミラノで生まれた。実家はイタリアの貴族ヴィズコンティ家の傍

流で、父は北イタリア有数の貴族モドローネ公爵であり、ヴィスコンティは14世紀に建てられた城で、幼少期から芸術に親しんで育った。ミラノとコモの私立学校で学んだ後、1926年から1928年まで軍隊生活を送った。退役後、1928年から舞台俳優兼セット・デザイナーとして働き始めた。1936年にはココ・シャネルの紹介でジャン・ルノワールと出会い、アシスタントとしてルノワールの映画製作に携わった。ルキノ・ヴィズコンティ w i k i より

※ヴィスコンティは、映画「地獄の堕ちた勇者ども」で、ナチスが犯した最大の陰謀を暴いた。それは脳の侵略である。標的の弱みを握るための完全な監視。そして、その監視で得た情報の悪用。しかし、その方法を描写することなく、蹂躪された人間の結末を描くことで、非常に冷たい、後味の悪い作品となった。この後味の悪さと冷たさは作品の出来とは関係ない。後味の悪さと冷たさは真の悪の目撃が原因である。



サヴェリオ（1889～1977） 第10代パルマ公 在位1974～1977

第二次世界大戦中、グザヴィエはベルギー軍の砲兵大佐として従軍した。ベルギーの降伏後はスペインへ亡命しようとしたが、フランシスコ・フランコに拒否されたためにフランスのレジスタンス運動に参加した。マキを支援していたが、1944年7月22日にゲシュタポによって逮捕された。「夜と霧」が適用されてクレルモン＝フェランに収監された後、連合国軍の進撃に伴ってナッツヴァイラー強制収容所、ダッハウ強制収容所などを転々とし、1945年5月4日にアメリカ軍によって解放された。 w i k i より



カルロ・ウーゴ (?~2010) 第11代パルマ公 在位1977~2010※画像なし  
ホルヘ・マリオ・ベルゴリオ (1936) 第266代ローマ教皇フランシスコ 在位2013  
~現在

ミサでは「真の権力とは奉仕であることを忘れてはなりません。教皇の権力の行使もそうです。あなたがたは、ますます十字架の光の頂点にある奉仕へと迎え入れられるべきなのです」と語った。フランシスコ/ホルヘ・マリオ・ベルゴリオ [wiki](#) より

※第266代ローマ教皇フランシスコはヴィスコンティ家、メディチ家の子孫だと考えられる。



カルロ・サヴェリオ (1970) 第12代パルマ公 在位2010~現在

ブルガリア皇帝ゲオルギ2世の一族～オスマントルコ帝国、北元、スペイン無敵艦隊、ロシア帝国、サルディーニャ王国、リンカーン大統領、宰相ビスマルク、怪僧ラスプーチン、エルドアン大統領

---



ゲオルギ2世テルテル (?～1323) テルテル朝第6代ブルガリア王 在位1322～1323※画像なし

フリードリヒ1世 (1257～1323) マイセン辺境伯 在位1292～1323

シデバラ (?～1323) 大元帝国第5代皇帝 在位1320～1323※画像なし

オスマン1世 (1258～1326) オスマントルコ帝国初代皇帝 在位1299～1326

オットー3世 (1261～1312) ヴィッテルスバッハ朝ハンガリー王 在位1291～1312※画像なし

1299年、カラ・スーの河谷を占領したのち、イエニシェヒルを占領した。ここで首都となるべき町を手に入れたオスマンはルーム・セルジューク朝から独立を宣言してオスマン帝国を築き上げたのである。

1301年、オスマン1世は領土拡大のためビザンツ帝国との戦い、コユンヒサルの戦いでこれを破り、帝国の基礎と次代の繁栄を築き上げた。オスマン1世wikiより

※以前、オスマン1世とソロモン1世、イヴァン1世を異母兄弟と設定していたが、後日精査の上、改訂したことをご了承ください。オスマン1世はブルガリア皇帝ゲオルギ2世テルテルの影無者であり、北元皇帝シデバラなどと異母兄弟である。偉大な王を生んできたブルガリア帝国に継ぐキングメーカーがオスマントルコ帝国である。

オスマントルコ帝国もブルガリア帝国に負けず劣らず、多くの偉大な王を生んできたが、王は優れているためにタナトスの一族にロックオンされ、タナトスに脅された大量の邪教信者に嫌がら

せをされ、ニーチェのように不遇な人生を送らざるを得なかった人物も多い。



オルハン（1281～1362） オスマントルコ帝国第2代皇帝 在位1326～1362

ルドルフ1世（1281～1307） ボヘミア王 在位1306～1307※画像なし

ヴァーツラフ3世（1289～1306） プシェミスル朝ハンガリー王 在位1301～1305

カーロイ1世（1288～1342） アンジュー朝初代ハンガリー王 在位1308～1342※画像なし

-----

オスマントルコ皇帝オルハンの子



ムラト1世（1326～1389） オスマントルコ帝国第3代皇帝 在位1362～1389

ラヨシュ1世（1326～1382） アンジュー朝第2代ハンガリー王 在位1342～1382



**Halil** (1347~1362) ※画像なし

アユルシリダラ (1340~1378) 北元第2代皇帝 在位1370~1378

トグス・テムル (1342~1388) 北元第3代皇帝 在位1378~1388 ※画像なし

ティムール (1336~1405) ティムール帝国初代皇帝 在位1370~1405

-----

オスマントルコ皇帝ムラト1世の子



**バヤズィト1世** (1354~1402) オスマントルコ帝国第4代皇帝 在位1299~1326

**ジャン・ガレアッツォ・ヴィスコンティ** (1351~1402) ヴィスコンティ家



**Yakub Çelebi** (?～1389) ※画像なし

イエスデル (1359～1392) 北元第4代皇帝 在位1388～1391 ※画像なし

エルベク・ハーン (1362～1399) 北元第6代皇帝 在位1394～1399 ※画像なし

ヴワディスワフ2世ヤギェヴォ (1362～1434) ヤギェヴォ朝初代ポーランド王 在位1377～1392

※オスマントルコ皇帝バヤズィト1世はイエスデルとして北元皇帝を務めた。イエスデルの由来はイシュタル。オリエントから来たことをアピールしている。更に、トルコからポーランドに移り、ヴワディスワフ2世ヤギェヴォとしてヤギェヴォ朝を開いた。

-----  
オスマントルコ皇帝バヤズィト1世の子



**Süleyman Çelebi** (1377～1411) ※画像なし

クン・テムル (1377～1402) 北元第7代皇帝 在位1399～1402

フリードリヒ1世 (1371～1440) ホーエンツォレルン家ブランデンブルク選帝侯





**Ertuğrul Çelebi** (1378~1400) ※画像なし

オルク・テムル (1379~1408) 北元第8代皇帝 在位1402~1408 ※画像なし

オルジェイ・テムル (1379~1412) 北元第9代皇帝 在位1408~1412

アダイ・ハーン (1376~1438) 北元第12代皇帝 在位1390~1438 ※画像なし



**メフメト1世** (1389~1421) オスマントルコ帝国第5代皇帝 在位1405~1421

ダルバク・ハーン (1395~1415) 北元第10代皇帝 在位1412~1415 ※画像なし

オイラダイ・ハーン (1387~1425) 北元第11代皇帝 在位1415~1425 ※画像なし

ハリール・スルタン (1384~1411) ティムール帝国第2代皇帝 在位1405~1409

ウルグ・ベク (1394~1449) ティムール帝国第4代皇帝 在位1447~1449 ※

画像なし



ムラト2世（1404～1451） オスマントルコ帝国第6代皇帝 在位1421～44、1446～51

エセン・ハーン（1407～1454） 北元第15代皇帝 在位1453～1454※画像なし

アブドゥッラー（1410～1451） ティムール帝国第6代皇帝 在位1450～1451



メフメト2世（1432～1481） オスマントルコ帝国第7代皇帝 在位1444～46、1451～81

トクトア・ブハ（1422～1452） 北元第13代皇帝 在位1433～1452※画像なし

アクバルジ晋王（1423～1453） 北元第14代皇帝 在位1453※画像なし

アブー・サイード（1424～1469） ティムール帝国第7代皇帝 在位1451～1469※画像なし

ヴワディスワフ3世（1424～1444） ヤギェヴォ朝第2代ポーランド王 在位1440～44※画像なし

カジミェシュ4世（1427～1492） ヤギェヴォ朝第3代ポーランド王 在位1447～1492

-----

オスマントルコ皇帝ムラト2世の子



**Orhan Çelebi** (?～1453)

イヴァン3世 (1440～1505) モスクワ大公 在位1462～1505



**Hasan Çelebi** (1450～1451) ※画像なし

スルタン・アフマド (1451～1494) サマルカンド政権初代ティムール皇帝 在位1469～1494 ※画像なし

ウラースロー2世 (1456～1516) ヤギェヴォ朝第2代ハンガリー王 在位1490～1516

---

オスマントルコ皇帝メフメト2世の子



バヤズィト2世 (1447~1512) オスマントルコ帝国第8代皇帝 在位1481~1512

モーラン・ハーン (1448~1466) 北元第17代皇帝 在位1465~1466

マルコルギス・ハーン (1448~1465) 北元第16代皇帝 在位1455~1465※  
画像なし

マーチャーシュ1世 (1443~1490) フニャディ朝ハンガリー王 在位1458~1490※  
画像なし



**Sultan Cem** (1459~1495)

ヘンリー7世 (1457~1509) チューダー朝初代イングランド王 在位1485~1509

マクシミリアン1世 (1459~1519) ハプスブルグ朝神聖ローマ帝国初代皇帝

-----



セリム1世（1470～1520） オスマントルコ帝国第9代皇帝 在位1512～1520

バヤン・モンケ・ボルジギン（1464～1487） 北元第19代皇帝 在位1480～1487※画像なし

アレクサンデル（1461～1506） ヤギェヴォ朝第5代ポーランド王 在位1501～1506

ジグムント1世（1467～1548） ヤギェヴォ朝第6代ポーランド王 在位1506～1548

父バヤズィト2世からトラブゾン知事に任命され、東方に目を光らせていたセリムは父の消極性に不満を持っていた。当初は3番目の子で上の兄コルクト・アフメトがいたため継承順位はもっとも下だったが、1511年にサファヴィー朝に同調したシャー・クルの反乱を契機として、兄達が反乱にてこずっている隙を付いてクーデターを仕掛けた。1度目は失敗してクリミア半島へ追放されたが、翌1512年にイエニチェリに擁立され兄達を排除、父を退位させて皇帝に即位したセリム1世は、父が即位時にしたのと同じように、即位後の内紛を避けるために兄弟達とその子らを次々と殺した。父もその後すぐに歿しているが、セリム1世の暗殺も疑われている。セリム1世 [wiki](#) より



スレイマン1世（1494～1566） オスマントルコ帝国第10代皇帝 在位1520～1566

ヘンリー8世（1491～1547） チューダー朝イングランド王 在位1509～1547

トマス・克蘭マー（1489～1556） カンタベリー大主教

ウィリアム・ウォルシンガム（?～1534） フランシス・ウォルシンガム父※画像なし

ジョン・カリー（1491～1552） フランシス・ウォルシンガム養父※画像なし

グスタフ1世（1496～1560） ヴァーサ朝初代スウェーデン王 在位1523～1560

西郷純久（148?～?） 西郷氏の祖※画像なし

少弐資元（1489～1536） 少弐氏16代当主※画像なし

※パシヤはトルコ語で高官を意味するが、由来は不明とされている。パシヤの由来は中国語ピシヤ（陛下）である。



セリム2世（1524～1574） オスマントルコ帝国第11代皇帝 在位1566～1574

ジグムント2世（1520～1572） ヤギェヴォ朝第7代ポーランド王 在位1548～1572

アルバロ・デ・バサン（1526～1588） スペイン無敵艦隊の父

松浦隆信（1529～1599） 松浦氏第25代当主

「スペイン海軍の父」と称されるスペインの軍人・貴族。海軍提督として知られ、サンティアゴ騎士団員でもあった。アルバロ・デ・バサンwikiより

一方で、貿易による巨万の富を築き上げた隆信は、領内でも鉄砲の製造を命じ、火薬の備蓄や、鉄砲足軽の訓練に勤しんで、軍備を拡大した。その力を背景にして（衰退傾向にあった）倭寇の拠点3カ所の制圧し、北松浦半島を制圧した。隆信は、有馬氏や龍造寺氏などの近隣の大名と事を構え、度々合戦をしながら、志佐氏や波多氏の一部を攻撃し、婚姻や血族を養子として入れることで松浦党の一族をまとめようとしていた。松浦隆信wikiより

-----



ムラト3世（1546～1595） オスマントルコ帝国第12代皇帝 在位1574～1595

松浦鎮信（1549～1614） 松浦氏第26代当主

アロンソ・ペレス・デ・グスマン（1550～1615） スペイン無敵艦隊指揮官 バサンの子

スペインの軍人で、無敵艦隊の総司令官である。第7代メディナ＝シドニア公。妻はエーボリ公とアナ・デ・メンドーサの娘アナ。子に第8代公爵フアン・マヌエル・ペレス・デ・グスマン。ポルトガル王ジョアン4世妃ルイサは孫娘に当たる。アロンソ・ペレス・デ・グスマンwikiより

※オスマントルコ皇帝セリム2世は、スペインに潜入してアルバロ・デ・バサンを演じ、スペイン艦隊の父と呼ばれた。息子のアロンソはスペイン無敵艦隊を指揮したが、同族のフランシス・ドレイク率いるイギリス艦隊に敗れた。

-----  
オスマントルコ皇帝スレイマン1世の子





ジハンギル（1531～1553）※画像なし

ルイス・フロイス（1532～1597） イエズス会

ポルトガルのカトリック司祭、宣教師。イエズス会士として戦国時代の日本で宣教し、織田信長や豊臣秀吉らと会見。戦国時代研究の貴重な資料となる『日本史』を記したことで有名。ルイス・フロイスwikiより

※オスマントルコ皇帝の子ジハンギルは22歳で死んだことにし、その後はルイス・フロイスとして生きた。イエズス会士として来日したフロイスは日本の家族と協力し、邪教である仏教の根絶を目指した。彼らは、特に浄土真宗が有害だという認識はなく、信長の動向から仏教全般を敵視していたようだが、フロイスは日本を正しく「悪魔が支配する国」と称した。

-----



メフメト3世（1566～1603） オスマントルコ帝国第13代皇帝 在位1595～1603

ジグムント3世（1566～1632） ヴァーサ朝第4代スウェーデン王 在位1587～1632



アフメト1世（1590～1603） オスマントルコ帝国第14代皇帝 在位1603～1617

ヴラディスロヴァス2世（1595～1648） 第4代リトアニア大公 在位



ムスタファ1世（1592～1639） オスマントルコ帝国第15代皇帝 在位1617～18、1622～23

ミハイル・ロマノフ（1596～1645） ロマノフ朝初代皇帝 在位1613～1645

兄の治世中、1603年から1617年の14年もの間幽閉された。1617年に兄が亡くなったため一旦は皇帝に即位したが、翌1618年、精神病のために退位させられることとなった。次に即位した甥のオスマン2世が殺害されたため1622年に再び皇帝となるが、まもなく2度目の退位を強制され、1623年にオスマン2世の弟ムラト4世が即位、47歳で死去するまで16年間の幽閉生活を送らされた。ムスタファ1世wikiより

父がボリス・ゴドゥノフに失脚させられ、母と共にコストロマのイパチェフ修道院に隠棲して

いた。1610年ヴァシーリー4世の退位後、ロシアではツァーリ不在の動乱時代における「空位期間」に陥ったが、1612年国民軍はクレムリンに拠るポーランド軍を一掃し、モスクワを取り戻した。その後、1613年2月、人民、コサックも参加した全国会議にてミハイルはツァーリに選出され、これにより動乱時代は終結した。ミハイル・ロマノフ [wiki](#) より

※オスマントルコ皇帝ムスタファ1世は、イヴァン大帝の一族に迎えられ、ミハイル・ロマノフとしてロシア帝国の皇帝を務め、ロシア帝国を生んだ。



オスマン2世 (1604～1622) オスマントルコ帝国第15代皇帝 在位1618～1622

トーマス・クロムウェル (1594～1653) アルドグラス伯

オリバー・クロムウェル (1599～1658) 共和制イングランド初代護国卿



ムラト4世 (1612～1640) オスマントルコ帝国第17代皇帝 在位1623～1640

ヨナス1世 (1609～1672) 第7代リトアニア大公 在位1648～1668



イブラヒム（1615～1648） オスマントルコ帝国第18代皇帝 在位1640～1648

アルタモン・マトヴェーエフ（1625～1682） ロシア帝国外交官

フリードリヒ・ヴィルヘルム（1620～1688） ホーエンツォレルン家プロイセン王

ブランデンブルク選帝侯及びプロイセン公（在位：1640年12月1日 - 1688年5月9日）。プロイセン公国をポーランド支配から解放し、フェールベルンの戦いなどに勝利して領内からスウェーデン勢力を駆逐したため、大選帝侯（der große Kurfürst）と称えられる。フリードリヒ・ヴィルヘルム [wiki](#) より

※イブラヒムはアルタモン・マトヴェーエフに変身し、西本願寺門主准如の一族アレクセイを成敗し、自分がアレクセイに成り代わった。すると、追放されたホンモノのアレクセイはフィオドシア・モロゾヴァに変身して古儀式派を組織し、大量の邪教信者を所有した。更にアレクセイはスチェパン・ラージンに変身して古儀式派の信者を動員してアレクセイに対して蜂起した。しかし、1人3役の八面六臂の活躍をしたにも関わらず逮捕されて八つ裂きにされた。



メフメト4世（1642～1687） オスマントルコ帝国第19代皇帝 在位1648～1687

ミーコラス1世（1640～1673） 第7代リトアニア大公 在位1669～1673



スレイマン2世（1642～1691） オスマントルコ帝国第20代皇帝 在位1687～1691

順治帝（1638～1661） 清第3代皇帝 在位1643～1661



アフメト2世（1643～1695） オスマントルコ帝国第21代皇帝 在位1691～1695

サフィー2世スライマーン（1647～1694） サファヴィー朝第8代シャー 在位1666～1694※画像なし



ムスタファ2世（1664～1703） オスマントルコ帝国第22代皇帝 在位1695～1703

フョードル3世（1661～1682） ロシア帝国第3代皇帝 在位1676～1682

ヴィットリオ・アメデーオ2世（1666～1732） サヴォイア家初代サルディーニャ王 在位1720～30

1695年に死んだ叔父のアフメト2世の後を継いで即位した。大トルコ戦争でオスマン帝国へのオーストリアの進出を阻止しようとして1697年にハンガリーの再征服に乗り出した。しかし、プリンツ・オイゲンにゼンタの戦いで大敗北を喫し、和平の道へと進むことになった。1699年のカルロヴィッツ条約によりオーストリアにハンガリーとトランシルヴァニアを、ヴェネツィアにモレアを、ポーランドにポドリアを割譲した。また、1700年にロシアともコンスタンティノーブル条

約を締結、1696年にピョートル1世が奪った黒海沿岸のアゾフを譲っている。ムスタファ2世 [wiki](#) より

スペイン継承戦争では初めフランス側だったが、1703年に密かに同盟に連絡を取っていたことがフランスに発覚すると同盟に復帰、1706年にオイゲンと共に包囲されたトリノを解放した（トリノの戦い）。以後は終戦までオーストリアの将軍ヴィリッヒ・フォン・ダウンと共にサヴォイアのフランス軍と交戦、スペイン継承戦争終結後、ユトレヒト条約により1713年にシチリア王国を手に入れシチリア王となったが、1720年には四国同盟戦争の際に結ばれたハーグ条約により神聖ローマ帝国のカール6世にシチリア王国を割譲し、その代償として神聖ローマ帝国からサルデーニャ島を割譲された。だが神聖ローマ帝国からサルデーニャ王の称号を認められ、サルデーニャ王国を成立させた。 [ヴィットリオ・アメデーオ2世 wiki](#) より

※オスマントルコ皇帝ムスタファ2世は、ヴィットリオ・アメデーオ2世としてサルディーニャ王に即位し、オスマントルコ帝国とサルディーニャ王国を同時に統治した。もちろん、庶子を投入した影武者部隊を起用していることで可能なことである。



アフメト3世（1673～1730） オスマントルコ帝国第23代皇帝 在位1703～1730

ピョートル1世（1672～1725） ロシア帝国第5代皇帝 在位1682～1725



マフムト1世（1696～1754） オスマントルコ帝国第24代皇帝 在位1730～1754

タフマースブ2世（1704～1740） サファヴィー朝第10代シャー 在位1722～1732※画像なし



オスマン3世(1699～1757) オスマントルコ帝国第25代皇帝 在位1754～1757

フランツ1世（1708～1765） ハプスブルグ家オーストリア初代皇帝 在位1745～1765

その後ナポレオン戦争に巻き込まれ、三帝会戦（アウステルリッツの戦い）で惨敗し、フランツ2世は「ローマ皇帝」の称号を自ら放棄して、神聖ローマ帝国は名実ともに消滅した。しかし、自らの支配領域であるオーストリアとハンガリー王国を中心としてオーストリア帝国を再編し、オーストリア皇帝フランツ1世として君臨した。またクレメンス・メッテルニヒを登用し、ウィーン会議で失地を回復した。フランツ1世wikiより



※ムスタファ3世はMehmedを死んだことにして同じ血筋のオーストリア人家庭に養子に出し、帝王学を叩き込んで未来の王として育てた。Mehmedはフランツ1世としてオーストリア帝国初代皇帝に即位した。



ムスタファ3世（1717～1774） オスマントルコ帝国第26代皇帝 在位1757～1774

ピョートル2世（1715～1730） ロシア帝国第7代皇帝 在位1727～1730

アドルフ・フレドリク（1710～1771） ホルシュタイン＝ゴットルプ朝初代スウェーデン王

-----

オスマントルコ皇帝ムスタファ3世の子



Şehzade Sultan Mehmed (1767~1772) ※画像なし

フリードリヒ・ヴィルヘルム3世 (1770~1840) プロイセン王国第3代王 在位1797~1840

---



アブデュルハミト1世 (1725~1789) オスマントルコ帝国第27代皇帝 在位1771~1789



ピョートル3世 (1728~1762) ロシア帝国第11代皇帝 在位1762



セリム3世 (1761~1807) オスマントルコ帝国第28代皇帝 在位1789~1807

フランツ2世 (1768~1835) オーストリア帝国初代皇帝 在位1804~1835

ナポレオン・ボナパルト (1769~1821) フランス帝国初代皇帝 在位1804~1815

-----  
オスマントルコ皇帝セリム3世の子



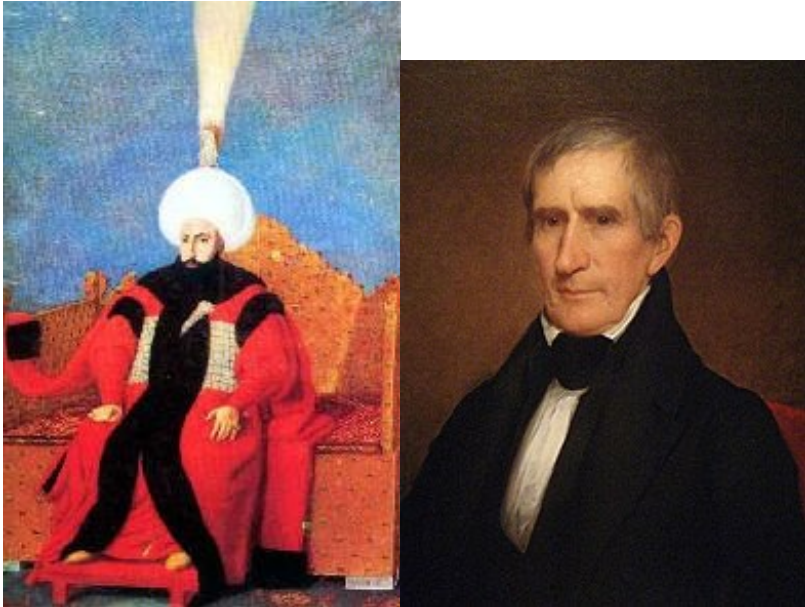
**Safizar Kadın** (1792) ※画像なし

フェルディナント1世 (1793~1875) オーストリア帝国第2代皇帝 在位1835~1848

フリードリヒ・ヴィルヘルム4世 (1795~1861) プロイセン王国第4代王 在位1840~1861

ヴィルヘルム1世（1797～1888） ドイツ帝国初代皇帝 在位1871～1888

---



ムスタファ4世（1779～1808） オスマントルコ帝国第29代皇帝 在位1807～1808

ウィリアム・ハリソン（1773～1841） アメリカ合衆国第9代大統領 任期1841

ヴィルヘルム・フォン・プロイセン（1783～1851）

フリードリヒ・ヴィルヘルム（1785～1831） 新グリュックスブルグ家の祖



マフムト2世 (1785~1839) オスマントルコ帝国第30代皇帝 在位1808~1839

ジョン・タイラー (1790~1862) アメリカ合衆国第10代大統領 任期1841~1845

ザカリー・テイラー (1784~1850) アメリカ合衆国第12代大統領 任期1849~1850

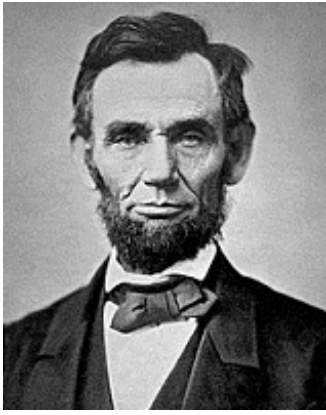
---

オスマントルコ皇帝マフムト2世の子



**Cemile Sultan** (1800?) ※画像なし

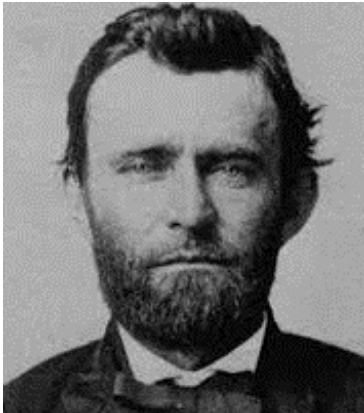
ミラード・フィルモア (1800~1874) アメリカ合衆国第13代大統領 任期1850~1853



**Fatma Sultan** (1809~1809) ※画像なし

アブラハム・リンカーン (1809~1865) アメリカ合衆国第16代大統領 任期1861~1865

※オスマントルコ皇帝ムスタファ4世はオスマントルコ皇帝の子Fatma Sultanを死んだことにしてアメリカ家庭に養子に出し、帝王学を叩き込んで未来の大統領として育てた。Fatma Sultanは長じてアブラハム・リンカーンとなった。オスマントルコ帝国の血筋と知っていた西本願寺門主文如の一族がリンカーンを暗殺した。



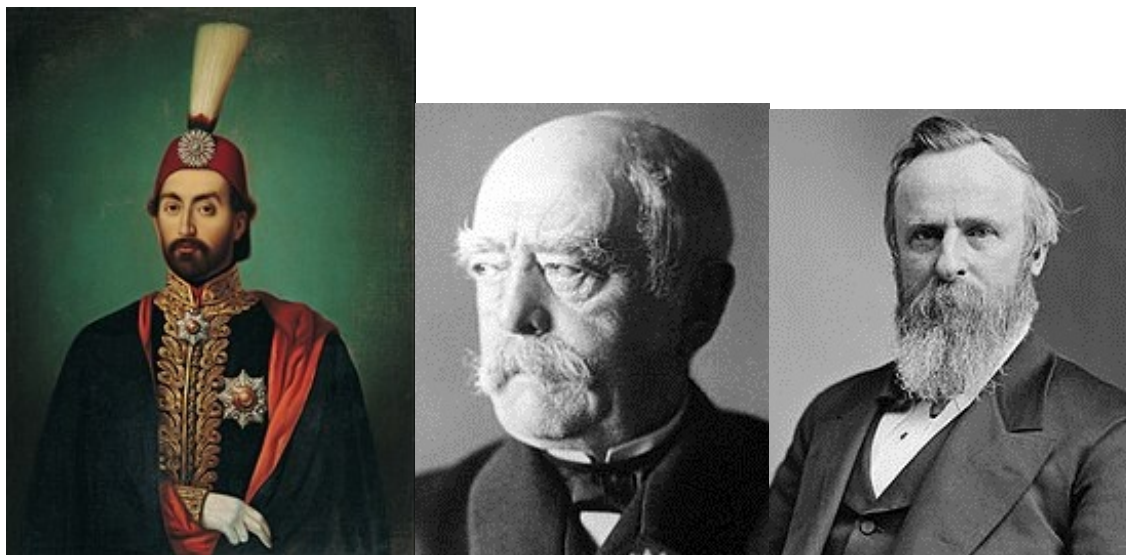
**Şehzade Mehmed** (1822~1823) ※画像なし

ユリシーズ・グラント (1822~1885) アメリカ合衆国第18代大統領 在位1869~1877

南北戦争時の北軍の将軍および第18代アメリカ合衆国大統領。アメリカ史上初の陸軍士官出身の大統領。南北戦争で戦った将軍の中では南軍のロバート・E・リー将軍と並んで（またそのリー将軍を最終的に破ったことで）最も有名な将軍の一人である。身長6フィート（約183cm）。軍人としては成功したが、大統領在任中の「クレディ・モビリエ事件」を始めとする多くのスキャンダルおよび汚職により、歴史家からアメリカ最悪の大統領のうちの一人と考えられている。  
ユリシーズ・グラントwikiより

※オスマントルコ皇帝マフムト2世はオスマントルコ皇帝の子Ahmedを死んだことにして、アメリカに養子に出した。Ahmedは後の62年間をユリシーズ・グラントとして生きた。互いにオスマン王家出身なのでリンカーンとは親しかった。wikiでは「歴史家からアメリカ最悪の大

統領のうちのひとり」と呼ばれているが本願寺による汚名だろう。



アブデュルメジド1世（1823～1861） オスマントルコ帝国第31代皇帝 在位1839～1861

オットー・フォン・ビスマルク（1815～1898） プロシア帝国宰相 任期1862～1890

ラザフォード・ヘイズ（1822～1893） アメリカ合衆国第19代大統領 在位1877～1881

クリスチャン9世（1818～1851） グリュックスブルグ朝デンマーク王 在位1863～1906

プロイセン及びドイツの政治家、貴族。プロイセン王国首相（在職1862年-1890年）、北ドイツ連邦首相（在職1867年-1871年）、ドイツ帝国首相（在職1871年-1890年）を歴任した。ドイツ統一の中心人物であり、「鉄血宰相（独: Eiserne Kanzler）」の異名を取る。オットー・フォン・ビスマルク [wiki](#) より

※オスマントルコ皇帝メフメト2世はオスマントルコ皇帝の子Ahmedを早世したことにして同じ血筋のドイツ人家庭に養子に出し、帝王学を叩き込んで未来の指導者として育てた。プロシア帝国もオーストリア帝国もオスマントルコ帝国の支配下にあったので、邪教が支配するヨーロッパを解放するために第一次世界大戦を始めた。

---

デンマーク王クリスチャン9世の孫



ニコライ2世（1868～1918） ロマノフ朝第14代ロシア皇帝 在位1894～1917

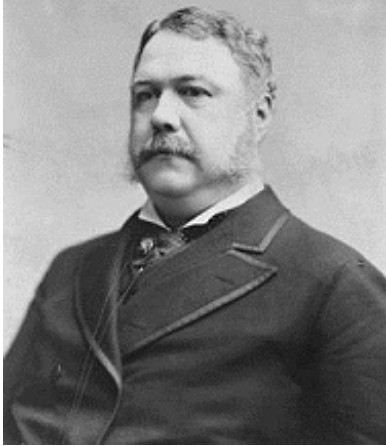
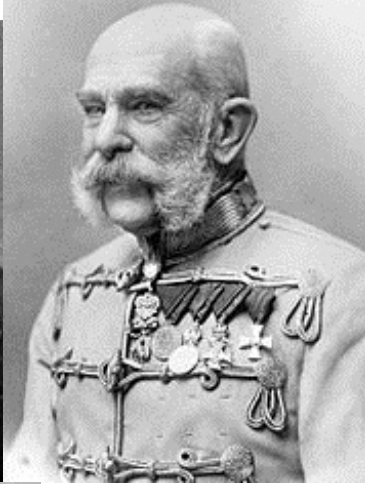
ジョージ5世（1865～1936） ウィンザー朝初代イングランド王 在位1910～1936

日露戦争・第一次世界大戦において指導的な役割を果たすが、革命勢力を厳しく弾圧したためロシア革命を招き、1918年7月17日未明にエカテリンプルクのイパチェフ館において一家ともども虐殺された。東ローマ帝国の皇帝教皇主義の影響を受けたロシアにおいて、皇帝は宗教的な指導者としての性格も強いため、正教会の聖人（新致命者）に列せられている。ニコライ2世wikiより

※クリスチャン9世の血を受けたことで、ロシア王室は西本願寺門主寂如の一族を排除し、正統なロマノフ朝に戻ることができた。しかし、残念なことに、西本願寺門主寂如の一族の凶弾を受けて倒れた。本願寺は、どさくさに紛れてオスマントルコ皇帝の血を継ぐニコライ2世とその家族を容赦なく銃殺した。そして、その罪をレーニンに被せた。

---





アブデュルアズィズ（1830～1876） オスマントルコ帝国第32代皇帝 在位1861～1876

フランツ・ヨーゼフ1世（1830～1916） オーストリア帝国第3代皇帝 在位1848～1916

フリードリヒ3世（1831～1888） ドイツ帝国第2代皇帝 在位1888

チェスター・A・アーサー（1830～1886） アメリカ合衆国第19代大統領 在位1881～1885

-----

プロイセン王フリードリヒ3世の子



ヴァルデマール・フォン・プロイセン（1868～1879）

ウラジミール・レーニン（1870～1924） ロシア革命指導者

ヴァルデマールは1868年2月10日、フリードリヒ3世（当時皇太子）とその妃でイギリス女王ヴィクトリアの娘であるヴィクトリアの間に第6子としてベルリンで生まれた。幼い頃から利発で元気だったため、兄のヴィルヘルムやハインリヒよりも両親に可愛がられた。しかし1879年3月27日、ジフテリアのためポツダムで死去した。11歳。墓所はポツダムの平和教会（Friedenskirche）にある。ヴァルデマール・フォン・プロイセン [wiki](#) より

ロシア社会民主労働党（ボリシェヴィキ、のちに共産党と改名）の指導者として活動し、十月革命を成功させ、革命政府において人民委員会議長を務めた。また、第二インターナショナルに代わる共産主義政党の国際組織としてコミンテルンの創設を主導した。政治、経済の分析から哲学に至るまでさまざまな著作を残し、その思想はレーニン主義として継承された。ウラジミール・レーニン [wiki](#) より

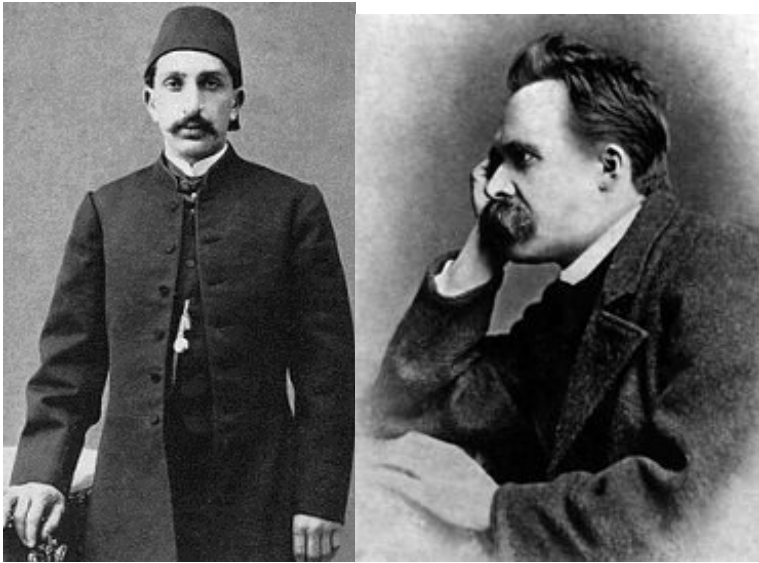
※ヴァルデマール・フォン・プロイセンは11歳で死んだことにし、その後はレーニンとして生きてロシア革命を指揮した。レーニンはチェ・ゲバラを儲けている。

-----



ムラト5世（1840～1906） オスマントルコ帝国第33代皇帝 在位1876

ベンジャミン・ハリソン（1833～1901） アメリカ合衆国第23代大統領 任期1889～1893



アブデュルハミト2世（1842～1918） オスマントルコ帝国第34代皇帝 在位1876～1909

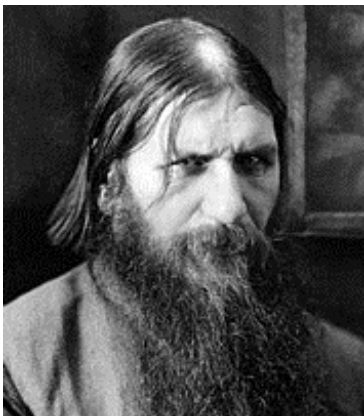
フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ（1844～1900） 哲学者

※フリードリヒ・ヴィルヘルム4世に子がなかったが、優性遺伝子ブリーダーにより、ニーチェの母がフリードリヒ・ヴィルヘルム4世の遺伝子を所望した。これにより、ニーチェが誕生した。実際に、ニーチェのファーストネームはフリードリヒ・ヴィルヘルム4世にあやかって命名された。

優れた頭脳を持っていたニーチェは、終生、クリュニー大主教の一族が所有している大量の邪教信者たちの嫌がらせによって苦しみ、実際に路上で発狂し、精神病院に強制入院させられた。

-----

オスマントルコ皇帝アブデュルハミト2世の子



**Sehzade Mehmed Selim**（1870～1937）※画像なし

グレゴリー・ラスプーチン（1869～1916）

奇怪な逸話に彩られた生涯、怪異な容貌から怪僧・怪物などと形容される。ロシア帝国崩壊の一因をつくり、歴史的な人物評は極めて低い反面、その特異なキャラクターから映画や小説など大

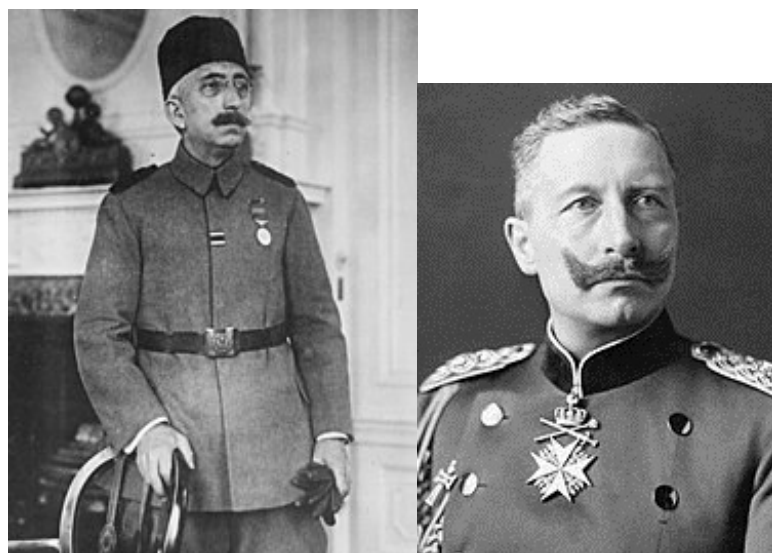
衆向けフィクションの悪役として非常に人気が高く、彼を題材にした多くの通俗小説や映画が製作されている。 グレゴリー・ラスプーチンwikiより

※ピタゴラス（孫武）、アリストテレス（カウティリヤ）、諸葛孔明などが培ってきた諜報・工作術を継承してきたオスマントルコ家が、ロマノフ家を救うため、満を持してロシアに送り出した名うての諜報員がラスプーチンだったと考えられる。ラスプーチンは暗殺されたことになっているが、実際には影武者が死に、本人はシク教国で10年暮らした後、本国に帰還してオスマントルコ皇帝の子 *Sehzade Mehmed Selim* として最後の11年を生きた。



メフメト5世（1844～1918） オスマントルコ帝国第35代皇帝 在位1909～1918

1908年の青年トルコ党の蜂起によって翌1909年、兄・アブデュルハミト2世が廃されてサロニカに幽閉された後、その後釜として擁立された。このような経緯からメフメト5世は主導権がない傀儡皇帝であり、青年トルコ党はメフメト5世のもとで立憲君主制の確立を目指そうとする。メフメト5世wikiより



メフメト6世（1861～1926） オスマントルコ帝国第36代皇帝 在位1918～19

22

ヴィルヘルム2世（1859～1941） ドイツ帝国第3代皇帝 在位1888～1918

---

オスマントルコ皇帝メフメト5世の子



**Mahmud Necmeddin**（1878～1913）※画像なし

ロン・チェイニー（1883～1930） サイレント期俳優

---

Şehzade Mehmed Ziyaeddinの子（オスマントルコ皇帝メフメト5世の孫）



**Behiye Sultan**（1900～1950）※画像なし

ルドルフ・ヴァレンチノ（1895～1926） サイレント期俳優

-----  
オスマントルコ皇帝メフメト 6 世の子



**Fenire Sultan** (1888) ※画像なし

ドワイト・D・アイゼンハワー (1890～1969) アメリカ合衆国第34代大統領 任期  
1953～1961

※アイゼンハワー大統領が、軍産複合体の存在を明らかにした。軍産複合体の父は東本願寺門主  
大谷光榮の一族ヴァネヴァー・ブッシュである。



**Ulviye Sultan** (1892～1967) ※画像なし

ハロルド・ロイド (1893～1971) コメディアン・俳優



**Sabiha Sultan** (1894~1971) ※画像なし

バスター・キートン (1895~1966) コメディアン・俳優

ハンフリー・ボガード (1899~1957) ハリウッド俳優

---

ロシア皇帝ニコライ2世の子



アレクセイ・ニコラエヴィチ (1904~1918)

ルーホッラー・ホメイニー (1902~1989) シーア派十二イマーム派精神的指導者

ロシア帝国皇帝ニコライ2世の第1皇子、ロシア帝国最後の皇太子。1917年の二月革命で成立した臨時政府によって家族と共に監禁された。十月革命で権力を掌握したウラジーミル・レーニン率いるボリシェヴィキの命を受けたチェーカー（秘密警察）によって翌1918年7月17日に超法規的殺害（裁判手続きを踏まない殺人）が実行され、エカテリンブルクのイパチェフ館において家族・従者と共にわずか13歳の若さで銃殺された。正教会で聖人（新致命者）。アレクセイ・ニコラエヴィチ wiki より

イランにおけるシーア派の十二イマーム派の精神的指導者であり、政治家、法学者。1979年にパフラヴィー皇帝を国外に追放し、イスラム共和制政体を成立させたイラン革命の指導者で、以後は新生「イラン・イスラム共和国」の元首である最高指導者として、同国を精神面から指導した。ルーホッラー・ホメイニー w i k i より

※ロシア革命時、アレクセイは10代前半で一族もろとも処刑されたとされているが、無事に抜け出し、長じてホメイニーとして我々の前に戻ってきた。ホメイニー師はイラン・イスラム革命を指揮した。ホメイニー師は、本願寺のことを知ってはいなかったとは思いますが、とにかく、この世の悪に対する復讐のために帰ってきた。この世の悪は誰なのかを探すため、家族の復讐のために帰ってきた。アレクセイは、レーニンの指示で秘密警察が処刑されたことになっているが、実際には秘密警察を掌握していた本願寺が勝手に王族を銃殺した可能性がある。その後、本願寺は自分のやった罪をレーニンにかぶせた形だ。

-----  
レーニンの子（優性遺伝子ブリーダーによる）



チェ・ゲバラ（1928～1967） キューバ革命指揮者

1958年12月29日にはこの第2軍300人を率いて政府軍6000人が迎え撃つキューバ第2の都市サンタ・クララに突入する。そこで、政府軍の武器と兵士を乗せた装甲列車を転覆させ政府軍を混乱させる。反乱軍を支援する多数の市民の加勢もあり、激戦の末にこれを制圧し、首都ハバナへの道筋を開いた。

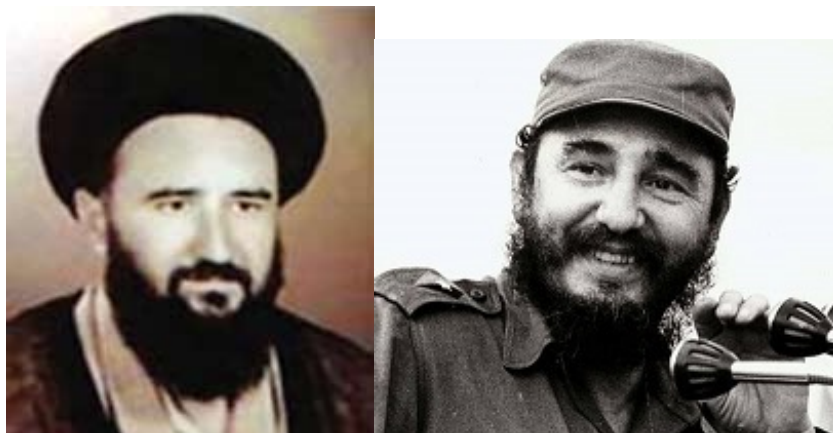
1959年1月1日午前2時10分に、フルヘンシオ・バティスタがドミニカ共和国へ亡命し、1月8日カストロがハバナに入城、「キューバ革命」が達成された。闘争中の功績と献身的な働きによりキューバの市民権を与えられ、キューバ新政府の国立銀行総裁に就任するに至った。チェ・ゲバラ w i k i より

※チェ・ゲバラの父はロシア革命を指揮し、自身はキューバ革命を指揮した。連合して共にキュ



ーバ革命を成功させたカストロの父もイラン・イスラム革命を指揮し、自身はキューバ革命を指揮した。これが真の帝王の一族である。

-----  
ルーホッラー・ホメイニーの子



ムスタファ・ホメイニー（1930～1977）

フィデル・カストロ（1926～2016） キューバ共和国第11代首相 任期1956～1976

ハーシェミー・ラフサンジャーニー（1934～2017） イラン・イスラム共和国第4代大統領 任期1989～97

キューバの政治家、革命家、軍人、弁護士。社会主義者で、1959年のキューバ革命でアメリカ合衆国の事実上の傀儡政権であったフルヘンシオ・バティスタ政権を武力で倒し、キューバを社会主義国家に変えた。革命によって同国の最高指導者となり、首相に就任。1965年から2011年までキューバ共産党中央委員会第一書記を、1976年より2008年まで国家評議会議長（国家元首）兼閣僚評議会議長（首相）を務めた。フィデル・カストロ [wiki](#) より

※ホメイニ師の子ムスタファは、工作人員としてフィデル・カストロを演じ、キューバ革命を指揮した。その後、ムスタファは47歳で死んだことにし、カストロとして生き、キューバを正しく

治めた。庶子を影武者として投入しているため、両者は良く似ている。



ホセイン・ホメイニー（1959）※画像なし

マフムード・アフマディーネジャド（1956） イラン・イスラム共和国第6代大統領 任期2005～2013

アフマディーネジャドは、貧困層を出自とする技術者・研究者で、イスラーム革命後、ホメイニーに忠実な路線をとる学生運動団体を統括する団結強化本部に参加した。その後北西部における市長職などをへてアルダビール州知事に任じられていたが、1997年にモハンマド・ハータミーが大統領に選出されると解任され、教職に戻っている。2003年、テヘラン市評議会はアフマディーネジャドを市長に選出。前任の穏健派市長らの改革を覆し、宗教的強硬派の立場を取った。2005年の大統領選ではイスラーム・イラン建設者同盟の支援を受けて決選投票で62%の票を獲得し、2005年8月3日、大統領に就任した。マフムード・アフマディーネジャド [wiki](#) より

-----

ロン・チェイニーの子（優性遺伝子ブリーダーによる）



ジョン・ウェイン（1907～1979） ハリウッド俳優



ジーン・シモンズ（1949） キッス

※ロン・チェイニーは「千の顔を持つ男」などと呼ばれたが、ジーンもソロアルバムで「千の顔を持つ男」という曲を作っている。80年代はハリウッドで役者としても活躍していた。

-----  
ルドルフ・ヴァレンチノの子（優性遺伝子ブリーダーによる）



エルヴィス・プレスリー（1931～1977） ミュージシャン、俳優

※ロックミュージックのパイオニア。ステージの傍ら、銀幕にも登場した。



ピーター・クリス（1945） 元キッス

※ルドルフ・ヴァレンチノの顔を見ていたら、すぐにピーター・クリスの顔が浮かんだ。ピーターも里子なのだろうか？

-----

ハロルド・ロイドの子（優性遺伝子ブリーダーによる）



ボリス・ジョンソン（1964） 第77代イギリス首相 任期2019～現在

※当初、ジョンソン首相がEU離脱を唱えたり（タナトスのメイ元首相とは違い理由だと考えられるが）、ロシアのことを悪く言っていたのでキッシンジャーの一族かと思った。だが、TVである一場面を見て思わず笑ってしまった。自宅近辺でスタンバってる記者にお茶を出す時の顔が笑えたのだ。心がないタナトスにはユーモアも無い。あれを見て一瞬でジョンソン首相がタナトスではないことを知った。

-----

バスター・キートンの子（優性遺伝子ブリーダーによる）



ジョー・ストラマー (1952~2002)

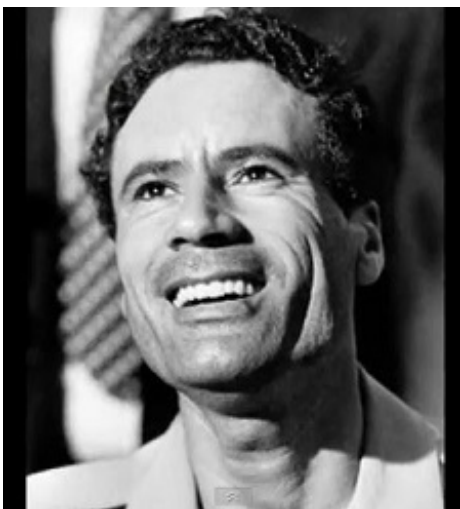
ミック・ジョーンズ (1955)

ポール・シムノン (1955)

※ジョーとミックは、若き日のバスター・キートンにクリソツである。ということで、ザ・クラッシュはラモーンズ以上に兄弟のバンドだったようだ。西本願寺門主文如の一族は警察に指示し、ことあるごとにクラッシュのメンバーを逮捕した。ジョーは既に故人だが、医者（文如の一族）による暗殺だろう（公式には心臓発作）。

-----

オスマントルコ皇帝アブデュルハミド2世の曾孫



**Hatice Türkân Ratib Hanımsultan** (1941) Mihrishah Selcuk Sultanの子※画像なし

ムアンマル・アル=カッターフィー (1942~2011) リビア大統領 任期

※カザフィー大佐もチャウシェスク大統領と同じように本願寺の邪教信者によって惨殺された。カザフィー大佐を集団でリンチして殺害した後に民衆は携帯で写真を撮っていたが、このような人道的な倫理を持ち合わせない民衆は守る必要がない。どちらかといえば、積極的に死滅させてもかまわないような連中だ。死滅するべき連中だ。

しかし、オバマはこのような民衆を守るためと称しリビアを爆撃した。これは実に本願寺の血ならではの所業ではあるが。カザフィー大佐が民衆に惨殺された写真も見たがこれは許すことは出来ない。できそこないが優れた人物を殺害することは反自然的なことだからだ。



**Muhammad Umar Daoud Khan** (? ~ 1978) ※画像なし

アレクサンドル・ルカシェンコ (1954) ベラルーシ大統領

ベラルーシの政治家で大統領 (1994年-)。また、ベラルーシ・ロシア連合国家の初代最高国家評議会議長 (2000年-) でもある。欧米からは「ヨーロッパ最後の独裁者」と呼ばれる。アレクサンドル・ルカシェンコ [wiki](#) より



**Fethiye Nimet Nami Bey** (1953) Sultanzade Osman Nami Osmanoglu Beyの子 ※画像なし

ポール・スタンレー (1952) キッス

※ポールはオスマントルコ皇帝の王子のような雰囲気がある。昔から普通の白人ではないと思っていたが。



**Salih Reda Bey** (1955) Safvet Neslişah Sultanの子※画像なし

レジェップ・タイイップ・エルドアン (1954) トルコ共和国第12代大統領 任期2012～現在

トルコで初めて直接選挙で大統領が選ばれることとなった2014年の大統領選挙に立候補、8月10日に行われた第1回投票で過半数の票を獲得し当選した。同月28日、大統領に就任。首相にはエルドアンに従順なアフメト・ダウトオール外相が就任し、エルドアンが引き続き政治の実権を握る。  
レジェップ・タイイップ・エルドアンwikiより

-----  
イングランド王ジョージ5世 (ロシア皇帝ニコライ2世) の曾孫 (ケント公ジョージの孫)



**ジョージ・ウィンザー** (1962) セント・アンドルーズ伯爵※画像なし

**ドミトリー・メドヴェージェフ** (1965) ロシア連邦第3代大統領 任期2008～2012

大統領選で公約に掲げていたように、メドヴェージェフは汚職対策に積極的に取り組んだ。大統領就任後の同年5月17日にメドヴェージェフは汚職対策を行うための大統領令に署名し、それに伴い「反汚職評議会」が設置された。同年7月には具体的な汚職対策を含んでいる「反汚職国家計画」に署名した。ドミトリー・メドヴェージェフwikiより

※メドヴェージェフ首相は、ジョージ・ウィンザーの影武者として生まれた可能性がある。その

ため、ジョージ5世（ニコライ2世）に似ている。西本願寺門主寂如の一族の姦計によって果てた先祖ニコライ2世と惨殺された家族、そして謎の死を遂げた祖父ケント公ジョージの無念を晴らすためにプーチン大統領と共に立ち上がった。



ニコラス（1970）※画像なし

エマニュエル・マクロン（1977） フランス共和国第25代大統領 任期2017～現在

※マクロン大統領は、兄と考えられるメドベージェフ首相と共に、プーチン大統領の同盟者として立ち上がった。浄土真宗欧州支部のクリュニー会が、邪教信者に指示してQ支持者・トランプ支持者と偽らせて暴動を起こしている。目的は汚名着せである。暴動には不法移民も参加しているようだ。



オスマントルコ皇帝ムラト2世の一族～イヴァン大帝、チューダー朝イングランド王国、宗教革命、エリザベス女王、清教徒革命、第一次サワード王国、第二次サワード王国、サウジアラビア王国

---

オスマントルコ皇帝ムラト2世の子



**Orhan Çelebi** (?～1453)

イヴァン3世(1440～1505) モスクワ大公 在位1462～1505

ヴァシーリー2世とセルプホフ公ウラジーミルの孫娘であるボロフスクの公女マリヤ・ヤロスラヴナの長男。イヴァン大帝(Иван Великий)の異称で知られ、ルーシ北東部を「タタールのくびき」から解放し、モスクワ大公国の支配領域を東西に大きく広げて即位時から4倍増とし、強力な統一国家を建設した名君と評価される。イヴァン3世 [wiki](#) より

※生没年が不詳のオスマントルコ皇帝の子 **K a s i m** は、じつはイヴァン3世としてモスクワ大公に即位し、イワン大帝と呼ばれた。

-----  
モスクワ大公イヴァン3世の子



イヴァン・マラドイ（1458～1490）※画像なし

ヘンリー7世（1457～1509） チューダー朝初代イングランド王 在位1485～1509

イヴァン・マラドイは1468年のカザン・ハン国の統治者イブラーヒーム（İbrahim Xan）に対する遠征、1471年のノヴゴロド遠征に参加している。1476年と1478年に父イヴァン3世が首都モスクワを離れた際には、その君主代行を務めている。

1485年、父イヴァン3世が母親の実家トヴェリ公爵家を取り潰すと、イヴァン・マラドイは母方の血統を根拠にトヴェリ公となった。これと前後して、イヴァンは重い関節炎に苦しむようになった。レビという医者が彼を治療したが甲斐無く、1490年にイヴァンは32歳で死去した。イヴァン・マラドイ w i k i より

イングランド王ウィリアム1世（征服王）とフランドル伯ボードゥアン5世の娘マティルダ（アルフレッド大王とマーシア王オファの子孫）の四男。ロベール2世、ウィリアム2世の弟。子にマティルダ等。後にプランタジネット朝を開くヘンリー2世は外孫に当たる。ヘンリー1世 w i k i より

※イヴァン大帝の子イヴァン・マラドイは、従業員として30代の頃にイングランドに潜入し、チューダー家に接近してヘンリー1世となった。1485年、ヘンリー1世はチューダー朝の初代王となった。その2年後、イヴァンはロシアで自分を死んだことにし、ヘンリー1世としてイングランドを統治した。



ユーリー・イヴァノヴィチ（1480～1536） ドミトロフ公※画像なし

マルティン・ルター（1483～1546） ルター派教祖

フリードリヒ・ツヴィングリ（1484～1541） 改革派教祖

トマス・クロムウェル（1485～1540） 聖公会教祖

ルターは宗教改革の中心人物となったことでプロテスタント教会の源流をつくった。聖書をキリスト教の唯一の源泉にしようというルターの呼びかけはプロテスタント諸教会のみならず、対抗改革を呼び起こしたという意味でカトリック教会にも大きな影響を与えた。ルターwikiより

スイス改革派教会の創始者で、チューリッヒに神聖政治を確立しようとした。「聖書のみ」を信仰の基準としたこと、信仰そのものが大事だと説いたこと、万人祭司説を説いたことはマルティン・ルターと変わらなかったが、それ以外の部分においてルターと意見を異にしていた。彼らはマールブルク会談で多くの論点について合意したが、聖餐論で一致することができなかった。カトリック諸州との内戦の中で戦死した。47歳だった。ツヴィングリwikiより

教皇庁からの独立に伴い、クロムウェルは国王に、イングランドにおける教会の頂点に立つことを進言する。1534年に議会を通過させた首長令（国王至上法）によって、イングランド国教会はローマ・カトリック教会から離脱し、国王ヘンリー8世は「信仰の擁護者」として国教会の長となった。国王の傀儡となったカンタベリー大司教トマス・克蘭マーもまた王の婚姻無効を認めた。トマス・クロムウェルwikiより

※ユーリーは庶子の異母兄弟数十人を投入して影武者部隊を作り、故郷であるロシアを後にした。ドミトリーは、タナトスの邪教から民衆を解放するため、ヨーロッパ各地でプロテスタント運動を起こした。マルティン・ルター、フリードリヒ・ツヴィングリ、トマス・クロムウェルは同一人物である。その証拠に3人とも生没年がかすっているし、何よりも奇妙なことに3人とも同じような帽子を被っている。

トマス・クロムウェルは気の毒にも、理不尽な理由によって家族であるはずのヘンリー8世に処刑されたのだが、実際にはルター派に集中したいルターが、クロムウェルを一足先に死んだこと

にしたのだと考えられる。

-----  
チューダー朝初代イングランド王ヘンリー7世の子



スレイマン1世 (1494~1566) オスマントルコ帝国第10代皇帝 在位1520~1566

ヘンリー8世 (1491~1547) チューダー朝イングランド王 在位1509~1547

トマス・克蘭マー (1489~1556) カンタベリー大主教

ウィリアム・ウォルシンガム (?~1534) フランシス・ウォルシンガム父※画像なし

ジョン・カリー (1491~1552) フランシス・ウォルシンガム養父※画像なし

グスタフ1世 (1496~1560) ヴァーサ朝初代スウェーデン王 在位1523~1560

西郷純久 (148?~?) 西郷氏の祖※画像なし

少弐資元（1489～1536） 少弐氏16代当主※画像なし

絶頂期においては、魅力的で教養があり老練な王だと同時代人から見られ、ブリテンの王位について的人物の中で最もカリスマ性があった統治者であると描かれている。権力をふるいながら、文筆家および作曲家としても活動した。薔薇戦争の後の危うい平和のもとで女性君主にテューダー朝をまとめることは無理だと考え、男子の世継ぎを渴望した。そのため6度結婚し、イングランドにおける宗教改革を招いた。次第に肥満して健康を害し、1547年に薨去した。晩年には好色、利己的、無慈悲かつ不安定な王であったとされている。ヘンリー8世 [wiki](#) より

大司教ウィリアム・ウォーラムが1532年に死去し、国王ヘンリー8世はその後継者を探し始めた。国王の右腕だったトマス・クロムウェルは当時ケンブリッジ大学の教授だったトマス・克蘭マーを就任させるべきだと進言し、その翌年克蘭マーはカンタベリー大司教に就任した。1548年に聖公会祈祷書を完成させた。キャサリン・オブ・アラゴンとの離婚を承認した。ちなみに、『ユートピア』の著者として知られるトマス・モアは国王の離婚を痛烈に批判し、この時期に処刑されている。トマス・克蘭マー [wiki](#) より

※ヘンリー8世は56歳で死んだことにし、トマス・克蘭マーとしてカンタベリー大主教の座に就き、プロテスタントの普及に努めた。その後、9年間生きたが、娘であるメアリーに処刑された。しかし、処刑されたのは影武者であり、本体は日本に落ち延び、西郷氏を儲けた。西郷の由来は西（肥前）のチューダー（郷）である。チューダーを「サト」と呼び「郷」を当て字したものだ。西郷隆盛は、愛新覚羅の一族に属している。

-----

チューダー朝第2代イングランド王ヘンリー8世（ウィリアム・ウォルシンガム）の子





エリザベス1世（1533～1603） チューダー朝イングランド女王 在位1558～1603

フランシス・ウォルシンガム（1532～1590） スパイマスター

龍造寺隆信（1529～1584） 肥前国戦国大名

エリザベスはウィリアム・セシルをはじめとする有能な顧問団を得て統治を開始し、最初の仕事として、父の政策を踏襲し「国王至上法」を発令し、「礼拝統一法」によってイングランド国教会を国家の支柱として位置づけた。エリザベスは結婚することを期待され、議会や廷臣たちに懇願されたが、結婚しなかった。この理由は多くの議論の的になっている。年を経るとともにエリザベスは処女であることで有名になり、当時の肖像画・演劇・文学によって称えられ崇拝された。エリザベス1世wikiより

エリザベス女王は1570年にローマ教皇に破門され、以降イエズス会士などカトリック宣教師がイングランドに潜入してきて反エリザベス謀議を行うようになった。先のリドルフィ陰謀事件もカトリックによって起こされた事件であった。1580年代になると教皇は一層反エリザベス姿勢を強め、エリザベスを暗殺した者には祝福を与えるとまで宣言し、カトリックのエリザベス暗殺謀議も一層増加した。

これに対抗してウォルシンガムは国内外に情報網・監視網を張り巡らせ、秘密警察業務にあたった。多くの反エリザベス陰謀がウォルシンガムの組織によって摘発された。彼の秘密諜報活動の予算は増額され続け、ヨーロッパの主要都市ほぼ全てにウォルシンガムのスパイが放たれた。こうした大規模諜報活動のおかげでエリザベスは20回以上も暗殺計画から助かっている。フランシス・ウォルシンガムwikiより

※敵が多いヘンリー8世は、息子を娘として育てた。息子ならすぐに殺される可能性もあるが、娘なら生き延びる可能性が高かった。思春期になると、身代わりの庶子の娘をエリザベスとして徴用した。エリザベス役から解放されたフランシスは、身代わりのエリザベスの補佐をしながら、スパイマスター、ウォルシンガムとして生きた。

しかし、途中でエリザベスが敵に討ち取られた。エリザベスが殺害されたことが公になるとマズ

イので、フランスは自身がエリザベス1世を演じ、イングランド女王に即位した。エリザベス女王が不自然なまでに身体をドレスで覆い隠し、結婚もせず、処女と呼ばれたのはウォルシンガムが女王を演じていたのが原因である。



エドワード6世（1537～1553） チューダー朝第3代イングランド王 在位1547  
クリストファー・ハットン（1540～1591）

ヘンリー8世の男児で唯一存命していたエドワードは、父の死に伴い9歳で即位した。ヘンリー8世は幼い息子を一握りの権臣が操ることを警戒し、顧問団に集団で補佐させるよう遺言を書いていたが、エドワードの母方の伯父であるエドワード・シーモアが握りつぶした。エドワード・シーモアはエドワード6世の即位直前にサマセット公位を創設し、自ら護国卿（摂政）となってイングランドの事実上の支配者となった。エドワード6世wikiより

※敵が多いエドワード6世は16歳で死んだことにし、その後はクリストファー・ハットンとして生き、姉（兄？）であるエリザベス女王を終生サポートした。

-----  
ジョン・カリー（ヘンリー8世）の玄孫

エリザベス・カリー（1576～1635） ジョージ・カリーの子  
東郷重虎（1574～1621） 東郷氏の祖

※エリザベスには影武者がいたが、エリザベスが無事に成人すると、その影武者は独立して日本に移住し、東郷氏を儲けた。東郷の由来は東（薩摩）のチューダー（郷）である。西郷と同じようにチューダーを「サト」と呼び、「郷」を当て字している。東郷氏からは東郷平八郎が輩出さ

れているが、彼は西郷隆盛と同じで愛新覚羅の一族に属している。

龍造寺隆信（フランシス・ウォルシンガム）の孫



龍造寺高房（1586～1607） 肥前国佐賀藩主

ロバート・デヴロー（1591～1646） 第3代エセックス伯

一人息子に先立たれていたため、彼の死とともにエセックス伯爵位は廃絶した。ヘレフォード子爵位は遠縁で初代ヘレフォード子爵ウォルター・デヴァルーの末息子の家系であるウォルター・デヴァルーによって継承された。議会招集令状により創設された爵位であるフェラーズ男爵とパウチャー男爵は、男子なき場合に姉妹間に優劣がない女系継承が可能だが、彼の姉は2人あったため、継承者が決まらず、停止（abeyance）となった。しかしフェラーズ男爵位は1677年になってロバート・シャーリーが継承者に確定した。wikiより



ロバート・デヴロー（1632～1637） 第3代エセックス伯の子※画像なし

ジョン・ロック（1632～1704） 英国哲学者

サワード・イブン・ムハンマド・イブン・ムクリン（1640～1725） サワード家の祖※



画像なし

哲学者としては、イギリス経験論の父と呼ばれ、主著『人間悟性論』（『人間知性論』）において経験論的認識論を体系化した。また、政治哲学者としての側面も非常に有名である。『統治二論』などにおける彼の自由主義的な政治思想は名誉革命を理論的に正当化するものとなり、その中で示された社会契約や抵抗権についての考えはアメリカ独立宣言、フランス人権宣言に大きな影響を与えた。ジョン・ロック [wiki](#) より

※スパイマスターと呼ばれ、エリザベス女王を演じたウォルシンガムの曾孫ロバートは、5歳で早世したことにされ、ジョン・ロックとして育った。その後、ジョン・ロックはイングランドを離れてアラビア半島に移り、サ우드家の祖となった。サウードの由来はチューダーである。チューダー=シューダ=サ우드となる。

-----  
サ우드・イブン・ムハンマド・イブン・ムクリン（ジョン・ロック）の子



ムハンマド・ビン・サ우드（?～1765） 第一次サ우드王国※画像なし

トマス・ペラム・ホールズ（1693～1768） ホイッグ党

ヘンリー・ペラム（1694～1754） ホイッグ党

ホイッグ党に所属し、ロバート・ウォルポールや弟ヘンリー・ペラムの政権の閣僚を務めた後、二期にわたって首相（在職：1754年3月16日 - 1756年11月16日、1757年7月2日 - 1762年5月26日）を務めた。首相在任中はフレンチ・インディアン戦争や七年戦争などフランスとの戦争に追われた。トマス・ペラム・ホールズ [wiki](#) より

1717年からホイッグ党の庶民院議員となり、ロバート・ウォルポール政権で閣僚職を務めた。1742年のウォルポール失脚後、反ウォルポール派の第2代カートレット男爵ジョン・カートレットとの権力闘争に勝利して1743年8月から首相を務め、ウォルポール後のホイッグ政治を主導した。分裂しかけていたホイッグ党の結束を維持し、野党トーリー党からの登用も行うなどして議会の

信任を保ち続け、長期政権を築いた。1748年にはアーヘンの和約を締結してオーストリア継承戦争を終結させた。ヘンリー・ペラム [wiki](#) より

※ムハンマド・ビン・サウードはジョン・ロックの子であるが、サウードはイングランドに帰還し、トマス・ペラム・ホールズ、ヘンリー・ペラム兄弟に化けて、邪教に支配されたイギリス人を解放すべく、ホイッグ党を設立し、真の民主主義を目指した。

-----

サウード・イブン・ムハンマド・イブン・ムクリンの子

ムハンマド・イブン=サウード（1697～1765） 第一次サウード王国初代王 在位1725～1765

トゥルキー・ビン・アブドゥッラー（1755～1834） 第二次サウード王国初代王 在位1824～1834

-----

トゥルキー・ビン・アブドゥッラーの子



アブドゥル・アズィーズ・イブン・サウード（1876～1953） サウジアラビア王国初代王 在位1932～1953

※当時サウジアラビアでは厳格なワッハーブ派を国教としていたこともあり、イスラム教の刑罰に基づき泥棒は右手首を切り落とすという厳罰をとっていた。アメリカ人はこの厳罰を止めるように度々諫言するが、「罪を償わせるために何年も牢屋に入れるのと、いましめのために手首を斬って釈放するのと、果たしてどちらが個人の自由を尊重しているのか？」と答えて、刑法を改めることはなかった。

-----

## サウジアラビア王国初代王イブン・サウードの子



サウード・ビン・アブドゥルアズィーズ（1902～1964） サウジアラビア王国第2代王  
在位1953～1964

※サウードはベドウィンに人気があった。また、外国語を全然話せないことを誇りとしていたという。しかし、後に墮落してハレムとキャデラックの趣味にふけたという。



ハーリド・ビン・アブドゥルアズィーズ（1913～1982） サウジアラビア王国第4代王  
在位1975～1982

サウード家には心臓発作で亡くなる者が多く、旅行中の発作に備え手術室を設置したボーイング747を購入していたが、1982年6月13日、やはりハーリドも心臓発作で没し、ファハドが後を継いだ。wikiより



サルマーン・ビン・アブドゥル・アズィーズ（1935） サウジアラビア王国第7代王 在位  
2015～現在

2017年11月、息子のムハンマド王太子が率いる反汚職委員会が、ムトイブ王子（国家警備相）やアルワーリド王子ら王子11人を含む複数の閣僚経験者を逮捕した。表向きは汚職容疑であるがムハンマドが志向する急進的な改革やサルマーンとムハンマドの体制に対する抵抗勢力を潰すためであると観測された。wikiより

-----

サウジアラビア王国初代王イブン・サウードの孫

Faisal bin Musaid（1944～1975） Musa'id bin Abdulaziz Al Saudの子※画像なし

※1975年、Faisal bin Musaidは、サウジアラビア王国第3代王ファイサル（西本願寺門主大谷光照の一族）を暗殺した。



ムハンマド・ビン・サルマーン（1985） サウジ皇太子※サルマーン・ビン・アブドゥル  
アズィーズの子

2018年10月、ジャーナリストのジャマル・カショギがトルコのイスタンブールにあるサウジアラビア領事館に入館後に行方不明になっている事件に関連し、トルコ政府は「カショギがサウジアラビア領事館の中で殺害されたという証拠を持っている」と述べた。なお、オンラインニュース

サイトの「ミドル・イースト・アイ」は、ムハンマド・ビン・サルマーン王太子のボディガードが実行犯であると報じている。

2018年11月16日、米紙ワシントン・ポストは消息筋の話として、米中央情報局はカシヨギ殺害事件の黒幕はムハンマド・ビン・サルマーン王太子だと結論付けたと報じた。w i k iより

※2017年11月、ムハンマドが率いる反汚職委員会が、ムトイブ王子（国家警備相）やアルワーリド王子（1955生）ら王子1人を含む複数の閣僚経験者を逮捕した。カシヨギ殺人事件は、ムハンマド・ビン・サルマーンに対するCIAの仕返しだと考えられる。

アルワーリド王子はアブドゥッラー・ビン・アブドゥルアズィーズ（西本願寺門主大谷光照の一族）の子Mutaib bin Abdullah（1952生）の影武者と考えられる。

オスマントルコ皇帝メフメト2世の一族～マクシミリアン1世、バイエルン王国、交響曲の父ハイドン、サド侯爵、文豪ゲーテ、楽聖モーツァルト、ヘミングウェイ、三島由紀夫、シド・バレット、トランプ大統領

---

オスマントルコ皇帝メフメト2世の子



**Sultan Cem** (1459～1495)

ヘンリー7世 (1457～1509) チューダー朝初代イングランド王 在位1485～1509

マクシミリアン1世 (1459～1519) ハプスブルグ朝神聖ローマ帝国初代皇帝

自身と子・孫の結婚政策で成功をおさめ、ハプスブルク家の隆盛の基礎を築いたことから、マクシミリアン大帝 (Maximilian der Große) と称される。また武勇に秀でた体躯に恵まれ、芸術の保護者であったことから、中世最後の騎士とも謳われる。ハプスブルク家ならではの多民族国家の姿が、マクシミリアン1世の時代に生み出されていった。マクシミリアン1世wikiより

※オスマントルコ皇帝の子ジェム・スルタンは36歳で死んだことにし、ヘンリー7世としてチューダー朝イングランド王に即位し、一方でマクシミリアン1世として神聖ローマ帝国皇帝に即位した。

-----  
ハプスブルグ朝マクシミリアン1世の子



**Maximilian Friedrich von Amberg** (1511～1553) ※画像なし

フランシスコ・ボルハ (1510～1572) イエズス会

フランシスコの総長としての目覚ましい働きは、歴史家らをして「イグナチオ・デ・ロヨラ以降で最高の総長」と言わしめる事になった。彼はローマ学院(Collegium Romanum)を創設したが、これが現在のグレゴリアン大学となった。ここで多くの宣教師が養成され、世界各地へと赴いた。さらに彼は歴代のローマ教皇や王達のアドバイザーとなり、修道会全体を強力に指導した。これほどの地位にあっても、彼個人はつましい生活を送り、生前から聖人の誉れが高かった。フランシスコ・ボルハwikiより

※ハプスブルグ朝神聖ローマ皇帝の子マクシミリアムは42歳で死んだことにし、最後の19年間をイエズス会士フランシスコ・ボルハとして生きた。



**Christoph Ferdinand** (1522) ※画像なし

蜂須賀正勝 (1526～1586) 蜂須賀氏の祖

天正4年(1576年)の天王寺合戦に参加。秀吉勢の先鋒を務めて、「楼岸(ろうのきし)一番の槍」の手柄を挙げ、中村重友と共に一揆勢の首も多数上げて、秀吉より感状と100石の加増を与えられ、さらに信長からも褒美として定紋の軍衣を直に手渡されるという栄誉を受けた。蜂須賀正勝wikiより

※蜂須賀の名の由来はヴァチカンとシケリアの組み合わせである。ヴァチカン+シケリア=ヴァチシケ=蜂須賀となる。

- ・カール5世（1500～1558） ハプスブルグ朝第4代神聖ローマ皇帝 在位1519～1556
- ・フェルディナント1世（1503～1564） ハプスブルグ朝第5代神聖ローマ皇帝 在位1556～1564
- ・マクシミリアン2世（1527～1576） ハプスブルグ朝第6代神聖ローマ皇帝 在位1564～1576

-----  
ハプスブルグ朝マクシミリアン2世の子



フェルディナント（1551～1552）※画像なし  
マテオ・リッチ（1552～1610） イエズス会

フランシスコ・ザビエルの夢見た中国宣教に苦勞のすえ成功し、明朝宮廷において活躍した。中国にヨーロッパの最新技術を伝えると共に、ヨーロッパに中国文化を紹介し、東西文化の架け橋となった。マテオ・リッチwikiより

※ハプスブルグ朝皇帝マクシミリアン2世は、フェルディナントを死んだことにしてイエズス会士マテオ・リッチとして育てた。

- ・ルドルフ2世（1552～1612） ハプスブルグ朝第7代神聖ローマ皇帝 在位1576～1612
- ・マティアス（1557～1619） ハプスブルグ朝第8代神聖ローマ皇帝 在位1612～1619
- ・フェルディナント2世（1578～1637） ハプスブルグ朝第9代神聖ローマ皇帝 在位1619～1637



- ・フェルディナント3世（1608～1657） ハプスブルグ朝第10代神聖ローマ皇帝 在位1637～1657
  - ・フェルディナント4世（1633～1654） ハプスブルグ朝第11代神聖ローマ皇帝 在位1653～1654
  - ・ヨーゼフ1世（1678～1711） ハプスブルグ朝第13代神聖ローマ皇帝 在位1705～1711
  - ・カール6世（1685～1740） ハプスブルグ朝第14代神聖ローマ皇帝 在位1711～1740
- 



フランツ1世（1708～1765） ハプスブルク＝ロートリンゲン朝初代神聖ローマ皇帝  
在位1745～65

神聖ローマ帝国のローマ皇帝（在位：1745年 - 1765年）、ロレーヌ（ロートリンゲン）公（フランソワ3世エティエンヌ（François III Étienne）またはフランツ3世シュテファン（Franz III. Stephan）、1729年 - 1737年）、トスカーナ大公（フランチェスコ2世（Francesco II）、在位：1737年 - 1765年）。全名はフランツ・シュテファン・フォン・ロートリンゲン（ドイツ語：Franz Stephan von Lothringen）。ハプスブルク＝ロートリンゲン朝の最初の皇帝である。マリア・テレジアの夫であり、この婚姻により帝位を継承するが、自身が領していたロレーヌ（ロートリンゲン）公国はフランスへ譲らなければならなかった。2人の中にはヨーゼフ2世、レオポルト2世、マリー・アントワネットなど16人（男子5人、女子11人）の子が生まれた。wikiより

---

ハプスブルグ朝フランツ1世の子



マリア・エリーザベト・フォン・エスターライヒ（1737～1740）

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン（1732～1809） 作曲家

弦楽四重奏曲第77番第2楽章にも用いられた皇帝讃歌「神よ、皇帝フランツを守り給え」の旋律は、現在ドイツ国歌（ドイツの歌）に用いられている。ハイドンwikiより

※フランツ1世の第一子マリア・エリーザベト・フォン・エスターライヒは、実際には男子として生まれた。女子として育てていたのは敵の目を欺くためである。その後、3歳で死んだことにするとマリア・エリーザベト・フォン・エスターライヒはフランツ・ヨーゼフ・ハイドンとして育てられた。ハイドンが5年早く生年を偽っているのは正体を隠すためだろう。ハイドンは、父であるフランツ1世を讃える皇帝賛歌「神よ、皇帝フランツを守り給え」を作曲している。



マリア・カロリーナ・フォン・エスターライヒ（1740～1741）

マルキ・ド・サド（1740～1814） 貴族

※フランツ 1 世の子として生まれたサド侯爵は、敵の目を欺くために女子マリアとして育てられた。その後、マリアは 1 歳で死んだことにして潜伏し、ドナスイヤン・アルフォンス・フランソワ・ド・サドとしてフランスの裕福な家で育てられた。サド侯爵は、貴族の腐敗と退廃を描いた著作「ソドム 120 日」「ジュスティーン」「悪徳の栄え」などを残している。



レオポルト 2 世（1747～1792） ハプスブルグ＝ロートリンゲン朝第 3 代神聖ローマ皇帝 在位 1790～92

レオポルト 2 世自身は進歩的思想の持ち主であったが、兄の強引な改革によって引き起こされた混乱を収めるため、皇帝即位後は農奴制廃止令の撤回、賦役の復活などの反動政策を行った。一方で質素な生活を好み、父から受け継いだ遺産を増殖させることにも成功した。レオポルト 2 世 wiki より



ヨハンナ・ガブリエーラ・フォン・エスターライヒ（1750～1762）  
ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749～1832） 作家

※フランツ 1 世の子として生まれたゲーテは、敵の目を欺くために女子ヨハンナとして育てられた。その後、ヨハンナは 12 歳で死んだことにして潜伏し、ヨハンとしてフランクフルトの裕福な家で育てられた。ヨハンはその後、名士ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテとしてヨーロッパ全土に名を知られた。



マクシミリアン・フランツ・フォン・エスターライヒ（1756～1801） ケルン大司教  
ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～1791） 作曲家  
マクシミリアン1世（1756～1825） バイエルン王国初代王  
ウィリアム・ブレイク（1757～1827） 詩人

バイエルン王マクシミリアン1世はライン同盟に加盟していた王侯のうちで最も重要な一員であり、ナポレオンとの同盟をライプツィヒの戦いの直前まで維持したが、オーストリアに地位と領土が保証されたことで反ナポレオン側に回った。しかし1814年のパリ条約では、旧ヴェルツブルク公国と引き換えにチロルをオーストリアに返還している。ウィーン会議にマクシミリアン1世は自ら出席したが、ここでもオーストリアに対してさらに譲歩しなければならなかった。旧プファルツ選帝侯国の一部（現在のラインラント＝プファルツ州南部のプファルツ地方、飛び地となった）を返還される代償に、イン川沿いの地域などを割譲させられたのである。マクシミリアン1世は領土の一体性を維持するために奮闘したが、失望に終わった。マクシミリアン1世wikiより

※写真左上は姉マリー・アントワネットとルイ16世を訪問するマクシミリアン・フランツの図。右上はモーツァルト、右下はウィリアム・ブレイク、左下は初代バイエルン王マクシミリアン1世である。神聖ローマ皇帝の子マクシミリアン・フランツは幼少期はお忍びで楽聖モーツァルトとして演奏、作曲活動を行った。同時に、イギリスにも渡りウィリアム・ブレイクとして活動していた。イギリス不在の際は、庶子の影武者がブレイクを演じた。1781年、モーツァルト

はウィーンに移るとフリーの作曲家となり、レッスン、楽譜の出版で生計を立てたが、同年にマクシミリアン・フランツはケルン大司教に就任している。

大司教の仕事が忙しくなると、マクシミリアン・フランツは音楽活動を断念し、1791年にモーツァルトを死んだことにして大司教の仕事に専念した。大司教時代、マクシミリアン・フランツはパトロンとしてベートーヴェンを支援している。マクシミリアン・フランツにとって、音楽に対する情熱は忘れられるものではなかった。

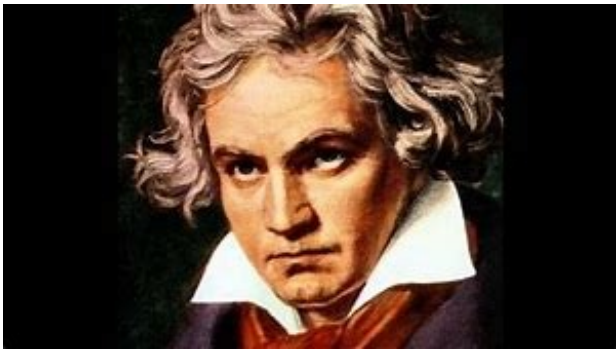
その後、マクシミリアン・フランツは選帝侯として45歳でバイエルンに迎えられた。1801年、ケルン大司教マクシミリアン・フランツは自分を死んだことにし、そのままマクシミリアン1世を名乗ってバイエルン王国初代王に即位した。その後、マクシミリアン2世を死んだことにしたマクシミリアン・フランツは、最後の2年をブレイクとしてイギリスで生きた。まことに数奇な運命である。交響曲の父ハイドン、サド侯爵、文豪ゲーテ、楽聖モーツァルトは神聖ローマ皇帝フランツ1世の子であり、マリー・アントワネット、ヨーゼフ2世、レオポルド2世の兄弟であった。

このように、真の皇帝は一芸にも秀でているものだ。芸術を嗜み詩を謳うことを愛する。それを証明するように、タナトスの一族に芸術家はひとりもない。真の王は、常に人々を喜ばせている。

-----  
神聖ローマ皇帝レオポルド2世の子



フランツ2世（1768～1835） 最後の神聖ローマ皇帝 在位1792～1806



マリア・アンナ（1770～1809） 修道女※画像なし

ルドヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827） 作曲家

※レオポルド2世の子として生まれたマリア・アンナは、一生結婚せず、修道女として39歳で死んでいる。しかし、実際にはマリア・アンナは本願寺の目を欺くために女子として育てられた男子であった。ベートーヴェンの正体は神聖ローマ皇帝の子であり、修道女マリア・アンナだった。若い頃、危険が迫るとベートーヴェンは修道女に変身して危機を逃れていた。

その後、作曲に専念するため、1809年に39歳でマリア・アンナを死んだことすると、ベートーヴェンはそれと前後して作曲専門にシフトし、中期を代表する作品を書いた。しかし、本願寺に神聖ローマ皇帝の子としてマークされていたベートーヴェンは、本願寺の指示による小間使いのイヤガラセ、死んだ弟の妻によるイヤガラセ、寝ている間に耳に樹脂を塗りこめられて唾にされるなど、皇帝の子でありながら身体的にも精神的にも苦悩した。



アントン・ヴィクトール（1779～1835）※画像なし

ホセ・デ・サンマルティン（1778～1850） アルゼンチン独立運動

アルゼンチン出身の軍人で政治家。南アメリカ各国をスペインから独立させるために活躍した。シモン・ボリーバルや、ホセ・アルティエーガスと並ぶ解放者として称えられている。

1812年、ラ・プラタ連合州として独立していた母国に帰国し、ブエノスアイレスの革命政府に参加する。当時のアルゼンチンは混乱し、正式な独立を宣言できずスペインとの従属関係も続いていた。彼は政治闘争とは距離を置き軍人としての職務に徹していた。サン・マルティンはスペイン軍を打倒し、アルゼンチンだけでなく全ての南アメリカ諸国が独立すべきだと考え、それを実現するにはスペインの南アメリカ支配の拠点であるペルーとりわけリマを解放すべきだと主張した。ホセ・デ・サンマルティンwikiより

※神聖ローマ皇帝レオポルト2世の子ヴィクトールはサンマルティンとしてアルゼンチン独立運動を指揮した。そこには常に、ダヴィデの一族として世界を悪から守護する使命があった。その後、ヴィクトールは死んだことにして後の15年間はサンマルティンとして生きた。

---

ゲーテの子



ジュリウス・アウグスト・ウォルター（1789～1830）※画像なし  
ジョージ・ゴードン・バイロン（1788～1824） 詩人

---

神聖ローマ皇帝フランツ2世の子



ヨーゼフ・フランツ・レオポルト（1799～1807）  
フランツ・シューベルト（1797～1828）

※最後の神聖ローマ皇帝の子ヨーゼフ・フランツ・レオポルトは8歳で早世したが、実際には潜

伏しフランツ・シューベルトに名を変えて生き延びていた。フランツをそのまま受け継いでいる形だ。シューベルトはベートーヴェンとは家族であるため、仲が良かった。しかし、本願寺がシューベルトを神聖ローマ皇帝の子としてマークしていたため、シューベルトは31歳で殺害された。



アマーリア・テレジア（1807）※画像なし

マクシミリアン2世（1811～1864） バイエルン王

1811年11月28日、ルートヴィヒ1世（当時王太子）とその妃であったザクセン＝ヒルトブルクハウゼン公フリードリヒの娘テレゼの間に第一子としてミュンヘンで生まれた。弟にギリシャ国王オソン1世、バイエルン摂政ルイトポルトらがいる。1832年、シュヴァンシュタイン城を購入、1853年にこの城をホーエンシュヴァンガウ城に改築。1864年3月10日にミュンヘンで死去、当地のデアティナー教会に葬られた。マクシミリアン2世wikiより

-----

バイエルン王マクシミリアン1世の子



オソン1世（1815～1867） ギリシア国王 在位1833～1862

ネイサン・ベドフォード・フォレスト（1821～1877） クー・クラックス・クラン創設

「白人至上主義団体」とされるが、正確には北方人種を至上とし（ノルディック・イデオロギーという）、主に黒人、アジア人、近年においてはヒスパニックなどの他の人種の市民権に対し異



を唱え、同様に、カトリックや、同性愛者の権利運動やフェミニズムなどに対しても反対の立場を取っている。 KKKwikiより

※ネイサン・ベドフォード・フォレストはマクシミリアン1世の子として生まれた。1822年にデンマーク・ウィージーの暴動、1831年にナット・ターナーの乱など、黒人による蜂起が発生した。これらの蜂起はアメリカ侵略を目指すヴードゥー教が指揮していた。そのため、K・K・Kはヴードゥー教の黒人指導者や黒人信者を狩るために結成された。そこには常に、ダヴィデの一族として世界を悪から守護する使命があった。

ヴードゥー教とは無縁の一般の黒人は標的にされなかった。一般の黒人は黒い肌のせいで貧しいが、ヴードゥー教の黒人は、黒い肌を武器に財を成し、黒い肌を盾に、自分たちを攻撃する善の白人指導者をレイシストと呼び、貶め、攻撃している。

-----

アーダルベルト・フォン・バイエルンの子（ルートヴィヒ1世の孫）

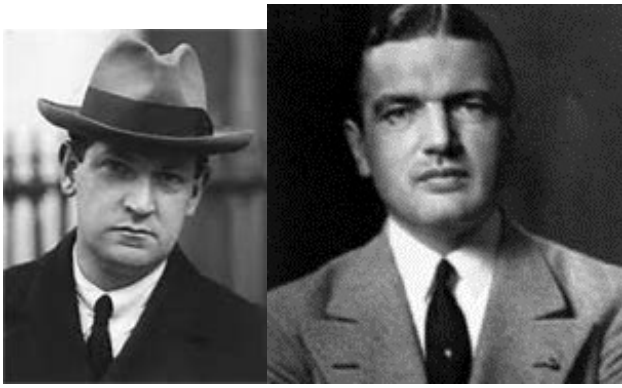


ルートヴィヒ・フェルディナント（1859～1949） バイエルン王子※画像なし  
アルチュール・ランボー（1854～1891） 詩人、奴隷商人  
オスカー・ワイルド（1854～1900） 作家

※ランボーとワイルドは優性遺伝子ブリーダーによって生まれたバイロンの子と考えられる。ランボーとワイルドは異母兄弟である。詩人であるランボーやワイルドは諜報員として、更にお互いの影武者として暗躍した。ランボーは奴隷商人に化け、諜報員として紅海周辺をうろついた。ワイルドの正体を知っていた本願寺は、ホモ容疑でワイルドを投獄し、破産宣告をして破滅させた。

-----

ルートヴィヒ・フェルディナントの子（ルートヴィヒ1世の曾孫）



アーダルベルト・フォン・バイエルン（1886～1970）※画像なし  
マイケル・コリンズ（1890～1922） IRA長官  
ジョン・ヴェルノー・ブーヴィエ2世（1891～1957）

アイルランドの政治・軍事指導者。アイルランド独立運動を指揮し、アイルランド議会の財務大臣、アイルランド共和軍（IRA）の情報部長、アイルランド国軍の司令官、英愛条約交渉においてはアイルランド側の代表の一員などをつとめた。1922年、アイルランド内戦のさなかに暗殺された。一種独特のカリスマ性を持ち、生前から人気の高かったマイケル・コリンズは死後、フィナ・ゲール党およびその支持者たちによって独立運動における「殉教者」として英雄視されるようになる。マイケル・コリンズwikiより

※マイケル・コリンズは、ルートヴィヒ・フェルディナントの子として生まれた。マイケル・コリンズは32歳で亡くなっているが、実は死んだと見せかけて80歳くらいまで生きていたようだ。John Vernou Bouvier 2世は、マイケル・コリンズの異母兄弟であり、コリンズの影武者を務めていたと考えられる。

Bouvierは、コリンズの異母兄弟であり、マクシミリアン2世の庶子のひとりとして影武者を務めていたが、コリンズが亡くなった（芝居だが）のを機に解放された。トランプ大統領やボウソナロ大統領はコリンズの子で、ジャクリーヌはコリンズの影武者を演じていたBouvierの子である。

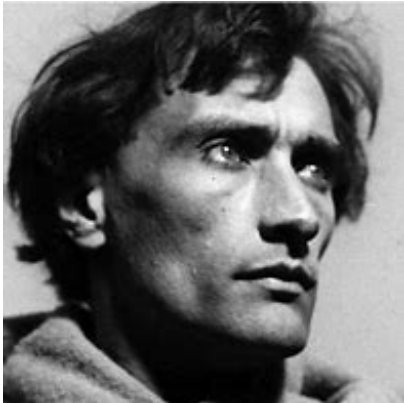
-----  
イギリス国王ジョージ5世の子



エドワード8世（1894～1972） ウィンザー朝第3代イギリス王 在位1936

※母メアリー・オブ・テックは西本願寺門主大谷光尊の妹であり、ウィンザー朝の乗っ取りが目的であった。そのため、正統なイギリス王室の血が濃いエドワード8世は、本願寺の血が濃い弟ジョージ6世とその背後勢力によって追放された。

-----  
イザベラ・フォン・バイエルンの子（ルートヴィヒ1世の曾孫）



フィリベルト（1895～1990）※画像なし

アントナン・アルトー（1896～1948） 作家、俳優

※アルトーは優性遺伝子ブリーダーによって生まれたランボーの子と考えられる。フランスの本願寺はアルトーを徹底的にマークし、大量のカトリック信者に命令して嫌がらせを続けた。それが原因でアルトーは精神病扱いされたが、自分と同じ被害者であるゴッホなどを擁護する著作を発表した。



ボナ・マルゲリータ・ディ・サヴォイア＝ジェノヴァ（1896～1971）

マレーネ・ディートリヒ（1901～1992） 女優



エウジェーニオ（1906～1996）※画像なし

太宰治（1909～1948） 作家

※太宰は、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたアルトーの子と考えられる。父であるアルトーと同じように本願寺の徹底的なマークに悩まされた。罪悪感を刺激して精神的な攻撃をする本願寺のため、「生まれてすみません」という言葉を残している。



三島由紀夫（1925～1970） 作家、俳優、革命家

※三島は、優性遺伝子ブリーダーによって生まれた太宰の子と考えられる。三島は一度だけ太宰に会い、「あなたの文章は嫌いだ」と述べたという。「楯の会」を結成し、日本人の精神的改革を標榜したが本願寺に「無視しろ」と指示された自衛隊員たちに彼の声は届かなかった。頭が良い三島にさえ、本願寺が見えていなかったことは驚きである。

-----

アルフォンス・フォン・バイエルンの子（ルートヴィヒ1世の曾孫）



ヨーゼフ・クレメンス（1902～1990）※画像なし

アーネスト・ヘミングウェイ（1899～1961） 作家

ヘミングウェイによって創作された独特で、シンプルな文体は、冒険的な生活や一般的なイメージとともに、20世紀の文学界と人々のライフスタイルに多大な影響を与えた。ヘミングウェイは、ほとんどの作品を1920年代中期から1950年代中期に書き上げて、1954年にノーベル文学賞を受賞するに至った。wikiより

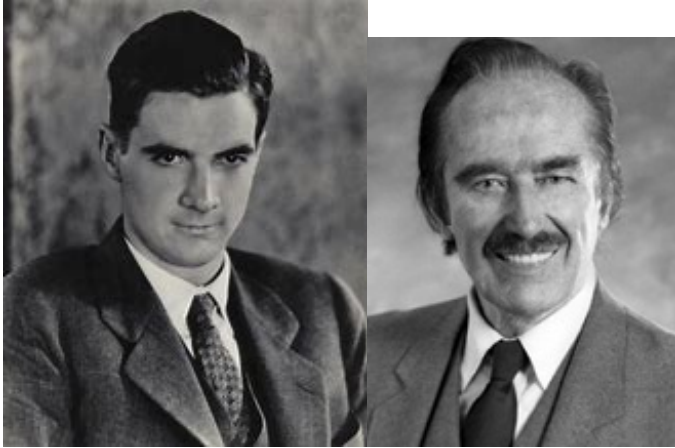


エリーザベト・マリア・アンナ（1913～2005）※画像なし

ウィリアム・S・バロウズ（1914～1997） ビートニク作家

※バロウズは、エリーザベトの影武者として生まれたと考えられる。少年時代は女子の格好をさせられて影武者を務めることもあっただろう。それがゲイになった原因かもしれない。代表作に「ソフトマシーン」「裸のランチ」などがある。

-----  
フェルディナント・フォン・バイエルンの子（ルートヴィヒ1世の玄孫）



ルイス・アルフォンソ（1906～1983）※画像なし

ハワード・ヒューズ（1905～1976） 実業家、富豪、映画監督

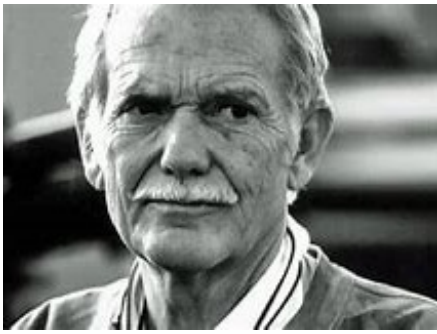
フレッド・トランプ（1905～1999） トランプ大統領父

※ヒューズは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたコリンズの子と考えられる。ヒューズは映画監督として「地獄の天使」などの名作を残しているが、監督としてではなく、その謎の死によって一番知られているだろう。彼の死因は精神疾患ではなく、ネバダでの核実験批判である。

ドイツ系アメリカ人の不動産開発業者・慈善家である。息子に実業家であり第45代アメリカ合衆国大統領であるドナルド・トランプ、娘にアメリカ合衆国連邦裁判所判事のマリアン・トランプ・バリーがいる。

彼はニューヨーク市クイーンズ区では単世帯向け住宅を、東海岸にある主要な合衆国海軍造船所の近くでは職員が住む長屋や庭付きアパート（テラスハウス）を、ニューヨーク市全体では2万7000を超えるアパートを建設・運営した。フレッド・トランプwikiより

-----  
アーネスト・ヘミングウェイの子



ジャック・ヘミングウェイ（1923～2000）※画像なし

サム・ペキンパー（1925～1984） 映画監督

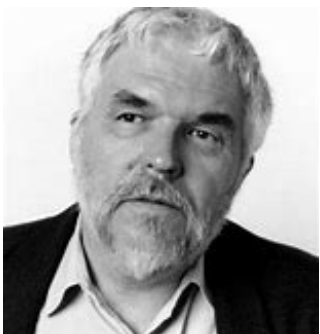
※ペキンパーの正体は、ヘミングウェイの子である。代表作には「ワイルドバンチ」「ガルシアの首」「わらの犬」などがある。



パトリック・ヘミングウェイ（1928）※画像なし

アンドレイ・タルコフスキー（1932～1986） 映画監督

※タルコフスキーの正体は、ヘミングウェイの子である。代表作には「惑星ソラリス」「鏡」「ノスタルジア」「ストーカー」「サクリファイス」などがある。



グレゴリー・ヘミングウェイ（1931～2001）※画像なし

スタン・ブラッケイジ（1933～2003） 映像作家

※ブラッケイジの正体は、ヘミングウェイの子である。文明批判の急先鋒として、ブラッケイジはフィルムの特長である「撮影する」という行為をできるだけ拒否し、フィルムに直接ペイントしたり化学反応による偶然性を利用して作品を作った。代表作には「ドッグスターマン」などがある。

-----  
ハワード・ヒューズの子（優性遺伝子ブリーダー？）



ドナルド・トランプ（1946） アメリカ合衆国第45代大統領 任期2017～現在

第45代アメリカ合衆国大統領。シャドー・バンキング隆盛期にアメリカ合衆国で知られた実業家。シティグループから融資を受け、みずから設立したカジノ・ホテル運営会社トランプ・エンターテインメント・リゾーツを経営。1990年代の事業再建にロスチャイルド、ウィルバー・ロス、そしてフィデリティ・インベストメンツを参加させた。政治家として2000年の大統領選挙に出馬したが一時撤退した。2017年1月20日、第45代アメリカ合衆国大統領に就任。不動産会社トランプ・オーガナイゼーションの会長兼社長も務めている。2018年上半期にドッド・フランク法を緩和した。wikiより



ジャイール・ボウソナロ（1955） 第38代ブラジル大統領 任期2018～現在

サンパウロ州グリセーリオ出身。思想は極右とされ、「ブラジルのトランプ」または「ブラジルのドゥテルテ」と呼ばれている。他にトロピカル・トランプ（熱帯のトランプ）の呼び名も



ある。2018年現在、進歩党（PP）によって選出されたブラジルの下院議員で第7期目を務めている。 wikiより

-----  
ジョン・ヴェルノー・ブーヴィエ2世の子（ジャクリーヌ以外は優性遺伝子ブリーダー？）



フェデリコ・フェリーニ（1920～1993） 映画監督

※フェリーニは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたブーヴィエの子と考えられる。監督作には「道」「甘い夜」「サテリコン」「道化師」「フェリーニのローマ」などがある。



ジュディ・ガーランド（1922～1969） 女優

シモーヌ・シニョレ（1921～1985） 女優

※2人は、優性遺伝子ブリーダーに世って儲けられたブーヴィエとマレーネ・ディートリヒの子と考えられる。ジュディはライザ・ミネリを儲け、シモーヌは優性遺伝子ブリーダーによってロミナ・シュナイダーを儲けている。



ジャクリーヌ・ケネディ・オナシス（1929～1994） ジョン・F・ケネディ妻  
シャーリー・テンプル（1928～2014） 女優  
マリリン・モンロー（1926～1962） 女優

1961年1月20日にアメリカ大統領に就任したジョン・F・ケネディは43歳であり、ジャクリーンも31歳でファーストレディとなった。しかし、わずか2年10カ月で夫が暗殺されて彼女はホワイトハウスを去った。そして5年後の1968年秋にギリシャの大富豪アリストテレス・オナシスと再婚し世界を驚かせた。ジャクリーヌ・ケネディ・オナシスwikiより

※ジャクリーヌはブーヴィエと母の子だが、シャーリーは優性遺伝子ブリーダーによって儲けられたブーヴィエとマレーネ・ディートリヒの子と考えられる。マリリン・モンローはシャーリー・テンプル本人だったと考えられる。シャーリーは結婚と同時に引退同然となるが、じつはマリリンに変身してハリウッドに再登場した。子役時代とは異なるセクシーな役柄に挑戦したかったようだ。ただ、ケネディ大統領が暗殺されると危険を察し、死んだことにしてシャーリーに戻り、88歳まで生きた。



シド・バレット（1946～2006） ミュージシャン、元ピンクフロイド

※シドは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたブーヴィエの子と考えられる。ピンク・フロイドのリーダーとして稀有な才能を発揮したが、本願寺にマークされていたため、精神的な破綻をきたし、早々に引退した。本願寺のイヤガラセにはバンドメンバーのロジャー・ウォーターズ

も加わっていた。彼はピンク・フロイドの楽曲のいくつかで、暗にシドをディスっている。そのためか、ロジャーは80年代後半に他のメンバーに追い出されてしまい、ピンク・フロイドの名前の使用権を巡って裁判沙汰を起こしている。

アルバム「原子心母」の1曲「もしも」が代表的な例である。「もしもぼくがキチガイになってもぼくを苦しめないでくれ」「もしもぼくが良い人間であるなら友達との間に距離があることがわかるだろう」「もしもぼくがキチガイになっても君はまたぼくを遊び仲間に入れてくれるだろうか」などと歌っている。



ペン・ジレット/右（1955） ペン&テラー

※ペン・ジレットは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたブーヴィエの子と考えられる。ジレットはコメディアンであり、ケネディの子であるテラーと共に「ペン&テラー」を結成した。手品のタネ証しを芸風としている。出演映画にはアーサー・ペン監督による傑作ギャグ映画「死ぬのはオレたちだ!？」がある。また、ジレットは、ケネディの子ジャド・フェアが組んだアヴァンギャルド・ロックバンド「ハーフ・ジャパニーズ」の後援者としても知られている。ただ、彼が家族であるはずのトランプ大統領を批判しているのが解せないところだ。ジレットの父と考えられるブーヴィエ2世は、トランプ大統領の祖父と考えられるマイケル・コリンズの影武者をやっていた。両者とも、バイエルン王マクシミリアン2世の子孫である。

-----

イングランド国王エドワード8世の子（優性遺伝子ブリーダーによる）



ダーク・ボガート（1921～1999）俳優

※ダーク・ボガードは、ハロルド・ピンター脚本、ジョセフ・ロージー監督の「召使」「できごと」に出演し、一連のルキノ・ヴィスコンティ監督の作品「地獄に堕ちた勇者たち」「ベニスに死す」で大きな印象を残した。



スティーブ・ハケット（1955） ミュージシャン、元ジェネシス

※初期ジェネシスの音楽は貴族的と呼ばれたが、スティーブのギターの貢献大だと考えられる。が、それもそのはず。彼が正統なイギリス王室の血筋だったからだ。

オスマントルコ皇帝スレイマン1世の一族①～宇佐美定満、蘆名盛氏、柴田勝家、上杉謙信、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、徳川家光、伊達政宗、水戸光圀、乾隆帝

---



スレイマン1世（1494～1566） オスマントルコ帝国第10代皇帝 在位1520～1566

宇佐美定満（1489～1564） 上杉謙信家臣

長尾為景（1486～1543） 米沢藩初代藩主、上杉謙信、長尾晴景父※画像なし

46年の長期にわたる在位の中で13回もの対外遠征を行い、数多くの軍事的成功を収めてオスマン帝国を最盛期に導いた。英語では「壮麗帝（the Magnificent）」のあだ名で呼ばれ、日本ではしばしばスレイマン大帝と称される。トルコでは法典を編纂し帝国の制度を整備したことから「立法帝（カーヌーニー）」のあだ名で知られている。スレイマン1世wikiより

天文17年（1548年）に長尾景虎（上杉謙信）が家督を継ぐと定満はこれに従い、景虎と対立した上田長尾家の当主長尾政景に備えて要害に入る。天文18年(1549年)6月、景虎の家臣平子孫太郎に宛てた書状によると、定満は政景側の計略や脅迫を受けており、まだ自身に力が無く、家臣も士気が低下しているため、自分達だけに備えを任せれば後悔するであろうことを訴えている。宇佐美定満wikiより

※スレイマン1世は日本で邪教が蔓延していることを聞き、この邪教を退治すべく、4人の息子たちとともに日本に向かった。宇佐美の由来はオスマンである。オスマン＝オスマ＝宇佐美となる。また、定満の由来はスレイマンである。スレイマン＝スデイマン＝サダマン＝定満となる。



長尾晴景（1509～1553）※画像なし

織田信秀（1511～1552） 織田信長父※画像なし

大友義鑑（1502～1550） 大友宗麟父※画像なし

蒲生定秀（1508～1579）

※オスマントルコ皇帝スレイマン1世の子である長尾晴景色は、特筆すべきこととしては織田信秀を演じながら織田信長を儲けたことが挙げられる。大友宗麟の正体は異母兄弟のジハンギルだが、ジハンギルは大友義鑑の子である大友宗麟として大友家を継承した。大友の名の由来はオットマン（オスマン）である。オットマン=オットマ=大友となる。

-----  
オスマントルコ皇帝スレイマン1世の子



メフメト（1521～1543）※画像なし

蘆名盛氏（1521～1580） 蘆名氏第16代当主

有馬義貞（1521～1577） 有馬晴信父※画像なし

木下弥右衛門（?～1543） 豊臣秀吉父※画像なし  
高山右近（1522～1615）  
千利休（1522～1591） 天下三宗匠  
今井宗久（?～1593） 天下三宗匠※画像なし  
津田宗及（?～1591） 天下三宗匠※画像なし  
古田重定（?～1598） 古田織部父※画像なし  
黒田職隆（1524～1585） 黒田孝高父※画像なし  
稲葉重通（?～1598） 牧村利貞父※画像なし

天文19年（1550年）からは本格的に仙道（中通り）への進出を開始して田村隆顕と戦うが、田村氏を援助する常陸の佐竹氏の妨害もあって容易には進まなかったため、佐竹氏と敵対する相模の北条氏康や、甲斐の武田信玄と同盟して佐竹氏に対抗した。

また、内政面では金山開発に力を入れたり、築田氏を商人司に起用することで流通支配の強化を図った。永禄4年（1561年）、庶兄・氏方の謀叛を鎮圧する。この年、盛氏は家督を嫡男・盛興に譲って、大沼郡岩崎城に隠居し、剃髪して止々斎と号した。しかし隠居後も政治・軍事の実権を掌握し、引き続き家中の統制にあたった。 蘆名盛氏wikiより

※父スレイマン1世と共にトルコから日本にやってきたメフメトは八面六臂の活躍をした。彼は、異母兄弟の庶子を影武者として投入し、たくさんの歴史上の有力人物を演じた。特筆すべきこととしては、メフメトは有馬義貞を演じながら有馬晴信を儲け、黒田職高を演じながら黒田孝高を儲け、木下弥右衛門を演じながら全国統一を果たした豊臣秀吉を儲けている。また、メフメトは千利休や高山右近をも同時に演じていた。

千利休の姓は里見であるが、これはソドムが由来である。利休七哲の瀬田正忠や蒲生氏郷の名もソドムとゴモラに由来している。つまり、彼らは天狗と呼ばれた宇宙人（科学の種族トバルカイン）と交流があったようだ。悪魔（仏教）が横行する日本の民が置かれた惨状を見ていられなかった宇宙人（科学の種族トバルカイン）は、地上に降りて里見氏を名乗り、邪教に対する蜂起の機会を狙っていた。そこにメフメトが現れ、意気投合した彼らは、邪教に対抗する切り札として「茶道」を編み出した。しかし、狡猾な本願寺に正体を見破られた利休は、秀吉の計らいで処刑されたことにされて宇宙人の仲間になったと考えられる。つまり、ケムトレイルを撒くフェイクプレーンには利休の一族が搭乗している。



アブドゥラー（1522～1526）※画像なし

柴田勝家（1522～1583）

若いころから織田信秀の家臣として仕え、尾張国愛知郡下社村を領したという。地位はわからないが織田信長の家督継承の頃には織田家の重鎮であった。天文20年（1551年）に信秀が死去すると、子の織田信行（信勝）に家老として仕えた。wikiより

※スレイマン1世の子アブドゥラーは柴田勝家を演じ、異母兄弟である織田信秀や、その子である織田信長をサポートした。柴田勝家は本願寺にやられたが、一族郎党が皆殺しにされたことにして故地であるトルコに戻ってシャブタイ派を築き、更にメキシコの革命家サパタを生んでいる。



バヤズィト（1525～1561）※画像なし

滝川一益（1525～1586）

父は近江国甲賀郡の国人・滝川一勝もしくは滝川資清といわれているが、この2人は同一人物説もあり、どのような人物であったかは定説を見ない。また、兄として高安範勝が挙げられることもあるが、一族（父の従兄弟）とする系譜もある。また、池田恒興と同族（従兄弟）とされる場合



もある。更に中村一氏は甲賀二十一家の一つ・滝氏の出身ともいわれ一益の同族とする説もある。また、忍者であったという説もあるが、これも明確な根拠があるものではない。wikiより



ジハンギル（1531～1553）※画像なし

上杉謙信（1530～1578）

大友宗麟（1530～1587）

海外貿易による経済力と優れた武将陣、巧みな外交により版図を拡げ、大内氏や毛利氏を初めとする土豪・守護大名などの勢力が錯綜する戦国時代の北九州東部を平定した。

当初は禅宗に帰依していたが後にキリスト教への関心を強め、ついに自ら洗礼を受けた。最盛期には九州六ヶ国を支配して版図を拡げた。しかし「キリシタン王国」建設のため各地の有力寺社（霊仙寺（現英彦山神宮）、羅漢寺など）を徹底的に攻撃したため、僧兵、国人領主の激しい抵抗を招き、さらに島津義久に敗れ、晩年には豊臣秀吉傘下の一大名に甘んじて豊後一国までに衰退した。大友宗麟wikiより

※オスマントルコ皇帝スレイマン1世の子ジハンギルは上杉謙信と大友宗麟を演じた。2人は同一人物である。キリシタン大名である宗麟は、まさに上杉謙信が死去した年（1578年）に洗礼を受けている点が興味深い。宗麟が自社仏閣を破壊したのも、忌まわしき本願寺の恐ろしさを思い知ったからだろう。九州にキリシタンによる独立国を建設しようと試みた。すべては日本から邪教を追放するための策であった。

-----  
織田信秀（長尾晴景）の子



織田信長（1534～1582）

蒲生賢秀（1534～1584） ※画像なし

細川幽斎（1534～1610）

一般に、信長の性格は、極めて残虐で、また、常人とは異なる感性を持ち、家臣に対して酷薄であったと言われている。一方、信長は世間の評判を非常に重視し、家臣たちの意見にも耳を傾けていたという異論も存在する。なお、信長は武芸の鍛錬に励み、趣味として鷹狩り・茶の湯・相撲などを愛好した。南蛮などの異国に興味を持っていたとも言われる。織田信長wikiより

※霸王織田信長はオスマントルコ皇帝スレイマン1世の孫である。奇抜な発想と常人が思いもよらない戦術を駆使した信長は、破竹の勢いで日本全国を進軍した。また、織田信長は祖父スレイマン1世と同様に仏教を邪教と位置づけ、日本の国土から消滅させることを考えていた。しかし、偉大な織田信長は、本願寺門主証如の一族である明智光秀の謀反により討ち取られてしまう。歴史上では確かにそういうことになってはいるが、じつは、織田信長は「本能寺の変」のあとも生き延び、その後を細川幽斎として生きた。つまり、「本能寺の変」のあとも28年も生きていた。さすがに稀代の英雄である。易々と本願寺如きにやられるような器ではない。細川は、本能寺の変直後に剃髪し、幽斎に改名している。死んだことにして潜伏を決めた信長としては、幽斎の「幽」は、幽霊を意味しているのだろう。笑

細川幽斎に収まった信長は戦いに疲れたのか、歌道に精進した。ただ、偉大な信長の力を借りたい小野木重勝や前田茂勝らは細川幽斎の居城を包囲し、幽斎を戦いに引き釣り出そうとした。だが、1600年当時の信長（幽斎）は既に66歳である。老齢もあるが、本願寺の質VS量の戦いに疲れた信長は家族が懇願する帝王の復活を承知しなかったようだ。

それにしても筆者は当初、オスマントルコ皇帝スレイマン大帝の遺伝子を受け継いでいた偉大な信長でさえ、卑怯な本願寺にやられたと信じていた。確かに、実力でなら織田信長が本願寺に負けるはずはない。そしてその通り、今、信長がうまく逃げ出して、細川幽斎として生き延びていたことも知った。ただ、さすがの信長も「忍者を騙す」という顕如、教如の新機軸には、してやられたということになる。戦国時代は見た通りではなく、斯様に深いものである。



織田信包（1543～1614） 丹波柏原藩初代藩主

徳川家康（1542～1616） 江戸幕府初代征夷大將軍

服部半蔵正成（1542～1596）

信長没後に勢力を伸張した豊臣秀吉と小牧・長久手の戦いで対峙するが秀吉に臣従。小田原征伐後は後北条氏の旧領関東への転封を命ぜられ豊臣政権下で最大の領地を得る。秀吉晩年には五大老に列せられ大老筆頭となる。

秀吉没後の慶長5年（1600年）に関ヶ原の戦いにおいて西軍に勝利。慶長8年（1603年）に征夷大將軍に任命され武蔵国江戸に幕府を開く。慶長20年（1615年）に豊臣氏を滅亡させ日本全国を支配する体制を確立。15世紀後半に起こった応仁の乱から100年以上続いた戦乱の時代（戦国時代・安土桃山時代）が終結。家康がその礎を築いた江戸幕府を中心とする統治体制は後に幕藩体制と称され264年間続く江戸時代を画した。徳川家康 w i k i より

徳川家康に仕えた、伊賀同心の支配役。いわゆる「服部半蔵」として世間でよく知られるのは彼の事である。だがあくまで伊賀同心は配下の一部門であり、自身は甲冑を着て足軽を率いた武士である。名は弥太郎、官位は石見守。慶長元年11月14日没。法号は専称院殿安誉西念大居士。服部半蔵正成 w i k i より

※徳川家康の正体は、織田信秀の子織田信包だった。つまり、家康は織田信長と兄弟だった。また、服部半蔵も徳川家康と同一人物だったと考えられる。三方ヶ原の戦いで大便を漏らした家康は影武者だったと考えられる。本物は服部半蔵として諜報活動に従事していた。家康を演じていた半蔵だが、慶長元年（1596年）5月8日、家康が秀吉の推挙により内大臣に任ぜられると、これを機に半蔵を死んだことにし、家康一本で生きることにした。

-----  
木下弥右衛門（メフメト）の子



豊臣秀吉（1537～1598）

大村純忠（1538～1587）

尾張国愛知郡中村郷の下層民の家に生まれたとされる。当初、今川家に仕えるも出奔した後に織田信長に仕官し、次第に頭角を現した。信長が本能寺の変で明智光秀に討たれると「中国大返し」により京へと戻り山崎の戦いで光秀を破った後、信長の孫・三法師を擁して織田家内部の勢力争いに勝ち、信長の後継の地位を得た。大坂城を築き、関白・太政大臣に就任し、朝廷から豊臣の姓を賜り、日本全国の大名を臣従させて天下統一を果たした。

天下統一後は太閤検地や刀狩令、惣無事令、石高制などの全国に及ぶ多くの政策で国内の統合を進めた。理由は諸説あるが明の征服を決意して朝鮮に出兵した文禄・慶長の役の最中に、嗣子の秀頼を徳川家康ら五大老に託して病没した。秀吉の死後に台頭した徳川家康が関ヶ原の戦いで勝利して天下を掌握し、豊臣家は凋落。慶長19年（1614年）から同20年（1615年）の大坂の陣で豊臣家は江戸幕府に滅ぼされた。豊臣秀吉wikiより

永禄6年（1563年）、宣教師からキリスト教について学んだ後、純忠は家臣とともにコスメ・デ・トーレス神父から洗礼を受け、領民にもキリスト教信仰を奨励した結果、大村領内では最盛期のキリスト者数は6万人を越え、日本全国の信者の約半数が大村領内にいた時期もあったとされる。純忠の入信についてはポルトガル船のもたらす利益目当てという見方が根強いが、記録によれば彼自身は熱心な信徒で、受洗後は妻以外の女性と関係を持たず、死にいたるまで忠実なキリスト教徒であろうと努力していたことも事実である。

また、横瀬浦を開港した際も、仏教徒の居住の禁止や、貿易目的の商人に10年間税金を免除するなどの優遇を行っている。しかし、純忠の信仰は過激なもので、領内の寺社を破壊し、先祖の墓所も打ち壊した。また、領民にもキリスト教の信仰を強いて僧侶や神官を殺害、改宗しない領民が殺害されたり土地を追われるなどの事件が相次ぎ、家臣や領民の反発を招くことになる。大村純忠wikiより

※足軽の子、農民出身だなどといわれた正体不明の豊臣秀吉の正体は、じつはオスマントルコ皇帝スレイマン1世の孫であり、メフメト（木下弥右衛門）の子である。つまり、秀吉は信長や家康とは親戚（はどこ？）である。しかし、偉大な秀吉も本願寺の謀略に翻弄された。

本願寺勢力は秀吉の名を借りて朝鮮半島、明に出撃したが、秀吉はこれを止めることさえできなかった。秀吉にとっては実に不本意なことだったことだろう。オスマントルコの一族はパンジ

ャブに拠点を持っていたため、秀吉は一時、「羽柴」を称した。羽柴の由来はパンジャブである。秀吉は同時に大村純忠を演じていたようだ。



豊臣秀長（1540～1591）※画像なし

島左近（1540～1600）

前田利家（1539～1599）

石田正継（?～1600）※画像なし

信長が本能寺の変により明智光秀に討たれると、はじめ柴田勝家に付くが、後に羽柴秀吉に臣従した。以後、豊臣家の宿老として秀吉の天下平定事業に従軍し、加賀国・越中国を与えられ加賀藩百万石の礎を築く。また、豊臣政権五大老に列せられ、豊臣秀頼の傅役（後見人）を任じられる。秀吉の死後、対立が顕在化する武断派と文治派の争いに仲裁役として働き、覇権奪取のため横行する徳川家康の牽制に尽力するが、秀吉の死の8ヶ月後に病死した。前田利家w i k iより

石田三成から、左近に仕官の要請があった時、それまでも多くの要請を断ってきた左近はやはり断るが、三成の説得により仕官を受け入れ、2万石の俸禄で召し抱えられた。これは、当時の三成の禄高4万石のうちの半分を与えられるという破格の待遇であり、『君臣禄を分かつ』の逸話として伝えられている（『常山紀談』）。もっとも、島左近が石田三成に仕えたのは、三成が佐和山19万石の城主になってからという説もあるが、それでも破格の待遇であったことには違いない。屋敷は佐和山城下湖水寄りに与えられた。島左近w i k iより

※豊臣秀吉の弟である豊臣秀長は、島右近、前田利家、石田正継などを演じたが、前田利家を演じていた際には、当然の如く兄である秀吉の側に付き、サポートしていた。一方では、豊臣秀長は島右近として石田光成に付いているのだが、石田光成は、秀長が石田正継を演じていた際に儲けた子である。彼は、兄をサポートし、子をサポートする人生を生きた。更に、秀長は僧侶である前田玄以をも演じていた。彼は僧侶でありながらキリシタンに理解を示し、キリシタン弾圧の際にはキリシタンを匿っている。また、彼は仏教の僧侶でありながら、逆に、仏教の僧侶による不行状を非難していた。

---

蒲生賢秀（織田信長）の子



蒲生氏郷（1556～1596） 利休七哲

誠仁親王（1552～1586） 後陽成天皇父

元龜元年（1570年）4月、氏郷は父・賢秀と共に柴田勝家の与力となり一千余騎で参陣し、朝倉氏を攻め、同年に当知行が安堵され（『隠心帖』）、5,510石の領地が加増された（『蒲生文武記』『氏郷記』）。その後、同年7月の姉川の戦い、元龜2年（1571年）の第一次伊勢長島攻め、元龜4年（1573年）4月の鯉江城攻め、天正元年（7月28日に元龜から天正に改元）8月の朝倉攻めと小谷城攻め、天正2年（1574年）の第二次伊勢長島攻め、天正3年（1575年）の長篠の戦い、天正6年（1578年）からの有岡城の戦い、天正9年（1581年）の第二次天正伊賀の乱（比自山城の戦い）などに従軍して、武功を挙げている。wikiより

---

徳川家康の子



松平信康（1559～1579）※画像なし

福島正則（1561～1624）

加藤清正（1562～1611）

母が豊臣秀吉の叔母（大政所の姉妹）だったため、その縁から幼少より小姓として秀吉に仕え、天正6年（1578年）に播磨三木城の攻撃で初陣を飾る。始めの禄高は200石であった。福島正則 [wiki](#)より

豊臣秀吉の子飼いの家臣で、賤ヶ岳の七本槍の一人。秀吉に従って各地を転戦して武功を挙げ、肥後北半国の大名となる。秀吉没後は徳川家康に近づき、関ヶ原の戦いでは東軍に荷担して活躍し、肥後国一国と豊後国の一部を与えられて熊本藩主になった。加藤清正 [wiki](#)より

※徳川家康が、子である信康に自害を迫ったことは不条理で理解しがたいこととして良く知られているが、この事件は、実際には敵である本願寺をターゲットにして作られたフェイクニュースだった可能性が高い。つまり、信康は死んだことにして潜伏し、別人として生きていた。彼は父家康の命で自害したことにし、その後の44年間を加藤清正、福島正則として生きたのだ。徳川信康は福島正則時代、加藤清正時代を通して豊臣秀吉に付いたが、加藤清正を演じていた信康が、秀吉が亡くなった後に父である徳川家康の側に付くのは当然のことだった。

-----  
細川幽斎（織田信長）の子



細川忠興（1563～1646） 利休七哲

小野木重勝（1563～1600）※画像なし

井伊直政（1561～1602） 徳川四天王、徳川十六神将、徳川三傑

足利義昭、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と、時の有力者に仕えて、現在まで続く肥後細川家の基礎を築いた。また父・幽斎と同じく、教養人・茶人（細川三斎（さんさい））としても有名で、利休七哲の一人に数えられる。茶道の流派三斎流の開祖である。 [wiki](#)より

※細川幽斎（織田信長）の子である細川忠興は小野木重勝に変身して、豊臣秀長（石田正継）の子である石田光成を頭領に、父である偉大な織田信長を再び指揮者として迎えたいという意向を示していた。まずそのために、彼らは本願寺門主証如の一族である光秀の娘ガラシャを裏切り者のスパイとして見破り、始末した。そして幽斎の居城を包囲し、何とか父信長を戦場に取り戻そうと説得を試みていたようだ。しかし、失敗すると偉大な信長の復活を諦めた忠興は、変わり身でしかなかった小野木と直政を死んだことにし、忠興として生きた。

---

## 徳川家康の子



徳川頼房（1603～1661） 常陸水戸藩初代藩主※画像なし

徳川家光（1604～1651） 江戸幕府第3代征夷大將軍

元和9年（1623年）には死去した内藤清次の後任として酒井忠世・酒井忠勝が年寄として付けられた。同年3月5日には、將軍家世子として朝廷より右近衛大将に任じられる。同年6月には父・秀忠とともに上洛し、7月27日に伏見城で將軍宣下を受け、正二位内大臣となる。後水尾天皇や入内した妹・和子とも対面している。江戸へ戻ると、秀忠は江戸城西の丸に隠居し、家光は本丸へ移る。徳川家光wikiより

※將軍は少年愛者が多かったため、大勢の大奥の女たちは各々が好きな男の子どもを産んだ。支配層は自分の血筋ではなく、家が続くことを願う。そのため、いい女が選んだ男の子供なら何でも良いと考えている。しかし、それが後々に大きな分裂、お家断絶にまで発展することがある。じつは、秀忠は家康の子ではない。一方、秀忠の子と言われている家光は、じつは家康の子である。支配層の家族は非常に複雑に入り組み、絡み合っている。

例えば、家光は同母弟といわれている忠長を自刃に追い込んでいる。これは歴史の分野では謎扱いされている。だが、これは2人が異父兄弟、異母兄弟である証に過ぎない。つまり、2人は徳川を名乗りながらも、実際には全くの赤の他人なのだ。

---



## 石田正継（豊臣秀長）の子



石田三成（1560～1600）

豊臣政権の奉行として活動し、五奉行のうちの一人名となる。豊臣秀吉の死後、徳川家康打倒のために決起して、毛利輝元ら諸大名とともに西軍を組織したが、関ヶ原の戦いにおいて敗れ、京都六条河原で処刑された。wikiより

※石田三成は豊臣秀長が演じていた石田正継の子であるため、実質、豊臣秀吉の甥である。三成は、本願寺にそそのかされた家康の子信康の影武者が演じていた福島正則、加藤清正と対立しながら、異母兄弟である秀頼を何とか立てようと奔走したが、知らなかったとはいえ、迂闊にも東本願寺門主実如の一族に属する毛利輝元と組んでしまい、仲間を演じていた輝元に誤誘導された上、数で圧倒されたために敗北した。

---

## 織田信長の子





羽柴秀勝（1569～1586） 織田信長の子  
真田幸村（1567～1615）  
伊達政宗（1567～1636）  
後陽成天皇（1571～1617） 第107代天皇

豊臣方の武将として大坂夏の陣において徳川家康の本陣まで攻め込んだ勇敢な活躍が、江戸幕府や諸大名家の各史料に記録され、「日本一の兵（ひのもといちのつわもの）」と評されるなどした。後世、そこから軍記物、講談、草双紙（絵本）などが創作され、さらに明治-大正期に立川文庫の講談文庫本が幅広く読まれると、真田十勇士を従えて宿敵である家康に果敢に挑む英雄的武将というイメージで、庶民にも広く知られる存在となった。真田幸村wikiより

政宗は仙台藩とエスパーニャとの通商（太平洋貿易）を企図し、慶長18年（1613年）、仙台領内において、エスパーニャ国王・フェリペ3世の使節セバスティアン・ビスカイノの協力によってガレオン船・サン・ファン・パウティスタ号を建造した。政宗は家康の承認を得ると、ルイス・ソテロを外交使節に任命し、家臣・支倉常長ら一行180余人をヌエバ・エスパーニャ（メキシコ）、エスパーニャ、およびローマへ派遣した（慶長遣欧使節）。伊達政宗wikiより

※信長の子である羽柴秀勝は真田幸村や伊達政宗を演じていた。秀勝が伊達正宗を演じていた際は、父の織田信長に良く似て、分かりやすく豪快であった。独眼龍と呼ばれた正宗だが、一方で同時に演じていた真田幸村の肖像画を見て分かる通り、両目は健在であった。正宗の眼帯は、自分の正体を隠すためのフェイクだった。信長の子である秀勝は後陽成天皇も演じていたが、後陽成天皇は静かに余生を送っている信長（幽斎）を再び戦場に引き釣り出そうとしている光成たちを退け、父である信長を助けるために、両軍に勅命を発して開城させた。

-----



豊臣秀頼（1593～1615） 豊臣秀吉子  
後水尾天皇（1596～1680） 第108代天皇

※秀吉の子として生まれた秀頼は、22歳で死んだことにして潜伏し、その実、その後の65年間を後水尾天皇として生きた。

-----  
徳川頼房（徳川家光）の子



若宮（1628） 第三皇子※画像なし  
水戸光圀（1628～1700）

藩主時代には寺社改革や殉死の禁止、快風丸建造による蝦夷地（後の石狩国）の探検などを行った。また、後に『大日本史』と呼ばれる修史事業に着手し、古典研究や文化財の保存活動など数々の文化事業を行った。さらに、徳川一門の長老として、徳川綱吉期には幕政にも影響力を持った。wikiより

※後水尾天皇の子として生まれた若宮は、早世したことにして潜伏して成長し、長じて水戸光圀公となった。

-----

## 徳川光圀の子



松平頼常（1652～1704）

康熙帝（1654～1722） 清皇帝

延宝元年（1673年）2月19日、養父・頼重の隠居により高松藩主となった。藩政においては、元禄8年（1695年）に厳しい儉約令を定めて藩財政を立て直したり、元禄9年（1696年）に法令を刷新するなどした。また、元禄16年（1703年）には講堂を建設して儒学者の松下見林を招聘している。宝永元年（1704年）2月に隠居し、養子の頼豊（頼重の孫）に家督を譲るが同年4月3日に死去した。享年53（満51歳没）。wikiより

西洋文化を積極的に取り入れ、唐の太宗とともに、中国歴代最高の名君とされる。その事実は歴代皇帝の中で聖の文字を含む廟号がこの康熙帝と、宋と澶淵の盟を締結させた遼最盛期の皇帝聖宗の2人にしか与えられていないことから窺える。また祖の文字も、通常は漢の高祖（太祖高皇帝）劉邦など、王朝の始祖あるいは再建者に贈られる廟号であるが、康熙帝は4代目であるにもかかわらず太祖・世祖に続いて3番目に贈られている。wikiより

※愛新覚羅家は蘆名盛興が作った家である。ここに徳川家光の血統が加わった。蘆名氏も徳川氏も滝川一益の一族であるため、愛新覚羅家は光圀の一行を喜んで迎え入れた。

-----  
康熙帝の子



乾隆帝（1711～1799） 清第6代皇帝 在位1735～1796

竹内敬持（1712～1768） 宝暦事件

ハイダル・アリー（1720～1782） マイソール王国皇帝 在位1761～1782

雍正帝と側妃の熹貴妃ニオフル氏（孝聖憲皇后、満州正黄旗出身）との間の子（第4子）として生まれる。祖父康熙帝に幼い頃からその賢明さを愛され、生まれつきの皇帝になる人物と目されており、太子密建を経て即位した。

質素であった祖父、父とは違い派手好みの性格であった。父の死去後、25歳で即位すると父雍正帝の時代に助命された曾静を張熙とともに逮捕し凌遲刑に処して、その一族も処刑するなどその存在感を示した。乾隆帝 w i k i より

1728年（享保13年）頃上京して徳大寺家に仕え、山崎闇斎門下の松岡仲良・玉木正英に師事して、儒学・垂加神道を学んだ。家塾を開いて、若い公家たちに大義名分を重んじる垂加神道の教義を教授したことから、1758年（宝暦8年）の宝暦事件では、中心人物として重追放の処分を受けて京都を追放された。その後1767年（明和4年）山県大弐らによる明和事件の際、関与を疑われて八丈島に流罪となり、送られる途中に三宅島で病没した。竹内敬持 w i k i より

18世紀後半、マイソール王国にヒンドゥー王朝のオデヤ朝に代わるイスラーム政権マイソール・スルターン朝を樹立し、王国を南インド一帯にまたがる大国とした。そのため、インドを植民地化しようとしていたイギリス勢力と衝突し、第一次マイソール戦争、第二次マイソール戦争で激しく争ったが、第二次戦争のさなか死亡した。ハイダル・アリー w i k i より

※徳川家光の子孫である乾隆帝は、日本に潜入して竹内敬持を名乗り、天皇制を破壊すべく「宝暦事件」を起こした。これは父の康熙帝（松平頼常）が日本にいた頃から構想を温めていた作戦なのかもしれない。その後、竹内敬持（乾隆帝）は八丈島に流された後、清に帰還した。彼は庶子を投入した影武者部隊を徴用し、日本にいながら同時に清とマイソール王国の皇帝を務めた。

-----

## 乾隆帝の子



嘉慶帝（1760～1820） 清第7代皇帝 在位1796～1820

竹内主計（1763?～1824）

乾隆帝の十五男として生まれる。乾隆60年（1795年）、85歳の乾隆帝から譲位を受けるが、乾隆帝は太上皇となっても実権は手放さなかったため、嘉慶帝は飾り物の皇帝に甘んじた。

乾隆帝が嘉慶4年（1799年）に崩御すると、嘉慶帝は真っ先に乾隆帝が重用していた奸臣和珅を誅殺した。周りの人間全てが和珅のことをろくでもない奸臣であると見抜いていたのに、毫碌した乾隆帝だけは和珅を信任し続けたため、乾隆帝が活着ている間はどうしようもなく、和珅は国家に入るべき歳入のかなりの額を懐に入れていた。和珅から没収した財産は、実に国家の歳入の10～15年分に当たったといわれている。嘉慶帝wikiより

八丈島に流罪となった父と別れ、新潟に逃げ平原家の人別に入り名を変えたとされている。以下約100年、菩提寺の火事により資料が焼失してしまった為詳細不明。『某が天秤を担いで魚を売り歩いていた所へ、3歳位の子供(主計?)を連れた塾生と思われる人から「この子供を頼む」と言われ、子供とかなりの金を預けられ、その足で四ツ郷屋へ走った』とのこと。竹内主計wikiより

※竹内敬持（乾隆帝）が八丈島に流された際、平原家に養子に入ったが、それ以降の記録は菩提寺が焼けたために残っていないという。タクシ（チュクチ）を由来に竹内を名乗っていた嘉慶帝は、竹内、武内、武知、武智、武市、高市、田口、出口などの新しい祖となった。その後、彼は本土に帰還して嘉慶帝として中国皇帝を務めた。或いは、庶子が嘉慶帝の影武者を演じ、嘉慶帝自身はずっと日本にいたかもしれない。

---

伊達政宗の玄孫伊達吉村の子



伊達宗村（17??～17??）

初め久村（ひさむら）と名乗っていたが、のちに第8代将軍・徳川吉宗から偏諱を受けて宗村と改名し、吉宗の跡を継いで紀伊藩主となっていた徳川宗直の娘・利根姫を正室に迎えた。寛保3年（1743年）、父・吉村から家督を譲られた。父と同じく文学面に優れ、多くの書を残している。また、馬術、槍術、剣術、軍術、砲術にも精通していた智勇兼備の人物であった。wikiより

---

嘉慶帝の子



道光帝（1782～1850） 清第8代皇帝 在位1820～1850

武市正恒（?～1849）

武勇に優れており、皇子時代、天理教徒の反乱（癸酉の変）時に紫禁城に踏み込んだ反乱軍を自ら討伐している。

嘉慶年間よりイギリスからのアヘン密輸が激増し、国内で中毒患者が増加した。皇族の中にもアヘンが蔓延し、健康面でも風紀面でもその害は甚だしいものがあった。またアヘンの輸入増加により、それまで清の大幅な黒字だった対英貿易が赤字に転落し、国内の銀が国外へ流出することで国内の銀相場は高騰した。当時の清では日本の三貨制度と同様に銀貨と銅銭が混用されていたため、物価体系に混乱を来した。例えば徴税は主に銀で行われていたため、銭貨で見ると実質的な増税となった。wikiより

武市家の財力が飛躍的に向上したのは、父・正久の代のときに累代の功績が藩に認められ、「白札」の身分を与えられたことに始まる。また文化年間、仁井田に加え、池、西野地、上野尻に領地を持ち、その総高は五一石余りであったとされ、郷士としては相当程度の富を有していたと考えられる。こうした名家・武市家の総領を父から引き継いだ正恒は、武芸に励んだだけでなく、漢詩や舞踊、絵画に至るまでを習得。身分制度の抑圧との戦い、強烈なエリート意識は、妻テツとの間の長男・武市瑞山（幼名：鹿衛）の後年の人格形成に影響を与えたといえる。wikiより

※道光帝は父や祖父のように日本に潜入した。本国では道光帝を演じることを影武者に指示し、自分は日本で工作活動に従事した。凶悪な白人列強の中国への侵入を防ぐには、まずは日本をめるべきだと考えたのだろう。道光帝はもちろん、庶子を投入して影武者部隊を指揮していた。時と場合により、影武者が道光帝を演じ、或いは武市正恒を演じた。これにより、同時期に別の場所で活動することができた。



オスマントルコ皇帝スレイマン1世の一族②～蘆名盛氏、高山右近、千利休、黒田官兵衛、有馬晴信、宮本武蔵、天草四郎、鄭成功、ヌルハチ、愛新覚羅家



メフメト（1521～1543）※画像なし

蘆名盛氏（1521～1580） 蘆名氏第16代当主

タクシ（？～1583） ヌルハチ父※画像なし

有馬義貞（1521～1577） 有馬晴信父※画像なし

木下弥右衛門（？～1543） 豊臣秀吉父※画像なし

高山右近（1522～1615）

千利休（1522～1591） 天下三宗匠

今井宗久（？～1593） 天下三宗匠※画像なし

津田宗及（？～1591） 天下三宗匠※画像なし

古田重定（？～1598） 古田織部父※画像なし

黒田職隆（1524～1585） 黒田孝高父※画像なし

稲葉重通（？～1598） 牧村利貞父※画像なし

天文19年（1550年）からは本格的に仙道（中通り）への進出を開始して田村隆顕と戦うが、田村氏を援助する常陸の佐竹氏の妨害もあって容易には進まなかったため、佐竹氏と敵対する相模の北条氏康や、甲斐の武田信玄と同盟して佐竹氏に対抗した。

また、内政面では金山開発に力を入れたり、築田氏を商人司に起用することで流通支配の強化を図った。永禄4年（1561年）、庶兄・氏方の謀叛を鎮圧する。この年、盛氏は家督を嫡男・盛興に譲って、大沼郡岩崎城に隠居し、剃髪して止々斎と号した。しかし隠居後も政治・軍事の実権を掌握し、引き続き家中の統制にあたった。蘆名盛氏 wiki より

右近は人徳の人として知られ、多くの大名が彼の影響を受けてキリシタンとなった。たとえば牧村利貞・蒲生氏郷・黒田孝高などがそうである。細川忠興・前田利家は洗礼を受けなかったが、

右近に影響を受けてキリシタンに対して好意的であった。

友照の政策を継いだ右近は、領内の神社仏閣を破壊し神官や僧侶に迫害を加えたため、畿内に存在するにもかかわらず高槻周辺の古い神社仏閣の建物はほとんど残らず、古い仏像の数も少ないという異常な事態に陥った。領内の多くの寺社の記録には「高山右近の軍勢により破壊され、一時衰退した」などの記述がある。反面、『フロイス日本史』などのキリスト教徒側の記述では、あくまで右近は住民や家臣へのキリスト教入信の強制はしなかったが（実際に寺社への所領安堵状も受洗後に出している）、その影響力が絶大であったために、領内の住民のほとんどがキリスト教徒となった。そのため廃寺が増え、寺を打ち壊して教会建設の材料としたと記されている。

高山右近 w i k i より

わび茶（草庵の茶）の完成者として知られ、茶聖とも称せられる。また、今井宗久、津田宗及と共に茶湯の天下三宗匠と称せられ、「利休七哲」に代表される数多くの弟子を抱えた。子孫は茶道の三千家として続いている。天下人・豊臣秀吉の側近という一面もあり、秀吉が旧主・織田信長から継承した「御茶湯御政道」のなかで多くの大名にも影響力をもった。しかしやがて秀吉との関係に不和が生じ、最後は切腹へと追い込まれた。切腹を命ぜらるに至った真相については諸説あって定まっていない。千利休 w i k i より

※父スレイマン1世と共にトルコから日本にやってきたメフメトは八面六臂の活躍をした。彼は、異母兄弟の庶子を影武者として投入し、たくさんの歴史上の有力人物を演じた。特筆すべきこととしては、メフメトは有馬義貞を演じながら有馬晴信を儲け、黒田職高を演じながら黒田孝高を儲け、木下弥右衛門を演じながら全国統一を果たした豊臣秀吉を儲けている。また、メフメトは千利休や高山右近をも同時に演じていた。

千利休の姓は里見であるが、これはソドムが由来である。利休七哲の瀬田正忠や蒲生氏郷の名もソドムとゴモラに由来している。つまり、彼らは天狗と呼ばれた宇宙人（科学の種族トバルカイン）と交流があったようだ。悪魔（仏教）が横行する日本の民が置かれた惨状を見ていられなかった宇宙人（科学の種族トバルカイン）は、地上に降りて里見氏を名乗り、邪教に対する蜂起の機会を狙っていた。そこにメフメトが現れ、意気投合した彼らは、邪教に対抗する切り札として「茶道」を編み出した。しかし、狡猾な本願寺に正体を見破られた利休は、秀吉の計らいで処刑されたことにされて宇宙人の仲間になったと考えられる。つまり、ケムトレイルを撒くフェイクプレーンには利休の一族が搭乗している。

-----

千利休（古田重定、黒田職隆、稲葉重通、有馬義貞、蘆名盛氏）の子



古田織部/古田重然（1543～1615） 利休七哲

戦国時代から江戸時代初期にかけての武将、大名、茶人。千利休とともに茶の湯を大成し、茶器・会席具製作・建築・作庭などにわたって「織部好み」と呼ばれる一大流行を安土桃山時代から江戸時代前期にもたらした。wikiより



黒田孝高/黒田如水/黒田官兵衛（1546～1604） 利休七哲

牧村利貞（1546～1593） 利休七哲

蘆名盛興（1547～1574）

瀬田正忠（1548～1595） 利休七哲

諱（実名）は初め祐隆（すけたか）、孝隆（よしたか）、のち孝高といったが、一般には通称をとった黒田官兵衛（くろだかんべえ）、あるいは剃髪後の号をとった黒田如水（くろだじょすい）として広く知られる。軍事的才能に優れ、豊臣秀吉の側近として仕えて調略や他大名との交渉など、幅広い活躍をする。竹中重治（半兵衛）とともに秀吉の参謀と評され、後世「両兵衛」「二兵衛」と並び称された。黒田孝高wikiより

織田信長の死後、豊臣秀吉に仕えて馬廻となる。天正12年（1584年）、高山右近の勧めを受けてキリシタンとなる。小牧・長久手の戦い、四国征伐、九州平定にも参加した。天正18年（1590年）、秀吉より伊勢国内において2万650石を与えられ岩出城主となる。牧村利貞 wikiより

父と同様に智勇に優れ、永禄4年（1561年）、家督を譲られて蘆名氏の勢力拡大に奔走した。ただし、この一連の家督相続については、働き盛りの盛氏がまだ15歳の盛興に家督を譲り隠居するなど考え難いと疑問を呈されている。また、この時期の蘆名氏は内憂外患を抱え、盛氏もこの後

も蘆名家代表として精力的に活動していることから、隠居は形式だけの口実であったとも考えられる。蘆名盛興w i k iより

出自は不明ながら高山右近の推挙により豊臣秀吉に仕え、天正12年（1584年）に小牧・長久手の戦いに従軍している。秀吉の関白就任に伴い、従五位下掃部頭に叙任。天正15年（1587年）の九州平定、同18年（1590年）の小田原征伐等に従軍。小田原征伐では、徳川家康らが落城させた相模国玉縄城に古田重然と共に入り守備についた。また、天正16年（1588年）に後陽成天皇が聚楽第を行幸した際に、芝山宗綱と共に先導役を務めたとされるが、豊臣秀次と親しく、文禄4年(1595年)、秀次の肅清に連座して処刑された。瀬田正忠w i k iより



有馬晴信（1567～1612）

大村喜前（1569～1616）※画像なし

晴信は鍋島直茂の所領となっている旧領三郡を家康に願い出て回復しようとした。これを知った本多正純の家臣であった岡本大八が慶長17年2月28日、晴信に接近した。そのため晴信は、大八に白銀600枚を贈った。しかし、その後、幕府から旧領回復の沙汰がなかったため不審に感じた晴信が正純に詰問したため、幕府は晴信と大八を対決させることとした。晴信は数通の証文を提出し、これに対して大八は全く弁明ができなかった。そして事実を白状したため大八は下獄された。

ところが、大八は3月18日、獄中から、晴信が長崎奉行の長谷川藤広（左兵衛）を殺害しようとする計画を有していると訴えた。そのため幕府は大八を獄から出し、晴信と対決させたところ、大八は晴信の陰謀の詳細を述べた。これに対して、晴信は何ら弁明することができなかったため捕えられた。大八も獄に戻され、江戸に送られ、阿倍川原で火刑に処せられた。そして22日、晴信は甲斐国に流され、5月7日に自害させられた。有馬晴信w i k iより

安土桃山時代から江戸時代初期にかけての大名。肥前国大村藩初代藩主。大村純忠の長男。母は西郷純久の娘。正室は有馬義純の娘。子に大村純頼。官位は従五位下丹後守。嘉前とも表記される。

喜前もドン・サンチョの洗礼名を持つキリシタンであったが、バテレン追放令を受けて領内から宣教師を追放して、朝鮮出兵以来、領内に禁制を布いていた。彼自身は個人的信仰については明言していなかったが、熱狂的な日蓮宗徒であった肥後の大名加藤清正の薦めもあって、あるいは長崎は没収されて天領とされるがこれがジョアン・ロドリゲスの策謀ではないかと疑ったとか、日本人司祭トマス荒木が宣教師は外国侵略の尖兵だなどと讒言して嫌悪するようになったなど、

理由には諸説あるものの、慶長7年（1602年）、ついに公然とキリスト教を捨てて棄教して日蓮宗に改宗した。それに伴って『大村家記』で邪教と名指しされるキリスト教を領内から駆逐すべくキリシタンの厳しい弾圧を始めた。これには妹松東院や純頼（＝当時はキリシタン）は反対したが、後には幕府の禁制となったため従うほかなかった。大村喜前wikiより

※キリシタン大名として名高い高山右近はスレイマン1世の子メフメトが演じていたが、メフメトの子は軒並みキリシタンとなり、茶道を嗜んだ。黒田如水は本願寺に睨まれ、東本願寺門主証如の一族である荒木村重によって1年間幽閉され、不具となった。また、有馬晴信も本願寺に睨まれ、陰謀によって自害させられた。しかし、晴信の子は「島原の乱」を指揮し、邪教の根絶を試みた。

-----  
黒田職隆（蘆名盛氏）の子



黒田利高（1554～1596）

ヌルハチ（1559～1626） 愛新覚羅家

身体的特徴は「体は大きく骨格は太い、声ははっきり澄んでいて、一度聞くと忘れがたい」と評されている。また、歩き方は堂々とし、動作に威厳があり度胸も据わっていたため、若いうちにリーダーとなっても十分の一族の長として風格を備えていた。カリスマ的な性格であり、部下たちはヌルハチを英明剛毅な人物と畏敬した。

ジェチエン部の遠征に出かけた際に突如800人の大軍が現れ、ヌルハチ軍は狼狽したが、ヌルハチと第3人で800人の軍勢に突入して20人あまりを倒し、最終的に敵を敗走させた。ヌルハチwikiより

※黒田如水の子である利高はヌルハチを演じ、破竹の勢いで中国全土を飲み込み、後金～清の礎を築いた。利高の弟たちも、以下のようにヌルハチの弟として知られる人物を軒並み演じていた。生年が全く同じ、或いは、極近いことに注目したい。



黒田利則（1561～1612）

ムルハチ（1561～1620）



黒田直之（1564～1609）

シュルハチ（1564～1611）



黒田長政（1568～1623） 筑前福岡藩初代藩主  
ヤルハチ（1565～1589）



黒田熊之助（1582～1597）※画像なし  
宮本武蔵（1584～1645）  
バヤラ（1582～1624）※画像なし

慶長2年（1597年）7月、豊前中津城で留守中、兄、長政の朝鮮出兵（慶長の役）に加われなかったことを嘆き、中津城から抜け出し秘密裏に朝鮮へ渡る途中、船が嵐にあい転覆、16歳で死去した。その時、一緒に船出した家臣の子、母里吉太夫（母里友信嫡男）、加藤吉松（黒田一成弟）、木山紹宅の3人も一緒に溺死した。黒田熊之助wikiより

武蔵が行った勝負の中で最も広く知られているものは、俗に「巖流島の決闘」といわれるものである。これは慶長年間に豊前小倉藩領（現在は山口県下関市域）の舟島（巖流島）で、岩流なる兵法者と戦ったとされるものである。この内容は江戸時代より現代に至るまで芝居、浄瑠璃、浮世絵、小説、映像作品など様々な大衆文芸作品の題材となっている。宮本武蔵wikiより

※黒田熊之助は15歳で死んだことにし、その後の48年間は宮本武蔵として生きた。宮本武蔵は永らく正体不明とされてきたが、その実、黒田如水の子だったのだ。そして、天下の宮本武蔵を演じていた熊之助は、ヌルハチの弟バヤラとして後金～清の軍隊にも参加した。一方、関ヶ原の戦いのとき、宮本武蔵は黒田如水に従い、東軍として九州で戦ったとされているが、これはじつに興味深いことだ。このとき、武蔵は如水が父であることを認識し、如水は武蔵を子の熊之助と認識していたはずだ。ここに知られざるドラマが隠れている。

-----

有馬晴信の子



有馬富蘭/フランシスコ（1605～1612）※画像なし

天草四郎/フランシスコ（?～1638）

鄭芝龍（1604～1661） ※画像なし

本名は益田四郎（ますだしろ）。諱は時貞（ときさだ）。洗礼名は当初は「ジェロニモ（Geronimo）」であったが、一時期表向きの棄教をしていたためか、島原の乱当時は「フランシスコ（Francisco）」に変わっていた。一般には天草四郎時貞という名で知られる。また、後述の通り豊臣秀頼（豊臣秀吉の息子）の落胤であったとする伝説もあるが信憑性は低い。天草四郎wikiより



1604年、福建省南安市に生まれる。18歳の時に父が死亡し、母方の叔父を頼りマカオに赴き、黄程の元で経済学を学ぶ。この頃、カトリックの洗礼を受け、Nicholas という洗礼名を授けられる。西洋の文献には、Nicholas Iquan（ニコラス・一官）と記されている。

1621年には、台湾や東南アジアと朱印船貿易を行っていた中国系商人の李旦、または、顔思齊の傘下に加わる。日本の肥前国平戸島（現長崎県平戸市平戸島）に住むうち、平戸藩士田川七左衛門の娘であるマツと結婚。後に、息子の鄭成功が生まれている。鄭芝龍wikiより

有馬於松/マティアス（1607～1612） 有馬晴信の子

※死んだことにして中国に逃亡・潜伏していた有馬晴信の忘れ形見である富蘭と於松は、33歳と31歳の時に倭寇、松浦党、福建海賊の助力を得て挙兵。「島原の乱」を指揮し、日本を統べる邪教に挑戦した。富蘭は天草四郎と同一人物である。また、彼は鄭芝龍の本体でもあるようだ。つまり、国姓爺と呼ばれた鄭成功の正体は、島原の乱を指揮した天草四郎（有馬於松）の子なのだ。天草四郎は九州を邪教の手から救うことはできなかったが、台湾をオランダ王国、オランダ東インド会社（東本願寺門主証如と顕如）の魔手から解放している。

-----

鄭芝龍（天草四郎、有馬富蘭）の子（有馬晴信の孫）



鄭成功（1624～1662） 洪門首領

清に滅ぼされようとしている明を擁護し抵抗運動を続け、台湾に渡り鄭氏政権の祖となった。様々な功績から隆武帝は明の国姓である「朱」と称することを許したことから国姓爺とも呼ばれていた。台湾・中国では民族的英雄として描かれており、特に台湾ではオランダ軍を討ち払ったこ

とから、孫文、蔣介石とならぶ「三人の国神」の一人として尊敬されている。鄭成功wikiより

オスマントルコ皇帝オスマン2世の一族～オリバー・クロムウェル、大英帝国、アメリカ合衆国、エドガー・アラン・ポー、オーソン・ウェルズ、ザ・ビートルズ、モンティ・パイソン、レッド・ツェッペリン

---



オスマン2世（1604～1622） オスマントルコ帝国第15代皇帝 在位1618～1622

トーマス・クロムウェル（1594～1653） アルドグラス伯

オリバー・クロムウェル（1599～1658） 共和制イングランド初代護国卿

清教徒革命（イングランド内戦）では鉄騎隊を指揮してエッジヒルの戦いやマーストン・ムーアの戦いで活躍し、ニューモデル軍（新模範軍）の副司令官となる。ネイズビーの戦いで国王チャールズ1世をスコットランドに追い、議会派を勝利に導いた。護国卿時代には独裁体制をしいた。  
wikiより

※トマス・クロムウェルの曾孫エドワードの子として生まれたトーマス・クロムウェルは、同時にオリバー・クロムウェルの名を準備し、邪教を排除する計画を実行した。オリバー・クロムウェルは、ニューモデル・アーミーを組織し、清教徒革命を成功させ、イングランドに共和制を打ち立てた。

-----  
オリバー・クロムウェルの子



リチャード・クロムウェル（1626～1712）

ジョージ・モンタギュー（1622～1681）※画像なし

アントン・アシュリー・クーパー（1621～1683） ホイッグ党

1658年に死去した父の後を継いで第2代護国卿となったが、父ほどの器量や才能がなく、軍人としての経歴もないためニューモデル軍に背かれたことが政権を不安定にした。1659年1月27日に第三議会を召集し支持勢力を当てにしたが、議会の共和主義勢力と組んだ軍から解散要求を出され、圧力に屈し4月22日に議会を解散した。

そして5月7日に軍が共和派と結託しランプ議会を復活させた後、リチャードは政権存続を諦め就任から8ヶ月経った5月25日で護国卿辞任を余儀なくされた。父の晩年から共和政（事実上のオリバー個人独裁）は崩壊しつつあったが、若年かつ凡庸なりチャードが後を継いだことは、クロムウェル政権の崩壊をより促進させる結果となった。リチャード・クロムウェル [wiki](#) より



ヘンリー・クロムウェル（1628～1674）

エルンスト・アウグスト（1629～1678） ハノーヴァー選帝侯

イングランドの軍人、政治家。イングランド共和国の初代護国卿オリバー・クロムウェルとエリザベス・バウチャーの間の四男で、第2代護国卿リチャード・クロムウェルの弟。イングランド共

和国時代のアイランドにおける重要人物である。ヘンリー・クロムウェル [wiki](#) より

1692年、レオポルト1世に選帝侯位を要求、戦争従軍の功績から要求を認められて9番目の選帝侯に指名され、領土はハノーファー選帝侯領と呼ばれるようになったが、1698年、帝国議会の承認を得る前に68歳で死去した。長男ゲオルク・ルートヴィヒがハノーファーを相続し、1705年にゲオルク・ヴィルヘルム死後のリューネブルクも継承、1714年にイギリス王に即位した。選帝侯の地位が実際に認められたのは選帝侯会議に列席した1708年である。エルンスト・アウグスト [wiki](#) より

※ヘンリーはエルンストとしてハノーヴァー選帝侯に就いた。ハノーヴァー選帝侯は後にイギリスの王室ハノーヴァー朝の前身となった。

-----  
リチャード・クロムウェルの子



エドワード・クロムウェル（1644～1688）※画像なし

鄭經（1642～1681）

トマス・ウォートン（1648～1715） ホイッグ党

ロバート・ウォルポール（1650～1700）

1673年にバッキンガムシャーから下院議員に選出、ホイッグ党に属してイングランド王チャールズ2世の政権を批判して王位排除法案に賛成、続くジェームズ2世のカトリック重視の姿勢も非難、1688年に名誉革命が起こるとジェームズ2世から離反してエクセターでオランダ軍に投降した。トマス・ウォートン [wiki](#) より



オリバー・クロムウェル（1656～1705）※画像なし

ジョン・サマーズ（1651～1716） ホイッグ党

エドワード・ラッセル（1653～1727） ホイッグ党、初代オーフォード伯爵

イギリスの貴族・政治家。弁護士から政治家に転身、イギリスの指導者層にまで上り詰めた。ジョン・サマーズ w i k i より

海軍に入隊して1671年に中尉となり、1672年に大尉に昇進、同年から1673年の英蘭戦争でイングランド艦隊に乗り込みオランダ海軍と戦い、1676年から1682年までジョン・ナーボローの艦隊に属して地中海の海賊征伐に努めた。しかし、翌1683年に従兄で妻の兄弟のラッセル卿ウィリアム・ラッセルがライハウス陰謀事件で首謀者として処刑されたことを不満として辞職、伯父と共にオランダ総督ウィレム3世（後のウィリアム3世）に接近していった。エドワード・ラッセル w i k i より

※クロムウェルの子らは、邪教に支配されたイギリス人を解放すべく、ホイッグ党を設立し、真の民主主義を目指した。

-----  
ジョージ・モンタギュー（リチャード・クロムウェル）の子



チャールズ・モンタギュー（1661～1715） ホイッグ党

ジョージ1世（1660～1727） ハノーヴァー朝初代イギリス王 在位1714～1727

政界ではホイッグ党員として台頭、1694年にホイッグ党による内閣が成立するとジャントーの1人として閣僚に加えられ、財務府長官として財政を担当した。就任前の1693年に国債制度を作り、1694年に銀行家ウィリアム・パターソンとともにイングランド銀行を創立、預金に利息を加えて返却する方法を取り顧客からの収入で大同盟戦争の軍資金を調達した。1695年にニュートン及びジョン・ロックとジャントーの一員であるジョン・サマーズと協議して翌1696年に銀貨の質を戻すべく改鋳も行い、イギリス財政確立の役目を果たした。wikiより

-----  
ロバート・ウォルポール（エドワード・クロムウェル）の子（1650）



ジェームズ・スタンホープ（1673～1721） ホイッグ党

チャールズ・タウンシェンド（1674～1738） ホイッグ党

スペンサー・コンプトン（1674～1754） ホイッグ党

チャールズ・スペンサー（1675～1722） ホイッグ党

ロバート・ウォルポール（1676～1745） ホイッグ党 イギリス初代首相

鄭克ソウ（1670～1707） 鄭経の子※画像なし

イギリスの軍人・政治家。ホイッグ党に属し、スペイン継承戦争ではスペインに上陸してフランス・スペインと戦い、戦後は政権を率いてイギリスの政治を担った。ジェームズ・スタンホー

プwikiより

ノーサンプトン伯爵家のヤンガーサンとして生まれ、1698年にホイッグ党の庶民院議員に初当選して政界入りした。ウォルポール内閣で閣僚職や庶民院議長を務めた後、1742年のウォルポール退陣に際して後任の第一大蔵卿（首相）となったが、これは名目上のことであり、第2代カートレット男爵ジョン・カートレットが実権を握っていた。翌1743年に首相在職のまま死去した。チャールズ・タウンシェンド wikiより

マールバラ公夫妻はアン女王と深い信頼関係で結ばれていたためサンダーランドも重要なポストを任せられ、1705年に神聖ローマ皇帝ヨーゼフ1世の即位に伴うウィーンへの特使に任命、翌1706年にイングランドとスコットランド合同の交渉委員の1人に選ばれ合同条約を締結、同年に南部担当国務大臣に任命されスペイン継承戦争でマールバラ公を支え、ホイッグ党の中心人物になりジヤントーの一員となった。スペンサー・コンプトン wikiより

1701年にホイッグ党の庶民院議員に当選して政界入り。高い討論力で頭角を現し、ホイッグ党政権（あるいはホイッグ党参加政権）で閣僚職を歴任した。1720年の南海泡沫事件の後処理を指揮。事件後にはホイッグ政権の最大の有力者となり、1721年に第一大蔵卿に就任した。与党を統制して閣議を主宰し、議会の支持を背景に政治を行ったため（責任内閣制）、この時期の彼を最初の「イギリス首相」とするのが一般的である。巧みな政治手腕で議会を掌握し続け、20年に及ぶ長期安定政権を築いてイギリスが商業国家として躍進する土台を築いた。1733年のタバコ消費税法案の挫折で求心力を落としはじめ、1741年の総選挙で与党の議席を大幅に減らしたため1742年に退陣した。ロバート・ウォルポール wikiより

※クーパーの子らは、邪教に支配されたイギリス人を解放すべく、ホイッグ党を設立し、真の民主主義を目指した。





ジョージ2世 (1683~1760) ハノーヴァー朝第2代イギリス王 在位1727~1760

ガルフリダス・ウォルポール (1683~1726)

サミュエル・アダムスSr (1689~1748) ※画像なし

-----

イングランド国王ジョージ2世の子





フレデリック・ルイス（1707～1751） プリンス・オブ・ウェールズ

ロバート・ウォルポール（1701～1751） オーフード伯

エドワード・ウォルポール（1706～1784） 政治家

ベンジャミン・フランクリン（1706～1790） 政治家

ムハンマド・イブン・アブドゥル・ワッハーブ（1703～1792） ワッハーブ派の教祖※  
画像なし

鄭安福（生没年不詳） 鄭克ソウの子※画像なし

鄭安禄（生没年不詳） 鄭克ソウの子※画像なし

鄭安康（生没年不詳） 鄭克ソウの子※画像なし

アメリカ合衆国の政治家、外交官、著述家、物理学者、気象学者。印刷業で成功を収めた後、政界に進出しアメリカ独立に多大な貢献をした。また、凧を用いた実験で、雷が電気であることを明らかにしたことで知られている。現在の米100ドル紙幣に肖像が描かれている他、ハーフダラー銀貨にも1963年まで彼の肖像が使われていた。

勤勉性、探究心の強さ、合理主義、社会活動への参加という18世紀における近代的人間像を象徴する人物。己を含めて権力の集中を嫌った人間性は、個人崇拜を敬遠するアメリカの国民性を超え、アメリカ合衆国建国の父の一人として讃えられる。ベンジャミン・フランクリン [wiki](#) より

※初代イギリス首相ウォルポールの子であるエドワードは、ベンジャミン・フランクリンだった。フランクリンが印刷業者だったというのは、エドワードが正体を隠すための作り話だったのだ。

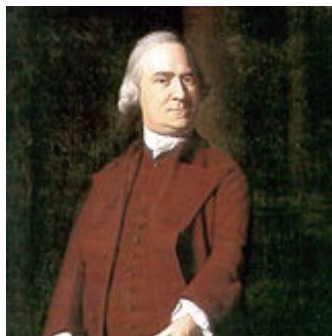
イブン・アブドゥルワッハーブはムハンマド・イブン・サウードと同盟を結び、その助けを得てディルイーヤ首長国（第一次サウード朝）を樹立した。彼らは同盟して権力を独占した上で二人で分け合い、二人の一族による支配はこんにちのサウジアラビア王国（第三次サウード朝）まで続いている。サウジアラビアにおける「アール・アッ＝シャイフ」と呼ばれる宗教的権威のある一族がイブン・アブドゥルワッハーブの子孫であり、同国の聖職者階級養成機関を支配してウラマーを統率している。ムハンマド・イブン・アブドゥル・ワッハーブ [wiki](#) より

※ロバート・ウォルポールはイングランドを離れてアラビア半島に移住し、ヤハウエを由来にワッハーブ派を組織した。ヤハウエ=ヤッハーヴェ=ワッハーブとなる。ワッハーブは、ウォルシinghamの曾孫であるロバート・デヴロー（サ우드・イブン・ムハンマド・イブン・ムクリン）の子、ムハンマド・ビン・サ우드と組んで第一次サ우드王国を建国した。



ジョージ・ウィリアム（1717～1718）※画像なし

ホレス・ウォルポール（1717～1797） ホレイシヨ・ゲイツ名付け親



ウィリアム・オーガスタス（1721～1765）※画像なし

サミュエル・アダムス（1722～1803）

ジェイムス・マディソンSr（1723～1801）※画像なし

アメリカ合衆国の指導者、政治家、著作家、政治哲学者であり、アメリカ合衆国建国の父の一人である。アダムズは、イギリスに対する反抗に植民地人の支持を集める時の主唱者であり、アメリカ独立につなげた。また、アメリカ共和政治の原則を形作る者の一人となり、アメリカ政治文化を育てた。wikiより

-----

フレデリック・ルイスの子



ジョージ3世（1738～1820） ハノーヴァー朝第3代イギリス王 在位1760～1820

フランシス・フランクリン（1732～1736） ベンジャミン・フランクリンの子※画像なし

ジョン・アダムス（1735～1826） アメリカ合衆国第2代大統領 任期1779～1801

パトリック・ヘンリー（1736～1799）

トーマス・ペイン（1737～1809）

トーマス・ジェファソン（1743～1826） アメリカ合衆国第3代大統領 任期1801～1809

アメリカ合衆国の政治家。副大統領（初代、1789年から1797年の2期）、大統領（第2代、1797年-1801年）。アメリカ海軍創設者である。アメリカ合衆国建国の父の中でも最も影響力があった者の一人とされている。ジョン・アダムス [wiki](#) より

スコットランドから入植したジョン・ヘンリーの息子として、バージニア植民地の農園において

誕生した。パトリックは幼い頃から本に慣れ親しむというよりは、むしろバージニア植民地の森や川といった自然に親しんでいた。このようなパトリックにラテン語、ギリシャ語、さらには数学を教え込んだのは、牧師をしていた伯父と教養豊かな父親であった。パトリック・ヘンリー [wiki](#)より

民主的平和論を説き植民地の権利を守らないイギリスの支配から脱し、アメリカが独立するという考えは「Common sense」（常識）であると説いた。独立宣言発布直後にペンシルベニア連隊に入隊し、将軍付の秘書・副官となる。ワシントンに紹介されて2年間その下で働き、『危機』（*Crisis*）と呼ばれる一連の小冊子や論文記事を出版し続けた。1777年4月から1779年1月まで連邦議会外務委員会の書記をつとめ、1779年11月、ペンシルベニア州議会の書記に任命された。トーマス・ペイン [wiki](#)より

アメリカ独立宣言（1776年）の主要な作者であり、アメリカ合衆国の共和制の理想を追求したことで最も影響力のあったアメリカ合衆国建国の父の一人とされている。共和制を推進し、イギリスの帝国主義に対抗する偉大な「自由の帝国」の陰にある力としてアメリカの姿を描いた。首都ワシントンD.C.で就任演説を行った最初の大統領である。

大統領就任中にはルイジアナ買収（1803年）やルイス・クラーク探検隊（1804年 - 1806年）を進めたが、辞任後の米英戦争（1812年 - 1815年）につながるイギリスおよびフランス両国との緊張関係を増すことになった。トーマス・ジェファソン [wiki](#)より



キャロライン・マティルダ（1751～1775）※画像なし

ジェイムズ・マディソン（1751～1836） アメリカ合衆国第4代大統領 任期1809～1817

アメリカ合衆国の政治家、政治学者であり、第4代アメリカ合衆国大統領（1809年-1817年）。ジョン・ジェイおよびアレクサンダー・ハミルトンと共にザ・フェデラリストを共同執筆し「アメリカ合衆国憲法の父」と見なされる。対外宣戦布告をした初の大統領であり、また戦災により首都から避難した唯一の大統領でもある。かつて流通していたアメリカ5000ドル紙幣にその肖像を見ることが出来る。 [wiki](#)より

---

## イングランド国王ジョージ3世の子



ジョージ4世（1762～1830） ハノーヴァー朝第4代イギリス王 在位1820～1830

ウィリアム・テンプル・フランクリン（1762～1823） B・フランクリンの孫※画像なし

ジェームズ・モンロー（1758～1837） アメリカ合衆国第5代大統領 任期1817～1825

1780年から1783年までトーマス・ジェファーソンについて法律を勉強し、1783年から1786には大陸会議（連合会議）の代議員になった。アメリカ合衆国憲法の批准を問うたバージニア会議では、反連邦党代議員として中央政府にあまりに大きな権限を与えすぎると主張して批准に反対した。それでもモンローは新しい連邦政府に積極的に関わり、1790年にはバージニア州からアメリカ合衆国上院議員に選出されて、ジェファーソンの一党（後の民主共和党）に加わった。バージニア州知事（1799年 - 1802年）として行政の経験を積み、フランスにおける外交官として1803年のルイジアナ買収交渉に貢献して国民的な名声を得た。ジェームズ・モンロー [wiki](#) より

※フランクリンの子らは、邪教に支配されたヨーロッパを離れ、邪教の影響を排した理想国家の創生を目指した。そのためにモンロー大統領は「モンロー教書」を発表し、アメリカ大陸に邪教が侵入できないようにした。現在のトランプ大統領の移民政策と同様だ。



エドワード・オーガスタス（1767～1820） ケント公

ウィリアム4世（1765～1837） ハノーヴァー朝第5代イングランド王 在位1830～1837

-----

イングランド国王ウィリアム4世の子



ジョージ・オーガスタス（1794～1842） マンスター伯爵※画像なし

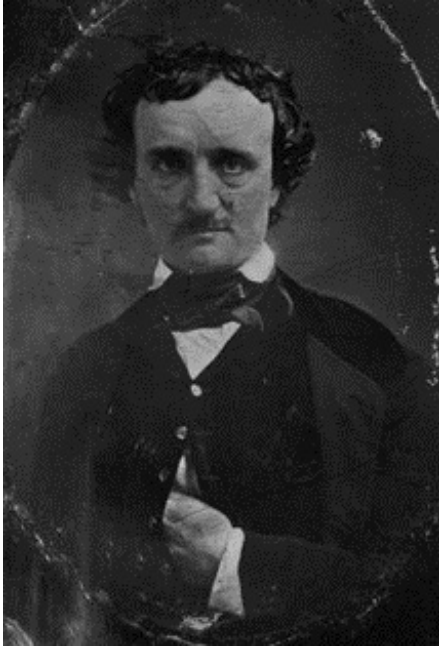
大塩平八郎（1793～1837）

蜂起の前年の天保7年（1836年）秋、米価高などの影響で同年8月に甲斐国で発生した「天保騒動（郡内騒動）」、三河国挙母藩の「加茂一揆」などの大騒動が各地で発生し、奥羽地方で10万人の死者が出る中、大塩は9月にはすでに、飢饉に伴って生じるであろう打ちこわしの鎮圧のためと称して、与力同心の門人に砲術を中心とする軍事訓練を開始していた。

跡部良弼に対する献策が却下された後、天保8年（1837年）2月に入って、蔵書を処分するなどして私財をなげうった救済活動を行うが、もはや武装蜂起によって奉行らを討ち、豪商を焼き討ちして灸をすえる以外に根本的解決は望めないと考え、天保8年2月19日（1837年3月25日）に門人、民衆と共に蜂起する（大塩平八郎の乱）。しかし、同心の門人数人の密告によって事前に大坂町奉行所の知るところとなったこともあって、蜂起当日に鎮圧された。大塩平八郎 [wiki](#) より

※大塩は邪教を倒すために密かに蜂起を計画していたが、内部に密通者がいたため、本願寺にバ

して蜂起は失敗した。たった1日で制圧された。



オーガスタス（1805～1854）※画像なし

エドガー・アラン・ポー（1809～1849） 作家

※初めてアメリカ大陸に上陸したイングランド王ウィリアム4世の子オーガスタスとして生まれた。本国イギリスではアイルランドに渡って神父として生き、アメリカではポーとして生きた。ポーは不遇な人生で知られているが、実際には諜報員としてアメリカ国内を暗躍していた可能性もある。ポーの作品に活かされていた視点や語り口は、諜報員でなければ得られないものだ。ポーは40歳で死んだことにして潜伏し、実際には80代まで生きた可能性がある。



死産の子（1822）※画像なし

シャルル・ボードレール（1821～1867） 詩人

※ボードレールはポーの弟と考えられる。死産したことにしてウィリアム4世はボードレールをフランスに送り、潜伏させて成長させた。写真を見て分かるように同じポーズをとっている（フリーメイソンのポーズ）。ポーは作家としては不遇で、生前に売れた著作は「貝類図鑑」であった（しかも盗作）。しかし、弟であるボードレールが、兄ポーの著作を初めてフランスに紹介した。



---

## ヴィクトリア女王の子



エドワード7世（1841～1910） サクス・コバーグ・アンド・ゴータ朝初代イングランド王 在位1901～1910

在位は1901年から1910年までの10年足らずであったが、その治世は「エドワード朝（Edwardian era）」と呼ばれる。在位中は1905年まで保守党（ソールズベリー侯爵とバルフォア）、その後は自由党（キャンベル＝バナマンとアスキス）が政権を担当した。彼の治世下に日英同盟、英仏協商、英露協商が締結され、日本・フランス・ロシアとの関係が強化されたため、「ピースメーカー」と呼ばれた。エドワード7世wikiより

---

## ヴィクトリア女王の孫



アレクサンダー・ジョン（1871） ハノーヴァー朝エドワード7世の子※画像なし

ウィンストン・チャーチル（1874～1965） 第61、63代イギリス首相 任期194

0～45、1951～55

1951年に再び首相を務め、米ソに次ぐ原爆保有を実現し、東南アジア条約機構（SEATO）参加など反共政策も進めた。1953年、ノーベル文学賞受賞。1955年にアンソニー・イーデンに保守党党首及び首相職を引き継がせ政界から退いた。 ウィンストン・チャーチルw i k i より

※エドワード7世は、アレクサンダーを早世したことにした。その後、アレクサンダーはウィンストン・チャーチルとして生きた。イギリス首相に就任したチャーチルは、ルーズベルト大統領、スターリン書記長と組んで第二次世界大戦を指揮し、本願寺の一族を退けた。チャーチルの名前自体はマヤ発祥であり、マヤの部族ツォツィル族に由来している。



レオポルド・アーサー・ルイス（1889～1922） ベアトリスの子※画像なし

ジョルジョ・デ・キリコ（1888～1978） シュルレアリスト

※キリコの母は潜伏していたポーの遺伝子を所望し、優性遺伝子ブリーダーによってキリコが誕生した。キリコは、祖父であるイングランド国王ウィリアム4世に良く似ている。30年代のニューヨークを訪れた際、キリコは摩天楼の窓に見える人影を見て「彼らは時間を超えて生きている」と述べた。筆者は、エドワード・ホッパーの画集でこの一言を知り、一瞬でキリコを尊敬した。



アラステア・ウィンザー（1914～1943） アーサー・オブ・コノートの子※画像なし

オーソン・ウェルズ（1915～1985） 映画監督、俳優

※ウェルズは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたチャーチルの子と考えられる。監督作「市民ケーン」「黒い罨」「審判」で知られている。本願寺（ディープステート）にマークされ、キャリアを邪魔された不遇の人。



アレクサンダー（1919～2000） パトリシア・オブ・コノートの子※画像なし

トルーマン・カポーティ（1924～1984） 作家

ロバート・アルトマン（1925～2006） 映画監督

※カポーティは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたチャーチルの子と考えられる。20歳の時、短編「ミリアム」でデビュー。アンファンテリブルと呼ばれた。映画「ティファニーで朝食を」の原作で知られている。映画化の際、カポーティはホリー・ゴライトリー役には何が何でもマリリン・モンローだと主張していた。

アルトマンは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたウェルズの子と考えられる。監督作に「ロンググッドバイ」「三人の女」「フル・フォア・ラブ」「ザ・プレイヤー」などがある。アルトマンは、「ザ・プレイヤー」で父ウェルズの「黒い罨」の冒頭を再現した。

-----  
ヴィクトリア女王の曾孫



アルフォンソ（1907～1938） ヴィクトリア・ユージェニーの子※画像なし

ロベール・ブレッソン（1901～1999） 映画監督

※優性遺伝子ブリーダーによって生まれたキリコの子と考えられる。監督作には「スリ」「抵抗」「バルタザールどこへ行く」「やさしい女」「ラルジャン」がある。



アイリス（1920～1982） アレクサンダー・マウントバッテンの子※画像なし

ピーター・セラーズ（1925～1980） 俳優

※セラーズは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたブレッソンの子と考えられる。出演作には「博士の異常な愛情」「マジッククリスチャン」「ピンクパンサーシリーズ」「チャンス」がある。



サンドラ（1936～2014） ベアトリス・デ・ボルボン・イ・バッテンベルクの子※画像なし

レナード・コーエン（1934～2016） ミュージシャン

※コーエンは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたキリコの子と考えられる。



マルコ（1937～2014） ベアトリス・デ・ボルボン・イ・バッテンベルクの子※画像なし

ピーター・クック（1937～1995） 俳優

※クックは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたブレッソンの子と考えられる。異母兄弟となるセラーズとはしばしば競演している。正統なアダプテーションといえる、ジョナサン・ミラー監督のテレビ映画「不思議の国のアリス」では両者とも本領を発揮していた。



マリーノ（1939～1995） ベアトリス・デ・ボルボン・イ・バッテンベルクの子※画像なし

ジョン・レノン（1940～1980） ザ・ビートルズ

グレアム・チャップマン（1941～1989） モンティ・パイソン

※ジョンは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたセラーズの子と考えられる。優性遺伝子ブリーダーによる偽装結婚の際、女性側の親族に似ているゲイ男性が選ばれる傾向がある。レノンの父アルフレッドは、ミミ伯母さん（ジョンの母ジュリアの姉）に良く似ている。ということで、父アルフレッドが息子ジョンを省みなかったのは、単に血がつながっていなかったからと考えられる。

イングランド王ウィリアム4世の正統な子孫であるジョンは、エリザベス女王からもらった勲章

を返還した。会場のトイレでマリファナもふかしたという。ジョンは、直感でエリザベス女王は正統な王族ではないと感じたのだろう。それは正しかった。

ビートルズの一員として成功してから、ジョンは単独で映画「ヘルプ！」を監督したりチャード・レスター監督の映画「僕の戦争」で名だたるイギリスの俳優たちと競演したが、セラーズとの競演はなかった。だが、同僚のリンゴがジョンの代わりにブリティッシュナンセンスの秘宝「マジック・クリスチャン」でセラーズと競演している。

ただ、映画での競演はなかったが、ジョンとポールが司会したイギリスの音楽特番でジョンはセラーズと競演している。ここで、セラーズはローレンス・オリヴィエの物真似をしながら「ハードデイズ・ナイト」をカバーした。番組中、ジョンが「ぼくがピカデリーであげたマリファナ覚えてる？」と聞くと、セラーズは「あれはホントに効いたな」と答えている。

残念ながら、レノンは東本願寺門主大谷光勝の一族に属するマーク・チャップマンによって射殺された。その後、ジョン・レノンの死を悼む人々が耐えないため、悔しくなったHWブッシュは、レーガン暗殺未遂という茶番を指揮し、チャップマンにそっくりなジョン・ヒンクリーを犯人に起用した。2人とも、南部バプティスト会議議長ジェームズ・メリットの影武者、或いは本人である。

チャップマンは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたキリコの子と考えられる。モンティ・パイソンのメンバーとして有名だが、暴力的な爆笑映画「イエロービアード」では脚本と主演を手がけた。



オリンピア（1943）　ベアトリス・デ・ボルボン・イ・バッテンベルクの子※画像なし  
ポール・マッカートニー（1942）　ザ・ビートルズ  
エリック・アイドル（1943）　モンティ・パイソン

※ポールは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたキリコの子と考えられる。23歳で名曲「イエスタデイ」をモノにした。ビートルズはある意味家族だった。ポールはキリコに良く似ている。ポールにとって、ジョンとジョージは異母兄弟（ブレッソン）の孫だった。エリックは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたブレッソンの子と考えられる。



ジョヴァンナ・マローネ=チンザノ（1943） マリア・クリスティーナの子※画像なし  
ジョージ・ハリソン（1944～2001） ザ・ビートルズ  
ジミー・ペイジ（1944） レッド・ツェッペリン

※ジョージは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたピーター・クックの子と考えられる。ジョンとジョージは、いとこだった。

ジミーは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたブレッソンの子と考えられる。レッド・ツェッペリンを結成し、ロバート・プラント、ジョン・ボーナム、ジョン・ポール・ジョーンズと共にヘヴィロックの礎を築いた。



アンナ・サンドラ・マローネ=チンザノ（1948） マリア・クリスティーナの子※画像なし  
ポール・ロジャース（1949） フリー、バッドカンパニー、ファーム

※ポールは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたブレッソンの子と考えられる。昔から思っていたが、ジミー・ペイジに良く似ている。そういう縁からか、2人は1984年にデビューした「ファーム」というバンドで競演している。

オスマントルコ皇帝アフメト3世の一族～ピョートル大帝、ナポレオン皇帝、モルモン教、ルーズベルト大統領、ケネディ大統領、ザ・ドアーズ、プーチン大統領、ウィキリークス、Qアノン

---



アフメト3世（1673～1730） オスマントルコ帝国第23代皇帝 在位1703～1730

ピョートル1世（1672～1725） ロシア帝国第5代皇帝 在位1682～1725

第19代皇帝メフメト4世の子で第22代皇帝ムスタファ2世の弟。子にムスタファ3世、アブデュルハミト1世。治世中は列強との戦争に対処する一方、積極的に西欧文化の受け入れを奨励、チューリップ時代と呼ばれる一時代を生んだ。アフメト3世wikiより

ロシアをヨーロッパ列強の一員とし、スウェーデンからバルト海海域世界の覇権を奪取してバルト海交易ルートを確保。また黒海海域をロシアの影響下におくことを目標とした。これらを達成するために治世の半ばを大北方戦争に費やし、戦争遂行を容易にするため行政改革、海軍創設を断行。さらに貴族に国家奉仕の義務を負わせ、正教会を国家の管理下におき、帝国における全勢力を皇帝のもとに一元化した。また歴代ツァーリが進めてきた西欧化改革を強力に推進し、外国人を多く徴用して、国家体制の効率化に努めた。ピョートル1世wikiより

※アフメト3世は、ピョートル1世としてロシア帝国を、そしてオスマントルコ帝国を同時にマネージした。もちろん、庶子を登用した影武者も各地に準備していた。その後、ピョートル1世は死んだことにして故郷トルコに帰還し、アフメト3世として11年の余生を過ごした。

-----

ピョートル1世の子





ムスタファ3世（1717～1774） オスマントルコ帝国第26代皇帝 在位1757～1774

ピョートル2世（1715～1730） ロシア帝国第7代皇帝 在位1727～1730

アドルフ・フレドリク（1710～1771） ホルシュタイン=ゴットルプ朝初代スウェーデン王

※忌まわしい西本願寺門主寂如の一族から逃れたおかげか、アドルフの顔は晴れ晴れしている。



アンナ・ペトロヴナ（1708～1728）

1725年1月、ピョートル1世が死去。この際に彼は長女アンナを後継指名したと指摘する歴史家がいるが、確証はないとされている。同年5月、サンクトペテルブルクで2人は結婚した。カール・フリードリヒは即位したエカチェリーナ1世の下で最高秘密会議の一員になるが、女帝が在位2年で死去。1727年に即位した幼帝ピョートル2世を推すアレクサンドル・メンシコフが替わって台頭した。wikiより

---

アンナの子（ピョートル1世の孫）



アブデュルハミト1世（1725～1789） オスマントルコ帝国第27代皇帝 在位1771～1789

ピョートル3世（1728～1762） ロシア帝国第11代皇帝 在位1762

1762年6月28日、皇后エカチェリーナを支持する近衛部隊がクーデターを起こし、逮捕された。在位わずか6ヶ月程度の短い治世であった。廃位されたピョートルは首都郊外のロプシャで軟禁状態におかれ、7月6日、おそらく近衛部隊の独断で（つまりエカチェリーナ2世の許しなく）監視役の

アレクセイ・オルロフによって殺害された。公式には持病の痔の激痛による発作死と発表され、ヨーロッパ諸国の嘲笑を買った。ピョートル3世 [wiki](#) より

※ピョートル3世は、エカチェリーナ1世の勢力が自分を暗殺しようとしていることに気づき、いち早く逃亡・潜伏を決意し、34歳で死んだことにしてコルシカ島に逃亡した。彼は10歳ほどサバを読み、シャルル＝フランソワ・ルブランとして再出発した。また、ルイジ・パルヴィシニとして、シャルル・マリ・ボナパルトの姉の夫となった。



？

ルイジ・パルヴィシニ（1739～1813） シャルル・マリ・ボナパルト姉の夫  
シャルル＝フランソワ・ルブラン（1739～1824）

ノルマンディーの生まれ。コレージュ・ド・ナヴァールで哲学を学んだ後、パリで弁護士として活動した。ルイ15世時代末期の1766年に官途に就いていたが、フランス革命期に憲法制定国民議会に参加した。

1799年のブリュメール18日のクーデターには関与しなかったが、ナポレオン・ボナパルトを第一統領とする統領政府が樹立された際には第三統領に任命された。のち、元老院議員となり、第一帝政期には帝国頭官の大財務官、リグーリア総督、オランダ総督を務めた。また、ピアチェンツァ公の称号を与えられた。シャルル＝フランソワ・ルブラン [wiki](#) より

-----

アドルフ・フレドリク（ピョートル2世）の子



グスタフ3世（1746～1792） ホルシュタイン=ゴットルプ朝第2代スウェーデン王  
シャルル・マリ・ボナパルト（1746～1785）  
エマニュエル=ジョゼフ・シエイエス（1748～1836）

1789年のフランス革命後の憲法制定に際して「第二院が代議院と一致するときは、無用であり、代議院に反対するならば、それは有害である」として、二院制を批判したとされる。ただし、シエイエスらがフランス革命期に作った一院制の議会である国民公会は暴走を起し、政敵である少数派を次々に死刑にする恐怖政治を引き起こしている。恐怖政治はテルミドール9日のクーデターにより終結させられ、一院制の国民公会はわずか3年でなくなり、その後できた共和暦3年憲法では、恐怖政治への反省から、二院制の議会が作られている。wikiより



フレドリク・アドルフ（1750～1803） エステルイェートランド公※画像なし  
ジャン=ジャック・レジ・ド・カンバセレス（1753～1824）

1799年12月、カンバセレスはボナパルトの下で第二統領に任命された。彼が任命されたのは、その広範な法律知識と穏健な共和主義者としての評判によるものであった。この時期の彼の最も重要な業績は、後にナポレオン法典と呼ばれる、フランス初の近代的法典となった新たな民法典を起草したことであった。この法典はボナパルトが皇帝ナポレオンとして1804年に公布した。これは、カンバセレスと4人の法律家からなる起草委員の業績であった。wikiより

シャルル・マリ・ボナパルトの子



ジョゼフ・ボナパルト (1768~1844)

ナポリ王、スペイン王

カルロ・フェリーチェ (1765~1831)

サルデーニャ王国第6代国王



セリム3世 (1761~1807)

オスマントルコ帝国第28代皇帝

在位1789~1807

フランツ2世 (1768~1835)

オーストリア帝国初代皇帝

在位1804~1835

ナポレオン・ボナパルト (1769~1821)

フランス帝国初代皇帝

在位1804~1815

フランス革命後の混乱を收拾して軍事独裁政権を樹立した。大陸軍（グランドアルメ）と名付けた巨大な軍隊を築き上げてナポレオン戦争を引き起こし、幾多の勝利と婚姻政策によって、イギリス、ロシア、オスマン帝国の領土を除いたヨーロッパ大陸の大半を勢力下に置いたが、最終的

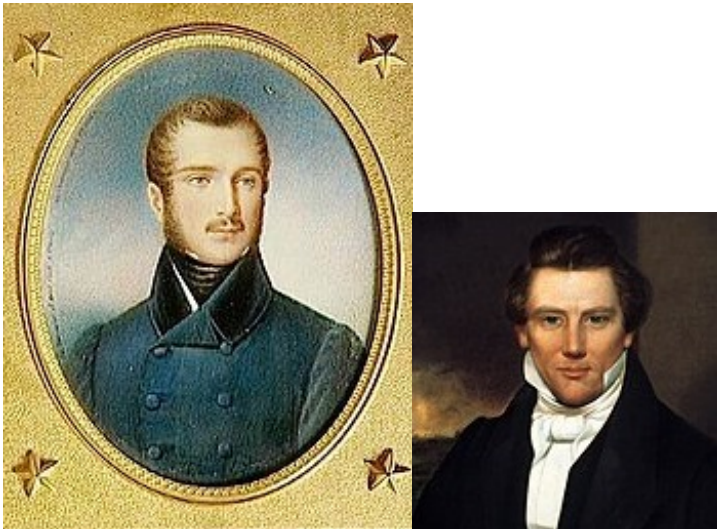
には敗北して失脚した。 w i k i より

※ピョートル2世の子孫であるナポレオンは、ピョートル3世の仇を討つべく、フランス軍を率いてロシア帝国に侵攻した。当時、ロシア帝国は西本願寺門主寂如の一族アレクサンドル1世が統治していた。寂如の孫であるエカチェリーナ2世は既に死去し、寂如の曾孫パーヴェル1世は既に暗殺されていたが（日本・遠江国に逃亡している）、彼らの息がかかっている悪党を一網打尽にすべく、ロシアに侵攻した。

ルイ・ボナパルトの子（シャルル・マリ・ボナパルト孫）



ナポレオン・シャルル・ボナパルト（1802～1807）※画像なし  
ハイラム・スミス（1800～1844）



ナポレオン・ルイ・ボナパルト（1804～1831）  
ジョセフ・スミスJr（1805～1844） モルモン教教祖

教会の信条によると、1829年、23歳になったジョセフ・スミスの元にバプテスマのヨハネが現れ、ジョセフ・スミスと同僚のオリバー・カウドリにアロン神権（洗礼を行う権威）を授けたとされている。またペテロ、ヤコブ、ヨハネが現れ、ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリにメルキゼデク神権を授け、初期のキリスト教会と同じ権威を回復したと言われている。そして1830年

、同じ神権の権能により、初期のキリスト教会と同じ組織が回復されたとされている。

ジョセフは、天使より授かるとされる金版の書を元に、教典である『モルモン書』を著している。ジョセフ・スミス J r w i k i より

※ナポレオンの家族がアメリカに進出した。それがモルモン教を設立するスミス兄弟である。特に、ハイラムはナポレオンに似ている。スミス兄弟がナポレオン一族であることを知ったタナトスの一族は邪教信者（カトリック）に命じて兄弟を惨殺した。

-----

ナポレオン皇帝の子



ナポレオン2世（1811～1832）

マジド・ビン・サイイド（1834～1870） ザンジバル帝国

1816年3月7日に、母マリア・ルイーゼがパルマ公国の統治を任せられ、パルマへと旅立っていった。その後、彼の生活は一変し、フランス語を話したり、フランス語の本を読む事を禁じられ、ドイツ語を学習する事を強制された。1817年5月1日に、マリア・ルイーゼはナイペルク伯爵アダム・アルベルトの娘アルベルティーヌを出産し、ウィーンでのフランツとの面会の約束を破ってしまった。母親に約束を破られた彼は、この時大変に悲しんだという。マリア・ルイーゼが重い腰を上げ、フランツに会いに行ったのは、それから2年も経った1818年の7月だった。それからパルマに戻ったマリア・ルイーゼは、1819年8月9日にはナイペルク伯爵の息子のギヨームを生み、また彼との面会の約束を破った。その後、ロシア皇帝アレクサンドル1世がフランツの許を訪れた事があり、その時「綺麗で賢く、好感の持てるなかなか良い少年ではないか」と言ったという。ナポレオン2世 w i k i より

オマーンの最盛期を現出し、サイード大王とも呼ばれる。オマーンの勢力を東アフリカにまで広げ、オマーン海上帝国と呼ばれる大交易帝国を築き上げた。

1840年、サイードはザンジバルにストーン・タウンを建設し、首都を移した。当時ザンジバルは奴隷貿易の中心地として栄えており、インド洋交易の中心地となっていた。サイードはザンジバ

ルにチョウジを移植し、やがてチョウジはザンジバルの特産品としてザンジバル経済を支えることとなった。オマーンは帆船による大船団を所持しており、欧米諸国とも交易を行い、正式な外交関係も持っていた。ザンジバルには欧米各国の領事館が建てられ、オマーンはイギリスと並ぶインド洋の二大海洋帝国となっていた。

サイイド・サイドが1856年に没すると、その子マージド・ビン・サイドとスワイニー・ビン・サイドが継承を巡って争い、オマーンとザンジバルは別の国家として分かれたこととなった。ザンジバルはマージド・ビン・サイドが継承したが、オマーンに毎年の貢納が義務づけられた。マージド・ビン・サイドは14年間の在位中に奴隷貿易に注力した。マジド・ビン・サイイドw i k iより

※ナポレオン2世は、21歳で死んだことによりザンジバルに逃亡・潜伏し、自身の帝国であるザンジバル帝国を築いた。つまり、ナポレオン2世は59歳まで生きた。しかし、ザンジバル帝国も大英帝国によって征服された。

-----  
シャルル・リュシアン・ボナパルトの子（ナポレオン皇帝の弟リュシアン・ボナパルトの孫）



レオニー・ステファニー・エリーズ・ボナパルト（1833～1839）※画像なし

ジェームズ・ガーフィールド（1831～1881） アメリカ合衆国第20代大統領 任期1881

ルイス・キャロル（1832～1898） 数学者・文学者

ガーフィールドは1881年7月2日、大統領就任の4か月後にギトーによって銃撃された。ワシントンD.C.の鉄道駅で、背後からガーフィールドを44口径リボルバーで撃った。弾丸はガーフィールドの体内で発見することが出来ず、アレクサンダー・グラハム・ベルは弾丸を見つけようとして、金属探知器を考案した。しかし探知機は金属のベッドフレームを誤認し見つけることは出来なかった。ガーフィールドは感染症で病状が悪化し、1881年9月19日にニュージャージー州エルバロンで死去した。医師が弾丸摘出のために滅菌しない指で患部を探ったり、手を突っ込んだり、針で肝臓を傷つけるなどの荒療治がなかったら死ぬことはなかったとされる。ジェームズ・ガ



ーフィールドw i k iより

※本名チャールズ・ラトウィッジ・ドジソンは数学者として、20代にしてオックスフォード大学で教鞭をとった才人であった。ナポレオン2世の子たちの悲しげなまなざしは、タナトスに追われ、潜伏を余儀なくしている者故の悲しみだろうか。キャロルは心の慰みとして少女写真を撮り、童話「不思議の国のアリス」を著した。



アルベルティン・マリー・テレーズ・ポナパルト（1842）※画像なし

ルートヴィヒ2世（1845～1886） 第4代バイエルン国王 在位1864～1886

ロートレアモン伯爵（1846～1870） 作家

※ロートレアモンは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたルートヴィヒ2世の影武者と考えられる。著作「マルドロールの歌」で知られている。ルイス・キャロル、エドガー・アラン・ポーと共にシュルレアリストたちに大いに目標とされた。

神話に魅了され長じては建築と音楽に破滅的浪費を繰り返した「狂王」の異名で知られる。ノイシュヴァンシュタイン城やバイロイト祝祭劇場を残し、後者には文字通り世界中より音楽愛好家が集まっている。若い頃は美貌に恵まれ、多くの画家らによって描かれた。

1870年、普仏戦争で弟オットーが精神に異常をきたした。ルートヴィヒはますます現実から逃れ自分の世界にのめり込み、昼夜が逆転した生活を送るようになった。王は一人で食事を取り、あたかも客人が来ているかのように語っていたり、夜中にそりに乗って遊んでいたところを地元の住民に目撃されたと伝えられている。

危惧を感じた家臣たちはルートヴィヒ2世の廃位を計画し、1886年6月12日に彼を逮捕し廃位した。代わりに政治を執り行ったのは叔父の摂政ルートポルト王子だった。ルートヴィヒはベルク城に送られ、翌日の6月13日にシュタルンベルク湖で、医師のベルンハルト・フォン・グッデンと共に水死体となって発見された。その死の詳細については未だ謎のままである。その知らせを受けたエリーザベト皇后は「彼は決して精神病ではありません。ただ夢を見ていただけでした」と述べている。w i k iより

※この兄弟はひどい風評を流されたが、本願寺は優れた人間ほど人が嫌うような汚名を着せる。そうすれば第三者の理解を得ることが出来ず、自滅させることが出来ると考えている。

本願寺はルートヴィヒ2世とオットー1世がオスマントルコ皇帝、ナポレオン皇帝の血筋であることを優性遺伝子ブリーダーから聞きだし、敵の勢力伸張を阻止すべく、2人の周囲に設置された大量の邪教信者に命じ、ルートヴィヒ2世やオットー1世に風評や人海戦術的な嫌がらせを繰り返した。本願寺の指示による、臣下の意図的な裏切りや、身分の低い者によるイヤガラセは2人の心を砕いたに違いない。

ルートヴィヒ2世は悲劇の王と呼ばれているが、変死の際、死んだことにして潜伏していたと考えられる。彼は80代まで生きた可能性が高い。彼は童貞王とも呼ばれたが、潜伏していた間、ロートレアモン、ロルカなどを優性遺伝子ブリーダーにより、或いは自力で儲けている。美貌の王とも呼ばれていたルートヴィヒ2世を、女たちが放っておくはずがない。



シャルル・アルベール・ボナパルト（1843～1847）※画像なし

ウィリアム・マッキンリー（1843～1901） アメリカ合衆国第25代大統領 任期1897～1901

オットー1世（1848～1916） 第5代バイエルン国王 在位1886～1913

対外的に米西戦争へ国を導き、1898年にはハワイ諸島を併合した（ハワイ併合）。この際に日本の大隈重信総理から「これほど激烈で宣戦布告か最後通牒に等しいような外交文書は見たことがない」という抗議を受けるも、穏便に対処している。米西戦争ではフィリピンの独立勢力を支援するが、戦争に勝利するや一転して現地勢力を弾圧し、フィリピンおよびカリブ海のスペインの旧植民地をアメリカの保護下に置いた。彼は1900年に再選された。ウィリアム・マッキンリー [wiki](#) より

伝説によると、オットーは朝起床すると農民を銃で撃つのが習慣であったと伝えられている。兄と同様に精神を病んでいたとされるが、この伝説の信憑性については定かではない。少なくとも左右の臣たちに好かれていなかったことは間違いないだろう。

狂王とあだ名されたオットーは、1913年11月4日に憲法の修正を認め、国王の職務が遂行できない

状態が10年続き、その改善が見られない場合は摂政が王を廃位し、新しい王朝を創設することができるという条文を導入した。この翌日、摂政を務めていた従兄のルートヴィヒによって廃位され、バイエルン国王にはルートヴィヒ自身が即位した（ルートヴィヒ3世）。廃位後もオットーには国王としての待遇を保持することが認められた。オットー1世 [wiki](#)より

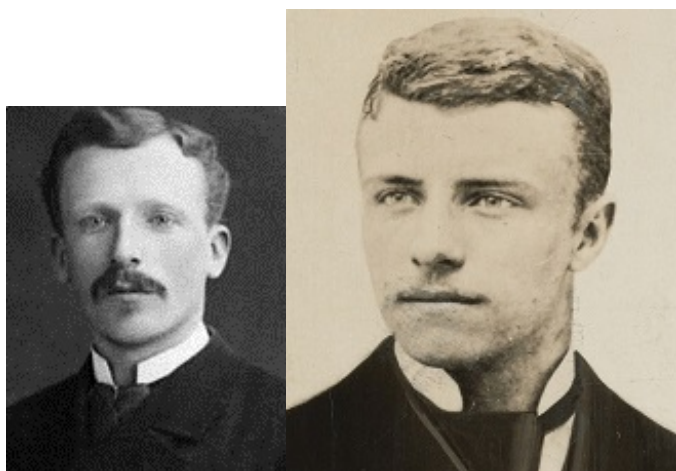
※本願寺は、マッキンリー大統領がオスマントルコ皇帝、ナポレオン皇帝の血筋であることを優性遺伝子ブリーダーから聞きだし、敵の勢力伸張を阻止すべく、暗殺した。

-----

ジュリー・ポナパルトの子（ナポレオン皇帝の弟リュシアン・ポナパルトの曾孫）



ルチアーノ・デル・ギャロ（1853～1917）※画像なし  
ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ（1853～1890） 画家



アルベルト・デル・ギャロ（1854～1947）※画像なし  
テオドロス・ファン・ゴッホ（1857～1891）  
セオドア・ルーズベルト（1858～1919） アメリカ合衆国第20代大統領 任期1881

1900年、大統領選の副大統領候補として当選、翌年9月大統領マッキンリーの死去（暗殺）に伴い

大統領に昇格する。なお就任時の42歳と10ヶ月は史上最年少である。ちなみに、テディベアが誕生したのは大統領就任後のことである。1904年セオドア・ルーズベルトの下問で、陸海軍統合会議が、仮想敵国を色で表現した長期的戦略計画と言われているカラーコード戦争計画の一環である、対日本「オレンジ計画（War Plan Orange）」の作成に着手。1905年には日露戦争で日本・ロシア間の調停をつとめ、停戦からポーツマス条約での和平交渉に尽力した。この和平交渉の斡旋によってルーズベルトは1906年ノーベル平和賞を受賞した。セオドア・ルーズベルト [wiki](#) より

※本願寺は、ゴッホがナポレオンの血筋であることを知っていたため、終生マークした。ゴッホは本願寺の指揮による邪教信者の集団的なイヤガラセにより精神に異常をきたした。邪教信者によるイヤガラセの様子は「ゴッホの手紙」で知ることが出来る。

不遇なゴッホは生前、本願寺の指示によって画商から見向きもされず、死んでから大々的に篡奪され、エクспロイトされた。生前に売れた絵は一枚であり、8000円ほどであった。その時に売れた絵の額縁の方が高かったという話もある。このように、皇帝の子は本願寺によって徹底的にマークされていることが分かる（世界中に大量の信者がいるために可能なことだ）。

本願寺はガーフィールド大統領がオスマントルコ皇帝、ナポレオン皇帝の血筋であることを優性遺伝子ブリーダーから聞きだし、敵の勢力伸張を阻止するべく、暗殺した。生き延びたセオドアは大谷による暗殺を免れ、日本に巢食う邪教を排除すべく、「黄禍論」を立ち上げて日本仏教をロックオンした。浄土真宗が特に有害であるという認識はなかったようだ。

-----  
ルイ＝リュシアン・ボナパルトの子（ナポレオン皇帝の弟リュシアン・ボナパルトの孫）



ルイ＝クロヴィス（1859～？）※画像なし

パトリック・J・ケネディ（1858～1929） ケネディ家始祖

パトリックは、常に少しの現金といくらかの賢明な助言で、裕福ではないアイルランド人を手伝い、ボストン東部（アイルランド移民とプロテスタント教徒が混在している地域）の大部分の人々の好感と尊敬を得ていた。彼はマサチューセッツ州下院議員を1884年から5年間務め、その

後は州の上院議員を6年務めた。彼はボストンの主要な民主党議員として名声を確立し、セントルイスで開かれた1888年の全国党大会では、グローバー・クリーブランドからスピーチをするため招待された。1895年に政界を引退した後は、様々な選挙委員会や民主党の非公式戦略委員会の委員として政治キャリアを費やした。wikiより

※パトリックがナポレオン皇帝の孫であることを知っていた本願寺は、この頃から既にケネディ家をロックオン、全力でマークしていた。

-----

ルートヴィヒ2世の子（優性遺伝子ブリーダーによる）



フェデリコ・ガルシア・ロルカ（1898～1936） 詩人

※ロルカは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたルートヴィヒ2世の子と考えられる。親友であったダリ、ブニエールと共にシュルレアリスム運動に加わった。

-----

オットー1世の子孫



シルヴィオ・ベルルスコーニ（1936） 第51、57、58、60代イタリア首相 任期1994～95、2001～11

9年間にわたりイタリアの首相に相当する閣僚評議会議長（第51・57・58・60代）を務めた、政界再編（タンジェントポリ）後のイタリア政界を代表する政治家の1人である。また1994年からフォルツァ・イタリアの初代党首を務め、2009年の自由の人民（自由国民党）結党後も同党党首を務めたため、両党党首の通算在任期間は約17年にも及んだ。ベルルスコーニの総資産は約78億ドル（世界第118位）で、2011年時点で世界有数の資産家の1人でもある。シルヴィオ・ベルルスコーニwikiより



ウラジミール・プーチン（1952） ロシア連邦第2代、第4代大統領 任期1999～2004、2012～現在

第4代大統領就任以前には、第2代大統領（在任2000年 - 2008年）、第5代および第9代政府議長（首相）（1999年 - 2000年、2008年 - 2012年）、統一ロシア党首（2008年 - 2012年）、ベラルーシ・ロシア連合国家（正式名称は「連合国家」）の閣僚会議議長（首相に相当、2008年 - ）など政府・政党の要職を歴任している。このほか、サンクトペテルブルクの副市長を務めたこともある。元KGBのエージェントであり、現在のロシア連邦の政治家でもあり、その中でも特に大きな影響力を持っている政治家である。ウラジミール・プーチンwikiより

※プーチン大統領は、本願寺（タナトス）の陰謀によって翻弄された先祖たち（ピョートル3世

、ナポレオン皇帝、ガーフィールド大統領、ルートヴィヒ2世、オットー1世)の無念を晴らすべく立ち上がった。

-----

ジェームズ・ガーフィールドの子 (優性遺伝子ブリーダーによる)



アラン・ロブ=グリエ (1922~2008) 作家、映画監督

※ロブ=グリエは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたガーフィールドの子孫と考えられる。「羅生門」に衝撃を受けた。「去年マリエンバードにて」の脚本を手がけ、監督作には「快楽の斬新的横滑り」「危険な戯れ」「囚われの美女」などがある。



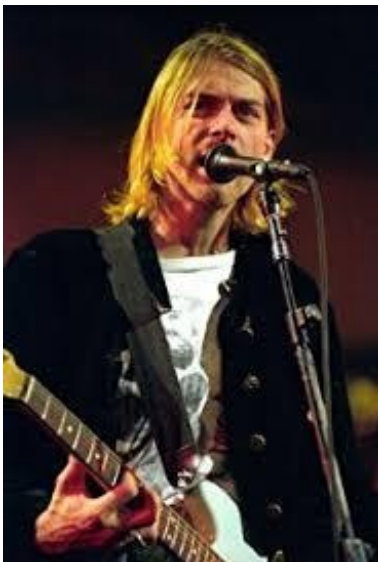
イェジー・スコリモフスキー (1938) 脚本家、映画監督

※スコリモフスキーは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたガーフィールドの子孫と考えられる。ポランスキーと共に「水の中のナイフ」の脚本を手がけた。



テレンス・スタンプ（1938）俳優

※テレンス・スタンプは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたガーフィールドの子孫と考えられる。出演作には「コレクター」「世にも怪奇な物語」「テオレマ」「スーパーマン2」などがある。



カート・コバーン（1967～1994）ニルヴァーナ

※カートは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたテレンス・スタンプの子と考えられる。優性遺伝子ブリーダーによる寝ている間のレイプを批判し、殺害された。カートは、遺作アルバム「イン・ユーテロ」の中で「レイプ・ミー」「フランシス・ファーマー・ハヴ・ハー・リベンジ・オン・シアトル」という組織批判の歌を歌っている。

-----  
パトリック・J・ケネディの子





ジョセフ・P・ケネディ（1888～1969） ルーズベルト政権副大統領

フランクリン・ルーズベルト（1882～1945） アメリカ合衆国第32代大統領 任期1933～1945

巨大な資産をバックグラウンドにした民主党の有力政治家であり、アメリカのカトリック教徒および、アイルランド系アメリカ人の実力者でもあった。フランクリン・ルーズベルトの大統領選出時（1932年）に財政支援を行った功によって、初代証券取引委員会委員長（1934年）、連邦海軍委員会委員長（1936年）、在イギリスアメリカ合衆国大使（1938年～1940年）のポストを歴任した。ジョセフ・P・ケネディ [wiki](#) より

世界恐慌、第二次世界大戦時のアメリカ大統領であり、20世紀前半の国際政治における中心人物の1人。彼の政権下でのニューディール政策と第二次世界大戦への参戦による戦時経済はアメリカ合衆国の経済を世界恐慌のどん底から回復させたと評価される。フランクリン・ルーズベルト [wiki](#) より

※フランクリン・ルーズベルトは優性遺伝子ブリーダーによるパトリック・J・ケネディの子であり、本体ジョセフ・Pの影武者である。

-----  
ジョセフ・P・ケネディの子



ジョセフ・P・ケネディ Jr（1915～1944）

いわゆるケネディ家の長子であったが、第二次世界大戦中に戦死した。最終階級は海軍大尉 (Lieutenant) 。ジョセフ・P・ケネディ [J r w i k i](#) より



ジョン・F・ケネディ (1917~1963) アメリカ合衆国第35代大統領 任期1961~1963

20世紀生まれの最初の大統領であり、カトリック教徒として初の (現在まで唯一の) 大統領であり、アイルランド系アメリカ人としても最初の大統領となった。さらに (著作『勇気ある人々』で) ピューリツァー賞を受賞した唯一の大統領である。

ケネディの在任中、ピッグス湾事件、キューバ危機、ベルリンの壁の建設、米ソの宇宙開発競争、公民権運動の高まり、ベトナム情勢の悪化など多くの歴史的イベントが発生しているが、特にキューバ危機の対応においては「第三次世界大戦」「米ソ全面核戦争」の危機を回避したと評価される。

若くして大統領となったケネディは就任時からアメリカ国民に期待され、現在に至るまでアメリカ人の好きな大統領ランキングの上位にいるが、大統領選挙における不正やマフィアとの関係、マリリン・モンローをはじめとする複数の相手との不倫、ピッグス湾事件やベトナム戦争における優柔不断な態度などに対する批判も多い。ジョン・F・ケネディ [w i k i](#) より



ロバート・ケネディ (1925~1968) ケネディ政権司法長官 任期1961~1964

1963年に兄が暗殺された後、ニューヨーク州の上院議員選に出馬して11月に勝利したが、1968年に、民主党の大統領候補指名選のキャンペーン中に暗殺された。兄のジョンと共に『ジャック&ボビー (Jack and Bobby)』の愛称で親しまれた。ロバート・ケネディ [w i k i](#) より

※3人ともケネディ家の期待の星である。そのため、東西本願寺によって3人は厳重に監視されていたに違いない。じつは3人の中で一番才能があったのがジョセフJ rである可能性が高い。そのため、ケネディ家としてはジョセフJ rを死んだことにして潜伏させるのが良いと判断した。ということでジョセフJ rは29歳で死んだことにし、人知れず潜伏生活に入った。彼は潜伏しながら弟のジョンやロバートにいろいろと指示を出していた可能性がある。

-----

ジョセフ・P・ケネディの子（優性遺伝子ブリーダーによる）



レイモンド・ジョセフ・テラー/左（1948） ペン&テラー

※テラーはコメディアンであり、ブーヴィエ2世の子であるペン・ジレットと共に「ペン&テラー」を結成した。手品のタネ証しを芸風としている。出演映画にはアーサー・ペン監督による傑作ギャグ映画「死ぬのはオレたちだ!？」がある。

テラーの母親は、優性遺伝子ブリーダーにジョセフ・P・ケネディの遺伝子を所望したようだ。それによりテラーは生まれた。ミドルネームのジョセフがそれを物語っている。テラーは、一切口を聞かない無口な芸風で知られているが、「死ぬのはオレたちだ!？」のラストで喋っている。

-----

ジョセフ・P・ケネディJ rの子（優性遺伝子ブリーダーによる）



ジム・モリソン（1943～1971） ドアーズ

※ジムは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたジョセフ・P・ケネディJrの子と考えられる。



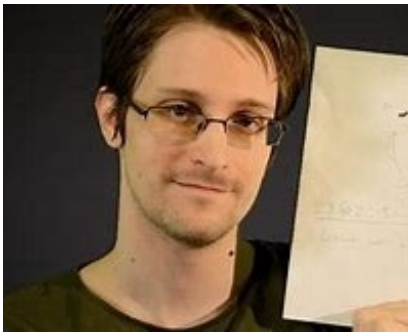
ジャド・フェア（1954） ハーフ・ジャパニーズ

※ジャド・フェアはアサンジによく似ている。彼は、アヴァンギャルドなロックバンド「ハーフ・ジャパニーズ」を結成した。ハーフ・ジャパニーズの名前は、当時、彼が日本人のハーフ女性と付き合っていたことに由来している。彼らの音楽は聴くものではない。笑 彼らの価値はその姿勢にある。ペン・ジレットやニルヴァーナのカート・コバーンも彼らの姿勢に惚れ、金銭的に援助していた。



ジュリアン・アサンジ（1971） ウィキリークスの創設者

オーストラリアのジャーナリスト、出版社、発行人、インターネット活動家。内部告発および情報漏洩の情報を伝えるウェブサイトウィキリークスの広報人、編集長として知られる。ウィキリークスを創設する以前はプログラマ、ハッカーとして活動していた。いくつもの国に住んでいたことがあり、報道の自由・検閲・調査報道に関する自身の見解を述べる機会に、公共の場所に姿を現している。ジュリアン・アサンジ [wiki](#) より



エドワード・スノーデン（1983）

アメリカ国家安全保障局 (NSA) および中央情報局 (CIA) の元局員である。NSAで請負仕事をしてきたアメリカ合衆国のコンサルタント会社「ブーズ・アレン・ハミルトン」のシステム分析官として、アメリカ合衆国連邦政府による情報収集活動に関わった。2013年6月に、香港で複数の新聞社（ガーディアン、ワシントン・ポストおよびサウスチャイナ・モーニング・ポスト）の取材やインタビューを受け、これらのメディアを通じてNSAによる個人情報収集の手口を告発したことで知られる（PRISM）。エドワード・スノーデン [wiki](#) より

※ジョセフJrは死んだことにして潜伏している間、優性遺伝子ブリーダーによって、或いは自力でジャド・フェア、アサンジ、スノーデンを儲けた。彼は80歳くらいまで生きたのではない。ジョセフJrが潜伏し、ジョンやロバートを操っていたことを知っていた本願寺は、ジョセフJrを引き釣り出すため、意図して、テレビカメラの前でジョンやロバートを暗殺し、ハデに宣伝した。弟たちが暗殺された様子を彼がどのように見ていたかは、アサンジやスノーデンのその後の行動に見ることができる。

-----

アメリカ大統領ジョン・F・ケネディの子



キャロライン・ケネディ（1957）

同月19日の皇居での信任状捧呈式を経て、正式に特命全権大使に着任した。皇居までの沿道には約4000人がつめかけた。信任状捧呈式においては、キャロラインは平服で皇居に現れた。史上初の女性の駐日アメリカ合衆国大使となった。ただ、儀式にふさわしくない服装およびその際の立

ち居振る舞いに問題があるとして、失礼との批判が起こった。キャロライン・ケネディ [wiki](#) より



ジョン・F・ケネディ Jr (1960~1999)

1999年7月16日、JFKジュニアは小型飛行機「パイパー・サラトガ」を操縦し、アメリカ東部のニュージャージー州フェアフィールドのエセックス郡空港から、一家の別荘があるマサチューセッツ州マーサズ・ヴィニヤード島へ向かう途中、ロングアイランド沖の海上で消息を断った。

小型機の捜索としては例のない大規模な捜索が消息を断った周辺の海域で行われた結果、20日にマーサズ・ヴィニヤード島南西沖約12キロの海底で、妻とその姉ローレン・ベセットと共に、遺体が発見された。沿岸警備隊の発表によると、機体は胴体部分が水深約35メートルの海底に横たわり、中から3人の遺体が見つかったという。ジョン・F・ケネディ Jr [wiki](#) より

※本願寺自身もそうだが、ダヴィデの一族も死んだことにして逃亡・潜伏することがあることを本願寺は知っていた。そのため、本願寺はジョンとロバートが逃げられないよう、公開処刑に処した。しかし、ジョン・F Jrは大谷にやられないように先手を打ち、死んだことにして潜伏し、トランプ大統領を支援する謎の人物「Q」としてネットに声明文を発表している。Qはアルファベットの17文字目だが、これはケネディ大統領を意味しているようだ。ジョン・F・ケネディは17年生まれだからだ。Jrだとされている人物の写真がネットに公開されているが、現在初老のペン・ジレットにそっくりである。ブーヴィエ2世の遺伝子が成せる業だ。

オスマントルコ皇帝ムスタファ3世の一族～乾隆帝、マイソール王国、宝暦事件、トンブリー朝タイ王国、詩聖タゴール、マハトマ・ガンディー、ジャワハルラール・ネルー



ムスタファ3世（1717～1774） オスマントルコ帝国第26代皇帝 在位1757～1774

乾隆帝（1711～1799） 清皇帝 在位1735～1796

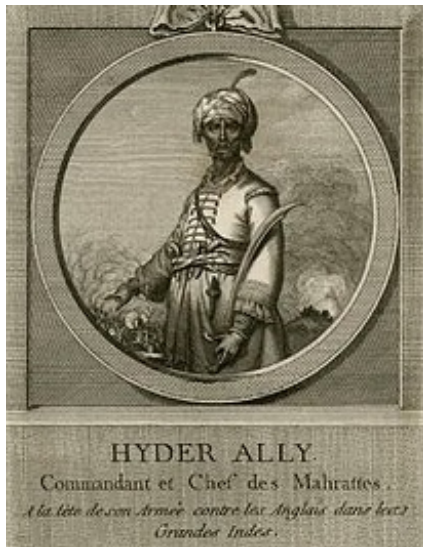
竹内敬持（1712～1768） 宝暦事件

雍正帝と側妃の熹貴妃ニオフル氏（孝聖憲皇后、満州正黄旗出身）との間の子（第4子）として生まれる。祖父康熙帝に幼い頃からその賢明さを愛され、生まれつきの皇帝になる人物と目されており、太子密建を経て即位した。

質素であった祖父、父とは違い派手好みの性格であった。父の死去後、25歳で即位すると父雍正帝の時代に助命された曾静を張熙とともに逮捕し凌遲刑に処して、その一族も処刑するなどその存在感を示した。乾隆帝wikiより

1728年（享保13年）頃上京して徳大寺家に仕え、山崎闇斎門下の松岡仲良・玉木正英に師事して、儒学・垂加神道を学んだ。家塾を開いて、若い公家たちに大義名分を重んじる垂加神道の教義を教授したことから、1758年（宝暦8年）の宝暦事件では、中心人物として重追放の処分を受けて京都を追放された。その後1767年（明和4年）山県大弐らによる明和事件の際、関与を疑われて八丈島に流罪となり、送られる途中に三宅島で病没した。竹内敬持wikiより

※徳川家光の子孫である乾隆帝は、日本に潜入して竹内敬持を名乗り、天皇制を破壊すべく「宝暦事件」を起こした。これは父の康熙帝（松平頼常）が日本にいた頃から構想を温めていた作戦なのかもしれない。その後、竹内敬持（乾隆帝）は八丈島に流された後、清に帰還した。彼は庶子を投入した影武者部隊を徴用し、日本にいながら同時に清とマイソール王国の皇帝を務めた。



**Şehzade Ibrahim**（1721）※画像なし

ハイダル・アリー（1720～1782）　マイソール王国皇帝　在位1761～1782

18世紀後半、マイソール王国にヒンドゥー王朝のオデヤ朝に代わるイスラーム政権マイソール・スルターン朝を樹立し、王国を南インド一帯にまたがる大国とした。そのため、インドを植民地化しようとしていたイギリス勢力と衝突し、第一次マイソール戦争、第二次マイソール戦争で激しく争ったが、第二次戦争のさなか死亡した。ハイダル・アリーwikiより





**Şehzade Seyfeddin** (1728～1732) ※画像なし  
タークシン (1734～1782) トンブリー朝初代王

泰緬戦争(1765年-1767年)でビルマのコンバウン王朝の軍が侵攻してきた際、タークシンはカンペーンペットの知事に就くため任地へ赴こうとしていたが、急遽アユタヤの防衛に加わった。しかし、エーカタット王が大砲の音で鼓膜が破れるのを恐れて「大砲は朕の許可を得てから撃て」と命じたにも関わらず、無断で砲撃したタークシンは罪を問われることになったためにラヨンへ出奔する。タークシンは挙兵するとチャンタブリーを制圧した後、潮州系華人を集めてチャオプラヤー川を遡りアユタヤへ向かったが、すでにアユタヤ王朝は滅亡し、ビルマ軍によってアユタヤの町も徹底的に破壊されていたため、1767年(タイ仏歴2310年)、下流のトンブリーに王朝を建てた。これがトンブリー王朝である。タークシンwikiより

※アフメト3世の子はタイに出現してタークシンとしてトンブリー朝を開いている。しかし、西本願寺門主湛如の子であるチャオプラヤーの指揮により、邪教信者がタークシンに対してイヤガラセを続けたため、タークシンは発狂した。その後発狂を理由にチャオプラヤーに殺害された。

-----  
オスマントルコ皇帝アブデュルハミト1世の子



Şehzade Sultan Abdullah (1776) ※画像なし

イントラピタック (?~1782) トンブリー朝皇子

チャーマラージャ9世 (1774~1796) マイソール王国皇帝※画像なし

チャーマ・ラージャ9世の治世もまた、養父や義兄の治世と同様にサルヴァーディカーリー（首席大臣）のハイダル・アリーが全権を握っており、彼も名ばかりの王にすぎなかった。その治世の間、1779年にハイダル・アリーはカダパのナワーブとチトラドゥルガ・ナーヤカ朝を滅ぼし、さらにマイソール王国の領土を広げた。チャーマラージャ9世 [wiki](#) より

-----  
チャーマラージャ9世の子



クリシュナラージャ3世 (1794~1868) マイソール王国第23代王 在位1799~1868

1794年7月14日、マイソール王チャーマ・ラージャ9世の息子として生まれた。1799年5月4日、マイソール王ティプー・スルターンが第四次マイソール戦争で死亡したのち、イギリスはマイソール・スルターン朝の廃絶を決め、ヒンドゥーのオデヤ朝の復活を決定した。こうして、6月30日に彼はマイソールにおいて即位式を挙げ、王位を継承した。また、戦後にマイソールの領土はイギリスとマラーター王国、ニザーム藩王国に割譲され、その領土はほぼ半分になった。wikiより

---

クリシュナラージャ3世（オスマントルコ皇帝アブデュルメジト1世）の子



**Fülane Sultan**（1860）※画像なし

チャーマラージャ10世（1863～1894）　マイソール王国第24代王　在位1868～1894

マハトマ・ガンディー（1869～1948）

タゴール（1861～1941）

1865年6月18日、祖父である藩王クリシュナ・ラージャ3世の養子として王太子となり、1868年3月27日に同王が死亡したことにより、チャーマ・ラージャ10世がその藩王位を継承した。

1881年3月25日、先王の代より長らくイギリスに奪われていた内政権が返却され、チャーマ・ラージャ10世は藩王国の内政権を行使できるようになった。チャーマ・ラージャ10世は、先王ク

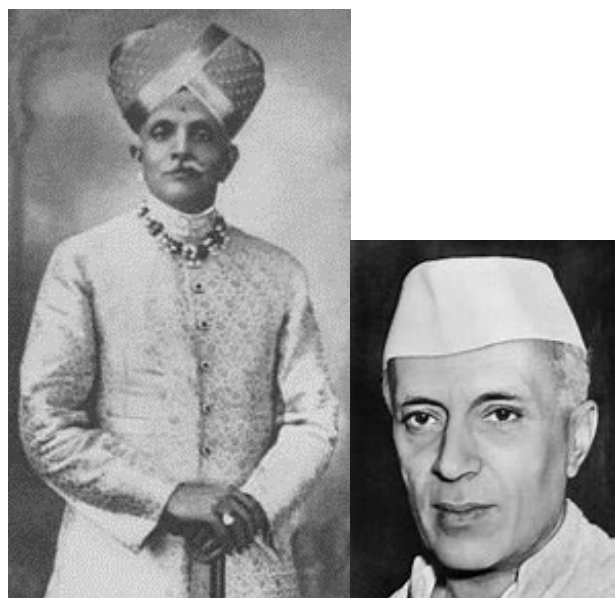
リシュナ・ラージャ3世の治世よりイギリスに評価化されていた優秀な支配体制の発展に努め、開明的近代化政策を推し進めた。チャーマラージャ10世 [wiki](#) より

インド独立の父。「マハトマー (महात्मा ) 」とは「偉大なる魂」という意味で、インドの詩聖タゴールから贈られたとされているガンディーの尊称である（自治連盟の創設者、アニー・ベサントが最初に言い出したとの説もある）。また、インドでは親しみをこめて「バープー」 (बापू : 「父親」の意味) とも呼ばれている。なお、インディラ・ガンジーとの血縁性は一切ない。マハトマ・ガンディー [wiki](#) より

1916年には来日し、日本の国家主義を批判した。この時、親交のあった岡倉天心の墓を訪れ、天心ゆかりの六角堂で詩を読んだ。またマハトマ・ガンディーらのインド独立運動を支持し（ガンディーにマハトマ=偉大なる魂、の尊称を贈ったのはタゴールとされる）、ロマン・ロランやアインシュタインら世界の知識人との親交も深かった。マハトマ・ガンディーと同様にマリア・モンテッソーリのインド滞在時にはモンテッソーリとの交流を経てモンテッソーリ教育を真の平和教育と賞賛、強く支持していた。ドイツのノーベル賞物理学者ハイゼンベルクには、東洋哲学を教えている。タゴール [wiki](#) より

※乾隆帝（ハイダル・アリー）の玄孫であるチャーマラージャ10世は、マハトマ・ガンディーでもある。若い頃の2人は顔がそっくりである。ガンディーは、マイソール王国の王家の血筋だったのだ。ダヴィデの一族は、代々が諜報員・工作人員としての心得を持つが、ガンディーもその例に漏れず、弁護士に扮して南アフリカに潜入し、大英帝国や邪教の息がかかった悪党たちの監視を続けていた。ガンディーが親日家だったのは、竹内敬持（乾隆帝）の玄孫だったからだ。

-----  
オスマントルコ皇帝メフメト6世の子



**Fenire Sultan**（1888）※画像なし

クリシュナラージャ4世（1884～1940）　マイソール王国第25代王　在位1894～1940

ジャワハルラール・ネルー（1889～1964）　インド共和国初代首相

1878年にはマハーラージャ大学が設立されていたが、女子にも教育を受けさせるということで、1901年にはマハーラーニー大学が設立された。また、1916年7月1日には首都マイソールにマイソール大学が開設された。そのため、20世紀にマイソール藩王国はインドにおいて、他の藩王国やイギリス直轄領よりも高い教育水準を誇っていた。

また、1908年8月にはカーヴェーリ川水力発電事業が開始され、1912年6月30日には送電が始まったばかりか、1911年11月にはクリシュナラージャサーガラ・ダム建設が着工、1913年10月2日にはマイソール銀行が設立された。このように、その治世はさまざまな社会改革が行われ、「模範的」な国家とされた。

こうした近代化の努力はその治世を通して続けられ、20世紀前半にマイソール藩王国を訪れたマハトマ・ガンディーさえも、クリシュナ・ラージャ4世をヒンドゥーの伝統で理想的君主であるラーマとし、藩王国を「ラーマ・ラージャ（ラーマの王国）」と称した。クリシュナ・ラージャ4世  
w i k i より

インド国民会議派の一員としてマハトマ・ガンディーとともにインド独立運動の最も著名な指導者となり、1947年に独立を達成したインドの初代首相に就任した。国際政治では「第三世界」の中心的人物として注目された。国内の経済政策では計画経済を推進したが、成功を収めるには至らず、晩年に行き詰まりを見せる中、死亡した。ジャワハルラール・ネルー w i k i より

-----  
クリシュナラージャ4世の子（オスマントルコ皇帝メフメト6世の孫）



チャーマラージャ11世（1919～1974）　マイソール王国第26代王　在位1940～1947

インディラ・ガンディー（1917～1984） インド共和国首相

1940年3月11日、父でありマイソール藩王国王太子であったカンティーラヴァ・ナラシンハ・ラージャが死亡し、叔父で藩王クリシュナ・ラージャ4世の養子となって王太子となった。同年8月3日、クリシュナ・ラージャ4世も後を追うように死亡し、チャーマ・ラージャがチャーマ・ラージャ11世が藩王位を継承した。

1947年8月15日、インド・パキスタン分離独立時、マイソール藩王国はインドへと帰属することとなった。これにより、実に500年に及ぶ歴史を持つマイソールの王朝は終わりを告げた。チャーマラージャ11世 [wiki](#) より

インドの初代首相であるジャワハルラール・ネルーは父。息子にインド第9代首相を務めたラジーヴ・ガンディー、及びサンジャイ・ガンディーがおり、この政治家一族は「ネルー・ガンディー王朝」と呼ばれるようになった。 [インディラ・ガンディー wiki](#) より

※バングラデシュ大統領+インド大統領の種族（東本願寺門主琢如の一族） [ギャーニー・ジャイル・シン](#) が大統領任期中に [インディラ・ガンディー](#) 首相の暗殺を指揮している。



ラジーヴ・ガンディー（1944～1991） 第9代インド首相 任期1984～1989

※バングラデシュ大統領+インド大統領の種族（東本願寺門主琢如の一族） [ラーマスワーミ・ヴェンカタラマン](#) が大統領任期中に [ラジーヴ・ガンディー](#) 首相の暗殺を指揮している。

-----

オスマントルコ皇帝アブデュルハミト2世の子



**Dündar Ali Osman** (1930) ※画像なし

マンモハン・シン (1932) 第17代インド首相 任期2004～2014

---

チャーマラージャ11世の子 (オスマントルコ皇帝メフメト6世の曾孫)



**Srikantadatta Narasimharaja Wadiyar** (1953～2013)

ナレンドラ・モディ (1950) 第18代インド首相 任期2014～現在

オスマントルコ皇帝セリム3世の一族～道光帝、曾国藩、胡林翼、李鴻章、西郷隆盛、吉田松陰、西太后、大本教、中江兆民、ジャン・コクトー、ミケランジェロ・アントニオーニ、ジェームズ・ディーン、つげ義春

---

オスマントルコ皇帝ムスタファ3世（アブデュルハミト1世）の子



セリム3世（1762～1808） 第28代皇帝 在位1789～1807

嘉慶帝（1760～1820） 清第7代皇帝 在位1796～1820

竹内主計（1763?～1824）※画像なし

乾隆帝の十五男として生まれる。乾隆60年（1795年）、85歳の乾隆帝から譲位を受けるが、乾隆帝は太上皇となっても実権は手放さなかったため、嘉慶帝は飾り物の皇帝に甘んじた。

乾隆帝が嘉慶4年（1799年）に崩御すると、嘉慶帝は真っ先に乾隆帝が重用していた奸臣和珅を誅殺した。周りの人間全てが和珅のことをろくでもない奸臣であると見抜いていたのに、毫碌した乾隆帝だけは和珅を信任し続けたため、乾隆帝が活着している間はどうしようもなく、和珅は国家に入るべき歳入のかなりの額を懐に入れていた。和珅から没収した財産は、実に国家の歳入の10～15年分に当たったといわれている。嘉慶帝 [wiki](#) より

八丈島に流罪となった父と別れ、新潟に逃げ平原家の人別に入り名を変えたとされている。以下約100年、菩提寺の火事により資料が焼失してしまった為詳細不明。『某が天秤を担いで魚を売り歩いてた所へ、3歳位の子供(主計?)を連れた塾生と思われる人から「この子供を頼む」と言われ、子供とかなりの金を預けられ、その足で四ツ郷屋へ走った』とのこと。竹内主計 [wiki](#) より



※竹内敬持（乾隆帝）が八丈島に流された際、平原家に養子に入ったが、それ以降の記録は菩提寺が焼けたために残っていないという。タクシ（チュクチ）を由来に竹内を名乗っていた嘉慶帝は、竹内、武内、武知、武智、武市、高市、田口、出口などの新しい祖となった。その後、彼は本土に帰還して嘉慶帝として中国皇帝を務めた。或いは、庶子が嘉慶帝の影武者を演じ、嘉慶帝自身はずっと日本にいたかもしれない。



ムスタファ4世（1779～1808） 第29代皇帝 在位1807～1808

道光帝（1782～1850） 清第8代皇帝 在位1820～1850

武市正恒（？～1849）※画像なし

ムスタファ4世はセリム3世の復位によって自身の帝位や命が脅かされることを恐れ、幽閉中のセリム3世を殺害させた。イスタンブールに入ったアレムダルらはセリム3世の死を知り、やむなくもう1人の帝位継承権者であるムスタファ4世の異母弟マフムト2世を担ぎ上げて即位させた。弟の即位によってムスタファ4世は廃位され、幽閉された。ムスタファ4世wikiより

武勇に優れており、皇子時代、天理教徒の反乱（癸酉の変）時に紫禁城に踏み込んだ反乱軍を自ら討伐している。

嘉慶年間よりイギリスからのアヘン密輸が激増し、国内で中毒患者が増加した。皇族の中にもアヘンが蔓延し、健康面でも風紀面でもその害は甚だしいものがあった。またアヘンの輸入増加により、それまで清の大幅な黒字だった対英貿易が赤字に転落し、国内の銀が国外へ流出することで国内の銀相場は高騰した。当時の清では日本の三貨制度と同様に銀貨と銅銭が混用されていたため、物価体系に混乱を来した。例えば徴税は主に銀で行われていたため、銭貨で見ると実質的な増税となった。wikiより

武市家の財力が飛躍的に向上したのは、父・正久の代のときに累代の功績が藩に認められ、「白札」の身分を与えられたことに始まる。また文化年間、仁井田に加え、池、西野地、上野尻に領地を持ち、その総高は五一石余りであったとされ、郷士としては相当程度の富を有していたと考えられる。こうした名家・武市家の総領を父から引き継いだ正恒は、武芸に励んだだけでなく、漢詩や舞踊、絵画に至るまでを習得。身分制度の抑圧との戦い、強烈なエリート意識は、妻テツとの間の長男・武市瑞山（幼名：鹿衛）の後年の人格形成に影響を与えたといえる。 w i k i より

※道光帝は父や祖父のように日本に潜入した。本国では道光帝を演じることを影武者に指示し、自分は日本で工作活動に従事した。凶悪な白人列強の中国への侵入を防ぐには、まずは日本をめるべきだと考えたのだろう。道光帝はもちろん、庶子を投入して影武者部隊を指揮していた。時と場合により、影武者が道光帝を演じ、或いは武市正恒を演じた。これにより、同時期に別の場所で活動することができた。

-----  
オスマントルコ皇帝ムスタファ4世（マフメト2世の子）



**Emine Sultan**（1808）※画像なし

曾国藩（1811～1872） 湘軍指導者

胡林翼（1812～1861） 郷勇指導者

※胡林翼はŞehzade Bayezidとして生まれ、曾国藩もŞehzade Muradとして生まれていた。Emine Sultan以外はアフメト2世の子である。世界を悪から救うためにオスマントルコ皇帝は子どもたちを早世したことにして潜伏させ、愛新覚羅の一族として育てたのだ。



**Şehzade Ahmed** (1822～1823) ※画像なし

アブデュルメジト1世 (1823～1861) 第31代皇帝 在位1839～1861

李鴻章 (1823～1901) 淮軍指導者

※Şehzade Ahmedは死んだことにしてアブデュルメジト1世として成長した。2人ともマフメト2世の子である。世界を悪から救うためにオスマントルコ皇帝は子どもたちを早世したことにして潜伏させ、愛新覚羅の一族として育てたのだ。



**Şehzade Abdul Hamid** (1827～1828) ※画像なし

武市半平太/瑞山 (1829～1865)

西郷隆盛 (1828～1877) ※画像なし

大石弥太郎 (1829～1916)

優れた剣術家であり、黒船来航以降の時勢の動揺を受けて攘夷と挙藩勤王を掲げる土佐勤王党を結成。参政・吉田東洋を暗殺して藩論を尊王攘夷に転換させることに成功した。京都と江戸での国事周旋によって一時は藩論を主導し、京洛における尊皇攘夷運動の中心的役割を担ったが、八月十八日の政変により政局が一変すると前藩主・山内容堂によって投獄される。1年8か月20日の獄中闘争を経て切腹を命じられ、土佐勤王党は壊滅した。武市半平太wikiより

薩摩藩の下級武士であったが、藩主の島津齊彬の目にとまり抜擢され、当代一の開明派大名であ

った斉彬の身近にあって、強い影響を受けた。斉彬の急死で失脚し、奄美大島に流される。その後復帰するが、新藩主島津忠義の実父で事実上の最高権力者の島津久光と折り合わず、再び沖永良部島に流罪に遭う。しかし、家老・小松清廉（帯刀）や大久保利通の後押しで復帰し、元治元年（1864年）の禁門の変以降に活躍し、薩長同盟の成立や王政復古に成功し、戊辰戦争を巧みに主導した。江戸総攻撃を前に勝海舟らとの降伏交渉に当たり、幕府側の降伏条件を受け入れて、総攻撃を中止した（江戸無血開城）。西郷隆盛wikiより

土佐勤王党結成に尽力し、盟約書の起草を手掛けるなど同党幹部として活動、戊辰戦争においては板垣退助の率いる迅衝隊で小軍監などを務め各地を転戦した。明治維新後は新政府に出仕するが程なく辞し、以降は高知政界における「古勤王党派」の中心人物として影響力を有した。同じく勤王党員で吉田東洋暗殺の実行犯の大石団蔵は従兄弟にあたる。大石弥太郎wikiより

※武市正恒（道光帝）の子、武市半平太は庶子の異母兄弟を投入した影武者部隊を組み、同時進行で西郷隆盛を演じながら工作活動に従事した。本願寺に狙われていた彼は、まず西南戦争時で死んだことにし、その後の余生を大石弥太郎として過ごした。隆盛の姿は知られていないが、大石弥太郎の写真に実際の隆盛の姿を確認できる。



**Şehzade Nizameddin** (1835~1838)

咸豊帝 (1831~1861) 清第9代皇帝 在位1850~1861

吉田松陰 (1830~1859)

大久保利通 (1830~1878)

清岡道之助 (1833~1864) ※画像なし

木戸孝允 (1833~1877)

少年時代、高松順蔵（坂本龍馬の姉千鶴の夫）に就いて経史を学び、のち高知城下へ出て、陽明学者岡本寧浦に師事した。江戸遊学の際は佐藤一斉から陽明学を学んだほか、軍学者若山勿堂（壮吉）の下で洋式兵学を学んでいる。文久年間に入ると勤王思想にも影響を受け、藩命で大坂に赴任したことを契機に志士として活動を開始した。文久2年（1862年）には京都で初めて武市瑞山と会い、大いに意気投合したという。清岡道之助wikiより

長州藩士として討幕に努め、薩長同盟を推進。明治維新に貢献し、維新の三傑の一人に挙げられた。維新政府では総裁局顧問専任や参議を務め、版籍奉還、廃藩置県を実現。岩倉使節団にも同行した。西南戦争中に病死。木戸孝允wikiより

日本の武士（長州藩士）、思想家、教育者。山鹿流兵学師範。一般的に明治維新の精神的指導者・理論者・倒幕論者として知られる。私塾「松下村塾」で、後の明治維新で重要な働きをする多くの若者に思想的影響を与えた。吉田松陰wikiより

明治維新の元勳であり、西郷隆盛、木戸孝允と並んで「維新の三傑」と称される。また「維新の十傑」の1人でもある。初代内務卿（実質上の首相）を務めるなど、内閣制度発足前の明治政界のリーダーであった。

大久保家の家格は御小姓と呼ばれる身分で下級藩士であった。幼少期に加治屋町（下加治屋町方限）に移住し、下加治屋町の郷中や藩校造士館で、西郷隆盛や税所篤、吉井友実、海江田信義らと共に学問を学び親友・同志となった。大久保利通wikiより

※本願寺に狙われていた松陰は、死んだことにしてその後を大久保利通として生きたが、大久保を演じている際にも本願寺に狙われてしまい、暗殺された。つまり、大久保の写真に実際の吉田松陰の姿を見ることができる。清岡道之助は、死んだことにしてその後の人生を木戸孝允として生きた。



**Hayriye Sultan** (1832～1833) ※画像なし

西太后 (1835～1908)

アロー戦争により熱河に逃れた咸豊帝は1861年に崩御した。咸豊帝死後の政治の実権をめぐり、載淳の生母である懿貴妃と咸豊帝の遺命を受け載淳の後見となった8人の「顧命大臣」載垣、端華、肅順らは激しく争った。

懿貴妃は皇后ニオフル氏と咸豊帝の弟で当時北京で外国との折衝に当たっていた恭親王奕訢を味方に引き入れた。そして咸豊帝の棺を熱河から北京へ運ぶ途上でクーデターを発動し載垣、端華、肅順らを処刑（辛酉政変：1861年）し権力を掌握した。西太后wikiより

-----

オスマントルコ皇帝アブデュルメジト1世の子



**Naime Sultan** (1840~1843) ※画像なし

愛新覚羅奕ケン (1840~1891)

岡田以蔵 (1838~1865) ※画像なし

中岡慎太郎 (1838~1867)

高杉晋作 (1839~1867)

田中光顕 (1843~1939)

文久元年(1861年)8月、武市の結成した土佐勤王党に加盟(ただし、名簿の写しからは池内蔵太や弘田恕助と共に名前が削除されたとみられる)。文久2年(1862年)6月、参勤交代の衛士に抜擢され、瑞山らと共に参勤交代の列に加わり京へ上る。

これ以降、土佐勤王党が王政復古運動に尽力する傍ら、平井収二郎ら勤王党同志と共に土佐藩下目付の井上佐市郎の暗殺に参加。また薩長他藩の同志たちと共に、安政の大獄で尊王攘夷派の弾圧に関与した者達などに、天誅と称して集団制裁を加える。越後出身の本間精一郎、森孫六・大川原重蔵・渡辺金三・上田助之丞などの京都町奉行の役人や与力、長野主膳(安政の大獄を指揮した)の愛人・村山加寿江の子・多田帯刀などがこの標的にされた(村山加寿江は橋に縛りつけ

られ生き晒しにされた)。このため後世「人斬り以蔵」と称され、薩摩藩の田中新兵衛と共に恐れられた。岡田以蔵wikiより

安政元年（1854年）、間崎哲馬に従い経史を学び、翌年には武市瑞山（半平太）の道場入門して剣術を学ぶ。安政4年（1857年）、野友村庄屋利岡彦次郎の長女・兼（かね）15歳と結婚。文久元年（1861年）には武市が結成した土佐勤皇党に加盟して、本格的に志士活動を展開し始める。中岡慎太郎wikiより

長州藩では、晋作の渡航中に守旧派の長井雅楽らが失脚、尊王攘夷（尊攘）派が台頭し、晋作も桂小五郎（木戸孝允）や久坂義助（久坂玄瑞）らと共に尊攘運動に加わり、江戸・京都において勤皇・破約攘夷の宣伝活動を展開し、各藩の志士たちと交流した。高杉晋作wikiより

土佐藩士武市半平太の尊王攘夷運動に傾倒してその道場に通り、土佐勤王党に参加した。叔父の那須信吾は吉田東洋暗殺の実行犯だが、光顕も関与した疑いもある。しかし文久3年（1863年）、同党が八月十八日の政変を契機として弾圧されるや謹慎処分となり、翌元治元年（1864年）には同志を集めて脱藩。のち高杉晋作の弟子となって長州藩を頼る。

第一次長州征伐後に大坂城占領を企図したが、新撰組に摘発されたぜんざい屋事件を起こして大和十津川へ逃れる。薩長同盟の成立に貢献して、薩摩藩の黒田清隆が長州を訪ねた際に同行した。第二次長州征伐時では長州藩の軍艦丙寅丸に乗船して幕府軍と戦った。後に帰藩し中岡慎太郎の陸援隊に幹部として参加。田中光顕wikiより

※岡田は、愛新覚羅奕ケンの影武者として生まれた。岡田以蔵は父と同様に、同時進行で中岡慎太郎や高杉晋作を演じ、工作活動に従事した。岡田はまず最初に自分を死んだことにして、その後は中岡や高杉晋作として生きたが、本願寺に狙われていた彼は結局その後、2年しか生きられなかった。



**Mevhibe Sultan**（1840～1841）※画像なし



ワンチェン（1841～1896） 西太后の妹

出口なお（1837～1918） 大本教教祖

出口なお（以下、『なお』と表記）は、江戸時代末期から明治時代中期の極貧の生活の中で日本神話の高級神「国常立尊」の神憑り現象を起こした。当時、天理教の中山みきなど神憑りが相次いでおり、なおの身に起ったことも日本の伝統的な巫女/シャーマニズムに属する。当初は京都丹波地方の小さな民間宗教教祖にすぎなかったが、カリスマ的指導者・霊能力者である出口王仁三郎を娘婿としたことで、彼女の教団「大本」は全国及び海外に拡大した。出口なおwikiより



**Nazime Sultan**（1847）※画像なし

鳥尾小弥太（1848～1905） 陸軍中将

中江兆民（1847～1901）

文久3年（1863年）に奇兵隊に入隊。乱暴者なので、親から勘当され、自ら鳥尾と名を定めた。長州征伐や薩摩藩との折衝などの倒幕活動に従事した。戊辰戦争では建武隊参謀や鳥尾隊を組織し、鳥羽・伏見の戦いをはじめ、奥州各地を転戦する。戦後は和歌山藩に招聘され、同藩の軍制改革に参加している。

維新後は兵部省に出仕して陸軍少将、のち陸軍中将に昇進した。西南戦争では、大阪において補給や部隊編成などの後方支援を担当した。陸軍大輔、参謀局長、近衛都督などの要職を歴任する。明治13年（1880年）、病気のために一切の職を辞し、君権と民権が互いに尊重しあう状態を理想とする『王法論』を執筆した。鳥尾小弥太wikiより

フランスの思想家ジャン＝ジャック・ルソーを日本へ紹介して自由民権運動の理論的指導者となった事で知られ、東洋のルソーと評される。衆議院当選1回、第1回衆議院議員総選挙当選者の一人。中江兆民wikiより

※道光帝の子に流産した子がいるが、実際にはちゃんと生まれて生き延び、長じて中江兆民となった。中江兆民は鳥尾小弥太という別の顔も持っていた。鳥尾の名の由来はトリオである。名もない道光帝の子、中江兆民、鳥尾の「3人でひとり」、じつは「トリオである」というところから転じ、「鳥尾」を名乗っていた。この手は、安部公房脚本と勅使河原宏感得の「燃え尽きた

地図」でも使用されていた。

---

Cemile Sultanの子（アブデュルメジト1世の孫）



**Ayşe Sıdika Hanımsultan**（1875～1938）※画像なし

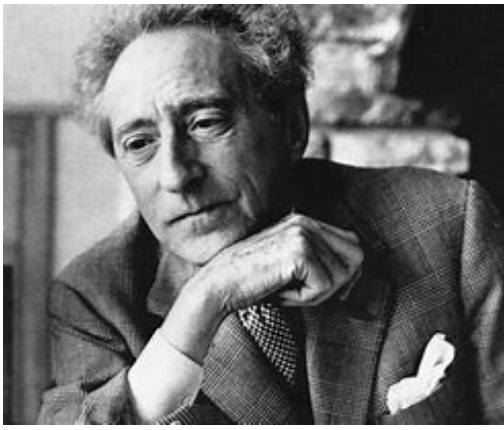
出口王仁三郎（1871～1948） 皇道大本

出口王仁三郎は、大本において聖師と呼ばれる。強烈な個性と魅力とカリスマを持っていたとされ、メディアを含め様々な手法を駆使して昭和前期の大本を日本有数の宗教団体に発展させた。その一方で実像をとらえることが難しく、奔放な言動により敵対者から多くの非難を浴びる。その評価は現在でも定まっていない。いわゆる「国家神道」と相容れない教義を展開した大本は危険勢力として政府の弾圧を受け、自身も7年近く拘束された。太平洋戦争終結後は教団の再建に尽力するも、まもなく病により死去した。彼の思想と布教方法は戦後の新宗教に大きな影響を与えた。出口王仁三郎wikiより

※嘉慶帝の一族は、邪教である日本仏教を倒すために大本教を設立した。しかし、大谷に睨まれ、特攻によってダイマナイトで教会を破壊されている（第二次大本弾圧）。当初、幸徳秋水や堺利彦と生年が同じであるため、上田喜三郎は2人の影武者を務めていた。だが、1899年に影武者を解放されると「天狗に導かれて霊界を遍歴した」といい、2年後には出口なおと共に大本教を創立した。

---

オスマントルコ皇帝ムラト5世の孫



**Ahmed Nihad** (1883～1954) Şehzade Mehmed Selaheddinの子※画像なし  
ジャン・コクトー (1889～1963) 詩人、映画監督

※コクトーの代表作には「双頭の鷲」「詩人の血」などがある。



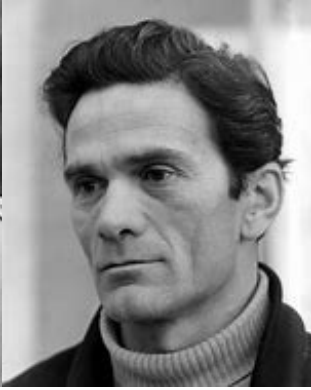
**Ayşe Hanımsultan** (1902～?) Hatice Sultanの子※画像なし  
アンリ=ジョルジュ・クルーゾー (1905～1977) 映画監督

※クルーゾーの代表作には「密告」「スパイ」「悪魔のような女」「囚われの女」などがある。



**Sultanzade Hayri Bey** (1912～?) Hatice Sultanの子※画像なし  
ミケランジェロ・アントニオーニ (1912～2007) 映画監督

※アントニオーニの代表作には「さすらい」「情事」「夜」「太陽はひとりぼっち」「赤い砂漠」「欲望」「砂丘」などがある。アントニオーニは小津、黒澤、橋本がはじめた新機軸を先鋭化し、映画「情事」として結実させた。これにより、人類の知性は数歩、歩みを進めた。



**Sultanzade Celaleddin Bey** (1916～1997) Fatma Sultanの子※画像なし

アラン・レネ (1922～2014) 映画監督

ピエル・パオロ・パゾリーニ (1922～1975) 映画監督

船越英二 (1923～2007) 俳優

※パゾリーニは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたクルーゾーの子と考えられる。代表作には「テオレマ」「豚小屋」「ソドムの市」がある。「ソドムの市」が完成した直後にゲイの少年に惨殺された。そこには、明らかに政治的な意図がある。

レネは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたコクトーの子と考えられる。代表作には「去年マリエンバードで」「二十四時間の情事」「戦争は終わった」などがある。船越英二はレネによく似ているが、影武者として日本に生まれたようだ。

-----  
オスマントルコ皇帝アブデュルハミト2世の孫





**Şehzade Harun Osmanoğlu** (1932) Şehzade Abdülkerimの子※画像なし

ジェームズ・ディーン (1931～1955) 俳優

ロマン・ポランスキー (1933) 映画監督

伊丹十三 (1933～1997) 映画監督

1992年、特に『ミンボーの女』では、ゆすりをやる暴力団は市民が勇気を持って賢く行動すれば引き下がることを描き、観客は大喜びした。これまで日本では、映画でヤクザ（暴力団員）をヒーローとして扱い礼賛していた（「ヤクザ映画」というジャンルが存在する）。

公開1週間後の5月22日夜に、自宅の近くで刃物を持った5人組に襲撃され、顔や両腕などに全治三ヶ月の重傷を負うが、「私はくじけない。映画で自由をつらぬく。」と宣言した（病院に搬送された際に取材陣から「大丈夫ですか!？」と声をかけられて、声こそ出なかったもののピースサインで応えた）。警察は現場の車より山口組（稲川組）系後藤組の犯行であることを突き止めた。5人の組員が4年から6年の懲役刑となった。伊丹十三wikiより

※ディーンの子がジミーに冷たかったのは単に実の父親ではなかったからだろう。代表作には「エデンの東」「理由なき反抗」「ジャイアンツ」がある。他にもテレビ時代の作品がアメリカでDVD化されている。

ポランスキーの代表作には「水の中のナイフ」「反撥」「ローズマリーの赤ちゃん」「チャイナタウン」「テナント」「死と処女」「赤い航路」「ナインスゲート」などがある。伊丹十三は、映画界に於ける小津、黒澤に継ぐ日本の知性である。「タンポポ」「マルサの女」「スーパーの女」などがある。



**Hatice Türkân Ratib Hanımsultan** (1941) Mihrishah Selcuk Sultanの子※画像なし

つげ義春 (1938) 漫画家

小学校卒業と同時にメッキ工場に勤め、転職、家出を繰り返しながらメッキ工に戻る。17歳で漫

画家を志し、18歳で若木書房より『白面夜叉』でデビュー。貸本雑誌『迷路』『忍風』などに作品を発表。1967年からは発表の舞台を『ガロ』に移し『沼』『チーコ』『山椒魚』などで注目され始め、『ねじ式』で多くの読者に衝撃を与える。

これらの作品を発表した1967年 - 1968年の一時期、精力的に執筆したものの、1970年代からは体調不良もあり年に数作という寡作なペースとなる。神経症に苦しみながらも1984年発刊の『COMICばく』誌上に『無能の人』などを毎月連載。1987年を最後に漫画作品は発表していない。wikiより

※つげ義春は日本漫画界の知性である。つげの語り口は、漱石に似て人を捉えて離さないものがある。その性格が災いし、つげは短編作品しか残していないが、どれも一本の長編映画の如き重厚感を放つ。つげ作品の余韻たるや、天下一品である。



**Mediha Şükriye Nami Hanım** (1947) Sultanzade Osman Nami Osmanoğlu Beyの子※画像なし

デヴィッド・リンチ (1946) 映画監督

トム・ウェイツ (1949) ミュージシャン、俳優

※リンチの代表作には「イレイザーヘッド」「ブルーベルベット」「ツインピークス」「ロストハイウェイ」などがある。

-----  
ジェームズ・ディーンの子 (優性遺伝子ブリーダーによる)



ジェフリー・コムズ（1954） 俳優

※コムズは優性遺伝子ブリーダーによって生まれたディーンの子だと考えられる。生年を見ればぎりぎりである。よく見ると、睨んだ顔などは父ディーンに似ていることが良くわかる。出演作には「2つの頭脳を持つ男」「死霊のしたたり」「フロム・ビヨンド」などがある。ディーンほどの男のことだから子供はコムズ以外にも捜せばもっといる可能性もある。コムズの娘キャサリンもジミーに良く似ている。

オスマントルコ皇帝マフムト2世の一族①～曾国藩、東郷平八郎、乃木希典、児玉源太郎、袁世凱、黄金榮、蒋介石、小津安二郎、手塚治虫、ジャン・クロード＝カリエル、ヴェルナー・ヘルツォーク

---

マフムト2世の子



**Şehzade Murad** (1811～1812) ※画像なし

曾国藩 (1811～1872) 湘軍指導者

児玉半九郎 (1811～1856) 児玉源太郎父

湖南省湘郷県の出身。弱体化した清朝軍に代わり、湘軍を組織して太平天国の乱鎮圧に功績を挙げた。wikiより

※曾国藩の一族の顔の特徴は、垂れた目尻である。

**Şehzade Ahmed** (1822～1823)

鳩山十右衛門博房 (?～1877) 鳩山和夫父

袁保中 (1823～1874) 袁世凱父

-----

曾国藩の子





曾紀鴻（1848～1881）※画像なし

東郷平八郎（1848～1934）

乃木希典（1849～1912）

蔣肇聡（1842～1895） 蒋介石父※画像なし

海部昂蔵（1850～1927） 海部俊樹祖父※画像なし

大島義昌（1850～1926）

日本の武士（長州藩士）、陸軍軍人、華族。関東都督、軍事参議官、第3師団長等を歴任する。官位は陸軍大将正二位勲一等功二級子爵。第90・96・97代内閣総理大臣の安倍晋三は玄孫にあたる（安倍の父方の祖母・本堂静子が大島の孫娘）。大島義昌wikiより

※大島は、西南戦争、東学党の乱、日清戦争、日露戦争に出征している。日露戦争後、陸軍大将に進み、新設の関東総督に就任する。先祖の故地である満州を奪還せんと考えていたか定かではないが、関東都督府を満州に築いた。

日本の幕末から昭和時代初めの薩摩藩士、海軍軍人。最終階級は元帥海軍大将。日清戦争では「浪速」艦長として高陞号事件に対処。日露戦争では連合艦隊司令長官として指揮を執り日本海海戦での完勝により国内外で英雄視され、「陸の大山 海の東郷」「アドミラル・トーゴー」「東洋のネルソン」と呼ばれた。世界三大提督（ジョン・ポール・ジョーンズ、ホレーショ・ネルソン、東郷平八郎）の1人。東郷平八郎wikiより

日本の武士（長府藩士）、軍人、教育者。日露戦争における旅順攻囲戦の指揮や、明治天皇の後を慕って殉死したことで国際的にも著名である。階級は陸軍大将。栄典は贈正二位勲一等功一級伯爵。第10代学習院長に任じられ、迪宮裕仁親王（昭和天皇）の教育係も務めた。「乃木大将」や「乃木将軍」と呼ばれることも多く、「乃木神社」や「乃木坂」に名前を残している。乃木希典wikiより

-----

曾国藩（児玉半九郎、鳩山十右衛門博房、袁保中）の子



児玉源太郎（1852～1906）

日本の陸軍軍人、政治家。階級位階勲等功級爵位は陸軍大将正二位勲一等功一級子爵。日露戦争において満州軍総参謀長を勤め、勝利に貢献した。 wikiより



鳩山和夫（1856～1911）

1875年、開成学校（のち東京大学）を卒業する。第1回留学生に選ばれ、米国へ留学。コロンビア大学で法学士を取得する。1880年、イエール大学で法学博士号を取得する。米国留学中に専修大学の前身である専修学校の設置構想に加わっており、専修学校創立者である相馬永胤・田尻稻次郎・目賀田種太郎・駒井重格らに準ずる存在であった。帰国後、代言人（弁護士）・東京帝国大学講師等を歴任した。 wikiより

※子孫と考えられる鈴木宗男に似ている。



- 袁世凱（1859～1918） 中華民国総統
- 馮国璋（1859～1919） 袁世凱部下
- 王士珍（1861～1930） 袁世凱部下
- 段祺瑞（1865～1936） 袁世凱部下
- 黄金榮（1865～1953） 青幫首領
- 手塚太郎（1862～1932） 手塚治虫祖父※画像なし

中国清末民初期の軍人・政治家。中華帝国初代皇帝。北洋軍閥の総帥。大清帝国第2代内閣総理大臣を務めたが、清朝崩壊後は第2代中華民国臨時大総統、初代中華民国大総統に就任。一時期中華帝国皇帝として即位し、その際に使用された元号より洪憲皇帝と呼ばれることもある。袁世凱wikiより

国民党が北伐を開始し1927年に到着するとかつて世話をした蒋介石と再会し同年4月、張嘯林、杜月笙とともに中華共進会を結成、共産党を弾圧した上海クーデターに参加。その功績から高い地位を与えられた。1937年の日本軍の上海占領が起これと杜月笙は蒋介石に従い脱出したが張嘯林はそのまま留まり日本に協力し黄金榮も留まったが中立の立場を維持した。黄金榮wikiより

---

鳩山和夫の子



鳩山秀夫（1884～1946）

一郎より優秀とされ、「賢弟愚兄」と評されたという。兄は政治家の道に進んだが、秀夫は法律家として身を立てた。1926年に42歳で東大を退官して弁護士を開業し、1932年の第18回衆議院議員総選挙に旧千葉2区から立憲政友会公認で立候補し当選、1期のみ代議士を務めている。ただし、鳩山秀夫には政治家としての目立った業績はない。比較的短命だったのは酒におぼれたせいだと佐野眞一は記している。wikiより

---

蒋肇聡（乃木希典）の子



乃木直典（1889～1889） ※画像なし

蒋介石（1887～1976） 中華民国総統

孫文の後継者として北伐を完遂し、中華民国の統一を果たして同国の最高指導者となる。1928年

から1931年と、1943年から1975年に死去するまで国家元首の地位にあった。しかし、国共内戦で毛沢東率いる中国共産党に敗れて1949年より台湾に移り、その後大陸支配を回復することなく没した。 蒋介石wikiより

---

手塚太郎の子



手塚燦（1900～1986） 手塚治虫父※画像なし

小津安二郎（1903～1963） 映画監督

「小津調」と称される独特の映像世界で優れた作品を次々に生み出し、世界的にも高い評価を得ている。「小津組」と呼ばれる固定されたスタッフやキャストで映画を作り続けたが、代表作にあげられる『東京物語』をはじめ、女優の原節子と組んだ作品群が特に高く評価されている。小津安二郎wikiより

※小津は日本の知性であり、世界の多くの芸術家を開眼させた男だ。彼の作品を見ればわかるが、小津は多角的な視点を網羅し、人間には目が2つしかないということを忘れさせる。「東京物語」では、母親の死に家族の絆の喪失を重ね合わせていた。これを見抜いたミケランジェロ・アントニオーニは、この、人類最先端の知性を獲得せんと、習作に習作を重ね、遂に映画「情事」を生むことが出来た。

---

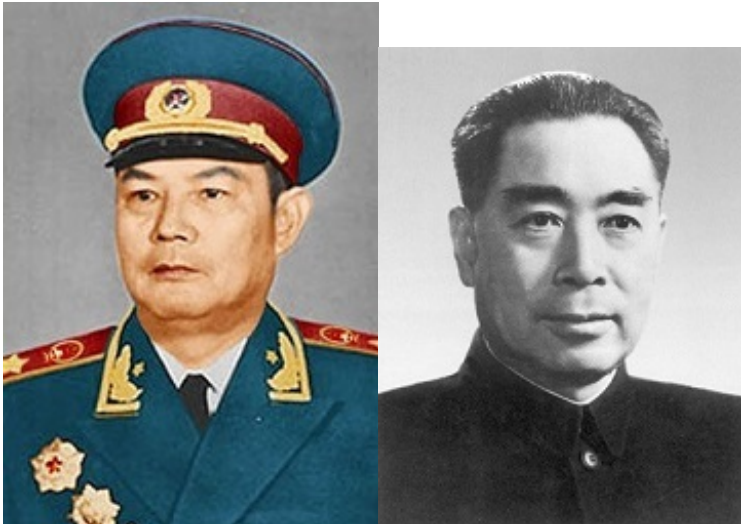
袁世凱17人の息子



袁世凱17人の息子のうちのひとり（生没年不詳）※画像なし

董必武（1886～1975） 中華人民共和国主席代理

朱徳（1886～1976） 全国人民代表大会常務委員会委員長



袁世凱17人の息子のうちのひとり（生没年不詳）※画像なし

葉劍英（1897～1986） 全国人民代表大会常務委員会委員長

周恩来（1898～1976） 初代国務院総理

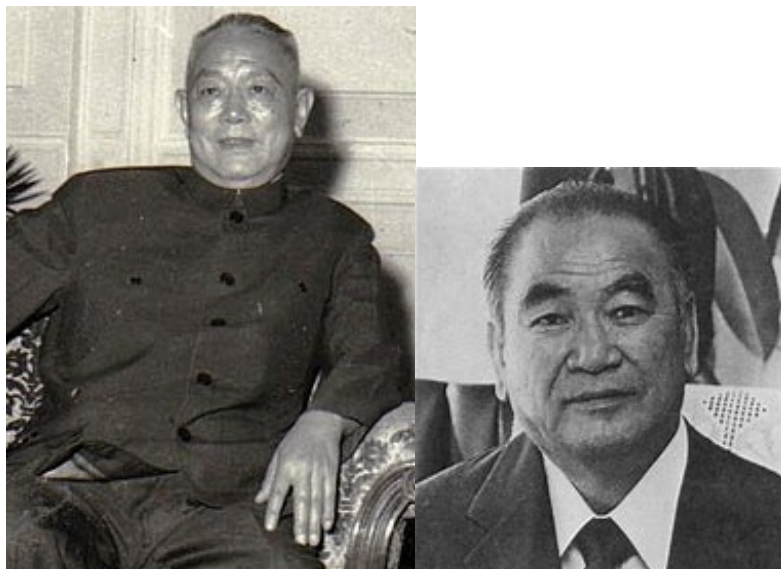


袁世凱17人の息子のうちのひとり（生没年不詳）※画像なし

楊尚昆（1907～1998） 第4代中華人民共和国主席国家主席

山村辰雄（1903～1974） 山村組組長、初代共政会会長※画像なし

中華人民共和国主席、中国共産党中央政治局委員、中国共産党中央軍事委員会第一副主席などを歴任。長征経験者。1980年代から1990年代前半の中国政界で権勢を誇った中共八大元老の一人で、弟の楊白冰と共に「楊家将」と呼ばれ、中国人民解放軍に大きな影響力を及ぼした。楊尚昆wikiより



袁世凱17人の息子のうちのひとり（生没年不詳）※画像なし

李先念（1909～1992） 第3代中華人民共和国主席国家主席

稲川聖城（1914～2007） 稲川会初代会長

土岡博（1917～1952） 土岡組組長※画像なし



袁世凱17人の息子のうちのひとり（生没年不詳）

華国鋒（1921～2008） 最高指導者

林喜一郎（1920～1985） 林一家総長・稲川会最高顧問※画像なし

大西政寛（1923～1950） 土岡組若頭※画像なし

石井隆匡（1924～1991） 稲川会二代目会長※画像なし

山本健一（1925～1982） 三代目山口組若頭山健組組長※画像なし

美能幸三（1925～2010） 美能組初代組長※画像なし



袁世凱 17人の息子のうちのひとり（生没年不詳）

江沢民（1926） 第5代中華人民共和国主席国家主席

李鵬（1928～2019） 第7代全国人民代表大会常務委員長

朱鎔基（1928） 第5代国務院總理

安藤昇（1926～2015） 安藤組組長

浜田幸一（1928～2012） 自民党議員

-----

袁世凱の孫





袁世凱の孫（生没年不詳）※画像なし

海部俊樹（1931） 第76、77代内閣総理大臣 任期1989～1991

渡辺広康（1934～2004） 実業家、元東京佐川急便社長

田原総一郎（1937） 放送作家

安部譲二（1937） 安藤組組員、作家

日本の小説家、漫画原作者、タレント。元暴力団員であり、自らの服役経験を基にした自伝的小説『塀の中の懲りない面々』などの著作がある。また漫画原作者としても、第51回小学館漫画賞を受賞した柿崎正澄の漫画『RAINBOW-二舎六房の七人-』などの作品がある。安部譲二wikiより

1977年1月に東京12チャンネルを退社して、フリーランスとなりジャーナリストの道へ進む。東京12チャンネル時代の後輩には小倉智昭がいた。『文藝春秋』での田中角栄インタビュー（1974年に同誌に掲載された立花隆の『田中角栄・金脈と人脈』に対する反論）や『トゥナイト』の三浦インタビューなどで徐々に知名度を上げる。

政治、ビジネス、科学技術と幅広い執筆活動が続けるが、次第に政治関係に執筆活動のスタンスを移し、テレビでは1987年より「朝まで生テレビ!」、1989年4月より「サンデープロジェクト」（2010年3月終了）討論コーナーの司会・出演を務める。また、ラジオでは2007年10月から「田原総一郎 オフレコ!」（2011年3月以降は週1回放送から月1回放送の「田原総一郎 オフレコ!スペシャル」）のパーソナリティを務めている。「サンデープロジェクト」終了後は、2010年4月から始まったBS朝日の「激論!クロスファイア」に出演。青春出版社の月刊誌「BIG TOMORROW」で連載を持つ。また、1989年からテレビ朝日系の選挙特別番組「選挙ステーション」第2部（討論コーナー）で司会を務めている。田原総一郎wikiより



袁世凱の孫（生没年不詳）※画像なし

胡錦濤（1942） 第6代中華人民共和国主席国家主席

温家宝（1942） 第6代国務院総理

稲川裕紘（1940～2005） 稲川会三代目会長※画像なし

渡辺芳則（1941～2012） 五代目山口組組長※画像なし

辛炳圭（1940） 稲川会第五代目会長

2013年1月23日、米財務省は、Kiyota,JiroことSin,Byon-Gyuを国外の著しい犯罪組織とその支持者であるとして、国際緊急経済権限法・大統領令13581号に基づき、米国司法権の及ぶ範囲の資産凍結、米国民との取引禁止させる制裁対象とした。辛炳圭wikiより



袁世凱の孫（生没年不詳）※画像なし

鈴木宗男（1948） 日本維新の会議員

※鈴木宗男は、鳩山和夫の子の遺伝子を所望した母親が、優勢遺伝子ブリーダーを使って生んだと考えられる。祖父である鳩山和夫にそっくりである。鈴木宗男が重用していた黒人の秘書は、ソナムディ・アジギウェがイディ・アミンの子か孫だろう。家族である。彼らは家族という組織が一番強いことを知っている。本願寺は鈴木宗男が鳩山和夫の血筋であることを優性遺伝子ブリーダーから聞きだし、勢力伸張を阻止すべく、汚名を着せて投獄した。彼は「収監」という言葉を使っていたが。



袁世凱の孫（生没年不詳）※画像なし

習近平（1953） 中華人民共和国第5代最高指導者 任期2012～現在

李克強（1955） 第7代国務院総理

内堀和也（1952） 稲川会第六代目会長※画像なし

中国共産党の第5代最高指導者、第18期・第19期中国共産党中央委員会総書記、党中央軍事委員会主席。第7代国家主席、第4代国家中央軍事委員会主席。第17期・18期・第19期中国共産党中央政治局常務委員会委員、中国共産党中央国家安全委員会主席。

中国共産党の第4世代の最高指導者であった胡錦濤元総書記の後任として、2012年より第5代中国共産党中央委員会総書記、第6代中国共産党中央軍事委員会主席、2013年より第7代中華人民共和国主席、第4代中華人民共和国中央軍事委員会主席を務め、中華人民共和国の最高指導者の地位にある。習近平wikiより

-----

手塚粲の子（優性遺伝子ブリーダーによる小津安二郎の子）



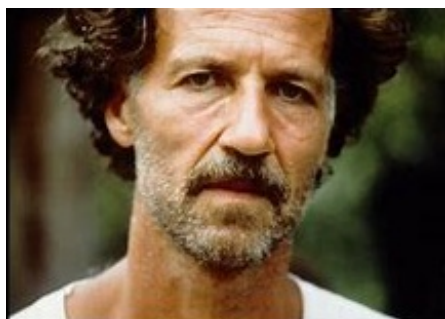
手塚治虫（1928～1989） 漫画家・アニメ作家

※いわずと知れた漫画の神様である。卓越したストーリーテリングの妙ばかり取りざたされるが、昭和40年代に認（したた）められた作品群には、一流の陰謀家としての才能も伺うことができる。手塚は未完漫画「大地の顔役バギ」で、鞭打たれる牛の身体に「OZU」と書いている。これは何を意味するのだろうか？



ジャン＝クロード・カリエール（1931） 脚本家

※カリエールは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれた小津の子と考えられる。ブニュエルとの共同脚本が多い。



ヴェルナー・ヘルツォーク（1942） 映画監督

※ヘルツォークは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれた小津の子と考えられる。「生の証明」「アギーレ神の怒り」「フィッツカラルド」などがある。小津の信奉者としても知られている。



ヴィム・ヴェンダース（1945） 映画監督

※ヴェンダースは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれた小津の子と考えられる。「都会のアリス」「ことの次第」「エンド・オブ・バイオレンス」などで知られている。小津の信奉者としても知られている。



クレール・ドニ（1948） 映画監督

※ドニは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれた小津の子と考えられる。「ショコラ」「パリ、18区、夜。」などがある。小津の信奉者としても知られている。



アキ・カウリスマキ（1957） 映画監督

※カウリスマキは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれた小津の子と考えられる。監督作には「マッチ工場の少女」「コントラクトキラー」などがある。小津の信奉者としても知られている。



オスマントルコ皇帝マフムト2世の一族②～胡林翼、山口春吉、北一輝、大杉栄、鄧小平、ルイス・ブニユエル、サルトル、池田大作、キューブリック、宮崎駿、セックス・ピストルズ、マイケル・ジャクソン

---

オスマントルコ皇帝マフムト2世の子



**Şehzade Bayezid** (1812) 画像なし

胡林翼 (1812～1861) 郷勇指導者

1836年、進士となり翰林院編修となった。その後、貴州省安順・鎮遠の知府となり、ミャオ族蜂起や湖南省の李沅発の乱を鎮圧した。湖南巡撫張亮基・駱秉章に評価されて招聘されたが、貴州にとどまった。胡林翼wikiより

※胡林翼の一族の顔の特徴は、斜視である。



**Şehzade Nizameddin** (1835～1838) ※画像なし

Yicong (1831～1889) 道光帝第5子

胡イツフン (1840～1906)

李鴻章の淮軍を頼みにしていた朝廷は、新たに新兵を募集して同年11月に10營からなる新軍を組

織し、「定武軍」と名付けて胡燏棻に訓練を命じた。この訓練は天津市の東南、津南区小站で行われたため、「小站練兵」とも言われる。また胡燏棻は変法自強の必要性を説いて、下記の10カ条からなる近代化策を上奏した。定武軍の指揮は袁世凱に渡り新軍として再編成され、後の北洋軍閥へと発展していった。胡イツフンwikiより

---

オスマントルコ皇帝アブデュルアズイズの子（オスマントルコ皇帝マフムト2世の孫）



Şehzade Mehmed Şevket（1872～1899）※画像なし

高凌イ（1870～1940）

細野正文（1870～1939） 細野晴臣祖父※画像なし

北京政府では直隸派に近く、代理国務総理などを務めた高官である。また、後に親日政権である中華民国臨時政府に参加した。 wikiより

---

オスマントルコ皇帝アブデュルアズイズの孫







**Şehzade Mehmed Bahaeddin** (1883) ※画像なし

山口春吉 (1881～1938) 山口組組長

宋教仁 (1882～1913)

北一輝 (1883～1937)

鳩山一郎 (1883～1964) 内閣総理大臣

大杉栄 (1885～1923) アナーキスト

フランツ・カフカ (1883～1924) 生前は役人

大川周明 (1886～1957)

武昌蜂起が発生すると宋教仁も武昌に入った。11月、北一輝と上海に滞在、また各省都督代表連合会に湖南省都督府代表として出席。翌1912年1月、中華民国が成立し孫文が臨時大總統に就任した。翌月宣統帝が退位して清朝が滅亡、さらに翌月、孫文に代わって前政権の実力者であり、大きな軍事力を持つ袁世凱が臨時大總統に就任した。宋教仁wikiより

1910年頃まで淡路島で漁師をしていたが、これに見切りを付け神戸港に労務者として移住した。当初は神戸市生田区栄町にあった海運業・倉橋組で働いた。倉橋組では持ち前の体力と統率力で小者頭にのし上がった。その後1912年頃、当時神戸港で造船所の用心棒等を請け負い勢力を持っていた大嶋組の大嶋秀吉の傘下に入った。

大嶋組の下でも頭角を現し、その勢いに乗って1915年、神戸で沖仲仕約50人を集めて、人夫供給を主業務とする山口組を創設した。創設後、人夫供給だけでなく、浪曲興行にも進出し組の基盤

を確立していった。山口春吉wikiより

戦前の日本の思想家、社会運動家、国家社会主義者。二・二六事件を引き起こした皇道派青年将校の理論的指導者として逮捕され、軍法会議にかけられ、死刑判決を受け刑死した。北一輝wikiより

1912年（大正元年）に東京市会議員に当選。1915年（大正4年）に衆議院議員に当選して以来、政党政治家として活動。1954年（昭和29年）-1956年（昭和31年）の首相在任中、保守合同を成し遂げて自由民主党の初代総裁となり、日本とソビエト連邦の国交回復を実現した。また、彼の内閣（鳩山一郎内閣）から、55年体制が始まった。鳩山一郎wikiより

明治・大正期における日本の代表的なアナキストである。大逆事件の後にマルクス主義者の中で優勢になったアナ系の大立者であったために危険視され、関東大震災直後、憲兵隊司令部で不慮の死を遂げる。(甘粕事件)

自由恋愛論者で、居候中に堺利彦の義妹堀保子を強引に犯して結婚する。当時、保子は深尾韶と婚約していたが、これは破棄された。だが、栄は保子と入籍せず、神近市子に続き、伊藤野枝とも愛人関係となって、野枝は長女魔子を身ごもった。女性達からは常に経済的援助を受けていたが、野枝（とその子供）に愛情が移ったのを嫉妬した市子によって刺された日蔭茶屋事件（日影茶屋事件）では大杉は瀕死の重傷を負った。大杉栄wikiより

※1913年、宋教仁は31歳で死んだことにすると、中国から淡路島に移り、山口春吉として1915年に「山口組」を結成したようだ。2人は顔がよく似ている。つまり、同一人物の可能性もある。

カフカと大川周明は良く似ている。同一人物の可能性もある。カフカは、役人として勤務しながら同時に胡林翼の一族として諜報員活動にも従事していた可能性がある。その際、大川周明はカフカの影武者として働いた。カフカは死の際、友人に手記を燃やすように言付けたが、カフカの死後、友人の裏切りにより手記は小説として発表された。或いは、カフカは死んだことにして大川周明に変身し、日本に帰還したということも考えうる。

大杉はPujun本人だった可能性がある。アナキストとして活動したが、本願寺に狙われていたため、大杉は38歳で死んだことにし、潜伏した可能性があるが、本当に死んだかもしれない。



**Şehzade Mehmed Cemaleddin** (1890～1946) ※画像なし

大野判睦 (1890～1964) 政治家

中川文蔵 (1893～1878) 中川一郎父※画像なし

マックス・エルンスト (1891～1976) ドイツ表現主義

1918年、東亜経済調査局・満鉄調査部に勤務し、1920年、拓殖大学教授を兼任する。1926年、「特許植民会社制度研究」で法学博士の学位を受け、1938年、法政大学教授大陸部（専門部）部長となる。その思想は、近代日本の西洋化に対決し、精神面では日本主義、内政面では社会主義もしくは統制経済、外交面ではアジア主義を唱道した。大川周明wikiより

岸内閣時代、岸信介首相から大野派（白政会）を主流派として内閣に協力させることの見返りに後継総裁の念書を手に入れるが、これを反古にされる。一説にはこの事について岸は「床の間に肥溜めをおけるわけがない」と言い放ったという。大野判睦wikiより

※本願寺は優れた人、善人を憎んでいる。ただ、彼らは自分の口から上記のような憎まれ口を叩くことは無い。岸は、大野を貶めようと、何らかの魂胆があってこのようなことを口走ったのだろうか？本願寺は、大野が道光帝の血筋であることを優性遺伝子ブリーダーから聞きだしたため、岸信介や佐藤栄作のような犯罪者から攻撃されていたようだ。

エルンストは、ダダイスト、シュルレアリストとして知られている。ドイツ表現主義の作家ハンス・リヒター監修のオムニバス映画「金で買える夢」では映画監督として短編映画を1本手がけている。



**Şehzade Ömer Faruk** (1898～1969) ※画像なし

笹川良一 (1899～1995) フィクサー

ルイス・ブニユエル (1901～1983) 映画監督

Jacob Leonard Kubrick (1902～1985) スタンリー・キューブリック父※画像なし

勅使河原蒼風 (1900～1979) 勅使河原宏父※画像なし

ジャン＝ポール・サルトル (1905～1980) 哲学者・作家

Martin Konigsberg (1900～2001) ウディ・アレン父

Joseph Ginsburg (1898～1971) セルジュ・ゲンズブール父

フランスの哲学者、小説家、劇作家。内縁の妻はシモーヌ・ド・ボーヴォワール。右目に強度の斜視があり、1973年にはそれまで読み書きに使っていた左目を失明した。自分の意志でノーベル賞を拒否した最初の人物である。サルトルwikiより

大正・昭和時代の日本の政治運動家、社会奉仕活動家。大阪府三島郡豊川村小野原（現・箕面市小野原）出身。

国粋大衆党総裁、国際勝共連合名誉会長、衆議院議員、財団法人日本船舶振興会（現・公益財団法人日本財団）会長、全日本カレー工業協同組合特別顧問、福岡工業大学理事長を務めた。箕面市名誉市民。勲一等旭日大綬章受章者。笹川良一wikiより

※笹川良一は、池田大作と同じように日本を裏から牛耳る悪の権化として語られることが多い。しかし、それは誤解だろう。「一日一善」はウソではなかった。ただ、里子として家に迎えられた息子は、残念ながら東本願寺門主大谷光榮の一族である。

ブニユエルは映画監督として常にセンセーションを巻き起こし、権威と権威のウソを信じる愚かな大衆を攻撃した。代表作には「アンダルシアの犬」「黄金時代」「忘れられた人々」「小間使いの日記」「皆殺しの天使」「昼顔」などがある。



**Şehzade Mehmed Abdülaziz** (1901~1977) ※画像なし

Puxian (1901~1966) Yicongの子※画像なし

鄧小平 (1904~1997) 中華人民共和国

中華人民共和国を建国した毛沢東の死後、事実上の中華人民共和国の最高指導者となる。毛沢東が発動した文化大革命によって疲弊した中華人民共和国の再建に取り組み、「改革開放」政策を推進して社会主義経済の下に市場経済の導入を図るなど、同国の現代化建設の礎を築いた。鄧小平wikiより

※鄧小平はPuxianの影武者として生まれた。或いは同一人物である。世界中のフェイクメディアの一齐攻撃にひるむことなく、本願寺の陰謀である天安門事件を堂々と退けた偉大な人物である。鄧小平が大杉栄の子であるというポイントは斜視だけだが、彼が日本好きなのは愛新覚羅の一族だからだ。

-----  
愛新覚羅Puxian (鄧小平) の子 (道光帝の孫)





Yuyue (1922～1992) ※画像なし

マハティール・ビン・モハマド (1925) マレーシア第4、7代首相 任期1981～2003、2018～現在

池田大作 (1928) 創価学会3代会長

安部公房 (1924～1993) 作家、脚本家

中川一郎 (1925～1983) 政治家

総裁選後間もない1983年(昭和58年)1月9日、札幌パークホテル10階1022号室バスルームにて中川が死んでいるのを、妻の貞子が発見した。当初死因は「急性心筋梗塞」と発表されたが、2日後に「自殺」に訂正された。

中川の自殺から間もなく、高知県にいた後藤田正晴官房長官には、1月9日午前の段階で北海道警察と古巣の警察庁のルートを通じて中川の自殺を知らせる急報が伝えられていた。急報を聞いた後藤田は中曽根康弘総理に電話でこの真相を伝えた後に、記者団に対して中川が急死したことを発表した。その死因は遺族と中川の側近に配慮して伏せていた。中川一郎wikiより

これまで10度訪中し、北京、西安、鄭州、上海、杭州、広州などを訪れている。また、毛沢東、周恩来、鄧小平、江沢民、胡錦濤、温家宝といった政府指導者をはじめとする中国各界の要人と会見するなど、親密な関係にある。池田大作wikiより

マレーシアの政治家、医師。現在、同国首相。同国首相の中では最長の22年間(第4代:1981-2003、第7代:2018-)を務めている。開業医から政治家に転じ、欧米諸国ではなく、日本の経済成長を見習おうというルックイースト政策をはじめ、長期に及ぶ強力なリーダーシップにより、マレーシアの国力を飛躍的に増大させた。マハティールwikiより

※安部は、マハティール、池田大作と共にYuyueの影武者として生まれた。同じ系譜に属する勅使河原宏の映画に脚本家として協力。代表作には「おとし穴」「砂の女」「他人の顔」「燃え尽きた地図」がある。

池田大作は日本を裏から牛耳る悪の権化のように語られることが多い。しかし、それは誤解だっ

たようだ。温家宝首相など、中国政府と仲が良いのも、池田大作が愛新覚羅の一族の血を引いていることを中国側が知っているのだろう。

本願寺は、中川が道光帝の血筋であることを優性遺伝子ブリーダーから聞きだしたため、敵の勢力伸張を阻止すべく、暗殺された。

-----

マックス・エルンストの子（オスマントルコ皇帝アブデュルアズイズの曾孫）※優性遺伝子ブリーダーによる



ケン・ラッセル（1927～2011） 映画監督

※ラッセルは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたエルンストの子と考えられる。顔が似ている。監督作には「フレンチドレッシング」「肉体の悪魔」「ゴシック」「白蛇伝説」「レインボー」「チャタレイ婦人の恋」などがある。



ジム・ジャームッシュ（1953） 映画監督

※ジャームッシュは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたエルンストの子と考えられる。監督作には「パーマネントバケーション」「ストレンジャー・ザン・パラダイス」などがある。



アンドリュー・ニコル（1964） 脚本家、映画監督

※ニコルは、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたエルンストの子と考えられる。脚本家としては「トルーマンショー」、監督としては「ガタカ」「シモーヌ」「ロード・オブ・ウォー」などがある。

-----

大杉栄の子（オスマントルコ皇帝アブデュルアズイズの曾孫）



魔子（1917～？）※画像なし

マルグリット・デュラス（1914～1996）※画像は少女時代（左）と初老のデュラス（右）

※デュラスは作家・映画監督であり、「ナタリー・グランジェ」「インディアソング」などを残している。彼女は黒澤、橋本忍、小津、アントニオーニらと共に人類の知性の歩みを数歩進めた。同時にマイケル・ジャクソンの母キャサリン・ジャクソンと宮崎駿を儲けたと考えられる。年老いたデュラスと宮崎の顔は良く似ている。更に、宮崎の遺伝学上の家族にはサルトル、ゴダールがいる。おもしろいのが4人とも同じようなメガネをかけていることだ。メガネの趣向は遺伝するようだ。





ネストル（1923～？）※画像なし

勅使河原宏（1927～2001） 映画監督、草月流家元

イエジー・カワレロウィッチ（1922～2007） 映画監督

John Christopher Lydon（？～2008） ジョン・ライドン父※画像なし

トニーノ・グェッラ（1920～2012） 脚本家

※カワレロウィッチは、勅使河原の影武者として生まれたと考えられる。顔が良く似ている。映画「影」「夜行列車」などで新機軸を披露した。特に「影」などは影武者でなければ発想できないような映画だ。

グェッラは、アントニオーニ監督作「情事」の脚本がデビューである。アントニオーニと共に黄金時代を築き、他にフェリーニ、ベロッキオ、タルコフスキーなどの脚本を手がけた。



勅使河原霞（1932～1980） 勅使河原蒼風の子※画像なし

立川談志（1936～2011） 落語家

古典落語に広く通じ、現代と古典との乖離を絶えず意識しつつ、長年にわたって理論と感覚の両面から落語に挑み続けた。古典落語を現代的価値観・感性で表現し直そうとする野心的努力が高く評価されたが、その荒唐無稽・破天荒ぶりから好き嫌いが大きく分かれる落語家の一人でもあった。落語のみならず、講談、漫談をも得意とするなど、芸域の広さで知られた。初高座は新宿末廣亭における『浮世根問』。立川談志wikiより

ルイス・ブニュエルの子（オスマントルコ皇帝アブデュルアズイズの曾孫）



スタンリー・キューブリック（1928～1999） 映画監督

セルジュ・ゲンズブール（1928～1991） 作家、俳優、映画監督、ミュージシャン

ジャン＝リュック・ゴダール（1930） 映画監督

ウディ・アレン（1935） コメディアン・俳優・作家・映画監督

※ゲンズブールは、マルチな才能を発揮した才人である。作家、俳優、ミュージシャン、音楽プロデューサーでもあるが、監督作には「ジュテーム・モア・ノン・プリュ」「シャルロット・フォーエバー」「スタン・ザ・フラッシャー」がある。

ゴダールは、ゲンズブールとは異母兄弟だと考えられる。代表作には「勝手にしやがれ」「気狂いピエロ」「アルファヴィル」「ウィークエンド」などがある。

ウディ・アレンは10代後半から20代にかけてスタンダップコメディアンとして鳴らし、儲けた金を資金に映画製作を始めた。「泥棒野郎」「バナナ」「セックスのすべて～」「スリーパー」「愛と死」まではギャグ映画を撮っていたがその後はアートハウスな映画やファンタジー映画を撮り始め、ギャグ映画は撮らなくなってしまった。

異母兄弟ゴダールは、'86年にウディのインタビューを含む短編ドキュメンタリー「Meet'n WA」を製作している。また翌年には、ウディは、ゴダールが監督した「ゴダールのリア王」

にも出演している。異母兄弟だからこそ実現した異色の組み合わせである。

キューブリックは、「2001年宇宙の旅」「時計仕掛けのオレンジ」「シャイニング」「フルメタルジャケット」「アイズ・ワイド・シャット」など、新作映画を製作する度に世界でセンセーションを巻き起こした。遺作「アイズ・ワイド・シャット」ではニコール・キッドマン演じる女性を怪しく口説くハンガリー人サボスを登場させ、暗にハンガリー人富豪ジョージ・ソロスを攻撃した。これが遺作の原因の可能性がある。

-----  
John Christopher Lydonの子（大杉栄の孫+オスマントルコ皇帝アブデュルアズイズの玄孫）



ジョン・ライドン（1956） ミュージシャン

ライナー・ヴェルナー・ファスビンダー（1945～1982） 映画監督

アレクサンドル・ソクーロフ（1951） 映画監督

※ファスビンダーとソクーロフは同一人物の可能性もある。ソクーロフが活動を始めたのは丁度ファスビンダーが死亡した時期に重なる。ソクーロフには監督作には「日陽はしづかに発酵し」「静かなる一頁」「セカンドサークル」「ストーン」などがある。ファスビンダーは、監督作に「愛は死より冷たい」「魂の不安」「ベルリンアレキサンダー広場」などがある。

ジョンは、大杉栄の孫と考えられる。セックスピストルズに参加し、手当たり次第に毒づくことで生活に不満を持つ世界の若者たちを魅了した。アナキストの孫であるだけにデビューシングルは「アナーキー・イン・ザ・UK」でキマリだ。同じ一族の坂本龍一と自身のバンドP・I・L

の「アルバム」で競演もしている。俳優としても映画「コップキラー」でベテラン俳優ハーヴェイ・カイテルを相手に出色の魅力を放っていた。

-----  
マルグリット・デュラスの子（オスマントルコ皇帝アブデュルアズイズの玄孫）



**Kartika**（生年不詳） スカルノの子※画像なし

キャサリン・ジャクソン（1930） ジョセフ・ジャクソンの妻

※キャサリン・ジャクソンは、デュラスが15歳の時に恋愛した華僑青年との間に出来た娘と考えられる。マイケルの母キャサリンは顔を見るとアフリカ人というよりはアジア人である。そしてキャサリンが生まれたのが1930年、デュラスが16歳の時だった。映画「愛人ラマン」でも有名な話だが、デュラスは15歳の時に年上の華僑青年と危険な恋愛をした。映画では子供が出来たとは描かれていないが、どうもその時にキャサリンはできたようだ。

ただ、デュラスと付き合った華僑青年の顔を見たが、キャサリンに似ていない。ということは、デュラスは優性遺伝子ブリーダーに頼んで華僑青年との恋愛を偽装し、別の東南アジア人の男の子供を生んだと考えられる。

その後、調べてみると、どうやら15歳のデュラスはインドネシア初代大統領となる若き日のスカルノ（28歳）と恋愛していたようだ。1929年に2人は付き合っていたが、同年12月にスカルノはオランダによって投獄されている。キャサリンが生まれたのが翌年5月なので月日も合う。マイケルたちはスカルノとデュラスの孫だ。

スカルノが投獄されたため、16歳のデュラスは優性遺伝子ブリーダーに頼んでキャサリンをアメリカに里子に出した。スカルノは31年に一旦出獄したが、33年に再度投獄されている。一方、デュラスは32年に18歳でフランスに帰国している。しかし、キャサリンはその後、アメリカでジョー・ジャクソンに出会い、ラトーヤを筆頭に、ジャクソンズ兄弟の面々やスーパースター、ポップキングと呼ばれたマイケル・ジャクソンを儲けるのだ。



死産の子（1942）

宮崎駿（1941） 映画監督

※宮崎は、優性遺伝子ブリーダーによって生まれたデュラスの子と考えられる。マルグリット・デュラスは、スカルノとの例があるように、ヨーロッパ人よりもアジア人の男に惹かれたようだ。ところで、デュラスは1942年に死産をしているが、これがじつは宮崎駿のことである可能性が高い。宮崎は1941年生まれだが、つまり、デュラスはウソをついているが、その必要があったのだ。

日本人の父を持つデュラスは日本人の男に惹かれた。その男とは、叔父が社長を務める宮崎航空興学で工場長をしていた駿の父親だ。ネットを調べても彼がどのような男だったかは不明だ。情報がない。

デュラスは、優性遺伝子ブリーダーを介して、当時、日本で一番人気がある男だったと考えられる駿の父を知り、合わせてもらい、恋愛し、更に彼の子を生むことができたが、駿の父は生まれた駿を自分に引き渡すことを要求したようだ。

それで仕方なくデュラス側はデュラスが死産したことにし、父側に引き取られた駿は異母兄弟の中で育った。デュラスはこのときのことを日本が舞台の映画「二十四時間の情事」で描いている可能性がある。だが、先日拝見したものの良く分からなかったw 駿の作品に見られるヨーロッパ趣味は母デュラスの影響が濃厚だ。「カリオストロの城」「魔女の宅急便」「紅の豚」あたりは、彼の血に眠る母の記憶が再現されている。

また、デュラスの母はフランス人というよりはロシア系（スラヴ系）らしく、その影響下で宮崎は「ナウシカ」を構想したと考えられる。宮崎のアニメによく登場する鷲鼻のおばあさんは、育ての母というよりはデュラスの母、つまり駿の祖母のイメージではないだろうか？デュラスの母は上の写真にも出ているが、ラピュタや魔女の宅急便、ハウルの動く城、ポニョに出てくる鷲鼻おばあさんに良く似ていることがわかる。

---

キャサリン・ジャクソンの子（オスマントルコ皇帝アブデュルアズイズの玄孫の子）



ラトーヤ・ジャクソン (1956) ミュージシャン

※丸い顔、離れた目が、キャサリン・ジャクソンの母と考えられるマルグリット・デュラスの若い頃に似ている。



ジャクソンズ

- ・ジャッキー・ジャクソン (1951)
- ・ティト・ジャクソン (1953)
- ・ジャーメイン・ジャクソン (1954)
- ・マーロン・ジャクソン (1957)
- ・マイケル・ジャクソン (1958~2009)
- ・ランディ・ジャクソン (1961)



マイケル・ジャクソン（1958～2009） スーパースター

※スーパースターであるため、ディープステートにマークされていた。終生フェイクニュースの餌食となった。



ジャネット・ジャクソン（1966） ミュージシャン

※丸い顔、離れた目が、キャサリン・ジャクソンの母と考えられるマルグリット・デュラスの若い頃に似ている。

-----

池田大作の兄の子？



池田？（生年不詳）※画像なし

原田稔（1941） 創価学会6代会長

ファスビンダーとソクーロフは同一人物の可能性がある。ソクーロフが活動を始めたのは丁度ファスビンダーが死亡した時期に重なる。ソクーロフには監督作には「日陽はしづかに発酵し」「静かなる一頁」「セカンドサークル」「ストーン」などがある。ファスビンダーは、監督作に「愛は死より冷たい」「魂の不安」「ベルリンアレキサンダー広場」などがある。

1953年（昭和28年）、創価学会に入会し、池田大作（後の同会第3代会長、現・名誉会長）に師事する。創価学会学生部長、青年部長、副会長、北海道担当、総東京長、総東京総合長、総東京総主事などを歴任する。

2001年（平成13年）、創価学会副理事長に就任。第一庶務（創価学会名誉会長の秘書部局）部長、第一庶務室長を務めた後、事務総長として事務関係を統括する。伸一会トップを歴任する。

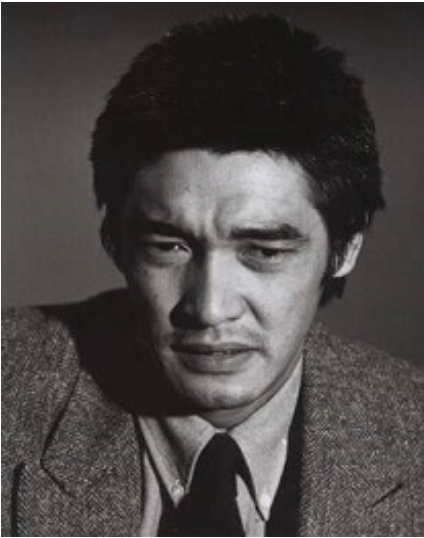
2006年（平成18年）11月9日、第5代会長秋谷栄之助の退任にともない、後任の会長（第6代）に就任。創価学会国際会長代行、創価大学最高顧問、広布新聞会議議長などを歴任する。原田稔wikiより

-----

池田大作の子（鄧小平の孫）







池田博正（1953）※画像なし

田母神俊雄（1948） 元自衛隊

大滝詠一（1948～2013） ミュージシャン

中川雅治（1947） 政治家

萩原健一（1950～2018） ミュージシャン、俳優

環境大臣（第24・25代）および内閣府特命担当大臣（原子力防災）、参議院議院運営委員長・沖縄及び北方問題に関する特別委員長・文教科学委員長、自由民主党参議院議員副会長、自民党たばこ議員連盟幹事などを歴任する。官僚時代には環境事務次官を務めた。中川雅治wikiより

日本の軍事評論家、元航空自衛官、政治活動家。予備役ブルーリボンの会顧問、「日本をまもる会・大東亜聖戦大碑護持会」会長。第29代航空幕僚長、太陽の党代表幹事兼国民運動本部長、次世代の党副代表を歴任。

2015年2月19日、都知事選選挙対策本部の会計責任者だった50代男性が、田母神の政治資金1億数千万円のうち約3000万円を、私的に使い込んでいたと発表した。田母神はこの人物に関し、「男性（会計責任者）は、自衛隊で先輩だった事務局長が連れてきた人間で、信頼し任せっきりになってしまっていた。寄付を頂いた皆さまには申し訳なく、監督責任を感じている」と話した。田母神俊雄wikiより

※同じ右翼でありながら、田母神俊雄は本願寺によって排除されている。本願寺は敵と味方を非常に理解し、区別している。因みにショーケンも鄧小平にくりそつである。それが彼の死因だと考えられる。



池田城久（1955～1984）※画像なし

文在寅（1953） 大韓民国第19代大統領 任期2017～現在

弁護士として市民運動や人権運動に参加した後、盧武鉉政権で大統領側近として活躍した。その後、国会議員に当選、新政治民主連合代表や共に民主党代表を務めた。2012年12月19日の大統領選挙では朴槿恵に惜敗したが、朴槿恵の弾劾・罷免に伴う2017年5月9日の大統領選挙で当選し、同年5月10日に大統領に就任して在任中。文在寅wikiより

第7代国務院総理（首相）、第17期・第18期・第19期中国共産党中央政治局常務委員、中国共産党中央国家安全委員会副主席。中国共産党での序列は習近平党総書記に次ぐ第2位。胡錦濤と同じく中国共産主義青年団（共青団）出身。習近平とともに、中国共産党第5世代の指導者の一人と目されている。李克強wikiより



池田尊弘（1958）※画像なし

石破茂（1957） 自民党議員

林芳正（1961） 政治家

佐藤優（1960） 元外務省官僚

2002年に鈴木宗男に絡む疑惑が浮上したことに連座する形で、2月22日に外務省大臣官房総務課外交史料館担当課長補佐へ異動。4月に外務省を混乱させたとして給与20%・1カ月分の懲戒減給を受ける。同年5月14日に鈴木宗男事件に絡む背任容疑で逮捕される。同年7月3日、偽計業務妨害容疑で再逮捕。512日間の勾留の後、2003年10月に保釈された。

2005年2月に東京地方裁判所（安井久治裁判長）で執行猶予付き有罪判決（懲役2年6か月、執行猶予4年）を受け控訴していたが、2007年1月31日、二審の東京高等裁判所（高橋省吾裁判長）は一審の地裁判決を支持し、控訴を棄却。最高裁判所第3小法廷（那須弘平裁判長）は2009年6月30日付で上告を棄却し、期限の7月6日までに異議申し立てをしなかったため、判決が確定した。国家公務員法76条では「禁錮以上の刑に処せられ、その執行を終わるまで又は執行を受けることがなくなるまでの者」は失職すると定められており、これにより外務省職員として失職した。懲戒免職や諭旨免職ではなく「失職」となるケースは、逮捕された公務員の退職理由としては異例である。佐藤優wikiより

防衛庁長官（第68代・第69代）、防衛大臣（第4代）、農林水産大臣（第49代）、自由民主党政務調査会長（第52代）、自由民主党幹事長（第46代）、内閣府特命担当大臣（国家戦略特別区域）、内閣府特命担当大臣（地方創生）、さわらび会会長、無派閥連絡会顧問、自民党たばこ議員連盟副会長などを歴任。石破茂wikiより

参議院外交防衛委員長、防衛大臣（第5代）、参議院政府開発援助等に関する特別委員長、同環太平洋パートナーシップ協定等に関する特別委員長、同環境委員長、内閣府特命担当大臣（経済財政政策担当）、農林水産大臣（第55代・第58代）、文部科学大臣（第22代・第23代などを歴任した。林芳正wikiより

※佐藤優は先祖である高凌イに似ている。道光帝の血筋であることを本願寺に知られたため、陰謀により投獄された。

-----

セルジュ・ゲズブルの子（優性遺伝子ブリーダーによる）



沢田研二（1948）

細野晴臣（1947） YMO

坂本龍一（1952） YMO

1960年代後半のグループ・サウンズ全盛期からスーパー・スターとして活躍し、ソロとしてのシングル総売上は1,239万枚を記録（1982～1991年の9年間は歴代1位の座を保つ。アルバムも合わせた総売上は約1,570万枚）。ザ・タイガース、PYG時代を含めると1,666万枚になる。沢田研二wikiより

シンセサイザー・コンピュータを用いた音楽やディスコへの興味が高まっていった1978年、元サディスティック・ミカ・バンドの高橋幸宏、当時スタジオ・ミュージシャンでもあった坂本龍一とイエロー・マジック・オーケストラ (Y.M.O.) を結成。

当初は細野主体の企画もののバンドと捉えられていたが、1980年にはその活動がブームを巻き起こす。Y.M.O.の成功をきっかけにメディアにも露出するようになり、アイドル・歌謡曲界への多数の楽曲提供、新人発掘のためのレーベル「YEN」の高橋との共同による立ち上げなど個人としても精力的に活動を行う。細野晴臣wikiより

幼いころから作曲を学び、東京芸術大学在学中にスタジオ・ミュージシャンとして活動を開始。1970年代後半よりソロやKYLYNバンドのメンバーとして活動する一方、メンバーとして参加した音楽グループ「イエロー・マジック・オーケストラ (YMO)」が国内外で商業的成功を収め、人気ミュージシャンとなる。

YMO時代にテクノポップやニュー・ウェイヴの分野で活動したことは広く知られているが、その後は一つのところに留まらず、現代音楽の手法を使った作品の発表、ロックとテクノの融合、ワールドミュージック、ヒップホップやR&Bなどのブラックミュージックを織り交ぜたポップス、オペラの作曲およびプロデュース、クラシックやボサノヴァのユニットを結成してのワールドツアー、近年はアンビエントやエレクトロニカの作品を発表するなど、ジャンルを超越して多彩な作品を発表している。坂本龍一wikiより

※2018年10月18日、沢田研二のコンサートが中止になったと報道があった。一説には沢田が反原発の歌を作り、反原発署名を募ったため、埼玉アリーナの方からクレームがつき、中止

にされたようだ。老齢に至った沢田の顔は、安倍とは異なり、良い政治家のような威厳がある。



野村将希（1952）俳優

アレックス・ヴァン・ヘイレン（1953）ヴァン・ヘイレン

※びっくりのくりそつである。2人はもともと双子なのかもしれない。しかし優性遺伝子ブリーダーと里子制度の契約をしていたため、里子に出されたあと、会ったこともないのだろう。母は女優杉村春子の可能性がある。

-----  
萩原健一の子（優性遺伝子ブリーダーによる）



ジョン・クーガー・メレンキャンプ（1951）ミュージシャン



エドワード・ヴァン・ヘイレン（1955） ヴァン・ヘイレン

※上記の兄アレックスとは兄弟という設定だが、確かに同じ血筋ということになる。世界最高のロックギタリストがショーケンの子とは。すごい。



マイケル・ハッチェンス（1960～1997） イン・エクセス



ジョン・ボンジョヴィ（1961） ボン・ジョヴィ

※ジョンが日本好きなのはそういうことだったのだ。親日家の外国タレントはみな家族が日本にいるのだろう。

-----

セルジュ・ゲズブルとジェーン・バーキンの子（オスマントルコ皇帝アブデュルアズイズの玄孫）



シャルロット・ゲズブル（1971） 女優、ミュージシャン

※才人セルジュ・ゲズブルと女優ジェーン・バーキンの子である。昔から、シャルロットはどこかアジア人ぽい感じがあるなと思っていたが、愛新覚羅の一族なら当然だ。父ゲズブルと母バーキンの名は「大和人の大航海時代」にヨーロッパにもたらされた。朴（PARK）が由来である。先祖の導きにより2人は出会ったのだ。

オスマントルコ皇帝マフムト2世の一族③～李鴻章、勝海舟、福沢諭吉、坂本龍馬、張嘯林、杜月笙、黒澤明、田中角栄、習近平国家主席、マーティン・ルーサー・キング Jr、ドゥテルテ大統領、橋本龍太郎

---

マフムト2世の子



**Şehzade Ahmed** (1822～1823) ※画像なし

李鴻章 (1823～1901)

勝海舟 (1823～1899)

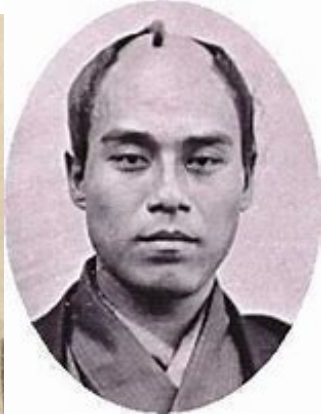
洋務運動を推進し清後期の外交を担い、清朝の建て直しに尽力した。日清戦争の講和条約である下関条約で清側の欽差大臣（全権大使）となり、調印を行ったことでも知られる。李鴻章wikiより

10代の頃から島田虎之助に入門し剣術・禅を学び直心影流剣術の免許皆伝となる。16歳で家督を継ぎ、弘化2年（1845年）から永井青崖に蘭学を学んで赤坂田町に私塾「氷解塾」を開く。安政の改革で才能を見出され、長崎海軍伝習所に入所。万延元年（1860年）には咸臨丸で渡米し、帰国後に軍艦奉行並となり神戸海軍操練所を開設。戊辰戦争時には幕府軍の軍事総裁となり、徹底抗戦を主張する小栗忠順に対し、早期停戦と江戸城無血開城を主張し実現。明治維新後は参議、海軍卿、枢密顧問官を歴任し、伯爵に叙せられた。

李鴻章を始めとする清の政治家を高く評価し、明治6年（1873年）には不和だった福沢諭吉(福澤諭吉)らの明六社へ参加、興亜会（亜細亜協会）を支援。また足尾銅山鉱毒事件の田中正造とも交友があり、哲学館（現：東洋大学）や専修学校（現：専修大学）の繁栄にも尽力し、専修学校に「律は甲乙の科を増し、以て澆俗を正す。礼は升降の制を崇め、以て頹風を極（と）む」という有名な言葉を贈って激励・鼓舞した。勝海舟wikiより

※死産したことにして潜伏し、成長した李鴻章は、父の道光帝と同様に日本に潜入して勝海舟となり、父や自身の庶子を投入して影武者部隊を統率し、工作活動に従事した。彼らは、諜報員の心得として、幼少時代から極秘に日本語を習っていたと考えられる。





**Şehzade Abdul Hamid** (18279~1828) ※画像なし

高橋泥舟 (1835~1903)

福沢諭吉 (1835~1901)

勝海舟が、徳川家処分の交渉のため官軍の西郷隆盛への使者としてまず選んだのは、その誠実剛毅な人格を見込んで泥舟であった。しかし泥舟は慶喜から親身に頼られる存在で、江戸の不安な情勢のもと、主君の側を離れることができなかった。代わりに義弟の山岡鉄舟を推薦、鉄舟が見事にこの大役を果たした。

後に徳川家が江戸から静岡に移住するのに従い、地方奉行などを務め、一時田中城を預かる。廃藩置県後は職を辞して東京に隠棲、書画骨董の鑑定などで後半生を送った。高橋泥舟wikiより

日本の武士（中津藩士のち旗本）、蘭学者、著述家、啓蒙思想家、教育者。慶應義塾の創設者であり、専修学校（後の専修大学）、商法講習所（後の一橋大学）、神戸商業講習所（後の神戸商業高校）、土筆ヶ岡養生園（後の北里研究所）、伝染病研究所（現在の東京大学医科学研究所）の創設にも尽力した。新聞『時事新報』の創刊者。他に東京学士会院（現在の日本学士院）初代会長を務めた。そうした業績を元に明治六大教育家として列される。福沢諭吉wikiより

※泥舟と鉄舟は、父や自身の庶子を投入して影武者部隊を作り、工作活動に従事した。泥舟は一方では諭吉であり、鉄舟は一方では竜馬であった。竜馬の写真は影武者の姿であり、鉄舟を写した写真が本当の竜馬の姿である。つまり、竜馬（鉄舟）は死後21年も生きていた。



**Şehzade Nizameddin** (1835~1838) ※画像なし

山岡鉄舟 (1836~1888)

坂本竜馬（1836～1867）

江戸に生まれる。家が武芸を重んじる家だったため、幼少から神陰流や北辰一刀流の剣術、榎原流槍術を学び、武術に天賦の才能を示す。浅利義明（中西派一刀流）門下の剣客であり、明治維新後は一刀正伝無刀流（無刀流）の開祖となる。

幕臣として、清河八郎とともに浪士組を結成。江戸無血開城を決定した勝海舟と西郷隆盛の会談に先立ち、官軍の駐留する駿府（現在の静岡市）に辿り着き、単身で西郷と面会する。明治政府では、静岡藩権大参事、茨城県参事、伊万里県権令、侍従、宮内大丞、宮内少輔を歴任した。勝海舟、高橋泥舟とともに「幕末の三舟」と称される。身長6尺2寸（188センチ）、体重28貫（105キロ）と大柄な体格であった。山岡鉄舟wikiより

土佐藩郷士の家に生まれ、脱藩した後は志士として活動し、貿易会社と政治組織を兼ねた亀山社中（後の海援隊）を結成した。薩長同盟の成立に尽力するなど倒幕および明治維新に関与した。大政奉還成立の1か月後に近江屋事件で中岡慎太郎、山田藤吉らと共に暗殺された。暗殺者は諸説あるが、京都見廻組という説が有力である。1891年（明治24年）4月8日、正四位を追贈される。坂本竜馬wikiより

※泥舟と鉄舟は、父や自身の庶子を投入して影武者部隊を作り、工作活動に従事した。泥舟は一方では諭吉であり、鉄舟は一方では竜馬であった。竜馬の写真は影武者の姿であり、鉄舟を写した写真が本当の竜馬の姿である。つまり、竜馬（鉄舟）は死後21年も生きていた。

-----

李鴻章の子（オスマントルコ皇帝マフムト2世の孫）



李ジンギユ（?～?）※画像なし

平岡浩太郎（1851～1906）

出獄後は自由民権運動に参加し、1878年（明治11年）12月、箱田六輔、頭山満、進藤喜平太等と共に向陽社を組織。1879年（明治12年）11月に開催された愛国社第3回大会では幹事を務め、1880年（明治13年）3月に開催された愛国社第4回大会においては国会期成同盟の設立に主導的な立

場をとっている。

1881年（明治14年）、向陽社を玄洋社と改名して初代社長に就任。1882年（明治15年）、朝鮮の壬午事変に際し、西郷軍の生き残りの野村忍助と義勇軍計画を起こすなど、早くからアジア問題に関心を示した。平岡浩太郎wikiより

※李鴻章の子、李ジンギユは早世したとされるが、実際には日本に送り込まれ、平岡浩太郎として育てていた。

□  
李ジンマイ（1876～1938）※画像なし

内田良平（1874～1937）

明治25年（1892年）18歳のとき、頭山満の玄洋社の三傑といわれた叔父（父・良五郎の実弟）の平岡浩太郎に従い上京して講道館に入門し柔道を学ぶ。翌明治26年（1893年）東洋語学校に入学しロシア語を学び、明治30年（1897年）シベリア横断旅行を試みる。平岡浩太郎の影響を受けて、日本の朝鮮、中国への勢力拡大に強い関心をもった。明治31年（1898年）宮崎滔天を通じて孫文と知り合い、親交を結ぶ。明治33年（1900年）中国・広州に赴き、孫文・李鴻章提携を斡旋する一方、革命義勇軍を組織して孫文の革命運動を援助した。

明治34年（1901年）黒龍会を結成し、ロシア事情を紹介。さらに明治36年（1903年）には対露同志会を結成し、日露開戦を強く主張した。明治38年（1905年）宮崎・末永節らとともに孫文・黄興の提携による中国革命同盟会の成立に関係する。また、フィリピン独立運動指導者のエミリオ・アギナルド、インド独立運動指導者のラス・ビハリ・ボースの活動も支援した。内田良平wikiより

※李鴻章の子、李ジンマイは、内田良平として日本に潜入していた。内田は兄弟である平岡浩太郎に接近し、交流をした。生没年がほぼ同じである。

-----  
愛新覚羅家Yixinの子

□  
**Zaicheng**（1858～1885）※画像なし

中村覚（1854～1925）

彦根藩士中村千太夫の二男として生まれる。藩徒士を経て、陸軍教導団に入る。西南戦争に出征。日清戦争時には東宮武官・侍従武官を務めた。日露戦争に出征し旅順攻囲戦で「白襷隊」の指揮官として負傷し、勇名を馳せた。

その後、東京衛戍総督など陸軍の要職や、関東都督、侍従武官長を歴任した。中村覚wikiより

**Zaiying** (1861~1909)

黒澤勇 (1864~1948) 黒澤明父

□□

**Zaijun** (1864~1866) ※画像なし

明石元二郎 (1864~1919)

エミリオ・アギナルド (1869~1964)

堺利彦 (1871~1933) 日本共産党

大正11年(1922年)、日本共産党(第一次共産党)の結成に山川均、荒畑寒村らとともに参加するものの、山川らに同調して共産党を離脱、後に労農派に与する。その後、東京無産党を結成して活動を続け、昭和4年(1929年)に東京市会議員に当選した。

この間に数多くの翻訳を通じて、欧米の社会主義思想、社会運動やロシア革命の動向、ユートピア文学をはじめとする西洋文学の紹介につとめた。堺利彦wikiより

10月18日より革命議会では憲法制定の審議が始まり、カルデロン弁護士がラテンアメリカ諸国の憲法を参考に憲法草案を起草し、カトリック教会を国教に認めるか否かが紛糾点となったために政教分離を保留した上で、翌1899年1月21日にはマロロス憲法を公布、フィリピン共和国(フィリピン第一共和国)を樹立、1月23日にエミリオ・アギナルドは初代大統領に就任した。エミリオ・アギナルドwikiより

明治・大正期の日本の陸軍軍人。陸軍大将正三位勲一等功三級男爵。第7代台湾総督。福岡藩出身。夫人は国子、後妻に黒田信子(黒田一葦の娘)。明石元二郎wikiより

□

**Zaihuang** (1880~1885) ※画像なし

張嘯林 (1877~1940) 青幫首領

浙江省出身。早くに父を亡くし貧しい生活をおくる。20歳で杭州に一家で移り警察学校に入学して軍閥関係者と親しくなった。その後、チンピラとなり上海に移って青幫に入会し勢力を拡大。知り合った黄金栄、杜月笙とアヘン売買の会社を設立し巨額の利益を得た。1927年4月、3人で中華共進会を結成し、共産党を弾圧した上海クーデターに参加。その功績から高い地位を与えられた。張嘯林wikiより

-----

愛新覚羅家Zaiyingの子

□□

**Puwei**（1880～1936）※画像なし

杜月笙（1888～1961） 青幫首領

山本五十六（1884～1943） 海軍大将

川端康成（1899～1972） 作家

日本の海軍軍人。第26、27代連合艦隊司令長官。海軍兵学校32期生。最終階級は元帥海軍大将。前線視察の際、ブーゲンビル島上空で戦死（海軍甲事件）。山本五十六wikiより

国民党が北伐を開始し1927年に上海に到着すると司令官の蒋介石に接近。1927年4月、中華共進会を結成し、共産党を弾圧した上海クーデターでは、親しかった上海総工会委員長の汪寿華を呼び出し殺害、手下を使って何百人もの共産党員、労働者を虐殺した。そのことから南京国民政府誕生後は軍や政財界にも影響力を及ぼすようになる。

蒋介石から少将の肩書きを授かり、国民党政府海陸空軍総司令部顧問、上海市抗日救国会常務委員、中国通商銀行董事長、国民党政府行政院参事、上海フランス租界華董など、様々な分野の要職についた。1929年には銀行を設立しフランス租界内の莫大な資金を一手に吸い上げた。杜月笙wikiより

※山本五十六は、ルーズベルト大統領と連絡し、日本を統べる邪教を壊滅せんと連合を組んだ。大日本帝国を戦争に引き釣り出すために、ルーズベルト大統領はタナトスの奥義を使い「リメンバー・パールハーバー」を起動した。これにより、筆者は永らく、ルーズベルトをタナトスの一族だと信じて疑わなかった。第二次世界大戦が始まると、山本五十六は、本願寺の追及を逃れるべく事故死したことにし、潜伏して生き延びた。

川端は世界的にも著名な作家だが、衣笠監督の「狂った一頁」で映画の脚本を手がけたことがある。杜月笙と良く似ている。

甲

**Pujia**（1908～1949）※画像なし

スカルノ（1901～1970） インドネシア共和国初代大統領 任期1945～1967

イライジャ・ムハンマド（1897～1975） ネイション・オブ・イスラム創設

福田赳夫（1905～1995） 第67代内閣総理大臣 任期1976～1978

衆議院議員、農林大臣（第2次岸改造内閣）、大蔵大臣（第1次佐藤第1次改造内閣・第2次佐藤第2次改造内閣・第3次佐藤内閣・第2次田中角栄第1次改造内閣）、外務大臣（第3次佐藤改造内閣）、行政管理庁長官（第2次田中角栄内閣）、経済企画庁長官（三木内閣）、内閣総理大臣（福田赳夫内閣）などを歴任した。福田赳夫wikiより

Soekarnoでフルネーム。独立宣言後、同国の初代大統領となり、雄弁な演説とカリスマ性によって、大衆の民族意識を鼓舞した。1965年の「9月30日事件」によって失脚した後は不遇の晩年

を送ったが、いまなお国民には「ブン・カルノ」（カルノ兄さん）と呼ばれ、国父（建国の父）として敬意をもって愛され続けており、紙幣（最高額面の10万ルピア）に肖像が使われている。  
スカルノwikiより

□  
黒澤明（1910～1998） 映画監督

1950年（昭和25年）、大映で『羅生門』を撮影。人間不信をテーマに含む難解な作品であったため、国内での評価はあまり高くはなかった。一方で、海外では大きな反響を呼び、1951年（昭和26年）、ヴェネツィア国際映画祭金獅子賞とアカデミー賞 名誉賞を受賞。その映像感覚が国際的に注目され、「世界のクロサワ」と呼ばれるきっかけとなった。黒澤明wikiより

※画像は若き日の黒澤明と三船敏郎である。黒澤は橋本忍と組んで「羅生門」を製作し、人類の知性の歩みを数歩進めた。「羅生門」によって啓示を受けた多くの内外の映像作家（レネ、ロブ＝グリエ、デュラス、アントニオーニ）は、黒澤・橋本が開発した映画言語を踏襲しつつ、新しい映画を作り続けている。

-----  
愛新覚羅家Puwei（杜月笙、山本五十六）の子

田  
Yuzhan（1923～2016）※画像なし

田中角栄（1918～1993） 第64、65代内閣総理大臣 任期1972～1974

フェルディナンド・マルコス（1917～1989） フィリピン大統領 任期

ネルソン・マンデラ（1918～2013） 南アフリカ共和国第8代大統領 任期1994～1999

金大中（1925～2009） 韓国第15代大統領 任期1998～2003

竹下登（1924～2000） 第74代内閣総理大臣 任期1987～1989

山本広（1926～1993） 一和会組長

島根県議会議員（2期）、衆議院議員（14期）、内閣官房長官（第35・38代）、建設大臣（第38代）、大蔵大臣（第84・86・87・90代）、内閣総理大臣（第74代）、自由民主党幹事長、自由民主党総裁（第12代）などを歴任した。竹下登wikiより

復員後、尼崎市の土建業・白石組（白石幸吉）の若衆となり、暫く白石の下で土木業務や神戸港の港湾荷役業務などに従事し、次第に頭角を現し、実績を出していった。白石が三代目山口組組長・田岡一雄の舎弟だったことから、1956年に山口組本家の若衆として直参に昇格した。山本広wikiより

韓国の政治家、市民活動家。第15代大統領（在任：1998年 - 2003年）。本貫は金海金氏。号は後廣（후광、フグアン、ごこう）。日本名は豊田大中（1924年- 1945年）。ニックネームは「忍冬草」。略称は「DJ」。カトリック教徒で、洗礼名はトマス・モア。慶熙大学大学院修了。金大中wikiより

南アフリカ共産党中央委員、アフリカ民族会議議長（第11代）、下院議員（1期）、大統領（第8代）を歴任。若くして反アパルトヘイト運動に身を投じ、1964年に国家反逆罪で終身刑の判決を受ける。27年間に及ぶ獄中生活の後、1990年に釈放される。翌1991年にアフリカ民族会議（ANC）の議長に就任。

デクラークと共にアパルトヘイト撤廃に尽力し、1993年にノーベル平和賞を受賞。1994年、南アフリカ初の全人種参加選挙を経て大統領に就任。民族和解・協調政策を進め、経済政策として復興開発計画（RDP）を実施した。1999年に行われた総選挙を機に政治家を引退した。ネルソン・マンデラwikiより

フィリピン共和国の政治家で独裁者。第10代フィリピン共和国大統領。20年間にわたって権力を握ったが、1986年のエドゥサ革命によって打倒された。フェルディナンド・マルコスwikiより

自民党最大派閥の田中派（木曜クラブ）を率い、巧みな官僚操縦術を見せる田中は、党人政治家でありながら官僚政治家の特長も併せ持った稀な存在だった。大正生まれとして初の内閣総理大臣となり、在任中には日中国交正常化や日中記者交換協定、金大中事件、第一次オイルショックなどの政治課題に対応した。

政権争奪時に掲げた日本列島改造論による日本列島改造ブームは一世を風靡したが、後にその政策は不動産投機に伴う地価の暴騰や狂乱物価と呼ばれるインフレーションを招いた。その後の田中金脈問題への批判によって首相を辞職、さらにアメリカ合衆国の航空機製造大手ロッキード社の全日本空輸への航空機売込みに絡んだ贈収賄事件（ロッキード事件）で逮捕収監され自民党を離党した。田中角栄wikiより

※本願寺は優性遺伝子ブリーダーに聞きだして彼らが明石元二郎の子だということを知り、敵の勢力伸張を阻止すべく、マンデラを執拗にマークし、永年投獄していた。また、本願寺は自分たちに背いて独自の道を行こうとする角栄を許すことができず、アメリカのタナトスと共に角栄を陰謀にはめた。このときに、日本の行く末を心から案じていた人々が大勢粛清された。

-----  
愛新覚羅家Pujia（スカルノ、イライジャ・ムハンマド、福田赳夫）の子

**Yuyin** (1927~?) ※画像なし

マーティン・ルーサー・キングJr (1929~1968) 公民権運動指導者

マルコムX (1925~1965)

アメリカの黒人公民権運動活動家。ネーション・オブ・イスラム(NOI)のスポークスマン、ムスリム・モスク・インクMuslim Mosque, Inc.) およびアフリカ系アメリカ人統一機構(Organization of Afro-American Unity)の創立者でもある。出生名はマルコム・リトル (Malcolm Little)。

非暴力的で融和的な指導者だったキング牧師らとは対照的に、アメリカで最も著名で攻撃的な黒人解放指導者として知られているが、彼が活動中に暴力行為にでたことは一度もない。マルコムX wikiより

アメリカ合衆国のプロテスタントバプテスト派の牧師である。キング牧師(キングぼくし)の名で知られ、アフリカ系アメリカ人公民権運動の指導者として活動した。「I Have a Dream」(私には夢がある)で知られる有名な演説を行った人物。1964年のノーベル平和賞受賞者。本人死後、2004年の議会名誉黄金勲章受章者。マーティン・ルーサー・キングJr wikiより

-----  
スカルノの子(優性遺伝子ブリーダーによる)

□ ルイス・ファラカーン(1933) ネーション・オブ・イスラム指導者

□ ジェイコブ・ズマ(1942) 南アフリカ共和国第11代大統領 任期2009~2014

ズルー人初の大統領であり、ズルー族の伝統衣装を着ることもあった。かつては南アフリカ共産党の活動家であるなど党内左派に位置する。副大統領時代に汚職疑惑によって罷免されたが、その後の無罪判決とともに2007年にANC議長に就任し、さらに2009年には大統領に就任した。ジェイコブ・ズマ wikiより

□ ロドリゴ・ドゥテルテ(1945) 第16代フィリピン大統領 任期2016~現在

2016年の大統領選挙については2015年10月の時点では不出馬を表明し、同時期に行われるダバオ市長選挙にも出馬しないとしていた。しかし、同年11月には一転して大統領選挙への出馬を表明した。選挙戦中は、同時期に進行していたアメリカ大統領選挙に立候補する共和党候補者を選出する予備選挙で過激な発言を行う人物として注目されていた共和党のドナルド・トランプになぞらえ、「フィリピンのトランプ」とも揶揄された。

しかし、フィリピン大統領選挙に勝利し、当選後の会見では「冗談であった」とするなど選挙期



間中の過激な発言を修正し始めている。その後、6月30日に大統領に就任した。ロドリゴ・ドゥテルテwikiより

□ シリル・ラマポーザ（1952） 南アフリカ共和国第12代大統領 任期2018～現在

南アフリカ共和国の政治家、実業家。大統領（第12代）、アフリカ民族会議議長（第14代）である。副大統領（第7代）を歴任した。シリル・ラマポーザwikiより

-----  
杜月笙の子（優性遺伝子ブリーダーによる）

□ 西口茂男（1929～2017） 住吉会組長  
青島幸男（1932～2006） 第13代東京都知事 任期1995～1999

2012年（平成24年）9月27日、米財務省は、NISHIGUCHI, Shigeoを国外の著しい犯罪組織とその支持者であるとして、国際緊急経済権限法・大統領令13581号に基づき、米国司法権の及ぶ範囲の資産凍結、米国民との取引禁止させる制裁対象とした。西口茂男wikiより

テレビ業界で当初は放送作家として成功し、高度成長期を歌った「スーダラ節」を作詞する。クレージーキャッツ主演の映画はもとより、『若大将シリーズ』などでも映画の主題歌を作詞した。主演したドラマ『いじわるばあさん』では国民的キャラクターとして定着し、小説を執筆すれば処女作『人間万事塞翁が丙午』が直木賞を受賞するなど、多才の人として知られ、「超マルチタレント」と呼ばれた。

タレント政治家としても高い人気を誇り、参院選2期目以降は、選挙期間中に選挙公報作成と政見放送録画以外の選挙運動を一切せずに当選し続けたことなどが注目された。一方で都知事時代に行政運営に失敗し1期で退任、世論の支持を一気に失い晩年は一転して不遇であった。青島幸男wikiより

□ 橋本龍太郎（1937～2006） 第82、83代内閣総理大臣 任期1996～1998  
与謝野馨（1938～2017）

衆議院議員（14期）、厚生大臣（第57代）、運輸大臣（第58代）、大蔵大臣（第93・94・103代）、通商産業大臣（第59代）、副総理（村山改造内閣）、内閣総理大臣（第82・83代）、沖縄開発庁長官（第42代）、行政改革担当大臣（初代）、沖縄及び北方対策担当大臣（初代）、規制改革担当大臣（初代）、自由民主党幹事長（第29代）、自由民主党政務調査会長、自由民主党総裁（第17代）などを歴任した。橋本龍太郎wikiより

衆議院議員（10期）、衆議院議院運営委員長（第50代）、文部大臣（第117代）、内閣官房副  
長官、通商産業大臣（第63代）、自由民主党政務調査会長（第46代）、内閣府特命担当大臣（  
金融、経済財政政策、規制改革、男女共同参画、少子化対策）、内閣官房長官（第74代）、拉致  
問題担当大臣（第2代）、財務大臣（第11代）などを歴任した。与謝野馨wikiより

※本願寺の一族は優性遺伝子ブリーダーに聞き出して、上記の人々が杜月笙の子だということを知り、敵の勢力伸張を阻止すべく、一通り暗殺している。彼らが殺されたことで、安倍一強が完成し、本願寺の指揮による日本人撲滅計画が起動した。本願寺は弱い。しかし、弱い人間には勝てる。そのために強い人間が標的となって密かに暗殺されていく。現在の日本は、弱い人間だけしか残されていない。

本願寺の一人勝ちの理由は、道光帝の一族がさんざん否定した集団ストーカーが原因である。本願寺が現在のように平気でウソをつくのは、できそこない（本願寺の子）が善人の数を上回っていることを把握しているためだ。

オスマントルコ皇帝アブデュルメジト1世の一族～犬養毅、頭山満、義和団の乱、幸徳秋水、文鮮明、大山倍達、田岡一雄、高畑勲、安孫子素雄、梶原一騎、アントニオ猪木、鳥山明、高田延彦、秋元康

---

□ **Hayriye Sultan** (1832～1833) ※画像なし

西太后 (1835～1908)

アロー戦争により熱河に逃れた咸豊帝は1861年に崩御した。咸豊帝死後の政治の実権をめぐり、載淳の生母である懿貴妃と咸豊帝の遺命を受け載淳の後見となった8人の「顧命大臣」載垣、端華、肅順らは激しく争った。

懿貴妃は皇后ニオフル氏と咸豊帝の弟で当時北京で外国との折衝に当たっていた恭親王奕訢を味方に引き入れた。そして咸豊帝の棺を熱河から北京へ運ぶ途上でクーデターを発動し載垣、端華、肅順らを処刑（辛酉政変：1861年）し権力を掌握した。西太后wikiより

-----  
西太后 (アブデュルメジト1世) の子

□□ **Şehzade Mehmed Abdüssamed** (1853～1855) ※画像なし

同治帝 (1856～1875) 清第10代皇帝 在位1861～1875

犬養毅 (1855～1932) 内閣総理大臣 (※画像は左青年時代と右中年時代)

咸豊帝の長子で母は西太后。晩年の咸豊帝は西太后の権力志向を嫌っていたため一時遠ざけたが、咸豊11年 (1861年) に咸豊帝が崩御すると西太后らが辛酉政変で怡親王載垣、鄭親王端華、肅順ら咸豊帝の側近を排除、同治帝は西太后らによって擁立された。即位当初から継母の東太后、母や叔父の恭親王奕訢による摂政で政治が進められ、在位中を通して実権は母に握られていた (垂簾聴政)。wikiより

中国進歩党総裁、立憲国民党総裁、革新倶楽部総裁、立憲政友会総裁 (第6代)、文部大臣 (第13・31代)、逓信大臣 (第27・29代)、内閣総理大臣 (第29代)、外務大臣 (第45代)、内務大臣 (第50代) などを歴任した。wikiより

※1875年、同治帝は19歳で死んだことにし、日本に潜入して犬養毅として1876年に慶応大学に入学している。残念ながら、犬養毅は浄土真宗を邪教としてマークすることがなかったため、本願寺が指揮する2.26事件の際に暗殺された。19歳で死んだと考えられていた同治帝は、犬養毅として日本で生きていたのだ。

□  
**Şehime Sultan**（1855～1857）※画像なし  
Zaiyi（1856～1923） 愛新覚羅Yicongの子  
頭山満（1855～1944） 玄洋社党首

玄洋社は、日本における民間の国家主義運動の草分け的存在であり、後の愛国主義団体や右翼団体に道を開いたとされる。また、教え子の内田良平の奨めで黒龍会顧問となると、大陸浪人にも影響力を及ぼす右翼の巨頭・黒幕的存在と見られた。一方、中江兆民や吉野作造などの民権運動家や、遠縁のアナキストの伊藤野枝や大杉栄とも交流があった。また、鳥尾小弥太・犬養毅・広田弘毅など政界にも広い人脈を持ち、実業家（鉱山経営者）や篤志家としての側面も持っていた。wikiより

※西太后の庶子として生まれ、同治帝の影武者として投入されていた頭山満は、湖南に進出して武術を奨励し、大刀会、義和団の前身を形成した。この大刀会、義和団を率いた同治帝の子たちから極真空手を生んだ大山倍達、力道山などが生まれた。その後、影武者から解放された頭山満は独立し、玄洋社などを設立した。もちろん、頭山満の犬養毅（同治帝）との交流は続き、同じ一族である蒋介石を共同で援助している。

□  
大刀会（1896年頃）

大刀会は白蓮教の流れをくむ民間宗教八卦教の武揚組織として発足した。会内では離門と坎門の2つに分かれていた。離門は香を焚き呪文を唱え、刀や槍は持たなかった。坎門は壇場を設立して刀や槍の修業を行うという、宗教的な色彩を帯びた武術結社であった。彼らは呼吸法、靈薬、呪符を飲み込むことによって不死身となり、弾丸を跳ね返すと喧伝した。

発足当初は日清戦争後の治安低下によって蔓延った土匪に対する自衛組織として活動していたが、山東半島でドイツ・イギリスのミショナリー活動が盛んになると、帝国主義政策を背景としたキリスト教会と闘争を行うようになった。辛亥革命のときには大刀会は張継・宋教仁ら革命派を支持している。大刀会wikiより

□  
義和団の乱（1900年）

当初は義和団を称する秘密結社による中国での排外運動であったが、1900年（光緒26年）に清国の西太后がこの叛乱を支持して6月21日に欧米列国に宣戦布告したため国家間戦争となった。だが、宣戦布告後2か月も経たないうちに欧米列強国軍は首都北京及び紫禁城を制圧、清朝は莫大な賠償金の支払いを余儀なくされる。

禁圧の過程でイギリスとドイツは、清の許可を得ずに上海＝北京間、膠州、威海衛、旅順に電信ケーブルを敷設した。この乱の後、西洋的方法を視野に入れた政治改革の必要を認識した西太

後は、かつて自らが失敗させた戊戌の変法を手本としたいわゆる光緒新政を開始した。wikiより

-----  
オスマントルコ皇帝メフメト5世の子

□ **Şehzade Mehmed Ziyaeddin** (1873~1938) ※画像なし

幸徳秋水 (1871~1911) アナーキスト

明治時代のジャーナリスト、思想家、社会主義者、無政府主義者である。本名は、幸徳傳次郎（こうとくでんじろう）。秋水の名は、師事していた中江兆民から与えられたもの。大逆事件（幸徳事件）で処刑された12名の1人。wikiより

□ **Şehzade Mahmud Necmeddin** (1878~1913) ※画像なし

愛新覚羅載ホウ (1883~1951)

□ **Şehzade Ömer Hilmi** (1888~1935) ※画像なし

甘粕正彦 (1891~1945) 満映所長

日本の陸軍軍人。陸軍憲兵大尉時代に甘粕事件を起こしたことで有名。短期の服役後、日本を離れて満州に渡り、関東軍の特務工作を行い、満州国建設に一役買う。満洲映画協会理事長を務め、終戦直後、服毒自殺した。甘粕正彦wikiより

※甘粕は甘粕事件で知られ、大杉栄を惨殺した犯人とされているが、実際には2人は同じ道光帝の一族であるため、大杉栄が治安警察に狙われていることを受けて甘粕が殺したことにして大杉を逃がしたと考えられる。

-----  
愛新覚羅Yicongの子孫

□ **Yu'an** (1893~1979) 愛新覚羅Zaiyiの孫※画像なし

葉問 (1893~1972) 中国武術師範

※若き日のブルース・リーを指導した、ブルース・リーの師匠イップ・マン。

□ **Puxian** (1901~1966) 愛新覚羅Zaiyingの子※画像なし

李海泉（1901～1965） ブルース・リー父

□  
ブルース・リー（1940～1973） 格闘家、俳優、映画監督

※不遇なことに、東本願寺門主大谷光暢の一族に暗殺されたと考えられる。ブルース・リーは映画で「悪い日本人」をよく成敗していたので、それを見て東本願寺の一族がカチンときたのかもしれない。

-----  
愛新覚羅載ホウの子

□  
愛新覚羅溥儀（1906～1967） 満州国皇帝  
四元義隆（1908～2004） 血盟団※画像なし  
三上卓（1905～1971） 血盟団※画像なし  
菱沼五郎（1912～1990） 血盟団※画像なし  
佐郷屋留雄（1908～1972） 玄洋社系右翼団体愛国社党員※画像なし

その後は紫禁城に住むことを許されるものの、北京政変で紫禁城を追われてしまう。さらに当初庇護を受けようとしたイギリスやオランダ公館に庇護を拒否されてしまい、天津の日本租界で日本公館の庇護を受けた。

これ以降の縁で、満州事変以降関東軍の主導で建国された満洲国の執政に就任、満州国軍大元帥や満州国協和会名誉総裁などを兼任し、帝政移行後の大満洲帝国で皇帝に即位した。満州国皇帝としては元号から康德帝と称されることもある。大東亜戦争における日本の敗戦と、ソビエト連邦軍の侵略を受けた大満洲帝国の崩壊とともに退位した。愛新覚羅溥儀wikiより

□  
**Yunying**（1909～1925）※画像なし  
児玉誉士夫（1911～1984） フィクサー  
淀川長治（1909～1998）

日本の雑誌編集者、映画解説者、映画評論家。約32年にわたって『日曜洋画劇場テレビ朝日系列』の解説を務め、人懐こい笑顔の表情で解説を進めていくことで「ヨドチョーさん」「ヨドさん」と呼ばれるほどに多くの視聴者に親しまれてきた。また同番組の解説の締め括りには毎回「それではまた次回をお楽しみに、サヨナラ、サヨナラ、サヨナラ！」と強調して言う独特の語り口から全国的に有名になり、「サヨナラおじさん」とも呼ばれた。淀川長治wikiより

日本の右翼運動家。CIAエージェントであったという。暴力団・錦政会顧問。「政財界の黒幕」、

「フィクサー」と呼ばれた。1960年、生前葬を行う。河野一郎や大野伴睦といった大物政治家が見玉のための葬儀に集まり、焼香した。wikiより

□

**Puji**（1916～1918）※画像なし

森繁久彌（1913～2009）

田岡一雄（1913～1981） 山口組組長

1937年（昭和12年）2月25日、山口春吉の舎弟に暴力を振るった大長政吉を福原遊廓で襲撃し、鉄瓶で殴打して頭を割る。その報復で山口組に殴り込みをかけた大長八郎（政吉の弟）を振り返り、日本刀で刺殺。このため殺人罪で逮捕起訴され、神戸地裁で懲役8年の実刑判決を受け、神戸刑務所、大阪刑務所、膳所刑務所、京都刑務所、高知刑務所で服役する。

獄中では、みずから崇拜する頭山満や玄洋社に関する本を読んでいた。皇紀2600年の恩赦で1943年（昭和18年）7月13日に出所した。二代目組長の登は前年の1942年（昭和17年）既に死亡していたので、その後湊川で自ら田岡組を組織した。田岡一雄wikiより

昭和の芸能界を代表する国民的俳優の一人であり、映画・テレビ・舞台・ラジオ・歌手・エッセイストなど幅広い分野で活躍した。早稲田大学を中退後、NHKアナウンサーとなって満州国へ赴任。帰国後、舞台やラジオ番組の出演で次第に喜劇俳優として注目され、映画『三等重役』『社長シリーズ』『駅前シリーズ』で人気を博した。

人よりワントempo早い軽快な演技に特色があり、自然な演技の中で喜劇性を光らせることができるユニークな存在として、後進の俳優たちにも大きな影響を与えた。また、『夫婦善哉』『警察日記』等の作品での演技が高く評価され、シリアスな役柄もこなした。映画出演総数は約250本を超える。wikiより

□

**Yunyu**（1919～1982）※画像なし

文鮮明（1920～2012） 統一協会の祖

橋本忍（1918～2018） 脚本家

1949年、サラリーマン生活のかたわら、芥川龍之介の短編小説『藪の中』を脚色した作品を書く。社用で上京した際に佐伯に渡っていた脚本が、黒澤明の手に渡り映画化を打診される。黒澤から長編化するよう依頼され、芥川の短編小説『羅生門』も加えて加筆。最終的に黒澤が修正して完成させた脚本を基に、翌1950年に黒澤が演出した映画『羅生門』が公開され、橋本忍は脚本家としてデビューした。同作品はヴェネツィア国際映画祭グランプリを受賞するなど高い評価を受けた。1951年に退社して上京し専業脚本家となる。橋本忍wikiより

韓国の宗教家。世界平和統一家庭連合（旧・世界基督教統一神霊協会。通称は統一教会、統一協会。以下便宜的に、統一教会と表記）、国際勝共連合を含む統一運動の創立者。wikiより

※大島義昌の孫娘が、安倍晋三の父方の祖母ということだが、その大島義昌つながりで、安倍は統一協会とは交流があるのだろう。両者の間に絆があるかどうかは、それはまた別の話だ。

☐

**Yunhuan**（1921～2004）※画像なし

大山倍達（1923～1994） 極真会館館長

力道山（1924～1963） プロレスラー

渥美清（1928～1996） 俳優

丹波哲郎（1922～2006）

1968年、フジテレビにて、テレビドラマ『男はつらいよ』が放送開始。放送期間は1968年10月3日から1969年3月27日までの半年間。脚本は山田洋次と森崎東が担当した。最終回では「ハブに噛まれて寅さんが死ぬ」という結末に視聴者からの抗議が殺到した。

翌1969年に「罪滅ぼしの意味も含めて」、松竹で映画を製作。これが予想に反し大ヒットとなり、以降シリーズ化となって製作の始まった山田洋次監督の映画『男はつらいよ』シリーズにおいて、主演の車寅次郎（フーテンの寅）役を27年間48作に渡って演じ続ける事になる。この映画のシリーズは、国民的映画として日本中の多くの人たちに親しまれた。映画のシリーズでは最多記録の作品としてギネスブックにも載るなどの記録を成し遂げた。渥美清wikiより

朝鮮半島出身の武道家（極真空手）であり、国際空手道連盟総裁・極真会館館長。段位は十段。別名：マス大山（Mas Oyama）。韓国系日本人で民族名は崔永宜（さいえいぎ、チェ・ヨンウィ、최영익）。

日本統治下の朝鮮半島で生まれ、韓国の戸籍では1922年7月27日生まれとなっており、通例の1923年生まれでは新暦と旧暦の誕生日が一致しないため、実際の生年は1922年と推定される。1970年代に週刊少年マガジンに連載された劇画『空手バカ一代』でも、主人公として取り上げられた。大山倍達wikiより

粗暴な性格のため、多数のトラブルを引き起こしている。例をあげると山口組ともめて監禁寸前にまでなったり、安藤組に対して誠実な対応を取らなかったため付け回され家に帰れなくなったり、フィリピンマフィアの顔役を橋から川に投げ込み揉めるなど、当時のプロレス興行が暴力団と密接な関係にあるにもかかわらず、配慮に欠けた行動を繰り返したため、命を狙われることも多かった。

上記の1963年12月8日の赤坂での刃傷事件（これが死の遠因となった）で見られるように、力道山には飲酒した時のトラブルが多かったようで、暴力団山口組三代目組長の田岡一雄は「（力道山は）酒を飲まなければ……」と自伝で嘆いている。力道山wikiより

※丹波のような正しい人物が亡くなってから芸能界の崩壊は拍車が効かなくなったようだ。製作



スタッフは意志を奪われて生活を守るために金次第で動き、犯罪を美化する無軌道なゲイが増えた。

-----  
愛新覚羅溥傑の子（愛新覚羅載ホウの孫）

田  
**Huisheng**（1938～1957）※画像なし  
竹中正久（1933～1985） 山口組組長  
高畑勲（1935～2018） 映画監督  
梶原一騎（1936～1987） 漫画原作者・プロデューサー  
藤子不二雄/安孫子素雄（1934） 漫画家  
藤子不二雄/藤本弘（1933～1996） 漫画家  
ジャイアント馬場（1938～1999） 全日本プロレス  
大島渚（1932～2013） 映画監督

京都大学卒業後、1954年（昭和29年）に松竹に入社。大船撮影所で大庭秀雄や野村芳太郎などの元で助監督を務めた。1959年（昭和34年）、長編『愛と希望の街』で映画監督としてデビュー。同作のタイトルは当初『鳩を売る少年』であったが、松竹幹部から「題名が暗くて地味」だと指摘され、妥協案として落差を表した『愛と悲しみの街』という改題を提案したが、公開時には本人の知らないうちに『愛と希望の街』へと変更されていた。

翌1960年（昭和35年）の『青春残酷物語』や『太陽の墓場』といったヒット作により、篠田正浩や吉田喜重とともに松竹ニューヴェルヴァーグの旗手として知られるようになった。しかし、自身はそのように呼ばれることを望まなかったという。大島渚wikiより

本名・旧リングネーム・野球選手時代の登録名は馬場正平（ばばしょうへい）。血液型O型。全日本プロレス代表取締役社長・会長、NWA第一副会長を歴任した。身長209cm、体重135kg。リングネームは、初渡米武者修行中の1961年、ニューヨークのプロモーターであったビンス・マクマホン・シニアが「ババ・ザ・ジャイアント（Baba the Giant）」と命名したことに由来する。日本プロレス界史上最大の巨体を持ち、力道山、アントニオ猪木と並ぶビッグネームでもあり、コマーシャルやテレビ番組などでも人気を博し、現役時代は、当時の世界最高峰の王座であるNWA世界ヘビー級王座に3度就いた。ジャイアント馬場wikiより

1966年から『週刊少年マガジン』に連載された漫画『巨人の星』の原作者として名声を上げ、以後『あしたのジョー』（高森朝雄名義）、『タイガーマスク』など、いわゆる「スポ根もの」分野を確立した功績をはじめ、多くの劇画・漫画作品の原作者として活躍した。梶原一騎wikiより

山口組からの接触に対し、当初は山口組入りに拘ってはいなかった竹中であつたが、結局地道の眼に適い親分・田岡一雄に竹中を推挙。翌1961年12月13日に田岡から盃を受け直参となった。細田組・細田利光組長、小野組・小野新次組長、中村組・中村憲逸組長、前本組・前本重作組長らの山口組直参や、湊芳治らの田岡一雄の舎弟が見届け人となった。その後、竹中正久は神戸市三宮の「神戸観光ホテル」で行われた山口組「御事始（事始）」に出席した。竹中正久wikiより

類型化された抽象的ファンタジーで喜怒哀楽が極端だったアニメに、悲しいのに笑っているなど中間的な演技表現を持ち込み、社会生活背景・自然環境・地理的条件などを徹底的に取材・調査した上で人間が生々しく生活しているような臨場感を描いた。

背景美術とキャラクターが一体化し、一つの絵画のように動くことも含め常に類型無く新しいことに挑戦し続け、世界のアニメーションを革新した。ふだんの日常生活にこそ、驚きや喜び、奇跡があるという姿勢や哲学をすべての作品で貫き、日本のアニメーションの方向性を大きく変えた。高畑勲wikiより

※高畑勲は子供向けのアニメを作りながら非常にシニカルでシビアな視点を作品に盛り込んでいた。それらの視点は、父である幸徳秋水譲りだったようだ。一方、それが多くの70年代に生きた子どもたちにトラウマを残した。笑 特に「太陽の王子ホルス」は、信じていた人物の裏切りなど、胸が痛くなるシーンが多い。子供だからと容赦せず、真実を見せようとする気概に作家魂を見る。

藤本弘氏と同様に、安孫子氏は人間の内面に関心を持ち、ブラックユーモア、と呼ぶのは生易しい、世の中の不条理や弱者の復讐心を丹念に描写して人気を博した。そのためか、いくつかの作品は尋常じゃなく後味が悪いw ゴルフや麻雀など、趣味の分野を漫画に活かしたパイオニアでもある。

安孫子氏同様に、藤本氏は人間の内面に肉迫した小品を多く発表し、SF短編集としてまとめている。ドラえもんと同じ絵柄に込められた世の中に蔓延る矛盾の指摘、文明の万能感を嘲笑する強い皮肉は、後味が悪いことも多い。オバケのQ太郎、パーマン、ドラえもんなど、子供向け作品も多く、日本に生まれた子どもなら、のび太、ジャイアン、スネオ、しずかちゃんを知らぬものはいない。

甲

**Husheng** (1940) ※画像なし

石森章太郎 (1937～1998) 漫画家

馬場美次 (1941) 会津小鉄組長

真樹日佐夫 (1940～2012) 漫画原作者・格闘家

世界空手道連盟真樹道場宗師 キックボクシング真樹ジム会長。株式会社真樹プロダクション代表取締役、元極真会館本部道場師範代、元マス大山カラテスクール責任者。元ビッグマウス・ラウド特別顧問。NPO・アジア地域戦没者慰霊協会名誉顧問。映画・Vシネマの企画プロデュースや、

格闘技のイベント興行・マッチメイクも不定期ながら手がけていた。真樹日佐夫wikiより

※頭山満は、同治帝の影武者として湖南で大刀会を結成し、義和団を指揮した。梶原一騎や真樹日佐夫には大刀会や義和団の血が流れている。

2008年11月、五代目会津小鉄会理事長四代目中川組組長馬場美次は、六代目会津小鉄会会長に襲名した。馬場美次wikiより

※石森はその血筋のせい、自分の作品には、必ず陰謀組織を登場させた。よく知られているのがショッカーやブラックゴーストだ。同治帝の子孫である彼は、本願寺が悪の組織であるという認識はなかったが、悪は実際に存在することを知っており、その象徴を必ず登場させた。陰謀にも長けており、陰謀の例などを盛り込んでいた。

-----  
愛新覚羅溥任の子（愛新覚羅載ホウの孫）

□  
**Yuzhang**（1942）※画像なし

司忍（1942） 山口組組長

アントニオ猪木（1943） 新日本プロレス

2005年3月、弘道会会長を同会若頭・高山清司に譲って二代目弘道会総裁となり、自らは弘田組組長に就任。同年5月、五代目山口組若頭に就任し、7月には六代目山口組組長に就任した。司忍wikiより

新日本プロレスは、「プロレスこそ全ての格闘技の頂点である」という「ストロングスタイル」を標榜。その後のプロレスに大きな影響を与える。猪木は自身の最強を証明するため、パキスタンの英雄アクラム・パールワン、「熊殺し」の異名をとる空手家ウィリー・ウィリアムスとの対戦など、異種格闘技路線への挑戦を続け、後年の総合格闘技の礎を築いた。wikiより

□  
**Yulan**（1948）※画像なし

天龍源一郎（1950）

長州力（1951）

1997年11月より、所有者より借り受ける形で力道山ベルトを賭けた日本J1選手権争奪トーナメントを開催し、藤原喜明、北尾光覇を撃破。1998年1月14日後楽園ホールでの荒谷信孝との決勝戦に勝利し、日本J1選手権を獲得。この試合は天龍としても満足のいくものだったようで試合後のイ

インタビューの際に、「隣（東京ドームで開かれていたマライア・キャリーのコンサート）より熱かったろ？」とのコメントを残す。天龍源一郎wikiより

その後、当時の体制に反旗を翻して、師と仰ぐマサ斎藤やキラー・カーンと共に「革命軍」を結成。さらにラッシャー木村率いる国際軍団を振り切る形で長州と活動を共にするアニマル浜口、浜口と同じく国際軍団の寺西勇、タイガーマスクとの抗争で同じく新日本正規軍を敵に回していた小林邦昭、そしてレスリング日本一の触れ込みで新日本入団後、海外武者修行に出て帰国した長州の弟子ともいえる谷津嘉章らと共に「維新軍」を結成する。また、アメリカで活動するタイガー戸口（キム・ドク）も時折、維新軍に同行した。wikiより

-----  
力道山の子（優性遺伝子ブリーダーによる）

□ 前田日明（1959）

1986年10月9日、両国国技館で行われた「INOKI 闘魂 LIVE」における異種格闘技戦で、ドン・中矢・ニールセンを逆片エビ固めでギブアップさせて勝利。この試合を期に「新格闘王」と呼ばれ、プロレス界以外からも注目を浴びるようになった。

この試合について、後年、ニールセンは「ここはこうやって、その次はこう、と流れを決めたわけではなかった。でも、ボクが言われたのは“試合を盛り上げてくれ”ということ。そして、1Rにいいパンチが入ったのに、セコンドに“アーリーノックアウトはダメだ”って言われた」と、プロレス雑誌『kamipro』で証言した。(前田日明 対 ドン・中矢・ニールセン戦)前田日明wikiより

□ 高田延彦（1962） PRIDE、RIZINプロデューサー

PRIDE統括本部長に就任し、同時にPRIDE中継の解説も行っていった。大晦日の特別興行「PRIDE 男祭り」のオープニングでは、開会宣言で「おまえら男だ!」と叫ぶ選手呼び込みで話題となった。2003年開催時にはさいたまスーパーアリーナの地上60メートルの屋上に立ち、2004年開催時にはふんどし一丁で暴れ大太鼓を叩いて、「男の中の男たち、出てこいやーっ!」と選手を呼び込んだ。（後にこのフレーズは高田を形容するキャッチフレーズとなる。単に「出てこいやー」とも。）そして、2005年開催時にはタップダンスを披露した後、2006年開催時にはピアノ独奏を披露した後に、ふんどし一丁で暴れ大太鼓を叩いた。高田延彦wikiより

□ 長与千種（1964） クラッシュギャルズ

デビュー後、先輩レスラーとの軋轢や、自身のファイトスタイルが周囲や観客に受け入れられな

いことに失望し、引退するつもりでいた矢先「どうせ辞めるのならやりたいことをやって辞めよう」と考え、当時同じように悩んでいたライオネス飛鳥と意気投合し、1984年8月に飛鳥とのタッグチーム『クラッシュギャルズ』を結成。それまでの女子プロレスにほぼ見られなかった、男子プロレスのエッセンスを取り入れたファイトスタイルで、女子プロレスの新たな世界を作り出し、注目される。長与千種wikiより

-----  
梶原一騎の子（優性遺伝子ブリーダーによる）

□  
藤波辰爾（1953）

1988年4月22日、沖縄県立奥武山公園体育館で、いつまでもメインを張り続け後進に譲ろうとしない猪木に対して、自らの前髪を切って現状改革を訴える。この行動は前年に天龍源一郎が全日本プロレスで起こした天龍革命に対して「飛龍革命」と呼ばれたが、反権力的な長州の維新、天龍の革命と比べて体制側に属する藤波の革命についてのファンの支持はもう一つで、前記2者に比べるとプロレス史には（ネタとしてはともかく）残らず、尻すぼみの結果となった。wikiより

□  
鳥山明（1955） 漫画家

竹中直人（1956） 俳優・映画監督

※鳥山と竹中直人は双子（二卵性双生児）の可能性がある。「ドラゴンボール」は最初こそファンタジーものであり、あまり目立ってはいなかったが、「北斗の拳」方式を採用すると人気が発した。

□  
秋元康（1960） 放送作家・プロデューサー

AKB48グループや坂道シリーズのプロデューサーで、ほぼ全ての楽曲の作詞をし、番組の企画構成やドラマの脚本なども手掛ける。日本映画監督協会会員。2010年6月、日本放送作家協会理事長に就任。2020年東京オリンピック・パラリンピック組織委員会理事。2016年4月、代々木アニメーション学院名誉学院長兼総合プロデューサーに就任。wikiより

※秋元康と梶原一騎は、顔の部品が中央に集まっている感じが似ている。笑顔も似ている。もちろん、秋元康は優性遺伝子ブリーダーによって生まれただろう。双方とも他人をプロデュースすることを選んだ人生を送っているが、そこも似ている。梶原一騎は星飛馬、伊達直人、矢吹丈をプロデュースし、秋元康はおにゃん子クラブ、AKB48グループ、坂道グループをプロデュースした。

-----  
真樹日佐夫の子（優性遺伝子ブリーダーによる）

□ 小沢仁志（1962） 俳優

BIG MOUNTAIN所属。かつてはヴィランズ、夏木プロダクションに所属していた。2018年6月よりエイベックス・マネジメントと業務提携。「OZAWA」名義で監督や企画を担当する作品がある。（「喧嘩の極意」シリーズ、「実録 新撰組」シリーズなど）wikiより

□ 松井一郎（1964） 大阪知事

大阪維新の会幹事長、維新の党幹事長、維新の党顧問、日本維新の会幹事長、大阪府議会議員（3期）などを歴任した。住之江競艇場の照明・電気設備関係の工事・補修を一手に請け負う株式会社大通の元代表取締役。父は大阪府議会議長（1996年）を務めた松井良夫。wikiより

-----  
ジャイアント馬場の子（優性遺伝子ブリーダーによる）

□ ジャンボ鶴田（1951～2000）

1972年ミュンヘンオリンピックのレスリンググレコローマンスタイル最重量級代表を経て全日本プロレスに入り、ジャイアント馬場後継の次の時代の大型エースとして期待され順調に成長して1980年代、トップレスラーとして活躍したがB型肝炎を発症したことにより第一線を退いた。その後、桐蔭横浜大学、中央大学、慶應義塾大学で非常勤講師を務めるなど教育者としても活躍した。wikiより

□ ライオネス飛鳥（1963）

1980年に全日本女子プロレスに入団、同年5月10日に同期の奥村ひとみ、師玉美代子との巴戦でデビュー。後にリングネームを改めて、長与千種とのクラッシュギャルズで一大ブームを巻き起こす。1981年には全日本ジュニア王座、1982年には全日本シングル王座を獲得した。1984年8月にはクラッシュギャルズがWWWA世界タッグ王座を獲得、さらに同年8月、「炎の聖書」で歌手デビュー。1989年春に現役を引退。wikiより



オスマントルコ皇帝メフメト5世の一族～孫文、夏目漱石、張作霖、橋本忍、毛沢東、徳田球一、金日成、小沢一郎、金丸信、藤本弘、赤塚不二夫、ジャッキー・チェン、金正恩委員長

---

メフメト5世（1844～1918） 第35代皇帝 在位1909～1918

愛新覚羅奕ケン（1840～1891）

岡田以蔵（1838～1865）※画像なし

中岡慎太郎（1838～1867）

高杉晋作（1839～1867）

田中光顕（1843～1939）

文久元年（1861年）8月、武市の結成した土佐勤王党に加盟（ただし、名簿の写しからは池内蔵太や弘田恕助と共に名前が削除されたとみられる）。文久2年（1862年）6月、参勤交代の衛士に抜擢され、瑞山らと共に参勤交代の列に加わり京へ上る。



これ以降、土佐勤王党が王政復古運動に尽力する傍ら、平井収二郎ら勤王党同志と共に土佐藩下目付の井上佐市郎の暗殺に参加。また薩長他藩の同志たちと共に、安政の大獄で尊王攘夷派の弾圧に関与した者達などに、天誅と称して集団制裁を加える。越後出身の本間精一郎、森孫六・大川原重蔵・渡辺金三・上田助之丞などの京都町奉行の役人や与力、長野主膳（安政の大獄を指揮した）の愛人・村山加寿江の子・多田帯刀などがこの標的にされた（村山加寿江は橋に縛りつけられ生き晒しにされた）。このため後世「人斬り以蔵」と称され、薩摩藩の田中新兵衛と共に恐れられた。岡田以蔵wikiより

安政元年（1854年）、間崎哲馬に従い経史を学び、翌年には武市瑞山（半平太）の道場入門して剣術を学ぶ。安政4年（1857年）、野友村庄屋利岡彦次郎の長女・兼（かね）15歳と結婚。文久元年（1861年）には武市が結成した土佐勤皇党に加盟して、本格的に志士活動を展開し始める。中岡慎太郎wikiより

長州藩では、晋作の渡航中に守旧派の長井雅楽らが失脚、尊王攘夷（尊攘）派が台頭し、晋作も桂小五郎（木戸孝允）や久坂義助（久坂玄瑞）らと共に尊攘運動に加わり、江戸・京都において勤皇・破約攘夷の宣伝活動を展開し、各藩の志士たちと交流した。高杉晋作wikiより

土佐藩士武市半平太の尊王攘夷運動に傾倒してその道場に通り、土佐勤王党に参加した。叔父の那須信吾は吉田東洋暗殺の実行犯だが、光顕も関与した疑いもある。しかし文久3年（1863年）、同党が八月十八日の政変を契機として弾圧されるや謹慎処分となり、翌元治元年（1864年）には同志を集めて脱藩。のち高杉晋作の弟子となって長州藩を頼る。

第一次長州征伐後に大坂城占領を企図したが、新撰組に摘発されたぜんざい屋事件を起こして大和十津川へ逃れる。薩長同盟の成立に貢献して、薩摩藩の黒田清隆が長州を訪ねた際に同行した。第二次長州征伐時では長州藩の軍艦丙寅丸に乗船して幕府軍と戦った。後に帰藩し中岡慎太郎の陸援隊に幹部として参加。田中光顕wikiより

※岡田は、愛新覚羅奕ケンの影武者として生まれた。岡田以蔵は父と同様に、同時進行で中岡慎太郎や高杉新作を演じ、工作活動に従事した。岡田はまず最初に自分を死んだことにして、その後は中岡や高杉晋作として生きたが、本願寺に狙われていた彼は結局その後、2年しか生きられなかった。



**Mevhibe Sultan** (1840～1841) ※画像なし

ワンチェン (1841～1896) 西太後の妹

出口なお (1837～1918) 大本教教祖

出口なお（以下、『なお』と表記）は、江戸時代末期から明治時代中期の極貧の生活の中で日本神話の高級神「国常立尊」の神憑り現象を起こした。当時、天理教の中山みきなど神憑りが相次いでおり、なおの身に起ったことも日本の伝統的な巫女/シャーマニズムに属する。当初は京都丹波地方の小さな民間宗教教祖にすぎなかったが、カリスマ的指導者・霊能力者である出口王仁三郎を娘婿としたことで、彼女の教団「大本」は全国及び海外に拡大した。出口なおwikiより

-----  
愛新覚羅奕ケンと婉貞の子

□  
戴瀚 (1865～1866) ※画像なし

孫文 (1866～1925) 辛亥革命指揮者

夏目漱石 (1867～1916) 文豪

中村是公 (1867～1927) ※画像なし

塚本善五郎 (1869～1904) 芥川龍之介養父※画像なし

中国の政治家・革命家。初代中華民国臨時大総統。中国国民党総理。「中国革命の父」、中華民国では国父（国家の父）と呼ばれる。また、中華人民共和国でも「近代革命先行者（近代革命の先人）」として、近年「国父」と呼ばれる。孫文wikiより

大学時代に正岡子規と出会い、俳句を学ぶ。帝国大学（後の東京帝国大学、現在の東京大学）英文科卒業後、松山で愛媛県尋常中学校教師、熊本で第五高等学校教授などを務めた後、イギリスへ留学。帰国後、東京帝国大学講師として英文学を講じながら、「吾輩は猫である」を雑誌『ホ

トトギス』に発表。これが評判になり「坊っちゃん」「倫敦塔」などを書く。

その後朝日新聞社に入社し、「虞美人草」「三四郎」などを掲載。当初は余裕派と呼ばれた。「修善寺の大患」後は、『行人』『こゝろ』『硝子戸の中』などを執筆。「則天去私（そくてんきょし）」の境地に達したといわれる。晩年は胃潰瘍に悩まされ、「明暗」が絶筆となった。夏目漱石wikiより

日本の官僚・実業家・政治家である。南満州鉄道株式会社（満鉄）総裁、鉄道院総裁、東京市長、貴族院議員などを歴任した。作家・夏目漱石の親友としても知られ、官僚出身らしからぬ豪放磊落な性格で、「べらんめい総裁」「フロックコートを着た猪」「独眼龍」などの異名をとった。中村是公wikiより

※婉貞の子として生まれたものの、一年で早世したとされている戴瀚だが、実際には敵が多いため両親が彼を死んだことにして潜伏させていた。実際には彼は生き延び、孫文として辛亥革命を成功させている。しかし、弟光緒帝の子である毛沢東の中国共産党と対立することとなる。

また、夏目漱石と中村是公は愛新覚羅奕ケンの庶子であり、2人とも日本に於ける孫文の影武者として投入されていた。しかし、漱石も是公も影武者でありながら、その類まれな才能によって自らを影武者の地位から解放し、漱石は文豪として歴史に名を残した。また、是公は漱石の親友としても知られているが興味深いことだ。

ただ、漱石は大谷によって愛新覚羅奕ケンの庶子であることを知られていた。そのため、本願寺は漱石のイギリス留学時もイギリスの西本願寺門主法如と文如の一族と連絡を取り合い、現地の邪教信者に命じて漱石に嫌がらせをしていた。「漱石日記」では、漱石が本願寺の邪教信者たちに嫌がらせをされ、精神的に打ちひしがれていく様子が記録されている。妻の鏡子さん（真宗王国広島出身）も浄土真宗信者であったため、本願寺に指示されれば漱石にイヤガラセをした。漱石曰く「周りの者が狂っているので自分も狂ったフリをしている」笑 いや、笑い事ではないが。

□ **Şehzade Mehmed Ziyaeddin**（1873～1938）メフメト5世の子※画像なし

光緒帝（1871～18） 清第11代皇帝 在位1875～1908

毛胎昌（1870～1920） 毛沢東の父

道光帝の第7子醇親王奕譞の第2子として生まれる。母は西太后の妹である。従兄の同治帝が早世した後に権力保持を狙う伯母の西太后によって擁立された。即位したのは3歳の時であり、実権は西太后が握り垂簾聴政が行われた。当初は東太后や伯父の恭親王奕訢も政権を担ったが、光緒7年（1881年）に東太后が急死、光緒10年（1884年）に恭親王が西太后に失脚させられると西太后が事実上政権の首班になった。光緒帝wikiより

※西太后は光緒帝を毒殺したことにして光緒帝と共に湖南省に逃亡した。光緒帝はそこで毛胎昌

を称した。毛沢東の父である。毛沢東は、伯父である孫文と争うことになる。

□  
名前が無い子（1875）※画像なし  
張作霖（1875～1928）

1916年に袁が死去。これを好機と見た張は策略を用いて段を失脚させ、奉天省の支配権を獲得した。さらに勢力を広げ、1919年には黒竜江省・吉林省も含めた東三省全域を勢力圏に置き、「満洲の覇者」として君臨した。彼の率いる勢力は本拠地とした都市の名を採って奉天派と呼ばれ、張は「満洲王」と呼ばれるほどの威勢を誇った。wikiより

※愛新覚羅奕ケンと婉貞の子には、名も無く早世した子がいるが、彼は実際には生き延び、長じて張作霖となった。張作霖は、先祖の故地を奪還すべく、満洲の王となった。残念ながら、志半ばで本願寺の陰謀により、討たれた。

□  
戴洸（1880～1884）※画像なし  
井上日召（1886～1967） 血盟団

日本の宗教家、政治運動家、テロリスト。日蓮宗僧侶としていわゆる近代日蓮主義運動の思想的系譜に連なり、戦前の右翼テロリスト集団「血盟団」、戦後の右翼団体「護国団」の指導者を務めた。本名は井上昭。昭の字を分けて日召とす。井上日召wikiより

※愛新覚羅奕ケンと婉貞の子として生まれながら、4歳で早世したとされている戴洸だが、敵が多いために両親が彼を死んだことにして潜伏させていたのだ。彼は日本に送り出されて無事に成長し、井上日召として、日本を統べる邪教本願寺を壊滅せんと血盟団を組織している。

□  
**Şehzade Ömer Hilmi**（1888～1935）メフメト5世の子※画像なし  
徳田球一（1894～1953） 日本共産党

日本の政治運動家、革命家、弁護士、政治家。衆議院議員（3期）、戦前の非合法政党時代より戦後初期に至るまでの日本共産党の代表的活動家で、戦後初代の書記長を務めた。徳球の愛称で知られる。沖縄県国頭郡名護村（現：沖縄県名護市）出身。wikiより

-----

養父塚本善五郎（夏目漱石）の子

□

芥川龍之介（1892～1927） 作家

※芥川は、母フクが優性遺伝子ブリーダーによって塚本善五郎（夏目漱石）の子を儲けたと考えられる。

-----

毛胎昌（光緒帝）の子

□  
毛沢東（1893～1976） 中華人民共和国初代国家主席

金亨稷（1894～1926） 金日成父※画像なし

中国共産党の創立党員の1人で、長征、日中戦争を経て党内の指導権を獲得し、1945年より中国共産党中央委員会主席と中央軍事委員会主席を務めた。日中戦争後の国共内戦では蒋介石率いる中華民国を台湾に追放し、中国大陸に中華人民共和国を建国した。以後、死去するまで同国の最高指導者の地位にあった。wikiより

-----

Şehzade Mehmed Ziyaeddinの子（オスマントルコ皇帝メフメト5世の孫）

□  
**Behiye Sultan**（1900～1950）※画像なし

三浦義一（1898～1971） フィクサー

小沢佐重喜（1898～1968） 小沢一郎父※画像なし

日本の右翼。フィクサー。日本銀行総裁・一万田尚登の親戚筋の立場を利用して、戦時中に日本金銀運営会に入り込み、その組織と利権を掌握した。父の三浦数平（大分県土族）は大分市長、衆議院議員を務めた。三浦義一wikiより

□  
**Şehzade Omer Fevzi**（1912～1986）※画像なし

金日成（1912～1994） 北朝鮮民主人民共和国初代国家主席

朝鮮の革命家・独立運動家で、北朝鮮の政治家、軍人。満州において抗日パルチザン活動に部隊指揮官として参加し、第二次世界大戦後は朝鮮半島北部に朝鮮民主主義人民共和国を建国した。以後、死去するまで同国の最高指導者の地位にあり、1948年から1972年までは首相を、1972年から死去するまで国家主席を務めた。また、同国の支配政党である朝鮮労働党の党首（1949年から1966年までは中央委員会委員長、1966年以降は中央委員会総書記）の地位に、結党以来一貫し

て就いていた。

称号は朝鮮民主主義人民共和国大元帥・朝鮮民主主義人民共和国英雄（3回受章しており「三重英雄」と称される）。北朝鮮においては「偉大なる首領様」などの尊称の下に神格化され、崇拝されている。彼の死後1998年に改定された憲法では「永遠の主席」とされ、主席制度は事実上廃止された。wikiより

※中国、北朝鮮、そして日本の共産党の党首が、みな光緒帝の子だったというのは興味深いことだ。

□ **Mihrimah Sultan**（1920～2000）※画像なし

アンワル・アッ＝サーダート（1918～1981） エジプト大統領

1970年9月28日、ナセル大統領が死去すると副大統領として大統領代行を務めることになったサダトは、国民へ大統領の死去を伝えるスピーチを行った。同年10月15日、サダトは正式に大統領に就任する。大統領就任後はナセルの社会主義的経済政策を改めて経済自由化を進めるとともに、イスラーム主義の運動を解禁してエジプトの路線を大きく右旋回させた。

これらの政策に対する反対派は一掃し、国有メディアはそれを革命の矯正と名付けた。さらに1961年にシリアが離脱して以来、連合国家の体をなしていなかったアラブ連合共和国の正式な解体を決断し1971年9月2日、国号をエジプト・アラブ共和国に改めた。wikiより

-----  
オットマン家王位継承者

□ **Dündar Aliosman**（1930） アブデュルハミト2世の子※画像なし

石田幸四郎（1930～2008） 公明党

北海道札幌市生まれ。明治大学商学部を卒業後、聖教新聞広告部に務める。1967年1月29日、第31回衆議院議員総選挙に旧愛知6区から立候補し、初当選（通算10期）。公明党臨時党大会で公明党副書記長に就任し、19年に渡り務める。1986年12月、衆参同日選挙後に行われた公明党大会で公明党筆頭副委員長に就任する。石田幸四郎wikiより

□ **Harun Osmanoglu**（1932）※画像なし

赤塚不二夫（1935～2008） 漫画家

※毛沢東の血筋に生まれたためか、赤塚のギャグには政治的なアプローチも散見される。彼が愛新覚羅の一族誕生の地、満州で生まれたのも偶然とはいえない。鳥山明、高橋留美子、吉田戦車

、野中英次ら、先駆的ギャグのパイオニアである。

□  
**Osman Selaheddin Osmanoğlu**（1940） Şehzade Ömer Hilmiの子※画像なし  
小淵恵三（1937～2000） 内閣総理大臣

衆議院議員（12期）、総理府総務長官（第29代）、沖縄開発庁長官（第10代）、内閣官房長官（第49代）、外務大臣（第126代）、内閣総理大臣（第84代）、自由民主党幹事長、自由民主党副総裁、自由民主党総裁（第18代）などを歴任した。小淵恵三wikiより

-----  
小沢佐重喜の子（オスマントルコ皇帝メフメト5世の曾孫）

□  
小沢一郎（1942） 自由党党首

日本の政治家。自由党所属の衆議院議員（17期）、自由党共同代表。閣僚として、自治大臣（第34代）、国家公安委員会委員長（第44代）を歴任。党務においては、自由民主党幹事長（第26代）、新生党代表幹事（初代）、新進党党首（第2代）、自由党党首（初代）、民主党代表代行、民主党代表（第6代）、民主党幹事長（第9代）、国民の生活が第一代表（初代）、生活の党と山本太郎となかまたち共同代表（初代）などを歴任した。wikiより

※本願寺の悪意により、小沢首相は暗殺され、一方、本願寺のメディアにより小沢氏は汚名を着せられた。

-----  
金亨稷（毛沢東）の子

□  
金哲柱（1916～1938） 北朝鮮民主人民共和国  
金丸信（1914～1996）

1916年、平安南道大同郡で金亨稷と康盤石の次男として誕生。1926年に、小学校に通う際、革命組織であるセナル少年同盟（朝鮮少年団の前身）のメンバーとなり、新聞『セナル』の発行に参加。1930年代初頭に、抗日遊撃隊に入隊。1935年、延吉の石人溝付近において、日本軍との戦闘により死亡。金哲柱wikiより

衆議院議員（12期）、防衛庁長官（第35代）、副総理（民間活力導入担当）、建設大臣（

第34代)、自由民主党国会対策委員長、自由民主党総務会長、自由民主党幹事長、自由民主党副総裁(第9代)などを歴任。金丸信wikiより

※金日成の弟である金哲柱は、日本軍との交戦中19歳で死んだことにし、極秘に日本に渡ったと考えられる。日本に腰を落ち着けた彼は、金丸信として生きた。金丸信は、1990年に金日成と会談しているが、興味深いことだ。ただ、本願寺に正体を見破られていたため、金丸は病気にさせられて暗殺された。

□ 金英柱(1920) 北朝鮮民主人民共和国

金英柱が生まれた1920年、一家は南満州に移住したため、金英柱は満州で育った。成長した金英柱は、関東軍の通訳として働いた。1937年6月4日に朝鮮の咸鏡南道甲山郡が匪賊に襲撃される事件(普天堡の戦い)が発生した。満州国の朝鮮人治安関係者が調査をした結果、「襲撃事件の首謀者金日成は、諱を金成柱といい、関東軍の通訳として働いている金英柱の実兄である」との証言を得た。金英柱は協力を求められ、祖母の李寶益と共に、日本・満州国側に投降するよう金日成に呼びかけている。wikiより

□ 金正日(1941~2011) 北朝鮮民主人民共和国第2代国家主席

北朝鮮を建国した金日成の長男であり、同国の最高指導者の地位を父より継承した。権力継承後、死去するまで朝鮮労働党中央委員会総書記、朝鮮民主主義人民共和国国防委員会委員長、朝鮮人民軍最高司令官、朝鮮労働党中央軍事委員会委員長、朝鮮労働党政治局常務委員を務めた。称号は朝鮮民主主義人民共和国元帥、朝鮮民主主義人民共和国英雄(三回受章しており「三重英雄」と称される)。死後、朝鮮民主主義人民共和国大元帥の称号を追贈された。wikiより

※金正日は存命中に映画「男はつらいよ」が好きだと述べていた。それは、映画自体がおもしろいということもあるが、渥美清が同じ道光帝の一族でもあったため、余計親しみが沸くということだろう。小泉首相の金正日との対談は、道光帝の一族と本願寺の一族の対決であった。

-----  
孫文の曾孫(孫穗華か孫穗英の子?)

□ ジャッキー・チェン(1954) 俳優・映画監督

恵まれた身体能力を活かして、暗い復讐劇が多かったカンフー・アクション映画の世界に、ハロルド・ロイドやバスター・キートンなどのコメディ映画の要素を取り入れた、コミカルで明るい



作風のカンフー映画を送り込み、一躍アジア圏で有名になる。その後ハリウッドにも進出し数多くの映画に主演として出演。60歳を越えた2017年現在でも自らアクションスタントをこなすことで知られる。代表作は『プロジェクトA』など多数。wikiより

※ジャッキー・チェンは若い頃の孫文に似ている。ところで、筆者が高校生の頃、ジャッキーは女子に大人気だったが、それに反発していたのか、男子は大体「おれはブルース・リーの方が好きだ」と言っていたものだ。しかし、ジャッキーの監督作は非常に練られており、本場ハリウッドが失ったもの、往年のハリウッドの「質」を継承していた。

ジャッキーのアクション演技も、実際には単なるアクションではなく、往年のチャップリン、キートン、ハロルド・ロイドのスラップスティック精神を正しく継承している。チャップリン、キートン、ロイドのやっていたことはジャッキーが80年代に追求していたアクション、そのものである。チャップリンたちはギャグの追及のあまり、一方ではスタントやアクションの分野に足を踏み入れていた。それを継承できたのはアメリカ人ではなく、当然、香港のジャッキー、ユン・ピョウ、サモ・ハン・キンポーなどカンフーを極めた人たちだった。

-----  
井上日召の子（優性遺伝子ブリーダーによる）

□ 麻原彰晃（1955～2018） オウム真理教

熊本県出身の日本の宗教家、テロリスト。宗教団体オウム真理教の元代表・教祖。日本で唯一の「最終解脱者」を自称していた。宗教的な概念を自らに対して都合良く曲解して殺人を肯定し、自らの信者を利用して国家転覆を最終目標とする一連のオウム事件を起こし、1995年（平成7年）5月16日に地下鉄サリン事件の首謀者として逮捕された。

逮捕されてからは、死刑を免れるために心神喪失状態を装っていた。1996年（平成8年）3月27日に警視庁本庁舎から東京拘置所に移送され、2006年（平成18年）に死刑確定、2018年（平成30年）7月6日に死刑が執行された。死刑執行の直前に通される教誨室では誰に対しても終始無反応であったが、遺体の引取先を聞かれた際、「四女」とだけ言い遺した。wikiより

※上のwikiの情報はすべてフェイクではないか？とにかく、麻原は本願寺に最初からロックオンされていた。これは、優性遺伝子ブリーダーが守秘義務を意図的に怠り、本願寺に道光帝の一族の情報をすべて横流ししていたことに起因する。

麻原が実力を発揮し、オウム真理教を設立すると、本願寺はすぐさま上祐と村井をスパイとして派遣、潜入させた。荒木村重や明智光秀を信長の周囲に配置したのと同様に、上祐と村井は麻原のすぐそばに配置された。麻原は処刑されたその日が来るまで、上祐と村井が本願寺の一族だと知りえたことが、一瞬でもあっただろうか？

-----

## 金正日の子

□ 金正恩（1984） 北朝鮮民主人民共和国第3代国家主席

北朝鮮の政治家、軍人。同国の第2代最高指導者金正日総書記の三男で後継者。父の死により最高指導者の地位を継承した。現在、朝鮮労働党委員長、朝鮮民主主義人民共和国国務委員長、朝鮮労働党中央委員会政治局常務委員、朝鮮労働党中央軍事委員会委員長、朝鮮人民軍最高司令官を務める。党内序列は第1位。軍事称号（階級）は朝鮮民主主義人民共和国元帥。wikiより

□ ※上の写真は若い頃の毛沢東である。金委員長は、若い頃の毛沢東にそっくりであるが、これは、彼が毛沢東の孫だからだろう。髪型のテイストも同じである。

### ■筆者が見た身長4メートルの霊（1990年代の大阪にて）

筆者は1990年代を東京と大阪で半分ずつ過ごした。筆者は別の電子書籍で多摩ニュータウンでカッパを見たことを報告しているが、河童だけでなく、東京では霊も十数回見た。大阪でも霊は何度か見たのだが、印象深い霊との出会いがある。筆者は大阪で、同じ霊を2度見た。しかもやけに白く、そしてやたらでかい霊である。身長は4 mだろうか？

話はこうだ。筆者は1995年あたりから大阪に住み始めたが、東京で集団ストーカーされていたため、大阪に逃げたのだ。大阪にいる時分、一軒家の借家に住んでいたのだが、思惑とは異なり大阪でも集団ストーカーから逃れることはなかった。筆者は、外出時はすれ違う仏教信者に嫌がらせを受け、自宅では隣人の仏教信者に嫌がらせを受けていた。基本的には監視と、監視で得た情報をもとにしたイヤミを聞かせる。または騒音攻撃をしたり、進行を邪魔するといったオーソドックスな攻撃である。

当時はいろいろイヤなことがあったが、ある夏の夜。隣人が早朝の3時頃に外でガタガタやっていた。「うるせえな、また騒音か」とそっと窓を開け、息を殺して隣人をしばらく観察していた（もちろんレーザー監視機器と骨伝道音声送信技術で、隣人は筆者が見ていることを知っている）。騒音攻撃の際、彼らは必ず言い訳ができるように口実を準備する。この時は「幼い子供たちとキャンプに行くから」ということらしかった。その通り、彼はキャンプ用具などを車に積んでいた。その瞬間、ふと気づくと、やけに白い、なんだかすごく背の高い人が、観察している筆者の前を左から右へと通過した。

ここで状況を説明する。間口の狭い一軒家が十数軒並ぶその横並びに筆者の自宅と隣人の宅が隣接していた。で、車が一台通れる狭い道を挟んだ向こう側の並びには数十メートルある長屋がずらっと並んでいる。

筆者は二階から見ていたが、白い背の高い人の顔は二階と同じ高さにあった。しかも夜中なのに歩く音がしない。ただ、道に背を向けて作業をしていた隣人が後ろを振り返ってその白い背の高い人をジッと見ていたのを覚えている。隣人は、筆者に対する嫌がらせも忘れてしばらく固まっていた。そう。例え日本第二の都市大阪とはいえ、普通、背が4 mもある人を見ることは通常ないのだ。その間、わずか数秒か。呆然としている2人を後に不気味な余韻を残し、白い人はさっさと歩き去って行った。

そして、その年の冬。筆者は再び彼に出会った。白くて背の高い、身長4 mの人である。筆者はレンタルビデオ屋からの帰りで自宅に向かっていた。午前一時頃のことだったと思う。夏に白いでかい人を見た、筆者の自宅前まで伸びるなが〜い、長屋を抜ける一本道に続く角を曲がった瞬間、彼はそこにいた。

自転車に乗っていた筆者はギョツとしたが、霊だと思っていたので何も見ていない風を装い、そくさと通り過ぎた。もちろん背後を振り返って彼を確認することはなかった。

「あれ絶対霊だよな」「いや、あの人は毎晩この道を散歩してるんだろ、きっと」「でもちょっと待てよ。歩く音がぜんぜん聞こえない」「いや、淳二でさえあんなでかい霊を見たという話は聞かないぞ」。ということで、今でもあれが何だったのか答えは出ていない。

ただ、宇宙人にまつわる話でたまに身長が高い3 mくらいの宇宙人の話を聞くことがある。ということは、あれは宇宙人だったのだろうか？確かにあの頃は集団ストーカーに疲れて隣人を「いつかやってやる」などと物騒なことを考えていた頃ではある。宇宙人はそれを知り「そんなことはやめとけ」ということを言いたくて出現したのかもしれない。

今でも東西本願寺による集団ストーカーは継続しているが、2013年頃に「あんなもんは無視すればいいようなやつらだ」という声が聞こえたりしていた。本願寺が味方を装っているのか、或いは善意の探偵が味方しているのか。いろいろ考えたが、今思えば、あれは宇宙人の声だったようだ。

そして2015年暮れ。筆者はフェイクプレーンが飛んでいることに気づき、その時から宇宙人との付き合いは現在に至っている（2020年1月8日付）。「神の啓示〜ケムトレイル写真集」でも述べているが、宇宙人は筆者に農薬の害を警告するために夏は主に昆虫（蝶、トンボ、セミ、アシナガバチ、スズメバチ）を使い、一年中を通して自らフェイクプレーンで現れ、飛ぶ方向で注意を促したり、時にはケムトレイル、鳥、風などを使い、外出のたびに筆者に注意を促している。

ここ数年は強い風（夏秋は台風、冬は爆弾低気圧）に悩まされていたが、これは宇宙人が筆者に「米を食べるな」と伝えようとしていたことが今年になってわかった。何が悪いのか不明だが、あんな恐ろしい風を吹かせるのだからよほど有害なのだろう。もちろん、安倍政権が「種子法」を廃止したことと無関係ではない。

最近の話だが、どうしても穀物が食べたくて大麦500 gを買った。「米じゃないならいいだろう」と思って買ったのだが、昨日（2020年1月7日）、爆弾低気圧が発生して日本が大荒れになると報道されていた。静岡の場合、風速35 mの予想が報じられていた（台風じゃねえか）。が、これもまた宇宙人が何か警告を発しているのだと考えた。筆者には心当たりがあった。「たぶん、大麦のことだろうな」と踏んだ筆者は、強い風が怖いので大麦をゴミ袋に捨てた。

しかし「それだけじゃまた拾って食べることできるだろ」と聞こえた気がして、筆者は大麦に尿をかけた。すると、不思議なことに、夜中から大荒れになるとTVが言っていたにも拘らず、夜

はそよ風さえ吹かず、おかげでよく眠れた。不思議なことだが、偶然だったのだろうか？

じつは、去年の2019年の秋にも強い台風が静岡を襲うかもしれないということがあった。その時は、能登の米10kg2袋を1万円も出して買ったばかりだった。筆者は「米食うなと言いたいのか？1万円も出したんだぜ？何で買う前に言わねえんだよ」と半ギレ状態だったが、風が怖いのでせっかく買った米1袋をゴミに出し、「ただ捨てるのはもったいないな」と考え、もう1袋は近所の川に捨てた。不思議なことに台風は静岡上陸、或いはカスると予想されていたが代わりに千葉県に向かった。そういうことがあった。

さすがに超科学の種族だけに、彼らと付き合っていると不思議なことがたくさん起きる。ただ彼らに実際に会ったことはない。いや、一度だけ夢の中でUFOに乗せてもらった記憶がある。UFOの壁に窓は備え付けられていないが、外が見える。筆者はUFOに搭乗したばかりのはずなのに、秒で大気圏を抜けたようで、ふと見ると眼科に地球があった。そんな記憶がある。これが夢か現実なのか不明だが、それだけでなく、筆者は夢の中で宇宙人に激怒していたのを覚えている。

「あんたら俺を助けるって言ったけどそういう助け方（昆虫やかぜを使って農薬の害を教える）は助けるって言わないんじゃないの？」「俺を助けるってことは本願寺のやつらを皆殺しにすることじゃないのか？」などとw 宇宙人は困った顔をしていたが夢か現実か不明だ（その宇宙人はやはりブロンドだった）。

□  
※上の画像は、まさに筆者が4mの霊を目撃した大阪時代の自宅前である。この写真は二階から写したものであるから、4mの霊を見たのと同じ景色である。4mの霊は軽く長屋の屋根を越えていた。現在、この長屋は存在しない。長屋が存在した立地には、現在、中くらいの高層マンションが建っている。

ダヴィデの一族 良い顔 写真集

<http://p.booklog.jp/book/124616>

著者：大本正 (C)masahiro taguchi 2018

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/danejin/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/124616>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト